

ハイスクールD×D

破壊を司る神の弟子

狂骨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天使と悪魔そして墮天使が存在する世界

そこに一人の人間が降り立つ

「久しぶりだな地球に戻るのは」

かの者は昔は地球の民今では…

ビルス「あ、甘いもの忘れないでね」

「分かったよ師匠」

宇宙の均衡を保つ破壊神の弟子!!!

無限の力を得て地球へと帰還した彼は混沌な世界でどう生きていくのか…

目次

拾われし者	1
旧校舎のディアボロス	
帰還そして接触の時（リメイク済み）	5
オカルト研究部（リメイク済み）	13
尋問	18
目覚める神器	24
シスターとの出会い	28
悪魔祓い	39
夜明けの戦い	51
黒猫との再会	79
学園への入学	90
学園生活	99
戦闘校舎のフェニックス	
不死鳥現る	106
黒猫との別れ。そして修行の始まり	118
模擬戦	123
修行開始！	127
時の界王神	144
ゲーム開始	150
ゲーム序盤戦	155
ゲーム中盤戦	166
ゲーム終盤戦	176
式のぶち壊し	183

抱かれる不安、そして和解

説明

閑話

閑話く使い魔

使い魔ゲットだぜ！

初めての弟子

Xmas!!の前日のイブのパーティでだいたい皆テンション使い

切るよね

月光校庭のエクスカリバー

家族との再会

聖剣の訪問

聖剣との対決

姉との夜

交渉

最強の剣の襲来

墮天使幹部コカビエル 現る

賭け

神剣 断つ

決着 そして白の襲来

闘いの終了

宇宙の神話系統 そしてイリナとの別れ

停止教室のヴァンパイア

危険な予感……

神への出世

プール開き………の前に

327

322

317

308

304

297

287

281

277

271

266

260

252

245

239

229

226

218

214

210

206

プール開き……………違う…	331
今度こそプール開き	334
白龍皇再び	342
授業参観	348
魔王セラフオールレヴィアタン	357
ティアマトの修行	366
ハーフ吸血鬼	376
ギヤスパアの神器	384
地獄 視察	390
朱乃の素と会談の始まり	394
会談……そして	405
破壊神 との会談	411
銀河神の力	420
暗黒の力と白き力との激戦	431
平和への一歩そして黒幕	449
暗黒のドラゴンボール	452
母と娘の再会	460
親子の時間そして天国の強戦士	465
親子の別れ そして帰還	469
新任教師 そして小猫の迷い	473
冥界合宿のヘルキャット	
部長の土下座（笑） と師弟大喧嘩	480
冥界への準備	487
進化する女王と戦車	495
マイホームそして不穏の幕開け	502

冥界へ	508
神の修行	523
若手悪魔の会合	536
懐かしき猫	544
猫の迷いと決意	560
試合の始まり	571
サイラオーグvsゼノ	578
破滅の予知夢	583
暗躍する影	592
朱乃vs椿	599
終幕そして人間界へ帰還	607
体育館裏のホーリー	
現る アスタロト家の者	612
抱く不信感	616
何してんの？この人達	621
華麗なる秘書	625
遂に来るレーティングゲームそして奇襲	629
怒りの神	636
神の刑罰	644
崩れる旧魔王派	655
崩れる関係	664
崩れゆく関係	669
力の証明 前編	675
力の証明 後編	683
交換留学のヴィランズ	



拾われし者

太陽系第三惑星。緑や水が広がる美しい星『地球』のなかにあるとある荒野にて――。人の気配がないこの地に二人の異形の服を着用しているものが降り立っていた。

「少し見ないうちに地球も随分と汚くなったもんだね」

「はい。ここらの地は戦争で大量の汚染ガスに侵されており草木の殆どが枯れております」

荒野を歩く2人の影のうち、一人は顔が猫の様な亜人。もう一人は人間にしてはとても身長が高く、杖を持っている男。明らかに地球の者ではないようだ。

それもそうだ。猫の様な亜人の名は『破壊神ビルス』この宇宙にて破壊を司る恐ろしい神であり、もう1人はその付き人である。

周囲の光景を見渡しながら歩いていると、突如として遠方にある何かを発見した。

「あれ？誰か倒れてない？」

「ほんとですね。行ってみましょう」

――――

――

発見した何かがある地点へと辿り着いた2人。そこには、1人の赤い髪を持つ少年が倒れていた。

「何でこんなところに子供が……」

倒れていた少年の安否を確認する為にビルスは慎重に触れた。

「……!!!」

その時 巨大な何かがビルスの身体を駆け巡った。

「どうしたんですか？ビルス様」

ウイスが尋ねる中、ビルスはゆっくりと笑みを浮かべながら少年を

担ぐ。

「おいウイス…こいつ中々な潜在能力を秘めてるぞ…鍛えればもしかしたら僕を凄く楽しませてくれるかもしれない!!よし!!!決めた!!!こいつ連れて帰るぞ!!!」

「はあく…分かりました」

ビルスの判断にウイスは不思議に思いながらも彼の意思を尊重して、その場を後にするのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

——— 待ってお父さん!!捨てないで!置いてかないでよ!!

「!!!」

「おや目が覚めましたか?」

突然と目に光が差し込むと共に目を開けると目の前には自身の顔を覗き込む青年の顔があつた。

「えつと…ここは…」

自身が今いる場所について尋ねると、その男はホホホと笑いながら答えた。

「ここはビルス様の城です」

「ビ…ビルス…?」

聞いた事もない名前を出されてしまい、つい聞き返してしまう。するとその男は再び笑うと説明した。

「破壊神…と言つても分かりませんでしょうね。まあいいでしょう。貴方のお名前は?」

名前を尋ねられると、自身の名を名乗る。

『『黒崎ゼノ』といいます』

「ゼノさんですね。私はウイスと申します。ではゼノさん…「おーう目が覚めたかい」

ウイスと名乗った男が話をしようとする、突然と顔が猫の様な獣人が入ってきた。

「ビルス様、まだお話の途中ですよ？」

「ああそうかい。ま、僕もご一緒するよ」

ビルスと呼ばれた獣人が近くの椅子に座るとウイスは続けた。

「ではゼノさん 単刀直入ですが…貴方には次のいずれかを選択してもらいます」

「…え？」

「私達が貴方をここに連れてきたのは貴方がとてつもない潜在能力を内に秘めているからです。私なら貴方のその潜在能力を引き出すことができ貴方に力を与えることが出来ます。逆にそれを引き出さなければその力は貴方の内に眠ったままです」

「はあ…」

「ここで貴方に選択肢です。ここに留まり修行を積み貴方の内なる力を目覚めさせる。それとも地球に戻りひっそりと暮らす。貴方はどちらを選びますか？」

「!!」

その言葉を聞き、思わず後者を選ぶようにするが、それを反射的に身体が許さないかの様に言葉が詰まった。

「無理に強要はしませんどちらかを選ぶのは貴方の自由です」

単刀直入すぎるが、己の眠っている力というものがどういふものかに興味が湧いてしまい、どうしても試してみたくなくなってしまった。

「ふむ…子供には酷な選択でしたね。ビルス様私は …」

ウイスが地球に戻すべく立ちあがろうとした時、その裾を掴み、彼を呼び止めると答えた。

「力が欲しいです…元の場所に戻るならここに留まり力を手に入りたいです!!!」

「あら…成る程。(中々いい目です。酷く懐かしく感じますね)」

「よく言った」

ウイスがゼノの言葉に感心していると、今まで座っていたビルスが

手を叩きながら立ち上がる。

「黒崎ゼノ君、君の判断は正しいと言っている。このまま地球に戻ってもその潜在能力を引き出せないままひっそりと暮らす…そんな勿体無いことはないよ。その選択に免じて…：…たまに僕も修行を手伝おうじゃないか」

「おや珍しいですねビルス様自らは」

「いや〜潜在能力を限界まで引き出したゼノ君と戦うのが楽しみだからね。」

2人から向けられた期待と、自身の思いを胸に秘めると、2人に向けて頭を下げる。

「よろしくお願いしますー！」

旧校舎のディアボロス 帰還そして接触の時（リメイク済み）

その日からゼノの地獄のような修行の日々が始まった。気のコントロールやそれらを行うための体力作り。全てが幼い彼にとってはキツイものであり、何度も何度も死の淵を彷徨ったが、その度にウイスの魔法で回復させられ、修行を続行した。

そして

時が経ち10年。

「いや〜10年前まではこんなヒヨロヒヨロだった君がまさか潜在能力を引き出すところまでとはね〜でも身長はあんましね〜」

「どうも師匠。あと身長は余計だ」

ビルスの前ではかつてのひ弱な面影が全て消え去り別人のようになったゼノの姿があった。18となった彼は背中まで伸びていた髪は綺麗な三つ編みとなり、虚な瞳には光が戻り鋭い青い目を光らせていた。

そんなゼノと食事を摂る中、ビルスは以前から考えていた事を彼へと話す。

「突然なんだけどね〜そろそろ君は地球に戻ってもいいと思ってるんだ」

「え?」

巨大な肉の一切れを頬張りながら口にした言葉に、ゼノは食べる手を止めてビルスへと目を向ける。

見れば、少しだけだがビルスはややニヤついていた。10年も共に過ごしていれば彼の表情からどの様な事を考えているのかなどわかりやすい。

故にゼノは鋭い目を向けた。

「なんか、企んでますね？」

「ほう？さすがは僕の弟子だ。その通りさ」

見事に的中したのか、ビルスは頷くと、地球へと戻す理由を話した。「もちろん、地球で過ごしてみるのもいいと言っているのはあるんだけど、もう一つは、今の地球には悪魔や天使、そして墮天使とか色々いるのが分かってね。色々騒ぎを起こしてるみたいなんだよ」

「へえ。地球も随分と変わりましたね」

「そこでね、君にソイツらを調査：いや、監視してきてもらいたいのさ。もちろん邪魔な存在だったら破壊は許すよ。というか簡単な話 悪魔とかそういうの関わらず地球の近隣の星 全部君に任せたいってこと」

「成る程」

ビルスから理由を聞かされ納得すると、口の中で咀嚼していた肉を飲み込み口元をナプキンで拭き取ると立ち上がる。

「まあ故郷の星任せられるとは嬉しいです。喜んで引き受けますよ」

「頼んだよ。ウイスにはもう話してあるからさ」

そう言いビルスが手を叩くとウイスは頷き杖を取り出し出発の用意をする。

「歯ブラシは持ったかい？僕みたいに虫歯になるなよ？あれ結構痛いんだからさ」

「師匠みたいに甘いモンばかり食べてないので。というか師匠、これ以上食べたなら糖尿病どころか気も甘い匂いするようになりますよ？」
「なるかあ!!ほら！いったいっただい！」

ビルスに背中を押されながらゼノはウイスの肩へと手を置く。

「では、行きますよー！」

「はい！」

すると ウイスの一声と共に彼らの身体が青く輝き始め宙に浮き始めた。

「それじゃ師匠！たまに連絡しますね！」

「別にそんなもんより、地球の食べ物送ってよ〜？」

「わかってますよ。じゃー！」

そして その会話を境にしてゼノはウイスと共にその場から飛び去りビルス星を後にしたのであった。

—————

—————

—————

↓

場所は変わり、日本の首都である東京の中でも、比較的、穏やかな住宅街が立ち並ぶ街『駒王町』にて。

よう！皆！俺は兵藤一誠だ！思春期真っ盛りで何事よりもおっぱいが大好きな高校生だ！！

俺は今……逃げている……！！

「わけわかんねえよ!!!」

俺は今日の夜、昨日夕麻ちゃんデートした公園に来たら突然現れたハットの男から逃げていた。

「主の気配も仲間の気配もしない……貴様はぐれか？なら殺しても問題あるまい」

そう言いハットの男は槍を俺に目掛けて投げてきた。

(ゆ……夢なら早く……覚めてくれ！)

グシユツ

そう思った矢先に俺の腹に槍が突き刺さった。

「ガハツ…何なんだよこれ…夕麻ちゃんの時はこんな…痛くなかった…ぐあ!!」

俺が槍を引き抜こうと掴んだが、刺さった箇所どころか触った手にも痛みが走り出した。

「無理に触らんほうがいいぞ? 光は悪魔にとっては猛毒…しかもまだ息があるとはな」

その一言と共にシルクハットの男は槍を作り俺に向けて再び刺さうとした。

クソ…!!彼女にも未練あり…その上、生乳も見られないまま死んじまうのかよ…!!

未練たらたらながらも俺は迫り来る死を覚悟し目を瞑った。

「死ね!!…「はい到着♪」ドオオオンツ!!!「グハアアアアア!!!」

突然俺の目の前に何かが降って来た。

あ…あれ…意識が…

◇◇◇◇◇◇◇◇

ビルス星を立ち、広大な宇宙を超速度で進む事25分。ウイスとゼノは遂に地球が目の前に広がる距離まで到達したのであった。

「さてどこへ降りましょうか」

「取り敢えず悪魔とか色々住んでる町で」

「はい♪」

ゼノの要求に笑顔で頷いたウイスはそのままスピードを上げていき、大気圏を燃える事なく突き抜け、そこから更に雲をも突き抜けていき、日本の中でも特に住宅街が立ち並ぶ街へと降りていった。

そして

「はい到着♪」

ドガアアアアアアアアアア

その街へと降り立ったのであった。それによって周囲が揺れると共に草木が吹き飛ばされていった。

「ウイスさん！もうちよつとまともに着地出来ないのかよ!？」

「おほほほ!!これでも普通ですよ♪」

「どこが!?!周りの草木吹っ飛ばしてるだろ!?!」

「ほほほ♪すぐに直しますから」

ゼノの注意を笑いながら軽く受け流したウイスは軽く地面を叩く。すると、周囲の陥没していた地面などが即座に元の形へともどつていったのであった。

「では、私はここで失礼します。また何かあったら呼んでくださいね」

「あ、はい！今までありがとうございます!」

ゼノのお礼の言葉にウイスは頷くと、そこから杖を叩き、地球から去っていった。

ウイスが去っていった後に、残されたゼノは巨大なバッグを下ろすと、野宿をするべく、テントを張るための場所を探すため周囲を見渡した。

「う〜ん…」

見渡す限り住宅が多く、テントを張れる場所が見当たらなかった。だが、見れば近くには林があり、運がいいのか周囲には建物も建てられていなかった。

「あそこだな」

今晚の野宿先を見つけたゼノはその場から移動しようと脚を踏み出した。

その時であった。

「貴様ああ!!!」

「ん?」

突然と自身が立っていた場所から怒鳴り声が聞こえ、振り返るとシルクハットを被り直しながらコチラを見つめる黒い翼を持った男がいた。

その男は人間には見られないカラスのような羽をバタつかせており、その鋭い眼光を自信へと向けていた。

「至高な墮天使であるこの私を踏みつけるなど…許されざる事だぞ!!」

そしてその男は怒声を放つと共に手に光を収束させていき、大きな槍を形成した。

「人間であろうと容赦はせん…この場で殺してやる…!!」

「殺す?」

その単語にゼノは目を細め笑みを浮かべた。

「へえ…お前が墮天使か…」

ビルスからの指示そして、興味を持った相手が今まさに目の前にいる事にゼノ自身の闘争心に火がつくと共に内に秘められた気が解放されようとした。

「なら、どれくらい強いのか試してみるか…!!」

「ほぎけ!!人間如きがあ!!!」

ゼノの青く輝く目と墮天使の鋭い目が合った時であった。

「おやめなさい」

「ん?」

その場に第三者の声が聞こえた。見ると、付近の地面が急に赤く光っておりその地面の上に長く紅い髪をたなびかせた女性が立っていた。

それを見た墮天使は光の闇を消し、彼女へと視線を変える。

「紅い髪…グレモリー家の者か」

「リアス・グレモリーよ。ご機嫌よう堕ちた天使さん」

「これはこれはこの町がグレモリー家次期当主の管轄とは…その倒れている奴はお前の眷属ということか」

そう言い墮天使が地面で倒れている青年へと目を向けた。それ自体にゼノもようやく気付いたようで倒れている青年へと目を向ける。

その一方で、現れた女性は墮天使を睨みながら青年の前に守るようにして立つ。

「この子にちよつかいを出すなら容赦しないわ」

「……………まあ今日のところはわびようだが下僕は放し飼いにする者ではないぞ…私のような者が散歩がてらに狩ってしまおうかな」

「ご忠告いたみいるわ私からも今度こんな真似をしたらその時は容赦しないからそのつもりで…!」

「ふん…そのセリフそっくりそのまま返そう…我が名はドーナシーク…再び合間見えぬことを祈ろう…」

リアス・グレモリーと名乗った女性の殺気を混ぜた言葉を受けた墮天使は名を残しながら空中へと消えていった。

すると 先程の空気が一変し、青紫色の空はいつものように紺色の景色へと戻っていった。

「はあ…つまらないな」

それを見ていたゼノは墮天使と戦う事ができなかった事に残念な溜息を漏らすと、先程目をつけた林の方向へと目を向けた。

「とりあえずどっかにテントでも」

「お待ちなさい」

「あ?」

すると 立ち去ろうとするゼノを呼び止める声が聞こえた。振り返ると先程の現れた女性であり、鋭い視線を自身へと向けていた。

「貴方は何者?」

「…………」

突然と彼女から尋ねられたゼノは、今までビルス星にてウイスから習った人と人との礼儀作法を思い出し、振り返ると頭を下げた。

—— 挨拶と名前を名乗るのは最低限の礼儀ですよ。

「コンバンハ クロサキゼノ デス」

「い…いや…あ…これはどうもご丁寧に…」

突然と片言の挨拶に相手側の女性も驚いたのか、調査を崩しながらも同じく頭を下げる。

それから再び頭を上げると調子を戻しもう一度尋ねてきた。

「…で、もう一度聞けど…貴方は何者…？」

尋ねられたゼノはただ単純に答えた。

「人間だ」

「人間…？うくん…」

そう答えると、女性は腕を組みながら倒れている青年にも目を向けると、青年を抱き上げ再び此方へと目を向けた。

「明日、この近くにある駒王学園のオカルト研究部という部室に来てもらえるかしら？」

「え…？」

突然と彼女から聞いた事もない場所に招かれた事にゼノは驚き目を点にする。

「えっと…俺はここに最近引っ越したばかりで場所は…」

「じゃあ地図を渡すから。これを頼りに来てちょうだい。関係者には話を通しておくわ」

「これはご丁寧」

「じゃあ、また明日」

それからゼノへと指定された場所への地図を渡した女性はその後を後にした。

「これは…接触する機会…なのか…？」

残されたゼノは地図を見ながら顎に手を当て、考え込むのであった。

オカルト研究部（リメイク済み）

女性と別れ、近くの林の中にテントを張ったゼノは串刺しにした魚が焼ける焚き火の炎を見ながら女性から渡された地図を眺めていた。此方から行くのはめんどろだが、それでも調査の一環と思えばどうって事ない。

すると

「ん？」

近くの草むらが揺れ傷だらけの黒い猫が現れた。

「ニャ〜」

「黒猫…？しかも結構ボロボロだな。匂いにつられたのか？」

現れた猫はゼノの側へと近寄ると、やはり魚の匂いに釣られたのか焼ける魚を凝視していた。

「なんだ…？…はあ…：しようがねえな（というか…こんな傷で動けるものなのか？）」

それを見たゼノはやや不満気や不審に思いながらも、焼けている魚のうちの一匹を黒猫へと分けてあげ、更にボロボロとなった猫の身体も、ウイスから持たされた包帯などで治療していった。

「ニャンー！」

すると、魚を食べ終えた黒猫はゼノに好感を持ったのか、腰を掛けていたゼノの膝の上に乗って身体を擦り寄せてくる。

「まったく。地球について最初に飯を食う相手が猫だとはな」

それからゼノも食事を終えると、眠気が出てきた為に火を消してテントの中へと入った。

寝袋にくるまる中、先程の黒猫も中へと入ってくると、自身の傍で身体を丸め寝込みだす。

「お前もここで寝るのか？ま、いいか。おやすみ」

それから電気を消し、ゼノは黒猫と共に眠りについた。

—————

――

――

――

それから数時間が経過して翌朝。

「ふわあ…あ？」

差し込んでくる日差しに目を覚ましたゼノは起き上がり辺りを見回すと、首を傾げた。

見れば一緒に寝ていた黒猫がいつのまにかいなくなっていたのだ。まあ、自分が目覚める前に帰ったのだろう。

「もういなくなつたのか。まあいいや。取り敢えず夕方に来て言われてたな」

あまり気にも留めずにゼノは女性から言い渡された時にはまだ時間がある為に、ゼノは周囲の建物配置を把握するべく街へと出たのであった。

◆◆◆◆◆

それからしばらくして夕方。周囲には下校する学生やサラリーマンが目立ち駅などから大量の人々が歩いてくる。

そんな中、ゼノはその人混みを抜けていき、遂に目的地である駒王学園へと到達した。

『私立駒王学園』なるほど…？何だ妙な気がちらほらと…まさかこの学園からとはな」

校門の前に到着したゼノは豪華な校舎を見上げ、次々と感じてくる妙な気に眉を潜めながら、校名が書かれている門を見つめる。

すると

「貴方が、黒崎ゼノさんですか？」

「…ん？」

背後から突然と声を掛けられ、見るとそこには周囲と比較しても明らかに背が低く、自身と同程度の身長の子供が立っていた。

「そうだけど」

「私は『塔城小猫』。部長から話は聞いています。どうぞこちらへ…」
「そうか」

女子生徒はどうやら事前に昨夜の女性から聞いていたのか、スムーズに自身を認識して部屋まで案内してくれるのであった。

「(最初は一悶着あるかと思つてたけど、あの女のお陰で何とかスムーズにいきそうだな)」

心の中で打ち合わせをしておいてくれた女性に少しばかり感謝しながらゼノはその女子生徒の後をついていくのであった。

「ちなみに、幾つですか?」

「18」

「ええ!?!」

—————

—————

—

それからしばらくして。彼女に連れて行かれてたどり着いた場所は校舎から少し離れた場所にある古い建物。案内人の彼女によるとここは旧校舎らしく、今は所属する部活で使っているようだ。

ガチャ

「部長…連れて来ました」

「失礼しま…ん?」

扉を開けて入った先にあつた場所は、薄暗く 部屋の周りにはロウソクが灯されており、怪しげな雰囲気を漂わせている空間であつた。

見ればその部屋の中心にあるソファアーには一人の紅色の髪を持つ女性が座っていた。

「よく来てくれたわね。座つてちょうだい」

自身にソファアーの場所を譲ると、紅髪の女性は席を立つとオフィスの様な机の椅子へと腰を掛けた。

その女性の言う通りにゼノは近くにあるソファアーへと腰をかけた。

「で?言われて来たものの一体 何の用なんだ?」

「それはもう一人の子が来たらすぐに話すわ」

「もう一人？」

「……………」

俺は今 本校舎から少し離れた場所にある旧校舎へと来ていた。理由は昨日の事だ。朝にリアス先輩から『使いをよこす』と言われ、教室で待っていた。そして来たのが学園1のイケメン『木場 裕斗』だ！

女子的かつ全校男子の敵であるコイツが何故に!?と思つていたがリアス先輩の名前を出された時は納得し渋々ついていった…と言う訳だ。

「ここだよ。入って」

そう言うത്ソイツは『オカルト研究部』と書かれた部屋のドアを開けた。

そこには 想像してた以上の異様な光景が広がっていた。

カーテンは閉められ 電気はつけられておらず灯りはロウソクだけ…

怖っ！何ここ!?

俺は驚きのあまり 辺りを見回してしまった。すると、部屋の真ん中にあるソファアに座る一つの影を見つけた。

「はむ……」

なっ！あ…あれは学園のマスコットと言われている『塔城小猫』ちゃんではないか!?!?

し…しかも隣にもう一つの影が…！もう一人のマスコット美少女か…!?!?

俺は気になり隣にあるもう一人の子へ顔を近づけた。

「あ？何見てんだ？気持ちわりいな」

……………え？

俺の目に映ったのは小猫ちゃんとはあまり変わらない背丈の男子だった。見覚えがない上に制服を着ていないから完全に部外者である事を読み取った。

「あ……アンタ……誰？」

「その子は学園の生徒ではないわ」

俺は声のする方へ顔を向けた。そこには机に手を当てながら座っているリアス先輩の姿があった。

「これで全員揃ったわね。ようこそ兵藤一誠君そして黒崎ゼノ君
私達オカルト研究部は貴方達を歓迎するわ

悪魔としてね」

「ええええええええええええ
!!!!?????」

尋問

部室にて、

「粗茶です」

「あ…ありがとうございます…」

「どうも」

現在呼び出されたゼノと一誠は姫島朱乃という女性にお茶を振舞われていた。イツセーはモジモジとして緊張していたが対するゼノは御構い無しにテーブルに脚をのっけながらくつろいでいた。

二人が飲み終わるとリアスが切り出した。

「では兵藤くん…イツセーと呼んでもいいかしら？」

「あ…はい！構いません」

「あなたもゼノと呼んでもいいかしら？………脚どけてくれる？」

「はいはい」

リアスはテーブルの上に脚を組んで乗せている事を指摘すると咳払いをし話を始めた。

「んん……ではイツセーにゼノ…さつきも言った通り私達は悪魔なの」

リアスの告白にゼノは頷きながらお茶をすする。一方で、イツセーは昨日の出来事を思い出す。

「じゃ…じゃあ昨日俺が見たのって…」

「あれは墮天使…元は神に仕えていた者達だったけど邪な感情をもって冥界に堕ちてしまった者達…彼らは人間を操り私達悪魔を滅ぼそうとしている太古の昔からね。そして墮天使の他にも神の命を受けて悪魔を滅ぼそうとしている天使もいる…いわば三すくみの状態って訳ね」

「は…はあ〜」

オカルトチックな話にイツセーはついていけなかった。その一方

でゼノはただただ生返事するだけであった。

「ここまでは理解出来たかしら？」

「え…まあ高校生には難易度の高い話だなくと」

そんな中、リアスはイツセーが完全に信憑星を持たせるトリガーとなる人物の名前を出す。

『天野夕麻』

「!!」

突然の名前を出され一誠は硬直し席を立った。

「忘れてはいないでしょ？デートまでしたんですって」

思い出すのは嫌な記憶だった。故に話すには気が引ける。

「そういうの話すのやめてもらっていいですか…正直不愉快なんで…」

「…」

リアスは気を引いているイツセーの前に一枚の写真を出す。

「!!夕麻ちゃん!」

その写真に写っていたのはあの日デートをした後自分を殺した【天野夕麻】本人だった。

「彼女は存在していたわ確かにね」

そう言いリアスはもう一度確認するかのように問う。

「この娘よね？天野夕麻ちゃんって」

「そ…そうです！でもどうやってこれを…」

イツセーの疑問にリアスは答える。

「彼女は墮天使。昨夜貴方を襲った者と同質な者よ」

「で…でも！松田や元浜だって彼女の事覚えてなかったし!!携帯のアドレスだって…」

「力を使ったのよ

私が貴方のご両親にしたようにね。そして

その墮天使は目的を達成したから自分の周囲にいる者達から自分の記憶を消し去った。」

「も…目的…!?!」

「貴方を殺すこと…貴方の身に物騒な物が付いているか確認するため…それで貴方は殺された、光の矢でね」

「そう言えばあの日夕麻ちゃん何か言ってたな…セイなんとかって」

「神器（セイクリッドギア）…朱乃」

「はい」

リアスがアイサインを送ると今まで黙っていた朱乃が変わるように簡単に説明を始める。

「特定の人間に宿る未知の力…歴史に残る多くの人物が所有していたとされていますわ。時には悪魔や堕天使達を脅かす程の強大な力を持つ物もございます」

朱乃の説明が終わると、リアスはイツセーに再び目を向ける。

「イツセー、手を上にかざして」

「は…はい。こう…ですか？」

イツセーはリアスに言われた通りの体勢をとる。

「そして貴方が一番強いと思う者を思い浮かべなさい」

「一番強い物…無理です…」

「いいわ。取り敢えず堕天使は貴方の神器を恐れて貴方を殺した」

「で…でも！俺がこうして生きてるのっておかしくないですか!?!」

疑問に思った一誠にリアスは一枚の紙を出した。

「貴方が死ぬ寸前このチラシから私を呼び私を召喚した…そして一誠貴方は私ことリアスグレモリーの眷属となつて生まれ変わったのよ私の下僕の悪魔としてね」

バサツ!!

そしてリアスや他の人達の背中から黒い翼が生えた

「な…何!？」

そして驚いている一誠にも同じく

バサツ!!

翼が生えた。

「よろしくね…さて次は貴方に聞きたい事があるわ」

リアスは今まで黙って座っていたゼノへと目を向けた。

「ん？」

「貴方は何者？」

「前も言っただろ俺は人間だ」

「信じられないわ…何故人間の貴方が堕天使の結界の中に入る事が出来たの？」

その問いかけに対してゼノは師匠との過酷な環境下における修行を思い出した。

「何日も地球より環境の厳しいところに居たからな。多分師匠のおかげだな」

「貴方のお師匠さんは悪魔か堕天使なの？」

「いや、言ってもいいのか…ちよっと待ってろ」

そう言いゼノは窓を開け空に向かって叫んだ。

「ウイスさくん!!!」

『!?!?』

所かわりビルス城

「ウイスさくん!!!」

「はて?早い連絡ですね「はぁーい!!どうしました?」

「悪魔の人達に師匠の事教えてほしいって言われたんですけど伝えてもいいですかあ!」

「ちよつと待ってて下さ〜い！」



所かわりオカルト研究部

真夜中だというのに空に向かって叫んでいる絵面に皆は引いていた。

「彼は何をやっているのでしょうか…」

「さ…さあ…」

冷静な木場やリアス。他の面子もゼノの行動が理解できずにいた。

しばらくして

「今はやめとけって言われたから話せない」

「……………分かったわ。それと…一つ言っておきたい事があるの」

「ん？」

そう言うとりアスは目を細めながらゼノに警告する。

「貴方はこれからの戦いに首を突っ込まない方が良いわ。だから少し記憶をいじらせてもらうけど…」

その瞬間 ゼノの額に一筋の青筋が浮かんだ。

「は？」

それと同時に目の前のテーブルが音を立てながら亀裂が走った。

周りの皆は冷や汗 イッセーに限っては腰を抜かしていた。ゼノにとつては少量の威嚇である。

その威嚇に臆する事なくリアスは続けた。

「……………ここからは人間が入ってきていい世界ではないの。貴方は生徒でない上にまだ子供…だから巻き込みたくはないの」

「俺はこれでもお前らと同じくらいだ。それに首を突っ込む突っ込まないと言う以前にもう手遅れだろ？ 昨日の墮天使に完全に顔覚えられてるし」

「じゃ…………じゃあ貴方がもし危険になったら迷わず追い出すわ…」

「ツチ…分かったよ」

ゼノはリアスの言葉を洩々了承したのだった。

その後

「イツセー。貴方には強制で申し訳ないんだけどオカルト研究部に所属してもらえないかしら？」

「是非とも！」

「ゼノ。貴方は……郊外からの訪問者って事で顔を出してもらおうわよ？」

「べつにいい。(めんどくせえ……けど悪魔の世界に入り込めるキツカケにはなるな)」

目覚める神器

部活の自己紹介が終わった後現在一誠は契約の帰りであった。何故かチャリで

リアスによると一誠の魔力は子供以下ということで魔方陣での転移が出来なかった為こうしてチャリで直接行ったのである。

「はあく…何やってんだ…俺…」

一誠が落胆していると

コオオオオオオオ…!!

辺りの景色が妖しく青く光った。

「な…この感じ…あいつと同じだ…あいつと…」

一誠がそう感じていると

「妙だ」

一人の女性が現れた。

「人違いではないし足跡を消すよう命じられたのはこのカラワーナだ。誠に妙だ…」

その女性は普通の雰囲気ではなかった。

「何故貴様は生きている!!!」

そう言った瞬間その女性から漆黒の羽が生えた。

「墮天使!!」

一誠は驚いた。

「貴様はあのお方が殺したはず!!」

そう言い女性は光の槍を生成し一誠目掛けて投げてきたが辛うじて一誠はそれを躲す。

「グレモリー家の紋章!!」

そしてその女性は一誠の手に刻まれている紋章をみて驚いた。

「く…また殺されるってのかよ!!」

「そうか…ドーナシックがはぐれと間違えたというのは貴様か…まさかグレモリー家の眷属になっていたとは…ならばますます生かしておけぬ!!!」

そう言い女性はまた槍を生成し投げつけようとした。

(こ…殺される!!こんな奴に!!嫌だ…力を!!こいつを倒す力を!!)

その瞬間

(一番強いと思える何かを思い浮かべるの)

一誠はリアスの言葉を思い出した。

そして一誠は手を掲げ

「力を俺にくれー!!!」

その瞬間一誠の周りから突風が吹き墮天使を吹っ飛ばした。

「くああー!!!」

そして一誠の腕には宝玉が埋め込まれた赤い籠手が出現した。

「く…神器(セイクリッドギア)か…ここで殺すのはまずい。まずあのお方に報告せねばなるまい!!!」

「そう言い堕天使は去って行った。」

その後一誠は部室に戻った。

部室にて

「そう…それが神器(セイクリッドギア)…一度発動すれば自分の意思で解除も出来る」

「そう言われた一誠は籠手を消した。」

そしてゼノはというと…

「ゼノさん…そのお菓子一つ頂けますか?」

「いいよ。ほんじゃそのどら焼き一ついいかい?」

「どうぞ」

小猫と意気投合し甘いものを共有していた。

「ゼノさんのお師匠さんの分も」

「おう。ありがとな。今度近所でピザのバイトするからその時のピザやるよ」

「!!ありがとうございます」

ピザと聞いた瞬間小猫は目を輝かせた。

一方一誠の方は

「いいこと?調子にのって複数の堕天使と単独では戦わないこと」

「分かりました…それじゃあ部長…俺帰りますんで…」

話が終わったのか一誠は部室を出て行った。

「貴方もよゼノ」

「ん？」

「貴方も単独で戦わないこと。いい？」

「なぜだ？」

「墮天使は危険だからよ。特に貴方は人間。団体で囲まれば殺されてしまうわ」

「そうか。……分かった」

ゼノは不満を抱きつつも了承をする。

「ですが部長……言い過ぎではありませんか？彼はまだ初心者ですし」

「だからこそよちゃんと言わなくて……自覚してもらわないと……墮天使なんか……可愛い下僕を奪われて溜まるもんですか……」

リアスは小さく言った。

「そう言えばゼノくんもそろそろ帰らないと……親御さんがご心配されるのでは？」

「親なんていねえよ。生まれてすぐ俺は捨てられたからな」

「そうでしたか……すみません……」

「別にいい。それに親の顔なんて覚えてないからなく取り敢えず俺はテントに戻る」

そう言いゼノは窓から飛び降り林の中へと消えて行った。

シスターとの出会い

次の日の朝

現在ゼノは駒王学園から近いピザ屋にいた。

「はっ！ほっ！！やっ！はっ！！ほっ！！…」

そして俊敏な動きで次々とピザを作っていた。

「おすすごいね〜ゼノくん〜お陰様で大盛況だよこうなるともう給料も倍にしちゃうよ倍に」

「ありがとうございます。店長。あ、今夜 休養貰っていいですか？」

「あ〜いいよ。ゆつくり休んどいで」

「どうも」

一方その頃一誠は

「あそこか？」

「はい！ありがとうございます！」

見知らぬ金髪のシスターを教会へと送っていた。

「私はアーシア・アルジェントと申します！」

「俺は兵藤一誠 イッセーでいいよ」

「イッセーさん…私は日本に来てイッセーさんの様な親切な人に出会えて幸せです！」

「あ…いや〜」

「是非共お時間がある時には教会へいらしてください」

「分かった。じゃあな」

「はい！」

シスターと別れたイツセーは学校へと向かった。
(いい子だったな)

夕方

一誠はリアスから注意を受けていた。

「二度と教会へ近づいちゃダメよ」

「え？」

「教会は悪魔にとって敵地…踏み込めばそれだけで悪魔側と神側で問題になる…いつ光の槍が飛んでくるのかわからないのよ」

「ま…マジですか…じゃあ教会に近づいた時の悪寒って…」

「悪魔の本能が危険を察知したのね

教会の者と一緒

にいる時死と隣り合わせ…特に教会に属する悪魔祓い（エクソシスト）の中にはセイクリッドギアの使い手だっているんだから……イツセー」

「あ、はい」

そしてリアスは一誠を見据え

「悪魔祓いを受けた悪魔は完全に消滅するの　何もなくて何も感じず何もできない…それがどれだけのことか貴方には分かる？」

「い…いえ」

「……ごめんなさい。熱くなりすぎたわ…とにかくこれからは気をつけてちょうだい」

「あ…はい」

話が終わると

「お説教は済みましたか？」

「朱乃？どうしたの？」

「先程大公より連絡が」

「大公から？」

「はい。この町ではぐれ悪魔が見つかったそうですわ」

～夜

現在オカルト研究部はとある廃墟に来ていた。

「はぐれ悪魔？」

「元は悪魔の下僕で主を裏切り殺して好き勝手生きようとする連中がいる。それがはぐれ悪魔だよ」

「そしてそれを討伐するのも私達の役目よ」

「なるほど…あれ？朱乃さんは？」

一誠が辺りを見回すと朱乃の姿が見えなかった。

「ゼノを迎えに行ったわ」

「ゼノを？あいつ人間じゃ…」

「彼にも私達の駒の特性を知ってもらいたくてね今日来るよう言ったんだけど…」

「来なかつたんですよね…」

木場が苦笑しながら答えた

「それよりも部長、駒って何ですか？」
「その事は後で話すわ」

一方その頃ゼノはというと

「あーキツかった〜」
バイトの帰りである。

「まあ店長に余ったピザ貰えたからいつか。リアスが今日部室に来いとか言ってたけど…いいか。メンドくさいし」
そう言いながらゼノはテントに向かおうとすると

「あらあら」

ゼノの背後に朱乃がいた。

「なんでここにいる？」

「部長に連れて来いと言われたので。うふふ」

ダッ
!!!!

ガシッ
!!!!

ゼノは即座に逃げようとするすると朱乃に抱き抱えられてしまい逃げる事が出来なくなつた。

「はい捕まえました。では行きますわよ」

「分かったから運ぶな運ぶな」

そんな感じであった。

ところ変わり廃墟にて、ゼノ達を待っていたリアスは暗闇の森へと目を向ける。

「来たみたいね」

「え？」

皆がリアスと同じ方向を向くと

「いい加減降ろせって」

「降ろしたらまた逃げてしまいそうなので」

「分かった。逃げんから運ぶな運ぶな」

朱乃とそれに抱き抱えられたゼノがこちらに歩いて来た。

「まったく…言いつけは守ってちょうだい。それとイツセーと貴方は見学よ」

「ツチ…戦わせろっての…取り敢えず降ろせ」

「はい♪」

リアスの言葉に対しゼノは腑抜けた声で返事をする。と朱乃の腕から降りた。

「あくキツかった…。…ん？なんで泣いてんだ？」

「くうー…羨ましいなお前！朱乃さんに抱っこしてもらえるなんて…！」

「そんな事で涙流してるのかよ…気持ち悪…」

「同感です」

「ぐぼあ…!？」

ゼノと小猫の鋭い言葉がイツセーを串刺しにする。それから揃った一同はそのまま廃墟の中へと入っていった。

◇◇◇◇◇◇

歩いていく中、リアスはある事をイツセーに尋ねる。

「イツセー、チェスって分かる？」

「え？確か…ボードゲームのやつですよね」

「そう。主の私がキングで女王（クイーン）騎士（ナイト）戦車（ルーク）僧侶（ビショップ）兵士（ポーン）…爵位をもった悪魔が自分の下僕にこの駒の特性を与えているの」

「駒の特性？」

「私達はこれを悪魔の駒（イービルピース）と呼んでいるわ」

「何でわざわざそんな事…」

「とにかく今夜は悪魔の戦い方を見ておきなさい」

リアスが一誠に説明していると、一同は大広間に出た。すると、どこからともなく不気味な視線を感じる。

「ぐへへへ不味そうな匂いがするな…でも美味しそうな匂いもするわく甘いのかしら」

その声とともに柱から姿を現したのは

「おっばい!!!」

上半身が裸の女で下半身は獣の様な足をしていた異形の怪物であった。その上半身を見ていたイツセーは思わず歓喜の声をあげてしまうが、その風貌からそれはアツサリと消えた。

「はぐれ悪魔バイザー!!グレモリー公爵の名において貴方を消しとばしてあげるわ!」

「ふん!下賤な小娘が!!」

「裕斗!!」

「はいー!」

シュンツ

!!!!

その瞬間 裕斗の姿が一瞬できえた。

「イツセー。駒の特性をレクチャーするわ。裕斗の役割は騎士（ナイト）よ。特性はスピードそしてその最大の武器は剣」

リアスが説明し終えた時には 木場は既にバイザーの腕を切り裂いていた。それによってバイザー斬られた箇所を押さえながらゆっくりと倒れた。

だが、すぐその側には小猫が立っていた。

「危ない!!小猫ちゃん!!」

イツセーが声を上げるも、遅い。

「ぐああああー!!!死ねー!!!」

バイザーは叫びながら自身の目の前に現れた小猫をその巨大な下半身に生える脚で踏み潰した。

「小猫ちゃん!」

「大丈夫よ」

一誠が困惑していると バイザーの巨大な脚が上がった。その下には軽々とその脚を持ち上げる小猫の姿があった。

「小猫は戦車（ルーク）その特性はシンプルに馬鹿げた力と防御力。あの程度じゃビクともしないわ」

リアスが説明していると踏み潰された小猫はその脚を持ち上げるとバイザーに向けて放つ。

「ぶっとべ」

ドガンッ!!!

「がはあ!?!」

その小さな身体から考えられない程のパワーは小猫の何倍ものあるバイザーの巨体を殴り飛ばした。

「こ…小猫ちゃんには…逆らわない様にしよ…」

こうして一誠は小猫に恐怖感を得たのだ。

「次は朱乃ね」

「はい部長♪」

「魔力を使った攻撃が得意な上に彼女は究極の『S』よ」

リアスの説明の通り 朱乃は問答無用で次々とバイザーに向かって雷撃を仕掛けていた。

「どこまで耐えられるかしら♡」

その言葉通り朱乃は雷を打つたびに頬が紅潮していた。

「朱乃さん…怖いっす…」

「朱乃それぐらいにしておきなさい」

リアスが制止の指示を出すと朱乃は電撃の手を止めた。

「もうお終いだなんて…:~:~:~ちよつと残念ですわ♪」

朱乃は物凄い笑顔だった。

その時、雷撃の攻撃を受けたバイザーが煙を吐きながら立ち上がった。

「クソがアアアア!!! 貴様らアアアアツ!!!」

そう叫ぶとバイザーは身体からエネルギーを集め腹部を膨張させた。

「ま…まさか! 自爆する気なの!?!」

「その通りさグレモリーの娘よッ! いくら上級悪魔のお前だろうとこの至近距離からの爆発は避けられまいッ!!」

そう言うのとバイザーは更にエネルギーを集中させた。すると腹部はさらに膨張し、少しでも刺激を与えれば破裂する程までに膨らんだ。

「部長! もう間に合いませんッ! 急ぎ避難をッ!

「く…!」

朱乃の言葉にリアスは唇を噛み締め撤退しようとした。だが、既に手遅れであった。

「グハハハハハッ!!! 死ねええええええええええ!!!」

瞬間 バイザーの腹部が破裂した。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

「グアアア………ってあれ？」

イツセー達は目を疑った。何故なら、何も感じないからだ。あの至近距離からの破裂だと、多くの痛みを感じる筈だ。それなのに何も感じない。

煙が晴れると皆はそこへ目を向けた。

「え……？嘘……」

リアスや他の皆は言葉を失った。

煙が晴れたそこには大きな風穴と 全身が木っ端微塵にされたバイザーの肉片を眺めるゼノの姿があったのだ。

「え……？何が起こったの……？」

リアスはゼノに事情を聞いた。だが、ゼノはあくびをすると風穴から外へと出た。

「もうこれで終わりだよな？なら、俺は眠いから帰る。じゃあな」

それだけ言うとその場から跳躍し、夜の森の中へと消えていった。

「ホントになにがあったのよ……」

「部長」

するとそこに 朱乃が歩いて来た。

「私には微かにですが見えました」

「え!？」

リアスが驚くと朱乃は震える声で説明した。

「確かにバイザーは捨て身の自爆をしました。ですが、その爆風がこちらにくる寸前にゼノ君が突然 前に現れたのです。そこからは煙でよく見えませんでした。その直後にバイザーの身体が砕け散る音がしたんです」

「ツ！」

リアスはバイザーの吹き飛んだ方向を再び見る。

「爆風を……吹き飛ばしたというの……？」

「おそらくですが……」

ゼノの未知の力にリアスは何も言えなかった。

「まあ良いわ…皆 部室に戻るわよ」
そう言うとオカルト研究部は転移し この場を後にした。

悪魔祓い

はぐれ悪魔討伐の件からしばらくして

現在一誠は契約へ向かっていた。そして今回は…

「へ〜自転車けっこ〜楽しんだな」

ゼノも一緒である。

なんでも一誠が向かう途中にいきなり出てきて自分から申し出たのである。

「なんでお前まで乗っけなきゃいけないんだよー!!!!」

「良いだろ別に。一誠の依頼主も見てみたいし」

「くっそく!!こんな三つ編み野郎より朱乃さんがよかったー!!!」

「うるさいなあ。脳髓ぶちまけさせるぞ♪」

「笑顔でそんなこと言うなよ!!!!」

そんなやり取りをしながらも目的地であるアパートに着いたのだった。

「ここか」

「ああ：確か二階だったっけな」

そして二人は階段を上がり目的地である部屋の前に来たのである。

「ここだな」

コンコン

「ちわーすグレモリーの使いで来ました」

.....

一誠がいつもの通りノックしても返事は返ってこなかった。

「あれ？留守かな？」

「いないのか？ならいいや。俺 帰るよ」

「っておい！なんでだよ！」

「今日店長が今月分の給料渡すって言ってたの思い出してさ。ほんじゃ」

ヒュンツ

そう言いゼノは姿を消した。

「き…消えた!？」

突然の出来事に一誠は驚いていた。

「と…取り敢えず仕事しないと…」

すいませくん!!」

一誠は気持ちを入れ替えまたノックしたが返事は返ってこなかった。

「あくもう！

お邪魔しますよ!!」

そう言い一誠は扉を開き中へと入っていった。

一方その頃ゼノは

「はい今月のお給料。君のお陰でこっちは結構助けられちゃったからちよいとオマケしといたよ」

「こ…こんなに！

ありがとうございます！」

「良いの良いの。これからも頼むよ。ほんじやお疲れ」
「は〜い」

店長から給料を貰い帰っていた。

そんな感じであった。

場所は戻り

一誠は部屋へと入り目にしたのは暗闇の中で数本のロウソクを立てている光景だった。

「おうおう雰囲気なんか作っちゃって♪」

一誠はノリノリで部屋の奥へと足を踏み入れた時

ピチャ

何かを踏んだ。

「ん？なんだ……こ……れ……」

よく見るとそれは人間の血液であった。

そして近くには全身をズタズタに斬られた身体が転がっていた。

「う……!!!おえ……!!!な……なんだよこれ……」

一誠が余りにも異様な光景で嘔吐しようとした時ソファーに誰かが座っていた。

「悪い人はお仕置きよって聖なるお方の言葉を借りて……みました！」

それは白髪の少年であった。

「ん〜これはこれは悪魔くんじゃあ〜りませんか〜」
その少年はソファアールから降り一誠に近づいた。

「俺の名前はフリード・セルゼン…とある悪魔祓いに所属してる少年神父でござんつす♪」

フリードと名乗った少年は神父と言いながら陽気な自己紹介をした。

「し…神父!？」

これ、お前がやったのか!!」

「悪魔に頼るのは人として終わってる証拠…ENDですよ！END!!
だから殺してあげたんです!!」

クソ悪魔とクソに魅入られた人間を殺すことが…俺のお仕事なので〜す!」

シュイン!!!

そう言いながらフリードは懐から一丁の銃と光の刃をもつ剣を出した。

「今からお前のハートに光の剣を突き立ててこのिकासイ銃でフォーリンラブ!しちゃいます!!!」
「!」

その瞬間フリードは一誠に向かって光の剣を振り回したが一誠はこれを避けた。

「おっと!」
が

「バキユン!!!」

ピュンツ!!

距離を取った瞬間フリードは銃で一誠の脚へと発砲した

「ぐあ!!!」

結果は見事に命中し一誠は体制を崩してしまった。

「エクソシスト謹製祓魔弾…お味はいかがですか」

「くっ!!このおー!!!」

一誠は頭にきたのか神器を展開した。

「お!!まさに悪魔!!その方がこっちの悪魔祓いの気分が出ますな
!!」

フリードは一誠の神器をみて興奮した。

「でやあー!!!」

一誠はフリードに向かって拳をたたき込もうとしたが…

「あーらよっ」

「ぐあ!!」

ヒラリと躲されその時に背中を斬られた。

「おやおや見掛け倒しっすか?そういうのが一番ムカつくっすね」

!!!」

フリードが剣を振ろうとした瞬間

「きゃああー!!!」

部屋中に誰かの叫び声がこだました。

「おんや〜? 助手のアーシアちゃん、結界は貼り終わったのかな?」

「こ…これは……」

アーシアはバラバラにされた死体をみて叫んだのだろう

「あ、そうかそうか君はビギナーでしたなー。これが俺らの仕事…悪魔に魅入られたダメ人間をこうして始末するんす」

「そ…そんな…!!!はっ!!!イツセイさん…!!!」

そしてアーシアは一誠がいることに気づいた。

「ア…アーシア…」

そして一誠も気づいたらしく驚いた。

「何々〜? 君達お知り合い〜?」

アーシアと一誠が知り合いのことにさすがのフリードも驚いたよ
うだ。

「ど…どうして貴方が…」

「く……ゴメン……俺……悪魔なんだ……」

「い……一誠さんが……」

一誠が悪魔だということを打ち明けた途端アーシアは動揺した。

「騙してたんじゃない!!だから……君と……もう二度と会わない方が
良いって……決めてたのに……」

「そ……そんな……」

アーシアは突然の事実で混乱していた。

「残念だけどアーシアちゃん!悪魔と人間は愛し合えませくん。まし
てや墮天使のご加護無しじゃ生きていけぬ半端者ですからなく」

(墮天使!?)

墮天使という言葉に一誠は不思議に思った。

「さて〜ちよちよいと仕事完了させちやいましょうかね〜」

そう言いフリードは一誠の首筋に剣を突き立てた。

「覚悟はOK?なくても行きます!」

剣を振り下ろそうとした瞬間

「待ってください!」

アーシアが一誠の前に出た。

「フリード神父さま……お願いです!!この方をお許し下さい!!どうかお

見逃しを!!」

アーシアは涙を流しながら一誠を逃すよう頼み込んだ。

「君…自分が何をしてるか分かってるかな…」

「たとえば悪魔だとしても！一誠さんは良い人です!!それにこんなこと！主がお許しになるはずがありません！」

「はあく!!!馬鹿こいてんじゃねえ!!!」

そう言いフリードはアーシアを突き飛ばした。

「やめろー!!!」

「は？俺と戦うの？苦しんで死んじやうよー!!!」

「うおおおおおー!!!」

(勝ち目はねえけど…俺を庇ってくれたこの子の前で逃げる訳にはいかねえんだよ!!)

「いたい!!」

一誠は突進しフリードにパンチをめぐりこました。

「く…面白いな…どこまで肉を細切れに出来るか…ためしてやんよー!!!」

フリードは起き上がり一誠に向かって剣を思いつき振り下ろそうとした時

キンツ!!!

誰かがフリードの剣を受け止めた。

木場だ

そして見ると魔法陣が浮き出てそこから裕斗が現れた。

「助けに来たよ！兵藤くん!!」

「木場!!」

一誠が驚くと

「あらあらこれは大変ですわね」

「エクソシスト…」

朱乃と小猫も出て来た。

「皆!!」

「ひゃあっほおー!!悪魔の団体さんのご到着」

「悪いけど彼は僕らの仲間だ。君は神父には見えない下品な口だ」

「上品ぶるなクソ悪魔：お前らクソを狩ることが俺の生き甲斐だ！
黙って俺に殺されりやあいんだよ〜！」

「悪魔だって相手を選びますわ」

「アーシア!!」

フリードは何回もアーシアを蹴り続けた。

「私は私の下僕を傷つけられるのは絶対に許さないとしているのに特に貴方は下品極まりない…自分の所有物を傷付けられるのは我慢ならないわ…!!」

そう言いリアスは全身から赤いオーラを出しフリードを消そうとしましたが

「! 墮天使複数の気配…」

「ここでは不利ね…そして今はイツセーの回収が先決…朱乃、ジャンプの用意を」

「はい」

そう言われた朱乃は魔法陣を展開した。

そして小猫は一誠を担ぎ木場も魔法陣へと移動した。

「部長!!あの娘も!!」

一誠がなんとかアーシアも逃がそうとしても

「それは無理…この魔法陣は私の眷属しかジャンプできない…」

「そ…そんな…アーシア…」

一誠はもう一度アーシアを見ると

「イツセイさん…またいつか……どこかで……」

アーシアは笑顔で言った。

「アーシアアー！！！！」

こうしてオカルト研究部は一誠を救出したのだった。

夜明けの戦い

エクソシストとの戦いより数日後の夜

パチンツ!!!

現在一誠はリアスからビンタをうけていた。

その理由は昼間一誠が街を歩いているとアーシアと再会した。喜んだ一誠はアーシアに街を案内し各所を回り遊ばせ日本を満喫させた。だが、二人は休憩の為公園のベンチに座っていると突如あの夜一誠を殺した堕天使が再び姿を現したのだ。

一誠はアーシアを守る為に応戦しようとしたが手も足も出ずアーシアを攫われてしまったのだ。

そして一誠はアーシアを助けるべくリアスに協力を頼んだ為このようなになってしまったのである。

51

「何度言えばわかるの？あのシスターの救出は認められないわ！貴方はグレモリー家の眷属なのよ！」

「だったら俺を眷属から外して下さい!!自分一人でもアーシアを助けに行きます!!」

「出来るわけないでしょう。貴方はグレモリー家の眷属なのよ!!!」

二人が言い争っていると部屋に朱乃が入ってきてリアスに何かを耳打ちした。

「急用が出来たわ。私と朱乃は少し外出します」

それだけ言うとりアスは朱乃と共に転移門を召喚する。

「イツセーはポーンが一番弱い駒だと思ってるの?」

「え?」

「実際のチェスのポーンにも特性はあるわ」

「ポーンの特徴?」

「ええ。昇格(プロモーション)：ポーンは敵の陣地に入るとキング以外の駒に昇格できるの：それとねイツセー、貴方のセイクリッドギアは貴方の思いが強ければ強い程こたえてくれるわ」

それだけ言うとりアスは朱乃とともに転移門でこの場を去った。

「面白い話 聞いたな」

その直後、ソファアの影がゆっくりと動き出すと、話を隠れながら聞いていたゼノが現れる。ずっとその場にいたのなら、裕斗や小猫は気付く筈だが、現れるまで全く気付かなかった為に驚いていた。「いつからそこに…?」

「リアスが転移した時」

「全然：気づかなかったよ…」

「それよりも墮天使とやり合うんだろ?俺も付いてっていいか?」

その質問に対して一誠は首を横に振る。

「駄目だ…お前は人間だし連れてけねえよ」

「すまないけどゼノくん、兵藤くんに従ってくれ」

木場も一誠に同意するかのように同行を反対してゼノを制止した。するとゼノは舌打ちしながらも頷く。

「分かったよ。なら俺は帰る」

その後、帰路に着きゼノが暗闇の中に消えるまで見送った3人はすぐさま行動を開始する。

「よし！行くぞー！」

「はい」「うん!!」

一誠達は教会へと走っていった。

その様子を帰ったと見せていたゼノが上空から見ていた。

「さて、俺も行くか」

シユウウウウ…ドントツ!!!

同じくゼノも向かう為に空中を蹴るとジェット機の如き速さで教会へと飛んでいった。

—————

一誠達は教会へと着き教会の扉をあけ侵入した。

すると銅像の影から足音が聞こえ、そこから何時ぞやかにイツセーを襲ったはぐれエクソシストが姿を現した。

「フリードー！」

「やあやあ再開ですね〜感動的ですね〜♪ま、俺としては二度会う悪魔なんていないと思ってたんすよ〜。だって俺めっちゃ強いし一度会ったら即死よって訳、だからさ〜…ムカつくんすよ…俺に恥かかせたテメエらクソ悪魔どもがよう…」

怪しい笑みと常人には見られない狂った様なテンションで首を回したフリードは光の剣を手に持ち戦闘態勢を取る。

「アーシアは何処だ!!」

「あー悪魔に魅入られたクソシスターならこの祭壇の地下にある祭場

にいますです。ま、行けたらですけどね」

「くっ！セイクリツドギア！」

一誠、裕斗はそれぞれ神器を展開し、小猫はフィンガーグローブを着用するとフリードを撃つべく戦闘態勢へと入った。

その時だった。

「やっぱり着いてきた甲斐があつたな」

「!?!」

聴き慣れた声と共に一人の影が教会の入り口から月明かりを背に歩いてくる。その声を聞いた一同は全員、声が聞こえた方向へと目を向けた。

「よう。お前ら」

「ゼノ(さん)!?!」

そこに立っていたのはゼノであった。

別れた筈のゼノがいた事に皆は驚きの表情を浮かべるが、その一方でフリードはいきなりの闖入者に少し腹を立てていた。

「何なんですか？？貴方。今僕ちゃんはこの子らと闘おうとしてるんですよ？」

フリードはゼノに向けて牽制するかの様に剣の切先を向ける。だがゼノは返すどころかまるで見えていないかの様にイツセー達へと目を向けた？

「来て早々だけど 一誠、地下にいる友達、早く行かないと手遅れになるぞ」

「分かってる！けど何で来たんだよ!?!」

「別に。ただ単におもしろいと思っただけだよ。それとお前ら…俺が弱いと思ってるのか?」

「あ…ああ…お前からは魔力みたいなモンが感じられないから…」

イツセーはまだ新米だ。相手の強さを感じ取れる魔力を基準としていた。ゼノはその評価に呆れると反論する。

「はぐれ悪魔をパンチ一発で葬る奴が人間な訳ねえだろ」

「あ……あのう……？」

フリードの問いかけにゼノは答える素ぶりも見せず続けた。

「早くいけ。じゃないと助けられねえぞ」

「ゼノ……」

「いけ」

「……分かった！いくぞ！二人とも！」

「お……お……」

イツセー達は駆け出し小猫、裕斗と共に地下へと降りていった。後に取り残されたのはフリードとゼノのみ。

一方でイツセー達が地下へ向かっていった姿を見送ったゼノは屈伸をすると、自身も向かうべく足を踏み出した。

「さ……俺も「ザケンナあああああああああ……ん？」
!!!!!!

突然の奇声と共にゼノに向けて光の刃が迫る。今まで浮いてた事に気が立ったフリードが自身を空気と化させたゼノ目掛けて剣を振り回していたのだ。

だがその一閃はゼノにとっては蠅が止まる程の速度である。

故に

「は……？」

人差し指一本で簡単に受け止めた。

「誰だ？お前」

ゼノは受け止めた剣に米粒程度の力を入れて握る。その瞬間 剣は粉々に砕かれ辺りへ破片が散らばった。

「お……俺の剣が!？」

武器が消失した事でフリードは動揺する。その動揺する額の前にゼノの指が突き出された。

そして

「邪魔」

真実を告げた。

「神器を抜き取られたらその持ち主は死ぬ…」

「な…!」

それを聞いたイツセーは即座にアーシアに向けて駆け出し手を伸ばした。

「やめろおおお!!」

神器を抜き取られると持ち主は死ぬ。それを知った瞬間一誠はすぐに助けようとしたがもう遅かった。

「あ……」

その場にアーシアの途切れそうな一声がこだます。その直後に彼女の胸の中から指輪が光に包まれながら現れた。

その指輪が光と共に身体の中から抜き取られるとアーシアは力が抜けたかの様に首を下げた。

「な…!!!アーシア…!!!」

一誠はアーシアの元に走っていったがその先を神父達が剣を構えながら立ち塞ぐ。

「止まれ!!この先へは行かせん!!!」

「くそ…っ!!!」

その時だった。

「がはあ!」

「ぐほお…!」

イツセーの横を二つの影がすり抜け、立ち塞がる神父を斬り捨てると共に殴り飛ばした。

それは背後に立っていた裕斗と小猫だった。

「ここは任せて!!」

「早くいってください」

イツセーの前に出た小猫と裕斗はイツセーを先へと行かせると共に神父達に向けて再び武器を構える。

「木場…小猫ちゃん…ありがとよ!!!」

一誠は祭壇へと走っていった。

その姿を見送った二人は襲いかかって来る神父達を次々と撃破していった。

「はあ!!」

「やあ」

裕斗の剣捌きが太刀筋を描き、小猫の体術が鈍い音を鳴り響かせながら次々と迫り来る神父達を蹴散らしていった。

そんな中だった。

一人の神父が起き上がり、小猫へ向けて剣を振り下ろした。

「隙ありッ!」

「小猫ちゃん!!!」

「ッ!」

小猫はようやく気づいたがもう遅かった。

裕斗も小猫を助けようとしたが距離が遠い。

「ぐ…!」

小猫は目を閉じた。

「…………え…?」

何も感じなかった。小猫はゆっくりと目を開けた。そこには

「な…………何だ貴様は…!!」

長ランをたなびかせるゼノが立っており小猫に向けて振り下ろされた光の剣を指一本で受け止めていた。

「油断は禁物だ」

そしてゼノは指に少し力を加え押すと相手の神父はその反動によってよろめき出す。そのよろめく体に向かってゼノは強烈な蹴りをお見舞いした。その神父は吹っ飛ばされその後ろにいる神父達も

衝撃で吹っ飛ばされた。

「す…すみません…」

「分かればよろしい」

そう言いゼノは小猫の頭をワシヤワシヤと撫でた。

「にや!? やめてください…」

小猫は顔を赤くしながらゼノから少し離れた。

「ごめんごめん」

「……………」

「あのく二人とも出来ればこっちも助けて欲しいんだけど…」

声が出た方を見ると多数の神父達の剣を 受け止めながらこちらを汗を垂らしながら笑顔でむけている木場の姿があった。

「あ、すみません」

「忘れてた」

そう言いゼノ達は神父達を再び倒し始めた。

そして一誠は

「ア…ア…アジア…」

着いたもののアジアは返事をしなかった。

「ここまでたどり着いたご褒美をあげる」

パチン

墮天使が指を鳴らすとアーシアを縛って鎖が解けアーシアが一誠の方へ倒れ込んだ。そして一誠はしっかりと受け止め抱きしめた。

「アーシア…大丈夫か！」

一誠が呼びかけるとアーシアは目を開き

「い…イツセー…さん…」

それだけ言うともまた意識を失った。

「その娘はあなたにあげるわ」

「くっ!!ふざけんな!!この娘のセイクリッド・ギアを元に戻せ!!!」

「はあ?バカ言わないで。私は上を欺いてまでこの計画を進めたのよ?残念ながらあなた達はその証拠になってしまうの。でもいいでしょう?二人仲良く消えるんだから」

レイナーレは下衆に満ちた目で見下ろしながら槍を生成し鋭い先端をイツセーへと向けた。

「…君は…初めての彼女だった…」

「ええ。とても初々しかったわ。女を知らない男の子はからかい甲斐があつたわ」

「大事にしようと思った…!」

「うふふ♪ちよつと困った顔を見ると即座に気を使ってくれたわね。でもあれ全部わざとだったのよ。だって慌てふためく貴方の顔がとっても可笑しいんですもの!」

「俺…夕麻ちゃんが本当に好きで念入りにプラン考えたよ…絶対にいいデートにしようと思って…」

「アツハハハハ!そうね!とても王道なデートだったわ。お陰でと

くつてもつまらなかつたけどね♪それに夕麻、貴方を夕暮れに殺そうと思つたからその名前にしたのよ。中々素敵でしょ？なのに死にもしないでこんなブロンドの彼女作っちゃって…酷いわ！一誠君たら〜！またあのクソ面白くもないデートに誘つたのかしら〜？あ、でも田舎育ちの小娘には新鮮だつたかもね〜。こんな楽しかつたのは生まれて初めてですう〜とか言つたんじゃない？アツハハハハハハ!!!」

「…!!」

次々と出てくる自身を嘲笑う声。そこにはもうあの日、自身と楽しんで彼女の面影は残されていなかった。

それによつてイツセーの中に残つていた天野 夕麻に対する心は完全に消え去り墮天使レイナーレへの怒りへと変わる。

「レイナーレエエエエエエエエエエ!!!」

「下級悪魔が気安く私の名を呼ぶんじゃないわよ!!!!汚れるじゃない!!!」

レイナーレはイツセーへ向けて生成した光の槍を突き刺そうとした。

だが、寸前にイツセーは避け、アーシアを抱えたまま教会の出入り口へ向けて駆け出した。

「行かせるかあ!!」

「…!」

寸前に出入り口の前に数人の神父が立ちはだかる。現在はアーシアを抱えており上手く戦う事ができない状況だった。

その時だった。

「邪魔だ」

背後からゼノが飛び出し神父達を蹴り一発で一掃する。

「ぜ…ゼノ!?!」

神父を一掃したゼノは出口を指差す。

「ほら、サツサといけ」

「…!!ありがとうな!」

イツセーはお礼と共にゼノの横を通り過ぎると教会の出口へ向かって走り去っていった。

「さて…僕達も早く終わらせようか…」

「そうですね」

「ああ。でもこんなにいると流石に面倒だな」

ゼノ達は神父達に囲まれながらも余裕であった。

「へえ…いつまで持つかしらね。ま、私は一足先にいくわ」

そう言いながらレイナーレは出口へと飛んでいったが

「させるか!!!」

「な!!!」

裕斗がレイナーレに剣を振った。

「ふん!これしきの傷、すぐ回復するわ!じゃあね」

傷が浅くレイナーレを逃してしまった。

「くっ!!!」

「裕斗先輩…まずは神父達をたおしましょう…」

「そうだね小猫ちゃん」

そう言いながら木場はまた戦闘を再開した。

その一方ゼノは

ゼノは跳躍しその神父達目掛けて空中から踵落としを決めた。

「ふう〜終わった〜」

神父達は全滅し見事に勝利した。

「い…以外と豪快だね…ゼノくんは…」

「凄いですね。本当に人間でしょうか」

裕斗と小猫はゼノの容赦ない攻撃をみて呆然としていた。

その頃一誠は

「アーシア…!!しっぴかり…ここを出ればアーシアは自由なんだぞ!!」

アーシアを教会の席に座らせ呼びかけていた。すると

「い…イツセー…さん」

アーシアが目を覚ましイツセーの手を握った。

「私…少しの間だけでも…お友達が出来て…幸せでした…」

「な…何言っただよ!まだ連れて行きたいとこいっぱいあるんだからな!!カラオケ…遊園地…ボーリング…あと服だつて!!あと…俺の友達にも紹介しなきゃ!!松田と元浜っていうちよつとスケベだけどスツゲーいい奴なんだぜ…!絶対アーシアと仲良くなつてくれるからさ!皆でワイワイ騒ぐんだ!バカみたいにさ!!」

一誠は泣きながらアーシアに言った。

「この国に生まれて…イツセイさんと…同じ学校に行けたら…どんなにいいか…」

「行くこうぜ!!行くんだよ!!俺達とさ!!」

そう言うときアーシアは一誠の頬に手を当て

「私の為に泣いてくれる…!私…!もう…なにも…!!…ありがとう…!!」

その言葉を最後にアーシアは息を引き取った。

「アーシア…何だよ…何で死ななきゃなんねーんだよ…傷ついた相手なら誰でも…悪魔だつて治してくれる優しい娘なのに!!なあ!!神様!!!いるんだろ!!この娘を連れてかないでくれよ!!この娘は何にもしてないんだ!!ただ友達が欲しかっただけなんだ!!俺が悪魔になつたからダメなんすか!!この娘の友達が悪魔だからだめなんすか!!!なあ!!頼むよ!!神様—!!!」

一誠はアーシアを抱きしめながら叫んだ。

その時

「悪魔が教会で懺悔?タチの悪い冗談ね」

アーシアの神器を奪った堕天使レイナーレが現れた。

「レイナーレ!!!」

「ほらみてこの傷。ここに来る途中ナイトの子にやられちゃったわ」

そう言うレイナーレは傷口に片方の手を近づけると

ピカアアアン!!

緑色に発光し瞬時に傷を塞いだ。

「素敵でしょ?どんなに傷ついても治ってしまうの。神の加護を失った私達墮天使にとってこれは素晴らしい贈り物だわ。これで私の墮天使としての地位は版着ね。ああ偉大なるアザゼル様:シエムハザ様:お二人の力になれるわ!」

レイナーレは手を合わせ祈るように言った。

「知るかよ:墮天使とか悪魔とか:この娘には関係なかったんだ!!!」

「神器を宿した選ばれし者にとってこれは宿命よ」

「なにが宿命だ!!!静かに暮らすことだって出来た筈だ!!!」

「それは無理。神器は人間にとって無に余る存在:どんな素晴らしい力であろうと不吉な物は恐れられつのはじきにされる。仕方ないわくそれが人間という生き物だものくこんな素敵な力なのにく」

レイナーレは神器を光らせ見せた。

「でも俺はアシアを守ろうとした!!!」

「でも死んじやったじゃない!!アツハハ!!その娘死んでるのよ!!守るとか守らないとかじゃないの!!貴方は守れなかったの!!!あの時!そして今も!!」

「だから許せねえんだ…お前も…そして自分も!!!」

その時一誠はリアスの言葉を思い出した。

そして思った。

「アジアを返せよー!!!!!!!」

その瞬間

一誠の左手が光り赤色の籠手が現れた。

D r o g n B o o s t e r
!!!!!!

左手がそう叫んだ。

「うわああアアアア!!!!!!」

そう叫びながら一誠はレイナーレに殴りかかった。が躲され空振りとなってしまふ。

その時

B
o
o
s
t
!!!!

左手がまた叫び光った。

「うわああアアアアー!!!!!!」

そしてまた殴りかかった。がまた躲された。

そして

「ふ!!」

グシヤ!!

「ガアツ!!!!」

レイナーレは一誠の両足に槍を刺した。

「光は悪魔にとって猛毒！触れるだけでたちまち身を焦がされる…その激痛はもつとも耐え難いのよ!!」

そして刺した両足からおびただしいほどの血が溢れ出した。

だが一誠は

「それがどうした…!!」

槍を抜き取った。

そして更に血は溢れ出た。

「こんなもん!!アーシアの苦しみに比べたら!!!どうってことねえーんだよ!!!」

B o o s t
!!!!

そしてまた左手が叫んだ。

「大したものね〜下級悪魔の分際でそこまで頑張ったのは褒めてあげる〜」

「くっ!!力が…」

そして一誠は尻餅をついた。

「でもそれが限界ね〜下級悪魔程度ならとうに死んでもおかしくないのに…:以外に頑丈ね」

そして

「神様…じゃダメか…悪魔だから魔王か…いるよな!!
きつと…俺も一樣悪魔なんで…頼み聞いてもらえますかね…頼み
ますから…後はなにも…いらないんで…」

一誠は立ち上がり背中から悪魔の翼が生えた。

「だからコイツを!!一発殴らせてください!!!」

「な…!!立ち上がれる筈がない…体中を光が内側から焦がしてるのよ
!!光を緩和出来ない下級悪魔が耐えられる筈!!」

レイナーレは立ち上がった一誠に驚いた。

「ああ痛えよ…!!超痛えよ…!!今にでも意識が飛んでつちまいそうだよ!!!」

そして一誠は段々とレイナーレに近づいていきレイナーレ自身も
どンドン後ろへ下がった。

「でもな…そんなのどうでもいいくらい!!!テメエがムカつくんだよ!!!」

そう言いつた瞬間

Explosion!!!!

左手がまた光り出し籠手の形が変形した。

それは赤き龍の腕を思わせる形だった。

「な…!!!あ…ありえない!!その神器!!ただの龍の籠手（トウワイスクリテイカル）」が…どうして!!
う…嘘よ!!!!」

そう言いながらレイナーレは槍を投げるが

ガキンツ!!!!

一誠は籠手の方の腕で弾いた。

「い…い…いやあ!!!!!!」

そしてレイナーレは羽を広げ逃げようとしたが

ガシツ!!!

「君の邪魔をするなって部長とゼノ君に言われてさ」

「部長とゼノに？」

する

「その通りよ貴方なら倒せると信じていたもの。」

「部長！」

祭壇の近くにリアスがいた。

更に

「いや〜やっぱり期待してた通りだよ。それよりもムカつく奴を殴った気分はどうだい？ イッセー」

ゼノもそこにいた。

「ああ!! スツキリしたぜ!! でもなんで部長がここに…」

「用事が済んだからここの地下に転移したの。そしたら…うん…」

「ゼノくんが神父を縛り上げてて…」

「ま…マジですか…」

そう話していると

「部長、連れて来ました。」

協会の入り口から小猫がレイナーレを引きずりながら持って来た

ドサッ

そしてリアスの前にレイナーレを放り出した。

「初めまして墮天使レイナーレ。私はリアス・グレモリー、グレモリー家の次期当主よ」

「グレモリー一族の娘か…!!」

「どうぞお見知り置きを。短い間でしようけど。それから」

そういうとリアスはレイナーレの前にそれぞれ形の違う三枚の黒い羽を落とした。

「訪ねて来てくれた貴方のお友達は私が消しとばしてあげたわ」

「け…消しとばしたって…」

「部長は紅髪の滅殺姫（ルインプリンセス）と呼ばれてるんだよ」

「え…おれそんな人の眷属になったんだ…」

「グレモリーの娘が…!よくも!」

「以前ドーナシークにイツセーが襲われた時、この町で複数の墮天使が何かを企んでいた事は察してたわ。私達に害を及ばせなければ無視してたんだけど…」

「え…部長…じゃあおれの為に…」

そしてリアスは変形した一誠の神器を見ると

「イツセー…そのセイクリッドギア…」

不思議に思い「誠はその理由を伝えると

「赤い龍…そういう事なのね。墮天使レイナーレ、この子兵藤一誠のセイクリッドギアは単なるトウワイスクリテイカルではないわ」

「何…!？」

「持ち主の力を10秒ごとに倍加させ魔王や神すらも一時的に超えることができるという13種の神滅具（ロンギヌス）の一つ…」

『赤龍帝

の籠手（ブーステッドギア）』

「な…!!神を滅ぼすと伝えられる神器がこんな子供に…!？」

「どんなに強力でも時間を用するから万能ではないわ。相手が油断してくれたから勝てたと思うわ。今回の件は無視できない…消えてもらうわ」

その時

「一誠くん」

「!!」

「…！」

レイナーレは一誠の恋人天野夕麻の姿となった。

「助けて！あんな事言っただけで堕天使としての役目を果たす為仕方なかったの！」

その時

「…」

今まで笑顔だったゼノの顔が少し変化し一歩ずつレイナーレへと近づいた。

（こいつは本当に……………今まで会った中で……………最低最悪のクズだな…）

その顔はとてつもなく冷酷であった。

一方レイナーレは

「ほら!!その証拠にこれ!捨てずに持ってたの!忘れてないわよね!?!
貴方にも買ってもらう…」

一誠が買って付けたプレゼントをみせた。

その時

そしてレイナーレは顔が崩壊し涙をながし、醜い表情を見せながら
も一誠に助けを求めたが

「部長…お願いします…」

「私の可愛い下僕にいいよるな…消し飛べ…!!」

その瞬間、その場に黒い羽が舞った。

「グッバイ…俺の恋…」

こうして一誠達の長い夜は終わった。
だが……失った物は大きかった……

「ア……アーシア……う……くう…!」

一誠は冷たくなったアーシアの体を抱きしめながら泣き叫んだ。

黒猫との再会

夜

「ふうくバイト終わったくこれでアパートの金は何とか稼げたな」
墮天使との戦いから次の日の夜ゼノはテントへと向かっていた。

「とりあえず…墮天使のこと調べてみるか…この町にまだいそうだからな…」

何故ゼノがこうなったのかというと

昨日の夜

神器を抜き取られたアーシアは死んでしまった。その時リアスが僧侶（ビシヨップ）の駒を埋め込んだ事でアーシアはリアスの眷属となって生き返った。

そしてその直後、ゼノはこの町でレイナーレよりも強い気を感じたからである。

「ま、ちょっと疲れたし今日はもう寝よ…」

そう言いながらゼノがテントへと向かっていると

「ニヤ〜」

「ん？何だお前かく元気にしてたく？」

塀の上から何週間か前にゼノの所へ来た黒猫がいた。

「ニャ！」

「ん？どうしたんだ？そんな慌てて」

いきなり黒猫は何かから逃げるようすぐさまゼノの肩に乗って来た。

すると…

「おい、そこのお前」

ゼノは後ろから声をかけられた。

「ん？」

見るとそこには一人のローブを着用した男がいた。

「その黒猫を渡してくれないか」

その男はローブの間から手を出しこちらに渡す様なそぶりを見せってきた。

「何で？」

「いや、私のペットでね、逃げ出してしまったんだよ」

「だってさ、ほら、行きなよ」

ゼノは訳を聞き黒猫に行くよう行ったが黒猫は毛を逆立てフシャーと威嚇していた。反応からしてみるにどうもおかしい。

「嫌だってさ。しばらく預かりましょうか？」

「いや、いい。迷惑はかけたくないんでね」

「へ〜」

普通に話しているがゼノは最初から気づいていた。コイツらは人間ではない。悪魔だという事に。そしてリアス達よりも一段階上の強さを持っているという事も感じ取っていた。

ゼノは周りを見渡し潜んでいる複数の悪魔の気を感じ知した。

(コイツ一人じゃない様だな。ま、暇つぶしには丁度いい)

「でも何で悪魔が黒猫なんかペットにしてんの？」

悪魔と気付かれた男は驚いた。

「な…何を言ってるんだね…私は悪魔じゃn…」じゃあ何で黒猫がこんなに怯えてんの？そしてあんたもあんたで何でそんな怪しい格好してんの？」

「……」

ゼノにそう言われた男は少し黙るとローブを外した。

「ああそうだ。俺達は悪魔だ。そしてその黒猫は冥界で指名手配されている『ss級はぐれ悪魔、黒歌』だ。子供だと思って舐めていたがここまで感知能力が高いとはな」

パチンツ

男が指を鳴らすと左右に二人、後方に一人の計3名の悪魔が出て来た。

「さあ！黒歌を渡して貰おうか！」

ゼノは完全に挟み撃ちにされていた。だがこんな状況なぞゼノにとってはお遊戯と同じである。

「めんどいな。俺 腹減ってるからどいてくれ」

「ふん。退けといわれて退く奴がどこにいる？ここを通すわけなからう」

「あつそ。じゃあ前じゃなく上にいくか」

そう言うとゼノはその場から垂直に飛び上がった。

ピュンツ!!

「なっ!!人間が飛べるだど!?!」

「くっ!我々も追うぞ!!」

そう言い悪魔達も後を追った。

ゼノ side

俺は今複数の悪魔から逃げている。俺はこれでも遅く飛んでいるのだが一向に悪魔が追いついてこない。

「悪魔って結構遅いんだね…ってあれ?」

俺は後ろにいる悪魔に挑発しようと振り返った時

「黒猫が…いない」

いつのまにか黒猫がいなくなっていた。

(まさか!!奴らが一向に追ってこないのは!)

そう俺が思った瞬間

「その通りさー!」

俺の目の前には悪魔がいた。

「お前が飛ぶ瞬間黒猫はお前の肩から飛び降りそのまま屋根の上に逃げたんだよ。しかも俺達悪魔は夜になると身体能力が格段に上がる…こんな夜の町なんて、朝のように見えるんだよ!!」

side out

黒歌 side

私は今屋根の上で走って逃げていた

私ははぐれ悪魔だから同族の悪魔から指名手配されてて毎日が隠れるだの紛れ込むだので大変だった。

そして私は草むらを抜けて塀の上に出るとそこにはあの時傷だらけの私を看病してくれたあの子がいた。

私はお礼をしようとその子の肩に乗った瞬間、私の追っ手が来てあの子を挟み撃ちにした。

(くっ…これじゃあ…あの子も巻き込んでしまう…幸いに奴らは私を捕まえる事が目的…)

そう思った私はすぐさま彼の肩から降りて屋根の上に登った。

けど私は長時間走り続けた為かその場で崩れた。

「く…力が…」

私が倒れ込んだ時

ドン!!!

「ガハッ!!」

私は力いっぱい屋根の瓦に首を抑えられた。

「ハハハハハ！やつと捕まえたぞ!! s s級のはぐれを捕らえた！これで俺の地位もぐんつと上がるな!!」

「く…!!そんなことのために…なんの関係もないあの子も…!」

「たかが人間一匹殺してもどうってことなからう。さて、覚悟してもらおうか?」

そう言いながら男は抑えた手と反対の手にエネルギーをためた。

これで…私もお終いだ……

(ごめんね…白音…最後は貴方に…会いたかった…そしてゼノ…巻き込んでゴメンね…)

私は泣いた。

「これはまた珍しい。はぐれが涙を流すとはな！後悔しながら死ねえええ!!」

そしてその悪魔は私に向かって魔力のこもった拳を振り下ろした。

私は目を瞑った。

「ギヤアアアアツツ!!!」

え…?何が…起ったの…?

私を殺そうとした悪魔の断末魔が聞こえた。

私は目を開いた。

そして見えたのは

「急に何処かに行くんじゃないやねえよ。探したじゃねえか」

あの子の手が私を殺そうとした悪魔の胴体を貫いていた。

そして…私の意識もここで途切れた。

side out

現在ゼノは黒猫を殺そうとした悪魔の胴体を貫いていた。

「ガハアッ！な…何故人間の…貴様が…の…残りの奴らはどうしたんだ…」

胴体を貫かれた悪魔は血を吐きながらゼノへ聞いた。するとゼノは三つの腕を放り投げた。

「取り敢えず殴ってぐちゃぐちゃにしてやったよ」

「な…バカな…三人とも…上級悪魔の中でも上位に入る実力者なのだぞ!？」

「へえくあれで強者って、悪魔も結構弱いんだね。ま、どうでもいいけど。そろそろお前にも後を追わせてやるよ」

『死ぬ』

グシユウツ！

そう言うとゼノは悪魔の頭をもう一方の手で握りつぶした。

「ふう〜終わった〜。さてと帰りますか〜」

そう言いながらゼノは黒猫を持ち上げてその場を後にした。

そしてゼノはテントに着き運んでる途中人に戻った黒歌を寝かせ、火を起こした。

しばらくして

「……………ん……………う……………ここは……………?」

黒歌は目を覚まし辺りを見回した。

「よう、目が覚めたか?」

「ニヤ〜き…君は……………」

ゼノを見た瞬間黒歌は黙りこんで下を向いた。

「ん?どうした?」

「……………ごめんね…私を助けてくれた君をあんな目に合わせて…」

黒歌は自分の為でゼノに悪魔と合わせてしまったことを気に病んでいるようだった。

「別にそれはいいとして」

「いいんだ…」

ゼノはあっさりと返事をしそして黒歌を強く見据えた。

「……………」

「え？……………どうしたの？」

「お前…何か似てるんだよな。あの小柄で…えつと…白い髪の奴……………」

「え！白音のこと知ってる!？」

「へえ〜小猫って白音っていう名前なの〜なるほど〜」

「そうニヤ…私はあの娘の姉なの…」

「ふうくん、じゃあ何で小猫の姉が悪魔に追われてんだ？」

「それは……………私のはぐれ悪魔になったからなの…」

「なった？すると昔はそうでなかったってことか？」

「うん……………話していい？」

「ああ」

そういうと黒歌は語り始めた。

自分の過去を

聞くと、黒歌と小猫はとある悪魔の眷属となり、普通に生活していたのだ。だが自分と妹を眷属にした悪魔が、妹に仙術という妖怪に伝わる妖術を無理矢理仕込もうとしたのだ。仙術は身体が未熟な者が扱えば命を落とす危険性があるため、黒歌は何度も止めるように説得したが、悪魔は聞く耳を持たなかった。故に、黒歌は学んだ仙術で主人を殺し妹とともに逃亡したのである。

そして黒歌は自分のはぐれになったことを知ると妹に危険が及ばぬように、「足手まとい」と、言い放ち妹を置き去りにし去ったのだ。

「これが…私の過去の話…だから今でも私は命を狙われ続けてるの…」

「そうか」

ゼノは頷きながらも内心 少しは疑っていた。これまで殺害した異星人の中にもこのような話をし同情を誘う奴がいた。

だが、今回は違った。ゼノは神の修行によって得た相手の心のある程度読む能力を使い黒歌の心を覗いた。

出てきたのは『悲しみ』『後悔』そしてその妹に対する『愛』であった。

(見る限りコイツは嘘をついていないな…それにしても酷い…)

黒歌はただ妹を守る為に主人を殺したのだ。だがそれが災いとなり今に至ると言うわけだ。

すると黒歌は立ち上がりその場を去ろうとした。

「どこ行くんだ？」

「これ以上いると君も巻き込んでしまう…だから…これでお別れよ…」

「妹に合わないのか…？」

「こんな姉に会ったって…何も嬉しい事なんてないから…」

「え？」
「え？」
「え？」

突然、ゼノが黒歌の腕を掴んだ。

「お前、そんなに気にかけてるんならすぐ何処かに行こうとすんじやねえよ。それじゃあ避けてるようなもんだぞ」

「なら…私はどうすればいいの…!」

黒歌は涙を流した。彼女は己の中で何度も葛藤していたのだ。そして遂には何が何だかんだ分からなくなってしまうた。

「それが真実なら 悪魔どもがお前のはぐれを取り消すまで匿ってやるよ」

「え……?」

黒歌は涙を止めると振り返った。見ると先程までとは全く違う真剣な眼差しをゼノは浮かべていた。

「でも…そんなことしたら君にまで危険に…」

「別にいい。それよりどうなんだ?」

その問いに黒歌はまた涙を流し始めた。涙で顔がぐしゃぐしゃになりながらもゼノに尋ねた。

「ぐす……本当に……一緒に……いて……いいの……?」

「ああ。でなきゃこんな事は言わん」

「う……あ……ありがとう……」

黒歌は泣いた。今までの悲しみを 辛い思いを全て吐き出すように。

ゼノは涙を流す黒歌の元に寄り肩に手を置いた。

こうして黒歌はゼノの所で居候することとなったのだ。

その後ゼノは泣いて疲れた黒歌をテントの中で寝かせその夜、ゼノは辺りを見張っていたという。

学園への入学

次の日

4 : 30

「……………ん？……………あれ……………」

ゼノは見張っていた筈の自分がいつの間にか寝ていた事に気付き、目を覚ました。だが、目を覚まして目も目の前は真っ暗であった。

(何で…前が見えないんだ……しかも……何か……息苦しい……)

暗い景色と息苦しさに違和感を覚えたゼノは状況を把握しようと体を動かす。

その時であった。

ムニユ

(え……………なに……………これ……………)

顔に何やら柔らかな感触が広がった。それだけでのみならず何やらほのかに甘い香りも漂ってくる。

すると

「ニヤ〜ン♡」

「え!？」

聞き覚えのある声がいつもよりも艶やかに聞こえてきた。

その声が聞こえた方向へと目を向けると、

「もう〜朝から発情かニヤ〜ン♪?」

頬を赤く染め上げた黒歌の顔があった。しかもよくよく見れば自身は黒歌に抱き締められながら横になっていたのだ。

「な……なななな／＼／＼／＼／」

その発言からゼノは自分の目の前にある物を即座に理解しすぐ離れようとしたがそれを読まれているかのように後頭部に手を回されそのまま柔らかい物体へと押しつけられた。

「むぐう!？」

「逃さないニヤ〜ン♪」

離れようとしたのを察知したのか黒歌はゼノの頭を自分の胸に押し付け逃げられないようにする。

「ふふ〜まさか照れてるのかニヤン？意外と初心なんて可愛いニヤ〜ン♡」

その言葉と共に黒歌の抱き締める手の力が更に増しゼノの顔が彼女の豊満な胸へと沈んでいった。

「ん……んが……くる……し……」

その後。その圧に耐えきれずにゼノはそのまま目を回し気絶してしまっただ。

◇◇◇◇◇

二時間後 ゼノはようやく目を覚まし 朝食を食べ終わると通学の準備をしていた。今日からゼノはリアス達と同じ『駒王学園』に通う事になったのだ。理由は悪魔の監視。それに加えてもう一つは知識が低下してきたのでそれを補う為である。因みに『駒王学園』は私立で学費は尋常じゃない位高いが出発前にもらった金塊を売り出し日本円に換算したのでそこら辺は問題はない。

「いや〜ゴメンニヤ〜」

目を覚ました黒歌はあくどい笑みを浮かべながら謝罪をしていたが明らかに反省はしていない。

「死ぬかと思った…」

「ニヤ〜ゼノが可愛いくてつい♡あのままS○○とかパ○○○とかしとけばよかったニヤン♡」

「やめろ気色悪い!」

頬を染めながらぶりぶりとする黒歌に悪寒を感じ、ゼノはドン引きする。

「そういえば学園に行くんでしょ？制服どうするの？」

「作ってもらったのがあるからそれを着ていく」

そう言いゼノはバッグから背中に文字が縫われた長ランを取り出すと着用した。

「それじゃあ、行ってくる」

「はいニヤ!!」

ゼノは黒歌と別れると長ランをたなびかせながら駒王学園へと飛んでいった。

一方イツセーはというと

「これで朝のHRを終わるぞ」

HRが丁度終わる頃だった。すると突然先生が切り出した。

「よしお前から突然だがこのクラスに新しい仲間が加わるぞ」

「先生!!男ですか!?!女ですか!?!」

転校生あるあるの質問にカツラを被っている先生は答えた。

「男子は喜ベッ!来るのは女子だッ」

「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」

先生がそう言った瞬間クラスの男子全員がが大歓声を上げ先生を胴上げした。

「お前ら!胴上げはそこまでにして先につけ!それでは編入生を紹介する!では入ってきてくれ。」

ガラガラガラガラガラ

リアス side

私のクラスでは現在、朝のSHRが行われていた……そして、今は私は壮絶に驚いていた……

「では自己紹介を」

「編入生の『黒崎ゼノ』です」

（なんでゼノが三年に!? どう見たって一年とかでしょ!?）

え？

あれで18歳？何か凄い可哀想なんだけど!?)

私がそう思っていると私以外の女子達が歓声を上げた。

「「「きやああああー……」」」

「三つ編み美少年よ!!!」

!!!

「可愛い!!!」

「長ランがコスプレみたい!!!」

（なんで!? 何で一気に大人気になるの!? ……まあ…はじめからこれくらいなら大丈夫そうね）

私がそう安心してしていると次の瞬間、ゼノは私の安心した心を一気に破壊した。

「あ、言い忘れたけど、強い奴にしか興味がありません。このクラス今日中にしめるんでよろしく」

（きやああああ!!! なにいきなり爆弾発言してんのよ!!! クラスの男子刺激しちゃうじゃない!）

「何だとテメェ!!!」

「俺らのこと舐めやがって!! 駒王の恐ろしさ!! 思い知らせてやる!!!」

（ほらー! 言わんこっちゃない!）

1人の男子がゼノに向かって殴りかかっていた。

ガンツ!!!!

ゼノは満面の笑みを浮かべて向かってきた男子を踵落として床にめり込ませた。

「……………」

「次邪魔したら…殺しちゃうぞ♪」

「「きやああああー!!!」」

「……………」

(なんで……………)

「コラアー!!! 転校早々にをやっているかあー!!!」

(ナイスです! 先生! 注意してやってください!)

「テメエー!!! よくも俺のダチをおー!!!」

そう思っているときまた男子がゼノに向かっていった。デジャブかと思っていたら……………

ガンツ!!!!!!

今度はゼノではなく……………先生がやった…

「仲良くしないと… 殺しちゃうぞ…?」

(…………ええ〜!?何で先生が…!?)
教師がしているのかと、多分みなそう思っただろう…

side out

昼休み

ゼノは予告通りクラスを統治し、現在は一人で屋上で昼飯を食べていた。もちろんバイトのピザである。両手でピザを頬張りながら、この後の事を考える。

「うん…………。ピザは美味いけどずっとコレだと栄養に偏りがでるな…今度す〇屋にかえようかな…」

そう思考していると後ろの扉が開き、小猫が姿を現した。

「ん?どうした?」

「部長が先輩とアーシア先輩の歓迎会をやるから呼んできて…………と言われました」

「へえ。甘いものとか出る?」

「はい」

「じゃあ行こう。いますぐ行こう」

移動中

「きゃあー!!!!
!!!!」

「小猫ちゃんとゼノくんが一緒に!!!」

「まさにロリ×シヨタこと小猫ちゃん×ゼノくんよ!!!!」

周りから女子達の的にされ小猫は赤面し、ゼノは少しイライラしていた。

ゼノは少し腹が立ったのか威圧し喋っていた生徒を気絶させた。

「そういえばゼノさん。この前言っていたピザは…………」

小猫はモジモジとしながら尋ねてきた。するとゼノは思い出したのか持っていた袋の中から余ったピザ一枚を小猫に差し出した。

「ほれ、テリヤキチキンピザ」

「ッ！ありがとうございます」

小猫はテリヤキチキンピザを貰うとすぐく目を輝かせた。

「あとゼノ先輩…あの時、神父から守ってくれてありがとうございます
す」

突然のお礼 それにゼノは少し戸惑いながらも返した。

「あくそれはー…………… たんに…………… たまたまただけだから」

「…………… 誤魔化すの… 下手で

すね」

「…ま、まあ単純に無事で良かったという事だ」

ワシヤワシヤ

そう言いゼノは小猫の頭をワシヤワシヤと撫でた。

「ニヤツ!？」

「ほら、早くいくよ」

「むうー…………… (なんで私と同じくらいの背丈なのに二つ年
上なのだろう)」

そうおもいながらも小猫はゼノと共に旧校舎へと向かった。

ガチャン

「部長、連れて来ました。」

「ありがとう。これで全員揃ったわね！」
すると皆の手にガラスコップが行き渡った。

「では、アーシアとゼノの入部を祝して!!」

「!!」
「乾杯ー!!!」
「!!」

こうしてゼノとアーシアはオカルト研究部へと入部したのだった。

「(はあく…眠いし退屈だし、今やってるの一年前にマスターしたし…どうしよ…あ!)」

ゼノは何かを思いつき、隣にいるリアスをつついた。

「なにかしら? (小声)」

「授業つまらんから抜ける。ちよつと誤魔化しといて… (小声)」

「え!?!ちよつとまつ…」

ガタンツ!!

リアスの制止も聞かずにゼノはその場から消えた。

「え…!?!消えた!?!」

突然、ゼノが消えたことによりリアスは驚きの余り静かな空気の中、声を上げてしまった。

「ん?何かありましたか?リアスさん?」

「え…あ!いえ!何でもありません!」

「そうですか。ん?あれ?黒崎くんがいませんね?」

「あ!ええと!!お腹が痛いから保健室に行くと言っていました!」

「そうですか。では、授業に戻ります。次のこの問題は…」

「(今のは…一体何だったの…?転移?いや、ゼノは人間だから出来ないはず…だとしたら何だったのかしら…)」

ゼノside

俺は授業を抜け出し、校内を歩いていた。そして、しばらく歩いてみると、妙な扉を見つけた。

「ん？」（『生徒会室』？何だ？この部屋。ま、他の奴が寄り付かんとこだし、入ってみるか。）

そう思った俺は扉を開け、中に入ろうとした。が

ガチャ　　ガチャ

鍵が掛けられていた。

「はあ…メンド」

鍵を開けるのも面倒だったから針金を押し込んで鍵を開けようとした。

ガチャン

ギギギギギ……………

「ん？開いた」

そして、中に入るとそこには広い空間があった。多分とは思うがリアスの部室よりも広い。そして何よりもオカ研部室よりも質が良さそうなソファもあつたのだ。

そんな中俺は置いてある一つの机に目が入った。そこには多くの書類が積まれており、ファイルなども多く重ねてあつた。その重ねられている一枚の紙に俺は目が入った。

その紙の文字は何か筆記体の様な感じで書かれていた。そして、下の行に書かれている名前に目が入った。

「ソーナ・シトリー？」

そして、その名前で俺は思い出した。ソーナと言えば最初に俺に接触してきた生徒会長。その時は確か『支取蒼那』と名乗っていた。が、まさか偽名を使っているとは……

そんなことは今の俺にはどうでもよかつた。取り敢えず……

「ふわあぁ〜!!!」

眠い

なので近くにあるソファーに俺は寝っ転がった。

(ふう〜……………フカフカして気持ちい〜……………しばらく寝よ……………)

そして、俺の意識はそこで落ち、爆睡状態となった。

—————

「……………ださい……………ください……………起きてください!!」

「…ん……………?」

突然俺は誰かの声で目覚めた。

「ふわあぁくん……………誰?」

「忘れたのですか?!生徒会長の支取蒼那です!!」

「あー……………んで何やってんだ?」

「それはこちらのセリフです！一体何故君がここにいるんですか!？」

「ん？事前に転入するってリアスから聞いてないのか？」

「そういうことではなく!!何故君が生徒会室で寝ていたのかという事です!!一体どうやって入ったんですか？」

「いや〜眠かったからいい場所ないかな〜と歩き回ってたら面白そうな扉見つけて入ろうとしたら 鍵が掛かってたから、持ってた針金でカチャツと」

「はあく……………次からはむやみに入らないようにしてください……………」

「フン。わかったよ。シトリー家次期当主『ソーナ・シトリー』」

「な……………!!何故……………それを……………!!」

「あそこに置いてある書類見りやあ分かるって。しかももう気配でバレバレだしな」

「!!!」

「それに、リアス達以外の妙な気を察するとあんたらのメンバーも悪魔だろ？」

「……………そうです。私達は昼は生徒会、夜はシトリー眷属での活動をしています……………」

流石にバレたのかソーナは悪魔であることを告白した。

「ま、安心しな♪他言はしないから♪」

「……………お願いします……………」

「ほんじゃ。俺は戻るよ。あと、この部屋のソファ―気に入っちゃった♪また来るぞ」

「やめてください」

「あはは♪断る」

バタン

そう言い終わるとゼノは生徒会室を出て行った。

(リアスからは聞いていましたが…まさか生徒会まで悪魔であることを気付かれるとは…彼は一体…)

戦闘校舎のフェニックス 不死鳥現る

ゼノとアーシアが転入してから数日。アーシアはクラスの桐生という女子の仲介もあつてか何人かの友達に恵まれると共に端麗な容姿から人気者となつており無事に学園生活に馴染めていた。

その一方でゼノは容姿の為にあまり高校生としては見られず小猫と同じマスコットとして見られている様だ。

そんな日が続いたある日の放課後

ゼノはアーシア、木場イツセーの4人と共に旧校舎へと向かつており、イツセーは何か素朴な疑問を抱いているのか、木場へと尋ねていった。

「部長の様子がおかしい？」

「ああ」

イツセーから聞いた話に木場は首を傾げるとイツセーは続けた。

「お前なら何か知つてんじゃないかな〜つて」

「部長のことなら朱乃さんに聞くといいよ。あの人は部長の懐刀のような人だからね」

そんな中であつた。

「さつきから妙な気配が感じれるな。人間とは違って、お前ら悪魔特有の奴よりも結構 濃い」

ゼノは旧校舎の中から感じ取れる悪魔特有の気配に疑念や抱き木場へと尋ねた。

それに対して、木場は今になってようやく感じ取れたのか額から冷や汗を流した。

「流石ですね先輩…僕はここに来て初めて気配を感じましたよ…」

「な…なあどういう事だ…？」

――

――

――

それから4名は旧校舎へと入ると扉を開けた。

ガチャン

「ちわーす」

一誠達が入るとリアスや朱乃の近くにはメイド服を着こなした銀髪の女性が立っていた。初めて見るその人物を不思議に思ったゼノはリアスに尋ねる。

「誰だ？」

すると、銀髪の女性はゼノへと近づき軽く頭を下げた。

「初めまして黒崎ゼノ様。私はグレモリー家でメイド長を務めさせていただいております。グレイフィアと申します。以後お見知りおきを」

「どうもご丁寧に…黒崎ゼノだ…です」

それから部員の全員が集まるとリアスは目を変えた。

「全員揃ったわね。」

「お嬢様、私がお話しますが」

「いいえ…自分で話すわ。実は」

グレイフィアを手で制したりリアスは話を切り出そうとした。

その時だった。

「「「?!」」」

部室の中心に魔法陣が現れると共にその魔法陣から炎が渦のように吹き出した。

「あっつ!?!」

突然の超常現象にイツセーやアーシアは驚いた。そんな中 木場はその魔法陣を見て何かを思い出したかのようにゆっくりと眩いた。

「フェニックス…」

すると、更に勢いを増していくその炎の中心から胸元を開けたスーツを着こなすワイルドな風貌の男性が現れた。男性が手を薙うと炎が一瞬にして空気へと溶けるようにして消えていく。

「ふう…。人間界は久しぶりだな」

その男は部室の空気を一息吸うとこちらへとゆっくり振り向いた。「会いに来たぜ愛しのリアス」

突然現れた男性にイツセーは驚いた。

「え…愛しのって…」

「この方はライザー・フェニックス様。フェニックス家の御三男であり、次期グレモリー家当主の婿殿。すなわち、リアスお嬢様のご婚約者であらせられます」

「えええええ!？」

—————

それから現れたライザーはリアスと同じソファアに座り込む。

「いや〜リアスの女王が淹れてくれたお茶は実に美味だね」

「痛み入りますわ」バキツ

リアスの体に触れながら茶を飲むライザーの言葉に、お茶を振舞った朱乃は軽く会釈すると下がる。彼女の様子からするとあまり快く思っていないようだ。

「朱乃さん…怒ってます…?」

二人に気づかれない声量でイツセーが尋ねると朱乃はニコニコとしながら答えた。

「いえ。滅相ありませんわ」

「いや、でもさつき何かバキツて…」

「水に氷を入れた時に割れる音がしますよね？」

「あぁ〜!…いや、それとこれとは全く関係ない音だった気が…」
「でも他に考えられないじゃないですか」

「そうですかね…」

その時であった。

「いい加減にしてちょうだい！」

我慢の限界にきたのか、ライザーの手を振り払いリアスは立ち上がる。

「以前にも言った通りあなたとは結婚しないわ！相手は自分で決める！」

「だがリアス、君のお家事情はそんなワガママが通用しない程詰まってると思うんだが？」

「家を潰すつもりはないわ！婿養子だって迎え入れるつもりよ。だから私は私がいいと思つた者と結婚する…だからもう一度言うわ…貴方とは結婚しない！」

そう言うライザーと呼ばれた男はリアスの顎を掴み睨んだ。その目には燃え盛る炎が映し出され魔力も感じ取れた。

「俺もな…リアス…フェニックス家の看板背負ってるんでね…名前に泥をぬられるわけにはいかないんだ…！」

その言葉と共に彼の背中から炎が溢れ出した。

「それにこの人間界の風や炎は汚い。それらを司る悪魔としては耐え難いんだよ…！」

すると溢れ出した炎は更に激しさを増していき部室全体を覆った。

「俺はたとえ君の下僕を全部焼き尽くしてまでも冥界に連れて帰るぞ…!!」

「やってみなさい。容赦しないわよ？」

ライザーの身勝手な行為に対しリアスも限界なのか自臨戦態勢へと入り体から紅い魔力を放出した。

だがその行いがこの場で一番目覚めさせてはいけない人物を目覚めさせてしまった。

「うるさいなあ…」

ゾツ…!!!

二人が戦闘態勢に入った時その場をとてつもない殺気が覆った。ライザーは冷や汗を流しその殺気の根源へ目を向けた。

「さっきからごちゃごちゃと…全然眠れねえじゃねえか…」

その殺気の正体はゼノであった。ゼノは気持ちよく寝ていた時にリアスとライザーの自分にとつてはくだらない言い争いに耳を攻撃され 腹が立っているのだ。

「に…人間!?何故ここに人間が!?貴様…!!いつからそこに居た!」

「え?ずっといたけど…?まさかとは思うが…俺が寝ていた事に気付かなかったのか?バカだな。目玉腐ってんのか?」

「なんだと…!?!」

ゼノは昼寝の邪魔をされた仕返しとして小馬鹿にする。すると頭にきたのかライザーは炎を自身に纏わせゼノを睨んだ。

「貴様…人間の癖に随分な口ぶりだな!まずお前を先に焼きつくしてやろう!」

「意外と短気だな」

「黙れ!」

ゼノの言葉にライザーは先程と同様に炎を纏わせながらゼノに目掛けて放とうと構える。

その時であった。

「お納め下さいませ。ライザー様、ゼノ様」

突如としてライザーの前にグレイファイアが立ち塞がる形でその動きを止めた。ライザーの動きを止めたグレイファイアは彼のみならず彼の目の前に立っているリアスにも目を向ける。

「そしてお嬢様も。私はサーゼクス様の命を受けてこの場におります故、一切の遠慮は致しません」

「…!?!」

その言葉と共にグレイファイアの全身からはライザーを上回る魔力が放出され、その場に立っていたゼノ以外の全員を震撼させる。それ

はライザーも例外ではなく、その顔からは先程の怒りが消え去っており、代わりに微量の冷や汗を流していた。

「く……最強の女王と称される貴方にそんなこと言われたら流石に俺も怖い…バケモノ揃いであるサーゼクス様の眷属を敵に回したくありませんしね。おい人間！命拾いましたな！」

「はいはいそうですね。命拾いましたね」

「腹立つツツ!!マジで何だコイツ!?!」

グレイファイアの介入によってゼノは興が覚めトボトボと後ろへと戻りライザーの声にも適当に返す。

そんな対応にライザーが再びキレ始める中、グレイファイアは続けた。

「旦那様方もこうなる事を予想されておられました。よって決裂した場合の最終手段を授かっております。」

「最終手段?」

「お嬢様がそれほどまでに御意志を貫き通したいのであれば、ライザー様とレーティングゲームで決着をと」

「レーティングゲーム」とは爵位持ちの悪魔が自分の下僕を戦わせるというゲームである。

その提示された手段にライザーは鼻で笑う。

「俺はゲームを何度も経験してるし勝ち星も多い。君は経験どころか公式のゲームの資格すらないだろう?あと、一応聞くけど君の下僕はこれで全てかい?」

「ゼノは違うけど、だとしたらどうなの?」

リアスが答えるとライザーは指を鳴らした。

魔法陣からまた炎の渦が噴き出しその中から15人の少女達が現れた。おそらく彼女らがライザーの下僕なのだろう。ライザーを合わせ16人に対しリアスは5人、圧倒的に不利である。

「美少女ばかり15人だと……!?なんて奴だ…何て羨ましい奴なんだ!!」

ライザーの眷属が自分の夢の形である事にイツセーは泣き出してしまった。

「お…おい…リアス…この下僕君…俺の眷属を見て号泣してるんだが…」

「その子の夢がハーレムなの…きつとライザーの下僕をみて感動したんだわ…」

イツセーのその様子に流石のライザーも予想外であったのか、若干ながら引いており、リアスも呆れ果てていた。さすがにハーレムを見た途端に憧れるどころか泣き出すのは普通の人から見ると気持ち悪いだろう。

それに同意するかの様にライザー達の眷属も嫌悪感を露わにしてドン引きする。

「き…キモいですわ…」

「ライザーさま！その人キモい!!!」

すると相手側の眷属達も引いたのか次々と野次を飛ばしイツセーの精神へと攻撃してくる。

「そう言うなお前達。おいユーベルーナ」

「はい」

それを見かねたライザーは自分の女王である眷属を呼んだ。答えた女性は露出の多い衣装かつ豊満な胸を持つスタイリッシュな女性であった。するとライザーはその女性の顎を持ち上げると
デープキスを始めた。

『!?!』

辺りにはお互いの唾を交換しあう生々しい音が響いた。

「くううう…!!デープキスだと!?!」

「はあく…」

イツセーは何故か涙を流しておりリアスや朱乃は目を逸らしていた。そしてゼノと小猫に至っては……………

「小猫……………鬼太郎袋を…」

「……了解　！（シヤキツ！）」

何故か袋を用意し、その中に二人で顔を入れた。そうしてる合間にもディープキスはまだ続いていた。

そして小猫とゼノは一斉に……

「うおおおおおええええええええええええええええ………！！！！」

吐いた。

そしてディープキスが終わるとその女性の胸などを揉み始めた

「お前じゃこんな事一生できない。下級あゝ……」「うおおおええええええええ………！！！！」

「だ………！！！！」

「だ………！！！！」

「だ………！！！！」

「何!!俺が気色わるいだと?ぐううう……!!」

「それに汚いとかお前が言うなよ……ぐぶう……あんなもの見せたお前が……」

「……ぐぶうえ……」

ゼノのその言葉にライザーはまたしてもブチギレた。

「く……!!貴様アアアアアアアア……！！！！」

「おやめください……！！！！」

咄嗟にグレイファイアが止まるとライザーは「ツチ」と吐き捨て炎を収めた。

「朱乃……二人をお願い……」

「はい♪　ガチャン

ライザーの流れをぶった切られてスッキリしたのか朱乃は笑顔のまま二人を洗面所へと連れて行った。

数分後

朱乃達が戻りライザーの機嫌が直ると話は再開された。

「同じことを言うが……お前では一生かかってもできないなあ?こんなこと……」

その言葉にイツセーはキレた。

「くっ…うるせえ!!!そんな調子だと部長と結婚しても他の女の子といちやいちやる気だろ!!この種まき焼き鳥野郎!!!」

「貴様…自分の立場を弁えて物を言っているのか?」

「知るか!!俺の立場は部長の下僕ってだけだ!!!」

そう言いと一誠は神器を展開させた。

「ゲームなんて必要ねえ!!全員この場で倒してやる!!!」

「馬鹿野郎。今のお前じゃ誰にも勝てねえぞ」

「うるせえ!」

ゼノの引き止めも聞かずイツセーはライザーへと向かう。

「ミラ」

「はい」

するとライザーは自分の下僕から小柄で棍をもった少女を呼び出した。呼び出された少女は俊敏な動きでイツセーの前に現れた。そしてその棍で一誠を天井へと叩きあげた。

「ガハアツ!」

「イツセー!!!」

床へと落下したイツセーをリアスはすぐさま抱き抱えた。

「ぶ…部長…すいま…せん…」

当たり前どころが悪かったのかイツセーはその場で気を失ってしまった。

「フンツ。凶悪にして最強と謳われた赤龍帝の籠手（ブーステッドギア）の使い手が、こんなくだらない男だとはな。 ついでだミラ!!

あの人間もやれ!」

そう言うときミラは先程よりも速い動きでソファアに座っているゼノに向かい棍を叩き込んだ。

だが、その判断は間違っていた。

ドオオンツ!!!

その音が聞こえたと同時にライザーは顔を上に向けながら笑っていた。

「ハハハ愚かな人間め。どうだ？俺の眷属の力は？」

そう言いライザーが顔を正面に向けた時だった。

ライザーの横を何かが通り過ぎ後ろの壁へと激突した。

「え…？」

ライザーは何が通過していったのかを確認するためゆっくりと振り向いた。そこには深い全身打撲を負った眷属の姿があった。

「ミラー！」

彼女の身体に深い損傷は無いが、それでも、魔力が完全に尽きている上に、一週間は安静にしなければならぬ程だった。

ライザーはゆっくりとゼノへ振り向いた。

「貴様…人間にしては中々やるな…俺の眷属を倒すとわな…」

ライザーはゼノを称賛するが、ゼノにとっては、ただの『掃除』に過ぎなかった。

「は？そんな雑魚1匹寄越したぐらいで中々やるとか悪口でしかねえよ」

「何だと…？」

ゼノの挑発的な言動にまたしてもライザーの額に青筋が浮かぶ。

「だったら…俺が直々に相手をしてやるお…!!」

「初めからそうしろ」

そう言いゼノは手で誘う。するとライザーは炎を自身の右腕に螺旋状で纏わせゼノに向かって走ってきた。

「おやめくだ…「引っ込んでろ…!」!？」

グレイフィアは咄嗟に止めようとしたがゼノの威嚇混じりの声により硬直してしまった。

そしてライザーはゼノへ向かって炎を纏った拳を放った。

だが、その動きはゼノにとって、ハエが止まる程のスピードであった。ゼノはゆっくりとその炎を纏った拳を避け胸元に入り込むところからライザーの頭を鷲掴みにした。

そして

ガアアアアアアンツ!!!

その音と共にライザーの頭を床へと叩きつけた。

ゼノにとってはまだまだ抑えたものの周りから見れば床が深く陥没しておりその中心ではライザーが意識を失いかけていた。

「「「「.....」」」」

「遅い攻撃だな。あくびがでたよ。これで上級？ハツ。笑える。さて.....」

『!?』

ゼノはライザーの頭を踏みつけながら眷属へと目を向けた。

「お前らはどうする？なんならこの場で全員まとめて相手してやるぞ？」

そう言い目を鋭くさせるとライザーの眷属達を睨んだ。全身から発せられる黒い殺気の濃度は相手の女王 騎士 戦車に冷や汗を出させて兵士や僧侶は腰を抜かしていた。

グレイファイアも止めようとしたが『止めたら殺される』という衝動に駆られ動こうにも動けなかった。

すると、ゼノの殺気が突然 消え緊張感が漂う空気が晴れた。

「ま、いいか。お前らとやっても楽しくないし」

そう言いゼノはライザーを下僕の方へと投げ捨てた。そして眷属達は急いでライザーを介抱した。

「に.....人間.....め.....!」

ライザーは顔から血反吐を吐きながらゼノへ指をさし ゆっくりと口を開いた。

「よ.....よくも上級であるこの俺にこんな真似を.....! 貴様もだ! 貴様もゲームに参加しろ.....! そこで必ず殺してやる.....ツ!」

それだけ言うとライザーは意識を失った。

ゼノはため息をつくはずっと部屋の隅にいたグレイファイアへ顔を向けた。

「……と言われたけど、人間の俺は参加できるのか？」

「え……あ……はい。助っ人という形であれば可能です。ゲームは10日後となります。よろしいですか？お嬢様」

「ええ……いいわ」

「で……ではご両家には私がお伝えします」

そう言うライザーの眷属とグレイフィアは魔法陣で転移して消えていった。

黒猫との別れ。そして修行の始まり

その夜

ズ〜

「ただいま〜」

ゼノはバイトを終えテントへと帰って来た。

「あれ？」

いつもとは違う雰囲気、ゼノは不思議に思っていた。

いつもなら黒歌が「おかえりニヤ！」と言って迎えてくれるのだが、今日は何故か迎えてはくれなかった。

「何だ？　　黒歌の奴、出かけてるのか？」

そう言いゼノは周りを見回した後、テントの中を見ると一枚の紙切れに目が止まった。

「？　　手紙？」

よく見るとそれは自分宛に書かれた手紙であった。文字をよく見ると黒歌である事が分かる。

ゼノはそれを取り出し、読み始めた。

『ゼノへ』

『短い間だったけど、私と一緒にいてくれてありがとう。ゼノがいない間、私は考えたの。はぐれの件は自分で何とかするしかないと…、だから 私は自分なりの方法で頑張ってみます。勝手な旅立ちを許してほしいです。』

でも、ゼノがあの時言ってくれた言葉は本当に嬉しかった。

あんな事を言ってくれたのは君が初めてだった。

最後になるけど、私はゼノの事が大好き。

今まで本当にありがとう。』

『黒歌より』

ゼノがその手紙を読み終え外を見ると雨が降り始めた。テントから出ると雨に濡れながらも空を見上げた。

「…自分なりに…か」

—————

「本当にいいのですか？」

「うん。もう決めたから…」

駒王学園から遠く離れた街全体を見渡せる山にて黒歌は雨にぬれながら、ゼノと共に暮らした森を見ていた。

「では行きましょう。付いてきてください」

メガネをかけた貴族のような男性は剣を振るった。すると空間が裂け男性は中へと入る。

「じゃあね…ゼノ」

黒歌は振り返りただそれだけ言うと男性の後に続くように空間の中へと消えていった。

翌朝

今日は休日であり、それが分かっていたゼノはずっと寝ていた。

すると

ズ〜…

誰かがテントを開きゼノを揺さぶった。

「起きてください」

「ん……………？……………なんだ……………？」

ゼノを揺さぶったのは

「朝ですわよ」

駒王学園の学園二大お姉さまこと姫島朱乃だった。

「え…？…だって今日から休日の筈じゃ？」

「うふふ。レーティングゲームに向けてしばらくは部長の別荘で修行をするそうですわ」

「つたく……………めんどくせえなく……………」

そう言いながらゼノは起きて自分の髪型を整えた。

「そういえば、ゼノ君は何故いつも三つ編みなのですか？」

「ん〜…動きやすいからかな」

「成る程」

「ん……………？……………ちよつとうまくいかないな…。朱乃、手伝ってくれる？」

「はい」

その後、2分程朱乃に三つ編みを手伝ってもらったのである。

ゼノ side out

それから時間はたち

ゼエ…ゼエ…ゼエ…ゼエ…

現在俺こと兵藤一誠は…山道を登っていた…。しかも…めっちゃ重い荷物を持って…

「ゼエ…ゼエ…ゼエ…ゼエ…ゼエ…」

「ほらイツセー、頑張りなさい。」

「はぁ…い…部長…て言うか、俺ら何で山道登ってるんですかね〜…」

「忘れたの？10日後はライザーとレーティングゲームよ。だからそ

れに備えて修行する為今私の別荘に向かつてるんじゃない」

「あゝ…確かそうでしたな〜…」

確かに俺は弱い…

この前俺を倒した女の子…あ

の子は多分あいつの下僕の中で一番弱い…それに負けただってことは俺には修行が必要だったってことか…

と言うか…

「はあゝ…楽チン楽チン♪」

「なんでオメエが乗ったんだよおおおおおおお
!!!!!!!!!!!!!!

しづみへんこつて

「や……………やっと着いた……………」

模擬戦

「や……………やっと着いたく……………」

一誠が着いた時にはもうヘトヘトであり完全にバテようとしていた。

「じゃあ中に入って着替えてすぐ修行を始めましょ」

「え!? すぐ修行!? やっぱり部長は鬼ですか!?!」

「悪魔よ」

そう言いリアス達女子陣は中へと入っていった。

「それじゃあ僕も着替えようかな」

そう言い荷物を下ろした裕斗も着替る為に部屋の中へと入っていった。

「覗かないでね?」

「ぶち殺すぞ!!! 木場!!!」

「俺の方も覗くなよ?」

「オメエもか!!!」

そんなやり取りをしていながらもその後すぐ着替え終わった一回は庭へとでた。

「さて、全員揃ったところで、ゼノ」

「ん?」

「まず、裕斗と模擬戦をしてみて頂戴」

「なんでだ?」

突然の模擬戦。何故木場を選んだのかは不明だが、自身を指名したリアスにゼノは首を傾げる。

「貴方の戦闘スタイルをもう一度見ておきたいの」

「…わかった」

ゼノは承諾すると肩に手を置きながら左右に捻り裕斗へと目を向けた。

「お前とやるのは初めてだな」

「ええ。お手合わせよろしくお願いします。先輩」

因みにゼノが入学した後からイツセーはともかく木場は敬語を使うようになった。木場は神器を発動させ木刀を生成すると構えた。

「なんだ？木刀か？」

「ええ。模擬戦なので」

「成る程」

ゼノは剣ではなく木刀で来ることに不満でありながらも承諾した。まあゼノにとっては剣も木刀も変わらない。

「先輩は武器無しでいいのですか？よかったらお作りしますよ？」

「いらん。さあかかって来い」

そう言いゼノは裕斗に向けて仰ぐように手で招いた。それに乗る裕斗はゼノに向かって駆け出すと木刀を水平に持った。

「それじゃ…行きますよ！」

シユンツ！

裕斗は一步を重く踏みしめると騎士の特性である速さを生かしその場からスピードを格段に上げながらゼノに向かった。

木場は正面からだとながれる可能性があると予想し直前に横へ横へと高速移動をし背後から攻撃を仕掛けた。

ゼノはまだ正面を向いたままであり、これは好機だと思った木場はそのまま木刀を振り落ろす。

だが、

「…!?!」

振り下ろした直後。まるで見えているかのようにはゼノの腕が動き出し木刀の振り下ろしを防ぐようにして掴んだ。

「な…!」

木場は何も喋れなかった。ゼノの視界の外から攻撃を仕掛けた筈なのにまるで読まれていたかのようなようだった。

リアス達も目を丸くしていた。

「驚いたわ…視界外からの祐斗の攻撃をあんな容易く…」

「はい…そしてあの動き…まるで最初から読んでいたかのようにでした」

一方で木場の背後からの攻撃を掴んだゼノはそのまま持ち上げると前に放り投げた。

「ほいっと」

「くっ…」

木場は着地すると悔しいのか口を噛み締めながらも、ゼノの様子を伺っていた。

それに対してゼノは目の色を変え木場を睨んだ。

「次は俺の番だな」

その瞬間

ゼノの姿がその場から消えた。

「ツ…どこにツ！「後ろだ」 ツ!!」

その声と共に “何か” が木場の背中に指を立てた。

それと共に木場は自分の心臓が貫かれたかのような感覚に陥った。恐る恐る振り向くとそこには怪しい笑みを浮かべているゼノの姿があった。よく見ると背中の心臓が位置する場所に人差し指が突きつけられていた。

「さて、まだやるか？」

ゼノの言葉に木場は「完敗です…」と返す。その言葉を聞いたゼノは人差し指を離し、ポケットに手を入れた。

リアス達は木場の身に何が起こったのか分からなかった。

そしてゼノはリアス達に近づき

「じゃあ俺の力量も分かった事だし修行始めるか」

修行開始！

裕斗とゼノの模擬戦が終わったあと、ついに一誠の修行が始まったのだ。

ステップ1

まずは裕斗の剣術講座

「でやああー!!!」

一誠は裕斗に向かってがむしやらに剣を振っていた。対して裕斗は無駄のない動きで一誠の剣をうけながしていた。

「そうじゃない。剣の動きだけでなく、相手と周囲を見るんだ。」

そう言い裕斗は一誠の剣をはたき落した。

ステップ2

今度は朱乃からの魔力講座だ。

「魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集まるのです。」

そう言われた通りに一誠は手を前に突き出し魔力を手に集中させた。

「意識を集中させて…魔力の波動を感じるのですわ…」

「そう言い朱乃は一誠の手を指先へとなぞった。
「出来ました!!」」

以外にもアーシアは魔力が高いのか一誠よりも早くコツを掴み、緑色の球体を両手で生み出していた。

「うお！すげえー！アーシア!!」

「あらあら、アーシアちゃんは魔力の才能があるのかもしれないね」

悪魔になってから間もないアーシアの才能に流石の朱乃も驚いていた。

一方でゼノは目力だけで球体にするのではなく破裂させていた。

「ま…マジかよ…」

「あらあら」

「ほわ〜」

突然の超常現象に皆は目を丸くしていた。

「今のはどうやったのですの?」

朱乃はゼノに尋ねるとゼノは手から光の玉を生み出した。

「身体中に回るエネルギーを目に集中させてたのさ」

「ちくしょー！俺だって!」

そして一誠は悔しいのか集中して集めた結果、出来たはできたがアーシアより球体が小さかったのだ。

「慣れれば何もないところから水や雷を生み出すことができるのですよ」

「そう言い朱乃は水の入ったペットボトルを破裂させ、飛び散る瞬間に中の水を凍らせた。」

「アーシアちゃんは次にこれを練習してください」

「はい!」

「じゃあ朱乃の やつみたいなのやってみるか」

そう言い、ゼノは、ペットボトルに人差し指をだしトンツと小突いた。
すると、

シヤアア〜…

一瞬光ったかと思うとペットボトルが瞬時に形を失い砂となった。

「!!!」

「誠、アーシア、朱乃は驚いた。ゼノは悪魔でもないし只の普通の人間だ。だが触れただけで砂にする、上級悪魔でも出来ないことだ。

「ペ……ペットボトルが……」

「砂に……!」

「しかも……エネルギーを全く感じませんでしたわ……ゼノくん……一体なにを……」

「ん？昔師匠に教えてもらった。原理はよくわからん」

「お前の師匠って一体何者なんだよ……」

「うーん……結構厳しい人だね……。何回も死にかけたよ」

「お前の師匠って悪魔なのか？」

「だから前に違うって言っただら？俺の師匠は悪魔でも墮天使でも天使でもない、結構規格外なんだよ」

「だからどういう」ほら、授業をサボらない」まったく分かったよ」

ゼノに疑問を抱きつつも一誠は受講を続けた。

普通に躲され蹴られそのまま足で首を締められてしまった。

「打撃は体の中心線を狙って、的確かつえぐりこむように打つんです。」

「分かった!!分かったから!!ほどいて!!!」

そう言われた小猫は一誠を離し、次に端で見ていたゼノの方を向いた。

「次はゼノ先輩です」

「そうか」

そう言われたゼノはその場所から宙返りすると小猫の前へと着地する。

「行きますよ?」

「来い」

小猫は戦闘態勢を取ったがゼノは手を後ろに組んでいるだけである。小猫は不思議に思い尋ねる。

「……なんで構えないんですか?」

「別にいいだろ?掛かってきなよ」

小猫は言われた通り拳を構えてゼノへと向かった。

「えい!」

小猫は拳を振りかぶり右ストレートを放った。対するゼノはそのパンチを人差し指で受け止めた。

「!!」

「な!!小猫ちゃんのパンチを!!!」

「どうした?一発だけか?」

「まだです……!」

続いて小猫は左ストレートを放つ。だが またしても指で塞がれ

る。小猫は次々とパンチや蹴りを放ったが全て人差し指一本で塞がれていた。

小猫は距離を取り後ろヘジャンプした。対するゼノは涼しい顔から一言。

「小猫、まずはお前の全力で殴ってみなよ」

「言われなくても行きます!!」

そう言う和小猫は渾身の一撃をゼノへと放った。

小猫の渾身の一撃は見事にゼノにヒットした。

だが、受けたゼノはピクリとも動かなかった。

「な…!!!」

「マジかよ!!!小猫ちゃんの本気の一撃を生身で!!」

自分の渾身の一撃が効いていなかったことに小猫は戸惑いを隠せなかった。

「さてと、小猫、受けてみて分かったけど、確かにお前のパンチは強い。けど少しの欠点がある」

「欠点…とは」

「まずは連打。さつき受けてみたけど狙う所が曖昧すぎる。だから相手の体のどこかの一箇所を集中して狙った方がいい」

「なるほど…」

ゼノに指摘された小猫はどこから取り出したのかメモ帳に言われたことをメモした。

「あとは『殺意』だ。」

「殺意…ですか?」

「ああ。連打は、相手を仕留めるため、一発一発殺意を込める。」

「なるほど…勉強になりました。」

「よろしい」

ワシヤワシヤ

「ニヤニヤ!？」

小猫の返事にゼノは気に入ったのか、小猫の頭をワシヤワシヤと撫でた。

「や…やめてください／＼／＼」

撫でられた小猫は赤面していた。

そして撫でられた小猫はゼノの方へと向き直ると

「ゼノ先輩…時折また指導してくれますか…?」

「ん?何でだ?」

「私は、部長に救われ眷属となりました…なので…私は部長のために…レーティングゲームに勝つため…強くなりたいんです…!!」

小猫はゼノに向かって自分の覚悟を表した。

そしてゼノはしばらく黙ると真剣な眼差しで小猫を見つめ

「いい覚悟だ…。最初の俺とそっくりだ…。いいよ。いつでもみてやる」

「!!ありがとうございます…!!!」

そう言われた小猫は笑みを浮かべた。

「あのく俺途中浮いてなかった?」

ステップ 4

次はリアスが顧問ようだ。

「次は魔力で使って…」

「料理ですか？」

「そう。できる範囲で構わないわ。」

「あ、そう言えばゼノは？」

「ゼノなら小猫と食材探索に出かけてるわ。じゃ頑張ってるね」

それだけ言うとりアスは去っていった。

一方ゼノは

「ん〜中々見つからないな〜」

夜の森で木ノ実などを探していた。もちろん小猫も一緒に行動していた。

小猫が周りを見ると一本の木に目が入った。

よく見ると何かが引つ掻いた跡のようだ。

「先輩…これ見てください」

「ん？これって熊の爪痕じゃん。」

「そうです。しかもまだ新しいです。まだ近くにいるかもしれない。」

「今夜の夕食発見♪」

「探すんですか？」

「ああ！熊の肉は硬くても酒につければ旨味がまして柔らかくなるよ」

それを聞いた瞬間小猫は目を焔めかせよだれを垂らした。

「探しましょう…!!!でも…どこに…」

「ん〜…」

二人が悩んでいると

ガサガサ!!!

近くの林から物音がした。そしてそこから出てきたのは…

グウ…!!!

体長が3メートルにも達する大型のツキノワグマだった。

「!!!」

そして二人は瞬時にそこを見つけ、よだれを垂らし…

「今夜の晩飯（夕食）――！！！！！！」

一斉に飛びかかった。この時のクマの顔は取り立てが鬼の大家が真夜中に押しかけてきた時の表情だった。

その頃一誠達は

「ん〜、遅いなく二人とも、もう夕食何だけどなく」

探索に出かけた二人を待っていた。

「そんなに心配しなくても、二人なら大丈夫よ」

「ですが、夜の森だとさすがに…」

「あらあら♪今の季節は熊ぐらいしか出ませんので大丈夫ですわ♪」

「熊!?!いや!!それはそれでやばいっすよ!!」

「大丈夫ですわ♪体長が3メートル程ですから」

「大型じゃないっすか!!!」

一誠達がそう話していると

「ただいま〜」

「行ってきました」

二人が戻ってきた。

「おかえりなさい。どうだった？」

「んー、まずまずかな」

「木ノ実が何個かとツキノワグマ一体です」

ドサ

そう言うのとツキノワグマの肉を取り出した。

「あらあら♪」

「うん！大収穫ね！」

「でもよ、俺らがもう作っちゃまったけど、」

「ちよつと失敗しちゃいましたか…」

テーブルを見ると丸ごとのジャガイモが沢山盛られていた。

「つたくしようながないなく、ちよつと待ってろ」

そう言うのとゼノは肉とジャガイモと木ノ実を持って調理場へと向かった。

数分後

「出来たぞ、熊肉のシチュー」

「うおおー!!!ウメエ!!」

「ホント!!美味しいわね!!」

「あらあら、硬かったお肉がこんなに柔らかく」

「ガツガツガツガツ!!!」

皆はゼノが作ったシチューにしたつづみした。小猫はあまりの空腹の為かガツガツと食べていた。

そして食事が終わると

「イツセー、今日の修行で何か分かったかしら?」

「はい…俺が一番弱かったです…」

「確かにそうだけど、貴方の赤龍帝の籠手やアジアの聖母の微笑(トワイライトヒーリング)も貴重な戦力になるわ。相手もそれを理解しているはずだから仲間の足を引っ張らないように最低でも逃げるくらい力はつけて欲しいの」

「了解です…」 「はい」

リアスの言葉に一誠とアーシアは同時に答えた。

「さて、食事も済んだことだし、お風呂に入りましょう」

「お風呂!?!?」

お風呂という単語に一誠は即座に反応した。

「イツセー君、僕は覗かないよ」

「同じく」

「おい！木場!!ゼノ!!」

「あら？イツセー、私達の入浴を覗きたいの？だったら一緒に入る？」

「え!?マジですか!？」

「ええ。私はいいわ。朱乃は？」

「はい。殿方のお背中をお流ししてみたいですわ」

「アーシアは、イツセーとなら大丈夫よね？小猫は？」

「……嫌です……」

「じゃあ無しね」

小猫からあっさり断られイツセーは一気に落ち込んだ。
だが小猫はその直後

「ですが……ゼノ先輩となら……」

「フア!？」

その言葉を聞いた瞬間ゼノは驚愕した。

「な……なな!!何で!？」

「決まりね、じゃあ行くわよゼノ」

「そんなの断じてお断りだ！」

そう言うどゼノは席から降り逃げようとした。

だが

ガシッ

「うふふふ」

またもや朱乃に抱き抱えられてしまった。

「チクショー!!!ゼノの奴羨ましいー!!!」

「あははは、イツセー君、僕が流してあげるから」

「ぶち殺すぞ!!!木場!!!」

そうやり取りしながら一誠達は男湯へと行ってしまった。

「ほらほら、行きますわよ」

「チクショー!!!!」

風呂場にて

ゴシ

ゴシ

ゴシ

ゼノは三つ編みを解き体を洗っていた。

「つたく…何で俺が……」

すると小猫が近くへと寄ってきた。

「な……な！何でこっちに!!」

「背中…流してあげます…」

「……………」

ゴシ

ゴシ

ゴシ

「そういえばゼノ先輩」

「何だ…」

「先輩をここまで育てたお師匠さんってそんなに強いんですか？」

「またか……まあそうだな。めちやくちや強いな。今の俺でも本気を出させるのが精一杯だからな」

「なるほど……終わりましたよ」

「ああ…」

そんな二人を湯船に浸かりながら見ていたリアス達は

「何か兄妹みたいね」

「そうですね。癒されますわ」

「何か感動です！」

そして洗い終わったゼノは小猫と湯船に浸かった。

「ふう〜…」

「気持ちいいです」

ゼノはリアス達とは反対方向を向いて浸かった。

「何でゼノ向こうを向いてるの?」

「いや……………あんたら……………裸だから…」

「あらあら、そうしなくても、見たいなら見てくれても構わないのですわよ」

「／／／別がいい／／／!!」

「イツセーとは正反対ね」

「そうですね。でもそういうところが可愛いですわ♡」

「／／／／／もう上がる…」

朱乃の言葉にゼノは赤面し、湯船から上がり、風呂場を後にした。

その後

皆が寝静まり睡眠していたその夜、
庭から緑色の光が何回も発光していたのだという…

時の界王神

初日の修行から次の日

「……とこれが私達悪魔の歴史ね」

朝のの大広間にて、リアスは部員の皆に悪魔の歴史を説明していた。そしてその説明が終わるとゼノの方を向いた。

「さて、次は貴方の番よ」

皆が一斉にゼノに視線を向けた。

「貴方の師匠の話の話を聞かしてちょうだい」

「……ああ」

それだけ言うとゼノは席を立ち皆の前へと移動した。

「そんじゃあ、教えてやる。俺の師匠のことを。俺の師匠は、『ゼノさーん!!!』
「!!!?!?!」
「!!!?!?!」

突然!その場に誰かの声が空から響き渡りゼノの話の話を断ち切った。皆は目を丸くさせ『どこからだ?』と思い辺りを見回した。

「ツチ…なんだよ界王神様!」

ゼノは返すように空に向かって返事をした。

しばらくして

「リアス、急用が出来た。すまんがゲーム当日まで留守にする。」

「え!?ちよつと!今のな…」

ドンツ!!

リアスが呼び止めようとするもゼノは別荘の窓から外へ飛んで行った。

あとに残ったのは沈黙に包まれたオカ研だけであった。

「何だったんでしよう…今は…」

「分からないわ……」

「とりあえず…修行を再開しましょう…」（界王神って言ってたけど……まさかね…）

リアスはそう思いながらも皆をまとめ 修行を再開した。

—————

—————

—————

界王神から呼び出されたゼノは別荘から遠く離れた平地へと来ていた。

「着いたぞー!」

そう言った瞬間 ゼノの目の前にモヒカンで異形な服を着用した青年が現れた。この青年はここ第七宇宙の最上位に君臨する神 『界王神』である。ゼノがビルスの弟子になってから始めて会った神でもあるのだ。

「んで何だよ、いきなり呼び出してよ」

「それが…:…なんか刻蔵庫の整理が大変らしくて手伝って欲しいとのことです」

「そう言う訳でまたトキトキ都に来て欲しいと?」

「はい…」

ゼノは表情を歪ませた。今から会いに行く人はゼノが過去で会った者の中で1番 苦手とする者であった。

「やだあ……」

「まあまあそう仰らず。では、行きますよ」

ヒュン!!

そういうとゼノと界王神はその場から姿を消した。

「ん〜…何か久しぶりに来たな〜」

ゼノが界王神に連れてこられた場所は緑、そして川が流れており、その真ん中には神社程の宮殿があった。

この場所こそ先ほど界王神の言っていた『トキトキ都』であり、その真ん中にはある宮殿が『刻蔵庫』である。

「では、帰る時は呼んでください。」

「分かったよ」

「では、カイカイ!」

ヒュンツ!!

そう言うとき界王神はもといいた星へと戻り、ゼノだけとなった。
すると

「や〜や〜久しぶりね〜!」

ゼノの背後から活発な声が聞こえた。

ゼノはゆっくりと振り向いた。そこには背がゼノよりも少し高く紫色の肌を持った幼い少女が立っていた。

「ヤッホ〜」

「久しぶりだな…時の界王神…」

この少女こそ、この第七宇宙の全ての時間の流れを司る神、【時の界王神】なのだ。因みにこれは神格であって本名は『クロノア』と言う。

「そんな堅い呼び方じゃなくて普通に『クロノア』って呼んでよ!」

「呼べるか…」

「でも何ヶ月ぶりかしら!!会えて嬉しいわ!!ゼノくん!」

そう言うとき時の界王神はゼノの背中をバシバシ叩いた。

だが、ゼノは時の界王神が苦手なのだ。何故かと言うと、過去のあの件で時の界王神はゼノに惚れてしまい、以来何ヶ月かおきに呼び出

しその度に彼女におもちゃにされているからなのだ。

「いや〜！でも本当に久しぶりね！何ヶ月ぶりかしら？」背も伸びたんじゃない？」

「母親か！…これでもまだあんたより下だよ…と言うかここ数年間身長が伸びてねえよ。ほら、とつとと整理終わらずぞ。要件はそれだけだろ？」

「え？…もう一つあるよ？」

「は？？」

界王神からは聞いていない『もう一つをお願い』それを聞いたゼノは口をガツと開けた。

「もう一つは…」

その瞬間、時の界王神の目が輝き出し、ゼノへと視線を向けゆっくりと近づくと

「久しぶりに抱きしめさせて〜！！！！」

「グヘ!？」

時の界王神はゼノに向かっていきなり抱き着いた。

「ちよ／／／／や…ややややめろ／／！！」

「いいじゃん♪別に！…会える機会は少ないんだから！」

そう言うときの界王神はさらに抱きしめる力を強くした。

「グギギが…：…く…：…：…苦しい…：…締まる締まる!!」

「あ、ゴメンゴメン」

それに気づいたのか時の界王神はすぐに離れた。

「ゲホツゲホツ…：…んな下らねえ事やってないで早く終わらずぞ！」

「はいはいく♪…：…私にとつては下らなくないのに…」

時の界王神は内心ボソツと呟くと刻蔵庫に向かうゼノの後にいつて行った。

その後 時の界王神はテンションが上がったのか仕事へと取り掛かった。

地球

ヒュンッ

「着きました。」

「ああ……界王は今どこにいる？」

「界王様なら大界王星にいらっしやいますが……」

「なら悪いが連れてってくれ」

「はい。分かりました。」

ヒュンッ

そしてゼノは大界王星へと移動したのだった。

ゲーム開始

修行をしてからしばらくして、ついにゲーム当日の日がやってきた。

レーティングゲーム当日の夜、オカ研メンバーは皆部室へと集合していた。ただし、ゼノを抜いて。

「帰ってきませんね、ゼノの奴。」

「どこにいつてるのかしら…。もうゲーム始まつちやうじやない…」
「……遅いです……」

イツセー、リアス、小猫がそう呟く中、皆はゼノの帰還をまっていた。

一方でその本人は

ヒュン

「はい。着きました」

「助かった」

とつくに地球に帰還しており、部室から数キロ離れた森の中にいた。

ゼノはこの期間中ずっと大界王星へと行っていたのだ。

その理由はあるものが欲しかったからである。

「そのリストバンドが必要だったんですか?」

「少しは重りをつけながら戦わないとな。60トンくらいなら丁度いいだろ」

「なるほど。では、私はこれで。ゲーム、頑張ってください」

「ああ」

ヒュンツ

そう言うとき界王神は瞬間移動し戻っていった。

「さて、戻るか」

そう言うときゼノはその場でイツセー達の気を感じ取るとすぐさま瞬間移動をした。

ヒュン

「ただいま」

「遅いわよ！もうすぐ始まるのよ!？」

「ああごめん。それより間に合った?」

「ギリギリセーフってところよ。それより貴方!!今までどこいったのよー!」

「ん?修行しにちよつと遠いところまで」

「だからって!!………まあいいわ………それより、そろそろ時間よ」

そうリアスが言い終わると部室内で魔方陣が現れその中からグレイファイアが姿を現した。

「皆さま、準備はよろしいでしょうか」

「いつでもいいわ」

「では、開始時間になりましたらこの魔方陣から戦闘用フィールドへ転移されます。」

「戦闘用フィールド?」

「何それ?」

イツセーとゼノは二人とも同じ疑問を抱きリアス達に質問すると代わりに朱乃が説明した。

「ゲーム用に作られる異空間ですわ。使い捨てなので、どんな派手なことをしても大丈夫です♪」

「は……派手……ですか……」

「なるほど〜♪」

朱乃の説明に一誠は若干引いていたが、何故かゼノはテンションが上がった。

「ちなみに、この闘いは、魔王サーゼクスルシファー様もご覧になられ

ます」

「そう…お兄様が…」

その言葉に一誠は驚き

「え？あ…あの…お兄様って…」

「部長のお兄さんは魔王様だよ」

「え!？」

その言葉に一誠とアーシアは驚きの声をあげた。

「紅髪の魔王（クリムゾンサタン）サーゼクスルシファー、それが今の部長のお兄さんさ。サーゼクス様は大戦で亡くなられた前魔王、ルシファー様の跡を引き継いだんだ。」

「それで部長さんが、次期当主に…」

「そうだったのか…」

すると部屋に魔法陣が現れグレイファイアが姿を見せた。

「そろそろ開始のお時間です」

ついに対決の時がやってきた。

ゼノとオカルト研究部のメンバーは魔方阵の上に立ち、次々と転送されていった。

そして、着いたのは

「あれ？」

何の変哲もない只のさつきいた部室だ。

「まさか、転移失敗か？」

一誠が困惑していると

「外を見てみなさい」

リアスに言われた通り一誠は窓を開けた。見ると空が変化し、オーロラのような靄が浮かんでいた。

すると、フィールド全体へと放送が流れた

『皆さま、この度、グレモリー家、フェニックス家のご両家から審判役を仰せつかったグレモリー家の使用人グレイフィアでございます。今回のバトルフィールドはリアス様の通う人間界の学び舎、駒王学園のレプリカをご用意致しました。』

「レプリカ？」

「ここは、異空間なんだ。そこに、学園をそのまま再現したんだよ」

「あ……悪魔の力ってどんだけすげえんだよ……」

一誠の疑問に裕斗が答えると一誠はドン引きした。
すると、また放送が流れた。

『両陣営、転送された場所が本陣でございます。』

リアス様の本陣は旧校舎、

ライザー様の本陣は新校舎学長室

よって兵士（ポーン）のプロモーションは互いの校舎内での進入を果たすことで可能になります。』

放送を聞いているとゼノの側に朱乃が来て赤いビー玉のような物を渡した。

「何？これ？」

「戦闘中はこれでやり取りをするそうですわ。ゼノくんもつけておいてください。」

「わかった」

そう言われるとゼノは耳に球体を入れた。

ゴオオオオオン

『それでは、ゲーム開始!』

鐘が鳴り、いよいよレーティングゲームの幕を上げた。

事前にリアス達は、作戦を練り、重要拠点を利用し敵を撃破するという危険を用いた作戦で行くこととなった。

そして、作戦会議が終わると、それぞれの場所へと皆は向かった。ちなみにゼノは小猫、一誠と行動のようだ。

逃げるようにと言われたが本人は聞く耳を持たず、安全確保のため、一誠と一緒に行動させるようにリアスが決めたのだ。

「皆、準備はいい?」

「はい!! (部長)」「」

「ああ」

「では!!! 作戦開始!!!」

ゲーム序盤戦

『ゲーム開始!!!』

合図とともに一誠達オカルト研究部は作戦を開始した。

ゼノと同伴の小猫と一誠は敵を足止めするべく、重要拠点である体育館のステージ裏へと来ていて様子を伺っていた。

その時、小猫が自慢の嗅覚と聴覚で敵の気配を察知した。その瞬間体育館の蛍光灯全てが照明した。

「ここにいるのは分かっているのよ。グレモリーの下僕さん達」

突如として体育館に響く声。

気づかれたのか一誠達はゆつくりとステージ裏から出た。

そこにいたのは4人の眷属。1人目はチャイナ服を纏った少女、もう2人は双子の少女。そして最後の1人はイツセーを一撃で倒したあの少女だった。まだゼノにやられた傷が癒えていないのか、包帯を所々に巻いていた。

「ルークさんと、やたらと元気なポーンさんと人間さんね。私はルークの雪蘭」

「ミラよ。特性はポーン」

「ポーンのイルです。」

「同じくポーンのネルです。」

そして、小猫は発達した感知能力から四人のうちの一人のルークへと最大の危険信号を送った。

「あのルーク…只者じゃない。体術だけなら、クイーンレベルかもしれないですね…」

「ま…マジかよ!?!」

でも!!端っからそんなの分かってたんだ!

boost!!!」

それを聞いた一誠は一瞬動揺したがすぐに調子を取り戻し神器を発動させた。するとゼノは顔を前に突き出し相手を伺うと質問した。「さて、誰がどいつやる？俺はどいつでもいいぞ」

その問いに小猫が答え前に出た。

「イツセー先輩とゼノ先輩はポーンを：ルークは私がやります。特にイツセー先輩はあの『ミラ』という人を：リベンジマッチということ
で」

「分かった」

「よっしゃ！サンキュー小猫ちゃん！」

そして、一誠と小猫はステージから飛び降りそれぞれの相手に対峙した。

一方ゼノはその場からゆっくりとステージを降りるがそれ以降は全く動かなかった。見ているのだ。2人の闘いぶりを

小猫の方はルークと対等に闘っており小猫が優勢と見ていた。

一方一誠は……………

「ハイヤッ！」

「のわっ!!!」

ミラという少女の棍の攻撃を躲しながら逃げて反撃の余地を伺っていた。

「以前よりもしなやかになったな。小猫も格段にパワーがあがっている」

ゼノは二人の闘いぶりを見て楽しんでいた。特にゼノは小猫に関心を寄せていた。自分が教えた事を的確にこなしている。その上パワーも増していた。前回までの小猫のパワーを1とすると4まで上

がっついてはいると確信していた。

「隙ありッ!!」

その時、背後からポーンの二人がゼノに向かって同時にチェーンソーを振り下ろした。

「ん?」

ゼノは寸前のところで跳躍して回避し少し離れた場所に着地した。

「へえ。不意打ちで大声だす馬鹿がここにいたのか。これだから素人は…」

あまりにも戦闘の未熟さにゼノは欠伸を垂らした。

すると不意打ちに失敗した2人はすぐに構え、ゼノに向かってチェーンソーを振り回した。

「バーラバラバーラバラ!!!♪」

「ん?」

ヒュンツ

ヒュンツ

ヒュンツ!!

2人の振り回しすチェーンソーをゼノは最低限の力で躲けていった。何度も何度も斬りかかってくる2人に対しゼノは少しイライラしていた。

「動きもワンパターン…それに遅い…ハッ そんな動きとおもちやで俺を倒そうとしているのか?」

するとゼノは躲すのをやめ その場に佇んだ。

「バーラバラバーラ♪」

すると、好機と見たのか2人は一斉にゼノへと武器を振り下ろした。

その時 ゼノの表情が 変化した。

〃調子にのるなよガキども〃

「ツ……！」

その瞬間 ゼノの体から巨大な空気の波が発生し 至近距離にいた2人は持つていた武器が粉々に粉碎され、そして白目を剥きその場に倒れた。

小猫やイツセー そしてその2人と戦っていた駒達も何が起きたのか理解できなかった。

「イ……イル……？…ネル……？」

「心配せずとも殺しちやいない。気絶させただけだ。それよりもよそ見してていいのか？」

「え？」

ゼノがルークへそう忠告した時

「えいつ」

ドゴン!!!

小猫がルークの顔面にストレートを叩き込んだ。

「グハアツ……！」

そしてルークもその場で倒れこみ小猫に抑えられた。

「ふうく……やりました。先輩」

「やるじゃねえか」

「最低です…」

「なっ!!小猫ちゃん…」

小猫に嫌われ一誠は落ち込んでしまった。その時、リアスからの通信が入った。

『小猫、イツセー、ゼノ、朱乃の準備が整ったわ。作戦通りをお願いね。』

「分かりました！」

「了解です」

「はい」

そう言い3人は体育館の出口へと向かった。

「逃げる気!?ここは重要拠点なのに!!」

その時 体育館の上空に巨大な魔法陣が現れた。

そして

ドシヤアアアアアアアン
!!!!!!!

3人が体育館を出たと同時に巨大な雷が降り注ぎ体育館を吹っ飛ばした。

『ライザー様のルーク一名ポーン三名リタイア』
そして放送が入りライザーの眷属がリタイアしたことが確認された。

「撃破（テイク）♡」

ゼノ達が声のする方向を見るとそこには上空で顔が赤く染まり興奮状態と化している朱乃がいた。

「す……すげえ……」

「朱乃さんの通り名は【雷の巫女】その実力は知る人と知らぬ人とで分かれます……」

「雷の巫女か……あんなのでお仕置きされたら確実に死ぬな……」
その直後、リアスからの通信が届いた。

『イツセー、小猫、ゼノ、その様子だと成功のようね。朱乃が2撃目を放てるようになるまで時間を要するわ。朱乃の魔力が回復し次第、私たちも前に出るわ。それまで各自、次の作戦の行動に出て。』

「了解しました」

「よし！行くか！小猫ちゃん！ゼノ！」

そう言い一誠が近くにいた小猫の肩に手を置こうとした時、小猫はヒラリと避けゼノの後ろへと隠れた。

「触れないでください……」

「だ……大丈夫だよ……味方にはつかわないから」

「それでも…最低な技です。それでは行きましょう。」
「同感だな」

ゼノも納得すると小猫はゼノから離れ、トコトコと次の作戦場所となる運動場へと向かった。

「待つてよ！小猫ちゃん！」

そう言い一誠は小猫を追いかけた。

「やれやれ…めんどい作戦だな」

そして、ゼノも2人の後についてくため足を動かした。

その瞬間 ゼノの足元に巨大な魔法陣が現れた。

「ん？」

どおオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

ゼノが気づいたと同時にその魔法陣が破裂し爆風がゼノの体を包み込んだ。

前にいたイツセーと小猫はすぐさま振り返った。

「ゼノオオオオオオツ!!!」

「ゼノ先輩…！」

『ゼノが？ゼノがどうしたの!!!イツセー!!!!』

「撃破（テイク）」

その時 ゼノが爆発した地点より上空にライザーのクイーン『ユーベルーナ』がこちらを見下ろしていた。

仲間を攻撃されたことに対しイツセーは怒りユーベルーナを睨んだ。

「テメエツ!!よくもゼノをツ!しかも不意打ちなんて卑怯じゃねえかツ!!」

「ゲームに卑怯も何もないわ。これも作戦よ。それにゲーム中の死亡は事故として見なされるのよ。しかもあの坊や、立場を弁えずライザー様に楯突いた、これくらいの裁きは当然でしょ?」

その瞬間 イツセーの目が変わり神器を展開させた。

「降りて来やがれ!俺がぶっ倒してやるツ!!」

「うるさい坊やね。次は貴方達二人を吹き飛ばしてあげるわ」

そう言うとうーベルーナも魔法陣を展開し 先程と同じ魔法を繰り出そうとした。

その時 イツセー達の背後に漂っている爆風が一気に晴れた。

「はあ…どうしてくれんだよ。服が汚れちまったじゃねえか」

イツセーと小猫は一斉に振り返った。

そこには 制服だけがボロボロになり、身体には傷一つなくいつも通りのゼノが立っていた。

「ん?どうした?」

皆が唖然している事に気づくとゼノは不思議に思った。

「先輩…大丈夫なんですか…?」

小猫が恐る恐る聞くとゼノは表情を変えずに

「大丈夫だよ」

そう返す。対するうーベルーナは理解のつかない事で混乱していた。

「あ…あり得ない…あの威力なら中級悪魔でもただでは済まないのに…」

するとゼノは空中にいる見知らぬ相手に気づくと目を細め捉えた。

「今の爆発ってお前の仕業だったのか。中々 いい威力だったぞ。目

覚まし代わりに丁度いい」

「な…なんだと…!?人間ごときめ…ッ!」

ユーベルーナは頭にきたのか魔法陣を展開しはたまたゼノを葬ろうとした。

その時

「あらあら」

ゼノとユーベルーナの間に朱乃が降り立った。どうやら魔力が回復したようだ。

「ゼノ君、ここは私に任せて、お行きなさい。」

「ん?その様子だと魔力が回復したようだな」

そういった途端、朱乃の体から大量の魔力が溢れ出し朱乃の体を包んだ。

「はい。この通り、魔力は十分に回復しましたわ。心配いりません」

「ん〜。ならいつか。」

そう言うとゼノは運動場へと向かった。

「おい!!待てよ!!ゼノ!!」

そして一誠と小猫も後を追った。

そして、皆がいなくなると

「貴方とは一度戦ってみたかったのよ【雷の巫女】さん」

「あらあらそれは光栄に存じますわ【爆弾王妃『ボムクイーン』】」

「その名はあまり好まなくてよ」

2人のクイーンの衝突が始まった。

ゲーム中盤戦

朱乃と別れたゼノ達はグラウンドへと向かっていた。

すると、

『ライザー様のポーン三名リタイア』

別行動をしていた裕斗が誘い出した三名を撃破したのだ。その後、後に裕斗が現れ、一誠達と合流を果たした。

「おっ！木場!!その様子だと作戦成功らしいな！」

「うん。朱乃さんが結界を張ってくれたお陰で何とかね。」

一誠が裕斗と話しているとリアスからの通信が入った。

『小猫！イツセー！聞こえる!?ゼノは無事なの!』

「はい。何とか！今木場と合流したのでグラウンドに向かっています！」

ゼノが無事な事を知るとリアスは胸を撫で下ろした。

『…それじゃあ次の作戦について説明するわね。』

私達はこの後本陣に奇襲をかけるわ。だから、できる限り敵を引きつけて時間を稼いでちょうだい。朱乃の回復を待つて各個撃破しようと考えてたけど、敵が直接クイーンをぶつけてきたのが計算外だったわ』

「しかし部長！キングが本陣を出るのはリスクが大きすぎますよ！」

『敵だってそう思うでしょう。そこが狙い目よ…！いくら不死身だからといって心までは不死身ではないわ。この私が直接、ライザーの心をへし折ってやるわ…!!』

「分かりました!!」 「了解です」 「はい…」 「はいよ」

通信を終えると、4人はグラウンドへと向かっていった。

その頃

しばらくほったらかしにされたビルスは…

「ふわあく…お腹空いたなく…」

「10日前のプリンを最後にゼノさんから連絡がありませんね。」

「くそく!!お腹すいたく!!!ウイス!!!何かあるものくれ!!!」

「はあ…分かりました。とりあえず、プリンでも食べて待ちましよう。」

そんな感じであった。

く場面は変わりグラウンド

一誠一行はグラウンドへとたどり着いた。

すると小猫は何かを感じ取り警戒態勢を取った。

「複数の敵の気配を感じます…」

小猫が気配を感じ取った後、一誠が前へと踏み出した。そして、

「おい！隠れてるのは分かったんだ！さっさと出てきやがれっ！」
叫びだし、敵を挑発したのだ。

すると、校庭の中心に砂嵐が吹き荒れ、その中から装甲をまとった女性が現れた。

「私はライザー様に仕える『ナイト』カーラマインだ。敵陣の真正面に突っ込んでくるなどんでもないバカだな…だが…私はそんなバカが大好きだ」

するとそのナイトは剣を抜くと木場へ向けた。

「お相手願おうか。グレモリー眷属のナイトよッ！」

「端からそのつもりさ。ナイト同士の戦い…待ち望んでいたよッ！」

瞬間 二人の剣がぶつかり合いその場に巨大な金属音が鳴り響いた。

木場 vs カーラマイン 戦闘開始

「や…ヤベエ…こりやあ…俺の出番ないんじやあ…」

「そうとも限らんど」

「!!」

その時 背後の林から声が聞こえた。振り向くとそこには仮面をつけた女性とお嬢様風の優雅な衣装を着た金髪の少女が立っていた。

「カーラマインったら、頭の中まで剣、剣、剣、どうめつくされてますわ…」

見ると次々に現れ、あっという間にゼノ、一誠、小猫は5人の駒に囲まれていた。

「成る程。残りの駒を全部投入…リアスの勘は当たりやすい（笑）」

「呑気に言ってる場合か!!ブーステッドギア!!」

「5人だと…不利…」

一誠と小猫が戦闘態勢に入り戦闘を開始しようとしたが 金髪

の少女は拒否するかのように手を振った。

「あら、ゴメンあそばせ♪私は戦いませんの」

「は!?!」

突然の言葉に一誠が動揺していると仮面をつけた女性がイツセーへ近づいた。

「私はライザー様に仕えるルーク、イザベラだ。ではいくぞ。リアス・グレモリーのポーンよ!!」

イザベラと名乗るその女性はイツセーに拳を放った。

「のわっ!!おい!!何なんだよ!!アイツ!!闘わないとかどういふ事だよ!?!」

一誠が 質問すると、その女性は何回も拳を振りながらも説明した。

「ビショップとして参加はしているが、ほとんど観戦しているだけだ。彼女は…いえ、あの方はレイヴエルフェニックス・ライザー様の実の妹君なのだ!!本人曰く…」

『ほら、妹萌えって言うの?こう言う奴、まあ俺は妹萌えじゃないからなく。形として眷属悪魔ってことで』

「なのだそうだ」

「戦わない奴を眷属にするとかアイツマジで腐ってるな。つうか形だけの眷属悪魔って可哀想(笑)」

説明を聞いたゼノは分析したがその言葉が相手を挑発した。

「く……言わせておけば少々ムカツとくる坊やですわね!!ニイ!!リイ!!やっておしまいなさい!!」

「ニヤニヤん!!」

そう言うとゼノの前に露出した制服を着こなし猫耳をつけた2人

の少女が立ちふさがった。

するとゼノは前に出ようとする小猫を手で制すと自ら前に出た。

「ここは俺にやらせろ。コイツらには少し腹が立った」

「…分かりました」

小猫はゼノの言う事を聞くと後ろに下がった。

「あら？あなた 一人でこの子達を？言っておきますがこの二人は眷属の中でも一位二位を争う程の瞬発力の持ち主ですよ？」

「だからなんだ？そんな説明いいから黙ってるドリル」

ゼノのドリルという言葉にレイヴェルは頭に来た。

「やっっておしまいなさい！」

「ニヤア〜!!!」

するとその二人の少女は一斉にゼノへ遅いかかった。

対するゼノは目を少し細め鋭い眼光で見つめると人差し指を突き出した。

“目障りだ”

その瞬間 人差し指が飛び掛ってくる二人の鳩尾へと突き刺さるかのようになまつすぐ入り込んだ。

「うう………」

ドサツ

二人はそのまま地面に落下すると光に包まれた。

『ライザー様の兵士2名リタイア』

「な……なにをしましたの…!？」

「あ？ただ単に邪魔だったから退場してもらったんだよ。確か体力が尽きるとリタイアだったか？ちよつと小突いただけなのに。アイツら弱すぎだろ」

「くっ…」

するとゼノは少しずつレイヴェルへ近づいた。対するレイヴェル

は一步後ずさった。

「な!?!何ですの!?!」

「邪魔だから退場してもらうに決まったんだろ?いつまでもいちや迷惑だ。戦わないなら失せろ」

「…ッ!」

レイヴェルは冷や汗を流した。すると、レイヴェルの前に二人の眷属が現れた。

「レイヴェル様 この男は危険です!直ちに御避難を…!ここは我わ…」「邪魔」…ガハ…ッ!」

最後まで言う前にその剣士はゼノの強烈な回し蹴りを喰らい近くに並んでいる建物を貫通する程まで吹き飛ばされリタイアとなった。

「次はお前だ」

「?!…キヤアッ!!」

そしてゼノはその体制からまたもや回し蹴りを放ち同じように僧侶も吹き飛ばしリタイアさせた。

『ライザー様の騎士一名、僧侶一名、リタイア』

「フン。雑魚が」

「くっ…」

2人の駒を撃破しても未だにゼノは腹を立てていた。確かにコイツらは戦いを舐めている。戦闘を求めるゼノにとってはそれは腹立たしい事だった。

「さて、残りのゴミ掃除を始めるか」

「ヒッ…!?!」

そう言うとゼノはレイヴェルへと鋭い眼光を向けた。レイヴェルは恐怖のあまり一步後ろへ下がった。

その時、ゼノは遠方から何かを感じ取りレイヴェルから目を逸らしその方向を見た。

「(朱乃の気が弱い…苦戦してんのか?)」

ドンッ!!!

「キヤッ!」

ゼノはすぐさまグラウンドを飛び去っていった。

く 体育館跡地

グラウンドでゼノ達が戦闘を繰り広げている中、朱乃は苦戦を用いられていた。

「ハア……ハア……ハア……」

朱乃の戦闘服である巫女服はボロボロであり、魔力もそこをつこうとしていた。

「やはり、噂通りの力ですね。やはりこれがなければ」

「く……それは……フェニックスの……涙ですか……」

「ええ。これのお陰で私は貴方に勝つことが出来ましたからね。貴方との勝負は面白かったですよ」

ユーベルーナの手には魔法陣が展開されていた。

朱乃も対抗しようとしたが魔力が足りず身動きが取れなかった。

「(魔力が……もう……ここまで……ですわね……ゴメンなさい………リアス……皆さん……)」

悔やしきの念が現れ、敗北を認めてしまった。

そして、朱乃の地面が光り始めると爆発し、爆風が朱乃を飲み込んだ。

その高威力の魔法は辺り一体を煙に包み、その場は静寂に包まれた。

その時、ユーベルーナは何かを疑い始めた。

「(ん？ 妙ですね。撃破したのならそれが知らされるはず…しかもまだ微かに魔力を感じる…：)」

そう思いユーベルーナはもう一度爆発した場所を見た。

「ふうく…間一髪だったな」

「なっ!？」

「ぜ…：ゼノ…くん…?」

そこには朱乃を肩に担いでいるゼノの姿があった。

「き…：貴様はさっきの!? (何故…!! 気配も何も感じなかった…!! 近づいてくる気配もなかった…!! しかもあの距離を一瞬で移動するのもナイトでさえ不可能なのに…!! まさか!! 爆風よりも早く移動した!?)」

ユーベルーナがいきなり現れたゼノに驚いているが本人は無視し、朱乃を少し離れた場所に下ろす。

「大丈夫か?」

「はい…ですが…どうやってここまで…」

「グラウンドで他の奴らの相手してたら急に君が苦戦し始めてるのを感じたんだ。見る限りもう、魔力があまり残ってないな」

「はい…クイーンとの戦いで使い果たしてしまいましたわ…ゴメンなさい…力になれなくて……」

「別に良いよ。あとは俺がやるからお前は休んでろ」

「……はい……ありがとうございます……」

そう言い終わると朱乃は消え、リタイアとなった。

『リアス様の女王一名リタイア』

そんな中、ユーベルーナは後ろで魔方陣を展開させていた。

「少々油断してました。今度こそあなたをリタイアさせてあげますわよ…ッ！」

辺りの空気が揺れ、魔法陣からはとてつもない魔力が感じられる。それと同時に辺りには熱風が舞い、次々と砂を吹き飛ばしていった。

「燃え尽きなさいッ!!!」

その瞬間、ユーベルーナの魔法陣から巨大な炎の渦が現れ、ゼノに目掛けて放たれた。

「失せろ」

ゼノが放ったその一言で向かってくる炎は一瞬で消失した。

「なっ!!私の炎を!!」

「ぎゃあぎゃあウルセエんだよババア。今すぐ……失せろ……!」

その瞬間、ユーベルーナはゼノから発せられた強大な威圧感に汗を流す。

「……今更巻き返したとしても貴方は不死のまえでは無力ですわ!!!」
そう言いうとユーベルーナはグラウンドの方へと飛びさっていつ

た。

その直後

『ライザー様の騎士一名、戦車一名、リタイア』

裕斗と小猫と一誠が敵を撃破した。

「さてと、これで、残るは3人か。いよいよゲームも終盤かな？」

そう言うとゼノはグラウンドへと戻った。

ゲーム終盤戦

朱乃がリタイアし、相手のクイーンを退けたゼノは運動場へと向かっていった。だが、その直後

『リアス様のルーク一名ナイト一名、リタイア』

放送が流れ裕斗と小猫がリタイアした事が知らされた。

「裕斗と小猫がやられたか」 ちよつと急ぐか」

そしてゼノが着いた頃には、運動場には一誠達の姿はなかった。

「?」一誠達がいねえな」

ゼノは辺りを見回しイツセー達の姿を探した。

すると

本校舎の方から爆発が起きた。

ゼノはその場所に目を向けた。そこにはリアスとボロボロのアーシアを抱えている一誠、そしてライザーとユーベルーナがいた。

魔力から見てまずリアス達に勝機はないと確信したゼノは瞬間移動をしライザー達の元へと移動した。

「ゼノ!」

「ようリアス。元気そうだな」

現れるなりいきなりゼノは軽々とした口調で話した。

「な……………!!貴様!!」一体どうやってここまで!!」

いきなり現れたゼノに対しライザーは驚きを隠せなかった。一方でゼノはライザーの問いを無視して状況を分析した。

「残るはあの2人か。お前らは休んでなよ。あとは俺1人でやる」

「!!!」

そう言うとゼノはゆつくりと二人へ近づいていった。

トン トン トン

イツセーやリアスは何も感じなかったが、目の前にいるライザーやユーベルーナはそのゼノが歩む一歩一歩が恐怖と感じとり、冷や汗を流した。

「ち……近寄るな！人間めええ！！！！」

そう叫びながらユーベルーナはゼノへ向かって高密度の水を放つ
も

「邪魔」

ピュンツ！！

ゼノの右手一振りでその水はかき消された。すると、ゼノはその場から姿を消した。

「な！！消えた!?！どこん…「後ろだ」 な!?!」

ユーベルーナは声ができる方へ振り向いた。そこには蹴りの構えを取り、跳躍しているゼノがいた。

そして

“寝てる”

ユーベルーナの脇腹にゼノの鋭い水平蹴りが入り込みそのまま地面に向かって蹴り落とした。

『ライザー様のクイーン一名リタイア』

「な……!!ユーベルーナ…!!……」

「これで後はお前だけだな」

「!!」

「セイツ!!!」

最後にゼノは右ストレートを顔面に放った。

ブンツ!!!

「ごはああ!!!」

ゼノの右ストレートによってライザーはその場から時計塔地点まで吹き飛ばされた。

「はあ…はあ…」

「おいおい。もうバテたのか？もうちょい楽しませてくれよ？不死身のフェニックス様よ？」

「だったら…見せてやるおおお!!!」

その瞬間 ライザーの身体から渦潮の如く 炎が溢れ出た。

「人間…俺の力をここまで引き出した事は褒めてやろう。だが俺は不死…どの道貴様らに勝ち目はないッ!!!」

「それはどうかな？不死身の奴でも必ず弱点は存在する。それは皆同じだ」

するとゼノは体内からオーラを出した。

「来な。引き出したその力俺にぶつけてみるよ」

「よかろう…!!」

そしてライザーは炎を纏いゼノへと向かった。

その時

「私の負けよ……投了します……」

「!!!」

『リアス様の投了を確認。よってこのゲームはライザー・フェニックス様の勝利です』

突然の一言

その言葉を聞いた瞬間、ゼノはオーラを納めリアスへと近づいた。その顔は少量の怒りが混じっていた。

「何故リタイアした」

「……………」

ゼノが問いかけてもリアスは答えるどころか声も出さなかった。するとゼノは響き渡る声で怒鳴った。

「おいッ……」

「……………もう……………いいの……………これ以上私の眷属や……………貴方が傷つくのはもう見たくないの……」

「……………なるほど。だから投了したのか……………」

そしてゼノはリアスを見て少し黙りこみそして

「確かに心配してくれたのはありがたいが　その投了でこれまでリ

タイヤしていった朱乃や小猫達の思いや頑張りを無駄にしたんだぞ？特に一誠はお前の為に勝ちたいと 一番努力していたんだぞ？」

ゼノの言葉にリアスは返す言葉がなかった。

「……………ごめん……………なさい……………」

「ツ!!……………テメエ…謝って済む問題じゃねえだろ！」

ゼノのは初めて怒りを露わにした。ゼノの一番嫌いな行為は相手の努力を踏みにじりバカにする。ゼノにとって勝手にリザインしたリアスには怒りしかないだろう。

「人の努力を無駄にして謝るだけだと？異空間ごとぶっ飛ばしてやろうかあ!？」

ゼノか怒りを露わにし手にエネルギーを集めた時ライザーがゼノの肩を掴んだ。

「おいおいお前 もう勝負はついたんだぞ？今更泣き言なんて男として……………」

「すっこんでろ…ツツ!!」

ドオオオオオオツツ!!!

ゼノの怒声と同時にライザーの身体は新校舎の屋根からグラウンドへとエネルギー弾によって吹き飛ばされた。その衝撃で土が盛り上がり 半径400mはある巨大なクレーターが出来上がった。その中心で全身がグチャグチャになり気絶しているライザーの姿があった。不死なため 命に別状はないが精神に相当なダメージが入っただろう。

ゼノはその場から降りると 衝撃によって新校舎から落ちたイツセーを介抱しているリアスを睨んだ。

「見ろ。俺を信じて投了しなずにいればアイツはあの様…いや、それ以上の苦痛を与えて勝利を手にする事が出来たんだぞ？」

「…ツ！」

リアスは自分の唇を噛み締め涙を流した。仲間を信用できなかった。仲間の努力を無駄にしてしまった。リアスの心の中は自分への無力感で埋め尽くされてしまった。

その様子を見てゼノは失望した。

「……お前は今まで会った奴の中で一番ダメな奴だな」
そう言い捨てると去っていった。

ゲーム終了

式のぶち壊し

あれから2日

ゼノは校舎の屋上でただ1人空を眺めていた。その手にはリアスの結婚式の招待状が握られていた。

「どうしよっか……。招待状届いたけど……」

すると、ゼノは後ろに気配を感じ状態を起こすと後ろを向いた。

「何の用だ？」

そこにはレーティングゲームの審判役を務めた銀髪のメイド グレイフィアが立っていた。

「これを貴方にお渡しに来ました」

そう言うとグレイフィアは折られた紙をゼノへ差し出した。

「何これ？」

「会場へと繋がる魔方陣です。人間である貴方も転移出来る仕様と なっていますので」

「ふうん」

「では、私はこれにて。会場でお待ちしております。それと一誠様がお目覚めになられていたらお二人で転移して来てください」

そう言うとグレイフィアは魔方陣で帰っていった。

「行くか」

ヒュンツ

そういうとゼノはその場から姿を消した。

向かった先は兵藤家である。

「のわ!?ゼノ!?!」

「ゼノさん!?!」

「ようイツセー、アーシア どうだ?怪我の具合は」

「ああだいたい良くなった……。それより!!ゲームは!!ゲームはどう

なつた!？」

イツセーはゼノに詰め寄った。ゼノは「落ち着け」と言いながらイツセーをなだめると事の結末を話した。

それを聞いたイツセーは己の無力さに涙を流した。

「クソ……俺が弱い所為で……ちくしょう……」

「イツセーさん……」

「いや早々とケリ付けなかった俺にも責任はある。だからお前のところに来たんだ」

「え?お前……他に何かあるのか……?」

「そうだ。見舞いだけならお前のところに何か行くかよ」

そう言うときゼノはポケットから先程渡された紙をイツセーに出した。

「これは……」

「さつきグレイファイアって奴から渡された会場へと繋がる魔方陣だ。だがその前に……お前に一つ聞く」

「何だ……?」

「お前、このままでいいのか?」

「どういうことだ?」

「あの焼き鳥とお前が心から尊敬する部長が結婚するのを黙って見ていいのかと言ってるんだよ」

ゼノの質問にイツセーは涙を流しながらも歯を食いしばりながら言った。

「……いいわけねえ……アイツが部長と結婚なんて……俺は絶対認めねえ!!!」

「なら、どうしたい?」

「部長を……いや……リアス・グレモリー様を取り戻す!!!!!!」

そう言い一誠は真剣な眼差しでゼノを見つめた。

「戦えば死ぬ可能性があるぞ?」

「分かってる」

「覚悟の上だな?」

その問いにイツセーは強く頷いた。

するとゼノは近くに脱ぎ捨ててあるイツセーの制服を投げ渡した。

「40秒で支度しな!」

そして支度を終わるとイツセーはアジアに「必ず部長を連れて帰ってくる」と言い残しゼノと共に冥界へと転移していった。

「……で 何このラ○ユタみたいな展開……」

—————

—————

—————

一方で冥界の結婚式会場では大勢の貴族達が集まっていた。その中には一誠、ゼノ、アジアを除いたオカルト研究部の皆は招かれた模様で出席していた。

その時 式場の高い場所から炎が巻き上がりそこから胸元をさらけ出したワイルドな衣装のライザーが姿を現した。

「冥界に名だたる貴族の皆様、ご参集くださりフェニックス家を代表して御礼申し上げます。本日皆様においでになったのはこの私、ライザー・フェニックスと、名門グレモリー家の次期当主リアス・グレモリーとの婚約という歴史的な瞬間を共有したかったからであります。

それでは、ご紹介致します。我が妃!!リアス・グレモリー

!!!」

「ゼノ！」

予期していない出来事に周りの貴族達は動揺していた。

「り…リアス殿…これはいったい…！」

一人の貴族が弁明を求めた時 後ろから紅い髪を持つ一人の青年が姿を現した。

「私が用意した余興です」

それと共にリアスは目を見開き驚き声を上げた。

「お兄様！」

するとライザーは青筋を浮かべ兄と呼ばれた青年に向かい弁明を求めた。

「サーゼクス様！余興とはどういうことですか!？」

「ライザー君、先のレーティングゲーム、興味深く拝見させてもらったよ。しかしながらまだゲーム経験もなく戦力が半分にも満たない妹ではいささか…」

「あの戦いに…不満でも…？」

「いやいや、私が言葉を差し出さねばゲームそのものが存在意義を失ってしまう…ましてや今回は事情が事情だ。旧家の顔も立たんだろう。可愛い妹のせつかくの婚約パーティー…派手な施工も欲しいものだ。」

そう言うときサーゼクスは一誠とゼノへ視線を移した。

「その2人の少年。君が有するドラゴンの力、そして隣の君がレーティングゲームで見せた規格外な現象、今一度ここにいる貴族の方々に見せてはくれないだろうか？ドラゴン&規格外

対

フェニックス。力を宿す物同士でこの場を盛り上げて欲しいのだよ」

その要求にゼノとイツセーは共に了承した。

「流石魔王様、面白いことをお考えに。分かりました。このライザー・フェニックス、身を固める前の最後の炎をお見せしましょう」

サーゼクスは頷くと二人に問いかけた。

「さて、転移させる前に兵藤君に黒崎君、勝利の代価は何

「がいいかな?」

「サーゼクス様! 下級悪魔はおろか…人間に代価なぞ…!」

周りの貴族は反対の声を上げるがサーゼクスは制す。

「下級であろうと上級であろうと…ましてや人間でもあろうと、こちらから願い出た以上それ相応の代価は払わねばならない。等価交換と言うものは礼儀だろう。では何を望む? 富か? それとも絶世の美女か?」

その問いかけにイツセーは迷う事なく答えた。

「部長を。いや、リアス・グレモリー様を返してください!」

「いいだろう。もう一人の君は何を望むかな?」

イツセーと同様の問いにゼノは何も考えず答えた。

「ない」

「ほう? 遠慮することはないよ。人間であれ、君にも同じ範囲での対価を望む権利がある」

サーゼクスは再度ゼノに問うがゼノはそれには興味を示さない。

「いいっていつてるだろ。俺はただ単に戦いたいから来ただけだ。ゲームではついカツとなって楽しめなかったしな」

そう言いゼノはライザーへと目を向ける対するライザーは歯を軋りゼノを睨んだ。

「それに、お前とも闘いたい。何でもというならコイツの相手が終わったらアンタとやらせてもらう」

魔王への宣戦布告その言葉に貴族達は頭にきたのかヤジを飛ばす。

「人間風情が魔王様に挑むだ?!」

「調子にのるなあ!」

「小柄な人の子が魔王様に敵うはずがなからう!」

周りのヤジが飛び交うとゼノの額に青筋が浮かんだ。

その瞬間 周囲の悪魔全員にゼノの巨大な威圧感が発せられた。

「うるせえから黙ってろ」

ドンツ!

ドスを効かせた低い声に放たれた威圧は上級であるにも関わらず、その場にいる貴族達の戦意を喪失させた。だが本人にとっては少しムカつときたから気を使わずただ睨んだだけである。

するとサーゼクスは高らかに笑った。

「ハハハハハ！君は変わり者だね。何よりも闘いを求めるとは。いいだろう。この試合の後チェスなり殴り合いなり相手となろう」

その言葉にゼノはニヤツと頬を釣り上げる。

「では転送しよう」

そう言いサーゼクスは3人を別の空間へと転移させた。

「始めてくれ」

その合図と共に鐘がなる。するとゼノは構えようとするイツセーを手で制した。

「イツセー、まず俺がいく。」

「え?」

「取り敢えずゲームの時の仕返しをする。その間お前はパワーを溜めてろ。奥の手があるんだろ?それ使ってお前の大切なもん取り戻してみせなよ」

「ゼノ……ありがとな!!」

boost!!

そしてゼノはゆっくりとライザーに近づき少しの距離が縮まると歩みを止めた。

対するライザーは鼻を鳴らしながらゼノを睨みつけた。

「ふん!まさか貴様ともう一度戦うことになるわな」

「ああ。俺も正直驚いてる。ゲームの終わった後俺にアツサリとノされた奴がわざわざまたやられに来るなんてさ」

「なんだと…!?!」

ゼノの挑発的ながらも真実にライザーは額に青筋を浮かべた。

そんな事は無視してゼノはライザーから目をそらすとモニターを見た。そこには魔王であるサーゼクスが映っていた。

「成る程…やっぱりそこら辺の奴より戦闘力が高いな」

その時 ライザーが炎を纏いながらゼノに向かって飛行した。

「人間めええええええ!!余所見とはいいい度胸だなああ!!」

そう言うところライザーは炎を右拳に集めるとそれを拳と共にゼノに向かって放った。

ドオオオオオオオオオオオ!!!

その瞬間 会場が光に包まれ 炎の渦が巻き起こった。

「ぐう!?何て威力だよ…!!」

その場にいたイツセーは吹き飛ばされそうになりながらも体制を保ちながら目の前の光景を見ていた。

—————

—————

一方 会場では、その光景を見ていた貴族達は笑みを浮かべていた。

「おお!さすがライザー様!」

「あれ程の攻撃を食らえば人間なら灰なりますな!」

ライザーの活躍ぶりに舌鼓を鳴らしていた。

炎の渦はやがて止み、辺りには煙が巻き起こりその光景を隠していた。

すると煙が晴れ二人の姿が露わとなった。

その瞬間

皆が氷のように固まった。

—————

—————

—————

「これがお前の全力か?」

煙が晴れ そこに映っていたのはライザーの放たれた渾身の一撃

を人差し指一本で受け止めているゼノの姿だった。

「ば…バカな…」

ライザーから怒りの表情が消えるとゼノは冷たい笑みを浮かべた。
「こんな攻撃じゃ俺は倒せないぞ」

その言葉が言い終わった瞬間、ライザーの身体は宙を舞っていた。
マツハを軽く超えるゼノのアップパーによって殴り飛ばされたのだ。
その動作は感覚神経が働き、痛みを伝えるよりも速く、気づかなかつたのだ。

「ガハッ…」

空中でライザーは吐血すると体制を立て直すため脳から身体に命令を出した。

身体に命令が行き届き身体を動かし体制を立て直したライザーは吹き飛ばされた場所へ目を向けた。だが、そこには何もいなかった。
すると、自分の顔が何かの影によって覆われた。

ライザーはゆっくりと振り向いた時

「遅い」

その言葉と共にライザーの右頬に衝撃が走ると同時にその身体が会場の隅に向かって吹っ飛ばされた。

「体制を立て直すまで待ってやったのにこの程度かよ」

そこには空中で胡座をかきながら瓦礫に埋もれているライザーを見下ろすゼノがいた。

「おのれええー!!!」

ライザーは四肢に炎を宿すと、次々とゼノに向けて拳を放ち、そして、蹴りを放った。だが、ゼノは全てをまるで先読みしているかのよう易々と避けていった。

「はあ…はあ…はあ…」

「どうだ？部室で『殺す』と宣言したやつに殴り飛ばされる気分は」

ゼノはその場から着地すると裾をたなびかせながらライザーを睨んだ。

「今回のレーティングゲームでよくお前らの眷属と戦って思ったが…

正直ガツカリだったよ。イツセーの言葉通りだ」

「なに…!?!」

いきなり自分の眷属の事を口に出された事でライザーは動揺した。

「まず最初に相手をした 双子の兵士だ」

「イルとネルか…」

「アイツらはまず魔力からしてダメだ。イツセーよりも高いだけでただただ魔力で細工したチェーンソーを振り回してくるだけ その上振り回す軌道もワンパターンだ。そしてなりより驚いたのが不意打ちの際に声を出す…バカすぎるだろ?この時点でもう人間の軍隊長にアツサリと負けるレベルだ」

「な…なんだと…!」「それとだ」

「お前の妹 確かレイヴェルって言ったか?何のために眷属にしたんだ?」

突然妹の事を提示されたライザーは顔をしかめた。

「何故 そんな事を話さねばならん…!」

「知りたいんだよ。戦わない奴を眷属として戦場に出すお前の心情を」

その問いにライザーは何の迷いもなく答えた。

「ハハッ 可愛い妹を側に置きたいという俺の欲だよ」

「ならその欲の末に戦場に立った可愛い妹を殺されたらどう思う?」

「なに…?」

『殺される』その単語にライザーは反応する。

「お前の女王が言ってたな ゲーム中の死亡は事故として見なされる。だったら自分の妹が殺されて事故で済まされたらお前は思う?」

「そ…それは…」

その問いにライザーは黙ってしまった。だがゼノは淡々と続ける。

「正直今回は危なかったな。俺はこのゲームで有名な不死鳥と闘える事を楽しみにしてたんだ。で、闘ってみて見れば戦車とか剣士は活気に加え魔力と技術が備わってるからまあいい。だがお前の妹は違った。自分は戦わないと」

そう言うとゼノはモニターに映っているレイヴエルへ目を向けた。目を向けられたレイヴエルは目をそらした。

「あの時は本当にムカついたよ。戦わない奴があの場合に出て何やるんだよって。ブチ殺したくなつたよ。万が一あの時、俺の機嫌がもつと悪かったらお前の妹は確実にあの世行きだったな。ま、殺す価値もないか。あんな奴」

「黙れツ!!」

するとライザーの身体から炎が溢れ出した。

「それ以上 妹を…眷属を愚弄するな…!!」

その怒りの言葉にゼノは小首を傾げた。

「は？その愚弄される原因を作ったのはお前だろ？ライザー・フェニックス」

「黙れえええええええええ!!」

完全にトサカにきたライザーは己を炎に包み込んだ。するとライザーを中心に紅蓮の炎がほとぼしり周りの瓦礫を吹き飛ばしていった。

「それで威嚇のつもりか？そんな威嚇じゃ俺は威圧できんよ？」

「なんだと!? 貴様…その余裕はどこから出るのだ!? 先程の攻撃といい防御といい貴様は本当に何者なのだツ!!」

『何者』その問いにゼノは一瞬笑みを浮かべると迷いない表情で答えた。

「人間だよ。それにこんな余裕を出させてくれるのは俺をここまで鍛え上げてくれた師匠のお陰さ。だが、その師匠がお前らとは全然格の違う奴でな」

「な…!? 貴様の師匠が神だとも言うのか!?」

「ああそうだ」

そして、ゼノはこの場で皆が見守る中、自分を神の領域まで鍛え上げた師匠の名を口にした。

「俺の師匠は『破壊神ビルス』破壊を司る最強の神だ」

リアス side

私は今 ゼノがライザーに向かつて話している姿を見ていた。

『貴様の師匠が神とでも言うのか!?』

その事について、私はずっと気になっていた。出会ってからずっと驚かされてばかりだ。一体、彼をあそこまで鍛え上げた師匠というのは何者なのか。

だから私は耳を澄まして聞いた。ゼノの言葉を。

『俺の師匠は【破壊神ビルス】破壊を司る最強の神だ』

「!!!」

その言葉と共に会場はパニック状態となった。

「破壊神ビルスだ?!」

「まさか…本当に存在していたのか…?!」

私も驚いていた…!! 【破壊神ビルス】昔、本で読んだことがある…破壊神シヴァとは異なり、生命はおろか……星をも破壊し、宇宙を支配する神……まさかゼノがその破壊神と繋がっていたなんて…!

隣ではお兄様も冷や汗をながし驚いていた。

「……………破壊神ビルス…再びその名を聞く日が来るとわ……………我々は……………とんでもない者と関わってしまったようだ…。しかも決闘を受けてしまったとは……………」

そう言いお兄様は手で顔を覆う。

そして、私達の視線は再び3人へと移った。

side out

一方異空間では ライザーが聞いたこともないかのような表情を浮かべていた。

「破壊神ビルス？誰だそれは」

「は？知らないのか？上級悪魔だというのに知識はガキ以下か」

「く…!! 貴様…!!どこまで俺を馬鹿にすれば…!! 「ライザー!!」」

突然誰かがライザーに向かって叫んだ。

「何ですか父上」

見るとライザーの父親、フェニックス卿が顔を真っ青にしていた。

「ライザー!!今すぐリタイアしろ!!そ奴だけは決して相手にはならない!!」

「何故ですか！父上!!私が只の人間にやられると」

「そ奴は只の人間ではない!!破壊の神ビルスの弟子だぞ!!それに前回、リアス嬢がリザインした直後 ボロ負けになったではないか!」

「あ…あれは単なるまぐれですよ！それにビルスとは何なんですか！」

「知らないのか!!生命どころか星さえも破壊する恐ろしい神だ！不死である我らフェニックスの命さえも奪う事のできる恐ろしい奴だ！早くリタイアせねばそ奴に破壊されるぞッ！」

「ご冗談を!!そのようなことをこんな子供にできる訳がありませんよ!!それにその様な野蛮な神！存在する訳ないでしょう！」

そう言うときライザーは背中から炎をだして戦闘態勢をとった。

「あの大馬鹿者め……」

「どうしますか？フェニックス卿」

「んん………奴が破壊されぬことを祈ろう……」

「ではいくぞ!!!」

そう言うのとライザーは背中の中の炎を羽ばたかせゼノへと飛んでいった。

そして、ライザーは手から先程よりも多い炎を生成するとそれを全て己の右腕に集め一気に放った。

「焼け死ぬがいいッ!!!」

ライザーが寸前まで迫った時、ゼノはライザーに向けてゆつくりと手をかざした。

『破壊』

その言葉と共に突如 ライザーの身体が止まった。

「……!!! な……!!! 何だ……!!! これは!!! 俺の体が……!!!」

ライザーは己の体を見て恐怖に染まったかのような表情となった。下半身のつま先部分から徐々に粒子となって消えているからだ。

ライザーは身体中から魔力を集め回復を試みようとしますが幾らやってもその消えゆく部分が回復することはなかった。

「なんなんだこれはあああ!!!」

己の身に起きる不可解な現象にライザーは恐怖の悲鳴をあげた。

—————

その光景を見ていた貴族達は皆々冷汗を垂らしていた。

「あ……あのライザー様のお身体が……」

「消えていく……」

—————

「あああああ!!! 消える! 俺の身体があああ!!!」

するとゼノは指を鳴らした。

『解除』

その言葉と共にライザーの粒子となり掛けた部分の崩壊が止まった。するとライザーも炎で身体を再生する事に成功した。

「ハア…ハア…ハア…何だ…今…のは…」

「どうだい？破壊されかけた気分は？」

「!!な…!!この俺が『破壊』された…だと…!?」

「そうさ。その物の全てを終わらせる完全なる『破壊』だ。不死鳥だろうと何だろうと破壊出来ないものはない」

「く…貴様…!!」

「だが、あんたとはもうやる気はない。あとは今回の主役に任せることにするよ」

そう言うとゼノはその場から下がるとイツセーの元に戻った。

「イツセー どうだ？パワーの方は」

「く…悪いがまだ…」

ゼノはイツセーの身体を見つめた。魔力こそ上昇しているがまだ限界には至っていないかった。

ゼノは『やれやれ』という表情を浮かべるとイツセーの背中へと手を置いた。

するとイツセーの身体が一瞬振動したと思いきやその身体から赤いオーラが現れ始めた。

「あ…あれ!?急に体が軽くなった…!!」

「俺の力を少し分けてやったよ。さあ、存分に暴れていい」

「ゼノ…ゼノ先輩…!!ありがとうございます!!!」

そう言うと一誠はライザーに向かって走り出した。そしてイツセーは画面の外にいるリアスに向かって叫んだ。

「部長ツ!!俺には木場のような剣の才能もないし、小猫ちゃんの様な馬鹿力もないし、朱乃さんのような魔力もアシアの様な癒素晴らしい治癒の力もゼノの様な規格外な力もありません!!それでも俺は!!最強のポーンになってみせます!!!」

そう言うで一誠は神器を天へとかざした。

「輝きやがれ!!!オーバースト!!!」

Welsh Dragon over booster!!!!

そう叫んだ瞬間、籠手が反応し、一誠の身体が赤い鎧に包まれた。その姿はまるで赤き龍を思わせるようだった。

「これが龍帝の力!!バランスブレイカー!!!赤龍帝の鎧(ブーステッド・ギア スケイルメイル)だ!!!」

そして、一誠は鎧の噴射口から魔力を発つるとその反動でライザーの元へと飛んだ。

対するライザーも構えを取る。

「いつくぜええええ!!!」

イツセーは右拳をライザーに向けて放った。だが軌道を読まれていたのかそのパンチは避けられてしまい、結果イツセーはそのまま前の建物に激突してしまった。

だが掠ったのかライザーの掌から少し蒸気が湧き出ていた。

「なんだ...!?これは!掠っただけでこれ程とは...この化け物めえええ!!!」

ライザーは背中から大量の炎を出し己の身を包んだ。

「我が一族の業火!!その身で思い知れええ!!!」

対してイツセーも体制を立て直し噴射口から大量の魔力を放出した。

「てめえのちんけな炎で俺を焼ける訳ねえだろおおがあああ!!!!」

その時、 2人の拳が交わり大爆発が起きた。

爆発によって辺りは光に包まれた。その時 光の中から何かが飛び出してきた。

「ガハッ!!!」

落ちてきたのは一誠であった。

「く……!!これが…アイツの力か……!!」

そう言う和一誠は見上げた。

見るとそこには先ほどと同じくらいの炎を生成しているライザーがいた。

「怖いか!!俺が怖いか!!お前は赤龍帝の籠手がなければ只のクズだ!!」

ゴオオオオオオ!!!!!!

そう言う和ライザーは一誠に向かって炎を繰り出した。

「く……!!」

ピュンッ

だが、一誠はギリギリのところまで飛行して躲し、ライザーの近くへと飛んだ。

そしてライザーは、手に炎を生成し、一誠にぶつけようと向かって

きた。

対して一誠も拳を構えライザーの顔面に向かって振りかぶっていた。

ドゴオオオオン
!!!!

結果、両者相打ちとなった。

「う……!!!」

そして一誠はその痛みに吐血してしまった。

対してライザーは……

「ふっ！その程……がハア!!!」

何ともないと思いきや、ライザーは一誠よりも強いダメージを受けていた。

そして、2人とも落下し、両者はよろめく程にまでなっていた。

「ば……バカナ…!!何故……この俺が……まさか……!!!」

ライザーが一誠の方へと向くと一誠の手にはロザリオが握られていた。

「貴様!!何故悪魔なのに十字架を!!!」

「うちの元シスターから借りてな！不死身のお前でも神器で強化した十字架は効くようだな!!」

「バカな!!十字架は悪魔にとつては持つだけで激痛が走る…!!どうやって……………」

!!!まさか貴様!!!」

見ると、ロザリオが握られている手を見るとそこはもう悪魔の肉体ではなかった。

「自分の腕を!!」

「ああ!!ドラゴンの腕なら悪魔の弱点なんて関係ないからな!!!」

「正気か貴様!!!そんなことをすれば!!二度と元に戻らないのだぞ!!」

「それがどうした!!!部長が戻ってくるなら左手一本なんて安いもんだ!!!」

そう言うで一誠はライザーへと近づいていった。

ライザーも炎を出そうとしたが先ほどのゼノの威圧で一誠の十字架が重なった為にもう精神が不安定であった。

そして

ドゴンツ!!!

「ガハツ!!!」

「アーシアが言っていた!!十字架は悪魔に使うと相当のダメージになる!!」

「ぐあああああああああああああ
!!!!!!!」

そして、一誠はその拳をライザーの懐へと叩き込んだ。ライザーは精神が壊れその場で倒れ、それと同時に一誠の鎧も解除された。

その瞬間、空間が消え、ゼノは飛べたものの一誠はそのまま落下してしまった。

「よいしょ」

「小猫ちゃん!!」

「いきますよ……」

「え?」

小猫は一誠をキャッチすると、リアスに向かって放り投げた。

バツ

「ありがとう……!!ありがとうイツセー……!!!」

そして、リアスは一誠を抱きとめると強く抱き締め下へと降りていった。

「サーゼクス様、申し訳ありませんが…約束通り、リアス・グレモリー様は返していただきます」

「何故謝る。君が成し遂げたことだ。反論はないよ。さ、早く行きなまえ。」

「はい!!……でもどうやって……」

「仕方がない。これを貸してあげよう」

パチン

サーゼクスが指を鳴らすと上半身が鷲で下半身がライオンの生物が現れた。

「これは…」

「グリフォンだよ。特別に貸してあげよう」

「ありがとうございますー！」

そう言う和一誠とリアスはグリフォンへと跨った。

「先に部室で待ってるからなく!!」

そして、2人はグリフォンと共に飛び去っていった。

「さて、俺も戻るか…」

「お待ちください」

そして、一誠を見送った後、ゼノも人間界に戻ろうとした時に呼び止められた。 誰か

「ん？」

そこにいたのはライザーの妹であるレイヴェル・フェニックスであった。

「なんだお前か。何の用だ？」

するとレイヴェルはゼノに向かって頭を下げた。

「兄が…色々と迷惑をお掛けして…申し訳ありませんでした」

その謝罪に対しゼノも真実であれ愚弄したことに対し謝罪をした。

「ごつちも悪かったな。お前や眷属を馬鹿にして」

「いえいえ。寧ろ感謝しておりますわ。調子に乗ってた兄上もこれで

少しは懲りたと思いますし何より私や眷属達にもいい薬になりましたわ」

「そうか。要件はそれだけか？」

「ええ。では失礼しますわ」

そう言うのとレイヴェルはその場から飛び立っていった。

「さてそろそろ帰るか…」

「お待ちください」

「またかよ」

その時 またもや誰かに呼び止められた。

声を聞いた瞬間 ゼノは嫌々振り返った。声をかけた人物を目にするのとゼノは突然目を鋭くした。

「何の用だ？魔王にグレイファイア」

そこには魔王サーゼクスとグレイファイアが立っていた。

「一つ…君に聞きたいことがあるのだ」

抱かれる不安、そして和解

レイヴェルと別れたゼノは突如 サージェクスとグレイファイアに呼び止められたのだ。

「俺に聞きたいこと？」

「ああ。単刀直入に問う。君は我々の敵か？味方か？」

いきなりの問い その質問にゼノはしばらく黙った。

「本当に単刀直入だな」

「そうだ。場合によっては君は我々…いや世界にとって危険人物となる。だから知りたいのだ」

「ふうん」

サーゼクスの表情は真剣だった。この質問でもしもゼノが『敵』であると言ふなれば真っ先に排除しようとするに違いない。だがゼノとサーゼクスとの距離は約2メートル。ゼノにとってはこんな至近距離からの攻撃を避ける事は朝飯前である。故に敵なれどサーゼクスに勝ち目はない。

だが、ゼノはそれとは全く別のことを考えていた。

それは今回のイツセーや小猫の成長度である。特にゼノは小猫に関心を寄せていた。自分がちよつとアドバイスしただけでそれをすぐに身体で覚えてしまう。中々の格闘センスだ。

そう考えたゼノは答えを出した。

「……………どつちでもないな」

「……………どういふことだい？」

「俺はお前らの味方でもないし敵でもない。簡単に言えば揉め事に突っ込む気はないし危害を加える事もない」

「……………その言葉……………信じていいのかい…………？」

ゼノの答えにサーゼクスは更に表情を強張らせ尋ねた。ゼノにとってはどうでも良いことだがサーゼクスにとっては冥界全土に関わることなのだから当然だ。

そしてゼノも目を鋭くし答えた。

「神の弟子として、嘘はつかねえよ。それにお前らと敵対してもメ

リットもデメリットもない」

「……………わかった。君を信じるよ。」

「もういいのか？」

「ああ。敵でないということが分かってなによりだよ。我々も破壊神は敵に回したくないからね。時間を取らせてしまった。グレイフィア、ゼノ君を人間界に送ってきてくれ」

「承知致しました。」

そう言うときグレイフィアはゼノの側にきて魔方陣を展開した。

「あとお前と戦う要求だが取り消しだ。流星に興が冷めたからな」

「その方がありがたいよ……」

そして、ゼノは人間界へと戻っていった。

それからしばらくして、

現在ゼノは部室で…

「うふふ♪」

朱乃に抱きつかれていた……

「お……………おい朱乃……………いつまで俺にくっついてるんだよ……」

「私の気が済むままです♪いやですか？」

「いや……………恥ずかしい……………は…離せ……」

「皆さんが契約仕事から戻るまでもう少し時間がありますから♪」

私…以前からゼノ君の事が気になっていました…今回…あの時助けてもらった時以来からゼノ君のことを考えると胸の辺りがとても熱くなるのですわ♡」

そういうと朱乃は更に抱きしめる力を強くした。するとゼノの顔は朱乃の豊満なバストに埋もれた。

「あ……朱乃！はなせ！苦しい……」

その時

「いってきまし……………た……………」

最悪のタイミングで帰ってきた。

「先輩……」

小猫は怒りマークを表した。

「何やってるんですか…?」

「うふふ♪抱きしめてるんですよ♪」

小猫の問いに朱乃は答えながらゼノを抱きしめ頭を撫でた。

「朱乃さん…離れてください…」

「いやですわ♪」

小猫はゼノを引っ張り引き剥がそうとし対する朱乃もゼノを離さなかった。

それからしばらくして、ゼノと小猫は戻り、その後にリアスやイツセー、そして木場も戻ってきた。

そして、リアスはゼノを見つけるとゼノの近くまで来て頭を下げた。

「ゼノ…あの時はごめんなさい…貴方の力を理解しなず勝手に投了してしまって…」

「……………」

「許されない事をしたのは分かっている……………殴ってもらっても構わないわ……………」

「……………」

「部長……………」

「部長さん……………」

「リアス……………」

「部長……………」

頭を下げられたゼノはしばらく黙り込んだ。リアスを殴ってもゼノの中では何も起きないだろう。

「殴ってもスッキリしないから殴らない。けど…二度とあんな真似はするな」

故にゼノは何も下さなかった。ゼノにとってはリアスとの関係はただの部員。眷属という硬い関係でもなんでもなかったため、どうでも良かったのだ。

「お前が謝る相手は俺じゃないだろ。自分でも分かってる筈だ」

それだけ言い残すとゼノは窓に手をかけるとそこから飛び降り、部屋を後にした。

ゼノの言葉を受け、リアスは部長として、眷属をまとめあげる王として、皆の方へ振り返ると、今回の皆の努力を無駄にした事に対し、プライドも何もかも捨てて頭を下げて謝罪をした。

「みんな…本当にごめんなさい…」

すると、部員の皆は優しく受け止めてくれた。

「俺たち、部長の事が大好きですから。そんな気にしないでください」
皆を代表してイツセーが放った言葉にリアスは涙を流す。それと同時にリアスはイツセーへ好意を抱いた。

こうして波乱の結婚騒動は幕を閉じた。次の日、リアスはやはり王として何の罰も受けない訳にはいかないとゼノに言うと、しばらくは名前で呼ばないということとなった。

説明

リアスがゼノに謝罪した後、しばらくは呼び名をグレモリーにするという条件で和解した。

そして現在は、部活となっていた。

そんな中一誠はゼノに質問していた。

「なあゼノ、ライザーのときから気になってたんだけどさ、【破壊神ビルス】って何なんだ？それ聞いた途端会場の悪魔たちがおどろいてたんだけどさ」

その問いにリアスは紅茶を飲む手を止めると目を開いた。

「あら、イツセーは聞いてなかったわね」

「そうだったな。教えてやる」

そう言うときゼノは食べていた菓子を置くといつもとは違う真剣な表情を見せた。

「イツセー…お前 この世界で星を破壊できると思う奴はいるか？」

「え…？」

その質問にイツセーは訳がわからずピタッと止まってしまった。

「簡単に言う迷惑星まるごとぶっ壊すことができる奴を知っているかどうかだ」

その質問にイツセーは首を横に振った。

「知らねえよ。てか星を破壊する!?そんなデタラメな話あるか!？」

「ある。そしてその星を破壊する事ができる神こそ『破壊神ビルス』さ」

リアス達はともかくイツセーにとっては全く信憑性が無いもののみ込めなかった。

「いやいやいや…そんな事出来るはずが…『そいつの言うことは確かだぞ相棒』え!？」

すると一誠の神器である左手が急に喋りだした。

「おい、イツセー、今喋ったのって」

『俺だ、俺、こいつに宿った神器だよ』

「籠手が喋った…!!!」

リアスや他の部員たちも驚き、一誠の左手に集中した。

『初めましてかな？リアス・グレモリー、俺は二天龍の一角、赤龍帝（ウエルシュドラゴン）ドライブだ。』

「イツセー、それって…」

「あー、乗り込む際に喋り出して…説明しようとしたんですけどまさか……」

『ふん！』

「それより、ドライブ、確かっとう言うことだ？」

『それはな…俺らが神器に封印された理由でもある……』

「え…」

するとドライブは話し始めた。

『そいつの存在に気づいたのは結構な大昔だった。俺たちが争う前から存在が疑われていたが、そいつは現れた…俺たちが争っている大戦でな。』

「!!!」

『どんな経路で冥界に来たか知らないが、そいつは突然現れ、「うるさいなく、もう少し静かにしてくんない？」それだけ言った。すると辺りの悪魔や天使、墮天使どもは一斉に戦争の手を止めた。』

「そ…それでどうなったんだ…?」

『当時俺たちはそいつが誰なのか知らなくてな。見た途端血の気が騒いで二匹同時に襲いかかったよ』

「で、勝ったのか!？」

『いや、ボコボコにされた…俺の倍加の攻撃をモロに食らってもかすり傷一つも付けられず、半減を狙って触れた白龍皇も10秒経たんうちにノされちゃった』

「え…嘘…だろ…」

「んで…最終的にどうなったんだ？」

『そいつは俺たちをボコボコにした後、「次こんなくだらない事起こしたら…破壊しちゃうからね…?」それだけ云い捨てて去っていった。

その後、悪魔や天使達は恐れ、二度と奴の降臨が起ころぬよう、瀕死の俺たちを神器へと封印し戦争をやめた。これが俺たちが神器に

なった經由だ』

「「「……………」」」

その話を聞いた周りの部員達は唾然とし、声も出せなかった。

「へえ。あんたと師匠との間にそんな事がねえ」

『そうだ。確かお前はそいつの弟子らしいな？お前は俺を破壊するの
か？』

「んく…………どうだろ？ま、今の所破壊する気はないよ」

『そうか…………ありがたい…………』

あまりの恐れように「誠は唾然としていた。

(ドライグがここまで恐るなんて…………ビルスってどんだけスゲエ神様
なんだよ…………)

「で…………でもよ!!それだったら悪魔や天使達全員で掛ければたおせるん
じゃねえか!」

『いや、おそらく無理だ。掛かったとしてもあいつが本気を出しちま
えば冥界はおろか…………他の神話系統もろとも俺たちはぶっ飛ばされる』

「ま…………まじかよ…………お前…………本当に神をも恐れさせた龍なのか？」

『地球の神とあいつは次元が違うんだよ!!あいつは完全なるチートだ
!!!』

すると、イツセーとドライグはたちまち口喧嘩を始めてしまった。

(いや…………軽く宇宙消せる全王様の方がもっとチートだけどな
……………)

ゼノは2人を見てそう思いながら腰を上げると、息をつく。

「あら…………もう帰られるのですか？」

「ああ。眠くなつたからな。じゃあな」

「え!?!ちよつといきな…………」

ドンツ!!!

「きゃっ!!」

リアスの呼び止める声に耳を貸すことなくゼノは窓から飛び去っ
ていった。

「もく……いつも勝手なんだから！」

閑話

閑話く使い魔

ある日の午後

「使い魔？」

「ええ。そろそろイツセーも使い魔をもたせた方が良いんじゃないか
と思ったの」

突然のリアスからの提案にイツセーは驚いていた。

使い魔とは、契約悪魔が使役する生き物である。悪魔になって間も
ないイツセーにとっては知るも知らぬ話だ。

そう思ったのか、リアスは手を出して小さなコウモリを。朱乃は小
鬼を出現させた。

「これが私の使い魔よ」

「私の使い魔はこれですわ」

見ると小猫も使い魔らしき動物を抱えていた。

「シロです」

「悪魔にとつては基本的なものよ。主人の手伝いや情報伝達、追跡に
も使えるわ。」

「へ…へえく……」

「…ズズ…ズ……」

ふうく……（使い魔ねえく…ちよつとペツ
トも欲しいとこだけでも……）」

ゼノは1人でお茶を飲みながらその話を聞いていた。

「あのく…その使い魔さん達はどこで見つけるのでしょうか…」

「それわね」

すると

コンコン

ガチャ

「失礼します」

入り口が開き、幾人かの生徒達が入ってきた。しかも、その顔は皆がよく知る顔であった。

「な！このお方は！」

「あの…どちら様ですか…？」

「この学校の生徒会長…支取蒼那先輩だよ」

「あらソーナ、どうしたの？」

「お互い下僕も増えてきたことですので改めてご挨拶をと」

そう言い蒼那は部屋を見渡すとゼノを見つけ軽く挨拶をした。

「お久しぶりですね。黒崎ゼノくん。」

「ああ。……………何で小猫と朱乃は俺をつねるんだ？」

「……………ムス…」

「うふふふ」

「え!?お前いつからあの方と!?うらやましい!!あ、でも何で生徒会長がここに?」

「このお方の真のお名前は『ソーナ・シトリー』72柱の一つ、シトリー家の次期当主ですわ。」

「え!?生徒会長が悪魔!?!」

朱乃から話された真実にイツセーは驚きのあまり二度見してしまい驚きの声を上げる。

「リアスさん俺たちのことまだ話してなかったんですね。気づかないこいつもどうよって感じですが」

「匙、私たちはお互い干渉しないことになっているのですよ。兵藤君が知らないのも当然です」

そんな中、生徒会の中でたった一人の男子生徒に対してソーナは注意した。その姿を見たイツセーは驚きの声を上げる。

「あれ？確かお前って最近生徒会の書記として入った2年C組の…」

「彼は匙 元士郎、特性は兵士です。」

ソーナの紹介に続きリアスもイツセーとアーシアを彼女達に紹介した。

「同じ兵士の兵藤一誠、ビショップのアーシア・アルジェントよ」

「ど…どうも…」

紹介されたアーシアはモジモジとしながらも頭を下げる。その一方でイツセーは同じ性別、同じ学年、同じ特性に親近感を抱いていた。

「へえ〜お前もポーンなのか〜しかも同学年じゃん!!」

「はっ！俺としては変態3人組の1人のお前と同じなんてめっちゃ酷くプライドが傷つくがな〜！」

「な…なんだと!？」

匙という青年の小馬鹿にした言いようにイツセーは頭に來たのか腕輪鳴らす。

「お〜やるか〜？俺はこう見えて駒四つのポーンだ！悪魔に成り立てのお前や人間の黒崎先輩なんかに負けつかよ!!」

その言葉はゼノを少しばかり刺激させた。

「へえ。君ってそんなに強いんだ。なら俺と戦って見る?」

先ほどまで静かに茶を飲んでいたゼノは立ち上がるとゆっくりと匙へと近づいた。それに対して匙は得意気に胸を張った。

「へへん!!良いですよ?先輩!」

「匙、おやめなさい!」

匙が戦闘態勢に入ろうとした時、ソーナが冷や汗を流しながら間に入り止めた。

「会長!？」

「兵藤君は駒を八つ消費しているのですよ?それに…黒崎君は破壊神ビルス様の弟子です。あなたどころか…ここに居る全員でも敵いません!」

「え……黒崎先輩が……」

ようやく理解したのか匙はその場で土下座した。

「す……すすすいけませんでした!!神の弟子とも知らず不屈きな行為を!!ほんと申し訳ございませんしたああ!!」

「……………」

あまりの態度の豹変に逆にゼノは引く。

「あら、ソーナ達も知ってたの?」

「はい。ですが…初めて聞いた時は本当に驚きました。まさか同学年のあの子が神の弟子とは…」

「私とほとんど同じね……それにしても、今日は他にも用があったんじゃないの?」

「ええ。匙にそろそろ使い魔を持たせようかと………まさかリアスも?」

「え……ええ…来週には行こうと思ってたんだけど…」

「困りました…彼は月に一度しか請け負ってくれませんし……」

そんな時、リアスは何かを提案した。

「なら、ここは公平に実力勝負で決めない?」

「実力勝負ですか?」

「そう、勝った方が彼に依頼する権利を持てる」

「というと…レーティングゲームですか?」

「いいえ。ここは学生らしく……」

『スポーツで決めま

しよ!!』

使い魔ゲツトだぜ！

「スポーツ…ですか？」

「ええそうよ。競技はテニス。問題ないでしょ？」

「まあいいでしょう。ではこちらは私と椿で勝負します」

「なら、こっちは私とゼノでい…「ダメです」…朱乃とゼノで…「ダメです」

…私と朱乃とゼ…「もつとダメです！確実に私達が負けます！もう少しフェアにしてください！」

「はあく…分かったわ…なら私と朱…「スポーツか？久々に腕がなるなく♪」「ゼノ先輩やる気満々ですね…」「あたりまえだよ」…ゼノでいいかしら？」

「はい…」

リアスの提案にソーナは渋々承諾すると「明日の朝に」それだけ言い捨て眷属を連れて出て行った。

因みに少しでも公平にするようにオカ研チームはゼノ1人とした。まあゼノが出る時点で公平もクソもないんだが。

割愛

—————
—————

「思った通りのゼノ先輩の圧勝でした」

「でしようね……ていうか割愛しすぎでしょ!？」

試合が終わり、オカ研が先に使い魔を得ることが出来るようになった。が、何故かイツセーがボロボロである。

「どうしたんですか？」

「いやどうしたもこうしたも！試合が始まったと同時にゼノがサーブするかと思いきや『おつと手が滑った』と聞こえたと同時にこっちに顔面スマッシュ打ってくるわ！ラケットが壊れて俺を代わりに使っ

て問答無用に振り回すわ！挙げ句の果てに『おおおおおつと。また手が滑った』つて俺を相手コートにぶん投げたんだよ!!?!しかもソーナ先輩や椿先輩は普通に『完敗です』つてゼノと握手してたしなんで納得出来るの!?!こんな大怪我したのにいいいい!!!!」

「長々とお疲れ様です…それを大怪我とすませるイツセー先輩が逆に凄いです。と言うよりもよく部長が止めませんでしたね」

「部長はなんか…『へえ…最近はあるんなラケットもあるのね…』つて感心してたし朱乃さんに至っては『あらあらうふふ』つていつも通りだったし！今回俺の扱い酷くネエエか!!!!」

イツセーの愚痴の嵐が治ると小猫はうちわで仰いだ。事の主犯であるゼノは寝息をたてながら小猫に膝枕されていた。

「まあこの小説の閑話や本編は大体ギャグ多めですし、いくらぐちやぐちやにされようとバラバラにされようとちよつと経てばすぐ元に戻るので大丈夫でしょう」

「大丈夫じゃないからこんな格好になってるんだよ!?!しかも小猫ちゃんなんかメタい！これじゃあ使い魔ゲットしに行けねえよ！」

「まあ作者の事ですからおそらくまた割愛するんでしょうね…それが早飛ばし…」

正解

その後小猫ちゃんの言った通り俺の怪我は気づけば無かったかのように消え去り…使い魔の森に行きなんか中年オヤジの『ザトウジ』という人から様々なモンスターのことを教わった。やたらゼノが

興味津々に見ていたが……………

そして俺はまだしもアーシアは雷のドラゴンを使い魔としてゲットした。名前は俺から一文字とって『ラッセー』と名付けたい…可愛いぜ！アーシア！

んで今は……………

「ゼノを搜索しています…」

「？誰に話しかけているの？」

「読者の方々に…」

何故こんなことになったかというところ！ザトウジさんから五代龍王の一角『ティアマット』を紹介された！その瞬間ゼノは目を輝かせると一瞬でそのドラゴンを探しに行ったんだ。

「何でいつもいつも……………!!」

「あらあら」

おおおいゼノおおおお!!早く帰ってきてえええ!!!部長が怖いよ!!!!!!

一方その頃ゼノは

「ふむ。見れば見るほど面白い森だな」

使い魔の森の中をはしやぎながら歩いていた。リアス達から離れた途端に一人でどんだん奥地へと入ってきてしまったのだ。使い魔の森は奥へ行くほど強いモンスターに出会えるがその分のリスクも伴う。強ければ強いほど捕獲するのはより困難となるのだ。その中で最もリスクが高いのが『天魔の業龍ティアマット』である。ザトウジがそのカタログを取り出した途端に興味を示し即効に探しに行ったのである。

長い道のりを歩いていると景色が段々と怪しくなり、木の形も不気味に見えてきた。

「何だ？ 気味悪くなってきたな」

その瞬間

ドカアアアアアああああんっ！！！！

ゼノがいた地面がいきなり大爆発を起こしたのだ。間一髪ゼノは避けたものの愛用の長ランが少し焼けてしまったようだ。

「!?びつくりした！なんだよ今の!?!」

「ほう。今のを躲すか」

「ああ?」

いきなり上から声が聞こえ、ゼノが見上げるとそこには一体のドラゴンが翼を広げていた。

「気づかれぬよう気配を消して見たのだが中々の感知能力だ。人間とはいえさすがだな」

そのドラゴンは翼を羽ばたかせながら舞い降りるとゼノを見た。

「何だお前?」

「我が名は『ティアマツト』他の者どもからは『天魔の業龍』と呼ばれている。それよりも、人間が何故こんなところに?」

「あく同じ部員の悪魔が使い魔を取りに行くって言ってたからな。興味が湧いて来た。そしてここに住んでる中年のおっさんからアンタを紹介されてな。会いに来たんだよ」

「うち…ザトウジめ……………また私を紹介したのか…」

「と言うかお前、声の質からしてメスか?」

「ああ。そうだが?」

「成る程」

そう言うときゼノは長ランを着直すと構えた。

「最近ちよつと鈍ってた。ちよつとウォーミングアップさせてくれないか?」

そう言った瞬間、ティアマツトは目を怪しく輝かせゼノを睨んだ。

「ほう?人間ごときが私でウォーミングアップだど? 大した自信だな?」

「うお!?なんだこれは!?!」

ティアマットはいきなりの烈風に吹き飛ばされ、状態を崩してしまった。そしてその間に巨大な火球も打ち消されてしまった。

それだけではない。放った拳圧によって生じた烈風は周りにも影響を与えており、周りの木々を根こそぎ吹き飛ばしていった。

「うわああああ!!」

状態が完全に崩れて、羽ばたく事すら不可能になったティアマットは風に吹き飛ばされていき、

風が止むと同時に重力によって下に落下した。

「う……ぐ………な……何だこの力は………これが人間の力だということか………」

嵐がおさまるとゼノは落下したティアマットにゆつくりと近づいた。

「どうだ?俺の力は?」

「く……驚いたぞ……人間である貴様がこんな力を持っていたとは……タニーンでもこんな芸当はできん……」

「タニーン?誰だそいつ?」

「私と同じ五代龍王の一角であり私よりも遥かに強いドラゴンだ。今は悪魔になっているがな………」

「成る程。あの赤龍帝みたいなドラゴンか」

「貴様……ドライブを知っているのか?」

「ああ。俺の後輩に宿ってるからな」

「そうか………」

「ま、そんなことより♪」………ジュール………

ギク!?

ティアマットはいきなりヨダレを垂らしたゼノを見て恐怖を感じずぐさま離れた。

「し……しし………尻尾はやらんぞ!!また生えてくるとはいえ痛いのだ!!! さ……さすがに勘弁してくれ!!!」

「ち…ならいいや。じゃあな」

ティアマツトに興味が失せたのかゼノはそのまま背を向け元来た道を辿って帰っていった。

道中く

「はあく。龍王と聞いて闘ってみれば肩慣らしにもならなかったな。これだとあのティアマツトが言ってたタンニーンとか言うやつも多分相手にならん。だがあのティアマツト…まだ成長しそうだな…」

ゼノはがっかりしながらもティアマツトに少しの興味を抱いていた。すると

「まー待ってくれ！」

後ろから聞いたことがあるような声が聞こえてきた。振り返るとそこには先程相手にしたドラゴンであるティアマツトが後を追って走って来た。

「何だ？追いかけて来やがって。リベンジか？それとも尻尾か？」

「いや違うわ！……」

するとティアマツトはゼノに近づき頭を下げた。

「先程は傲慢な態度をとってしまいすまなかつた…あの時貴方の力を見て思ったのです。自分は龍王でもまだ未熟であるということ…だからお願いにきました!!!」

ティアマツトは謝罪をしたかと思うと急に敬語になった。さほどゼノは驚きを見せないが次の言葉にゼノは想像以上に驚いた。

「私を貴方の弟子にしてください
!!!!!!」

「は……はああああああああああああああああ
!!!!!!!??????????」

初めての弟子

「私を貴方の弟子にしてください!!!」

「はあああああああああああああああああああ
!!!!!!!?????????」

しばらくして

「お願いしますお願いしますお願いしますお願いします
お願いしますお願いしますお願いしますお願いします
お願いしますお願いしますお願いしますお願いします
お願いしますお願いしますお願いしますお願いします
お願いしますお願いしますお願いしますお願いします
お願いしますお願いしますお願いしますお願いします
お願いしますお願いしますお願いします!!!」

「いやしつげーよーさつきつから言ってるんだろ！無理なもんは無理
！」

「いやお願いしますよーどうかーどうかーこの通り!!!」

もはや龍王のプライドもないのかその場で土下座し手さえも合
せた。先程から同じようなことを30分は繰り返していた。

「第一に俺人間だしドラゴンをどう鍛えればいいかわかんねーよ!!!」

「そんな…」

「はあく……人間だったらまだしも……」

ピク

「人間だったら……いいんですか？」

「ああ。人間だったらいいよ」

「分かりました」

「何を言っているんだこいつは」ゼノがそう言うや否や突然ティ
アマットが一瞬光ったと思いきや煙に包まれた。

ボンッ!!!

「ゲ ホツ ゲ ホツ …… 何 だ？ い き な り？
……………て」

煙が晴れるとそこには

「これでいいですか？」

浴衣を着こなした少女がそこに立っていた。

「ええー……」

するとその少女は近づくと深々と頭を下げた。

「よろしく願います。 師匠」

ゼノは『言ったもんは仕方ない』という事で渋々承諾しながら弟子にした。

その後ゼノはリアス達と合流し訳を話すとリアスとアーシアは納得したものの朱乃と小猫の二人からは壮絶な殺気が向けられたりしてイツセーに限っては「はああああああお前なんでもこんなムチムチなお姉さまを！くそおおおおお羨ましい！！！」

と喚くと「これが今代の赤龍帝か…なんと不快な…ドライグが可哀想だ」と吐き捨てられ吐血していた。

その後一行は使い魔の森を後にし、ゼノは皆と別れるとテイアマツトと一緒にマンションへと向かった。

—————

—————

—————

ガチャ

「上がれ」

「失礼します」

すると

「あ！お帰りゼノ。あれ？そっちの女の子は誰？」

「ああ。こいつは今日から俺の弟子になった……」「ティアマットです。今日からゼノ師匠の弟子になりました。」というわけで今日からここに住むことになった。」

「まあそうなの！さ！上がって上がって！」

そう言う二人は家の中へと入っていった。

—————

—————

——

「改めてよろしく。私は黒崎サリ、ゼノの姉でありおよm……ちげーだろ。こいつは頭が悪いんだ。こいつが言うことは大体嘘だから信用すんな」

「あ……はい」

今3人はテーブルに座りながら軽い自己紹介をしていた。自己紹介をし終わるとゼノは立ち上がり

「稽古は俺の時間が空いた時だ。流石に毎日やるとお前の身体が持たないからな。それ以外はくつろいでもらっても構わんからな」

「はい」

「てことで今日はもう寝る。お前も体を休ませとけ」

ティアマットが納得したのを確認するとゼノは寝室へと向かい横になった。

「気にしないで、ああ見えても本当は嬉しいんだから」

「え？どういうことですか？」

「要するに、家族が出来たってこと」

サリが言ったその言葉にティアマットは理解出来なかった。

Xmas!!の前日のイブのパーティでだいたい皆テ
ンション使い切るよね

12月24日、誰もが知る夢の日が駒王町にもやってきた。

金曜日

「メリ〜!!クリスマスス!!!」

いつもの商店街や駅の近くではサンタのコスプレをした人達がベ
ルを鳴らしちびっ子に風船を配っていた。

そんな中、賑わっている交差点を一人の少年が歩いていた。

—————

—————

—————

「あくだりい〜。つうか何でXmasだっていうのに学校あんだよ…
めんど」

その小柄な少年『黒崎ゼノ』は欠伸をしながら通学路を歩いていた
のだ。今日はXmasで人も多く流石に飛ぶのはマズイと思いつい
く歩いているのだ。

身長は小学生男児とあまり変わらない140ピツタリ。こう見え
ても18歳であり、駒王学園三年生である。更に、その歳にして宇宙
の頂点に君臨する『界王神』『破壊神』とほぼ同格の神格『銀河神』と
いう名の称号を与えられたのだ。といっても本人は全く自覚してい
ない。

雪が積もった道を進んでいると

「あ、ゼノ先輩…」

「よう、小猫か」

途中の分かれ道から雪のような白い髪を持った少女『塔城 小猫』
が出てきた。

「学校行くのか?」

「はい…一緒に行きませんか…?」

「いいぞ」

そう言うと二人は一緒に歩き出した。周りからすれば小猫がゼノより少し大きいので幼い姉弟に見えるようである。

「悪魔でも寒さとか気にするんだな」

「はい。悪魔も人間と共通してる箇所がいくつかありますしね」

「それにしても厚着だな」

ゼノは小猫の格好を見てそう言った。小猫の姿は制服の上にふわりとした学生ジャンパーにマフラーといった可愛らしい格好をしていた。

「意外と寒がりか？」

「当たり前です…。それに先輩だつて」

小猫の言う通り、対してゼノの格好は制服のYシャツの上にセーターを着用し、その上にロングコートを羽織っているという高校生にしては珍しい着こなし方をしていた。

そう言いながら歩いていると

「あらあら、ゼノ君に小猫ちゃん」

二つ目の曲がり角からは長い黒髪を後ろでポニーテールにし、女性にしては明らかに…!!高らかに!!高あああああああ身長を持った少女『姫島朱乃』が現れた。*ちなみに作者は160程、

「よう」 「おはようございます…朱乃先輩…」(く…ゼノ先輩と二人つきりで登校できるチャンスだったのに…)

「はい。おはようございます」(ゼノ君と二人きりで登校できそうだと思っていたのですが…小猫ちゃんが一緒とは計算外でしたわ…)

ゼノ以外の二人は内心互いを睨み合いながら挨拶をした。実は小猫と朱乃はゼノに好意を抱いているのだ。だが当の本人は女性に対する免疫が普通以下であり、あまりにも過激的にされたらすぐに気絶してしまうのだ。それ故に抱き着こうとしてもすぐ逃げられてしまうのだ

「うふふ♪一緒に行きませんか？」

「いいぞ」 「はい…」

そう言うとき3人は歩き、学校へと向かっていった？

—————
—————
—————

そして3人はそれぞれのクラスへと別れて入っていった。

「ふわあ〜!!」

「あら〜？珍しいわね、貴方がこんなに早く着くなんて」

ゼノが席に着くと隣から紅色の髪をした少女『リアス・グレモリー』に声を掛けられた。

「あ〜？今日は人多くて流石に目立つだろうと思って歩いて来たんだよ…：退屈だわマジで…」

そう言うとき背伸びをした。

「まあXmasだしね、はい。これ、」

そう言うときリアスは大きな箱を渡してきた。

「ん？何だこれ？」

「貴方とにかく肉が大好きでしょ？だから冥界で特上のチキンを取り寄せたわ。いつものお礼よ♪」

「お…おう…」（なんか…：すげえ悪いな…）

「それともう一つ、少し相談があるの？」

「イツセーにプレゼントをあげたいんだけど…：どうすればいいかしら？」

突然の質問にゼノは「何だ？いきなり？クリスマスは明日だぞ？」と返すと

「そうだけど明日じゃ間に合わないわ。朱乃達のは長い付き合いだから分かってるしアーシアやゼノヴィアも普通に聞けば分かるけどイツセーは男よ？どういいうものをあげればいいかしら…：それにあの子の事だから聞いたらプレゼントだってバレちゃうわ」

「成る程な。まあイツのことだからエロ本でいいだろ」

「確かに最初はそう思ったんだけど…：…：「思ったのかよ」

…：…：どうしましょう…」

「取り敢えずイツセーの友達に聞けばいいだろ？ちよつとこい」
「ええ!?これから授業よ!」

「いいから来い。イツセーを喜ばせたくないのか？」
「それはそうだけど……」

「お前がイツセーを好きなのは俺や朱乃がよおく分かってる。」
「そうですね」
「お前がイツセーを好きなのは俺や朱乃がよおく分かってる。」
「そうですね」
「お前がイツセーを好きなのは俺や朱乃がよおく分かってる。」
「そうですね」

「ありがと……（あれ？いつものゼノじゃない……）」

「取り敢えず行くぞ」

そう言うのと3人は二年教室へと向かった。

*ここからはリアスとゼノのツツコミかつボケの嵐をお楽しみください。尚ゼノとリアスが結ばれようとしてるかのように見えますが一切結ばれませんのでご安心を……あと、リアスが少し崩壊します。

――
――
――

二年生の教室に着いたものの二人はどうするべきか考えていた。
なお、途中に会った朱乃も同伴である。

「取り敢えずイツセー君がいることが厄介ですね……」

「だな、いつそのこと俺がボコして今日一日墓のなk……やめて!?貴方が言うマジでやりそうだから!」

「なら……イツセー君のお友達である『松田くん』『元浜くん』さえ見つかれば……」

「それだ!朱乃!ちよつと待ってろ」

「待ちなさい!貴方前に二人から酷い噂を流されたでしょ!?大丈夫なの!?!」

「大丈夫大丈夫。ちゃんと穏便にすませるから」

ゼノはリアスと朱乃にグツジョブ!すると二年の教室へと入っていった。

「心配だわ……」

「いや過去に何があったの!? え…と、ごめんなさい…急に呼び出して…イツセーといつもいる貴方達にしか聞けないことなの…」

「そうですか…」

先程ゼノにボコボコにされたことにより二人の顔はメチャクチャ腫れ上がっていた。

「イツセー君の好きなものってなにか分かる?」

「イツセーですか?」

「アイツは大抵おっぱいにしか興味ないですよ…」

「そうなの…」

「なら仕方ねえな」

そう言うとゼノは二人を返した。

3人目

桐生 藍華

「イツセーが好きなものを知りたいんだけど何か分かるかな?」

「ん…よくわからないですね。まあアイツは大抵女性の胸だけしか頭に入ってませんから」

「そうなの…」

最後の希望

アーシア

「イツセーが好きなものって何だか分かるかしら?」

「ん…私もよく分からないんです…ごめんなさい」

「いいわ…」

するとアーシアは何かを思い出したように『あっ!』と声を上げた。
「そういえばこの前、お店の前を通ったら…」

『ちつくしよく!!!毎年毎年リア充供がチョコ交換しやがって!見てろよ!来年こそ絶対に手に入れてやるからな!!』

……と、ガラス越しに何かを貪るかのように噛み付いてたんですが
…

……………

「それ……………バレンタインじゃない…………?」

—————
—————

「結局ダメだったか」

「なんか疲れたわ……」

あの後3人は授業を受け終わると部室へと向かいソファアに腰を下ろした。ちなみに今日は部活は休みである。

「やっぱりイツセーにはエロ本の方が良かったのかしら……」

「その発想から離れる。もうここはストレートに手作りもんとかでいいだろ」

ゼノの提案にリアスは『なるほど』と納得した。

「買う発想から離れて手作りで思いを込めるっていうのも手だと思っ
が」

「そうね……ありがと。お陰で助かったわ」

「いえいえ」「うふふ」

—————
—————
—————

ガチャ、

「ただいま〜」

「お帰り〜!」

あの後3人はすぐに解散し、マンションについたゼノは玄関を通り中に入った。すると中には懐かしのあの人がいたのだ。

「師匠!？」

「ん? やあ〜ゼノ」

「お邪魔してま〜す」

自分の師匠である『破壊神ビルス』とその師匠『ウイス』がいたのだ。

「どうしてここに!？」

「いや〜地球ではこう言う日にご馳走を食べるんでしょ? 地球に降りた直後にサリさんに会って」

「今夜のパーティに招待されたんです♪」

突然聞かされた事にゼノは驚きを隠せなかった。

「あともう一人招待したんですけど〜……」

「もう一人? 誰?」

ウイスの一言にゼノは頭に? を浮かべた。すると

ピンポーン

突然のインターホンが鳴った。

「はあ〜い」

ゼノが鍵をあけ扉を開くとそこには厚手のコートを纏った見知らぬ女性が立っていた。その女性はゼノを見た瞬間 手を広げ抱き締めめた。

「ゼノくーん!!」

ムギユ

「むぐう!？」

「久しぶりに会えて嬉しいわ〜!!」

その女性はサリに匹敵するほど豊満な胸をゼノへ押し付けてきた。

「む……ちよ……や……／＼やめろ!!」

するとゼノは力任せにその女性の抱擁から逃れた。

「なによ！久しぶりに会えたんだからもう少し抱きついたっていいじゃない！」

「な何だよいきなり!?誰だお前!?!」

ゼノはその女性に見覚えがないのだ。

するとその女性はゼノと同じ高さまで腰を下ろすと

「私よ！時の界王神よ」

「はああああああああああああああああああ!?!」

—————

—————

——

「おや？知らなかったんですか？時の界王神は子供の姿と大人の姿その両方に変身できるんですよ?」

「いや知らないですよ…そんなり〇ーンてきな設定…」

「〜♪」

時の界王神に抱き着かれながらも、料理しているウイスから説明を受けても納得できなかつたのだ。

「まあこの姿の方がゼノ君を抱っこしやすいし♪」

「離れろッ!!」

すると、キッチンからサリとウイスが大量に焼かれたチキンを持ってきた。

「はあ〜いチキン焼けたよ〜」「焼けましたよ〜!」

テーブルに大量のチキンや寿司などが並べられ、全員に飲み物が渡される。

「これが今世のチキンか！なんとも香ばしい匂いだ!」

ビルスは目の前に並べられた食べ物に目を輝かせていた。

「ほら師匠、行儀悪いぞ。まずは飲み物持つて」

そう言い皆はジョッキを手に取った。

「では…メリークリスマス!」

『メリークリスマス!!』

その声と共に皆のグラスが掲げられた。

「あれ？　そういえばゼノは？」

「ゼノ君ならビルス様の所へ行くと言っていましたわ」

「え……」

　　ビルス城にて

「ん？　急に呼び出してなに？　て言うかそいつ誰？」

　　ゼノはビルス城へと着くとそこには見知らぬ女性が立っていた。

「じ……実は……」

　　回想

　　あれはほんの数日前……

　　僕らは地球から少し遠い星にいった。惑星サーガという星だ。その星は地球より何倍もの重力があつて森や木々が生い茂っているとても綺麗な星だった。……

「ん？　この星久しぶりに来たけどあんま変わらないね」

「そうですね。景色もいいですしお弁当作ってくればよかったです。」

　　そう言いながら僕らはその星を歩いてたんだ。するとどこからか声が聞こえたんだ。

「ん？　何だ？　この声、あっちの方から聞こえて来たぞ？」

「声の質からして女性の方のようですね…行ってみましょう。」
そして僕は声のする方に向かった。そこにいたのが……

「この人ってこと？」

「んん……」

「でも何でここにいの？」

「それはね……」

僕らがそこについて見つけた時、その女性は重力を物ともせずにかつちに走って来たんだよ。

「は!! やつと助けに来てくれたんですね!! もう待ちくたびれましたよ
〜!!」

「は……？」

「い……いやいや…僕は助けに来たわけじゃ…それに…君誰? どう
やってここに来たの? ……」

そう僕は女性に言う

「はっ!! 申し遅れました。私の名前は黒崎サリ。宇宙を旅している内
にここに不時着してしまいました…どうぞお見知り置きを」

「……………黒崎……………」

〜回想終了

「で、この人が君と関係あるのかな? と思って連れて来たんだよ」

その瞬間、ゼノは目を見開き、その女性を見つめた。その顔に、ゼ
ノは見覚えがあった。

「まさかお前……宇宙に旅立った俺の……姉……………」

ゼノがそう言った瞬間その女性は目をパチクリさせた。

「え……? 貴方……もしかして……………ゼノ?」

「う……………うん……」

ゼノがそう言った瞬間、その女性はゼノを抱き上げた。

「きゃあー!! 貴方本当にゼノなの?!! 大きくなったじゃない!!!」

「わっわわわっ!!」

「え…」

ビルスは何が何だか理解できないでいた。がそんなことは御構い無しにサリという女性はゼノを抱き上げたままクルクルと回り喜んでいたり。

「!!会えて嬉しいわ!!!なん年ぶりかしら!!!」

「やややめろ!!!は／／恥ずかしいだろ／／／／」

「いいじゃないの〜！久しぶりの姉弟再会なんだから〜!!!」

「ウイス…これ…どういうこと…!?!」

ビルスがウイスを見るとウイスは涙目となっていた。

「くずつ…：わかりませんか…：？なん年も離れ離れになっていた姉と弟が再開したんですよ…!!泣けるじゃありませんか!」

「そ…：…そうなの…：いまいち分らないけど…：…」

「さー!!!邪魔者は退散です!!」

そう言うとウイスはビルスの背中を押しながらその場を離れた。

「えー?!?!ちよ!!なんで!!!ここ!!こいつを離しよ…：…」

「ゼノ〜!!!」

2人だけになった途端サリはゼノはきつく抱きしめた。

「ギヤアアアアアアアアアア!!!離れろー!!!」

!!!!

30分後

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「ゼエ…：…ゼエ…：…ゼエ…：…ゼエ…：…死ぬかと思った…：…」

あれから30分間ゼノは抱き締められようやくやくと解放され現在サリはウイスと話していた。

「ではサリさん。貴方はこれからどうしますか?」

「うくん…：…：…！決めた!!私！地球に戻ります。」

「よろしいんですか？」

「はい!!もう思いつきり楽しめましたし!あとゼノにも会えたので!

「分かりました。では、地球へお送りしますね。ゼノさんも」

「はい(…)」

そして2人は地球へと帰ったのだ。

「……………僕なんか……………出番少くない……………?……………」

く地球く

ゼノ達が着いた時はもう夜中であつた。

ウイスは近くのアパートに着地するとそのまま帰っていった。

すると、サリはゼノへと話しかけた。

「ねえゼノ、貴方いまどこら辺に住んでるの？」

「近くのアパートで一室借りてる……早く行くよ……もう眠い……」

「え？お父さんとはすんでないの？」

サリがそう聞いた瞬間、ゼノの目が鋭くなった。

「……あんなクソ親父なんかと……一緒にいられっかよ……」

「え……？」

「早く行くぞ……」

そう言うとゼノはアパートへと向かって行った。

「え!?待ってよ〜!」

聖剣の訪問

次の日

リアス side

私のクラスでは先生が朝のHRを行っていた。そこには何故かゼノの姿が無かったのだ。

不思議に思い私は先生に聞いてみた。

「えつと先生…黒崎君は……」

「ん？黒崎君なら今朝に欠席連絡が来てね。何でも熱とか」

「え……」

(珍しい……いつもテンションが高いあのゼノが……絶対裏がある……うん……そうに違いない……)

そう思いながらも私は一時限目の用意をした。

side out

一方その頃 ゼノはというと……

「ぐおく……ガァーグギギが……ガァー!!!ぐぎがぎがぐか!!!」

寝ていた……

放課後

ガチャツ

「ヤッホ〜♪」

「……あらゼノ、熱は大丈夫なの？」

「あ〜……うん……」

・
・
・
・
・
・

((絶対ズル休みだ……))

皆がそう思う中ゼノはソファへ座ると一風変わった木場の表情に気がついた。

「ん？どうしたの？裕斗は？」

「…実は……」

リアスはゼノに昨日の出来事と木場の過去を話した。

「成る程、つまり裕斗はその聖剣とかいうのを恨んでるってことね。それであんな目を」

「そう…そしてその聖剣使いが今日ここへ来るの。貴方は神クラス以上の力を持つ者…相手はおそらく…貴方を戦力に引き入れようとするわ。万が一勧誘されても乗らないよう気をつけて頂戴…」

「ん」

そう言うとりアスは机からソファへと移った。さすがのリアスも同じ部員であり同級生でもある彼を勧誘されるのは気に食わない様だ。

「聖剣使いがねえ…用件はなんだか　はむっ…はむはむはむっ……」

そう言いながらもゼノはその場でロールケーキを頬張り出した。

「先輩…私も欲しいです…」

「いいよほれ」

「頂きます…　はむっ…　♪」

「全く…この2人ったら……」

「あらあらいいじゃないですか。ゼノ君、私にも頂けますか？」

「いいよ　はい」

「朱乃まで!?はあ…これから会談なのに…」

それから何分か3人のお茶会は続いた。

そして、数十分後、刻は来た。

ガチャ

「失礼する。ここがリアス・グレモリーのいる場所で間違っていないだろうか」

「ええ。座って頂戴」

「失礼します」 「お邪魔する」

入って来たのは白いローブを着用した青髪に緑のメツシユを入れた少女と栗毛のツインテールの少女であった。

「今回は会談を引き受けてくれて感謝する。私の名はゼノヴィア・クアルタ」

「私は紫藤イリナよろしく♪」

「改めまして、リアス・グレモリーよ。教会の者が私達に何の用なのかしら?」

互いの自己紹介を終えるとメツシユの少女が話しを始めた。

「先日カトリック、プロテスタント、正教会側で管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われた」

「え!? エクスカリバーって複数あんの!?!」

イツセーは訳が分からず話についていけなかった。

「ゴメンなさい……エクスカリバーの説明込みで話してもらえないかしら」

リアスの申し出にイリナという少女は頷きイツセーの方を向き説明した。

「イツセー君、エクスカリバーは大昔の戦争で折れてしまったの」

「今ではこの様な姿さ」

するとゼノヴィアという少女が傍にあるものを解いた。

それは、一本の剣であった。一見は普通の剣だが、見る者には分かる。凄まじいエネルギーを放っていた。

すると、ゼノ以外のオカ研部員は冷汗を流した。

「それが聖剣か。見る限りかなりの代物のようだな。しかもこの布、この聖剣を目立たなくするための術も施されてる」

「…勘がいいな君は」

「そりゃあどうも」

ゼノは布の巻かれた聖剣を指でつつく。

「大昔の戦争で折れた聖剣の破片を錬金術によって新たな姿としたのさ。これがその一つ、私の持っているエクスカリバーは破壊の聖剣（エクスカリバーデストラクション）」

もう1人は懐から一本の紐を取り出した。するとその紐は意志を持ったようにうねり出し一本の日本刀へと姿を変えのた。

「私のは擬態の聖剣（エクスカリバーミミック）この通りエクスカリバーはそれぞれ特殊な能力を有してるの」

「イリナ…わざわざ悪魔にエクスカリバーの能力を見せる必要はないだろ」

「あらゼノヴィア、いくら悪魔だからと言って信頼関係を築かなくちやいけないわ。それに、聖剣の能力を知られたからってこの場にいる悪魔さん達には遅れをとることはないわ」

イリナという少女は自慢気に話すと聖剣を懐にしまった。

「奪った連中はこの地に持ち込んだらしい。奪った犯人はグリゴリの幹部、コカビエルだ。」

その名を聞いた瞬間、リアスは表情を歪ませた。

「コカビエル……古の戦いを生き残る堕天使の幹部……聖書にも記された者の名前を出されるとはね…」

「そうだ。我々の依頼は今回の件に一切関わらないでいただきたい」「随分な言い方ね」

あまりにも傲慢な態度や言い様にさすがのリアスも頭にきているようだ。

「悪魔が堕天使と組む恐れがあるかもしれないと本部側が疑っているからね」

「私は堕天使とは絶対に手は組まないわ。グレモリー家の者として魔王の顔に泥を塗る様な真似はしない！」

「フツ……それだけが知れて充分だ」

「まさか、貴方達2人で戦うつもり？」

「そうだ正教会は保留としてだがね」

「死ぬつもり？」

「そうよ」

リアスの質問にゼノヴィア、イリナは続けて応えた。

「私もイリナと同意見だ。だが死にたくはないな」

「はあく……全く……貴方達の信仰心は理解できないわ」

我が身さえも捧げるその異常な信仰心にリアスは額に手を当てて呆れてしまう。

その一方で、彼女らも自身の信仰心の異常さに自覚はあるようだ。

「私達の信仰心は異常なのよ。ね？ゼノヴィア」

「ハハッ！そうだな。」

そう言うときゼノヴィアは立ち上がった。

「では、そろそろ失礼させてもらう」

そして2人は部屋を出て行くとした。だがドアに手を掛ける直前に立ち止まると、イツセーの横にいるアーシアへ鋭い視線を向けた。

「まさかとは思ったが……貴様……『魔女』アーシア・アルジエントだな？」

「あく貴方が噂の悪魔になった元聖女さん？」

「え……」

ゼノヴィアの口から発せられた『魔女』という言葉にアーシアは動揺する。隣にいたイツセーも魔女という言葉に対し少し驚いていた。「しかし元聖女も堕ちたところまで堕ちたな。まだ我らの主を信じているのか？」

「ゼノヴィアく悪魔になった聖女さんが主を信じてるわけないでしょ？」

「いや、その子から信仰の匂いが微かにする。やはりまだ信じている様だな」

ゼノヴィアからの問い詰めにアーシアは口元を震わせながら答えた。

「……捨てきれないだけです……ずっと信じてきたので……」

「そうか」

アーシアがそう答えた瞬間、ゼノヴィアは聖剣をアーシアに向かつ

て突き付けた。

「ならば今すぐ斬られるといい。今なら我らの神も救いの手を差し伸べてくれるはずだ。」

「触れるな！」

その時、アーシアを庇うようにイツセーが2人の間に入った。

「アーシアを魔女と言ったな！」

「そうだ。今では魔女と呼ぶべき者だ」

イツセーはゼノヴィアの言葉に怒り、奥歯を噛み締めた。

「ふぎけるな！アーシアの優しさも理解できずにすぐに斬るとか言いやがって！そんなの間違ってる！」

「聖女に友人が必要だと思うのか？友人を求めた時点でアーシア・アルジェントには聖女の資格はなかっただろう」

ゼノヴィアは表情を変えず当然の様に言った。

「それに、さつきから聞いていれば、君はアーシアの何だ？」

「家族だ！友達だ！仲間だ！だからアーシアを助ける！お前ら全員を敵に回しても俺は戦うぞ!!」

その瞬間、ゼノヴィアは目を細め、イツセーを睨んだ。

「それは我々に対する宣戦布告か？よかろう。ならばアーシア・アルジェント纏めて貴様も私の手で断罪してやろう」

そう言うときゼノヴィアはイツセーに向けて聖剣を突き付けた。

「イツセー、おやめなさい」

それを見たりアスは止めるべく立ち上がる。今ここで争いを起こしてしまえば悪魔と教会の間での関係が更に悪化してしまうだろう。そうなれば最悪の場合、戦争だ。

最悪のケースを危惧したりアスはイツセーを抑制しようとする。

その時だった。

「ぶ……プハハハッ!!」

今まで脚を組みながら座っていたゼノの高笑う声が響き渡った。その笑い声にゼノヴィアは反応すると、アーシアに向けていた鋭い視線をゼノへと向けた。

「貴様…何がおかしい」

「悪い。お前らが信じてる主は随分と位の低くて下らねえ神様だ
なって思ってたな。代弁してるつもりなのか分からないけど、信者1人
救えない神ならもう神じゃないだろ」

その言葉にゼノヴィアは額に青筋を浮かべる。

「貴様…その言葉は我らの主を侮辱しているのか…？」

「捉え方は人それぞれだが…。うん。そう捉えていいな」

「…ッ!!」

ゼノヴィアはアジアに向けていた聖剣をゼノへと向けた。後ろ
に立っているイリナも同じくご立腹の様子である。

「例え一般人とて許さん…貴様も断罪してやる!」

「いいよ。受けてやる」

ゼノは笑って答えていたが次の瞬間ゼノの目が怪しく光りゼノ
ヴィアを睨んだ。

「ちようどこつちも…いきなりズカズカ入って来た輩に好き勝手やら
れてちよつとイラつと来てるからな」

ゼノは笑っているのではなく

若干 “怒っていた”

「丁度いい。僕も相手となろう」

ずつと黙っていた木場がいきなり言い出した。

「誰だ君は」

「君たちの先輩だよ…!」

聖剣との対決

聖剣使いから決闘を申し出されたイツセー、ゼノは旧校舎の広いスペースへと移動した。

「では始めようか」

ゼノヴィアとイリナは着ていたローブを脱ぎ捨て、露出の少ないポニーテージ姿となると聖剣を構える。

対するイツセーは神器を展開し、倍加を開始した。見ればイツセーの横には何故か木場の姿があった。

なぜ彼がいるのか？

—————

それは数分前：

「木場：お前、俺の獲物を横取りするのか？」

ゼノが闘う筈であったゼノヴィアの相手を木場が代わりに名乗り出たのだ。それに対してゼノ自身は怒りを露わにし彼を睨むも木場はそれに臆する事なく引こうとはしなかった。

「すいません。ですがこれは先輩であろうと譲れません。僕の長年の復讐でもあるのですから…」

「随分と生意気だな。この場で地球ごと破壊してやってもいいんだぞ？」

「破壊してくれるのであれば…聖剣も無くなるのでありがたいです」

「……まあいいか。好きにしろ。やられたら俺に代われよ」

木場の覚悟と心の内を読み取ったのか、ゼノはあっさりとその場を譲り離れたのだ。

—————

「アイツを庇ったつもりか？まあどの道 後で奴も断罪してやるつもりだがな。私達の主を侮辱した罪は許されるものではない」

ゼノヴィアが聖剣を構えた時であった。

「ふ……ふふふ……ふふふふふ……」

突然と木場が壊れた人形のように笑い出した。

「なぜ笑っている？」

「いや……壊したくて壊したくてたまらないものが目の前にあるからついでね」

その言葉と共に木場の周りの地面から無数の剣が現れ、その内の一本を引き抜くと構えた。

「魔剣創造か……面白い。ではいくぞ!!」

そして、両者は剣を構え激突し、それと同時にイツセーとイリナも勝負を始めた。

く

「ようやく始まったか」

「先輩は戦わないのですか？」

小猫の問いにゼノは首を横に振る。

「木場に譲った。もう勝負は見えてるけど」

「どういうことかしら？ゼノ？」

リアスに訪ねられたゼノは簡単に説明した。

「今の木場は見るからに、興奮して我を忘れてる。動きも滅茶苦茶でただ剣を振り回してるだけだ。でもあの女は冷静で木場の攻撃を防いでる。しかも、あの聖剣の特性は破壊。となると今の木場とじゃあ相性が最悪だ。一瞬の隙を突かれて負ける」

「そんな……」

「それに、イツセーを見てみる」

そう言うとは皆はイツセーの方へと目を移した。見るとイツセーは手に魔法陣を展開させそれをイリナへと当てようとしていた。

「あの魔法陣って……」

「まさか……」

「ああ……服を剥ぎ取ろうとしてる」

「イツセー……」

「イツセーさん……」

「イツセー変態……」

「あらあら」

するとゼノは横になった。

「少し寝る……終わったら起こして……zzzzz……」

「貴方どれだけ寝るの!?!」

リアスがそう突っ込むもゼノはもう寝ていた。

「もう……」

「まあまあいいじゃないですか」

そう言うと朱乃はゼノの頭を自分の膝へ置いた。

「朱乃先輩……なにしてんですか……」

「うふふ　膝枕ですわ」

「う……」

「小猫ちゃんも一緒にいいですよ?」

「………いいです」

「あらあら」

「………(寝顔が少し可愛かった……)」

〳数十分後

ようやくくゼノは目を覚ました。

「ふわぁく!!ん?」

「あらあら　よく眠れましたか?」

「朱乃か。イツセー達は?」

「残念ながら負けてしまいましたわ」

見るとイツセーと木場はうつ伏せで倒れていた。そして何故かイツセーは右頬が半端なく腫れていた。

「なるほど。じゃあ次は俺か。取り敢えず髪は簡単にまとめよつと」
そう言うとゼノは状態を起こし三つ編みを解きポニーテールにし、
2人の元へと向かった。

〵

ゼノが行くと2人は目を鋭くした。

「最後は貴様か、待ちわびたぞ」

「私達の主への侮辱…許さない。思いっきり断罪してあげるんだから！」

その怒りに満ちた表情を二人から向けられたゼノはそれを意に介す事なく歩み寄る。

「へえ。なら楽しませてくれよ」

そして、二人の前に立ち、首を回すと手足をブラブラとし、準備運動をするとゼノは人差し指を出して誘う。

「こいよ…？」

「…！」

二人はその動作を合図と受け取り、聖剣を握りしめると一気に踏み出した。

「では行くぞー！」

2人は一斉にゼノ目掛けて走り出した。

そして2人の握る聖剣はゼノの胴体目掛けて左右から滑るように放たれた。

「ハッ！」「アーメン！」

だが鍛え上げられたゼノの動体視力はこんな動きなどハエが止まって見える程度にしか受け取れなかった。

「遅い」

「…！」

ただそれだけが辺りに聞こえると共に二人の振り回された聖剣はあっさりとゼノに掴まれてしまった。その上、なんと二人の両腕の腕力を込めた一撃が、左右の人差し指と親指だけで止められていたのだ。

「うぐ…！？…！？………（な………何だ………この力は………こんな子供に何故これほどの…）」

「うーん！な…なんなのよこの力!？」

2人はゼノから聖剣を離そうとするが、ゼノの力が驚異的すぎる為にピクリともしなかった。そんな中、聖剣を摘んでいたゼノはつまらなそうな表情と共にあくびをだす。

「ふわあ…この程度か？」

それだけ言い捨てるとゼノは掴んでいた聖剣を放した。すると教会組2人はその反動で後ろへ仰け反り少し体制を崩した。

「くっ…！言わせておけば!!！」

体制を立て直した2人のうち1人であるゼノヴィアが向かってきた。

そしてゼノヴィアは聖剣をゼノの胸部へ目掛けて回し斬りを放った。

「くらえ!!！」

「よっ」

だがゼノはその回転斬りを再び人差し指と中指で止めた。

「な…なに!？」

ゼノは掴んだまま自分の方向へ手を引き、それにつられたゼノヴィアを聖剣ごと後ろへ放り投げた。

「グハッ！」

「ゼノヴィア!!！」

すると今度はイリナが剣を構え、突撃してきた。

「はあ…力の差も理解できないのか…！」

「アーメン!!!」

「遅い」

振り下ろされた一撃をゼノは吐き捨てながら難なく受け止めると人差し指に力を込める。

そして表面から衝撃を与えるようにゼノは人差し指をイリナの鳩尾へ打ち込んだ。

「があ…！」

放たれた2つの衝撃にイリナの身体は耐えられず、イリナは一瞬な

がら白目を剥くとゆっくりと目を閉じながらその場に倒れてしまった。

「イリナ!!」

ゼノヴィアはイリナの元へと走るとイリナを抱き上げた。命に別状はないにしろ、リタイアは確定だろう。

イリナを抱き上げるゼノヴィアを見ながらゼノは首を鳴らす。

「さて、まだ続けるか?」

「っ……」

向けられた眼光にゼノヴィアは悔しむ。主をバカにされた以上彼を許すことはできない。今すぐにでも斬り伏せたい。そんな願望があるが、彼から放たれる威圧によってその願望は消え失せていた。

ゼノヴィアは唇を震わせながらも降参を口にした。

「……悔しいが…私達の負けだ…」

ゼノヴィアが負けを認めた事で決闘は終了した。

◇◇◇◇◇

それからゼノヴィアはイリナを担ぐとこの場を跡にする。その際に後ろで見ていたイツセーに目を向けると、ある事を教えた。

「去る前に…赤龍帝　一つ教えておいてやる」

“白い龍は目覚めているぞ”

「!!」

その言葉にイツセーは硬直した。

「では、失礼する」

そう言うゼノヴィアはこの場を去っていった。

すると木場も立ち上がりこの場を去ろうとした。

「待ちなさい裕斗!あなたは私の眷属なのよ!勝手にはぐれになるなんて許さないわ!」

「……すみません…部長…僕ははぐれになろうと同士の仇を打ちたいのです……」

そして木場はそのまま林の向こうへと消えていった。

「裕斗……」

木場が去った直後にゼノヴィア達の相手をしていたゼノは欠伸をする。

「グレモリー、俺もそろそろ帰らせてもらおう」

「ええ…分かったわ…」

それだけ言い残したゼノも林の奥へ消えていった。

残された皆は見送る事しか出来なかった。

くピザ屋

「お待たせしました。マルゲリータです。(墮天使コカビエルか……明日にでも調べてみるか……) ありがとうございます」

その頃

誰もいない廃墟にて

「ほほう、とてつもない斬れ味のある剣ですな。こんな硬い岩石をも切ってしまうとわく」

手に剣を持った謎の人影があった。

1人は剣を持った白髪の少年

「しかも聖剣よりも威力のある剣とはな。これまた驚いたわ」

もう1人は神父服を着用した老人であった。そして後ろにもう1人の影があった。

？「当たり前だ。神々が扱う神聖な剣なのだからな。それと貴様らの持つ聖剣とやらを合成すれば最強の剣になるだろう」

「しかしこれだけの斬れ味があるとすれば流石に重いのではないのか？」

「安心しろ。私の力で軽くしてある。本来の重さなら貴様らでは持つどころか動かすこともできないからな」

「なぐるほどくならば今度はこの剣であいつらを切り刻んじやいますかなん♪」

続く

姉との夜

ゼノ side

聖剣の女2人が去った後、俺はいつも通りバイトをすまし家へと帰った。

「ふわあ〜!!疲れた〜」

「おかえりによ〜」

こいつはお隣に住んでる『みるたん』。俺がこのアパートに引越してからすぐ仲良くなった奴だ。格好はともかく、めっちゃ巨漢で筋肉が半端なくてとんでもねえ戦闘力も感じたから最初は戦おうかと思っただがやめておいた。

え？理由？いや〜こいつと戦うとこの街がもたねえと思っただからさ。

「またバイトかによ？」

「ああ。この頃結構客多くてさ〜。疲れるんだよ〜。あ、これ余ったピザやるよ。出来立てだ」

「ありがとによ!こっちも最近できたお店のケーキ買いきすぎたからあげるによ!お姉さんと一緒にどうぞによ」

「ありがとな」

そう言うともみるたんは高価そうな箱を俺に渡した。こいつとは趣味は合わないが食い物で凄く気が合い時折こうして食い物を分けてくれるから正直ウイスさんの次に感謝している。

「ほんじゃな」

「おやすみによ」

ガタン!

「お帰り〜!!!ぞ〜ノ〜!!!!!!」

「よっ」

ガシャーーン!!!!!!

帰った途端姉が抱きつこうと走ってきたが俺はすんなり避けて姉は後ろの荷物の束に突っ込んだ。何故かこつちに戻って俺が一人暮らしだって知った途端「私もここで暮らす!」とか言い出してかつてに住み着いた。

「もく!!いい加減避けるのやめてよく!!たまには抱きつかせてくれたってっつていくじゃん!! ケホツケホツ…」

「バカやってないで早く飯食うよ。ほら、みるたんがケーキくれたから」

「はーい」

「いただきます」

俺は今姉が作った料理を食っている……何故だ………美味すぎる!!

何故か姉貴は俺よりも家事が出来るし仕事も有名な企業に就職して凄く稼いでいる。でもそのお陰でこつちも生活費などを助けてもらっていて凄く感謝しているが……なぜだ……

(何故だ!!)

「どう?美味しいでしょ?お姉ちゃんが作ったご飯は」

「……悔しいくらいに美味しい……」

「ふふふ…地球を離れてる間いろんな星に行ってきたからね。どう?お姉ちゃんお嫁に欲しくなった?」

「いらん」

「ええ?一人じゃ何にもできないくせに」

「う…うるさい!!おかわりッ!!」

そして全部食い終わるとデザートであるケーキを食べ始めた。

「それで、どう?学校は?」

「ボチボチと、でもうちの学校は悪魔とかが結構いる」

「へえ!!悪魔がいるんだ!私も教師で入っちゃおっかな!!」

「やめろ」

「え」

「(ちそうさまでした)」

「さて、風呂に入ろつと…」

「あーじゃあ私も…「くんな」 え〜」

シャアーーーーー

キュツ キュツ キュツ

チャポン

(何でこんな事に……これじゃあ家でも学校と殆ど変わらん…)

そう思いながら湯船に浸かっていると、翌日の入口の扉にシルエツトが映し出された。

ガラガラガラガラガラ

「ゼノー！ やつぱり私も入るよ〜」

いきなり扉が開き、タオルを巻いたサリがニコニコしながら入ってきた。

「わあ!? はいってくんなー／／／／／／／／／／!!!」

「ええ〜? いいじゃない。たまには♪」

そう言いサリは入つてくるとシャワーを浴び始めた。一般男性よりも高い身長に加え豊満に育った胸はシャワーが当たるたびにゆさゆさと揺れていた。

ゼノは直視しないようにずっと後ろを向いた。するとシャワーの栓を閉める音がし、チャポンと湯船に入る音がした。

「あ…俺…そろそろあがるな…」

あまりの恥ずかしさにゼノは湯船から上がろうとしたが……

「えい♪」

ギュー!

「な!!!」

「えへへ〜逃がさないよ〜!」

そしてゼノは強引に湯船に戻されサリに完全にフォルドされて

しまった。ゼノは出ようと手足をバタバタさせるが抜け出せず観念し抵抗をやめた。

「……………」

「ふふふ。初めてね…こうして一緒に入るのは」

「……………ああ…」

「ゼノが生まれた直後に、お姉ちゃんは宇宙に行っちゃったからなく。寂しかったでしょ?」

そう言いサリは再びゼノを抱き寄せる。

「さ…寂しくなんかねえよ!!いくつだと思ってたんだよ!」

「え?13歳」

「身長で判断すんな!!これでもちゃんとした18なんだよ!!」

「はいはい♪そういう反応が可愛いから…もっと苛めたくなっちゃうんだよね♡」

—————
ゾツ…!?

「…!?!」

サリの声のトーンから身体中に悪寒が走り出し、すぐさまゼノは浴槽を出た。

「そろそろ出る…」

「はい」

ザパアアーン

く

風呂から上がるとゼノは髪をとかし布団に入った。

「はあく…気分が休まるのは布団の中だけだよ…」

カチツ

そう言うとゼノは電気を消し、静かに目を閉じた。

深夜

「zzz……ん？」

ゼノは何者かの気配を感じ目を覚ました。

しかもすぐ背後にいる……油断しすぎた

そしてゼノはすぐ背後を振り向くと

「スウ……スウ……スウ……スウ……」

何故か姉であるサリがいたのだ……

(は!?何でこいつがいるんだ!?しかもガッツリ寝てやがるし!取り敢えず……)

カチヤン

「おい……」

「んう?どうしたの?ゼノ?」

「何で当たり前のように寝てんだ……」

「えへへ♪一緒に寝たいから♪」

「出てけ」

「えくやだよー1人じゃ寂しいし……それに、美味しい食事や生活費は誰が助けてあげてるんだっけ?」

「う……」

「ごもつともだ。サリが来てから今までよりもマシな食事を摂ることができ、生活費なども助けてもらってるのだからゼノは言い返せることは出来なかった。」

「変な事すんなよ……」

「♪」

カチヤ

そう言うとゼノは電気を消し再び眠りについた。

すると、サリはゆつくりとゼノに手を回し自分の方へ引き寄せ身体を密着させた。

ゼノの後頭部にサリの豊かな胸が形を変形させながら張り付いた。

「う……」

「く♪」

交渉

翌朝

「……………ん……………うあ……………朝……………?」

カーテンの隙間から差し込む光を受けゼノは目を覚ました。

「ふわああくあ……………動けん……………」

目を覚まし体を動かそうとしたもののサリにガツチリ拘束されていて思うように動かなかった。

「おい。起きろ。いつまでも抱きついてんじゃねーよ……」

「ん……………あと一時間……………」

「長い。はよ起きろ」

「はく……………」

く

「いただきました」

そう言い終わるとサリはビジネススーツへと着替えた。彼女は日本一流企業の社員であり毎朝忙しいのだ。

「じゃ、行ってくるね」

「ああ、気をつけてな」

そう言うとその場から仕事場へと飛んで行った。いつのまにかウイスから空の飛び方を教えてもらったようだ。

「さて、俺も行きますか」

そう言うどゼノもいつもの長ランへと着替えた。

く

「と言っても……………どうすればいいか……………」

どうしたらよいのか俺は途方に暮れていた……すると俺のスマホに電話がかかってくる。番号を見るとイツセーからだ。

「なんだ？」

『お！ゼノか！ちよつと話したいことがあるんだけどさ！今どこにいる?!』

「？場所を言え、こっちからいくから」

『えつと………ガストだけど………』

パタッ

「ガストならすぐ近くだな。とりあえずそこでおやつも」

そして俺はこの場から消えガストまで瞬間移動した。

）

イツセー side

俺は小猫ちゃんと匙と一緒に木場を取り戻すため聖剣使いの2人を探してようやく見つけ今ガストに来てる………けど………

「ハグハグハグハグハグ！おお!!!美味いぞ!!!」

「本当!!!これこそ故郷の味だわ!!!」

（どんだけ食うんだよ……俺の財布もそろそろ限界だつていうのによ!!しかもファミレスを故郷の味とか完全に舌腐ってんじゃねえか!?)

「しかし、悪魔に救われるとは世も末だな」

（ごちそうしてやったのになんつう口だよ！ああ神様！今すぐこの娘達に天誅を！）

「つて痛え!?!」

「悪魔が祈ればダメージが渡る事くらい把握してけよ……」

イツセーが心からイリナ達へ天罰を願った事で頭痛が襲う。そのそばでは小猫に襟首を掴まれ無理矢理座らされている匙の姿もあった。

「ああ主よ……この優しき悪魔たちに祝福を……」
「「……！いつててて!!」」

するとイリナは首飾りである十字架を握りしめた。俺たちは悪魔だから当然のことにとてつもない程の頭痛が襲った。

イツセーの横では匙がとんでもなく落胆していた。

「(と言うか……何で俺まで……)」

「(しようがないだろ……木場は無理だし、部長や朱乃さんなんかは絶対許可してくれねえからよ……)」

「(だったら黒崎先輩呼べば良かったろ!!あの人1人いりやあすぐ済むじゃねーか!!)」

「(あ、そうか)」

「(お前は無能かあ!!兵藤おおおお!!)」
「(そうか!ゼノに頼めば!!)」

イツセーはそう思いゼノへ電話を掛けた

、

「よし」

「連絡しているところすまないが、私達に接触した理由は？」

ゼノへの電話が済むとゼノヴィアが俺たちに理由を求めてきた。

俺は2人にその理由を明かしある提案を持ちかけた。

「エクスカリバーの破壊に協力したい」

「うむ………一本くらいなら任してもいい」

「ちよーゼノヴィア!？」

「仕方ない。私達2人だけでは厳しいのでな。それで、手を貸してくれるのはそちらの三人だけか？」

「木場はともかくいまゼノに連絡しといた」

「イツセー先輩グツジョブ!」

ゼノに連絡した事を知らせると小猫は親指を上げてサムズアップ

する。

するとゼノヴィアとイリナが突然黙り込んだ。

「そのゼノとやらの事を少s…「俺の事を何?」

っ!」

聞き慣れた声。その声のした方向を見ると、

「よう」

数秒前まで何もなかった場所にゼノが立っていた。

side out

「ん〜?俺抜きで何やらと物騒な話してるな」

するとゼノは軽やかな物言いで小猫の隣へ座った。

「あ、すいません、チョコレートパフェ一つ。で、イツセー、俺を呼んだ理由を聞こうか?」

ゼノはパフェをせっせと頬張りながらイツセーに質問した。

「ああ、実はな…」

「成る程。木場を取り戻すために聖剣を破壊すんのか」

「いやまだ何も言ってないんだけど!」

「だいたい理解できた。ちよいとそのコカビエルっていう奴と戦ってみたくなってきたな」

そう言いゼノはグラスの底に溶けて溜まったアイスをズズズと飲む。

するとゼノヴィアは驚きの表情を浮かべすぐに制止させる。

「まさか君一人でコカビエルに挑むつもりか?それならやめておいた方がいい。一介の人間が墮天使ましてや幹部クラスなぞに敵うわけが…「黙れよ」　っ!」

するとゼノの表情は一変しゼノヴィアを睨んだ。

「昨日俺にあっさりやられた奴らが上から目線でゴチャゴチャと言っ
てんじゃねえ。俺が無理ならお前らでも100パーセント無理って
いう話になるぞ?」

「私は君の身を案じて忠告したのだぞ!」

「そうよ!」

「んな心配はいらん。まあ、どの道俺もこの計画にのらしてもらおう。
少々思い当たる点があるんでな」

するとイツセーはゼノに疑問を抱き質問した。

「それってどういう事だ?」

「俺の知り合いの所からも剣が盗まれてな、もしかしたら其奴らが
持つてるかもしれないねーと思っただからだ」

『剣』という言葉にゼノヴィアは反応した

「その剣は聖剣か?」

ゼノヴィアは自分達の所属する教会だけではなく、別の教会からも
盗まれたのかと思ひ質問をする。だが、ゼノはそれを否定した。

「そんな生易しい物じゃねーよ。その剣は扱えれば岩だろうと石だろ
うと、ましてや小さな隕石だろうと切り刻むことができる超業物だ」

「っ! 聖剣の他にもまさかそのような剣が存在していたとわね……。
……分かった君にも協力を頼むよ。かような剣、私達だけでは手に負
えぬかもしれないからな」

「だろうな」

話し合いの結果、ゼノもこの計画に参加する事となった。

「よし! 早速木場に連絡してくる!」

そう言うときイツセーは席を外し木場を呼んだ。

こうしてイツセー達の聖剣破壊計画が行われる事となった。

最強の剣の襲来

俺達はこの数日間神父服を纏い聖剣を使い暴れまわっているという神父を探している。何故俺もこの計画に参加したのかと言うと……

あれは俺がこの計画を知る3日前、俺が街をぶらぶらしていると

「ゼノサーーーん!!!」

突然界王神様が連絡してきた。珍しくも何ともないが何か結構慌てた様子だからとりあえず聞いてみた。

「なんだー！界王神様ー！」

「緊急事態です!!!とりあえずきてください!!!」

「は!?!」

そして呼び出された俺は界王神界へと向かった。

く

「んで？なんだよいきなり呼び出して」

「じ…実は…!!何者かによりZソードが奪われてしまったんです!!!」

「は？Zソードが？いつ？」

「ワシらが…神々の会合に出て留守にした時じゃ……」

「はあー!?!どんだけここのセキュリティシステムクソなんだよ!?!だいたいZソードなんて重すぎて持ち出すのも無理な物じゃねーのかよ!?!」

「いえ、魔人ブウの件で折れてしまった後ドラゴンボールの力で元に戻し重量も私達の手で操作できるように設定しておいたんですが……」

「裏目にでてんじゃねーか!!!!!!」

「とーとにかく!!やばいんせすって!!あの剣は素人でも隕石を切りきざめるし極めればカッチン鋼を含まない星なんていとも簡単に両断してしまうんです!!!」

「ツち!!! 銀河パトロール隊に連絡してくる! とりあえずあんたらは師匠に伝えとけ!!」

「はい!!!」

「しかしのおく……………私等だけしか重量を操作できんZソードを一体誰が……………」

そして俺は銀河パトロール隊総本部に連絡を終えるとその場を立ち去った。

—————

そして現在に至る。

ゼノは皆と共にフリードを何日かに分けて搜索してきたが、未だに手掛かり無しである。

「にしても、全然見つかんねーな。今日も収穫なしか?」

「いや、そうでもないぞ?」

そう言い皆はゼノの指を指した方向である上を見る。すると、上空から何者かが笑いながら剣の刀身をこちらに向けて落下してきた。

「ハーハッハッハー!!! 神父の皆さん頭上にお気をつけてえく!!!」

「不意打ちは静かにやれ」

!!!

「ギャフン!?!」

ドオオンツ!!

ゼノは、鼻から気付いていたらしく、そこから瞬時に飛ぶと、空中で回し蹴りを放ち、フリードを地面に叩き落とした。

「いつつつ……………もしやチミは何時ぞやの坊ちゃんじゃーあくりませんか」

「お前何言つてんだ? 俺はお前なんて知らねーぞ」

「…え?」

唐突に知らないと言われ、フリードは硬直する。

「い…いや〜何言ってるんだい? 坊ちゃん? 忘れたかい? あの綺麗な夜の出来事を…「誰だお前?」……………あの時俺にグレ〜トフルな攻撃

を…「誰だお前？」……………」

ゼノは完全に忘れていた。その行為がフリードを刺激した。あれ程の攻撃を加えておきながら、自身の事を忘れていた。それだけで、フリードの脳内が怒りだけで埋め尽くされる。

「ハッハッハッハッ……死ねえええ!!!」

「おっ？」

ゼノは振られた剣の一閃を、後ろに飛ぶ事で避ける。

けれども、それだけでは終わらなかった。

「死に晒せええ!!!クソガキがああああ!!!」

フリードの剣が次々とゼノへと襲い掛かってくる。その速度は軽くマツハを超えていい程だ。だが、光の速さでさえも目や身体で捉えるゼノにとつて、今更 マツハなど、少し速いハエに等しい。

故にゼノは次々とその剣を躲す。

それによって、フリードの怒りが徐々に上がってきていた。

「何でだ!?何で当たらねえんだよ!?俺は今 聖剣の力で限界速度に達してんだぞッ…!」

「ハッ。お前の扱い方が 雑なだけだろ？」

「クソがああああ!!!」

↳

一同はその光景をただ見ることしか出来なかった。

「黒崎先輩やつぱヤベエ……………俺あんな人にケンカ吹っかけたと思うとメチャクチャゾツとするわ…………」

「いえ…………ライザーの件の時はもつとヤバかったですよ…………」

「マジかよ!?小猫ちゃん!」

匙はゼノの戦いを初めて見るのでとても驚いていた。

「ああ…………だが気になるのはあの剣……………あの様な形の剣は初めて見るよ…………」

木場はゼノよりもフリードが振っている異形な剣を見ていた。その剣は、木場やイツセーが、遠くからでも感じられる程、濃密な聖のオー

ラを放っていた。

「何だ？あの剣……コンクリートなんて紙のようにスパスパ切ってるぞ?!」

「まさかとは思うがあれはZソードか？」

「ゼノヴィア!？」

「ヤッホー!イツセー君!」

「紫藤イリナさん!？」

何とそこにはいつのまにか別行動をしていたゼノヴィアとイリナが立っていた。

「それよりもゼノヴィアあの剣の事知ってんのか!？」

「ああ……本でしか読んだことはないが……この世でエクスカリバーよりも強大な力を秘めていると云われている伝説の剣があるという……それが『Zソード』だ……!」

「え!?マジかよ!?聖剣よりもヤバいのかよ!？」

「うむ……しかし……伝説によるとZソードは神々の最上位 『界王神』が管理し彼らが住む世界、界王神界にあると云われている……それを何故奴が……」

↳

一方、ゼノは足を出しフリードを転倒させていた。

「う……くが……」

「さて……一つ聞くが……」

フリードが地面にうつ伏せで倒れているところにゼノは近寄ると、今まで聞いたこともないようなドスの効いた声を放つ。

「テメエ……その剣をどこで手に入れた……?」

ゼノは途中から気付いた。彼の所持している剣こそ、自身が探している『Zソード』なのだから。

「うぐ………教えてあげないもんね!!!」

ヒュンツ!!

そう言ううとフリードは聖剣をゼノ目掛けて振り回しその隙を見て

状態を起こし後ろへさがった。

「黒崎!!加勢するぞ!」

「俺たちもな!!」

すると後ろへいたイツセーやゼノヴィア達が前へと出た。

「下がれッ!あれはお前らじゃどうこうできるモノじゃねえ!」

ゼノの制止も聞かずに皆は一斉に戦闘態勢をとった。

「おうおうおう!!!一気に増えちやってくれちやっねー!!!これなら斬りがいがあるよ!!!」

そう言うのとフリードは木場に向かって飛びかかろうとする。

「伸びろーライン!!」

その時匙の腕がカメレオンのような顔を模した籠手へと変化し、その籠手から紐の様な物が飛び出てフリードの足に巻き付いた。

「な…!?なんだー!?こいつは?」

「今だ!木場!やっちまえ!!こいつはちよつとやさつとじゃ切り離せねーからよ!!」

「助かるよ!!」

そう言うのと木場はフリードの両サイドの地面から剣の山を作りだし攻撃した。

「クソが!!つたくめんどーな技使いやがって!!」

フリードも戸惑い無造作に剣を振り回していた。

その時、

「ほう。魔剣創造か。使い手の技量次第では無類の力を発揮する神器だな」

近くの暗闇から神父服を着た老人が現れた。

その老人が現れた瞬間、木場の目つきがとてつもなく鋭くなった。

「…バルパーガリレイツ…!!!」

その老人はフリードの方へ向くと

「フリード、ここは一旦引くぞ。聖剣使い2人、そして魔剣創造、赤龍

帝流石に不利だ。」

「合点承知!!チャラば!!!」
ボンツ!!!

そう言うのとフリードは煙玉を出しバルパーと共に姿を消した。

「ツ!追うぞ!イリナ!!」

そう言うのと2人も後を追いかけていった。

「……………馬鹿どもが…!!!」

シユウ……………ドンツ
!!!!

そう言うのとゼノもゼノヴィア達への方向へと大ジャンプしていった。

イツセー達も後を追おうとした時

「さくて……………これはどういうことかしら?イツセー?小猫?」

「説明してもらいますよ?匙?」

後ろに顔をニコニコとさせたりアスとソーナが立っていた。

「ヒツ! (会長 (部長) ……!!!)」

墮天使幹部コカビエル 現る

ゼノ達はフリードとバルパーを追いかけ今暗い山道を進んでいた。

「追い詰めたぞ！フリード・セルゼン！　バルパー・ガリレイ！」

「ツチ！しつこいビッチだな！おい!!」

「今ここで！同志達の恨みを晴らす!!!」

そう言うのと木場は剣を構えフリードへと向かっていった。

その時、上空より無数の光の矢が2人の間に降り注ぎ木場の攻撃を妨害した。

「誰だー！」

皆が上を見上げるとそこには

「ふむ。外したか」

背中から五対十枚の黒い翼を生やした大柄な墮天使がいた。

「フリード、バルパー、先に行け。俺はこいつらと少し遊んでいく」

そう言われるとフリードと、バルパーは煙玉を投げ姿をくらし
た。

「ツ！待ちなさいー！」

「フン」

ガキイイインツ！

「きやああつ!!!」

イリナが後を追おうとしたが降りてきたコカビエルの一撃を喰らってしまい後ろへと吹き飛ばされた。その時イリナは聖剣を手放してしまいそれをコカビエルに奪われてしまった。

「イリナ!!くっ………おのれ!!!」

キイン!!

ゼノヴィアはコカビエルに向かって聖剣を横から振るとしたが掴

するとゼノは片手だけで全ての矢を弾いた。

「ほう。中々やるようだな。ならば」

するとコカビエルは魔法陣を木場達に向けた。

「ツ!!木場!青髪!栗毛!さつきと逃げろ!!!」

「え!?でも」

「早く行け!!!」

「わ…わかりました!!!」

そう言うのと木場とゼノヴィアとイリナは来た道に戻り逃げた。

「ふん。もう遅い。そらっ!!!」

そしてその矢は一番足が遅いイリナに向かつて一気に降り注いだ。

「きやあああつ!!!」

「っ!イリナああああ!!!」

そして、煙が晴れるとそこには

「つたく。どいつもこいつも世話が焼ける」

右手を掲げバリアを張り、イリナを担いだゼノの姿があった。

「な…!!なんだと…!!上空からあそこまでの距離をたった数秒で!」

コカビエルが驚くも無視をし、ゼノはバリアを解くとコカビエルに問いかけた。

「さあ。聞かせてもらおうぞ。テメエあの剣をどこで手に入れた」

「フン!!そいつは企業秘密なのでな!!!応えはできん!!!」

そう言うのとコカビエルはさつきよりも倍はある巨大な魔法陣を展開した。

「この魔法陣からはさつきよりも威力の高い矢が降り注ぐ!!精々生き残ることだな!!!」

そう言うのとコカビエルはその場を飛び去っていった。

「待てっ!!!くっ!!!」

後を追おうとしたがそこへ魔法陣からさつきよりも威力のある光

の矢が降り注いだ。

「おい！木場と青髪！！テメエらだけでも逃げろ！！」
「しかし！」

「いいから早く行け！！！！巻き添え食らうぞ！！こいつは後で連れてくからよ！！」

「……恩にきる！！！！」

そう言うとき、ゼノヴィアと木場はもりの中へと消えていった。

「ハア……面倒なことになったな……」

そしてその光の矢の雨は2人を一気に飲み込んだ。

賭け

一誠 side

あの夜の件の後、俺と匙とはたつぷりと部長と会長にたつぷりしばかれその翌日の夕方、俺達は家で待機していると

ガチャン

「お邪魔しまーす」

突然誰かが家に入ってきた。しかも凄く聞き慣れた声だ。

ドタドタツ！

その瞬間朱乃さんと小猫ちゃんはすぐさま玄関口へと走って行った。

俺達もあとに続き行つてみるとそこには、

「よう」

ゼノがいた。

「ゼノ（くん（先輩）!!）」

ゼノを見た瞬間に朱乃さんと小猫ちゃんはすぐさまゼノに抱きついたーくううう……羨ましい……！！！！！！

「ゼノ先輩……大丈夫でしたか？」

「大丈夫だ………苦しいから離れて………」

「ですが……その所々服が………」

見るといつもゼノが着ている長ランの所々が破けて泥まみれであった。

「心配すんな………服はただ破けただけで肉体にはダメージはねーから………だから早く離れて………」

「そうですね……無事で……良かったです………」

「それより、こいつを頼む」

ゼノは担いでいたイリナを降ろし部長に預けた。

「ゼノ、何があつたの？」

「それは後から話す。この件は悪魔側じゃあ処理出来るようなもん

「じゃねーぞ」

「！！！！」

「取り敢えず、上がらしてもらおうぞ」

「ああ、なら俺の部屋に」

side out

「さて、話す前に一つ言っておくが、あの剣についてだ」

「あの剣ってまさか、ゼノヴィアが言ってた…」

「ああ。グレモリー、そして、その他にも言っておく、あいつが持っている剣は『Zソード』という物だ」

「Zソード？え？何それ？」

ゼノの言葉にリアスは首を傾げた。

「Zソードっていうのは界王神という神が住む界王神界にある剣だ」

「え？界王神……って…」

「もうようするに神様だ。神様」

何故かゼノはめんどくさくなっていた。

「んでその神様が住んでる場所にある剣だ。」

「それを何でフリードが……」

「実はそのことで俺も疑問に思ってたんだ」

するとゼノは喋り出した。

「本来Zソードは界王神が住む界王神界にあり、その界王神界は神である物でしか行くことはできない。しかもゼットソード自体重さも何十tもある。なのにその剣をあの白髪は軽々と振り回していた。ここがどうも気になる。」

「気になるって？」

「どうやってあいつらはその剣を手に入れあんな風に軽く使いこなせるのかだ。そしてある考えにたどり着いた」

「そ……それは……なに？」

リアスが恐る恐る聞くと

「裏で何者かが暗躍している」

「「「!!」」」」

「取り敢えず、あの墮天使に聞きたいことはそれだ」

すると、ゼノは立ち上がり部屋を出て行こうとした。

「おい!!どこ行くんだよ!」

「奴の居場所はもうおさえてある。今回の件は俺一人で片付けさせてもらう。それに、窓を見てみる」

ゼノに言われリアス達は窓を見ると空が妖しく変化していた。そして、その上空に何かがいた。

「コカビエル!!」

「お?見つかってしまったか。なかなか勘のいい奴らだな」

見るとそこには飛びながらこちらを見下ろしているコカビエルがいたのだ。

「まずは、初めましてかな?魔王の妹リアス・グレモリー」

「御機嫌よう堕ちた天使の幹部さん、私たちとの接触はなんの目的かしら?」

「お前の根城である駒王学園を中心に暴れてやろうと思つてな。そうすれば嫌でもサーゼクスは出てこざるを得ないと思つてな」

「そんなことをすればまた神と墮天使と悪魔との戦争が勃発してしまうわ!!」

「ハッハッハッハッ!!鼻からそんなことは知れている。だからエクスカリバーを盗んだのさ。そうすればミカエルも動くかもしれないかとおもったのでな!だが寄越してきたのはエクソシストと聖剣使いたった二匹、実につまらんかったよ!!しかも昨夜俺の前に現れた人間も最後はそいつらを庇って光に飲まれちまって本当に呆気なかった

よ」

(ある人間とは俺の事を指しているのか)

そう考えたゼノはコカビエルの前まで瞬間移動した。

「おい」

「ん？っ！貴様は昨日の!!生きていたのか!!」

「あー、あの光の矢確かにヤバかったけども、普通に避けれたし」

「バカな!!あの距離で全て躲すなど……!!」

「お前の言い分などどうでもいい。それより 賭けをしないか？お前と戦って」

ゼノからの突然の提案にコカビエルは口を三日月のようにあけ大笑いした。

「ふっ……フハツハツハツハツ!!!!ただの人間がこの俺に闘いを!!ハツハツハツハツ!!笑いがとまらんわ!!!!さすが！無能な奴が考えることは傑作だな!!ハツハツハツハツ!!」

その笑い方は明らかにゼノを侮辱しているようだった。するとコカビエルは笑いを止めるとゼノを見た。

「で？その内容は？」

「お前が勝ったら俺を殺すなりなんなりとしてくれりゃいい」

「ちよ!!ゼノ！あなゝ「ただし、俺が勝ったら俺の質問に答えてもらう」」

「ふむ。いいだろう!!結果はもう見えてるがな！お前との勝負を楽しみにしているぞ!!ハハハハハハハハ!!」

そう言うときコカビエルは駒王学園へと飛び去っていった。

「ちよつとゼノ!!どういこと!!」

リアスは激怒し外に出てゼノに詰め寄った。

「奴に聞くいい機会だ。こんぐらいしなきや聞き出せねーからな」

「だからって命を賭けるなんてやりすぎよ!!」

「別に楽しい闘いができりゃあ命なんてどうでもいい」

には学園全体が巨大な結界で覆われており、見れば辺りには生徒会の面々が結界を作成していた。

だが、ゼノにとってそれは障害物でしかない。

「一発で……！」

そう言うときゼノは腕を振り上げ結界を壊そうとした時

「ちよつとストオオオオオオツプ!!!」

空から匙が制止の叫びを上げながら滑り込んできた。

「なんだよいきなり」

「この結界は墮天使を外へ出さないようにしているのです」

すると、匙に続き生徒会長であるソーナも現れる。

「なら、俺も入れろ」

「……分かりました」

ゼノの要求にソーナはライザーとの一件を思い出しながら了承し結界に小さな穴を開ける。

「リアス達をお願いします」

「ああ」

それだけ頷くとゼノは髪を解き直し後ろでまとめ上げてポニーテールをつくる。

「さて。墮天使の幹部の實力はどんなものかな」

神剣 断つ

「へえ。これが結界の中か。外とは全く違うな」

ゼノは髪を解きポニーテールを結ぶとそのまま校庭へと歩いた。着くと、そこはもう戦場であった。

空は夕焼けのように赤くなっておりその下では木場とゼノヴィアが異形の剣を持ったフリードと闘っていた。

すると、それを離れた場所から見守っていたイツセー達がゼノに気づき驚きの声を上げる。

「!?ゼノ!?お前今までどこ行ってたんだよ!」

「ん?飯食ってたんだよ。それより、木場のあの剣、まさか」

「ああ!あいつ禁手化したんだ!今のあいつならあの聖剣を!」

「その割には少し苦戦してないか?」

見ると木場は武器が変わって能力が上がってはいたが、やはりZソード相手には部が悪いらしく、ゼノヴィアと共に押されていた。

「間に合わなかったか。Zソードは」

「すまねえ…俺たちでも止めれなかった…」

「いいよ別に。ちよつと俺は木場のところに行ってくるよ」

するとゼノは戦いの真つ最中の中木場達の間へと瞬間移動した、

「のわ!?なんですか!?いきなり!」

「邪魔」

「ぎゃふん!」

ゼノは現れるやいきなり、目の前にいるフリードを蹴り飛ばすと2人に目を向ける。

「ゼノ先輩!!」

「お!お前は!」

「よう。イツセーから聞いたよ。禁手化したようだね」

「はい…ですが…あの剣の前では…:…すぐに…」

「折れちまうか。まあ無理もな「ウリイイイイ!!!!」ん？」

ゼノが話している中、ゼノへの恨みが大きいフリードが憤怒の表情を浮かべながら聖剣を振り回してきた。

だがゼノの前ではそんなものは無意味である。

「静かにしてろ」

「ガヒャッ!？」

ゼノは手から軽い衝撃波をフリードに向けて放ち、またもやフリードをグラウンドの隅まで吹き飛ばした。

「そう言えば青髪、お前の剣。なんか形変わってねえか？」

ゼノは横にいたゼノヴィアへと目を向けた。するとゼノヴィアは領きながら剣を見せた。

「ゼノヴィアだ…。これはデュランダルという聖剣でな。先程封印を解いたのだ。しかし、それでもあの剣とはギリギリでしか渡り合えない…。さすがは伝説の剣だ……」

「確かにあの剣は伊達じゃない。けどあれでも聖剣が混じってんだ。お前の仇に変わらないだろ？」

「はい…」

そう言うのと木場は前へと出て剣を構えた。

「たとえ無理だとしても諦めません。何本折れようと折られようと僕は聖剣を破壊します!!!」

「私もだ!!!教会の名にかけて絶対にひかん!!!」

その2人を見るとゼノは笑みを浮かべた。

「だったらもう少し見守らせてもらう。それと、これはほんのプレゼントだ」

そう言うのとゼノは木場とゼノヴィアの剣に触れた。すると

シユウウウウウ……

木場とゼノヴィアの剣が光を纏い切先まで包んだ。

「ちよつとおおおおおお!!!ボクちゃん抜きでなにやってんのかな!!!このガキがああああ!!!」

すると放置されていたフリードが剣を持ちゼノ達へ斬りかかろう

とした。

その時

バチンッ!

「のおおおおおお!!?????!!」

光が3人を中心に膨張し、その波動によってフリードを吹き飛ばした。

一方で、ゼノの気が体内に入れられた事で2人の剣に変化が現れ始める。

「な…!!」

「こ…これは…!!」

剣の形は次第に変化していく。刀身が発光し、発光した光がその刀身を包み込み、新たな刃を形成した。

「俺の力を少し入れてやった。これならZソードに対抗できる」

「…!ありがとうございます…。ゼノ先輩」

「恩にきるぞ」

2人は剣を構えるとフリードへと向かっていった。

「ゼノ、2人になにをしたの?」

「ちよつとした贈り物を。それより、コカビエルは……………あそこか」

上を見るとまるで玉座のような物が浮いておりそこにコカビエルがいた。

「ええ。コカビエルはこの町を吹き飛ばす気なのよ。今私たちが立つてる下には巨大な魔方陣が設置されているわ」

「そうか」

街が破壊されるというのに焦りの一つもないゼノにリアスは不思議に思う。

「……………意外と冷静ね」

「ああ。でもさすがにこの町破壊されるのはちよつと嫌だから。今回はなんと少しでも阻止しないとね。それよりも、騎士のたたかきを見ないと」

「はあ!!!」

木場はフリードへと向かうと剣を横へ振り回した。

「ハッハー!とろい!」

対するフリードは剣を振らずに後ろに回避する形で避けた。

そして、フリードは聖剣に自身の気を込めると、くねらせた。すると切先が無数に別れホーミング弾のように木場に襲いかかってきた。

「ゼヤアッ!!」

咄嗟にゼノヴィアが木場の前に現れ、光剣を一振りする。その一振りは輝く軌跡を生み出し、向かってくる無数の切先を粉々に破壊した。

「なんですと〜?!?!ここにきての超展開?!?んなこと望んじやいねえええんだよおおお!!!クソビッチがー!!!」

フリードは怒り狂い聖剣の能力でスピードを最高点に達し、ゼノヴィアへ斬りかかろうとした。

「させるかあッ!!」

だが、その刃は木場によって防がれた。

「なっ?!」

「そんな剣で僕達の想いは断てない!!!」

木場の心に響くかつての同志達の歌。そしてゼノの神々しき気。更に、フリード達への怒りが頂点に達した事で木場の力は限界を突破していた。

「うおおおおお!!!」

木場は全ての想いを込めて剣を振った。

そして

バキイインツ!!!

凄まじい金属の破壊音と共にフリードの持つ剣が砕かれた。

「なああああああ!!!折れたー!!!????」

「ば……バカナ……あのZソ!!!ドが……」

すると、折れた剣は聖剣とZソードへと分裂した。

「皆………見ていてくれたかい………僕の想いは聖剣を超えたよ……」

すると木場とゼノヴィアは刃をバルパーへと向けた。

「覚悟しろバルパーガリレイ、貴様の計画もここまでだ!」

追い詰められたバルパー。すると、こんな時に研究熱心かつ、無限の探究心が現れ、バルパーの脳内はその聖魔剣への興味に満たされていった。

「あ………ありえない………聖と魔の融合など……!そうかわかったぞ!聖と魔それを司るバランスが大きく崩れているそれなら説明はつく!」

刃を向けられたバルパーは何が何だか分からぬ言葉を発し興奮状態となっていた。

「つまり!魔王だけでなく神をm……」グシヤ

最後の言葉を発しようとした時、バルパーが突然の光の槍に串刺しにされた。その瞬間バルパーは粒子となって消えた。

「バルパー、お前は優秀だったよ。そこに思考が至ったのも優れてい

る故だ」

槍を放ったのはコカビエルだった。バルパーを用済みとみなしたのだ。

「コカビエル、これは何の真似かしら？」

「俺は最初からこいつらなどいなくても別にいいんでな」

するとコカビエルはイツセーの方へ視線を移した。

「おい小僧、赤龍帝の力を最大限まで倍加させ誰かに譲渡しろ」

突然の要求にリアスはトサカにきたようだ。

「私たちにチャンスを与えるの？ふぎけないで！」

「ふぎけないで？それはこちらのセリフだ。この中に俺に勝てる奴がいるとでも？」

コカビエルは気づいていなかった。この場に、魔王さえも軽く屠る程の力を持つ者がいる事を。

「おい。忘れるなよ。カラス」

今まで黙っていたゼノは笑みを浮かべながら皆の前に出る。

「ほう？何時ぞやの人間か。随分と威勢がいいな」

「どうも。それより、昨日、賭けをしたろ？俺と闘り合うのを楽しみにしてたんじゃないのかよ？」

ゼノが昨日のことを言うとコカビエルは一瞬首を傾げると思い出したかの様な表情を浮かべた直後に笑いだした。

「ハッハッハッハッ!! そうだ。そうだったな！すまんすまん。あまりにもくだらん要求だったから忘れかけてたよ！」

コカビエルはまるでゼノの要求を小馬鹿にしているようだった。コカビエルにとってゼノは魔力を帯びていないただの人間だ。だが、

コカビエルは知らなかった。彼が体術だけで既に神レベルを圧倒でききる事を。

一方でその挑発に無視しゼノは話を続けた。

「闘う前に一つ聞いておくけど、俺が勝ったらちゃんと話すんだよな

？」

「いいだろう。貴様が俺に勝てればなっ
!!!!!!」

言葉と同時にコカビエルが手をかぎすとゼノの周りから無数の光の矢が現れた。

「死ね」

コカビエルが手を振り下ろすと同時にその矢は一斉にゼノへ襲いかかった。

「囲んで逃げ場を無くすか……ど素人が」

ゼノはその戦法をアツサリと吐き捨てる手と手を刀のように構え自身のオーラで手を包み光の刃を形成した。そして自身を軸に回転すると四方八方から襲い掛かってくる光の矢を全て弾き落とした。

「なっ！全て弾いただと!?!」

人間とは思えない芸当にゼノヴィアは驚いていた。

「ぐうう!?!ならばとっておきをくれてやる…!!」

矢を全て弾かれたコカビエルは歯を軋ませると上空へ上がり、今度は光の刃を集結させ特大の光の刃を形成した。

「くたばれええええ!!!!」

そしてその光の矢をゼノ目掛けて投げた。

「危ない!」

咄嗟にゼノヴィアはゼノを助ける為に前に出ようとしたがすぐにその動作は停止する。

「ふん」

ゼノは向かってくる光の矢をあっさり正面から受け止めた。

「返すよ」

そしてゆっくりと手を振りかぶるとコカビエルに目掛けて光の矢

を投げ返した。その光の矢をマツハは軽く超える速度でココビエル目掛けて飛ぶ。

投げられた矢はココビエルに向かってその切先を向けた。さすがのコカビエルもこれは予想外でありなんとか避けたものの左腕を持っていかれた。

「がぁ!?…まさか光の矢を投げ返したと……!!ぐうう…!!何なのだ貴様は!!」

流血する腕を押さえながらココビエルは悲痛の声を上げながら目の前の存在へ叫ぶ。その存在はただ単に答えた。

「人間だよ」

その答えにココビエルは一瞬表情の変化が止まったが、その直後に狂ったように笑い始めた

「人間だと…?ハハハ!!しかし驚いたものだ!!!神のいなくなったこの世界にこんな化け物がいたとはな!!」

『!?!』

ココビエルが不意に漏らした言葉にゼノを除いた皆は固まる。

「なに!?!神がないとはどういうことだ!」

神という単語にゼノヴィアは反応し驚きながらもココビエルに問いつめた。

「口が滑ったか……。まあ教えてやろう。先の三つ巴の戦争で四大魔王と共に神も死んだのさ!」

『!?!』

「か……。神が……。死んだ……。?そんな……」

衝撃の事実を聞かされゼノ以外のリアスやゼノヴィア達は驚愕した。

「先の戦争で悪魔は魔王全員と上級悪魔の大半を失い天使も墮天使も幹部以外ほとんど失った。純粹な天使は増えることすら出来ん。悪魔にとつても純粹は大変希少な筈だ」

「そ……そんな………では……私たちに与えられる愛は………」

「あるわけないだろう！今ではミカエルが代わりに『システム』を起動させているが、それは神張本人が起動させてこそ真価を發揮する！どんなに信仰しても貴様のようには切られる信徒など腐る程いるわ!!」

アーシアの嘆きをコカビエルはあつさりとは断ち切った。

シヨックのあまりアーシアはその場で崩れ落ちた。

「アーシアーおい！しっかりしろー」

イツセーがアーシアを抱介しているがそれどころではない状態であった。別の場所ではゼノヴィアが力無く項垂れていた。

「う……うそだ……そんなことがあるなんて………」

「貴様ら人間もそうだ!!奴らは弱いからこそ強大なものに追いつがる！実態がないものでさえも信仰する弱小の生き物だ！」

「？」

左腕の付け根を抑えながらコカビエルは叫び狂ったように笑い出した。

「ハハハハハハハハハハ!!!分かったか!?こらが真実だ!!!人間であるお前らがすぎる物などいないのだ!!分かったかゴミめ！」

「だから何だよ!?!」

「ハハハハハハ!!!………え？」

「だから何だ?づて言っただよ。俺は元々 地球の神なんて信じてねえよ。それ以上の存在に出会ったからな」

「!?!」

その言葉と同時にゼノは体から膨大な気のオーラを発した。それと同時に結界は粉々に割れ、辺り一面は月夜に照らされた。

「それ以上の存在?はっ！人間もジョークがすぎる………え………ま………まさか………」

その瞬間コカビエルは何かを感じ取り尋常じゃない程の冷や汗を流した。

(な……………何だ…この威圧感……………いや……………強大な恐怖感は……………!?この感覚……………あの大战の時 以来だ…!!)

「貴様のオーラの色……………いや!そんなことはあり得ない!こんな子供が!」

「ようやく気づいたか。 お前が闘っている相手は何なのか」

「ま……………まさか貴様…!!」

ゼノの鋭い目がコカビエルに向けられる。

「自己紹介がまだだったな。俺の名は『黒崎ゼノ』純粋な人間にして宇宙最強の神【破壊神ビルス】の弟子だ」

「…!!」

その名を聞いた瞬間コカビエルは恐怖のあまり一步後ろへと下がった。

コカビエルだけでなくゼノヴィアさえも驚いていた。

「あ……………あいつが……………破壊神の弟子…だと…!!」

「ゼノヴィアも知ってたのか!」

「ああ……………破壊神ビルス……………姿形は不明だが……………この世で破壊できぬものはないといわれている伝説の神……………我ら教会の物で知らぬ者はいないといわれており古の時代より全ての神々から恐れられている神だ……………まさか……………あいつが……………!!」

一方ゼノは気の放出を止めるとコカビエルの同じ高さまで飛んだ。

「貴様が破壊神の弟子だと!?そんな話信じられるかっ!!」

「なら信じさせてやるよ。お前にとって最後の闘いでな」

「!」

その瞬間に、ゼノからは人間とは思えないほどの禍々しい色のオーラが溢れその場を覆い尽くした。

決着　　そして白の襲来

ゼノの放ったオーラで学園中の窓が割れ周りの土や岩などが盛り上がった。

「オーラだけでこんなにも地形を変形させるだど!？」

「ライザーの時は本当に驚いたけど、まさかここまでとは……………さすがは神の弟子ね……………」

あまりのオーラの威力にリアスとゼノヴィアは驚きを隠せなかった。

—————

「ふう」

ゼノが息をはくと風はやみオーラの嵐が消えた。するとゼノは地面へと手を当てた。

「さて、まずはこの邪魔な魔方陣を消すか」

そう言うのとゼノは右足を振り上げ地面へと振り下ろした。

すると地中から巨大な魔方陣が現れ空まで浮かぶとガラスのように割れた。

「くそー俺の魔方陣が!」

「なによそ見してんだ?」

一瞬目を離れたコカビエルにゼノは背後を捉えた。そしてゼノは翼に手を伸ばすと

コカビエルの翼を全て引きちぎった。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

一度に引きちぎられた事により、次々と翼の痛覚が反応し、全身へ痛みを流した。

その叫び声を間近で聴きながらもゼノは表情を変えるところか笑みを浮かべていた。そして翼を全て引きちぎられたコカビエルが地面に落下する地点まで瞬間移動すると落下してくるコカビエルに向けて足を振り上げた。

「グハッ!」

空中へと蹴り上げられたコカビエルは体制を立て直そうにも立て

直すことが出来なかった。

「行くぞ?」

一方でコカビエルを蹴り上げたゼノはその場からすぐにコカビエルの場所へ移動すると姿を消すと、コカビエルの周囲360度の全方向から何百発もの蹴りを高速で移動しながら放った。

「…おのれえええ!!」

コカビエルは済んでの所で蹴りを躲すと光の矢を生成し、投げつけようとする。

「フン」

だが、ゼノの圧倒的な反射神経によって生成された槍は直後に脚で蹴り上げられ空中で消滅してしまった。

「な……………」

「技の発動まで遅い。初期動作から2秒も経ってるじゃねえか」

その言葉と共にゼノの姿が消え、頭上から脚を振り上げた状態で現れた。

「それっ」

その振り上げた脚を斧のようにコカビエルの頭上へと振り下ろした。

「グハア!」

「因みに俺が喋ってる間 攻撃しなかったのは勿体ないよ」

コカビエルは隙を生んでしまったことでゼノによるカカト落としをモロに受けてしまった。

ドオオオオオオオオオオ!!!

コカビエルは突き落とされそこには半径50メートルはくだらないほどの巨大なクレーターが出来上がった。

その圧倒的な力に見ていたイツセー達の驚きはさらに増した。

「す……………すげえ……………あれでもまだ本気じゃねーとかほんとに化け物だな……………」

「いえ…それだけじゃないわ…魔力らしき物も感じなかった…あの子…体術だけでコカビエルを…」

すると先ほどまで結界を張っていたソーナとその他の生徒会メン

バーが走ってきた。

「リアス！先程の爆発は！」

「ソーナ……………あれよ」

リアスが指をさした方向を見るとソーナは目を見開いた。

「これが……………ゼノ君の……………力……」

く

ゼノはクレーターの真ん中へ降りるとコカビエルの顔の前で足を止めた。コカビエルは目を開かず気絶しているように見えた。

ドンツ

「起きろよ。ちよつと蹴り入れたただけだろ？寝たふりしてんじやねえ……」

コカビエルは気絶などしてはいなかったのだ。狸寝入りをかましその場をやり過ぎそうとした。だがそんな手はゼノには通用しなかった。

(な……………なんだこいつ……………人間じゃねえ……………悪魔でも……………ねえ……………まさか……………こいつほんとに……………)「3……………2……………1……………」

「わ……………分かった！起きるよ！」

ゼノは強引にコカビエルの精神を呼び起こし目を覚まさせた。いや、正確にはコカビエルが気絶の振りをしていたのだ。

「俺が勝ったから約束の賭けだ。お前、あの剣をどこで手に入れた」「っ！そ……………それは！へ……………へ変な耳飾りをつけた眼帯みたいなおお……………男にもも貰ったんだ!!名前はしらねえ!!ここここ……………これしかしらねえんだ!!頼む！助けてくれ!!」

コカビエルの頭の中はゼノへの恐怖に染まり知っていることを全てさらけ出した。それと同時に顔をくしゃくしゃにしながらゼノへの命乞いをし始めた。

「へえ〜眼帯に耳飾りの男か……」

「そうだ!!知っていることは全て話した!!もう何もしない！助けてく

「悪いがここまでにしてくれないか？」

その声は学園の屋根の上より聞こえ皆がそこへ視線を移すとそこには白い龍を思わせる翼の生えた鎧を着た男が立っていた。

「何だお前は？さてはお前が青髪の言つてた白い龍（バニシング・ドラゴン）か」

「いかにも、我が名はバニシング・ドラゴン　　【アルビオン】。先程の君の戦い、拝見させて貰ったよ」

「ふうん。で？どうだった？」

「正直驚いたよ。人間でありながら墮天使幹部を圧倒するとはね、君には興味が湧いたよ」

「へえくならどうする？今ここで俺と闘うか？」

「魅力的な誘いだが、やめておこう。今の俺では力を使うどころか発動させる前に倒されてしまうからね。それに、君は最初から俺がこの町に潜伏していることも気づいていただろ？」

「！！！！！！」

「じゃあそいつをよこせ。聞きたいことが山ほどある」

「残念ながらもうこんな状態さ」

そう言うとコカビエルの首を掴み前に突き出した。その顔からは何もかもが消え去ったかのように目のハイライトがきえておりとても喋れるような状態ではなかった。

「あゝ…やりすぎたか」

「そんな訳だ。では、これで失礼するよ」

そう言い去ろうとすると

『無視か白いの』

『起きていたのか赤いの』

イツセーの籠手かが反応しそれに応えるように相手の白い翼も反応した。

『せっかく会えたのにこの状態ではな』

『いいき。いずれ戦う運命だ。また会おうドライブ』

『ああ。アルビオン』

そう言い今度こそ去ろうとすると

「やい！待ちやがれ！」

今度はイツセーが引き止めた。

「お前一体なんなんだよ!!!いきなり現れやがって！」

「全てを理解するには力が必要だ。強くなれよ？俺の宿敵くん」

そう言う白い龍は今度こそ飛び去って行った。フリードを置いて……

「おーい。忘れ物」

「セイツ！」

「ん？」

ゴンツ
!!!!!!

「うが！」 『ヴァーリ!?!』

それは見事に的中した。

ヒユウウウウウウ……

）

「おっせくなヴァーリの奴、ユカビエルの回収だけなのにどこでなにやってるん……ヒユウウウウウウ………「ん？なんだ？」」

闘いの終了

「さてと」

俺は白龍皇にフリードをぶん投げた後Zソードを回収した。が、それは見事に折れておりもう使い物にならない状態だった。

「ま、いっかかとりあえず界王神様に伝えとくか。銀河パトロール隊にも連絡つと」

「黒崎ゼノ」

「？何だ？」

俺が界王神様に連絡を入れようとするすると後ろから青髪に声を掛けられた。見ると裕斗も一緒だ。

「先ほどのお力添えのお陰で自分自身の意思を貫き通す事が出来ました」

「本当にありがとう。」

そう言うと2人はゼノへ頭を下げた。

「やめろ。俺はただ力を分けたただけだ。あれはお前から自身の手柄であって俺は何もしてねーよ。」

「ですが…」

「それより、今の気分はどうだ？少しはスッキリしたか？」

「はい。恨みを晴らすことが出来たので」

「なら良し。その言葉を後ろの奴らにも伝えてやれ」

「え？」

裕斗が後ろを向くとそこにグレモリーたちがいた。するとグレモリーは裕斗を抱きしめた。

「お帰りなさい…裕斗…」

「は…はい…！部長…！」

ガシッ

「ニシシシ！木場！もう逃がさんぞ！部長！お願いします！」
「ええ」

「あははは……」

すると裕斗は笑いながら尻ビンタを受け入れた。

「さて、俺も報告しないとな」

そう言うときゼノは皆に気づかれずにその場を後にした。

アパートの近くの林にてゼノは界王神と連絡をとっていた。

「成る程……Zソードを墮天使が……」

「ああ。おそらく、裏で暗躍してる奴がいる。もしかしたら神レベルに強いかもしれん。銀河パトロール隊にも細心の注意を払うよう言っておいてくれ」

「はい。我々も気をつけます。それではまた何かあったら連絡ください」

「い」

「ああ」

界王神への報告を終えるとゼノはアパートへと戻った。

次の日

「ふわあく……昨日は全然眠れなかったな……」

寝不足のおぼつかない足取りでゼノはいつもの道を通りながら旧

校舎へと向かった。

ガチャ

「よう」

「ん？やあ。黒崎ゼノ」

ゼノが部屋に入ると聞き覚えのある声がし、その声の主はソファーから立ち上がる。青髪に緑のメッシュ　　ゼノヴィアだ。

「ん？何でお前がここに？」

「ほほう。イツセーと同じ反応だな…。神が不在の事を知ってね。破れかぶれで悪魔になったのさ」

「へえ。だからグレモリーから誘われたのか。つうかイツセーと同じ反応なんて何か癪だな」

「どういう意味!？」

見るとリアスは偉くご機嫌であった。

「ふふふ。デュランダル使いなんて頼もしいわ。これで2人の騎士の両翼が誕生したわね！」

そう言いルンルンと鼻歌をしている。相当嬉しいようだ。

「ちなみに、今日からこの学園に編入することになった。よろしくね！ゼノくん！」

「真顔で高い声出すな……ていうか俺は先輩だ。」

「え!?!その身長で!?!先輩だったのか!?!」

「うぐ!?!」

身長のを言われたゼノは固まってしまふ。一方でゼノヴィアは態度を改める。

「これは済まなかった……そんなことより、黒崎…聞きたいことがある」

「ん?」

ゼノヴィアはある事をゼノへと問う。それは、他の皆も知りたがっている事だ。

「破壊神ビルスの弟子なら、宇宙の神話系統について知っているかい

「？もし知っているなら教えてくれないか？」

「あ……………それ私も気になります…」

「俺も……………」

「僕も」

「私も」

「私もですわ」

「私もです…」

皆から視線を集中させられたゼノは話さざるをえなかった」

「はあく……………ま、いつかは話そうと思ってたがな。教えてやる。宇宙の神々を」

宇宙の神話系統

そしてイリナとの別れ

「さて、話す前に、お前らは宇宙がいくつあると思う?」

急にゼノは俺に妙な質問をして来た。そんなのは簡単だ。

「一つしかないんじゃない?」

「私も同じ意見です」

「俺も……というか何でだ?宇宙は一つしかないだろ?」

「いや。この宇宙は複数あるのさ」

「!?!?!」

その言葉に俺たちは驚いた……!宇宙が複数あるだなんて初めて聞いたぞ!そんなこと!

「まずこの宇宙は第七宇宙、俺の師匠であるビルスはこの第七宇宙を担当している破壊神だ。一つの宇宙につき、界王神、破壊神、それと付き人が1人ずついて界王神が星や生命を創造し破壊神がそれを破壊する。いわば創造と破壊、対になる存在だ」

俺には今一よく分からなかったが部長達は納得してるようだ……すげえ……なんだよ第七宇宙って……て言うか何で神様が破壊を!?

「ってちよつといいか!?!」

「?」

「何で破壊神は星や生き物を破壊するんだ!?!星や生命が増えるのは良いことじゃねーか!」

「簡単に言うが……逆に生き物や星が増えすぎると宇宙のバランスが崩れもつと厄介なことになる。例えば街で悪さをする奴らを放置すればどうなると思う?どんどん酷くなつていくだろう?時が経つにつれて比例していくことは星も同じなんだ。だから、容赦なくその星を破壊する。」

ちなみに今度、地球に来るらしいぞ」

「「「「!?」」」」」

「またもやゼノの爆弾発言に俺たちは再び驚いた!!破壊神がここに来る!?!いやいやいや!!宇宙の神様がここに来るってええ!?!」

「ま、その時は無礼な働きはやめろよ。さもなきやこの星はお前ら悪魔や冥界もろとも吹っ飛ぶからな」

「き……肝に銘じとくわ……」

部長も少し恐れてる……ヤベエ……地球破壊されたら……俺のハーレム王の夢が……

「しかし驚いたぞ。我々の間で伝説となっている界王神様と破壊神様が対となっているとわ……」

「今の話によると…別の宇宙にもそれぞれ破壊神と界王神様がいるのですか?」

「いる。宇宙は全部で12個ある。だが、もともと宇宙は18個あったんだが、ある神によってその6つは消滅させられた」

「「「「!?」」」」」

「またもや驚かされた!!」

「え!?!宇宙を消滅!?!いくらなんでもそんな!」

「まあ理解出来ないのも無理はないな。ここからは神格で話す。まずはこの地球からだ。この地球の各国には様々な神話が伝わっている。例えばギリシャ神話『オリュンポス』のゼウス。インド神話『三柱神』のシヴァ、北欧神話『主神』オーディン、などなど、多くの神が伝わっている。その地球の神々を取りまとめているのがあの世の王である『閻魔大王』だ。」

「な!?!神様を閻魔大王がまとめてた!?!」

「そうだ。地球の神は各国だが閻魔大王はあの世、つまり宇宙中の魂があつまる別の世界を統治している結構位の高い神だ」

マジかよ…閻魔様ってそんなに偉かったんだ……

「んで、その上に立つのが界王だ。界王は全部で4人いてそれぞれ北の銀河、南の銀河、東の銀河、西の銀河を担当している」

「な!? 銀河を!？」

「そうだ。そしてその界王をまとめるのが大界王、界王の中の界王だ」
「ヤバイ…全然分かんない……」

「ま、この地球があるのは北の銀河、だからこの星の神達の上が閻魔大王でその上が北の界王って訳だ」

な…なるほど…

「そしてここからは規模がでかくなる。まずその大界王の上にたつのがさつき話した界王神、その界王神達は5人いる。まずは東西南北それぞれ4人の界王神、そしてその4人を取りまとめるのが大界王神だ。界王神は神の最上位と言われている」

「神の最上位……」

す…すげえ………神の最上位って………しかもその人たちが星を創るって悪魔以上にヤベエじゃねーか……

「話を戻す。そしてその大界王神達と対になる存在が破壊神、そして、破壊神には必ず1人の付き人がいる。これらの神々は12の宇宙全てに1人ずつおり、それらをまとめるのが『大神官』というお方だ」

「大神官? 聞いた事がないな……」

「まあ、そうだな。お前ら教会では師匠と界王神様が限界ってところか、ま、その大神官という神は12の宇宙の神々を取りまとめている。神格でも二番目に偉いとされている。それに強さも半端じゃない。いくら破壊神といえども足元にも及ばんらしい。いわば最上位の上をいく神だな」

おいおい!! 星を簡単に壊せる神様が足元にも及ばんってどんだけ強いんだよ!？」

「友達だぞ」

「『『そうなの!?!』』」

何だよ!?!それ!?!最上位の神様とそんな軽い関係になるって!?!

「まあ。一度連れてってもらったしな。向こうから会いたいわって言われて」

「そ……それで……?」

「行ったら『君みたいに僕とお話し出来るのと会いたかったのね!!僕とお友達になろ!!』って言われて友達になった」

ええええ!?!そんな軽く!?!しかも『くのね』って子供じゃん!

あれ?待てよ……俺達って最上位の神様の友達を呼び捨てにしてる上にタメ口……これって……

「別にいい」

いいの!?!て言うか完全に心読んでんじゃねーか!?!

「読んでない」

読んでんじゃねーか
!!!!!!!

「全王様か……一度会ってみたいな……」

「それは無理だな。人間や悪魔でさえ話す事が無礼とされている御方だ。神でなきや会う事さえできん」

「ム…残念だ…」

「これで宇宙の神話系統については以上だ。そうだ青髪、あの栗毛の奴は?」

「ゼノヴィアだ……。イリナなら聖剣を返還しに本部に帰ったぞ。」

「何だ。あいつには知らせてないのか?」

「ああ。彼女は私以上に主を信じていたからね。今は帰りの迎え待ちかと思うよ」

「なら、見送ってきてやるか。界王神界に行くついでに」

「え!?今何…」 ピュン!

ゼノヴィアが驚き聞こうとするもゼノは瞬間移動してしまった。

駒王学園から少し離れた道にイリナはいた。

(はあく……ゼノヴィア何で悪魔に……それに…黒崎君に助けてもらったお礼言えなかったな……)

イリナは目を覚ましたあと、闘いは終わっており、自身のゾンビであるゼノヴィアが悪魔になったことを知って酷く落ち込んでしまったのだ。

(それに何で私、黒崎君のことばかり………しかも考えるたび何だかドキドキしてきた………こここれってまさか?!?!いやいやいや!!違う違う違う!!あの子は主を侮辱した最低な人!!………でもあの時助けてもらった時はなんか………かつこよかった………だからちがううう!!!)

すると

「さつきから何やってんだよ」

「!」

イリナが見上げると塀の上から腰を下ろしながらこちらを見ているゼノがいたのだ。

「黒崎くん!？」

「よつと」

スタツ!

イリナが驚く中、ゼノはその場所から目の前に着地する。

「どどどどうしてここに!？」

「ああ。青髪から聞いてさ。出かけ物のついでに見送りに来た」

「ついでって……………」

「それより、まだ迎えこねーのか？」

「うん。もうすぐなんだけど……………その前に……………ちよつといい……………」

「ん？」

するとイリナは頬を染めモジモジしながらゼノの方へ向いた。

「あ……………あの……………この前……………のことなんだけど……………(うう……………目の前にいるとなると凄くドキドキして……………頑張れ私!!言うのよ!私!!感謝ができなきゃ主を祈る資格なし!!)」

「あ……………あの時は助けてくれてありがと……………(よ……………よし!言えた!!!よくやった私!)」

「別にいいよ。それより、何でそんな赤いんだ？」

「え!?!そそそ……………それは!!(やややバイ!!なんとか誤魔化さない!!!!!!!!)」

「?」

「え〜と……………これは……………」

すると後ろから光の魔方陣が現れた。

「お？ようやく来たのか。じゃ」

そう言うときゼノはイリナへ背を向けると去ろうとした。

(！ 行っちゃおう……うう……！)

イリナはゼノに向かって走り出した。

「ゼノ君!!」

「ん？ むぐ!？」

ゼノは後ろを振り向いた途端にイリナに抱きつかれた。身長に差があるためゼノの顔はイリナの胸に埋まってしまった。

「む……むむ……!!？」

そんなことは知らずにイリナは力一杯抱きつく

「ありがとう……」

それだけ言うと離れた。

「じゃあね！」

そしてイリナは魔方陣の場所へと走っていき、やがて姿は見えなくなった。

「……なんだったんだ……？今の……！それより早く界王神界に行かねーと！」

ピュンッ！

そう言うときゼノもその場から姿を消した。

(きやああああー!!!!!!
!!!!!!なにやってんの私!!!!!!
!!!!!!別れ際に抱きつくなんて
!!!!!!)
!!!!!!

「彼女どうしたんでしょ?」

「さあ? 脳みそが鼻くそで侵食されたんじゃない?」

迎えの二人組にイリナは白い目で見られていた。

ブチッ

「どうしたんですか? 朱乃先輩?」

「いえ。一瞬何かイラっときまして」

「奇遇ですね。私もです…」

停止教室のヴァンパイア 危険な予感……………

「……………という訳だ」

その後、ゼノは界王神界へと赴き、事の結末を全て話した。

「成る程……………確かに裏がありそうですね…」

話された事実には界王神は冷や汗を垂れ流す。

「因みにこれがZソードだ。」

ゼノは持ち帰ったZソードを界王神に差し出した。エクスカリバーとの融合が解けて粉々となってしまうっている。

「やはり壊れてしまいましたか…」

「ああ。ま、どうせ数年もあれば修復させられるだろう」

「はあ…」

Zソードを渡したゼノは額に手を当てる。

「俺は帰る。界王神様たちも警戒しておけよ？」

「はい…」

そして、ゼノはその場から瞬間移動で消えた。

翌日

「……………えらく眠くねえ……………」

ゼノは普通の足取りで教室に向かっていた。珍しく、サリがちよっかいを掛けてこなかったお陰なのかもしれない。まあその方がいい。いつもなら寝込みを襲われ、毎回 あの大きな身体に押し潰されるのはゴメンだ。

校門を潜り、校内へと入ると、何やら視線を感じた。

「…ん？」

ヒソヒソ……………

(見て！あいつよ……………あいつのせいで朱乃姉様と小猫ちゃんか……………！)

(信じらんない！まさに鬼畜シヨタよね！)

(ほんとほんと！)

特有の地獄耳で聞こえてきたのは正に蔑みとも呼べる声ばかりで

あった。自身は何もしていないというのになぜなのだろうか。
すると

ドサツ

いきなり知らない男子生徒がゼノにぶつかってきた。それはまるで故意であるかのように。

ぶつかった男子生徒に顔を向けると、ゼノはその顔を見た。その顔は自身に恨みを持っているかのようにだった。

「ケッ！死ね！」

唐突すぎる言葉にゼノは頭に來たのか、脚を振り回し、その男子生徒の頭を壁に蹴り付けた。

ガシヤアアアン!!

巨大な音を立てると共に男子生徒の顔は壁にめりこむ。

「何だよいきなり。俺が何かやったのか？全然身に覚えがねえぞ」
すると、めり込んだ壁の中から声が聞こえた。

「テメエ…その外見を利用して朱乃様と小猫ちゃんを（ピー）したんだろ……！」

「はっ！」

「またもや突然すぎる蔑み。しかも、明らかに誤解している。その『ピー』はまだやってもらえない。サリによる未遂があるものの、朱乃と小猫はそこまではしていない。」

その上、自身から仕掛けているように思われているも、それも間違いだ。どちらかと言えば自身が逆にやられている方である。

「知らねえよ。ていうか誰から聞いた？」

「2年の松田と元浜だよ!!!」

「へえ……」

ゼノは頭に筋を浮かべると、そのまま下の階へと向かった。

◇◇◇◇◇

「ふわぁ〜!!」

俺は教室でのたれてた。昼はやっぱキツイな〜

「ようイツセー！どうした？（ピー）が（ピー）でもしたのか？」

「してねえよ………疲れたんだよ………」

「まあ、いいとして、お前気をつけるよ？最近変な噂が流れてるらしいからな？」

「変な噂？んなもんもう流れてるだろ？」

俺はその言葉に耳をあまり傾けなかった。別に俺達変態3人組が覗き常習犯である事やエロ本を持ってきて如何わしい事を妄想しているのも全て周知されている筈だろう。

「フッフッフ………内容は…「キヤア!!!黒崎先輩よ!!!」

ザツ！

なんだ!?!二人ともいきなりどつかに消えやがった!

「………俺らはいないって言ってくれ………」

「はあ!?!」

こいつらゼノになんかしたのか!?!まあ取り敢えず誤魔化しといてやるか……

すると、教室の扉が開かれ、ゼノが入ってきた…が、何か怒ってる!?!

「おいイツセー。松田と元浜とかいう奴ってどこにいるか知らない?」

「え?し………知らないけど………」

「じゃあそいつら見つけたら俺が顔面「ピー」してやるって言うって」

オィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ完

全なる殺害予告じゃねえか!?!?松田と元浜めちやくちや震えてるし!!!

「お……おう……分かった」

そう言うのとゼノは出て行った。すると松田と元浜も出てきた。

「お前ら本当に何やったんだ!?!」

「フッフッフ……あまりにも幼い外見をした黒崎先輩は高校生にしてその性欲が芽生え自分の外見を利用し学園二代お姉様の一角と学園のマスコットに手を掛ける。」

「そして誰の目も届かないアパートでその性欲を散らし始める………」

「ぐちやぐちやうるせえ!!!」
「ガハッ……」

危ねえ……俺もあいつらと同じことしたらああなるところだった……松田……元浜……頑張れよ……

「確かイツセー。お前もだ」
は？

「いやいや……俺なんもしてないじゃんか！」

「さつき村山と片瀬っていう女子から『覗き魔の兵藤も懲らしめてください！』って頼まれた」

おいおいおい?!?!俺も!?!だったら……

「逃げるー！」

「フンッ！」

「グフッ……」

ドサッ

ゼノにボディーブローを食らわされ俺はその場に沈んだ……

「スッキリした。さてと。残りの2人も……?」

その後

2人は校舎裏で顔がモザイクで隠れた姿で発見された……

神への出世

その夜

ゼノは突然全王に呼び出され、界王神のシンと共に宮殿の前に来ていた。

「…と言われたものの…何で急に…」

呼び出された理由が不明なためにゼノは首を傾げていた。

すると宮殿の扉が開き、中から小柄な男性が姿を現した。その男性を見たゼノと界王神のシン、そしてウイスとビルスは胸に手を置き頭を深く下げた。

「お久しぶりです。大神官様」

すると、その小柄な男性はこちらに近づいてくるとゆつくりと頭を下げた。

「こちらこそ。よく来てくださいました。ではどうぞ」

この少年らしき男性は大神官という神でウイスや他の宇宙の天使達の父親であり全王の付き人でもある神である。

大神官に連れられゼノとビルス達は中へと入っていった。

◇◇◇◇◇

ゼノ達は周りは暗く足元は美しい青のラインが光る道を歩いていた。歩く中、ゼノは来る前にお土産として購入した京都の八ツ橋の入った袋を大神官へと差し出した。

「これお土産のお菓子です。また皆さんと食べてください」

「これはこれは、いつもありがとうございます」

大神官は優しい笑みを浮かべながら袋を受け取る。大神官も全王と同じ、第七宇宙のスweetsを気に入っているらしい。

それから数分間。回廊を歩いていくとやがて目の前の景色が明るくなり、そこに2人の長身の男と玉座に座る小さな子供がいた。

「あーゼ〜ノ〜！」

その子供はゼノを見つけるとゼノに向かって抱きついた。

「全王様。お久しぶりです。お元気でしたか？」

「うん！元氣元氣！」

その子供はまるで幼稚園児のような仕草であった。だが、この子供こそが全王であり、破壊神や天使達からも恐れられている全宇宙を統べる神なのだ。

「そういえば何故今日俺を呼んだのですか？」

「うん！それはね！そろそろ君に『神格』を与えようと思ったの！」

「「「え…？」」」

その言葉に大神官以外のその場の全員は凍りついた。

「ぜ……全王様…もう一度よろしいですか…？ゼノに何を…？」

恐る恐るビルスが尋ねると全王はペースを崩す事なく答えた。

「神格を与えようと思うの！」

「え…」

◆◆◆◆

帰り道の回廊にてゼノが神格を授かった事にウイスは驚きながらも祝っていた。

「ホホホ凄いいじゃないですかゼノさん。まさか神格を貰うなんて」

「いやあくまさか師匠達と同格とはね」

「私も嬉しいです。東西南北全ての宇宙の管理は流石に骨が折れますからね」

「まあこれで師匠達にタメ口が使えるな」

「もう使ってるじゃないか…?」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

しばらくして、ビルス城へと帰還するとゼノはビルス達に現在の地球の状況について話していた。

「地球はとても面白いよ。けど悪魔や墮天使達はあんまりだな。強い奴が全然いない」

「なら破壊しちゃおう?」

「いや、それは駄目だな」

突然の提案にゼノは普通に断った。

「地球破壊したら美味しい食べ物やスイーツがなくなっちゃおうし。それに、師匠だつて気に入ってるだろ?」

「フフ まあね」

「だから破壊はしないよ。じゃ、俺は帰る。あ、そう言えば」「ん?」

「地球の悪魔達が師匠達に会いたがつてたよ。どうする?」

「へえ…:…:…:面白そうだね…:日時が決まったら教えてくれる?」

「了解だ。じゃあな」

ゼノが瞬間移動で消えるとウイスはビルスに尋ねた。

「よろしいんですか?」

「あ?何が?」

「破壊神ともあろう者が悪魔のお願いで行くなんて」
「心配ないよ。観光も兼ねてだから」
「はあ〜」

プール開き………の前に

次の日の朝

「冗談じゃないわ!!!」

ドンツ!!!

ゼノが部室に入った途端リアスが突然の大声で怒鳴った。その振動なのか周りの草木は凄まじく揺れ、鳥は逃げ出し、部室内からメキツという音も聞こえた。

「何なんだよ俺が入っていきなり大声出しやがって!この騒音があつ!」

ゼノは隣にいた木場に現状を聞くと

「実はここ最近イツセー君にお得意様ができてね。どうも内容の割に対価が豪華すぎたんだよ。それで調べた結果 お得意様の正体が墮天使の総督アザゼルだったらしいんだよ」

「へえ…(墮天使の女の時に感じた気はコイツだったのか)ま、別にいいだろ」

「良くないわよ!」

ドンツ!!!

またもや部室内が揺れた。

「これは大問題よ!天使と悪魔と墮天使の会談がこの街で執り行なわれるとは言え私の縄張りで潜伏して営業妨害していたなんて…!おまけに私の可愛いイツセーに手を出すなんて万死に与えるわ!大丈夫よイツセー…私が絶対守ってあげるから…」

「は…はあ…」

「ぐおおお………耳がああ…!!」

その怒声にゼノは耳をやられ、明らかに飼い犬のように扱われているイツセーは少し戸惑っているようだ。

「大丈夫だよ。イツセー君。僕が絶対を守るから…」

「あ…いや…嬉しいけど…真顔でそんなこと言われるとなんか反応に

困るんですけど……」

「真顔で言うに決まってるじゃないか。君は僕の友達だ。コカビエルの件以来…僕は君を大切な友達と思っている…何故だろう…バランズブレイカーを使った時、この胸が熱くなるんだ…」

「き…キモいぞ！お前！近寄んなつー！」

「そんな…」

木場の予想だにもしてない発言にイツセーはドン引きであった。

「イツセー君は赤龍帝の籠手…おそらくゼノ君にも接触してくる可能性があります。破壊神の弟子を放つてはおかないでしょう(うう…ゼノ君は私が守るって言いたい…けど神の弟子ですから言えない…でも言いたい!!…どうしましょ…)」

「先輩なら普通に撃退できそうですね…(守るって言いたい…けど先輩強いから言えない…しかも破壊神の弟子だし…うう…)」

真面目なことを言いつつも内心戸惑っている2人であった。

「けどなんで墮天使の総督が…」

すると

「アザゼルは昔からああいう性格だよ」

聞き慣れた声が部室の入り口から聞こえた。皆がそこを見ると紅髪の青年が微笑みながら立っていた。木場、小猫、朱乃はすぐさま動き他の3人は疑問符を浮かべたがゼノは平然とソファーに座っていた。

「お兄様!？」

リアスは慌てふためきソファーから飛び起きた。

「彼はコカビエルみたいにあんな残酷な性格はしてない。ただのイタズラ好きな総督様だよ」

イツセーとアーシアはサーゼクスを思い出し即座に跪くとサーゼクスは手を上げてた。

「楽にしたまえ。今日はプライベートで来たんだ」

そう言うその他の面子は姿勢を楽にする。

その中でゼノの姿勢は一ミリも変わらず何かと眠たそうな顔をし

ていた。ゼノにとって魔王などはほぼ眼中にないのだ。

「どうしてここへ!？」

「何を言っているんだ。授業参観が近いだろう? 未来のために頑張る妹の姿を見るのは兄として当然のことさ!」

「…グレイフィアね? お兄様に伝えたのは?」

「これも女王の務めですので」

するとゼノは何かを思い出したのかポケットの中をまさぐった。その瞬間にゼノの顔色が変わった。

(ヤベエ…家にある…姉に知れたら……………)

『まあ!ゼノ授業参観あるのね!お姉ちゃん絶対見に行かなきゃ!』

や

『キヤアアー!!!!ゼノ!こっち向いて!お姉ちゃんにその笑顔よく見して!!』

……………)

「どうしたんですか?ゼノ君?顔色が悪いですよ?」

ゼノの顔色を朱乃は心配したのか声を掛けた。

「いや…なんでもない…ちょっと寝かして…」

そう言うとゼノは倒れ朱乃に身を任せた。

「あらあら」

「むう…」

朱乃はゼノに膝枕をすると小猫に勝ち誇ったような目を向けた。

一方

「魔王たるお兄様が一介の悪魔を特別視してはなりません!魔王の仕事をサポートなどもつてのほかです!」

本音と言える言い分にサーゼクスは首を横に振る

「いやいや。これは仕事でもいあるんだよ。リアス。近々この学園で三すくみの会談が行われる事となってね。その下見も含めてだよ」

サーゼクスの言葉に部員全員は驚愕の表情を浮かべた。

「本当に……………?」

「ああ。この学園には何かと縁があるようでね。魔王ルシファアの妹

であるお前とレヴィアタンの妹、伝説の赤龍帝、聖魔剣使い、聖剣デユランダル使いに加えて墮天使コカビエルと白龍皇の襲来があつた場所、偶然にも片付けるには無理があつた事情ばかりだ。様々な力が混ざり合い歪みが生じた場所でもある。その中で兵藤一誠君、それともう一人、」

するとサーゼクスは後ろを振り向きゼノの方向を向いた。

「魔力なしでありながら破壊神ビルスの弟子であり星一つも消しかねない力をもつ黒崎ゼノ君……………て寝てる？」

「はい」

「ではしようがないか……………少々頼みたいことがあつたのだが…仕方がない」

サーゼクスはゼノを起こさぬようその場を去ろうとした時にリアスに耳打ちをした。

「では、私はこれにて、ああ。それとリアス。後でゼノ君に伝えておいてくれ」

「え？……………分かりました」

すると2人はその場から姿を消した。眷属の皆がリアスの方を向くととてつもなく険しい表情をしていた。

「あ…あの部長…魔王様からなにをお願いされたんですか…？」

恐る恐るイツセーが聞くとリアスは首を壊れた人形のように動かしながら答えた。

「こ…今回の三すくみトップ会談でビルス様をお招きしていただきたい……………って」

「「……………」」

その場にはただ冷たい空気が流れるのだった。

プール開き……………違う…

「ビ…………ビルス様…を？」

去り際に、サーゼクスからのとんでもない要求にリアスや他の部員達は目をパチクリさせ言葉も出せない状態だった。

いくら何でも流石に無理だろうと思っっていると、背後から欠伸が聞こえた。

「なぐるほど〜」

今まで寝ていたゼノがゆっくりと起きた。どうやら寝ながら会話を聞いていたようだ。

「話は聞かせてもらった。できるぞ。本人も会いたいって言っていたからな」

「え…本当!？」

「ああ」

まさかのアツサリと許諾したその神の弟子にリアスは目を丸くする。

「ま…………マジかよ…」

「破壊神が直接…………」

あまりにも規模の大きさ、ましてや、この宇宙を統治する神に会えることに興奮どころか、イツセーや木場は圧倒されていた。

するとゼノは皆にビルスの心情を話す。

「師匠達は地球を結構気に入ってるんだ。それはもうこれ以外はないくらいだって程な。それは何故か分かるか？」

突然の説明と質問で皆は何が何だか理解出来なかった。

「何でって…分かんねえよ」

当然の如くイツセーは応えた。すると、ゼノは真剣な顔つきに変わり、ゆっくりと答える。

「【食べ物】だ」

「え？」

イツセーはキョトンとする。まさか〜と思い納得していなかった様子だった。

「だから食べ物。師匠達は何故か地球の食べ物が大好物でな。特にカップラーメンが大好物だ」

「意外と庶民派ね…私も好きだけど…」

「部長!？」

「相気に入ってるんだよ。地球からちよいちよい食べ物送ってやってるんだけど殆ど要望がカップラーメンもしくはスイーツだ」

「そ…：…そうなの…」

破壊神ともあろうものが意外と庶民派の物を口にすると知って皆は少し驚いた。テツキりもつと高価なものを食すると皆々そう思っていただろう。

「師匠を呼ぶんだったら取り敢えずカップ麺か甘いもの出しとけ。そしたら話聞くとと思うで。サーゼクスにもそう言つとけ」

「わ…：分かったわ…：。パフェなんてどうかしら？」

「それで十分だ。あと、イツセー」

「？」

ゼノはイツセーに視線を向けると不安である点を注意をする。

「師匠にどんなこと言われようとキレンなよ？お前は少し短気だからな」

「え!?!俺の何処が短気なんだよ!?!」

「そこだ。万が一キレたら、そこで悪魔、堕天使、天使、それに他の神話共々 終わりだと思えよ？」

その指摘にイツセーは身震いする。

ゼノは話を終わると大きく欠伸をすると、窓を開け脚を掛ける。

「それじゃあ師匠に伝えてくる。サヨナラ」

ドンッ!!!

その場から飛び去った。辺りはまた本や道具などで撒き散らされた。

「まったくいつもいつも…」

「あらあら」

また部員は大掃除に明け暮れたのであった。

今度こそプール開き

「成る程ね。それは面白そうだ」

「じゃ、来るんだな？」

「ああ。暇つぶしには丁度いいよ。日時はいつだい？」

「知らされ次第連絡する。じゃあ伝えとくで」

ピッ

あの後ゼノはアパートに帰るとビルス達に連絡を取り会談への出席を頼んだのだ。ビルスは易々と受け入れ楽しみな様子であった。

「じゃ、グレモリーに伝えるか」

〜♪

『もしもし?』

「あー言われた通りお願いしてやったぞ。向こうは向こうでOKだそうだ」

『ありがとう。何を用意したらいいかしら?』

「ん…ならお菓子類とかを用意しておいた方がいい。師匠は大の甘党だからな。パフェだったら結構喜ぶと思うぞ」

『成る程…パフェ…と。わざわざありがとね。お兄様に伝えておくわ。あとそれと、授業参観、私たちの教科は数学だから』

「ほくい。ほんじゃよろしゅう」

ピッ

「さて、これで完了か…」

ひと段落にゼノはホッとすると。

〜♪

違う人から着信が来たのだ。

「なんだ?」ピッ

『もしもし…先輩ですか?』

相手は小猫であった。何やらお願い事があるようであった。

「何だ小猫か?どうした?」

『明日…私たちだけのプール開きがあるんです…その時、泳ぎを教えてくださいませんか?』

「あ〜？イツセーに頼めばいいじゃねえか？」

『イツセー先輩だと…なんか…』

「あ………察した……分かったよ。いいぞ」

『ありがとうございます』

ピッ

通話を終わるとゼノはソファーに寝転がった。

「ふわあ〜!!終わった〜!さてと…寝ようかn…」
「ゼ〜ノ〜」何だよ

するとソファーの外側からゼノの姉サリが顔を出した。

「これは何かなく？」

ピラピラピラ

「!?それって…」

サリは白い紙をゼノの前で見せた。恐る恐るゼノが見るとそれは
……

『授業参観についてのお知らせ』

「い……いやあ……それは……」

「フッフッフ〜♪カメラカメラつと〜♪あー!ティア〜!スーツ買い
に行こー!」

スタスタスタスタ……

………しまった………

—————

次の日

「さあ!今日は私達だけのプール開きよ!!」

眩しい日差しが指す中リアスは猛烈に張り切っていた。朱乃も笑

みを浮かべており、イツセーはいつも通りのどスケベ顔であった。

「水泳なんて何年振りかなく！砂の惑星いらいだなく！ワクワク！」

ゼノも嬉しいのか普段よりもテンションが高く、子供のようにはしゃいでいた。するとその様子を見ていた朱乃は後ろから近づき肩を叩いた。

「ゼノ君」

「え？」

「私の水着…どうですか？」

「!?」

ゼノは一瞬振り向くと朱乃から目を逸らした。それもそうだ。朱乃はリアスよりもスタイルがよく、おまけに水着でその大きな胸が強調されているからだ。

「い……いや…に…似合うん…じゃ…ないか……？」

ゼノは顔面真っ赤にして曖昧な感想を言った。その反応に朱乃は気持ちを抑えきれず後ろから手を回すと

「そんな一瞬だけでも言わず……じつくりと…隅々まで私を見てください♪」

ムニユ

「ヒヤウツ!?!」

抱きつかれ後頭部に朱乃の胸が当たりゼノは更に赤く染まった。

「うふふ♪顔をこんなに真っ赤にさせて…可愛いですわね♪」

そう言うと朱乃は自分の体を更に密着させた？

「ひゃ……!?!」

ゼノも顔がそろそろ限界まで赤く染まった。すると

グイッ

小猫がゼノを引っ張り朱乃から無理やり引き離すと抱きついた。

「今日は私がゼノ先輩に泳ぎを教えてもらうんです…!」

「あらあら、独り占めはさせませんわ」

すると朱乃も負けじとゼノに抱きついた。

「うう……あ……朱乃！今日は小猫の泳ぎ見ないといけないんだ！悪いけど…」

「そうですか…残念ですわ」

すると朱乃は残念そうに抱きつくのをやめた。

「けど……後で泳ぐからその時頼むよ」

「！はい！うふふ♪任せてください！」

するとさつきまでの残念顔が嘘のように消え去り朱乃はパツと顔を輝かせた。その変わりようはイツセーはもちろん、リアスをも驚かせた。

「朱乃さんのあんな喜んだ顔初めて見ました…」

「ええ。私も長く朱乃と生活してきたけどあんなに喜んだ顔は見たことないわ。驚いた？」

「あ…ええとなんと言うか……お姉さんキャラとしか見たことないんですごいなく……って」

「フフ…朱乃のこともいいけど私も見て？」

「え!?ぶちよ!?!」

無理矢理リアスに手を引かれ首に手を回され抱きつかれている様な状態にされた。その状況下でイツセーは顔を真っ赤にそめた。

「ぶ…部長…！これは…ちよつと…刺激的な…！」

「ふふ…イツセーはこういうのお嫌い？」

「大好物です!!」

「素直でよろしい」

そう言うところリアスはイツセーに自分の体を密着させた。

「ふふ…そんな立ち止まってないでほら…」

「あ…！ぶ…部長…！（やっやべ〜！部長の生おっぱいが!）」

リアスの予想外の行動にイツセーは極度の興奮状態になった。
すると

「部長さんだけです！久々に喋れるんですから私もイツセーさんと（ピー）したいです!!!」

「アーシア！何かメタいよ!?!それにどこで覚えたのそんな言葉!?!」

リアスはイツセーを離すとアーシアと対峙し、目線同士の火花を散

らした。

「あいつら…何やってんだ」

その様子をゼノは呆れながら遠目で見ていた。

そして、ゼノは隣でスクール水着を着た小猫の方を向くとレクチャーを開始した。

—————

「ぷは…ぷは…ぷは…ぷは…」

現在ゼノは小猫の手を引きながらバタ足を教えていた。

「ぼぶぼびびぼ。ぼぶぼびびぼびゅーぼぼびびべべぼびびぼ
(よしよし、いいぞ。もう少し呼吸を落ち着かせて泳いでみな)」

「ぷは…はい…」

ゼノはゼノなりに教えているが身長の為、口から下が水中に入ってしまう、全く聞き取れなかったが小猫は普通に聞き取れていた。

だが教え方は明らかにプロ並みであり、意外な才能にリアスや他の皆は驚きをかくせなかった。

「凄いわね…ゼノに指導の心得があるだなんて…しかも教え方がオリンピックの選手のコーチ並みだわ…」

「いやあの言葉を聞き取れる部長や小猫ちゃんの方が凄いですよ!？」

リアスの言葉にイツセーが突っ込んでいると二人は25mのプールを泳ぎ切ろうとしていた。

「ぼび、ぼびびゃぶ(はい到着)」

ザバツ!

いきなりのブレーキで小猫は前のめりになり、前にいたゼノに捕まった。すると見るからに小猫がゼノに抱きつく形となった。

「す…すみません…」

「い…いいよ／＼／＼…それに気持ちよかったですだろ?」

「はい…自然な感じで…」

「なら良い……後は自分で頑張れよ」

そう言うのとゼノはその場から上がりスポーツドリンクを取り出すとビーチパラソルの下で寝転んだ。

「何だ？お前は泳がないのか？」

ゼノは近くにずつと座っている木場に向かって声をかけた。

「え？あはは…何か平和だなと…」

「ふわあく……泳いでくればいいんじゃないか？こういう事は滅多にないからな」

「はい」

そう言うのと木場はゴーグルを掛けると軽快な足取りでプールへと走っていった。

（聖剣の件で荷が下りたのか？ならいい。一休みつと……）

そう言うのとゼノは目を閉じた。

—————

—————

—————

ドーンっ!!!!

バーン!!!

ビリビリビリっ!!!

ドカアーン!!!!

「!?」

壮絶な効果音にゼノは目を覚ました。見ると自分の周りがコンクリートの破片で散らばっており、周りのパラソルも粉々であった。

「何だ!？」

すると突然、魔力の流れ弾がゼノに向かってきた。

「あぶな」

バヒユウウ!

普通に弾くとその流れ弾の向かってきた方向を向いた。見るとそ

ここには滅びの魔力を全身から溢れさせているリアスと雷の魔力を纏った朱乃が立っていた。

「朱乃！今の言葉取り消しなさい！可愛いのは私のイツセーよ!!」

「あらあら！可愛いのは私のゼノ君ですわ!」

「なによ貴方シヨタコンなの!?それだからいつもゼノに見向きもされないんじゃないの!？」

「ゼノ君はいつも私を見てくれますわ。それに貴方の方では無くて？イツセー君を未だに抱けない紅髪の処女姫さん?」

「カッチーン!!
ン痴女さん!!!」
もう一度言ってみなさい!!雷のシヨタコ

「何度でも言っつてやりますわよ!紅髪の処女姫さん」

ドカアアオアアアン!!!!!!
ビリビリっ!!!!!!
ビリビリビリビリ

二人のぶつかり合いは更に酷くなり、プールもろとも吹き飛ばそうとしていた。

流石のゼノも少し頭にきたのかその場から消えると二人の位置に移動した。

「やめろ」

ガシッ!

「!!」

ゼノは二人の間に立つと腕を掴み争いを止めた。

「ゼノ!」 「ゼノ君!」

「流石にやり過ぎだ。これ以上公共物を壊すとめんどい事になるぞ?」

そう言われた二人はようやく我に振り返りを見回すと魔力で修復した。

その時
ピンッ

ゼノは何者かの気を感じ取った。ただそれは一度感じたことのある気であった。

「またあいつか？しかも学園の近くにいる…行くか」

そう言うとゼノは着替え皆よりも先にプールを後にした。

白龍皇再び

イツセーside

部長達がプールを修復していると突然ゼノが更衣室に走っていった。

「?急にどうしたのかしら?」

「分かりませんね...」

部長や朱乃さんも何故か分からなかった。

——

——

「ふわあ〜!終わったー!!」

あのプール騒動からしばらくして俺は学園へと向かっていた。

「ふわあ〜...?」

ふと見ると校門の近くに学校を眺めてる銀髪の人がいた。よく見たら美少年だ。

俺は不思議にその人を見ていた。するとその人は俺の視線に気づいたのか振り向いた。

「いい学校だね」

「え?あ〜:...まあ」(誰だ?)

そう思いながら話していると

「ここで会うのは二度目だな。赤い龍」

!!!!

「ど!!!どういふことだよ...!!まさかお前は...!!」

俺は恐る恐る聞くとそいつは予想通りの答えを返してきた。

「察しが良い。俺の名はヴァーリ、白い龍『バニシングドラゴン』だ」

その瞬間、俺の左手にちぎれそうな感覚が襲ってきた。

(な...腕が反応している...!?マジでこいつが...!?プレッシャーは感じないけど死を予感されてる...!ヤバイ...!)

「そうだな、例えば俺が君に魔術的なにかW...」冗談が過ぎるんじや

ないか？」

その時、木場とゼノヴィアが現れあの白龍皇の首筋に剣を突きつけた……あれ？ゼノヴィアいたの？

「ここで赤龍帝との決戦をさせるわけにはいかないな……！」

「おいおい。無理なことはよせ。切先が震えてるぞ？コカビエルごときに敵わなかった君達では俺に敵うはずもないだろ？」

（ゲツ!?マジかよ!?コカビエルごときってこいつどんだけ強いんだよ!?）

俺がそう思っていると

「裕斗、ゼノヴィア、剣を納めなさい」

突然声が出たかと思いきや振り向くと部長と朱乃さん達がいた。

部長は低くトーンを下げたような声で言う二人は剣を下げた。

「白龍皇、何のつもりかしら？」

「なあに、今日は戦いに来たわけじゃない。アザゼルの付き添いで来たから只の退屈しのぎだ。まあ今すぐここで戦おうというなら早くやりたいところだが、今はやめておこう。」

するとそいつはいきなり遠くの高層マンションを指差した。

「今気付いたが、万が一いま戦いでもしたらあそこにいる君達の仲間に一瞬で消されるからな」

皆が見るとそこには黒い影がこつちを見ていた。すると一瞬でその影は消えた。

「な!?消えた!?」

ゼノヴィアが驚いていると

「んん、よく気付いたな」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

見ると白龍皇の後ろに誰かが立っていた。まさかゼノ!?

「…ほう…あの距離を一瞬で…やはり君は只者じゃないな」

白龍皇の奴も驚いてやがる…! そりゃあそうだ! あの距離を一瞬だなんて多分騎士やコイツでも出来るもんじゃねえからな…

するとゼノは白龍皇から離れた。

「気配は消してたつもりなんだけど、お前意外と感知能力高いんだな?」

「気付いたのは今さっきだ。それに君は最初気配を完全に消していただろ?そして途中からわざと大量に殺気を出して俺を気付かせた」

「そうだ。やっぱ凄い。コカビエルを見下す程の奴だけある。そのバカで変態でロクでもないことに力を注ぐダメドラとは大違いだ」

「え!?! 酷くね!?! 殆ど悪口じゃん!」

『うおおおくん!!!』

ドライグ泣くなよ!!俺が一番泣きてーよ……………

「兵藤一誠」

「あんつ!」

俺は泣きながら振り向いた。

「君はこの世界で何番目に強いと思う?」

「……………どういふことだ?」

「君の未完成である禁手化、上から数えると恐らく1000から1500の間くらいか?いや、宿主のスペック的にはもつと下か。それにリアス・グレモリーの兄である現魔王 サーズクス・ルシファーで

ある彼でもトップ10には入らない。だが一位はもう決まっている。不動の存在が」

「何が言いたいんだよ! その一位が自分とでも言いたいのかよ!」

「いづれ分かる。だが俺ではない。それと黒崎ゼノ」

「あ? 何で俺の名前知ってんだよ?」

「虫の知らせという奴だ」

「そうか」

俺に話し終わるとそいつは次にゼノに話しかけた。ていうか虫の知らせで納得しちゃうの!?! 全然意味違うからね!?!

「君にも聞く。君はこの世界で自分が何番目に強いと思う？ま、俺の予想だと君は5位か6位くらいかと思うが？」

俺にした質問と同じ……ゼノはどう答えるんだ……？するとゼノの額に少し青筋が浮かんだ。

「二位だ。ていうかバカにしてるのか？惑星一つ破壊できねえお前らや一位と比べるなんて侮辱される事と同じだよ。こつちにはこつちなりの一位がいるんだよ」

「ほう？そいつは誰だ？気になるな」

「いずれ教える。まあお前の中の一位は俺にとっては1000位みたいなもんだからな」

そう言うのと白龍皇の奴はフツと笑った。

「ほう……ならその時まで楽しみにしておこう。君の中の一位ともいわずれ戦つてみたいからな」

そう言うのと白龍皇は俺たちの横を通り過ぎていった……あれ？ゼノは？

ふと見るとゼノがいなくなっていた。探すとあいつは白龍皇の後ろにいた

あれ……？何か肩に担いでない？何くあれ……？

あ、バズーカだ。

その瞬間

!!!!!!
「チョーシこいてんじやねえぞおおおお!!!青二才がああああー」

取り上げられちゃったが今回の会談の打ち合わせのすきに楽しみ奪
還よ！ザマアくみやがれ！…………

ある高級マンションであら金髪と黒髪を合わせた髪型の浴衣を着
た男がゲームをしていた。

……よし!!……………ここだ!……………キタアアア!!!
ここでラストの究極コンボ!!よっしゃああああ!!!遂に出来たぜ!
ファイナルかめはめh…………「ドガシヤアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ンツ!

『た…ただいま…』

「……………またかよおおおおおおおおおおおお！」

授業参観

ゼノがヴァーリをバズーカで葬った後、オカ研メンバーは参観日のためそれぞれの教室へと向かっていった。

三年の教室に着くと朱乃は違うクラスのため「また後で」と言い隣の教室へ入っていった。

二人が教室に入るとそこはいつもの賑やかな風景であった。数日前にこの学園が戦場になっていたなんて嘘だと思えるほどだ。

「ふわあ〜…眠いなく…ダルいし授業サボっていい？」

「貴方いつも寝てばかりでしょ？公開授業くらいは起きて受講しなさいよ。ちなみに、誰が来るの？」

「姉とこの前ゲットしたティアマットだよ…姉の奴めちやくちや張り切りやがってティアマットも何故か『師匠の普段の生活…：気になります…』とか言って張り切ってるしなんなんだよまったく…：そっちは？」

リアスが聞くとゼノは眠たながら応えた

「え？私はお父様とお兄様…：て貴方お姉さんがいるの？」

するとリアスはゼノに姉がいるのは初耳な為質問した。

「ああ。だがまあいつもベタベタしてきてよ…：夜も気づけば抱き枕にされてるし…」

「そ…：そうなの…。えつとそれで貴方のお姉さんもビルス様の弟子なの？」

「弟子とは行かないがお前ら同等に空は飛べる。あとアイツは先月まで宇宙に行ってたからな…：それなりの戦闘力はある。少なくともお前らや魔王よりは上だ」

「え…：宇宙に!?どうやって!？」

リアスは目を丸くし驚愕するとはたまたゼノに聞いた。それでも全く表情を変化させず答えた。

「姉は昔から宇宙が大好きでな、研究し続けた結果、宇宙船を自分で設計して旅立ったわけ。ちなみに俺が11の時だ」

「11ってことは貴方のお姉さんは？」

「今24だからええと……」

「17歳で宇宙に!?!いやいやいや天才すぎるでしょ!?!今までの最年少のゲルマンを軽く超えちゃったわよ!?!」

「別にいいだろ…そんなの…めんどくさ………」

zzzzzz

「なんで寝るの!?!」

こうしていつもの日常が幕を開けた。

—————

—————

—————

「この後の公開授業は保護者の方だけでなく中等部の生徒も見学に来るので滞りなきよう励んでください」

今俺たちは公開授業前の昼休みを持って余していた。俺のクラスには誰が来るのかワクワクしてる人、親が来てなにかと嫌だと思っ机に屈している人、など様々な反応が出ていた。

「なあ、イツセーんとこ誰が来るんだ?」

「んあゝ母さんと父さんがな、アーシアを見に来るんだと」

「あく分かる」

「私こういうのは初めてなのですごく楽しみです!」

「私は憂鬱だなゝ」

俺や桐生はあんまり気乗りしないがアーシアは顔を輝かせていた。それもそうだ。アーシアは教会育ち、生まれてこういうのは一度も味わったことがないからなゝ

ふと廊下の窓を見るとアクセサリーをつけた人やスーツなどを着こなした人達が次々と見えてきた。

そうかくもうすぐ四時限目も始まるし皆の親達も来るのか。
そうほのぼのと思っていると突然廊下の方が騒がしくなった。

「なんだ？」

「さあ？」

俺と元浜と松田は廊下に出た。そこには……

「「なっ！」」

一人は黒髪をたなびかせスーツを綺麗に着こなしたティアマト、
たがもう一人は知らない人だった……その人はすぐく長身で綺麗な
朱色の髪をたなびかせながら歩いていて！すると周りの男子はもち
ろん女子までも見とれていた……！

そしてなにより目に映るのは……

「「おっばい!!」」

や……やべえ……ぞ……ありや……スーツ越しでも分かる超爆乳じゃ
ねえか……！

「元浜！数値を！」

「言われなくとも！」

ピー………ジジ……

パライインツ！

「ぐはっ！」

「元浜！」

いきなり元浜の眼鏡が割れた！な……何があったんだ！

「おい！しっかりしろ！元浜！おい！」

う………うぐ……ああ……こんな数値は見たことないな………いつ………一瞬
見えた………スリーサイズは………

「何だ!？」

「と言うか元浜あんた眼鏡とった方がイケメンよ？」

桐生の事は無視して俺たちは耳を傾けて聞いた！

「ば……B115 W61 H92……」

「「な……何イイイイ?!!」」

ひゃ……115だと!!?!なんておっばいだ……！

「脳内保存！脳内保存！」

「ところで三年生の教室は何処か分かる？見当たらないんだけど…」

「あええと三年生は向こうの棟です！あ…案内しましょうか…？」

「本当！ありがとう！」

そう言うとその人はパツと顔を輝かせた！ あ…鼻血が…

「イツセー貴様!!美味しいところをおお!!」

「お前にはアーシアちゃんとゼノヴィアちゃんがいるだろうが!!」

「フツ…すまん…困っている人を助けるのが俺の仕事なんだ☆」

(((((ウゼエ……………))))))

「さあいきましょー！」

「ええ」

「おい。赤龍帝、何をニヤニヤしている？まさかサリさんで卑猥なことを企んでいるんじゃないだろうな？」

「いやいやそんなことねえって♪」

俺はウキウキしながら三年の棟へと向かった。

道行く度に皆の視線がゼノのお姉さんに釘付けになる…！俺もだ！

すると

「おい、エロ3人組の一人よ、いい女連れてるじゃねえかああ？」

！コイツは元柔道部首相 『下田 拓也』！しかも性欲が表面から出てとんでもないことから『エロタク』と呼ばれている先輩だ！俺たちと並ぶほどの有名人だ！

「し…下田先輩…」

「しかもどつちもいい胸じゃねえか？100は超えてるよな？」

く…下田先輩…噂通りやばい男だ…この人は強姦容疑で一度捕まってる…その気色悪さからソーナ先輩や部長もあまり近寄らないらしい…

「だつたら何なんですか！俺はこの人達を案内しと」ゴバツ！

その瞬間に俺は先輩から背負い投げをされた…！

「ウルセエんだよ。黙ってるろ」

そう言う先輩は二人に向かってよだれを垂らしながら狂気 of 目を向けた。

「ぐへへ……おっぱい揉ませろおおおおおお!!!!!!」
そして先輩は歯をむき出しにし二人にとびかかった……!
すると

「ドロップキイイイイイイイイイイツクツ!!!」

ドガシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

誰かが先輩に向けてドロップキックをかました! その衝撃でそこ
には大きな風穴が……すると三年の教室から次々と先輩達が出てき
た! 中にはソーナ先輩や部長もいた!

「イツセー!? 何があつたの!?!」

「部長! その……それが……」

「何ですって!?!」

いや何も言っていないんですけど!?!

「大丈夫ですか!?!」

ソーナ先輩がサリさんに駆け寄った!

「え……うん。今の人って?」

「すみません。うちの手がつけられない問題児でして……ご安心を、少
し経てば破壊された壁はすぐ戻るのぞ」

なに!?! 少し経てば戻るって!?! ソーナ先輩まで感化されてるし!?!

「つたく、姉に何してんだよ。このクズ野郎が……!」

煙が晴れるとシルエツトが見えてきて段々と姿が明らかになって
きた……やっぱゼノだ!
すると

「あ! ゼノノ!!」

バツ

「な!?! ああ／ああ／／姉貴／!?!」

ゼノを見つけた瞬間にお姉さんがゼノに抱きついた! なに!?!

「ん〜!! 会いたかった〜!!」

「や／／やめろ／／!! 周りから見られてんだろ!!」

「気にしなくい気にしなくい！うりうり！」

「や…やめrむぐ……！」

いつものゼノじゃねえ…顔を赤めかせるなんて初めて見た…と言
うかこの人ってまさか……

「ねえ…？あれもしかして黒崎君のお姉さんじゃない？」

「え!?!うそ！凄い美人！」

「モデルか何かしら？」

周りにいる先輩方も驚きはじめた…！

「…って鑑賞してる場合じゃないわよ！」

「のわっ！部長!?!」

「今の朱乃が見たら…ヤバイわ……」

あつ……ヤバイ!!朱乃さんがこんなの見たら！

「あ……あ……」

ヤバイご本人だ!!

「……………」

空気が重い……ここで魔力なんか発動されたら……

「……………」

マズイ！

パシヤ

「「え…?」」

俺と部長は目を見開いた。朱乃さんの手には……………

「「カメラ…?」」

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ
シヤ

「うふふふふふふふゼノ君の照れ顔…ゼノ君の照れ顔…ゼノ君の照
れ顔……!!」

「……………何でやねん……………」

その後、下田先輩は問題行動が原因で三週間の停学になり、全治5ヶ月の重症を負った。あと何故か風穴は直っていた…

俺も公開授業が始まるから教室に戻った…ゼノを放っておいて…

side out

「ゼエ…ゼエ…ゼエ…ゼエ…」

「大丈夫？」

「これが大丈夫なように見えるか…」

「いや全く…流石に10分も抱きしめられるとこうなるわよね…」

現在ゼノ達は授業参観真つ最中であった。珍しくもゼノは起きて真面目に受講していた。

「んで…あんたの親は？」

そう聞いた瞬間にリアスは後ろに目をやった。

「真後ろに…」

見ると

「お…リーアたんがこっちを向いた…！なんて凜々しい…」

ぎゅっ…………

二人はすぐに前を向いた。

「初めてあんたに同情するよ…」

「うん…」

そして2人は授業へと向き合うが……

「よし。ではこの問題を解いてみる」

「先生。何で3年で線形代数やるんですか？」

「知らなかったのか？この学園じゃ1、2年で3年間の分野を全て終

わらせて3年で大学の勉強を少しやるんだぞ?」

「はあ!?なにその『高専』みたいなカリキュラム!?!」

「因みに後でこの授業についてレポートを書いてきてもらう。来週までだぞ!」

『もろ高専じゃねえか!?!』

授業も授業で波乱である。

こうして公開授業は終わった。

魔王セラフオルレヴィアタン

「つ…疲れた……」

授業が終わり、オカ研の皆は学園の庭のベンチに座っており、中でもリアスとゼノは疲れ切った表情をしていた。

「どうしたのですか？お二人とも？」

「ふふふ…ゼノ君はお姉様がいて集中できず、リアスはサーゼクス様にとことん撮影されたらしいですわ」

「それで…ですか…」

アーシアや一誠はなんとなく察した。

「とうかゼノ先輩…お姉さんいたんですね？」

「いたよ…あいつには結構世話になってるし、料理もしてくれるしありがたいんだけど…めっちゃブラコンなんだよ…はあ…」

だがその言葉にイツセーは泣きながら反論した。

「でもいいじゃねえかよ！お前あんなムチムチなお姉さんがいてよ！俺なんか一人っ子だぞ!?姉も妹もないんだぞ!?!」

「知るかあ!!」

「ぐぼべらあ!?!」

イツセーをぶっ飛ばしたゼノは気分転換する為に自販機へと千鳥足で向かっていった。

「むう…ムチムチって…私…胸…」

「大丈夫だよ…小猫ちゃん」

「先輩…」

「ぺったんこでもいいことあるって!」

ブチ

墓穴を掘った。

「ぐぼべらあ!?!」

その場に小猫のアップアが見事に決まった。
—————

「ああ…帰りたい…ウイスさんのところに帰りたい…」

あれからゼノは缶ジュースを買ったが異様に気分は晴れなかった。

トボトボと廊下を進んでいると学園を回っていたサリと会った。

「あ、ゼノ」

「なんだよ…まだ帰ってなかったのかよ」

「うん。ティアは先に帰らせたけど、ここ面白そうだから色々見てきたの♪さつきそこでサーゼクスとかいう人と話してきたの♪どうする？一緒に帰る？」

「うう…そうさせてもらう…」

「オツケー…あ！そうだ！ゼノの部員の人たちも悪魔なんですよ！会ってみたいわ！」

「ああ…（確かに今紹介しとかないとめんどろうだからなく…）いいよ…」

「やった！」

すると

「おい！あっちで魔女っ娘の撮影会やってるらしいぞ!？」

「まじかよ！早くカメラカメラ！」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

大勢の生徒たちが階段へと走っていった。

「魔女っ娘!?!面白そう！いこいこ!!」

「は!?!」

サリはゼノの襟首を掴むと生徒たちについていった。

—————

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ

カシヤ カシヤカシヤ

見るとその場には数十人もの生徒が集まっており、見ると階段には昔ながらの魔法少女の格好をした少女がポーズを決めていた。

「なんだ結構集まってんな」

「すっごくいい！写メ写メつと！へえー！最近は授業参観にはコスプレイヤーも参加できるんだ！」

いや、絶対違う。そんなのないない。そんな授業参観あつてたまるか。

見るとリアス達も来ていたのだ。
すると

「オラオラオラオラ！天下の往来で撮影た〜いいご身分だな！」

生徒会の書記である『匙 元史郎』が現れた。

「さあさあ解散解散！今日は公開授業だからこんなところで騒ぎを起すすな！」

そう言われた生徒たちは口々に文句を言いながらその場から立ち去った。

「というかあんたもその格好はやめてくれ…参観の人だったらもつとその場にあつた服を着て来てくださいよ…」

「え〜？これが私の正装だもん☆」

するとその少女は横ピースにしながら答えた。
すると

「あら、ゼノ、じゃない？」

「あくグレモリーか…」

ゼノに気付いたのかリアス達がこちらに歩いてきた。

「あら、この子達がゼノの友達？」

「先輩…誰ですか？」

すると知らないのか小猫が聞いてきた。

「あー…一応紹介する…俺の姉の…」

「黒崎サリです♪よろしく！」

そういうとリアスに手を差し出した。

「よ…よろしくお願ひします…リアス・グレモリーです」

「姫島 朱乃です」

「塔城 小猫です…」

「木場 祐斗です」

リアスに続くようにオカ研メンバーは挨拶をした。

「よろしく♪いつも弟がお世話になってるわね。これ、細やかながらの手土産です」

するとサリは抱える程の大きな箱をリアスに渡した。

「ありがとうございませぬ!重!何ですか?これ?」

「惑星サーガのりんごです♪」

「ああ、ありがとうございます……………て……………いまなんて…?」

「だから惑星サーガのりんごですつて」

「「「ええええええええええ!!」「」」」

皆は驚きながらその箱の中身を見るとそこには不自然な形をした巨大なりんごがあった。

「な……………何ですか!?!これ!?!普通のりんごじゃないですよね!?!」

「そうだよ。地球産じゃないもの。別の星で作られたりんご」

一誠の質問にサリは普通に答えた。それもそうだ。今の日本では月や火星までしか技術が進んでないのだから。それに宇宙に行ったこともない悪魔達が見たら流石に驚くだろう。

「姉貴…またあの星行ったのか?」

「うん♪意外と木の実とか美味しかったからウイスさんに頼んじやつた」

「はあ……………」

すると

「匙!何事です!」

すぐ近くの廊下から生徒会長であるソーナが飛び出してきた。

「あら、ソーナじゃない」

「リアス、ここにいたのですね。……………そちらの方は?」

「ああ、ゼノのお姉さんの『黒崎サリ』さんよ」

するとサリは気付いたのかソーナに軽く挨拶をした。

「黒崎サリです。よろしく♪」

「あ……………『支取 蒼那』です。よろしくお願いします!」

突然の握手にソーナも焦った。

「でもどうしたの?こんなところで?」

「実はいまサーゼクス様とおじ様をご案内していたもので…」

すると後ろにはスーツを着こなしたリアスと同じ紅髪をした男性

二人組が立っていた。

「お父様、お兄様…」

するとゼノやサリ以外のオカ研メンバーは魔王であるサーゼクスにお辞儀をした。

一方匙は何故かソーナに説教を食らっていた。

「ところで匙！問題は早急にそして簡潔に解決しなさいといつm：

「ソーナちゃんみーつけた!!!」

バツ！

「な!？」

すると今まで匙に注意されていた女性がソーナを見つけた瞬間に抱きついた。

その少女は長い髪をツインテールにして近くでみると完全な魔法少女に見える少女であった。

「誰だろ？あの蒼那って子の知り合いかな？」

「さあな…」

ゼノとサリはもちろんイツセーや匙も分からなかった。

「やあセラフォルー、君も来ていたのかい」

「どうやら女性の名前は『セラフォルー』というようだ。だがイツセーはその名前にぴたりときた。

「セラフォルー……ってまさかあの人…」

「現四代魔王の一人、『セラフォルー・レヴィアタン』様…：ソーナのお姉様よ」

「えええええ!?!あの人が!?!」

「あーリアスちゃんおひさ〜☆元気にしてた!?!」

「はい。お陰様で、今日はソーナの授業に？」

するとその少女 はこちらに気がつくともたもや横ピースで挨拶した。するとリアスも軽い挨拶をした。当のソーナは恥ずかしいのか顔をすごく赤面させていた。

「うん☆ソーナちゃんったら酷いんだよ！今日のこと黙っててさ！お

姉ちゃんショックで攻め込むところだったんだから！」

「冗談なのか本気なのかよくわかんねえな……」

するとセラフオルーという少女はイツセーやゼノに気付いた。

「イツセー、ご挨拶なさい。一応ゼノも挨拶はしなさい」

「ういっす」

「は……はじめまして！リアス・グレモリー様の『兵士』兵藤一誠と申します！よろしくお願ひします！」

「俺は黒崎ゼノだ」

ゼノは兎も角、イツセーは相手が魔王なので緊張しながらも自己紹介をした。

「初めまして！私はセラフオルー・レヴィアタン！『レヴィアタン』って呼んでね☆」

「は……はあ……」

「(コイツ何歳だよ……)」

まんま魔法少女の自己紹介+ポーズを決められイツセーは焦り、ゼノはそのなりきりっぷりに内心引いていた。

「ねえねえ？サーゼクスちゃん、この二人が噂のドライグ君とビルス様の？」

「ああ。彼が赤龍帝を宿す『兵藤一誠』くん。もう一人がビルス様の弟子『黒崎ゼノ』君、後ろにいるのがゼノ君のお姉さん『黒崎サリ』さんだ」

そう言われたセラフオルーはサリと挨拶を交わした。

「セラフオルー・レヴィアタンです☆『レヴィアタン』って呼んでね☆サリさん！」

「じゃあ！よろしく！レヴィアタン！」

何故かサリとセラフオルーは気が合うようだ……

するとイツセーは何らかの複雑な疑問を抱いていた。

「部長……ゼノは兎も角、初対面のサリさんに悪魔であること話してもいいんですか……!?!」

「大丈夫よ、ゼノのお姉さんだから信用出来るわ。それに、ゼノから聞いたんだけどお姉さん…お兄様達よりも強いからね…」

「えええええ!？」

それにイツセーはすごく驚いた。

「いやいやいやいやいやいや!だって俺あの人から全然魔力感じ取れないし!そんなk:「それは本当だよ、イツセー君」

すると今まで黙っていたサーゼクス達が話しに入ってきた。

「え?…」

「先程まで私と父上は彼女と話していたんだ。その時つい口が滑って「妹の方が可愛い」と強く言った瞬間に凄い目で睨まれてね…信じ難いがそれだけで威圧されてしまったんだよ」

「ま…………マジですか…………」

「ああ。そしてその直後に」と言うか貴方達、人間じゃないですよね…? 誰ですか?」と凄いだスが効いた声で詰め寄られて…あつさりと『悪魔』だと吐いてしまったよ…」

「(…………えく…………!!!(ていつか口ゆるツ!それでいいのか!?)」

意外な一面を知ってしまった一誠は身震いした。一方話の本題であるサリはケロツとした表情で喋った。

「いいですつて♪それにあんなことでちよつとキレた私が悪いんですから。よろしくお願いしますね」

「うん…」

そう言うと二人は手を交わした。

一方ソーナとセラフオルーの姉妹はソーナの方が限界らしくその場から逃げたがそれをセラフオルーが追いかけるいういわば姉妹同士の追いかかけっこが始まった。

「待ってよ〜!お姉ちゃんを置いていかないで〜!!ソ〜た〜ん!!!」

「たん付けはいい加減やめてください!!!」

その後二人は何処かへと走って行ってしまった。

「シトリー家はいつも平和だね。『リーアたん』」

「お兄様…私をたん付けで呼ばないでください」

「そんな…リーアたん…昔はお兄たんお兄たんといつも私の後ろをついてきたのに…反抗期か…」

「お兄様！どうして私の幼少期の事を話すのですか!？」

カシャカシャ

「よくぞここまで育った…リーアたん…」

「お父様まで!？」

イツセーはリアスを揶揄う魔王を見て少し驚いていた。ゼノもそうだ。

「意外と魔王って軽いんだな」

「ええ。魔王様方は皆面白い方ばかりなのです。それに対してそのご兄弟方は例外なく真面目な方ばかり、きつとフリーダムなご兄弟が魔王になったので真面目にならざるを得なかったのでしょうね。うふふ」

「なるほどね」

朱乃の話で納得するとゼノは時計を見た。

「じゃ、俺はそろそろ帰るよ」

「では、私も」

そう言うと二人はそこから出口へと歩いて行った。

その後ろ姿からはどう見ても親子としか見られない様子だった。

「仲のいい姉弟ですわ」

「そうですね…」

その姿を見る皆の中で、小猫は何かを思い出すかのように見つめていた。

「……姉弟………姉様……」

ゼノとサリの歩く姿を見て小猫が昔のことを思い出した。

「お兄様…ゼノのお姉さんからもらったこのリンゴ…地球産じゃないみたいですよ…」

「ほう…別の星の果物か…これは興味深い…むぐ……美味い！」
「ええ!？」

その後、そのリンゴは冥界の研究会に引き取られたそう

結果は地球産より成分が5倍も高いだけという地味な結果だそう
な…

ティアマツトの修行

二人が授業参観から帰ってくるとティアはいつもどおり居間にいた。

この後は何も予定が無いことを確認するとゼノはティアマツトに切り出した。

「おいティアマツト、今日はいよいよ修行をやるぞ」

その言葉を聞いた瞬間にティアマツトは「待ってました」かの表情を浮かべた。

「!ほんとですか!?!」

「ああ。ここしばらくなんもやってねえからな。すぐ外に出ろ」

「はい!」

—————

ゼノは外に出るとティアマツトと向かい合った。

「まずは『慣れ』だ。いまからお前にはここよりも重力が10倍ある所で修行を行ってもらおう」

「10倍ですか!?!」

突然の課題にティアマツトは驚いた。だが、地球はどこも重力が同じ、ましてや冥界もだ。どうするのだと

「えっと…それってどういう風に…」

「取り敢えず俺の肩に手を置け」

そう言われるとティアマツトはゼノの肩に手を置いた。

「しっかりと掴んどけよ……………」

その瞬間……………辺りの景色は一変した。

「な…!ど…何処ですか!?!ここ!?!……………のわ…!?!」

周りを見渡すと同時にとてつもない重力が自分を襲って来た。まるで背中を空中から押されるかのような重圧にティアマツトは手をつけることしか出来なかった。たいしてゼノは平然としておりその

重力をものともしていなかった。

「……これは……」

汗を流しながら見渡すと周りには緑色に染まった木々が生い茂っており、そこには不自然な形をした果物が大量に実っていた。近くに湖などもありそこには大量の魚がいた。

「ここは『惑星サーガ』地球からおよそ数万光年ほど離れた辺境の星だ」

「地球から!? てことはここは別の星なのですか!？」

「そうだ。お前にはこれからこの重力に慣れてもらおう。今のお前は体に何キロもの重りを背負ってるようなもんだ。それを無くせ。慣れた後すぐに俺と組手だ。分かったか?」

「はい!」

ティアマツトが返事をするのでゼノは近くの木を指差した。そこにはサリガリアスに渡した『サーガツプル』が大量に実っていた。

「じゃあ第一の課題だ。あそこにある木の実を取ってみろ」

「あれですか!? ……はい!」

ティアマツトは全身から汗を流しながらも必死に体制を戻そうとした。

「うぐ……ぎいぎぎぎぎぎぎ……!!き……きついですね……」

「初めての奴はだいたいそう言うだろ。今すぐとは言わん。少しずつこの星に慣れればいい」(とは言ったものの夕飯まで7時間ぐらいはあるから今日中に慣れるだろ)

「うぎぎぎ………はい!」

すると、だんだんティアマツトの体が震えているとはいえ立ち上がってきた。

!!く……ーきききききき………!!
!!!!!!
!!!!!!
!!

雄叫びと共にティアマツトの体制は元に戻った。だが、相当にきつかったのか額から尋常じゃない程の汗が流れ落ちていた。

「はあ……はあ……はあ……はあ………はあっ………この感覚ですね

…」

「お〜！凄いや〜！まさかこんな短時間で慣れるとは思わなかったよ〜！」

慣れが予想よりも 早かったのか珍しくゼノが驚いていた。

「はあ…！はあ…！はあ…！でも…結構体力つかいますね…」

「それが今回の課題だ。とにかくこの重力に慣れろ」

「はい！ですが何故師匠は…」

「俺は前々からこういう奴をやってたんだ。大体5年くらい前からな。それに、この前600倍の奴もやったからな。ま、あれは流石にキツかったがな」

「600倍ですか!?普通に潰れますよ!?!」

「だがお陰でこんな力が入ったんだ。感謝しねえとな…」

そう言うとき空を見上げた。

それからは、同じ事の繰り返しであった。

崩しては立ち、崩しては立ちをティアマットは何回も繰り返し、ジョギングもした。その距離はなんと10km 初心者では考えられない結果である。

それから少し休むとまた再開した。ティアマットも段々と動きが軽快になっていった。

するとこの日のうちにティアマットは第一課題のリングを早くも達成したのである。

そして、気付くと、辺りはもう暗くなっていた。

「さてと、そろそろ晩飯だ。帰るぞ」

そう言うときゼノは疲れきったティアマットの体に触れると直ぐにこの星から消えた。

ヒュンツ!

ドサ

着いたと同時にティアマツトは地面に手をついた。

「ゼエ…ゼエ…ゼエ… 疲れました…」

「お疲れ、まあ良い方だったよ。流石は魔王級と記されるだけはある。どう？・感じは？」

「キツイ…ですが…特に何…も!?!」

その瞬間にティアマツトは全身が心地のいい感覚に見舞われた。

「な…何ですか!?!この感覚…まるで…空気と一体になったかの様な…それに魔力も格段に…」

自分の変化に驚きを隠せないでいた。力を増した上に今まで味わった事のない感覚、身体中を駆け巡る膨大に増幅した魔力、何が起こったのかさっぱり分からなかった。

「どうだ？・力が増したろう？・普段とは違う厳しい環境下の中であんな長時間やったんだ。お前の魔力が限界を突破したんだろ」

「はい…とても心地いいです…」

「その感覚が覚えただけでもいい。とりあえず飯だ飯」

そう言うところではティアマツトを連れてアパートへと入っていった。

—————

———

「あらお帰り♪もうご飯出来てるよ」

台には北京ダックや、小籠包、そして回鍋肉などの、中華料理が大量に置かれていた。

「よし…食おう食おう!」

するとゼノはまるで子供の様にはしやぎ出し、椅子に座る。

「はいはい♪ティアも早く座って♪」

「は…はい…」

「いただきます」

――

「(づ)馳走さま……」

夕食を食べ終わると恒例のあの時間が来た。ゼノが毎回寒気を感じるあの時間。

「じゃあ……お風呂入ろ♪」

「……………ハアイ……………」

これはいつもの事である。いくら注意しても勝手に入ってくる。これが幾日も続き、流石のゼノも諦めたようだ。

「ティアもどう？一緒に？」

「はあ!？」

いきなりティアマットを誘う発言にゼノは驚いた。

「え!?!あ……つと……いいのですか……?」

当の本人は何故か戸惑っていた。

「いいのいいの♪たまには皆で入ろ♪それに師匠と弟子は一緒に入るものでしょ?」

そう言うとサリは目をゼノに向けると『論破』のようなウインクを浮かべた。

「く……………」

これには何を言おうと反論出来ない。

「で……では失礼します……」

――

――

――

「……………死ぬかとおもった……………」

タオルで頭を拭きながらそう呟くとゼノは居間に横になりテレビ

をつけた。

ピッ

『この後はAnother sky』

ピッ

「……………ロクな番組やってねえな」

そう言うのと体を横にした。

すると

「ぞくぞく」

突然サリが後ろから抱きついてきた。

むにゅ

するといつも通り自慢の胸を押し付けてきた。そしてそのまま抱き上げられぬいぐるみのようにまた抱きつかれた。

「……………勘弁してくれ…俺もう疲れてんだよ……………」

「へへ〜」

ゼノがそう呟いていると

先程一緒に入ったティアマットも上がってきた。

「ふう〜……………いい湯加減でした〜……………て何をしているのですか？お二人とも？」

突然とサリが師であるゼノに抱きついている光景が自分の目に映ったのでティアマットはその状況に理解出来なかった。

「えへへ♪イチヤイチャしてるの〜。じゃあそろそろ寝よつか♪」

そう言うのと3人は寝室へ向かった。

—————

「……………ティアもこつちに来て一緒に寝よ？」

サリは端っこに固まって横になろうとするティアマットにそう呼びかけた。

「いいの…ですか？」

「いいのいいの♪」

そう言いわれたティアはゼノを挟んで横になった。

「おい……………何で俺が真ん中なんだ…?」

「別にいいでしょ? お姉ちゃんと弟子に挟まれるだけなんだから♪ それとも……………嫌?」

そう言うのと悲しそうな目でゼノを見つめた。これにはゼノも勝てない。

「わ…わかった! 分かったから!」

頬を赤めかせながらOKしたのだ。

神の弟子だというのに何故かこういう表情に弱いのは不思議だ。

「じゃあ消すよ」

カチツ

そして3人は眠りについた……………?

—————

—————

—————

深夜1時

サリ「Z z z z ……」

ゼノ「Z z z z ……」

ティアマツト「Z z z z ……」

—————

深夜2時

サリ「Z z z z ……くかあ……えい!」

ぼすっ! (サリがゼノに抱きつく音)

ゼノ「むぐ…!」

ティアマツト「クウ……やあ…!」

バンツ!! (ティアマツトが寝返りを打つたと同時に振りかぶった手

がゼノの腹部に叩き落とされた音)
ゼノ「グボツ……!?!」

チーン

—————

3時

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴ
ロゴロ (サリがゼノを抱き抱えながら寝室中を転がる音)

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴ
ロゴロ (ティアマツトがそれに反応するように転がる音)

* この後 30分程で元の位置に戻った。

—————
—————

4時

「くかあ〜……えへへ〜♪ゼ〜ノ〜♪」

「…………… (気絶中)」

「クウ〜……」

それから、2時間後

チュンツ!

チュンツチュンツ!

チュンツ!

「……?朝……?ふわあく!!よく寝たく——あれ?ゼノつたらまくた
私に抱きついてく♪こいつく!うりうりく!!」

サリが抱きつきながら遊んでいるが当の本人がティアマットの寝
返りで気絶していたのは知る由もなかった。

そして、7時

「うくん……」ゴシゴシゴシゴシゴシゴシ

「どうしたんですか師匠?」

ゼノが歯磨きをしていると

「昨日久しぶりに寝れた気がしたんだけど……なんか複雑な気分
……」

「大丈夫ですか?」

「大丈夫じゃねえよ……」

そう言いながら磨き終わると、いつも着る長ランとは別の半袖パー
カーを着た。もうすぐ夏であり、気温も上がってきたのだ。

「さて行くか。ティアマット、留守番よろしくな」

「はい」

そう言うとゼノは学園へと飛んで行った。

—————

ピユウウウウウ……

ゼノはいつも通り舞空術で学校へと向かっていた。すると

『LINE!』

突然スマホが鳴りだし、取り出してみると相手はリアスからだっ
た。

『今日の放課後、もう一人の僧侶を紹介するわ。だから放課後は
……絶つ……対に来てちようだい?』

いかにもゼノにとってはどうでもいい朗報である。

(取り敢えずめんどクセエからいかねえく……つと打つか……?)
するとまたもやスマホが鳴った。

見ると今度は『姫島朱乃』からだ。

『来てくれたら私が特製のパフエをご馳走しますわ♪』

それを見た瞬間に表情が一変

「よし、行こう」

ビュオオオオオオオオオオオん!!!!

「パフエの為にッ!!!」

ハーフ吸血鬼

「よ〜っし到着っつと」

飛んで早々と学校に着いたゼノはそのまま校門をくぐった。だが、辺りの生徒からは何かとジロジロと見られていたのだ。

（何だ？周りの奴ら？俺をジロジロ見やがって…少し離れた地点で降りたから飛んだ所は見られてねえはず……）

そんなことを考えながらもゼノは校舎へと入って行った。

――

――

――

「それは恐らく……貴方一人だけ私服を着ているからでは……？」
「え？」

生徒会室でソーナにそう言われた途端にゼノは驚いた。あの後、相談の為、生徒会室に訪れ偶然いたソーナに話を聞いてもらったのだ。

「確か高校って中学と違って私服でいいんだよな？そう聞いたけど」

「確かに私服制が多いですが、一部の私立や公立はだいたい制服です。

今の世代……私服制の高校の多くが制服制と変わってきていますが……この高校は創立時代々から制服と決まっておりますので」

「はあ…通りで皆同じ服だと思ったら」

「はあ…取り敢えず今後は制服を着て来てください」

頭に手をやり『やれやれ』という顔をしながら言うも

「あ、制服買ってないや」

「ええ!?……分かりました。では制服を注文しておきます…サイズは塔城さんと同じでよろしいですね？」

「あぁ…ちよつと大きめで頼む。じゃ、よろしく」

ボタンツ

そう言うとそのまま生徒会室をあとにした。

「はあ…少し疲れました…」

ゼノが出て行くのとソーナは頭に手をやりながらイスに座り込んだ。
「大丈夫ですか?会長」

すると横に控えていた副会長『神羅 椿姫』という少女が心配したのか声をかけた。

するとソーナは体を後ろに預けながら応えた。

「はい……魔王様達の場合はお姉様で慣れているのですが……ビルス様というと……星々を破壊する最強の神……しかもその弟子……その上同じ学年となるとどう対応したらいいかわかりません……」

「そうですね……兵藤君やリアスさん達は毎日ビルス様の弟子と一緒にいてよくブレないですよね……」

「長く一緒にいたので恐らく慣れたのでしょ……私だったら耐えきれず外で『なんでやねええええええええんっ!?』って叫んでしまいますよ……」

「私も恐らくそうなります……」

—————

生徒会室から出て行ったゼノは旧校舎へと向かっていた。
すると

♪

突然スマホが鳴り出した。見ると自分のよく知るあの人の名前だ。

「なんだ?閻魔大王からか?珍しいな……」

そう言いながらスマホを開いた。

「もしもし〜?珍しいな。そっちから掛けてくるなんて」

『ええ……お久しぶりですゼノ様、実は……』

「?何だ?切羽詰まって、早く言え」

すると、閻魔大王はとんでも無い事態を伝えた。

『地獄で収監していたスラッグやセル達が姿を消していたんです!!』
「……………は?」

はあああああああああああああああああああ!!??!!」

ゼノはあまりにも予想外の事態にその場で叫んでしまう。

『何故か私が前に久し振りに地獄を視察しにきたら地獄で働いてた多

くの鬼達が縛り上げられていて…それで見ると近くにバラバラにされたDrミューやゲロがいたんです…」

「……」

『ナツパやラディッツなど一部の奴らはなんとか捕らえました。ですが、それ以外のものは恐らく地獄から脱走し現世に戻ったのかと……』

「それで脱走したのは？」

『はい、セル、スラッグ、クウラ、サウザー、ネイズ、ドレー、そして、『トワ』と『ミラ』他にも多数の脱走者が出ております！』

「何だ。一部の雑魚もか…というかフリーザはどうした？」

「フリーザは今回大人しくしていました…本人曰く「また下らない騒ぎを起こして殺されるよりはマシですからね」だそうです」

「ならいい…アイツも出てくると流石に厄介だからな…。うん。学校が終わったらすぐ行く。そっちは地獄に鬼を全員集めて警備を強化しろ」

『はい！』

ピッ

電話を切るとゼノは口を噛み締めた。先ほど聞いた名前、『トワ』と『ミラ』この二人の名前には聞き覚えがある。『トワ』とは宇宙の裏側『暗黒魔界』の科学者であり、古の時代、歴史を狂わせ宇宙中大混乱に陥れた人物であり、『ミラ』は彼女試作の人造人間である。

だが、孫悟空達に破られ彼女達は地獄送りにされ、歴史混乱も治つた。だが、彼女達が脱走したとなると歴史改変は起きないがそれ相応の騒ぎが起こりうる可能性がある。

「……取り敢えず、師匠や全王様に報告しないとな…『アイツ』らにも手伝ってもらおうか…」

そう言いながらゼノは通話をかけた。着信先は『第11宇宙』

『第6宇宙』

「もしもし？ああ俺だ。ああ。……」

――

――

それから数時間後

ゼノは部室に入るとその直後に、周りから『開かずの間』と呼ばれるところに連れられた。

「ここが昨日言ってた……」

「私と同じもう一人の僧侶の……？」

「ええ。そうよ」

イツセーとアーシアの質問にリアスは淡々と答えた。

「けどよく、札とかはってあるけど何でだ？」

「その僧侶の能力が私じゃまだ扱えきれないだろうということとで封印されてるの。先のコカビエルとの戦いで私たちはそれなりに評価されて封印を解くことが許されたのよ。まあ……殆どゼノの手柄だけ……」

「上の方々が勝手にリアス達の功績だと受け取ってしまったのですわ……」

「何度もゼノの功績だとお兄様に言ったのだけれど……どうしても上層部の方々が信じなかったそうなの。ごめんなさいね……」

リアスの謝罪に対して、ゼノは起こりもせずには責めもしなかった。それどころかまったく気にしていない様子だ。

「俺は別に功績なんてどうでもいいよ。自己満足でやってるから。だからあまり気にするな」

その言葉にリアスは感謝しかなかった。そのゼノの言葉を受け取ったリアスは頷いて御礼を言う。

すると、背後にいた朱乃が笑顔でゼノを抱き上げた。

「うおっ！」

「うふふ…ゼノ君のそういう優しいところは大好きですわ♪」
「ムウ……………」

もちろん小猫は嫉妬したのか頬を膨らませた。
するとリアスは話を再開した。

「話を戻すけど、この封印は深夜に必ず解けるようになってい
けれど当の本人がとんでもない程の引きこもりなの」

「引きこもりなんすか…」

深夜に自由になれるというのに出たがらないという意外な理由に
イツセーは驚いた。すると朱乃が補足をした。

「ですが、その子は時に眷属の中でも1番の稼ぎ頭だったりするので
すよ」

「マジですか!？」

「はい。パソコンを介して特殊な契約を執り行っているんです。悪魔
と直接会いたくない人間中にはいるのでそのような契約に関して
はかなりの成績です」

「そんな契約もあるんですね…」

「取り敢えず開けましょ」

そういうとリアスは扉に手を当てた。すると魔法陣が浮き上がり、
張り巡らされていたテープや札が破けた。

その瞬間

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

その扉から凄まじい悲鳴が聞こえてきた。

「な…なんだ!？」

ガチャ

「ぐ…ぐきげんよう。元気そうね」

リアスと朱乃が様子確かめるために中へ入った。

「な…何なんですか…?!?!」

中からはアースアと同じくらいトーンの高い声が響いてきた。

『封印が解けたのですよ?もう外に出られます。私たちと一緒に外に

小猫に引かれるも御構い無しに喚いた。

「ていうか！なんのために女装なんてしてんだよ!？」

「だ…だって女の子の服が可愛いから…」

「可愛いとか言うなあああああ！俺はお前とアーシアのダブル金髪美少女を夢見てたのに…！ちくしよおおお!!俺の夢をか…」

「うるせえ!!!」

ゴシャンツ

イツセーの喚きに腹が立ったのかゼノはイツセーを壁に叩き込んだ。すると減り込んだ壁はひび割れを起こしイツセーからは煙が浮き上がっていた。

「ヒイイイイイイイ!!壁に減り込んだく!!!」

そんなカオスな状況下の中でもリアスは説明した。

「この子の名前は『ギヤスパー・ヴラティ』一応この学園の一年であり、転生前は人間と吸血鬼のハーフなのよ」

「ふうくん。まあ簡単な話、こいつを外に出すってことなんだろう？」

「まあそうだけど…」

リアスがそう返すとゼノは立ち上がってゆっくりとギヤスパーに近づいていった。

「な…！なんですか!？」

「俺は黒崎 ゼノ、初めましてギヤスパー君」

「ヒイイイイイイ!!眼が…！眼が冷たくて怖いですうううう!!!」

ギヤスパーは泣きながらゼノから離れた。

「あ？何離れてんだ？外に出るつつつてんだろ？」

「ヒイイイイイイ！」

ゼノがキレ気味に投げかけるとギヤスパーはさらに怯えた。

「お？」

その時、ゼノはギヤスパーの眼から何かを感じ取った。

周りを見ると朱乃やリアス達が動きを止めていた。

「何だ？これがお前の神器とか言うやつか？」

「ヒツ!?な…何で動けるんですかあああ!？」

「要するに……視界に入ったものを止める能力か……確かに強力だが俺を止められなかったことは止められる対象に上限があるのか？」

そう言うときゼノはギヤスパーを見据えた。

「ヒイヒイヒイヒイ！怒らないでくださいああい……！ぶたないでくださいああい……！」

するとゼノはめんどくさくなってきたのかどこからともなくアイマスクを取り出しギヤスパーに無理矢理につけると持ち上げた。

「いやああああ!!!目の前が真っ暗にく!!!何をしますか?!?!」

「こんなんじゃないこと繰り返すだけか。取り敢えず出るぞ。次騒いだら渋谷のスクランブル交差点のど真ん中にほっぽり出すからな」

「やめてくださいああああい!!!」

それから数十秒後にリアス達は元に戻った。

ギヤスパアの神器

『停止世界の邪眼』（フォービトウン・バロールビュー）？」

「いや…何も言っていないんだけど正解よ…」

あれから元に戻った俺達はギヤスパアの神器について話し合っていた。まあダンボールに入ったままだけど、

ちなみにゼノは朱乃さんの手作りパフェをガツガツと食っている

…

「というかギヤスパアの能力ってなんですか？」

『停止世界の邪眼』…文字通り視界に入ったもの全てを一定の間 停止させることができるの」

「時間を停める!? そんな反則な……………というか…ゼノ普通に食らっても止まってませんでしたけど…」

「俺は普通に平気なんだよ。さつき食らったけど何も感じなかった。多分 停められる相手に上限があるだろう」

「ええ。確かに停められる対象には上限が存在するわ。それでも時間を停めることが出来るから十分に強力な神器よ。でも、そんな彼を眷属にすることができたのは『変異の駒』（ミューテーションピース）を使ったからなの」

「何ですか？ それ？」

俺が気になって聞くと部長は説明した。

「通常 駒が複数必要な転生体が一つで済む特殊な駒なの。だいたい上級悪魔の10人に一人は持っているわ」

へえ…駒一つで……………ん？ それだともしかしてゼノも眷属にできるんじゃない？

「おい、今俺にこの駒使えば悪魔にできるとか考えてなかったか？」

「……………心読まれてた!？」

「いやいや！ してないしてない!! ただどうなるのかな？ って考えてただけだから！」

や…やべえ!! 普通に不機嫌だ!

「フンツ…どうせ俺じゃ無理だろ」

「ええ…ゼノの場合10個や100個使っても100%無理だと思うわ…（というか出来たとしても私が全力で断るけど…）」

そう言う部長はギヤスパーの入っているダンボールへと目を向けた。

「話を戻すけど、ギヤスパーはその駒の所有者なの。だけど問題はその才能よ。類稀な才能を持ったギヤスパーは無意識のうちに神器の力が高まっていくみたいなの。近い将来には禁手化も至る可能性が出てきているわ」

「マジですか!?ただでさえ危険なのに制御不能よ奴が至ったら…!」

「そう。危うい存在なの」

「今ならギヤスパー君を制御出来ると判断されたそうです。部長がイツセー君と裕斗君を至らせたと上の方達は評価したのでしょうか」

「…そうか…俺はともかく木場は至ったんだ…俺も未完成だけどライザーをぶっ飛ばした時の評価されたのかな…」

「うううう僕の話なんてしてほしくないのにいっく…」

バンツ!

「ひいひい…!」

ガンツ!

「きゃあ!!!」

ギヤスパーがそう言うとき少しうるさいと思ったのか小猫ちゃんが段ボールを叩いた。どさくさに紛れてゼノも段ボールを蹴ったけど見なかったことにしよう…

すると部長と朱乃さんは立ち上がった。

「とりあえず私と朱乃は会談の打ち合わせがあるから 少しの間ギヤスパーをお願いね」

そう言う部長達は木場も連れて出て行った。なんでも魔王様たちが木場の禁手化を知りたいんだとか…

――

「ほら走れ。デイウオーカーなら日中でも動けるはずだろ？」

「ヒイイイイイイイ!!! 聖剣の使い手なんて嫌ですううううう!!! 滅つされるく!!!」

「ギャーくん…ニンニクは体にいい…」

「ニンニクはラメエエー!!!」

その後皆はグラウンドでギヤスパーを鍛えることにしたのだ。そして今は体力作りとしてゼノヴィアと小猫に追いかけて回されていた。

「な…なんかすげえ楽しそうだな…あの二人…」

「私は目も合わせてもらえませんでした…」
すると

「お！やってるなオカ研！」

入り口から生徒会の兵士である匙が作業着姿で出てきた。

「よく兵藤、どうだい？調子は？」

「見ての通りだ…」

イツセーはゼノヴィアに追いかけて回されているギヤスパーを指差した。

「お！金髪美少女じゃねえか〜！」

「残念…あれは女装野郎さ」

真実を聞かされた途端に、匙は希望も何もかも失ったかのような表情を浮かべた。

「詐欺だな…」

「だな…」

すると

ピョンッ！

今までアーシアの横で寝ていたゼノは突然跳ね起きた。その動作に横にいたアーシアは驚きのあまりその場からコロコロと転がった。

「うお!?びつくりした！何だよいきなり!？」

「いや、ようやく姿を現したと思つてな」

その発言に皆は理解できなかった。

ゼノは近くの草むらへと目を向けた。

「おい出てこい。出てこないならその草むらごと吹き飛ばすぞ」

その脅しに反応するかのよう草むらが動き出すと気配の正体はアツサリと姿を現した。

「分かった分かった！…つたく聞いてた通りバケモンだなく。気配消したつつうのにすぐに気づきやがって…」

見るとその草むらから身体中に包帯を巻いた和服を着た男性が現れた。

「アザゼル!!」

「よう赤龍帝、あの夜以来だな」

その男を見た直後にイツセーは神器を展開し戦闘態勢へと入った。ゼノヴィアや匙も同じく態勢を取っていた。

「まあ待て、構えを解きな。下級悪魔君をいじめにきた訳じゃねえよ。ちよいと聖魔剣使いと神の弟子を見にきただけだ」

「木場ならいねえ！たとえいたとしてもお前になんか…!!」

「つたくよくコカビエルなんかに敵わねえお前らが俺と勝負になる訳ねえだろ」

「く…」

「…」

「それに見ろ。お前のお仲間は分かりが良いのか警戒を解いてくれたぞ?」

皆が見るとゼノは態勢を解き、悠々とドーナツを食べていた。

すると皆も少し落ち着いたのかその場で神器を下ろした。

「お前…木場に何しようってんだよ」

「だから何もしねえって言ってるんだろ。なんだ聖魔剣使いは留守か」

木場が留守なのを確認したアザゼルはゼノを見た。
するとゼノはドーナツを食べ終わるとアザゼルへとゆつくりと近づいた。

「やっぱり、お前がアザゼルか？」

「いかにも、俺は墮天使総督『アザゼル』だ。アンタが冥界で話題の破壊神ビルス様の弟子か。：成る程。たしかにバケモンだ。警戒を解いてるとはいえ、変な動きを見せたらすぐ殺しに来そうだな」

アザゼルは小柄ながらも全身から長年の戦闘によって極限まで磨き上げられたゼノの闘気を恐れながらも感じる。

「で？何しに来たんだ？もしかしてこの場で俺とドンパチしに来てくれたのか？」

するとアザゼルは『やれやれ』と首を振ると

「だから違えて言ってるんだろ？それにアンタなんかとドンパチしたら墮天使とお前とで戦争起きるだろ。俺はコカビエルの馬鹿みたいに戦争は好まねえ。今回はアンタとそこのハーフ吸血鬼の様子見だ。」

「あつそ。まあ好きにしな。俺はもう行くから」

するとゼノは鞆を持つとそのまま校門へと向かった。

「おいゼノ！もう帰るのか!？」

「ああ、ちよいとばかり用があるからな『地獄』に」

「な…!？」

その直後にゼノはその場から去った。

「じ…地獄って…まじかよ!？」

「あ、請求書

渡し忘れちゃった……はあく……」

地獄 視察

ゼノside

俺はイツセー達と別れた後、瞬間移動で閻魔御殿へと向かった。

「よう。大王」

「ゼノ様！お久しぶりです。よくおいでくださいました！」

出迎えたのは体長が10メートル程もありでつぶりとした体型の大男だった。コイツが閻魔大王だ。

「早速だが地獄に入れさせてもらおうぞ？」

「はい！今ゲートを開きます！」

そう言うと大王は地獄へのゲートを開いた。

「ここからは俺一人で行く。何かあったらすぐゲートを閉じろ。いいな？」

「お気をつけて！」

俺はゲートをくぐり地獄へと向かった。

――――

――――

――

コツ …コツ…コツ…コツ…

俺は今地獄の入り口であるゲートを越え、階段を登っていた。

階段を登りきるとそこには20メートルもある巨大な門が盾構えていた。俺は大王から借りた鍵を使い扉を開けた。

ガチャン

ギギギギ……………

そこには、あたり一面に炎が渦巻いていて、多くの獄卒達が亡者を苦しめていた。

金棒で罪人を撲殺しているものもいればぐちゃぐちゃに引き裂かれ練り上げられてるものもある。

（ここが普通の地獄か…最下層とは大違いだな。フリーザとかだと

獄卒じや手に余るからな…)

俺は拷問の中を通り過ぎながら歩いた。

「よう。仕事ちよつといいか?」

俺は一人の鬼に声をかけた。するとその鬼は振り返ると俺に向かつて敬礼をした。

「ゼノ様! お勤めご苦労様です!」

「ああ。『ピッコロ』はどこにいる?」

「ピッコロさんなら今 阿鼻地獄にいらつしやいます!」

「そうか。助かった。ひき続き:」た:助けてくれ:」

俺が話しているとそいつが痛めつけていた亡者が俺の足を掴んで助けを求めてきた。

「こんなのはもう嫌だ!!頼む!確かに俺は罪を犯したがそんなに重い罪では:」

「コイツの罪は?」

「現世にて麻薬密売人!それと多数によるイジメで5人の自殺者を出したグループの首謀者です!」

「嘘をついた。阿鼻地獄は連れてけ」

「嫌だああああ!!!」

そう言うのと獄卒は亡者の頭を掴むと阿鼻地獄へと連れていった。

俺は足を進め業務員用の階段を使い阿鼻地獄へと向かった。

「阿鼻地獄は:今日も異常なし:と」

ここは阿鼻地獄で地獄の最下層の一步手前である。そこには緑色の肌をし、ターバンとマントを羽織った長身の男がペンを持ち、何やら物事を書き込んでいた。

「よう。ピッコロ」

その男にゼノは声を掛けた。

「? 銀河神様! 何故ここに!」

ピッコロはゼノを見ると驚いた。ゼノは来た理由を話した。

「な…成る程…セルやミラ達が脱走したと…」

「そうだ。だから最下層に行くための鍵を借りに来たんだ」

「そんなことをしなくても…瞬間移動で行けるのでは…」

「ああ。その手があったか」

ピュンツ!!

—————

—————

—————

ゼノがついた場所は何もない。ただ暗く、空が夕焼け色に染まっている場所だった。

「さて、行くか」

そう言うのと暗闇の道を進んだ。

その時

ヒュンツ!

一発の光の槍がゼノに向かってきた。

「よっ」

バキインツ!

ゼノはそれを掴むと握り潰し周りを見渡した。

「ああ、惜しかったわね」

声の主はすぐそばにある10メートルほどの岩石の上にいる。

「やっぱりテメエかクソ墮天使」

そこには、かつてイツセーとアジアを殺害した墮天使「レイナーレ」がいた。

「また会えて嬉しいわよ。人間」

こちらを見て怪しく微笑むレイナーレ。ゼノは「何の用だ?」と聞く

「退屈してたから誰か来ないかな〜と思って待ってたら偶然貴方を見かけたの。まさか貴方までもが地獄に落ちるなんてね」

ゼノは「は?」という表情を浮かべるとレイナーレを睨んだ。

「勘違いすんなよ。俺は視察で来たんだ。お前みたいなヘドロと一緒に

朱乃の素と会談の始まり

あれから俺は地獄での視察を終えると現状を報告しすぐに現世に戻ってきた。

そして今俺は……………

「ズズズ……………成る程、ミラとトワが脱走ね…」

時の巢に来ている。

何故かという、俺はミラとトワがどういう人物なのか知らないから時の界王神に聞きに来たのだ。

ある程度分かったから今後の対策についても話し合っていた。

「取り敢えず、今のところ奴らも手出しはできないと思うわ。でも、不思議ね……………どうやって脱出したのかしら……………」

「そこが問題なんだ……………」

そう言う俺は席を立った。

「まあいい。この件は俺が片付ける。アンタもくれぐれ注意しとけよ？」

「分かったわ。ゼノ君もよ?」

「へいへい」

俺は頷くと地球へ瞬間移動した。

—————

—————

—————

イツセー side

ゼノが去った後、俺たちはギヤスパアの力のコントロールの特訓を再開した。森沢さんの一件でまたギヤスパアは閉じこもってしまうが、俺や木場のエロトークで元気を出し無事 引きこもりを卒業させる事ができた…!

次の日

俺はいま……………

「よく来てくれましたね。イツセー君」

朱乃さんが住む神社へと来ていた…!

「それにしても…今日は何故呼び出したんですか?」

俺は朱乃さんに呼び出した訳を聞くと

「うふふ。とても大物の人がイツセー君に渡したい物があるそうです」

「お…大物ですか…」

「それにその方はゼノ君にも会いたいそうでしたのでゼノ君もお呼びしました」

え?!じゃ…じゃあもう…

「はい。イツセー君より一足先に来ております」

は…はえ…と言うか俺に会いたい大物って誰なんだろう…

そう思いながらも俺は鳥居を潜り中に入った。ヤバイと思っただが朱乃さんが言うには「大丈夫」らしい

—————

—————

—

鳥居を潜り境内につくとそこにはゼノがいた。ゼノは俺たちを見ると軽く手をあげ挨拶した。

「うふふ。お待ちせしましたわ」

「ほんじゃ行くか」

俺たちは靴を脱ぐと中へ入った。

「彼が赤龍帝とビルス様の弟子ですか?」

部屋に入るとそこには、ガタイのいい美青年がいたのだ…

だ…誰だろ…あれ?

俺はその人を見て何かが思い当たった。

「天使の翼が生えてて…大物ってことは…!四大熾天使の1人…ミカエル!」

俺が驚きながら叫ぶとその人は微笑みながら答えた。

「いかにも。私は四大熾天使の1人 ミカエル。初めまして、赤龍帝兵藤一誠くん。黒崎ゼノ君」

横にいた朱乃さんは「あのお方はイツセー君に渡したい物があるそうですね」と言った。

「これを…貴方に授けたいのです」

そう言うときカエルさんは一本の剣を俺の前に出した。

「…このオーラは聖剣!？」

「はい。これはゲオルギウス――聖ジョージの持っていた竜殺しの聖剣『アスカロン』です。特殊儀礼を施してありますので悪魔である貴方でもドラゴンの力を使えば使用できるかと」

「でも…でも何でこんな凄いものを…!？」

俺は恐る恐る聞くとミカエル様は語り出した。

「今回の会談は我々三大勢力が手を取る大きな機会だと思うのです。我々は創造主の神を、悪魔は前世代の魔王を亡くし墮天使も多大な被害を受けました。このまま争いが続けばいずれ全てが滅んでしまいます。他の勢力の懸念もありますしね…」

「……」

ミカエルさんは続けた。

「これは天使側からあなた方悪魔側への贈り物です。もちろん墮天使側にも送りました。悪魔側からも噂の聖魔剣を数本頂きましたからね」

「は…はあ…でもどうやってこれを…」

俺は危なっかしくて触らなかつた。流石に怖いもんな……

「アスカロンはこの神社で最終調整を行いましたのでご心配なく。各陣営のあらゆる術式を施していますのでドラゴンの力を使えば触れることができますとおもいます」

朱乃さんに言われ俺は安心した。そして俺はアスカロンに手をかけた。

『相棒！神器に意識を集中させ剣の波動に合わせろ！後は俺がフォローする!』

「お…おうー!」

俺は神器に意識を集中させた。

ガチャンっ!!

「お!?!マジで合体した!」

『やったな相棒。成功だ』

「おう!」

「おめでとうございます。どうやら成功したようですね」

そう言うときカエルさんは「そろそろ行かなくてわ…」と言い帰ろうとした。

「俺に何か聞きたかったんじゃないのか?」

ゼノが聞くとミカエルさんは…

「すいません。もう時間が来てしまったので。会談時に必ずお聞きします。それと兵藤君。貴方が聞きたいことも会談時に」
それだけ言うとき光と共に消えていった。

その後俺は朱乃さんから一杯いただくとき神社を後にした。

—————

———

「……………」

イツセーが神社を出た後、ゼノも神社を出ようとしたら突如朱乃に呼び止められ、今は一つの和室で2人が向かい合っていた。

「どうした?俺を呼び止めて」

「……………ゼノ君は…墮天使が嫌いですか?」

いきなりの質問にゼノは「は?」と言う顔を浮かべ逆に聞いた。

「どうしていきなりそんなことを?」

そう言うとき朱乃は翼を出した。

だがその翼は片方だけ墮天使の翼だったのだ。

すると朱乃は悲しそうな声で説明し始めた。

「私はもともと…墮天使と人間の間に生まれたハーフなのです。母はとある神社の娘でした。傷つき倒れている墮天使の幹部であるバラキエルを助け—————その時の縁で私を宿しました…」

そう言うとき朱乃は自分の翼を触った。

「穢れた翼……………この翼が嫌で悪魔になりました…でも生まれたのは

墮天使と悪魔の両方の翼を持つおぞましい生き物です…」

見ると朱乃は悲しく微笑んでいた。

「ゼノ君はどう感じますか…？私のような穢れた生き物を見て…」

ゼノはしばらく黙ると口を開いた。

「……………確かに墮天使は嫌いだ。今まで会ってきた中でロクな奴は誰一人いなかったよ。けど、俺はお前にはそこまでの感情は持ってない。考えてみる…嫌いだったらとつくに殺してるよ」

「……」

「お前がどう思うか勝手だけどき…血筋が墮天使だからって俺はあまり気にしないよ」

「……………それを聞けて…少し安心しましたわ…」

「そうか。じゃ、俺は帰る」

そう言い湯呑みを置くとゼノは立ち上がり、去ろうと出口へ向かった。すると、朱乃が突然背後からゼノに抱きついた。

「なんだ……………んっ!？」

ゼノは身震いをした。その理由は朱乃が顔を赤らめながらゼノの身体を持ち上げゼノの横顔へ自分の顔をすり寄せたからである。

「もう少し…いて…」

「……………はい…」

朱乃の欲求にゼノはなす術もなく力が抜けたように頷いた。

—————

—————

—————

それから数十分後

「……………なあ…?」

「どうしたの?」

ゼノは朱乃に抱き抱えられていた。

「いつまでこうしてるんだ…?」

「ふふふ♪私の気が済むまで♪」

なぜか……………朱乃の雰囲気は先程とは段違いなのである。

ギユ

「!?」

すると朱乃は抱きしめる力を強くした。当然ゼノは驚くと同時に顔を赤く染めた。

「ふふふ♪ゼノったら可愛い♡」

「な…（なんだコイツ…：本当に朱乃なのか!?もしかしてこれが素!?）」

ゼノも朱乃の変わり様に驚いていた。それもそのはず、先程までお姉さんの『朱乃』が一瞬で可愛いもの大好き女子になってしまったからである。

「ううう…：（恥ずかしい…）」

その後一時間程、朱乃に抱きつかれた。何故か知らんが朱乃に抱きつかれてる間、凄く身体が熱くなった。

—————

—————

—————

「じゃあな…」

「はい！」

ゼノは神社を出て行くこうとした時、朱乃にある提案をした。

「朱乃…」

「どうしたの？」

「…：お前、その力を使うのは嫌か？」

そう聞くと朱乃は表情を暗くし、いつもの雰囲気へと戻ってしまった。

「…：はい…：その為で母は死んでしまったので…」

するとゼノはある提案をだした。

「だったら、会いに行くか？」

「え!？」

その提案は朱乃の目を大きく開かせた。

「ど…：どういことですか!？」

「そのまんまだ。お前とお前の母親とを会わせてやるって言ってんだ。これでも俺は天国や地獄にも普通に行き来できるからな」

「……本当に…会えるんですか…？」

「会える。俺は嘘はつかん。会談が終わった後に連れてってやる。因みに、ハツタリじゃねえからな」

そう言うのと朱乃は頷くと、ゼノはその場から去った。

「……………母様と…会える…!!」

—————

—————

—

イツセーside

俺がアスカロンを授かった後、とうとう会談の日がやって来た。

学園はとてつもなく巨大な結界に覆われ、周りには何千何百もの天使、悪魔、墮天使の兵たちが守っていた。ざっと見れば数千はいく数だった…!

「す…すげえな…」

「一触即発の空気だよ…」

部長や朱乃さんも凄く厳しい表情をしていた。あれ？そういえばゼノは？

すると部長がLINE画面を見せた。

「ビルス様を連れてから来るそうよ…」

「!」

俺や皆は息を飲んだ。

そ…そうだ…今回の会談は破壊神が来るんだ…!この会談に悪魔どころか地球の未来までもがかかかってるんだ…!

「……………時間ね。行きましょう」

そう言うのと俺たちは部室を後にし会議室へと向かった。ちなみにギヤスパーは留守番ということで俺のゲームなどを貸してあげた。

「面倒見がいいね。イツセー君は」

「へへッ!まあな!」

—————

—————

—

ガチャ

「失礼します」

そう言うとりアスはドアを開けた。中には三大勢力の首相 アザゼル、ミカエル、そしてサーゼクスとセラフオールが座っていた。

「よく来てくれた。座ってくれ」

サーゼクスがそう言うとりアス達オカ研の皆は近くにある椅子に座った。隣には生徒会ことシトリー眷属もいた。そしてアザゼルの近くには白龍皇であるヴァーリもいたのだ。

その時、

ドンツ!!!

『!?』

会議室の扉が勢いよく開けられた。皆は一斉に驚き扉の方を向くと

「よう。場所はここでもいいんだよなあ?」

今回の会談に招かれた神の弟子 ゼノがいた。

全員が集まったことで、三大勢力のそして、地球の未来を掛けた会談が執り行われた。

—————

—————

—————

「今回の件はお礼を申し上げます」

「いや〜コカビエルが迷惑かけてすまなかつたな〜」

ミカエルは今回の件の鎮静に対して礼を述べた。それと同時にアザゼルも態度はあれとして謝罪をした。

「…失礼ですが…:…会談前に…:一つの不安要項を確認したいと思うんですが…」

ミカエルがそう言うと同時に、アザゼルも頷き、三大勢力の首相全員の目線がゼノへと向けられた。

「なんだ?」

ゼノは当然の如く聞いた。

すると

「この機会に知りたいのだ。君は我々の敵か…味方か…？」

「それは前に言っただけでなかったか？」

デジャヴだと感じたゼノはサーゼクスに聞いた。

「あの時は…気を急いで唐突に聞いてしまったからね…今回だからこそ…皆が揃っている前で確認しておきたいのだ」

ゼノは「面倒くさ…」と呟くと前に出た。

「前にも言った通り、俺はお前らと敵対するつもりはない。けど、万が一お前ら三大勢力の誰かが人間社会に手を出して『人間レベル』を下げるような真似をすれば、そいつは俺が確実に破壊する」

ゼノはそう言いサーゼクス、セラフオール、ミカエル、アザゼルへと鋭い目線を向けた。勢力の首領は全員息を飲んだ。手を出した瞬間に…命が終わると…

「に…人間レベルとは…？」

「この宇宙に住む者たちの技術力、創造力、思考力を主に評価したものだ。お前らも含まれる。だが、少しでも手を出すとすぐにそれは崩壊しレベルが下がる」

「レベルが下がると…どうなってしまうのですか？」

サーゼクスは慎重に聞いた。

「ある『お方』に消される。ま、手を出さなければいいだけだよ」

そう言うとゼノは自分の席へと戻った。

「……………要するに…我々の力が人間界に漏洩する形を防げばよろしいのですか？」

「ああ。まあ就職して貢献するっていうなら別だがな。それと…忘れてないよな？ミカエル」

「……………」

ゼノは突然ミカエルへと鋭い目線を向けた。内容はかのZソードの件である。

「Zソードの件に関しては本当に申し訳ありませんでした…はぐれではあるものの…一度は私達が管理する協会の神父であったフリードが勝手に使用した事は聞いております…」

そう言いミカエルはゼノへと頭を下げる。この件についてもゼノは流石に見逃せない。Zソードは使用できるとはいえ一介の者が触れる事は禁止されている。今回は持ち出したのは別の者だが使ったのは事実でありミカエルは悔やみのあまり心へ深い傷を負った。

「取り敢えず…近いうちに天界に行く。その時までその神父用意しとけ」

「ですが処分はこちらで…」

「ダメだ。神の所有物。ましてや最高位である界王神様の物に手を出して『幽閉』か『死刑』なんざで済まされる訳ねえだろ。ソイツにはそれ以上の苦しみを味わってもらおう」

ゼノの鋭い目線に耐えきれずミカエルは今回のような神父を生んでしまったことに対し悔やみながらも承諾した。

そして、三大勢力はまた、人間社会にも手を出さない事を約束した。「手を出さないととなると…：社会に溶け込んでいる神器所有者はどうすればいいんだ？ソイツらを始末せずに野放しにすると力を暴走させて一般人を襲つちまう危険性があるだろ？」
「そこら辺の対処はお前らに任せるよ。俺よりよっぽど詳しいからな」

アザゼルの問いにゼノは返すと今度はサーゼクスへと目を向けた。「それと、人間界に被害を及ぼすはぐれ悪魔についてだが、その強さはどうなってる？」

「…：強い者でS級…：また最上級悪魔に匹敵する者はSS級…：さらにその上をいく者にはSSS級がいる」

「そうか。会談が終わったらはぐれ悪魔のリストを俺に渡せ。実際に俺が現地に行つて処理する」

「!?…：いや、さすがにそこまでは…」

「文句言わず渡せ。今この時でもその悪魔が人間を食い散らかしてたらどうする？」

「…：分かった」

ゼノの言葉にサーゼクスは悩みながらも承諾する。

「ただ、リストをまとめるとなるとある程度の時間を要するが」

「ああ。大丈夫だ。とにかく間違いなくまとめてくれりやそれでいい」

『はぐれ悪魔』の件もサーゼクスに納得させたゼノは「以上だ」と言いしめた。

「……では、会談を始めよう……」

一つの要項が解決されたことにより、会談が執り行われることとなった。

会谈……そして

イツセーside

俺たちは今、悪魔と堕天使、そして天使の未来までもが掛かっている会谈へと出席していた。始まる前にゼノが『人間レベル』とか何とか言っただけど俺には全く理解ができなかった……が、ゼノがあれだけ真剣に話すつてことはそれ程重要つてことだな……

それから本格的に会谈が始まった。最初は部長と生徒会長が今回の件について話した。それに対しての意見をサーゼクス様はアザゼルに求めた。話によるとあの後コカビエルは正気を取り戻した直後に地獄の最下層で永久冷凍の刑に処されたらしい。

アザゼルの話が終わった後、サーゼクス様は真剣な顔でアザゼルにある質問をした。

「…アザゼル、一つ聞きたいのだが、ここ数十年間…なぜ神器所有者を集めている…？」

「最初は人間をかき集めて戦力増強を図り天界か我々に戦争を仕掛けるのではないかと予想していたんだけど？」

「白龍皇を手に入れたと聞いた時は強い警戒心を抱いたものです」

それに続いてミカエルさんと生徒会長の姉である魔王レヴィアタ様も質問した。

この問にアザゼルは笑みを浮かべながら「神器研究のため」と答えた。

「俺は今の世界に十分満足してるぜ。全く…俺の信用度は三すくみの中では最下位か？」

『そうだ（ね）』

魔王様とミカエルさんは顔色一つ変えずに同時に答えた。まあ無理もないか…アザゼルはメンドくさそうな表情を浮かべると衝撃的な言葉を口にした。

「和平を結ぼうぜ。元々お前らもそのつもりだろ？」

わ…和平!?

「部長…ようするに平和を共に願うつてことですよね…」

「ええ…アザゼルからその言葉が出てくるなんて驚きだわ…」

部長も微量ながらの汗を流し驚いていた。

俺と部長が話している間にも会談は続いた。

「失ったものは各勢力 大きい…けれど、いないものをいつまで求めていても仕方ないでしょう。神の子らを見守り先導していくのが我らの使命です」

「我らも同じだ。種を存続するため悪魔も先に進まなければならぬ」

ミカエルさんの意見にサーゼクス様も同様の意見を述べた。

「そう。次の戦争をすれば今度こそ三すくみは共倒れだ。それにまた破壊神の降臨を許してしまう…方が一共倒れにならなかつたとしてもその神によつて残されたものどころかこの世界全土が消されるからな。だから、俺たちは戦争をもう起こさない。俺達の上に存在する神がいなくても世界は回るのさ」

アザゼルが言ったその言葉で、残りの話は全て直線方向へと進んだ。

—————
—————
—————

「…こんなところだろうか。さて、懸案事項も片付いたところで…赤龍帝殿のお話を聞いてもよろしいですか？」

「…はい」

俺は席を立った。俺がかねてから訊きたかったこと…それは…

「なぜ…あれほど神を信じていたアーシアを教会から追放したんですか…？」

アーシアの追放の件についてだ。

「それに関しては…申し訳ないとしか言えませんが…神が死んでから『システム』だけが残りしました。人の信仰心を源に地上に奇跡をもたらします。悪魔祓いの扱う聖具の効果もシステムの力です」

「神が死んでから…その『システム』に不都合が…？」

「はい。神以外がシステムを扱うとなると困難を極めます。今は私達

熾天使（セラフ）全員で辛うじて起動出来ていますが、神がご健在していた時よりも加護や慈悲は行き届かず…救済できる者は限られてしまうのです。そのため、システムに影響を及ぼす者は遠ざけておく必要があったのです。例としては一部の神器を所有する者です」「つてことは…アーシアの神器が悪魔や墮天使を癒せるからですか？」

「…悪魔や墮天使を癒す者がいれば周囲の信仰に影響が出ます。信仰は我ら天界の源…近くに置いておくわけにはいかなかったのです。またもう一つの例は…」

「神の不在を知る者…ですね」

「そうです。ゼノヴィア。あなたとアーシア・アルジエントを異端とするしかなかった…申し訳ありません…」

!?

そう言うときカエルさんはアーシアとゼノヴィアに向かって頭を下げた。二人はもちろん俺も突然の行動に少し驚いていた。

するとゼノヴィアが慌てながらすぐに止めた。

「ミカエル様、多少の後悔はありましたが、教会に居た頃に出来なかった事が今の私を彩ってくれています。他の信徒に怒られるかもしれませんが私は今の生活に満足しています」

「私事です。大切な人が沢山出来ましたから」

ゼノヴィアとアーシアは笑顔を浮かべていた。俺はその笑顔を見て少し安心した。

「貴方達の寛大な心に感謝します」

その時、今まで黙っていたアザゼルが口を開いた。

「俺の部下がそこにいる娘を騙してを殺したらしいな？」

「ああそうだ！アーシアは一度死んだ！アンタに憧れていた女墮天使がアーシアを殺したんだ！」

その言葉に俺は少量の怒りを表し答えた。部長が肩に手を置き落ち着くよう促すが俺としては落ち着こうにも落ち着かなかった。

「俺たち墮天使が一部の神器所有者を始末しているのは確かだ。だがそれは神器の力に吞まれ暴走し世界に悪影響を与えかねない奴らだ。」

「お前も例外じゃない」

「お陰で俺は悪魔だ」

「嫌か？」

「嫌じゃない！むしろ皆に良くしてもらってる！……けどー」

「今更俺が謝っても後の祭りだ。だから俺は俺にしか出来ない事でお前らに貢献する。そこで一つ、お前に訊いて置きたい事がある」

突然の質問に俺は首を傾げた。

「お前は赤龍帝として世界をどうしたい？」

「い……いきなり言われても……」

いきなりの質問に俺はどう答えれば良いのか分かんなかった。するとアザゼルは次にヴァーリに訊いた。

「俺は強い奴と戦えればいいさ」

「兵藤 一誠、お前は世界を動かす程の力を秘めている。選択しなければ俺をはじめ各勢力が動きづらくなるんだよ。そうとなりや

………
「リアス・グレモリーはもう抱けないぞ？」

「な！」

その言葉で……俺の考えはある方向へと一直線した！

部長と………Hが出来なくなる………だと!?そ………そんなの決まってるじゃねーか!!!!

「わ……和平一つでお願いします!!!ええ！平和が一番です!!部長とHがしたいです!!」

俺は心にあることを叫んで言った！だが……俺は忘れていた
………

「イツセー君……サーゼクス様がおられるんだよ……?」

部長のお兄様が居たことを…… 部長も顔を赤くしておらっしやる……

「で……でも！俺に宿る力が強力なら仲間の為に使えます！皆が危険に晒されてたら俺が守ります！俺はまだまだ弱いですけど俺ができるのはそれぐらいですから体張って皆と生きていこうかなって……!!」

俺はグダグダながらも言いたいことを皆に向かつて言った。

その時

ドオオオオオオオオオオ

外から地面を揺るがすほどの!!!!!!
巨大な音が鳴り響いた。

「な…なんだ!?!」

「地震…:…でしようか?」

俺やアーシアが驚いていると突然ゼノは立ち上がった。

「ようやく来たか」

その一言でサーゼクス様やミカエルさん達は今までで見たこと
もない程 顔をしかめつかせた。

「この感じ…:…」

「ああ…:…前の戦争の時と同じだ…:…遂に来たようだな…:!!」

ガチャ

その時、会議室の扉が静かに開かれた。

「やあ。会場はここでもいいのかな?」

皆は一斉にその扉の方へと顔を向けた。

「よう。生で会うのは久しぶりだな師匠?」

そこには…

「フン…:…何ヶ月もお菓子を寄越さないでよくそんな態度がとれるね

？」

異形の衣服を着用した謎の怪物が立っていた。

サーゼクス様は汗を垂らしながらもゼノに質問をした。

「ゼノ君……まさかこの方が……！」

「そうさ。この方がこの宇宙に君臨する最強の神………」

“破壊神ビルス”だ

破壊神ビルス……コイツが……！

「フッフ。よろしくね？ 悪魔の諸君」

遂に、会談は最終局面へと突入するのだった。

破壊神 との会談

ビルスが到着したことにより、会場内は異様な空気が漂っていた。サーゼクスやアザゼル達は冷や汗を浮かべており、リアス&ソーナ眷属の全員は身動きができず固まっていた。アーシアはゼノの話を思い出したのかイツセーの後ろに隠れた。

「ん〜？なにボ〜ツと突っ立ってんの？」

「！…これは失礼しました！」

ビルスのその一言でサーゼクスやアザゼル達は直ぐに正気に戻り席を立ちビルスの前に膝をついた。

「ようこそおいで下さいましたビルス様…私は悪魔で魔王を務めております『サーゼクス・ルシファー』と申します」

「同じく魔王の『セラフオル・レヴィアタン』です」

「私は、天使の長『ミカエル』と申します」

「私は堕ちた天使 墮天使の総督『アザゼル』と申します」

それぞれの勢力の代表者は聞いたこともないような丁寧口調でビルスに膝をつき挨拶した。

「へえ〜。悪魔だけだと思っただけ…天使と墮天使もいるんだ。まあよろしく。それと、そろそろ座らせてくれないかい？ずくと立ちっぱなしだと疲れちゃうからさ〜」

サーゼクスは頷くとすぐさまビルスを席へと案内し、座らせた。直に感じる威圧感。その大きさは一つの惑星に等しい程だった。

「ほほほ。なにもそんな緊張なさらず、暴れないよう私が付いておりますので♪」

「ありがとうございます…え!?」

ビルスの他にもう一人誰かがいたことに皆は気づいた。

「ビルス様…そちらの方は…?」

「申し遅れました。私はビルス様の付き人『ウイス』と申します。まあ話は大体 私がお話し致しますので」

「そ…そうですか…」

そう言われたサーゼクスは気を持ち直すと席に戻った。

「んで？何で今回の会談に僕を呼んだの？」

「その理由はこれからお話しします。その前に……グレイファイア」
「はい」

サーゼクスはグレイファイアを呼ぶとグレイファイアは頷き、氷に包まれた箱を取り出し、そこからカップにフルーツがたつぷり添えられたパフェを取り出し、ビルスの前に置いた。

「どうぞ」

「ん…!?何だいこれは？見たこともない果実が乗ってるねえ…?」

ビルスは突然置かれたパフェに一瞬驚くとグレイファイアに聞いた。すると代わりにサーゼクスが答えた。

「ゼノ君から貴方の好物がスイーツであると教えてもらい、今回の会談へのお越しの感謝を込めて 冥界での希少なフルーツ：『ドラゴンアップル』を添えたパフェをご用意させていただきました」

「ほう…？これはこれは見事なものだ」

サーゼクスの説明を聞くとビルスは目を輝かせながら舌を出す。スプーンでひとすくいし口に運んだ。

「うくん……中々な物だねこのフルーツ…口に入れた瞬間にスツとろけて美味しいよ」

「喜んでいただけ何よりです」

ビルスは笑顔でパフェを口に運び続けた。

「もう一度聞くけどさあ。何で今回の会談に僕を呼んだの？」

ビルスはパフェを頬張りながら先程聞いた事をもう一度聞いた。そう言われたサーゼクスは顔の表情を解かずに答えた。

「今回貴方を呼んだのは二つの理由がございます。一つ目は我々 悪魔と天使。そして墮天使の歴史を知って頂きたいのです」

「ふうくん。なんで？」

「それは地球には人間や動物だけではなく我ら悪魔や天使といった空想のような種族も存在していることを知って頂きたいからです」

「ふうくん(ウイスとは別の天使がいたのか。まあ、大した事はないけどね)」

「ではまず私達悪魔側から……」

それからサーゼクス達の長い説明が始まった。その説明にビルスは全く驚く表情をせず、ただパフエを頬張りながら聞くだけであった。

サーゼクスの話が終わると次はミカエル、最後はアザゼルといった感じで進んでいった。

全ての話が終わる頃にはビルスは欠伸をしながら頬杖を付くという楽な姿勢をとっていた。

と、以上が私達 の歴史です」

「成る程。要するに君たちは三すくみ……で前に起こった戦争を二度と起こさない為に同盟を結んだと」

「はい」

「ふうん。聞くからに悪魔は純血が不足で堕天使や天使も同じと……それに君らは前の戦争で自分らを取り纏める神を失ってバラバラになったと。一つ思うんだけど……」

ある程度理解したビルスはサーゼクス達を睨んだ。

「今の話から察するに……君たちは自分達が崇める聖書の神が死んだ事を公表してないんでしょう？特に天使側のミカエル君は……」

「はい……」

ビルスの鋭い視線がミカエルを捉える。いつもは冷静なミカエルでも申し訳なく汗を流していた。

「それに管理下である教会の聖剣計画も野放しにしていたって聞くじゃないか……。そこんところはどうかだろうなと思うよ。まあ 君もシステムとやらの管理で忙しいと思うけどさ」

「そう言いパフエのトッピングのドラゴンアップルを爪で刺して口に運ぶ。」

「でもさ。管理下においたんならちゃんと管理しなよ。それこそ代表取締役の務めでしょ？」

「はい……全くその通りでございます……」

「そこんところは気をつけてよ」

ミカエルへと話すと次は悪魔勢力の代表者 サージェクスとセラ
フォルーへ目を向けた。

「君らもだけど…はぐれ悪魔っていう化け物が生まれる原因は殆ど
その主人が原因なんじゃないの？勝手に決めつけてホイホイ殺すよ
り 主人を教育した方がいいと僕は思うがね」

「はい。ですので現在は、定期的に眷属のデータを確認するようにし
ております」

「ふくん。キチンと対策はしてあるんだね。なら良いよ。そして最後
は君だ」

「は…はい」

ビルスは三大勢力の中でも一番 全く信用度が薄いアザゼルへと
目を向けた。

「君は確か神器っていうヤツを研究してるんだよね？」

「はい」

「思ったんだけど…無駄な神器狩りをさせるより…簡単に引き抜く実
験をした方がいいんじゃないのかな？」

その圧を掛けた言葉にアザゼルは虚を突かれたかのように驚く。
確かにそうだ。命がつかないように引き抜く方法を見つければ神器
狩りなどする必要はない。

なのでレイナーレのような人の神器に魅せられ 神器狩りという
形で手に入れようとする輩が現れるのだ。

「全くもってその通りでございます…」

何も反論はできなかった。アザゼルも内心 自分に負い目を感じ
ていた。平和を目指していたにしても、自分の行いで 一人の巫女の
娘を 神を誰よりも崇拜していた少女も殺してしまった。

「まあ取り敢えずこれから改善して 豊かな平和を築いてくれる事を
僕は願うよ。まあ、あくまで見てるだけの僕の意見だけだ」

ビルスの不思議な発言に皆は疑問に思う。皆を代表してサージェク
スが質問する。

「ど…どういう事でしようか…？」

「僕は見てるだけさ。君達がどうなろうと知ったこっちなないただの達観者。君ら冥界や他の神話勢をどうするかは。その馬鹿弟子が決める事だよ」

そう言いビルスは後ろで脚を組みながら聞いているゼノへ目を向けた。

「アイツにはここら一体の銀河を任せてるんだ。その中にこの地球も含まれている。つまり。世界の主導権はアイツが握っているって事さ。だからアイツの命令は絶対という事を肝に命じておいてほしいね」

「わかりました…我らも改善のため…今よりも尽力していきます…」

「よろしい。あとさ、何かあったよね？僕に聞きたいことが」

「はい。二つ目は…貴方。方。宇宙の神話系統を教えてください…お願いします。我々がどういう立ち位置なのか…差しつかえ無ければ…お願いします」

その質問にビルスは首を傾げた。

「何だい？ゼノから聞いてないのかい？」

「ゼノ君が妹に話したことをある程度、お聞きしております。ですがそれはまだ一部だという事なので」

「成る程ね。ウイス」

「はい」

ビルスは説明をウイスに任せるとウイスは杖を取り出した。

「では私が説明しましょう」

トン トン

ウイスが杖を2回 叩くと辺りの景色が変わった。

「…これは…!？」

サーゼクスやミカエルは落ち着いているがリアスやソーナ達の皆は混乱していた。

「な…何だ!?宇宙!？」

「え…!?え!？」

いきなり景色が変わったことによりイツセーとアーシアはパニツ

クになった。

「私達…宇宙に来たってことでしようか…？」

「いや…これってまさか…『立体映像』…？」

リアスがそう言うとうイスは「その通り」と答えた。

「紅髪のお嬢さんの言う通り宇宙空間を映像として周りに投写しているのです。ただの映像なので酸素のご心配はなさらず」

そう言うとうイスは話し始めた。

「まずは銀河から、これが貴方達の住む地球です」

そう言いウイスが杖を前に動かすと地球が周りながら近づいて来た。その他にも辺りには金星やら木星やら無数の光り輝く星々が見えていた。

「この星には各国に多くの神々が存在します。それらを取り纏める神が皆さんご存知 地獄の『閻魔王』です」

そう言うとうイスは杖で辺りの景色を銀河に変えた。

「そしてその上に立つのが『界王』です。界王はそれぞれ東西南北の銀河に一人存在し、それぞれの銀河を管理しております。因みに貴方達の星は北の銀河に属しています。その四人を取り纏めるのが『大界王』と呼ばれる方です」

そう言うとうイスは杖を更に杖を叩き範囲を広め、ついには銀河一つでさえ小さく見える程の広大な宇宙空間を映し出した。

「す…すげえ…な…」

「ああ…テレビでは見たことあるけどここまで広大な景色は見たことねえぞ…」

あまりにも壮大な景色を見てイツセーはもちろん匙も圧倒されていた。アーシアは目を回らせクラクラしていた。

「先程話した『大界王』の上に立つのが神の上位となる『界王神』です。界王神は主に星を生成し、そこに新たななる生命を生み出す役割をしています」

「星や生命をですか…!？」

アザゼルはもちろんミカエルも目を大きく開かせて驚いた。

「はい。その界王神も界王と同じように東西南北に一人ずついます。」

そしてその四人を纏める者が『大界王神』です。大界王神の役割も星と生命の創造です。それと対になるのがビルス様のような『破壊神』です。界王神が生み出しすぎた星や『人間レベル』を下げる恐れのある星を破壊し、宇宙のバランスを保つ事が破壊神の役目なのです」

「(へえ：破壊神が破壊するのは宇宙のバランスを保つためだったのか……)」

あの時疑問に思った事をイツセーは理解した。破壊は宇宙のバランスを保つ為に必要な行為なのだトントン

ウイスは杖を叩くとまた景色は広がり、今度は12個の玉が現れ円を描くように並んでいる景色が映った。よく見るとその玉の中には広大な宇宙の景色が広がっていた。

「今映し出したこの12個の玉は全て宇宙です。すなわち宇宙は全部で12個も存在しているんです」

リアス眷属やサーゼクス以外の皆は驚いた。アザゼルやミカエルは少し落ち着いていたがシトリー眷属の匙や他の皆は口を大きく開け唾然としていた。白龍皇のヴァーリも目を大きく見開き驚いていた。

「……という事はその他の宇宙にもそれぞれ破壊神がいるという事ですか……?」

アザゼルがそう聞くとウイスは「はい」と答えた。

「破壊神の他にも界王神も全ての宇宙にいます。そしてそれらを取り纏めるのが『大神官』という方です」

「大神官……様ですか……?」

「はい。大神官様はあるお方の付き人を務め様々な業務を行っています」

ウイスが言った「あるお方」という言葉に皆は引き寄せられた。

「あるお方……とは?」

ミカエルはウイスに聞いた。

「そのお方こそ……この12の宇宙全ての頂点に立つ御方 『全王』」

様です」

「ッ！」

「……」

全王の名を聞いた瞬間にミカエルやアザゼル、ソーナ達は目を大きく見開き驚いた。ヴァーリに至っては声に出してはいないが凄く興奮していた。

トントン

ウイスは杖を叩くと映像を消した。

「とまあ……以上が宇宙の神話系統です。他にも何か聞きたい事があれば話して下さい」

ウイスがそう言うといッサーが手を挙げた。

「はい。そこの貴方」

「はい。ええ……と……前から気になっていたんですけど……ゼノって何者なんですか……？」

「なぜその質問を？」

ウイスはイツサーに聞くと

「前に『地獄に行つてくる』って行つてたし……それに銀河もまとめてるとなると気になったんです。本当にゼノって何者何ですか……？」

「ふむ……ゼノさん、皆さんに話してないのでですか？」

ウイスは答える前にゼノに聞いた。するとゼノは「話していない」と言う表情をうかべていた。

「はあ……」

ウイスはやれやれと首を振るともう一度イツサーの方を向いた。

「ゼノさんはですね……ん？」

ウイスが喋り始めようとした時

時間が止まった

それはイツセー達が一度体験したギヤスパーの力そのものだった。

銀河神の力

「……………あれ？止まってない…………？」

俺はビルス様との会談の途中にギヤスパーの力の気配を感じた。いつもの止められたような感覚がないから俺は気になった。見ると魔王様達を含める全員が動いていた。

「お？気がついたか兵藤一誠」

「あ…ええと何が…どうなってるんだ…？」

俺はあやふやながらにアザゼルに状況を聞いてみた。

「時間が止まったんだよ。お前んとこのハーヴアンパイアの小僧の神器でな。ほれ」

アザゼルは窓の外を指した。見ると数千はくだらないほどの悪魔と墮天使と天使の兵士たちが次々と倒されていた。

「おや？一瞬のうちに随分と賑やかになってるじゃない。これって僕の歓迎パーティーか何かかな？」

「残念ながら違いますなあビルス様。歓迎どころかこれはもうお別れパーティーですよ。まあ言うなればテロですか。いつの時代も、平和を嫌う奴らがこうして反乱を企てて邪魔してくるんですよ」

ズドンツツ!!!

アザゼルがビルス様に説明した瞬間に、外からはとてつもない程の衝撃音が鳴り響いて来た。

「……………とか皆動けるんですよ…………？」

俺は疑問に思ったことを近くにいた部長に聞いてみた。

「そ……………そうね。ギヤスパーの神器だとお兄様やビルス様達では無理だけど私達なら止められてるわ…なのに何故…」

「私が結界を張ったんですよ」

「！！！！！！！！」

俺たちの疑問にビルス様の付き人である『ウイス』という人が答えた。

「時間が止まる寸前に力の波を感じ取ったのでそれがくる前に瞬時に校舎全てを結界で覆ったんです」

俺は驚いた！まさか…神器が発動してから結界を張れるなんて……どんだけ速いんだよ…!？」

「…神器の力が伝わる前にバリアとは…これはこれは驚かされますなあ…」

アザゼルも冷や汗を流してる…サーゼクス様やミカエル様にとってはもう何も言えない状態だった。

…あれ？

俺は確認のためもう一度 室内を見回した。ゼノがいなくなっていたのだ。

部長や皆も気づいて周りを見て探していると

バタンツ!!

「よっと」

突然 後ろの出口が乱暴に開かれた。振り向くとそこにはゼノがいた！

「あなた今までどこに行ってたの!？」

部長はゼノに聞いた。とういかよく見るとゼノは何かを担いでいた。それはギヤスパーと小猫ちゃんだった！

「ふえく……目が回りますく……」

「先輩……そろそろ下ろしてください」

「ギヤスパーに小猫…まさかあなた旧校舎に!？」

「ああ。コイツの力が感じたから何かあったのかと思って瞬間移動してきたんだよ。したらギヤスパーは椅子に縛られてるわ 小猫は壁に縛り付けられてるわ、その上 ロープ被ってる奴らがギヤーギヤーギヤーギヤーうるさかったから取り敢えず全員粉々にしてきてやったよ」

ゾク…!

その言葉と同時に俺たちの背筋に寒気が通った。…!見るとゼノの手や服には僅かながらの鮮血が付着していたのだ。てことはそこ

にいた奴らは全員……………

「ま…まあ何はともあれ…ギヤスパ―君と小猫君を救え出せた。あとはこの状況だが…」

「外にいる奴らか？だったら俺が掃除してきてやるよ」

そういうとゼノは朱乃さんに小猫ちゃんとギヤスパ―を預けると消えた！

「ま…まさか！」

俺たちは急いで窓の方を見た。そこには何千もの敵に囲まれているゼノの姿が映ったのだ！

「よ…よりもよってあんなところに!」

「なんてことを!」

「ゼノ君! 助けなければ!」

「私達も行きますよ!」

「!」はい! 会長!!」!」

部長や朱乃さんや俺や会長の眷属はゼノを助けるべく外へと向かうとした時、

スツ…………

「手は出さないほうがよろしいですよ。逆に貴方達が巻き添えを食らうだけです」

ウイスさんが手を出して俺たちを制止した。

「で…でもこのままじゃゼノが危ないじゃないですか!」

俺がそういつた時、小猫ちゃんに袖を引かれた。

「行かないほうがいいです…」

「小猫ちゃんもどうして!」

見ると小猫ちゃんの身体が少しばかりか震えていた。何があったんだ…!?

「取り敢えず落ち着きなさい。先程のこともかけて教えます。ゼノさんのことを」

俺たちが動きを止めるとウイスさんは窓からゼノを見ながら喋り出した。

「黒崎ゼノ……身長は140程で体重は50か45程……外見からして幼い容姿ですが……まずはその戦闘能力からですね」

「……………」

「……………」

「……………」

一方外では、ゼノは軽く千は超える魔法使い達に囲まれていた。その一人一人の魔力は一介の悪魔とは比にならないものだった。

「さて、テロというと首謀者がいるってことか……まずはテキトーにやっつて待つとくか……」

ゼノはポケットから手を取り出す。

すると相手も戦闘態勢と受け取ったのか周りとは異なった服を着た男が叫んだ。

「打てえええッ!!」

一人の魔法使いの合図と共に周りの魔法使い達の一斉魔力攻撃がゼノへと放たれた。

だが

その魔力攻撃はゼノの身体を避けていったのだ。

旧校舎

「な!？」

イツセーや皆は驚いた。

「なんだあれは？全ての魔力攻撃が当たる直前に消えているぞ。何をしているんだ？」

ヴァーリは不思議のあまりウイスに聞いた。

するとウイスは説明した。

「ゼノさんの最も特徴的な点といえば、その小柄な身体に宿る膨大な量の量です。ちなみに気とは体に流れているエネルギーの比喩。その小柄ながらに宿る気量はビルス様はもちろん、全王様でさえも驚くほどです。戦闘時はその膨大な気が外に漏れ出し高圧なバリアとなるのです。あの程度の攻撃ではゼノさんにかすり傷どころか攻撃を当てることができませんよ」

その説明に匙やイツセーは口を開けて驚いていた。他の皆も同じだ。サーゼクスやアザゼルでも防ぐのがやっつとだろう。

「す…すげえ…」

「気の圧力のバリアって……」

「ですが、それだけではありませんよ」

「「え?」」

「見てごらんなさい」

ウイスが指した方向を見るとゼノは魔力攻撃を受けているなか、手を上にあげた。

「どんなに壊れてもウイスさんが直してくれるからな。派手にやらせてもらうぞ」

「な…何をやる気だ…!?!」

「お前ら程度ならどんな手を使っても簡単にやれるからな。どうせなら花火は派手な方がいいだろう?」

ババババババババババババババババババババンツ!!!!!!!

そう言うのとゼノは上空に向けて大量の気弾を放った。!!その気弾は空の彼方へ向かい、サーゼクス達の貼った結界を次々に破っていった。いまは上側が丸出しの状態だ。

「結界が!」

「ミカエル!すぐに修復を!」

「はい!」

ミカエルとサーゼクスは慌てて結界を貼り直した。

一方 自分たちでなく上空へと攻撃を放ったゼノに魔法使い達は理解できずにいた。

「なんだ?今のは、まさか気でも狂ったのか?」

「ハツハツハツ!自ら結界を壊すとはイカれるにも程がある!」

次々と馬鹿にする声が出る中、ゼノは口を三日月のように開かせ笑みを浮かべた。

その時、

「ははは………ん？」

一人の魔法使いの場所が影に覆われた。その魔法使いはなんだろうと思いを見上げた。

そこには、

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウウウ…

炎を纏った謎の物体がサーゼクスとミカエルの張った結界を突き破り高速で迫ってきていたのだった!

「りゅ…流星だあああああ!!!」

「ぼ…防御陣をはれ!!!早く!」

ドオオンッ!!!

「ぐあああああ!!!」

その物体は上級の魔法使い達が一齐に生み出した防御陣を突き破り魔法使い達へと襲いかかった。その物体の餌食となった魔法使い達はその爆炎に飲み込まれ絶命していった。

だが、これで終わりではなかった。

落下地点から少し離れた場所に立っていた魔法使いは上を見上げた。

その瞬間、その魔法使いの顔は絶望に染まった。

ヒュウウウウウウ!!!

ヒュウウウウウウ!!!

ヒュウウウウウウウウ!!!

ヒュウウウウウウ!!!

なぜなら先程の上級魔法使いを葬った流星が豪雨のように降り注いでくるからだ:!!

「ヒッ…!?に…逃げろおお!!!」

「流星群だあああああ!!!」

魔法使いはすぐに魔法陣の展開を中止し、逃走した。だが、もう手遅れである。

逃げるものを追いかけるように、その場にゼノの気弾の雨が降り注いだ。

その時

会議室の隅に謎の魔法陣が現れた。

「くっ…まさかこんなタイミングで…!」

サーゼクスがそう言うと同時にその魔法陣から、露出度の高い衣装を着た女性が現れた。それを見た瞬間ビルスは『オエ』と少しえづいた。

「御機嫌よう。現魔王サーゼクス殿 セラフオルー殿!」

「誰だい?そいつは」

「先代魔王の血を引く旧魔王の『カテレア・レヴィアタン』です…悪魔は長きに渡る戦いで疲弊しきり種の存続は危ういため他の種族との戦争をやめました。ですが彼女ら旧魔王に属するものは最後まで徹底抗戦を望んだために冥界の隅に追いやられたのです」

「へえ〜」

木場がビルスに説明すると神器を展開し構えた。後ろにいるイツセー達も同じだ。

するとサーゼクスはカテレアと呼ばれた女性を睨んだ。

「カテレア…君がこのクーデターの首謀者か?」

「ええそうよサーゼクス。神と魔王が死亡し腐敗しきつたこの世界を一度滅ぼし、また新たに生み出した新世界を我ら魔王の血族が取り仕切るのです」

「カテレアちゃんやめて!どうしてこんなことを…!」

セラフオルーが前に出てカテレアに制止の声をかけた。するとカテレアはセラフオルーに憎悪剥き出しの顔で答えた。

「下賤な小娘め…私からレヴィアタンの名を奪っておいてよくヌケヌケと…!!」

するとサーゼクスがセラフオルーの前に出た。

「理由はどうであれ…今は破壊神ビルス様がお越しになられているのだ。直ちにお引き取り願おうか」

「破壊神ビルス…?」

サーゼクスに『破壊神 ビルス』がいることを告げられたカテレア

は辺りを見回し、アザゼルの側に立っている異形の生物を見つけた。
「成る程、これは驚きましたね。やはり間近で見ると圧倒的な存在感です」

「だったら早く外にいる部下を全員つれ帰つて…」それがなんだというのですか?」…!?!」

思いもよらぬその言葉にサーゼクスはもちろん一同は驚いた。するとカテレアは続けた。

「破壊神がいることは最初から計算済みです。こちらにはそれ相応の対策は施してあるのでしてね…!!」

そう言うとカテレアは持っていた杖から何かを取り出した。それはドス黒い血の色を帯びた一つの球だった。その中には6つの星が刻まれており、その星は怪しく輝いていた。

「お前…それは…!」

ビルスが聞こうとした瞬間、カテレアはそれを飲み込んだ。

ゴクンツ…

その瞬間

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!
カテレアから、とてつもない程の暴風!が吹き始めた。

「ぐおお!?…なんだこれは…!?!」

一番至近距離にいたサーゼクスはその暴風に吹き飛ばされた。
「サーゼクス様!」

吹き飛ばされたサーゼクスをグレイファイアが咄嗟に受け止めた。

一方、ミカエルとアザゼルは冷や汗を流していた。

「アザゼル…この魔力は…」

「ああそうだなミカエル。この魔力はもう魔王なんて生易しいもんじゃねえ…神クラス以上だ…ツ!!」

その瞬間、新校舎が崩れた。

暗黒の力と白き力との激戦

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

カテレアから放たれた黒い突風は唸りを上げながら周囲のコンクリートによつて作られた壁を粉々に破壊し新校舎を崩壊させた。

「ん？なんだ？」

外で敵の殲滅作業に取り掛かっていたゼノも突然崩れた新校舎の方へと目を向けていた。

—————

—————

———

一方新校舎があつた場所ではウイスがギリギリのところまでバリアを張つたのが幸いで皆は無償であつた。

だが気にすべき事はそれではなかつた。

「なんだありや…」

イツセーが口にこぼす。何故なら、目の前にはカテレアから放出された黒い暴風が一箇所に集まり球体となつていたからだ。

その時、その黒い球体が煙のように消えた。そして中から先程とは違い不気味な雰囲気を漂わせているカテレアが姿を現したのだ。

露出の衣装を覆い隠すかのような黒いロングコートを纏い、額からは突き出すように鋭い龍の角が生えていた。

さらに腹部からは先程飲み込んだ暗黒の龍の球が突き破るかのよう現れ、その周りにはまるで根を張つたかのように赤い筋が広がつていた。

その姿を見たアザゼルは冷や汗を流す。

「何なんだこの馬鹿でかい魔力の量は…いくらなんでも『オーフィス』の力を借りたとは思えんな…」

「お…オーフィスって…」

イツセーの質問にアザゼルは答えた。

『無限の龍神 オーフィス』 最近になつて組織名が発見されたテロ

集団『禍の団（カオスブリゲード）』の親玉だ」

「テロ集団の親玉!? しかも龍神つてことは…! ドライグ!」

「ああ。俺たち二天龍をも超える力の持ち主さ。現段階で最強のドラゴンだ。だが…」

イツセーの質問に答えたドライグはアザゼルと同じくその異様な魔力量に疑問を浮かべていた。

「これ程の魔力…オーフィスとは質も量も全く違う…君らのリーダーは本当にオーフィスなのか…?」

サーゼクスは冷や汗を垂らしながらカテレアへと尋ねるとカテレアは不気味な笑みを浮かべながら答えた。

「確かに私達『禍の団』のトップはオーフィスです。ですがそれは表での話…」

「表…:…だと…? まさか…!」

「ええそのままですかですよサーゼクス。私達を率いている本当のトップはオーフィスではない。そのオーフィスを超える『神』なのですよ!!」

衝撃の事実にはサーゼクスやアザゼル達は驚愕した。

「この地球上にビルス様達以外にオーフィス以上の力を持つ神など存在するのか…!?!」

「ええ。しますよアザゼル。その方のお陰で私はこれ程までの素晴らしい力を手にする事ができましたからね。それと、驚くのはそれだけではありませんよ?」

「なに…!?!」

その時であった。アザゼルに向かって何かが上空から飛来してきた。

ドオンツ!!!

その飛来した物体をアザゼルは間一髪でそれを避け上空を見上げた。見るとカテレアの背後にもう一つの影があったのだ。

「はあ…こんな時に反旗か? ヴァーリ」

そこにいたのは白龍皇の鎧を身に纏った青年『ヴァーリ』であった。

「悪いなアザゼル。此方の方が面白そうだな。コカビエルの運搬中に勧誘されてね『アースガルズと闘って見ないか?』という魅力的な誘

いを受けたのだよ。いくらアザゼルでも北のアース神族と闘う事は許さないだろ?」

「お前には強くなれとは言ったが『世界を滅ぼす要因だけは作るな』とも言った筈だ」

「関係ないさ。俺は闘えればそれでいい」

「そうかい。まあお前が裏切れることは旧魔王派がカオスブリゲードに与っしていると知った時に予想し得たことだがな」

アザゼルは表情をしかめながら言った。その言葉にリアスやサーゼクス達は目を丸くした。

「な…どういうこと…!?!」

リアスがアザゼルの言葉に理解できず驚きの声を上げると、上空にて飛んでいたヴァーリが答えた。

「俺は前 魔王の父と人間の母との間に生まれた混血児。俺の真の名は『ヴァーリ・ルシファー』先代魔王ルシファーの血を引くものだ」

そう言った瞬間、ヴァーリの背中からはリアス達と同じ悪魔の翼が現れた。

「う…嘘…でしょ…」

「事実だ。先代魔王の魔力に神滅具…コイツは俺が知る限り最強の白龍皇になるだろう」

衝撃の事実によりアスは瞳を震わせた。

「これで分かったでしょう? 旧魔王派は全て禍の団に着いた。よって貴方達の時代はもう終わりなのですッ!!」

そう言うときカテレアは手に魔力を集中させた。

「テメエ…まさかこの都市ごと吹っ飛ばす気か!?!」

「ええアザゼル、世界を変革する第一歩としてまず貴方達三代勢力のトップ…そして破壊神には滅びてもらいますッ!!! 神をも超えた私の力を試すには丁度いいでしょう!!!」

「ん? までカテレア…!!」

ヴァーリの制止も聞かずにカテレアは小規模な太陽の大きさに固まった魔力をサーゼクス達に向けて放った。

「破壊神と共に 砕け散るがいいッ!!!」

ビルスも攻撃対象とされていたのだ。だが、ビルスにとってそんな事は最初からお見通しである。止めるかと思いきやもビルスは薄っすらと笑みを浮かべた。

「調子に乗るな」

その言葉と同時に、皆の前に何かが現れカテレアの放った巨大な魔力弾を蹴り上げた。その魔力弾は蹴り上げられると共に上に向かいその場で爆発した。

「な…!? 私の魔力が…!?」

奇想天外な出来事にカテレアは目を瞬きさせながら煙が漂うその場を見つめた。

やがて煙が晴れ、そこにいたのはポケットに手を入れながらカテレアを鋭い目で見つめているゼノの姿があった。

「ツ！何故人間がこんなところに!？」

「人間？ポケットに手をつ込みながら宙に浮いてる奴を人間と決めつけるなんて随分と……うん。バカだな」

「なんだと…!?至高なる魔王レヴィアタンの血を引くこの私に向かって……!」

「至高？血を引いてるだけの奴が何言ってるんだ」

「貴様ツ！」

カテレアは魔力弾を生成しゼノへ放った。だがゼノは放たれた魔力弾を人差し指と親指でデコピンを放ち、その風圧で相殺した。

「どうした？こんなものか？」

「いいえ……まだまだです…!!ガアア…ツ!!」

カテレアは歯をむき出しにした。その歯は一本一本が犬歯の如く鋭く尖っており、中性的な顔立ちが台無しとなっていた。

「さあ……貴様の骨と肉を全て喰らい尽くしてやろう…!!」

「へえ。面白い」

両者は共にその場から更に上へと上がった。

「……………よ」

「ギイ…」

ゼノは人差し指で合図するとカテレアを挑発しその場から離れた。その挑発にカテレアは歯を軋ませると手に魔力を纏い離れていくゼノを追いかけた。

「グガアア!!!」

「お？」

飛んできたカテレアの拳をゼノは片手でアッサリと受け止める。

「ふむ…（悪魔にしては強いな…やっぱあの腹にある球が力を解放してるらしいな…だが）」

その瞬間、ゼノの拳が消え、1秒で星を一周する速度でカテレアの右腕へと撃ち込まれた。光の速度には程遠いが、その速度はカテレアがこちらを向いていたにも関わらず、認識できない程で、その腕を消しとばしていった。

「…な!!!」

「お前の速さなんてハエが止まる程度なんだよ」

その感覚がカテレアに届くのはその数秒後だった。

「がぁぁぁ!!!私の腕があ…!!!」

その膨大な痛みによって、カテレアは無くなった腕の切り口を押さえ込む。

「どうだ？…これでもまだまだなんだけど」

「ぐうう…!!!」

そんな時、カテレアの表情が怒りから一瞬、笑みに変わる。

「ふ…ふふふ。こんなモノ…!!!」

その時、球が妖しく赤色に発光した。

「お？」

突然の現象にゼノは戸惑う。その光が現れた瞬間、カテレアの消しとばされた腕が神経と骨組みから再生され、僅か1秒で皮ごと元通りとなった。

「素晴らしい！…何て力だ！…これが『再生』か!!!」

元通りに再生された腕をまるで宝石のように眺めていた。その力は正に人智を越えていた。いくらなんでもここまでの再生能力を秘

めた神器は神滅具であつても存在しない。

根源はカテレアが飲み込んだ球だった。

「(やっぱりあの球か。早いところ回収しないと)」

あの球の危険性をいち早く察知したゼノ。だが、カテレアがすんなりと渡す訳が無かった。

「さて…この力があれば貴方には力では勝てなくても持久戦なら楽勝ですねツ!!」

カテレアの目が球の色のように赤く光ると、身体中から無数の黒い龍のオーラが現れた。

「喰らいなさい!!」

そのオーラは枝分かれに分裂し始め、一斉に襲いかかった。

「よっ」

ブウンツ!

ゼノは手を横に払い、その時に生じた風圧でオーラをかき消した。

だが、

「グガアアアアア!!!」

「おっ」

そのかき消したオーラは一瞬で再生し再びゼノへと襲いかかり、ゼノを縛り付けた。

ギギギツ……

「さあ、捕らえましたよ?」

「めんどいな」

—————

—————

「カテレアめ 抜け駆けしやがって。ならば俺はこいつだな」

二人が戦う姿を眺めながらヴァーリは神と戦えない事に落胆し舌打ちを打つとイツセーを見た。

「兵藤一誠、運命とは残酷なものとは思わないか?君と俺との質の間には深い深い溝がある」

「…どういふことだ!」

「俺は魔王の血を引き継ぎ白龍皇をも宿した上位の存在…それに比べて君はごく普通の高校生…つまらない。あまりにもつまらなさすぎるよ。これでは何の張り合いにもならない。…そうだ。こういう設定はどうだ？君は復讐者となるんだ。」

俺が君の両親を殺そう…!!

「なっ!？」

ヴァーリから放たれたとんでもない言葉に一誠は勿論、共に世話になっっているアーシアやリアスも驚いた。

「そんな勝手な真似はさせないわヴァーリ…」

リアスは怒りを露わにし、滅びの魔力を手に纏いヴァーリへと向けた。

「ほう。これは意外な人物が。リアス・グレモリー、まさか貴方が来るとは…まあ少しは楽しめるだろう」

「イツセーの両親は…私とアーシアのホームステイ…その上、多くの身勝手な振る舞いを許してくれた…本当の家族のように接してくれた…あの二人は…私にとつてもう一つの両親だもの…!!!手を出すと言うなら許さないわ!!」

リアスは涙を流しながら答えた。

—————

—————

—————

リアスのその叫び声はその場から離れていたゼノにも届いていた。

「(……………合格だぞ…)」

—————

—————

—————

その叫び声はイツセーの心に響いた。

「(部長……………うぐ……………ありがとうございます…俺も部長に任しっぱなしじゃいられねえ!!)」

そうイツセーが心で叫んだ時だった。

体の底から何かが溢れてきた。

「(な…なんだ!?!この異常な魔力量は!?!相棒!!)」

ドライグが語り掛けるもイツセーは答えなかった。

—————

—————

—————

一方、現ではイツセーの体から膨大な量の魔力が溢れてその場にした皆を驚かせていた。

「な…!?なんだこの魔力は!?!この量…上級どころか最上級レベルじゃねえか!?!」

アザゼルは突然の変化に驚いていた。それはミカエルもサーゼクスも同じだ。

「イツセー…何が起こったというの…」

リアスは驚きのあまりその場で立ち尽くしてしまった。

だがイツセーはその声に耳を貸さないままヴァーリへと近づいていった。

「ヴァーリ…俺の父さんは朝から晩まで働くサラリーマン…母さんは朝昼晩 共に美味しい飯を作ってくれる主婦だ…普通だけど俺をここまで育ててくれた最高の親なんだ…それをお前が殺す…? テメエのその気持ち悪い性格や都合で…俺の親を殺されてたまるかああああああ!!!」

イツセーがそう叫んだ瞬間、籠手が輝き出した。

『Welsh Dragon Over Booster』
!!!!!!

—————

—————

—————

一方、カテレアやゼノもその変化に気づいていた。

「ツ!?!この魔力は!?!」

「よそ見していいのか?」

カテレアがイツセーの方向を向いた瞬間、ゼノは一瞬の隙を突い

た。

「しまったー！」

ゼノは体を高速回転し小規模の竜巻を発生させ、そのオーラを引きちぎり拘束から逃れた。

「よつと（前にイツセーにやった力：3分の2ぐらい残ってたのか）」

—————

—————

—————

「イ…イツセー!？」

「部長…下がっててください…」

イツセーが叫び、赤き龍の鎧を纏うと、リアスの横を通り過ぎ少しずつヴァーリへと近づいていった。一方 ヴァーリは先程の魔力の異常発生に頭を狂わせていた。

「(な…何だったのだ今の魔力は…兵藤一誠から放たれたと同時に身体に戻っていった…アルビオン)」

(俺にも分かんらん…だがあの小僧…魔力の量が先程よりも倍以上に膨れ上がっているぞ…?)

「(そうか…何はともあれ…強くなったのならそれでいい…!!)」

瞬間、ヴァーリは拳を握りしめ、イツセーへと飛び立った。

「いくぞー！兵藤一誠!!!」

その拳はイツセーの頭部へと向けられ、猛スピードで接近していった。

その距離が数センチとなった瞬間

ヴァーリの拳の軌道が逸れた。

皆は目を疑った。

「……………ゴハア……………」

そこには、未完成の禁手化状態のイツセーが完璧な禁手化したヴァーリの拳を避け、腹に拳を埋め込んだ姿が映っていた。

刹那

ヴァーリは空高く吹っ飛ばされた。

「ガハアツ…!!」

その場にいた者は何が起きたのか理解できなかった。

一方で吹き飛ばされたヴァーリはなんとか空中で体制を立て直した。

「ぐっ……（なんだ今のは…？あの時の俺の速度は軽く音速を超えていた…それを兵藤一誠は躲した…その上俺にカウンターを…）」

（大丈夫かヴァーリ！）」

「ああ…随分と深くえぐりこまれたがな ……ペツ」

ヴァーリは血を吐き捨てるとイツセーのいる方向を見た。だが、そこにはもうイツセーはいなかった。

「ッ！」

その時、背後から何かが自分に目掛けて振り下ろされようとした。ヴァーリはすぐさま振り向きながら後退し体制を整えるため動いた。だが、それは叶わなかった。

ドンツ!!!

刹那

ヴァーリはその場から地面へと叩き落とされた。

—————

—————

—————

ヴァーリが落とされた音はカテレア達の元へも届いていた。

「今の音……まさか…ヴァーリが!？」

カテレアはヴァーリ達がいる方向へと首を傾け状況を確認した。だが、その動作が、ゼノにとっての最大の間隙であった。

「よそ見するなよ」

その瞬間 マツハを超える速度で何百発もの練撃が放たれた。その練撃は無数の光が軌跡を残しながら次々とカテレアへと吸い込まれていくように放たれていった。

「な…グアアアアアアアア!!!」

カテレアが気づいた瞬間にはもう遅かった。身体に至る所に次々と巨大な衝撃が伝わってくる。カテレア自身は何が起こったのかわからないが、痛みだけが精細に伝わっていた。

「悪いな。数秒 隙だらけだったから500発くらい打ち込ませてもらった」

「う…うぐう…」

カテレアは腹を抑えながら苦痛の声を上げた。幸いにも球の力でその傷は瞬時に回復した。だが傷は回復できてもダメージまでは回復できずカテレアは少し表情を歪めた。

「さて、そろそろ決着をつけよう」

「グアアアアアア!!! (ヴァーリ…！そいつらを殺して早くこちらに来い…!!!)」

—————

—————

——

一方地面に落ちたヴァーリはその落下した衝撃で肋骨が何本かやられていた上に鎧も砕かれていた。

「グハアッ… (く…肋骨が4、5本やられたか…一体奴に何が起きたというのだ…!?)」

ヴァーリは吐血した血を拭いながらゆっくりと降りてくるイツセーを睨んだ。

「どうだヴァーリ！お前を殴ってスッキリしたぜツ!!」

だが、イツセーも魔力を使ってしまったのか少し疲労していた。

「スッキリ？ハッ！どちらかが戦闘不能になるまで終わらないさー！」

そう言うヴァーリは再び鎧を纏うと戦闘態勢へと入っていった。

(相棒、テメエの魔力もそろそろ限界だ。さっきのフルバーストで結

構使い果たしちまった。この場合は逃げるのが得策だがそうはいかんだらう?」

「ああ。俺だけ逃げる訳にはいかねえからな!」

ドライグの問いにイツセーは答えると、辺りを見回した。その時、イツセーは足元に転がっていたヴァーリの鎧の球に目をつけ、それを掴み上げた。

「ドライグ…神器は想いに応えて進化するんだよな…?」

（相棒…まさかお前それを…）

「そのまさかだよ」

（ハハハハハ！面白い。ならば俺も覚悟を決めよう!）

イツセーはその球を自分の右腕へとはめ込んだ。

その瞬間、思いもよらぬ激痛が全身に回った。

「グハア!!木場は不可能とされる聖と魔の融合ができた!だから俺はお前の消失の力を神器に移植してやる!!」

（ハッ！バカな事を。我らは相反する存在。それは自滅行為だぞ?）

アルビオンの笑いにドライグは答える。

（アルビオンよ。俺はこの宿主 兵藤一誠と出会って一つ学んだ。バカも貫き通せば不可能を可能にするとな!）

「バカで結構!!才能で勝てなければ馬鹿げた可能性に俺は掛ける!!」

そう言った瞬間、イツセーの右腕が光つたと同時にその部分の色が赤から純白の白へと変わった。

V a n i s h i n g d o r a g o n p o w e r i s t a
k e n !!

（あ…あり得ぬ…：相反する我の力を取り込むとわ…!!）

「だが、相反した力を取り込んだとするならばタダではすまない。死ぬ可能性もある」

ヴァーリの憶測にイツセーは反論した。

「そう！何が起こるか分からない。俺はそれに掛け、今は生きている!!」

（だが…確実に寿命を縮めたぞ…）

ドライグの言う通り、イツセーは生きているが赤と白、『倍加』と『半

滅』の力が体内で小規模の拒絶反応を起こし、寿命を減らしてしまっただのだ。

だが、ドライブはその事について驚いていた。

(相棒の寿命は確かに縮んだ……だが……減ったといってもたった数十年程度……本来こんな真似をしたら相反する二つの力がぶつかり合い拒絶反応を起こし数千年以上もの寿命が失われる筈だが……何故こんな軽傷ですんでいる……?まさか……これもあの『銀河神』とやらの力なのか……?)

ドライブは意識の中で考えているとイツセーはヴァーリの方へと向き合い、再び戦闘態勢へと入った。

「面白い……!!ならば俺も本気を出そう……!アルビオン、覇龍を使うぞ?」

ヴァーリはそう問いかけるもアルビオンは反対した。

(この場でその選択は命取りだぞヴァーリ、今の体力では確実に暴走する……暴走したとなると破壊神に抹殺対象と見なされ消されるぞ……その上ドライブの呪縛も解けるやもしれぬ)

アルビオンの制止もヴァーリは聞かなかった。

「やって見なければ分からなからう!!我目覚めるは……覇の理に……(自重しろヴァーリ!!我が力に翻弄されるのがお前の本懐か!?)」

アルビオンの制止も聞かずにヴァーリは呪詛を唱え始め、内なる力を解放しようとした。だがその時、予期せぬ事態が起こった。

「ガッ……」

突然 ヴァーリの呪詛を唱える口が止まり それと同時に鎧が砕け散った。何が起こったのか皆は理解出来なかった。その中でアザゼルは冷静さを保ちながらも冷や汗を流しながら思いもよらない推測をした。

「おいおい……マジかよ……兵藤一誠の奴……たった2発でヴァーリを瀕死に追い込みやがったな……」

『!?』

アザゼルの推測に皆は驚きヴァーリを見た。鎧は砕け、地に手と膝をつき、膨大な魔力も底を尽きかけていた。

「凄いな…こんな光景は私も初めてだ…」

サーゼクスは目を丸くしていた。セラフォルも目を何回もまぐりながら夢かどうかを確かめていた。

一方で、ヴァーリも何が起こったのか分からず吐血しながら戸惑っていた。

「ガツ…な…なんだこの疲労感は…！魔力がいきなり尽きるだど…！？」

「え!？」

ヴァーリの言葉にイツセーは戸惑った。ヴァーリは手をつきながらイツセーを睨んだ。

「兵藤一誠…何をした…!？」

「し…知らねえよそんなん！さつきパンチ2発だけ当てただけじゃねえか!？」

「なんだと…!？パンチ2発だけでこの俺の魔力を95%も削ぐなど…ありえん…!？」

その時

「よつと。迎えに来たぜ？ヴァーリ」

ヴァーリのいる付近に黒い影が降りてきて、イツセーとヴァーリの闘いを遮った。

「美猴か…何しにきた？」

「北のアース神族と一戦交えるそうだから帰ってこいだよ…！…てどうしたお前!？魔力が殆ど空じゃねえか!？」

「心配するな…少し寝ればすぐに回復するさ。」

「だ…誰だアイツ!？」

イツセーはいきなりの乱入者に驚き混乱しているとアザゼルが説明した。

「ソイツは闘仙勝仏の末裔だ」

「闘仙勝仏って…」

「分かりやすく言えば西遊記の孫悟空だ。にしても、お前までテロリストだったとはな」

アザゼルは呆れた顔で美猴と呼ばれた青年へと目を向ける。

「カツカツカッ！俺は先代と違って自由気ままに生きるのさ！よろしくな？赤龍帝」

美猴は陽気に笑いながら自己紹介を済ませるとサーゼクス達の裏で此方を見ているビルスに気がついた。

「お〜？あれが先代の言ってた破壊神ビルスか？おいおいリアルで見るとガチでバケモンじゃねえか。仙術使っても全然気の質どころか量も分からねえぞ〜…」

美猴の言葉にビルスは笑みを浮かべると答えた。

「ほお？僕の名は妖怪の間でも知れ渡ってるとは…やつぱ有名なんだね」

「そりゃな。俺らの中じゃ『何があっても絶対に手は出すな！』って言われる程だ」

「なら、今ここで手を出してみるかい？そうなれば君は妖怪史上で一番の名を残すことになるよ？」

そう言うビルスは手を出し招いた。だがその誘いを美猴は汗を垂らしながら即座に拒否した。

「じよ…冗談キツイって！そんな確実に死ぬ誘いなんざまっぴらゴメンだぜ！アンタなんか先代と帝釈天とで組み合っても絶対勝負にならないって！」

美猴の拒否にビルスはため息をついた。

すると、今まで黙っていたウイスが美猴にある質問をした。

「貴方、一つお聞きしたいのですが、あの『カテレア』とか言う者が持っていた球…何処で手に入れたのですか？」

その問いに美猴は頭を掻きながら答えた。

「俺は知らねえぜ？あんな球。いつのまにかアイツらが持ってたからな」

「アイツら？他にもいるのですか？」

その言葉に疑問を感じウイスはさらに聞いた。するとヴァーリが答えた。

「ああ。俺を除く旧魔王派 全員がその球を持っていたな。それ以外

は知らんが」

「そうですか」

ヴァーリがそう言うのと美猴は持っていた棍で地面を叩き、魔法陣を出した。

「んじや、今日のところは退散退散つとく♪」

「次やる時は俺はもつと強くなってくる。お前も強くなってもつと俺を楽しませてくれよ？兵藤一誠。あ、カテレアは？」

「ああ、放つとけ だとよ」

「オーケーオーケー」

そう言うのと二人は魔法陣へと消えた。

「ま……待てー！……うぐ……」

跡を追おうとしたイツセーの体を激痛が襲った。それと同時に纏っていた鎧は粉々に砕けた。

「あれだけの魔力をフルバーストしたんだ。今のお前じゃそれが限界だ。まあ今回はスゲエよ。白龍皇を瀕死に追い込んだしな」

するとアザゼルはゼノがいる方向へと顔を向けた。

「あとは『銀河神』様の方だが……」

アザゼルは大丈夫なのかと不安の表情を出した。それにウイスが答える。

「その心配はいりませんよ。もう終わります」

—————

—————

—————

一方 ゼノの方では

「な!!この私を置き去りに!?!?どういうつもりだ美猴!!」

すんなりと置き去りにされたことによりカテレアは混乱していた。その姿をゼノは鼻で笑う。

「ハハッ。仲間に見捨てられたか……。哀れだな」

「き……貴様ああああ!!!」

カテレアは遂に頭に來たのか、目を真っ赤に染め、牙を剥き出しにしながらゼノを睨んだ。

「もう許さぬ……アイツらは後で殺すとして……貴様はこの場で骨すらも残さず全て喰らってやるわああ!!!」

その瞬間、カテレアの口内の歯が伸び、全てが鋭い牙となった。

一方ゼノはカテレアが叫ぶと同時に笑うのをやめ、カテレアを睨んだ。

「やはりそうか。その球……宿り主の怨念や執念によってパワーを生み出すらしいな」

「ガアアアア!!!」

ゼノが考察しているとカテレアはその鋭い牙でゼノの肩を噛み砕こうとした。

だが、その動きは先程よりも鈍く、ゼノにとって避けるのは容易いことだった。

ヒュン!

ゼノは、カテレアが認識できない程の速度でその噛みつきを躲すと、腹にある球へと手を出した。

そして

グシャアアアアア……!!!

その球を引っ張ると、その球を腹から引き離した。

「な?」

カテレアはようやく気づいたのだ。自分の噛みつきをかわされ、力の源まで盗られたということに。それと同時にゼノの片方の拳が黒く変色し、辺りの空気全てがその拳に纏わり付き蒸気のようなモノを纏う。そして、その手をゼノは握りしめるとカテレアに向けて放った。

「宇宙へいってろ」

無限の修練の末に会得した一撃。その威力は1発で地球をも粉々に破壊する危険な拳技。

その名は

“ビッグバン” ツツ!!

ドオンツ!!!

その拳はカテレアに放たれたと同時に巨大な衝撃波を発生させた。辺りの結界は一瞬で粉々になり、辺りに散らばる。

「ぐあああああ!!!」

その衝撃によつて、カテレアの体は断末魔と共にまるで弾丸のように一直線に飛んでいき、数秒もしないうちに空の彼方…いや、大気圏を突き破り宇宙へと消えていった。

「ふうく…：やっぱこの技は体にくるな」

振るった腕を回していると皆がこちらに走ってきた。

「向こうも終わったようだな」

平和への一歩そして黒幕

「ビツクバンツ!!!!!!」

「グアアアアアオ!アアアア」

ゼノの拳から発せられた強烈な衝撃波でカテレアは空の彼方へと飛ばされていった。

「ふう〜。この技は結構 肩にくるなく」

コキンツコキツ

そう言いながら変色した腕の肩を回していると、ヴァーリの対処に回っていたイツセー達が走ってきた。

「よう。ヴァーリの方は片付いたようだな」

「……」

ゼノがそう言い続けた。だが、何故か皆は黙っていた。不思議に思ったゼノは首を傾げて「どした?」と聞くとサーゼクスが前に出て頭を下げた。

「申し訳ありませんでした…」

「は?」

突然の謝罪にゼノは首を傾げた。すると後ろにいたアザゼルが説明した。

「ビルス様からお聞きしました。貴方様が神であることを…そうとも知らずに我々は幾多にも重なる無礼を働きました」

「本当に申し訳ございません…」

アザゼルの説明と皆を代表とするサーゼクスの謝罪にゼノは「あー」と頭を掻き戸惑いながらも答えた。

「まあいいよ別に。俺は師匠みたいに敬語とか使われてるのは硬いから好きじゃないんだ。だから普通に話せ」

「よ…よろしいのですか?」

ゼノは「いい」と言い頷いた。すると今まで後ろでずっと空気になっていたビルスは欠伸をした。

「ふわあ〜…何だか眠くなってきたよ…」

「では、私達もそろそろ帰りましょうか」

そう言うとうイスは空間にしまっておいた杖を取り出した。

「もうお帰りになられるのですか？」

「はい。もう用は済んだようですね。それにビルス様もお眠りの時間のようなので」

トントン

そう言いウイスは杖を叩き体を浮かせた。

「じゃあね」

ドーーーーーンツ!!

ビルスがそう言うと同時にウイスはビルスと共に天に向かって消えていった。

ビルス達が帰る様子を皆は見ているとゼノもその場から去り始めた。

「ゼノ様！」

「俺も帰らしてもらおう。その前に……」

ゼノはサーゼクス達に目を向けると先程 カテレアから奪った球を見せた。

「この球を見つけたらすぐ連絡しろ。いいな？」

「は……はい！」

サーゼクスが頷くとゼノはその場を去った。

ゼノがいなくなった後、和平が正式に結ばれた。これによって悪魔、天使、墮天使との間で協定が結ばれることとなり、この協定の名は『駒王協定』と名付けられたのだった。

—————

—————

—————

ここは地球から離れた とある小惑星

その小惑星に、先程ゼノの衝撃波を喰らったカテレアが激突した。

カテレアは残っていた膨大な魔力のお陰で九死に一生を得て生きていたのだ。

「ハア…ハア…ハア…（先程の衝撃波…なんとか耐えれましたが魔力が底をついてしまった…その上これ程の深手…しばらく休まなくては…）」

カテレアは風穴があいた腹を抑えていた。

その時

「フンッ 無様だな」

一人の男がそう言いながらカテレアの頭上から降りてきた。

その男は逆立つような髪に人間とは思えぬ緑色の肌、片方は鉢巻のようなもので覆われている鋭い目そして耳には謎のピアスをつけていた。

カテレアはその男性を見た瞬間、全身を震わせた。

「その様子だと作戦は失敗したのか？私があれば程の力を与えてやったというのに。その上その源をも奪われたというのか…」

「あ…ああ…ザ…ザ…ザマ…」

刹那

カテレアの体が消し飛んだ。

「力を過信し過ぎた愚か者め。まあいい。次の計画へと移ろうか…」

そう言うとその男性はその場から姿を消した。

男性が消えた場所にはカテレアの破片が漂っていた。

暗黒のドラゴンボール

駒王学園を跡にしたゼノは、学園から少し離れた林の中に来ていた。

ゼノは気づいていたのだ。何者かに付けられていることを

「さて、そこに隠れてる奴、でてこいよ?」

「…そう警戒しないでくれ」

その声があった途端、近くの暗闇が歪みだし、そこから制服の上に漢服を羽織った謎の青年が姿を現した。

「誰だ? お前」

「ああ、申し遅れた。俺の名は『曹操』 三国の時代 魏の王 曹操の子孫だ」

「曹操の子孫? ああ、通りで漢服を着てるわけか」

ゼノは曹操と名乗る青年の言葉に納得した。

「で? その曹操の子孫が俺に何の用?」

「別に、ただ君の戦いを見させてもらってね。興味が湧いたんだよ。突然だが俺たち英雄派に加わる気はないかい?」

「は…? なぜ俺が?」

「君は人間でありながら何千もの魔法使いとカテレアをたった一人で倒すというより蹂躪といったところか? まあその力を見込んでだよ」
「へえ〜」

「君が加われば俺たちカオスブリゲード英雄派の目的は更なる段階に到達できるだろう。もちろんタダでは言わないさ。君の望むものは何でも用意しよう」

「そうか」

ゼノはにっこり笑った。

「ふざけんな」

「!?」

突然、曹操は背後から聞こえた声に驚き即座に振り向いた。

「な……い……いつの間……」

そこには先程まで目の前にいたゼノが立っていたのだ。曹操は動こうとするも体が震えて動けなかった。何故なら体の心臓に位置する場所にゼノの人差し指が突きつけられているからだ。

「黙って聞いてればムカつくな。『神』に対して『興味が湧いた』『その力を見込んでだよ』はあ? 結構上からだな。その上 物で釣る? 相当死にたいらしいな」

「……!」

その威圧に曹操は身体が震えた。それと共にゼノの殺気が手先から心臓内部に行き渡る。だが幸いなことに微量な殺気だったため曹操は臆する事なく続ける。

「戦うつもりかい? 神さえも屠る最強の神滅具『黄昏の聖槍』を持つこの俺と」

「別に戦ってもいい。けど、俺の身内に手を出そうとしてるならこの場でそのおもちゃごと木っ端微塵にしてやる……!!」

「ッ!」

その瞬間 先程よりも濃い殺気が心臓へと渡った。流石の曹操もヤバイと判断したのかすぐさま槍を手から離す。

「ほら、謝罪はないのか?」

「……す……すいません ……でした……」

「フン」

ゼノは手を下げると背を向けた。

「さっきの勧誘だけど断る。お前らと違って俺は忙しいんだ。今日はもう許してやるからとつと家に戻りな」

そう言いゼノはその場所から消えた。

ドサッ

ゼノが去った途端、曹操はその場に倒れた。

「曹操、あまりにも遅いので迎えにきてやつ……曹操!? 何があったのだ!」

突然現れた仲間と思わしき人物は曹操が倒れていることに驚くと、曹操はゆつくりと口を動かした。

「ゲオルグ……俺は……生きているのか？」

「は……何を言っている!? 生きているに決まっているではないか!」

「そうか……ならよかった……」(ヴァーリ……話が違うじゃねえか……)

それだけ言い残すと曹操は意識を手放した。

一方で急に呼び出されたゼノは移動中 うつすら笑みを浮かべていた。

(あの曹操とか言う奴……俺の威圧と心臓部に伝えた殺気をあそこまで耐えるとは……意外と楽しめるかもな)

そう思いながら先ほどの曹操という青年の事を思い浮かべていた。そう考えていると目的地へと着いた。

く時の巢

「来たわねゼノ君」

「よう時の界王神」

時の巢に來るとそこには時の界王神がお出迎えしていた。

「連絡した通りだけど、その悪魔から取った球を見せてくれる？」

「ん」

そう言いゼノはカテレアから奪り取った球を時の界王神に差し出した。

受け取った時の界王神は一目見ると目を丸くした。

「え!? これって『暗黒ドラゴンボール』じゃない!」

「暗黒ドラゴンボール? なんだそれ? ドラゴンボールの亜種か?」

聞き覚えのない単語にゼノは首を傾げると時の界王神は説明した。

「これは昔……アイツらがドラゴンボールを作った地球の神を洗脳して作らせたドラゴンボールよ……通常の神龍よりも叶えられる願いが3つのうえ強大かつ凶悪な願いが叶えられると言われている呪いの球……ってあれ? ちょっとまって? ……これがあるってことは!」

「……すぐ神殿に行くぞ!」

ゼノはそう言うときの界王神に触れ瞬間移動し神殿へと向かった。

――――

ヒュンツ

神殿に着いた二人はすぐに内部に向かいデンデを探した。すると、近くの木の根元に誰かが倒れていた。

「ポポ！」

ゼノはすぐさま駆け寄りポポという黒い肌の男性を起こした。

「おい！しっかりしろ！おい！」

ゼノがそう揺さぶるとポポはゆっくりと目を開けた。

「う……ゼノ……様……時の界王神様……？」

「そうだ俺だ！何があつたんだ!?この荒れ様！それにデンデはどうした！」

「デンデは……あそこに……」

ポポが指差す方向にはボロボロで倒れ伏したデンデがいた。

「デンデ！」

ゼノはすぐさまデンデを起こすと胸に手を当て気を送り込んだ。

すると、デンデはゆっくりと目を開いた。

「ゼノ……様……？」

「そうだ俺だ！お前ら、俺が来ない間 何があつたんだ！」

「それが……記憶がないのです……気付いた時はゼノ様が目の前にいました……」

「そうか……」

「そのことなら少し、ポポ、知ってます」

「ッ！」

そう言い、時の界王神に介抱されていたポポが立ち上がると説明した。

「ポポと神様がいつも通り下界を見下ろしていた時でした」

――――

「今日も地球は平和ですね」

「うん。平和。ポポ嬉しい」

ポポ達、いつもと変わらぬ平和な地球を眺めていた。

「そろそろお茶にでもしますか」

「じゃ、ポポ、お茶とお菓子持ってくる。神様、ここで、待ってて」

「はい」

ポポは茶と菓子を取りに宮殿に戻った。事件はその直後でした。

「神様、お茶とお菓子持って来ましたぞくってあれ？」

ポポがお茶を持って来た時、空が暗黒に包まれていたのです。

「な…なんだあ…？」

見るとデンデが二人の怪しい奴と話していたのです。ポポはすぐ
停めようと駆けつけましたが…

「邪魔よあなた」

「…！」

1人の怪しい奴がそう言うともう1人の怪しい奴がポポの鳩尾に
一発いれてきたのです。そこでポポは気絶してそれ以降のことは覚
えてません。

—————

—————

—————

ポポが話を終えた途端、デンデはすぐさま二人に向かって土下座を
した。

「申し訳ありません！地球の神である私がこのような不覚を！」

「ポポも…本当に申し訳ない…」

二人の謝罪にゼノは「謝るな」とだけ言うतすぐさまその場にいる
全員に触れ瞬間移動した。

ヒュンツ

「(…)(…)は！」

向かった先は界王神界であった。

いきなり現れた事により界王神達も驚いていた。

「ゼゼゼゼゼゼ　ゼノさん!?!」

「どうしてここに!?!」

「取り敢えず説明する」

そう言うときゼノは今までの事を説明した。最初は驚くも最後は納得し頷いた。

「成る程…分かりました。私たちにお任せください」

「スマンな」

そう言うときゼノは時の界王神に触れた。

「奴らを片付けるまではここで面倒を見てもらえ。ここなら安全地帯だからな」

「おじいちゃん達、この子達をよろしく頼むわよ」

「はあ…まったく…暗黒魔界の奴らにはホント困ったモンじゃわい」

「アンタらはココでこいつらを守ってる。この件は俺が片付けてやるからな」

「分かったわい」

そう言うとき二人は瞬間移動で時の巣へと戻った。

—————

—————

—————

ヒュン

時の巣に戻ったときゼノは今後のトワ達　暗黒軍の対策について話し合っていた。

「これでデンドエ達はしばらく大丈夫だが…後は暗黒魔界の奴らだ」

「これを作ったとなると奴らの目的も前と同じ暗黒魔界の復活……そしてその首領『メチカブラ』の復活だわ…」

「…?メチカブラ?」

「暗黒魔界の王よ。今は老人だけど　若い全盛期の頃はすごく凶悪で神とほぼ同等かそれ以上の戦闘力を持っていたの」

「ふう〜ん。神と同等ね…。まあいいわ。取り敢えず姿を現わすまでボチボチ待つか」

そう言うのとゼノは暗黒ドラゴンボールを時の界王神からヒョイツと奪った。

「え!?!」

「取り敢えずこれは師匠や俺が管理する。お前が持つてて何かあると困るからな」

「え…?…そ…それって…:…つまり私を…心配してくれてるってこと／＼」

「断じて違う」

それからゼノは時の巢を後にして、地球に戻った。

—————

—————

—————

「「「「申し訳ありませんでした!!!」」」」

「は…?…」

あれからゼノは地球に戻ると既に空が真っ赤っかに染まっつていて夕方だったのだ。それで直で部屋に向かったのだ。そして扉を開くと、自分を見たりアス達が一斉に土下座して…:…今に至る。

「どしたの?…」

ゼノは土下座の理由を聞くとリアスは説明した。

「貴方が神とは知らずこれまで多くの無礼を働きました…!…ほ…:…本当に申し訳ありません!…」

「本当にすいませんでしたああああ!!!」

リアスは今まで自分がおこなってきた無礼に対しての謝罪をした。他の者も同じだ。特にイツセーはビルスから警告を受けていたので皆よりもさらに激しかった。

ゼノは頭を掻きながら溜息をつくと「とりあえず頭をあげろ」とだけ言った。

「確かに俺は神だ。けどそんな崇められるのは好きじゃないんだよ。だからタメ口でいい」

「で…:…ですが!…」

「だからいいって言ってんだろリアス」

「で…でも…ええ？今…名前で…？」

突然、ゼノの方から自分の名前を呼ばれた事でリアスは驚いた。今までグレモリーとしか呼ばれなかった自分を名前で呼んだのだ。

「認めてやったんだよ。あの時 ヴァーリがイツセーの両親を殺すと言った時、お前は無理と分かかっていても恐れず前に出た。一見 小さいとは思うが俺にとっては大したモノだと思ってる。タメ口を使わないとなるとグレモリーのままだいいか？」

「い…いえいえいえ！滅相もございません!!使わせていただきませす!これからもよろしくお願いします!!!」

「よろしい」

そう言うと次にイツセーの方を向いた。

「ただしイツセー、テメエは敬語だ。よくよく考えれば俺 先輩だし」

「はいいい！今まですいませんでしたああ!!!」

ゼノはまた「よろしい」と言うと最後に朱乃の方を向いた。

「朱乃、いくぞ」

「…？」

「忘れたのか？」

ゼノがそう言うと朱乃は表情を一変させ、すぐさまゼノに付いていった。

「?どこへ行くの?」

リアスがそう尋ねるとゼノは「ただの散歩だ」とだけ言い、朱乃と共に部室を後にした。

母と娘の再会

部室を後にしたゼノは朱乃の支度をさせるため、一度神社へと瞬間移動した。

ゼノが朱乃を待つこと数分

「お待たせしました」

声がる方へと首を傾けた瞬間、ゼノはその姿に目を奪われた。

そこには、いつもと同じ巫女服を着用している朱乃が立っていた。時折見るその姿は誰もが目を奪われる程 美しいものだった。

だが、ゼノが奪われた場所はそこではなかった。

それは……朱乃が背負っている2メートル後半はありそうな程の巨大なリュックである。完全に モン○ンのネ○婆である。

「でっけえな……何が入ったんだよ」

「うふふ♪秘密です」

「まあいいか。いくぞ」

ゼノは朱乃の巨大なバックに触れるとその場から瞬間移動をした。

—————

—————

—————

瞬間移動をしたゼノと朱乃は、閻魔庁へ趣き、生身の人間である朱乃の死者の国への立ち入りの許可を申し出た。大王はアツサリと許可をし、手下である鬼達にゲートを開かせた。

ギィイ……

そのゲートを開けたと同時に、隙間から光が差し込んだ。

朱乃は突然の光に目を瞑った。

そして、その光が消えると朱乃はゆっくりと目を開いた。

「……」

目の前にあったものは “別の世界” であった。

上には満点の星空、そして下には、海の底が見える程 鮮やかに透き通った海、さらにその先には日本と同じ程の大陸があり、上に浮かぶ青く美しい巨大な満月がその大陸を照らしていた。

「すごい……」

初めて見る景色、ましてや秘境のような風景に朱乃は目を奪われていた。

「あそこに家とかが見えるだろ？あそこにいくぞ」

そう言いゼノは広い海の上に浮かぶ大陸へ指を指した。

「で……ですがどうやって……」

「飛んでだよ」

「え？」

そう言うとゼノは朱乃の手を取り、そこから下にゆっくりと体を落とすとし落下した。!!!!

「きやあああー!!!!」

高度1万kある地点からの落下に、朱乃は絶叫した。絶叫する朱乃の隣でゼノは一人爽快な気分を味わっていた。

「きやあああああー!!!!」

地面まで残り数メトルになった瞬間

シユンツツツツ!!!!

直前で、ゼノは舞空術を使った。その衝撃で辺りには大量の水飛沫が舞い上がり、朱乃やゼノの頬や背中に付着すると静かに破裂した。

「しっかり掴まっつけよー!」

「は……はいー!」

そう言われた朱乃はしっかりとゼノの肩にしがみついた。ゼノはニヤリと笑うと一気に速度を上げた。

ヒユウウウーンツツ!!!

「イヤツホオオオオオオオオオー!」

「きやあああああー!!!!」

~~~~~!!!!

――

それからしばらくして、ゼノと朱乃は大陸へと降り立った。

「到着つと」

「し…死ぬかと思いました…」

ゼノのあまりにも複雑な飛行＋1万kmメートルからの急降下で朱乃の顔は少しやつれていた。

そんな事は御構い無しにゼノは「いくぞ」といい足を進め朱乃はそれを追いかけた。

二人がしばらく歩くとある神社へ着いた。その神社周りには多くの灯籠が置かれており、その中にある炎が静かに揺れていた。それに加え、その神社に繋ぐ長い道の周りには多くの木があり、風に合わせ静かにゆれていた。さらに周りには無数の蛍、そして青く輝く蝶達舞っており、まさに幻想と呼ぶに相応しい風景だった。

二人は入り口である鳥居をくぐるとその神社へと近づいた。

「ここに…母様が…」

「そうだ。大王からだとお前の母親はこの神社の巫女であるらしい。すげえな。死んでも職を持つ奴なんてあんまいねえぞ。とかあの世に神社なんてあんのか？」

作者「知らん」

その時

「誰かいるのですか？」

神社の玄関の戸が開かれ、誰かが出てきた。

その音と共に朱乃とゼノはその人物の方へ首を向けた。

「あら？どちら様でしょうか？」

その人物は二人に気がつくと言を掛けてきた。暗闇で姿はよく分からないが声の質からして女性である事がわかる。

だが、悪魔である朱乃は暗闇の中でもその姿ははっきりと目に映っていた。朱乃はゆっくりと返した。

「あ…私のこと…覚えていますか？」

「はい？」

その言葉に対し、その人物は首を傾げた。

その時

風が吹き、それと同時に月を覆っていた雲が一気に晴れた。

それと同時にその場が月明かりに照らされ、暗い景色を鮮明にさせていった。

その瞬間、相手の人物は目を見開いた。

「もしかして……………朱乃…………？」

その女性がそう言った瞬間 朱乃の目に涙が浮かんだ。

「はい…！貴方の娘 姫島 朱乃です！」

そう叫ぶと朱乃はその女性に駆け寄り抱き付いた。

「母様……………ずっと会いたかったです…！」

「…！」

涙で顔がぐしゃぐしゃになる朱乃をその女性は強く抱きしめた。

「私も…私もよ…！朱乃！」

月明かりに照らされながら抱き合う二人の周りにはまるで祝福するかのようにはるかに沢山の虫や蝶達が飛び交っていた。

「大きく…なったわね」

「……………はい…!!」

涙を流しながら抱き合う母と娘をゼノは離れた場所で見守っていた。

(親子……………か)

その時、ゼノの頭にある映像が浮かんできた。それはビルスと出会う前の己の過去の記憶である。

—————

—————

—————

とある荒野のど真ん中で一人の少年が涙を流しながら手を出していた。

『待つてよ父さん！僕を置いてかないで！』

手を向けるその先には父親らしき男性が背を向けながら先へと進

んでいった。

『待つてよー!』

『黙れ』

その一言で少年は泣き叫ぶのをやめた。その男性は振り返ると冷酷な目で少年を見つめた。

『力もない。知恵も人並み程度。そんな出来損ないに父親呼ばわりされるなど屈辱に他ならん』

『え……』

『勝手に生きて勝手に野垂れ死ぬがいい。お前は私の研究の廃棄物だ』

そう言い捨てるとその男性は歩き始めた。少年を置き去りにして

『ま…待つてよ! 待つてよ父さあああああんツ!!!』

――――

――――

――――

『……』

思い出した過去にゼノは怒りが混じった表情をしていた。幼き頃に言われた言葉が思い返すと同時に胸の辺りが少し苦しくなった。

「クソ親父が…」

ゼノは歯を少し噛み締めると再び抱き合う2人の方を向いた。

(俺はお前が羨ましいよ。朱乃)

## 親子の時間そして天国の強戦士

あれから数分後、俺は朱乃の母親に何度も頭を下げられた。別に俺はどうでもいいが。

その後 俺は来たついでに天国を視察しようと思ひ、朱乃に二日の滞在を許可し親と居させる事にした。

「じゃあ2日後に迎えに来る。それまでは親子の時間を楽しめよ」

俺がそう言うと朱乃は頷いた。そして俺はその場所から飛び立ち神社を後にした。

—————

———

ゼノ君が空に飛び去り見えなくなると母様は私を神社の中へ入れてくれた。

広間らしき場所に着くと私は夜風のあたる場所に座った。外から吹く風が凄く心地いい。

「いい風……」

「朱乃 お茶が入ったわよ」

「ありがとうございます母様」

目の前に置かれた湯のみをそつと手に取りゆつくりと口に運んだ。「おいしい……」

その味は子どもの頃の記憶を鮮明に思い出させてくれた。それと同時に私の目から一筋の涙が流れ頬をつたり静かに落ちた。

何度やっても生み出すことができなかった母様の味 それをもう一度味わえる事が出来たのが凄く嬉しかった。

「朱乃? どうして泣いてるの? 何かあったの?」

「いえ……これは……嬉し涙に……ございます……」

—————

———

一方その頃 ゼノは天国の雲を突き抜けた場所に立つ巨大な宮殿



へと来ていた。

「久しぶりですな。大界王殿」

「んん…お久しぶりですな銀河神様」

ゼノの前には長い髭とサングラス。そしてコオロギのような触覚の生えた帽子が特徴な老人が座っていた。

「して…なぜ此方へ？」

「ちよつとした野暮用さ。なあに2日間だけ滞在するだけさ」

そう言うときゼノは席を立つと「ちよいとばかりこの辺りを回ってくる」とだけ言い残しその場を去った。

「ふう…ついこの間までは敬語を使ってた子が一瞬であんな風になるとは…子供の成長は早いものね…」

――

――

宮殿を去ったゼノは とある場所へと来ていた。その場所とは天國の武道場である。その広さは本番の武道場よりも一段と広く、大きさは街一つと同等である。

「ハッ!!」

「せいッ!!」

「どりゃあッ!!」

ゼノが着いた時には既に何千もの戦士達が組手やらストレッチやら瞑想等をしていた。この者らは殆どが生きていた頃に歴史に名を刻んだ強者ばかりであり、普通の戦士よりも一線を凌駕する実力を持っているのだ。

すると、ゼノは修行する戦士の中、見覚えのある後ろ姿を見つけた。その人物は背中に『悟』という文字のつけられた山吹色の道着を身に着けていた。ゼノはその戦士に近づくと声をかけた。

「よう。久しぶりだな孫悟飯」

ゼノの声を聞くとその人物はゆっくりと此方へ振り返った。

「え!?!お…! お久しぶりです銀河神様!」

「なに?!銀河神様!?!」

孫悟飯と呼ばれた人物はおどおどしながら敬語でゼノへ挨拶をした。すると辺りの皆も驚き一斉にゼノへ頭を下げた。

「全員 頭を上げろ。俺はちよいと視察に来ただけだ。修行を続けてくれ」

そう言うのと周りの皆は離れ修行を再回した。するとゼノは悟飯へ目を向けた。

「相変わらず堅苦しいな。呼び捨てでいいって言っただろ？」

「あははは…やっぱ神様なのでそこら辺は…」

この『孫悟飯』という青年の実力は天国では最上位に位置しており、一度ゼノと一度 拳を交えた事があった。潜在能力を引き出したゼノに勝利している。

「で、なぜこんな所に？」

「だから視察だったの。それよりなんだ？この人数は。『あの世一武道会』はもう何年か先だろ？」

そう言いゼノは辺りを見回す。

『あの世一武道会』とは、いわばあの世での武道大会である。天国の武道家達が集まり その中からのナンバーワンを決める大会である。因みに悟飯はあまり優勝経験はない。なぜかという『ある男』が連続で一位を獲得しているからである。

「あれですよ。地獄から大量の脱走者が出たんですから 多分皆 燃えてるんですよ」

「ああそうだったのか」

悟飯の言う通り あの日 地獄から脱走者が出たと同時に 天国の武道家全員に出動命令が出るまで各自 鍛錬し備えよと命令が出されたのだ。

すると、ゼノは上着を脱ぎすて上半身 だけタイツとなった。

「さて、感動の再会のついでに1試合どうだ？」

「ええ!?ゼノさん?!ま…まあいいですよ!僕だってあれから結構強くなりましたからね!」

そう言うのと孫悟飯も戦闘態勢を取った。

「お!?悟飯がやるらしいぞ?」

「しかも相手はあの銀河神様だぜ!？」

「マジかよ!?!こりや見物だ!」

すると、周りの皆はテンションが高まり全員その場を離れ始め 武道場の外へ出ると野次を投げ始めた。

ヤジが飛び交う中 悟飯は 深く深呼吸をした。

「ふう……………ッ!」

その瞬間 悟飯の身体から茶色のオーラが溢れ出た。それと同時に悟飯の風貌が変わった。黒い瞳が金色へと変貌した。そして、何よりも一番特徴的なのは先程まで短かった髪が背中を覆いつくす程まで伸びていた。

すると悟飯は戦闘態勢を取り鋭い眼光でゼノを見据えた。

「初めから全力でいきますよッ…!!」

孫悟飯スーパーサイヤ人3（潜在能力解放）

「へえ…それがスーパーサイヤ人3か。だったら俺も見せてやる。新しい力を…ッ!」

その瞬間 ゼノから膨大な水色のオーラが溢れ出しゼノを包みこんだ。その瞬間 天国の雲が晴れ 周りに突風を巻き起こし 練習場の床板が次々に剥がれ飛ばされていった。

「うおおおおおおおッ!!!」

ゼノのとてつもなく巨大な咆哮と共に地面が揺れ出しマグニチュード並みの振動が発生した。

すると ゼノを覆っていたオーラがガラスのように割れ始めた。

そして完全に剥がれゼノの姿が露わになった。その姿を見た瞬間 孫悟飯は大量の冷や汗を流した。

「ゼ…ゼノさん…?まさかその姿って…」

「行くぞッ!!!」

「まってええええええ!?」

ゼノが悟飯とぶつかり合った瞬間 闘技場一帯が光に包まれた。

## 親子の別れ　そして帰還

ここは天国の擬似闘技場。半径1kmはある超超超巨大な闘技場である。だがその闘技場が、今現在　半壊と言うより完全に崩壊状態となっていた。その原因は…

「いつつく…もう少し手加減してくださいよ…」

「これでも結構手加減した方なんだがな〜♪」

舞台のど真ん中で身体中ボロボロでヘトヘトの悟飯とボロボロになりながらも子供のようにならぬ無邪気に笑っているゼノの姿が見えた。

「それにしてもこの武舞台は脆いなく。たった30分でこの有様か〜」

「そりゃあんなに戦えばそうなりますっつ〜!!」

何故こうなったのかというと、数十分前　謎の変化を見せたゼノは悟飯と戦闘を開始したのだ。だが、その戦闘があまりにも激しすぎ両者のエネルギーのぶつかり合いが辺り一帯を巻き込んでしまったからである。しかもたった一分で舞台が半壊になるほどの戦いを30分も続けていたので二人の周りは板が吹き飛ばされたり抉れていたりと下にある土がほぼ丸出しとなっていた。

「さて、久々に楽しませてもらった事だし、そろそろ帰るわ」

「もう帰るんですか?」

「ああ。他にやることがあるからな」

そう言うどゼノは武舞台をそのままにして悟飯と別れた。

「…て　ちよつと待ってゼノさん…会場このままあああああ  
!!??」

\*　武舞台は界王様が直しました。

—————

———

母様と再会してから1日が経過した。

母様は縫い物をしており、私はそれを横から見ている。

「ねえ朱乃」

「はい？」

縫い物をしながら母様は私に聞いてきた。

「朱乃をここに連れてきてくれた子：朱乃はあの人の事が好きなの？」

「ツ!？」

いきなりゼノ君の事を聞かれ私は驚きのあまり後ろへ下がった。

「成る程：凶星ね」

「うう…」

すると母様は編む手を止めると私の方へ顔を向けた。

「朱乃：あの子…いや、あの方の事を知って言っているの…？」

突然 母様のゼノ君に対する態度が変わった。恐らく母様も知っているのだろう。ゼノ君が宇宙の神である事を…

でも私は好きだ。彼の事が大好きだ。彼ともっといたい…彼と共に歩みたい…

私はその思いを母様にぶつけるべく答えた。

「はい」

私がそう言うと母様の顔が少し険しくなりしばらくの間 私を見つめた。

すると険しかった母様の顔が元に戻った。

「本気なのね…？なら、好きにきなさい。私は止めないから」

母様の目が変わりいつもと同じ優しい眼に戻った。認めてくれたのだ。私は笑顔で母様に礼を言った。

そこからは妻になる為の家庭術を鬼のように仕込まれた。

—————

—————

—————

それから ゼノは天国をゆったりと観光 そして朱乃は久しぶりに再会した母と日常を過ごした。

時が経つのは早くあつという間に2日が経過していった。

別れの2日目の夜 朱乃が荷物を持ち玄関を出るとそこには予告通りゼノの姿があった。

朱乃は母と別れの挨拶 そして暖かい抱擁を受けるとゼノの元へ歩いて行つた。すると突然 朱璃は朱乃を呼び止めた。

「朱乃…お父さんの事はどう思っているの？」

その言葉に朱乃の表情は暗くなり俯いてしまった。

「許せません…：それに…私なんか産まなければこんな事には…それに母様だつて私を産んでしまったことを後悔して…「朱乃！」」

朱璃は一喝し朱乃の言葉を遮つた、

「そんな事 言わないで… 貴方を産んで後悔した事なんて一度もないわ。子を産んで後悔する親なんていないもの。それにあの人がだつて朱乃の事をずっと気に掛けていたのよ」

「あの人が…!？」

「そうよ。私が死んでからずっと朱乃の事を探し回っていたの」

「そうだったんですか…：」

その言葉に朱乃は黙り込んだ。しばらくすると口を開き答えを出した。

「一度…話してみます」

「ええ」

その言葉に朱璃はニツコリと笑うと頷いた。

「朱乃 行けるか？」

「はい」

するとゼノは手をかざし閻魔殿へのゲートを開いた。するとゼノは朱璃に呼び止められた。

「娘を…：よろしくお願いします」

その言葉と共に朱璃は頭を下げた。するとゼノはゆっくり頷いた。

「ああ」

「行ってまいります。母様」

そして朱乃は手を振りながらゼノと共にゲートをくぐり天国から姿を消した。

――  
――  
――

閻魔殿に着いたゼノは神社へと瞬間移動した。  
時刻は深夜の0時であり辺りは真つ暗である。

「じゃあ俺も帰る」

そう言いゼノは帰ろうとすると朱乃は呼び止め、頭を下げた。

「ありがとうございます。貴方のお陰で迷いを振り切ることができ  
そうです」

その言葉にゼノは微小な笑みを浮かべると手を上げながら夜の道  
へと消えていった。

因みにこの後家についたゼノは帰りが遅すぎた為かサリにめちや  
くちや説教されたそうなの。

## 新任教師　そして小猫の迷い

ゼノが朱乃と共に帰還して翌日　の月曜日

「今日から『オカルト研究部』の顧問となったアザゼルだ！『アザゼル先生』と呼びな！」

いきなりにはいきなりすぎる。つい先日まで自分達悪魔の天敵であった墮天使の首領がいきなり先生になっていた事にリアスやイツセーは口をガーンと開けていた。

「これは一体どういうことかしらソーナ？」

リアスは首をゆっくりと振り向かせ、後ろで汗を垂らしているソーナをジト目で睨んだ。

「い…いや…あの　断った場合はお姉様が来ると仰って……」

「私たちを売ったのね…？」

「で…では私はこの辺で！」

ソーナはすぐさま扉を開けると逃げる様にして出て行った。

「まあまあいいじゃねえか。考えてもみろ。セラフオルーが来たら来たで毎日が撮影会だぜ？」

「ム……それはそれで困るわ……」

リアスはアザゼルの話に納得するとソーナの要求に渋々　了承した。

「ま、俺が来たからにはお前らの体力　スタミナ　魔力　なおかつ神器をめっちゃくちや強化してやるからな♪」

アザゼルのどう料理してやろうかという笑顔に神器を扱うイツセーや木場達は少し引いた。

—————

—————

—————

私は弱い……力が自慢の『戦車』である筈なのに兵士であるイツセー先輩や速さが自慢の裕斗先輩よりも低い。会談の時…ギャー君を守る役目だったのに守れず…ゼノ先輩に助けられた…。

私はどうすればいいんだ…どうすればもつと役に立てる…



“仙術”なんて絶対に使いたくない……！使えば私は姉様の様になってしまう……どうすれば……。

「……」

私は朱乃先輩の膝に座っているゼノ先輩へ目を向けた。先輩は銀河神で武術の超達人……だけど先輩の教えに私がついていけない訳がない……分からない……どうすればいいんだ……。

—————

私はその後 契約仕事を終え今住んでいるマンションへと向かっていった。

マンションに帰宅した私はベッドに寝っ転がる。

「取り敢えずなんか食べよう……」

私は近所にあるピザ屋にデリバリーで注文した。

その時

ピンポーン

玄関のボタンが押されて、誰かが来たことを教えた。私は部長かなと思っドアを開けた。そこにいたのは、部長ではなかった。全身を黒いローブに包んでおり、魔力も微量ながら感じる。そして嗅いだことのある匂いも感じ取れた。

「突然押し掛けて申し訳ございません。リアス・グレモリーの眷属の『塔城小猫』様でいらっしやいますか？」

「だったら何でしょう……？」

スツ……

「死ね！」

「っ！」

ドンッ！

突然 その男は私に目掛けて魔力を放ってきた。避けれたもの。私はその場に尻餅をついてしまった。

あの男の事を思い出した。聞いただけで震えがある声 間違いな

い。あの男は姉様が殺した悪魔の眷属だ。

「あ……あ……あ……」

立ち上がりたい。けど立ち上がれない……。私の頭の中はあの日の恐怖に埋め尽くされ何も考える事ができなくなった。

その悪魔はゆっくりと私に近づいてきた。一步一步……一步一步……

「や……やだ……来ないで……!」

「はあ? 来ないで? 随分な物言いだな『白音』よ。貴様の姉がやった事……覚えてるだろう?」

そう言いどんどん距離を縮めてくる。

「お前の姉が我が主を殺して以来、私達がどんな目にあつたか貴様には分かるのか? いや、分からせてやろう……この痛みでツ!!」

「ガハッ!」

そう言い悪魔は私の鳩尾を踏んだ。

「まだ足りぬ……まだ足りぬ……!」

「うぐあ……や……やめて……!」

私の願いに応えることは無く魔力が込められた足は何十回も私の腹に振り落とされた。私は動こうにも動けなかった。

誰か……助けて……!

私は声を振り絞りながら叫んだ。

「フン、命乞いをするとは。まあいい。最後はお前の身体を犯してやろう。身体の隅々から侵してやろう……絶望に落ちる顔を見せておくれよ?」

その男の腕がゆっくりと倒れ伏している私に近づいてきた。

もうだめだ……私は終わった……。私がもつと強ければ……強ければ……

ガチャ

「お待ちせいたしました〜」

……え?

その時、玄関から誰かが入ってきた。この声は聞いたことがある。「見た目と速さだけが取り柄に対して味には全くもって取り柄なしの上バイトへの給料がとことん少なすぎ かつ2倍でも1500はいかない超ブラックなピザ屋の店長が作ったピザ 『駒王ピザ』でくす」

その陽気な声につられ私と悪魔はその方向へ首を向けた。そこに立っていたのは私の大好きなゼノ先輩だった。

「せ…せんぱい…!」

私は涙を流した。助けに来てくれたんだ。私の声が届いたんだ。

「ん?小猫?成る程、ここが小猫の家か。ちよつとお邪魔するよ」

そう言いながら先輩は悪魔に目を配ることなく玄関を上がってきた。

私を踏みつけていた悪魔は足を退け先輩の前に立ちふさがった。

「去れ。私は今からコイツを殺すのだ。邪魔立てするなら容赦はせんぞ?人間の子よ」

その悪魔はそう言いながらゼノ先輩へ威嚇した。だが その悪魔が言い終わったと同時に心臓がゼノ先輩の腕に貫かれていた。

そして心臓を貫かれた悪魔はその場にゆっくりと倒れ伏した。つまり絶命した。

「さて、大丈夫か?こね…こっ!」

私は涙を流しながら先輩に抱きついた。

「うあああ!!怖かったああ!!怖かったです!!」

「え!?ちよ…どうした!?落ち着け!な!?落ち着けて!」

—————

—————

———

あれから数分後、小猫は未だに涙を流しながらゼノに抱きついていて。それもそうだ。散々殴られ 蹴られた挙句の果てに犯されそうになったのだから。

「うぐうう…先輩…!!」

「だから落ち着けよ。何があつたんだよ。といつかコイツ誰？それに何でお前 今日ずっと不機嫌だつたんだよ」

ゼノは自分が殺めた相手に指をさした。すると小猫はようやく落ち着きを取り戻すとゼノにこれまでの経緯と悪魔になったキツカケ、そして自分の秘密についてをすべてさらけ出すように話した。

その話を聞いたゼノは「そうか」と言うのと倒れ伏している男に向かって手を向けた。

「要するにコイツがお前に無理やり『仙術』を使わせ様とした奴って何か？」

その問いに小猫は頷いた。

「成る程。たしかに使いたくなくなるよなその術は。で？お前は どうしたいんだ？」

「強くなりたいです…。今の私は眷属の中で1番弱い…このままだと私…ただの足手纏いになってしまいます…」

「そうか。取り敢えずこの遺体は消すか。続きは俺の家で」

そう言うとゼノは魂がなくなったただの肉の塊を『破壊』するとりアスに連絡し、「次 こんな事があつたら殺すぞ管理者」とだけ言って電源を切ると小猫と共に自宅に瞬間移動した。

――

――

――

自宅に着いたゼノは小猫をソファアに座らせると向かい合った。因みにサリとティアマツトは食材の買い出しに行っており不在である。

「さっきの話の続きだ。お前はどうしても強くなりたいのか？」

「はい…」

小猫は頷いた。

「たしかにお前の格闘センスは良い。けどな、今のお前には限界がある。その限界を超えるにはさっきの『仙術』が必要だ」

「嫌です！あんな力を使えば…私は姉様のような化け物になってしま

います！」

「だがな。今のお前にはやっぱりそれが必要なんだよ。このまま格闘術だけが続けていけばオーバーワークでぶっ倒れるだけだ」

「……」

小猫は黙り込んでしまった。武術が上達していてもそれに比例する力がなければ元も子もない。

「取り敢えずお前に提案する。素直に自分を受け入れて 俺と一緒に修行する。それとも自分を受け入れずこのまま悩み続けていく。どっちか選べ。最初のを選べば俺は喜んでお前を受け入れる。お前の戦闘スタイルなら教えやすい。けど…後者を選んだら…俺はお前に二度と手は貸さん」

その問いは小猫にとっては強大なものだった。前者を選び仙術を使えば姉のような化け物に。だが後者を選べばゼノから見放されいっまでもそのままである。

小猫はある事をゼノへ聞いた。

「私が……暴走した場合……どうするんですか……？」

「…まだ怖いのか？ 暴走するのが」

「はい……」

小猫にとって、仙術はトラウマの塊のようなモノだ。使い方を見誤れば確実に暴走し、甚大な被害を出す怪物と成り変わるだろう。それに対し、ゼノはまるで何事もないかのように答えた。

「ふん。そんな心配するな。俺を誰だと思ってるんだ？ お前が暴走しようとするなり ひっぱたくなりして無理やりにも目を覚まさせてやるよ」

ゼノのその答えを聞いた小猫は決心した。

「私は……自分を受け入れます！ だから先輩！ 私を強くしてください！」

そう言う和小猫の頭から猫の耳 そして尻尾が生えた。

「ああ。いいぞ。お前を地球最強の…いや、宇宙最強の猫？ に育ててやる」

その後、小猫はゼノの家で居候する事となり、帰ってきてその知ら

せを聞いたサリは目を凄く輝かせていた。

## 冥界合宿のヘルキヤット 部長の土下座（笑） と師弟大喧嘩

その後、小猫は荷物をまとめるとゼノの家へと移ってきた。

そして次の日

現在 ゼノはリアスを地に伏せる。つまり土下座をさせていた。理由は簡単。昨日の小猫の件である。見知らぬ悪魔が自分の領地に勝手に侵入する。管轄者ならばそれくらい把握しておく筈だ。なのにリアスはゼノからの連絡で初めて知った。幾ら何でもおかしすぎるのだった。

「お前 〓この管轄者なんだろう？何で自分の領地に悪魔が侵入した事把握出来なかつたんだよ」

「い…いやあ…それはその…：…すいません私の力不足です…：…」  
リアスはゼノに詰め寄られながらあつさりと自分の不甲斐なさを認めた。その言葉を聞いても未だにゼノは機嫌が治らなかった。

「というかお前…：普段なにしてんだ？街の管轄者なら月一か週一に変な奴が入ってないか町民名簿や見回りとか普通するだろ？なのにごうしてやってなかったんだ？まさかとは思うけど…：お前 ずっと学校や部活動の事ばかりで管理に目を通してねえのか？」  
「うう…：…」

その質問にリアスは何も返せなかった。完全なる凶星である。  
「別に大変っていうのは分かってるけどさ。管理は管理でちゃんとやれよ。勉強と管理が両立できるから〓〓任されてんだろ？」

「はい…」  
「だったらやれよ。しかも今回 自分の眷属狙われたんだぞ？それに ついてどう思ってたんだよ？」

「わ…：悪いと思ってます…：小猫…：本当にごめんなさい…：」  
「あ…：いえ…：」

リアスは小猫に土下座をし謝罪をした。対する小猫はどう反応すればいいのか分からず戸惑っていた。

「因みにもしこんな事がもう一回ありでもしたら…俺の権限でこの領地全部お前から剥奪する。いいな…?」

「はいいい!!」

「分かればよろしい」

ゼノの一喝にリアスは震え叫びながら返事をした。これには皆も流石にリアスをフォローできない。アザゼルも冷や汗 苦笑を浮かべていた。

リアスへの説教を終えたゼノは先程の雰囲気が一気に消失したように表情を緩めるとソファアに座った。

「だ…大丈夫ですか部長…?」

立ち上がりイスに顔をつ突つ伏したりリアスにイツセーは安否を求めた。リアスは顔を見せないまま「大丈夫よ…問題ない…」と繰り返すばかりであった。明らかに問題ありであった。リアスが可哀想に見えるが街の管理者としての業務にミスがあった事に対して変わりはないからしやうがないだろう。アザゼルも冷や汗を流していた。

「まあ無理もねえさ。離れてた俺達でさえ震え上がるほどの威圧をあんな至近距離でされてたんだからよ。意識保ってられるのがおかしいくらいだ」

「それぐらいまで抑えてやったんだ。寧ろ感謝して欲しいよ」

アザゼルの言葉にゼノは朱乃から出されたお茶をすすりながら答えた。お茶を飲み終えるとゼノはソファアから立ち上がり『もう今日は帰る』とだけ言い部屋を出て行った。

「よくお前ら神様と同じ空間にいてバテないよな…」

「そりやいつも一緒にいるからな」

「いや、いくら俺やサーゼクスでもあんなバケモノずつと同じ空間にいたら一週間でぶっ倒れちゃうよ。お前らは本当にすげーよ」

「そうか…?」

イツセーは疑問に思いながらも先程の場面を思い返した。

すると、右腕が光りドライグの声が聞こえた。

『アザゼルの言う通りだ。お前らは本当にすげえ奴らだ』

「お?コイツが赤龍帝の魂か?俺はアザゼルだ。よろしくな?」



アザゼルの簡単な挨拶にドライグは応えた。

「でもよう。どう言うことだ？さっきのは確かに凄かったけどそんなんでもなかったぞ？」

『どうとう感覚までもがイカれたか…まあいい…お前がそう感じ取れたのはライザーの一件からだ』

「焼鳥野郎の時…？」

『その時 お前は銀河神から何かを分けて貰っただろ？』

「ああ…もしかして!？」

イツセーはライザーの時を思い出したと同時に今回の出来事の原因を理解した。

『そう。あの時もらった力が突然目を覚ましたのさ。因みにヴァーリに向かつていった時のお前の魔力は軽く奴を超えていたぞ？』

その言葉に皆は驚きの声を上げた。ゼノの与えられた力はただのカケラにすぎない。だが、それだけでもヴァーリの圧倒的な魔力を上回るのだ。

「銀河神殿から力を分け貰った…ならある程度納得できるな…」

アザゼルはゼノの蹂躞劇を思い出しその神から貰った力となるとあの芸当は可能だと納得した。

「じゃ…じゃあ何で木場とゼノヴィアは……」

イツセーは自分と同じくゼノから力を分け貰った木場とゼノヴィアに疑問を抱いた。すると木場とゼノヴィアはフフフと壊れたように笑い出し背中で泣いていた。

「今回……出番が少なすぎてね……」

「私もだよ……特に襲撃の際なんかセリフ一つもなかったしね…」

「フフフフフフ……」

壁に手をつきながら笑っている二人にイツセーは「すまん！」と言いつつ土下座した。

「そう言えば肝心のゼノ君はどこに行ったんでしょ…」

一方でゼノはというと…

「あく!!!もう悪かったって言ってるじゃねえか師匠!!」

「うるさいぞゼノおおう!!!食いの恨みは恐ろしいんだあああー」

!!!

ビルスと大喧嘩していた。

因みに事の原因はまず、部室を出た後からだ。その後ゼノはウイスに迎えを頼みビルス星へと来て修行としてウイスの杖の中に入ったのだがうっかり中に保存してあったビルスのオヤツを食べてしまったからである。そしてビルスの都合によりウイスは修行を一旦中断し杖から出た空箱の山を見てビルスが激怒し今に至る。かれこれ二時間は続いていた。

因みに二人共ウイスの杖の中で戦闘しておりウイスの杖の中は別次元で気を放出していないと身体に異常が出ると言われている危険空間だ。それでも二人は物ともせず未だにド派手に争っていた。

「くらええ!!!コイツが僕のお口に入れなかったスイーツの分だああああー!!!」

そう言いビルスは銀河一帯を一瞬で消しとばす巨大な太陽を作り上げゼノ目掛けて投げた。

「あく!!!もうめんどくさいなあッ!!!」

対するゼノも両手を天に掲げると超巨大な青い太陽を作り上げた。

「お返しだああ!!」

そう叫びゼノはその気弾を向かってくる巨大な太陽に向かって放った。

そしてその弾と太陽がぶつかった瞬間　ゼノが放った気弾は中に詰め込まれていたエネルギーが一気に放出され太陽と共に大爆発を起こし辺りを巨大な光が包み込んだ。

—————

—————

———

「おやおや…これはまた派手にやってますね〜」

「あの…止めなくてもいいんですか?」

ウイスの横では偶然いた時の界王神もその戦い振りを見ていた。

「まあ、ゼノさんの力量測りには丁度いいでしょう。少し落ちてます

ね…今度ネツチヨリとしごいてあげましょう♪」

「鬼だ…」

—————

—————

↓

エネルギー同士のぶつかり合いが終わり景色が鮮明になってくると両者はまたぶつかり合いを始めた。

「あのスイーツはな！僕が今日のお風呂の後の為にとっておいた奴なんだぞおお!!それをお前はアツサリとおお!!」

「はあ!?あれ届けたの二週間前だぞ?!早く食べよ!ちよつと果物腐つてたからな!?そんな事も分かんねえのかクソ猫が!」

「クソ猫だとおお!!お前!上司である僕に向かってえええ!!」

「俺も同格の神ですよ!!残念でしたく!!!」

「マジでぶつ殺す!!」

既に軽く光の速度を超えている撃ち合いの中、ゼノの放った言葉にビルスは頭にきて更に激しさが増した。今の彼らの戦いはウイスでも止められないだろう。打ち合う内にゼノもビルスも汗が流れそろそろ疲れてきたようだった。二人の拳がぶつかったと同時に一旦気を収めると両者距離を取った。

「はあ…はあ…はあ…マジで許さないぞく…!」

これ程までにスイーツに熱くなるビルスにゼノはもう疲れ自分から折れた。

「あ〜!もう分かった今度新しいスイーツ持ってくるから!」

「うう…:…本当だな?」

「本当だって。それでいいだろ?」

—————

—————

↓

「終わったようですね」

二人の闘いが終了したと見たウイスは杖を出現させると二人を中から出した。あれ程の撃ち合いをしたのだから二人共、出た瞬間に

地に手をついていた。

「はあ…はあ…こんな力を出したのは久し振りだよ…」

「こつちもだよ……」

「僕はもう疲れたよ…戻って寝るとしよう…約束は絶対だからな？」

「はいよ」

そしてビルスは立ち上がると城へと戻っていった。

「では私も。時の界王神さん。ゼノさんの手当てよろしくお願いしますますね？」

「分かりました」

そう言いウイスはビルスの後を追っていった。

—————

—————

——

あれからゼノは呼び出した界王神の瞬間移動によって時の巢へと移動した。

「ではまた。カイカイ」

界王神がいなくなると時の界王神はゼノをベットに座らせ包帯等を取り出した。

「全く……ゼノ君もビルス様もメチャクチャなんだから……」

「…意外と楽しかったからまたやろつかなく？」

ゼノの馬鹿丸出し発言に時の界王神はゲンコツをお見舞いする。

「次ふざけた事いったらタバスコより数倍辛いハバネロ塗るから」

「ごめんなさい……」

時の界王神は薬を出すとゼノの所々の傷口に塗った。

「でも凄いわね…ビルス様と互角に渡り合えるなんて…初めて会った頃とは大違いね」

「ああ。あの時はまだ気の使い方すら知らないお子ちゃまだったからな」

「ほら、手出して」

「ん……」

時の界王神は慣れた手つきでゼノの胴体や手に包帯を巻いていく。

「ま、こんな傷どうって事ないからな」

「ふくん…」

時の界王神はニヤリと笑うと背中に手を広げベチーンと叩いた。するとゼノは悲鳴をあげその場から飛び上がった。

「ほらやっぱり痛いんじゃない!」

「背中はないだろ…」

そして全身に巻き終わるとゼノは戻るため界王神に連絡しようとした。すると時の界王神はゼノを呼び止めた。

「あのさあ…今日だけでいいから…一緒に居てくれない…?」

「え…いやあ…俺も戻らんと姉貴に…」

「…お願い…」

ゼノは時の界王神の目を見た。少し潤んでいる。悲しいのか?はたまた怖いのか?ゼノは疑問に思いながらも今回だけという事で了承する事にした。

「取り敢えず今日はもう疲れた…寝たい…」

「ベッドはこつちよ」

そう言い時の界王神は近くの巨木にある秘密基地のような造りのベッドへと案内した。

「疲れた…」

ゼノは倒れこむようにベッドへ身体を預けた。すると時の界王神もゼノにくつつくようにベッドに横になった。

「……変なことするなよ…?」

「わかつてるから」

ゼノは疑いながらもゆっくりと目を閉じた。すると時の界王神はゼノの背中にすがりつくかのように身を寄せた。彼女の手は少し震えていた。

(怖い…けどねゼノ君…貴方がいるだけでそれが打ち消されるの。不思議な感覚ね…ずっとこのまま一緒にいたい…)

そう思いながら時の界王神もゆっくりと目を閉じた。

二人の頭上では陽に照らされた緑の葉がゆっくりと風で揺れていた。

## 冥界への準備

次の日、ゼノは目を覚ますと時の界王神と別れ界王神に地球へと送ってもらった。そしてそのまま通学し部活の時間となった。そしてその部活の中リアスが突然切り出した。

「今年の夏休みは冥界で過ごすことにするわ」

それを聞いてイツセーは置いていってしまうのかという表情で泣いていたがリアスは違う違うといい説明した。

「毎年のことなの。それに若手悪魔の会合だってあるしね」

「成る程…」

「ゼノ、貴方はどうするの？」

悪魔であるイツセーや墮天使であるアザゼルは会合や顔出しのため参加しなければいけないが、ゼノはどうするべきかリアスは迷っていた。

「どうしよつかなく…」

すると朱乃はゼノに囁くように言った。

「冥界ならめずらしい料理やスイーツが食べられますよ♪」

「行く」

ゼノのいつも変わらない癖にリアスは若干引きながらも分かったと言った。

「じゃあ皆、数日後に出発するから各自準備をしておいて」

皆は返事をすると思散となった。

部室を出て校門まで歩いていると突然朱乃に引き止められた。

「どうした？」

「あの…突然で申し訳ないんですけど…私を…鍛えていただきませんか…？」

「本当に突然だな。なんか目標でもあんのか？」

「はい。レーティングゲームでは勿論…：襲撃の際では皆様の何の役にも立てませんでした…：だから強くなって…この力を…母様や父様から貰ったこの力を皆のために使いたいです」

朱乃は誰にも見られない様に手から魔力を出した。その目からは

真剣　そして覚悟が見受けられる。そして何よりも自らの苦しい過去を乗り越えた精神の強さも伝わってくる。

「ま、いいぞ。お前もみっちり鍛えてやる」

「も…ということは他にも誰かいるのですか？」

「ああ。小猫だ。アイツもアイツで力を使いこなし皆の役に立ちたいんだと」

「成る程。ではリアスやイツセー君達はどうするんですか？」

「取り敢えず自ら言いに来ない奴はやらん。小猫は秘められた潜在能力に興味があつたから誘つた」

「そうなんですか。厳しいんですね」

「これぐらいが普通だ」

—————

—————

↓

帰り道にて

いつもならゼノはぼつち下校だが今回は小猫と朱乃が一緒である。

周りから男子の野次が飛ぶが全く意に介さない。

「そういえば小猫、朱乃。お前らいつから修行始められる？」

「一日で準備を終わらせる予定なので…明後日ぐらいから…」

「私も同じです。ですが冥界でもできますが…」

朱乃の質問にゼノはいんやと言いつつ否定した。

「まずだけど冥界の重力はどんぐらいだ？」

「人間界とあまり変わりません。少し重いだけです」

「なら駄目だ。この数日間に取り敢えずお前の瞬発力とパワーを倍加したイツセーよりも引き上げる。あと朱乃の魔力は最上級とほぼ同じぐらいは引き上げる」

「私達…生きて帰ってこれるかな…」

生命の心配をする小猫を無視しながらゼノは今後の修行を説明した。

「まず1日目は重力修行だ。地球よりも倍の重力がある希少な星に行く。そこで重力に慣れてもらって朱乃は魔力　そしてその器を鍛え

る。小猫はパワーはもちろん魔力や精神力を鍛えてもらう」

「随分ハードですね…」

「そうだ。そんなぐらいやりや丁度いいだろ。冥界ではそうだな…まず小猫は仙術 朱乃は魔力の実践だ」

「わ…分かりました…」

小猫と朱乃は若干恐れながらも承諾した。だが、これで彼女達は数ある『戦車』や『女王』の中で最強の名を冠す事になるかもしれないだろう。

—————

—————

—

朱乃と別れたゼノと小猫はアパートへ帰りドアノブへ手をかけた。するとゼノは何かを思い出した。

「そうだ…昨日姉に何も言わずに留守にしたんだった…」

「その事何ですが寝る時に帰って来たら次の日の朝までお置ききするそうです…」

「うわあ…：：：ティアに言っとくべきだったか…：：：」

ティアとはティアマットの事である。ゼノは覚悟を決めドアを開けた。だがそこには姉の姿はなく代わりにティアマットが出迎えた。

「師匠！お帰りになりましたか！」

「ああ…：：：ティア…：：：姉貴は…？…」

するとティアマットは汗を流しながらも説明した。

「今日は出勤の日らしくて…：：：昨日の事を凄く根に持つてるらしく帰りに飲んでくる…と」

『飲んでくる』その単語にゼノは反応し冷や汗を流した。

実はサリは酒癖が非常に悪く一度酔うと絡みモードと化し手がつけられなくなるのだ。前に一度 ゼノが朱乃と共にあの世へ行き帰還した日に飲んだらしく帰ってきたゼノは何時間も説教されたという。それからゼノは絶対に姉には酒を注がせない事を決めたという。

「取り敢えず帰ってきたら考えるか…：：：うん…：：：それしかない…：：：ない…：：：」



「師匠!? しっかりしてください!」

—————

」

「取り敢えず私は夕飯でも作りますので師匠は…言い訳でも考えててください…」

ティアマットもゼノを見放していた。

「先輩…全身が白いですよ…?」

「気にすんな…取り敢えずアイツが帰ってこないうちに風呂にでも入るか…」

そう言いゼノは浴室へ入っていった。

「学校ではどうだったのだ?」

「普通でしたよ…」

「そうか」

その時 玄関のドアが開かれた。

「ただいま」

『ギクッ!』

サリの声を聞いた瞬間 二人は肌を震わせた。だがゼノにはその声は聞こえる事は無かった。

「お…おかえりなさいませ…」

「あれ? ゼノは…?」

「……………」

二人はすぐさま顔を逸らし小猫は筋トレ ティアマットは夕食の支度を再開した。

「二人ともくゼノは何処かな?」

「あ…あちらです……………」

二人は震えながら浴室を指差した。

「♪」

するとサリは鼻歌を歌いながら浴室へと向かっていった。

—————

—————

浴室ではゼノが頭を洗っていた。

「さて、そろそろ洗い流すか」

そう言いゼノはシャワーを出し頭へとかけた。頭へと付着したシャンプーが次々と流れ落ち排水溝へと流れていった。シャンプーを綺麗に流し終えシャワーを止めた時

「お帰り♪」

「ヒイツ…!?!」

今 1 番会いたくない人が背後から抱きついてきた。

「さて…昨日は何で連絡もしないで帰ってこなかったのかな…?!」

その質問と共に抱きつく力が増すとゼノはアタフタしながら答えた。

「あーいやあー！昨日はちよつと師匠から呼び出しがあつてその後 界王神に今日だけ泊まつてくといいて言われたからそれでー！」

「それで…?!」

「いやあオーケーして泊まつた…」

「そう」

するとサリはゆっくりとゼノから離れた。また地獄の説教だ。そう思った時 頭に手が置かれた。

「大変だったんだね。お疲れ様」

そう言いサリはゼノの頭を撫でた。いつもとは違う反応にゼノは戸惑い頬を赤くした。

「ただ心配させたのは事実だから今日は嫌がらないで一緒に入る?」

「ん…」

前の様な展開にはならず姉が理解してくれた事にゼノは安心するとサリの背中を流した。

湯船にはいつもの様にサリがゼノを抱く感じに入っていた。

そして無言が続く事 10 分。そろそろ上がろうとゼノは湯船から出ようとした。だが、姉のホールドが解けなかった。

いつもなら出る時は必ず解ける。なのに何故か解けない。

「あ…姉貴…そろそろはなし……て!?!」

ゼノは突然言葉を断ち口を開けたまま止まってしまった。サリの頬がいつもよりも赤く染まっていたからだ。

「まさか…今頃酔いが…!？」

「ムフフフ…!!」

「ひやあ!？」

するとサリはニヤリと笑うとゼノを抱く手の力を強めた。因みにゼノがサリの正面を見ている状態なので結果顔と顔が近づく形となった。

「ゼノったら顔真っ赤つか〜♪」

「お前の所為だろ！早く離せ！」

「い〜や〜♪」

ゼノに言われてもサリは離すことはなかった。するとサリはゼノの頭を両手で抑えた。

「え………？」

突然顔を固定されたゼノは訳が分からなくなっていた。

「ゼノ……キス……しよ……？」

「はあ!? なな! なに言ってるんだよ!? するわけねえだろ！」

突然の爆弾発言　ゼノは顔を真っ赤にさせるとすぐに拒否した。するとサリはゆっくりと体を動かすとゼノを浴槽のお湯に面していない場所へ体で押し付けた。

「ゼノに拒否権はないよ♪」

「ひい!？」

サラは更に身体を密着させた。豊満な胸がゼノの小さな上半身に押し当てられ柔らかな感触を伝わらせゼノの抗力をどんどん奪っていった。

そのうえ顔は手で押さえつけられ逃げようがない。

「ま……待って……」

「待たない」

そして顔が近づきゆっくりと二人の唇が重なり合った。

「んんん……は……な………」

「離さない」

そう言いサリは更に詰め寄りゼノの口の中に自分の舌を入れた。それはゼノの舌に絡み性的な感触を伝えてきた。

「んんん……!!」

ゼノは必死に抵抗しようとしたが次々に伝わってくる感触に耐えきれず何も出来なかった。

「ん……ん……♡」

「……!!」

サリは何度も自分の舌を絡ませゼノから意識を奪っていった。その絡みは重ねるごとに強くなつていった。

しばらくして

「ぶはっ……♡あれ?ゼノ?」

唇を離れたサリはゼノを見るとゼノは目を回しながら気を失っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

あれから数十分後にゼノは目覚め 今は夕食を取っていた。サリの酔いが覚めた事で今は空気が軽くなっていた。

「サリさん。 師匠ずっとあのままですけど何かあったんですか?」

「ふふ♪ゼノのファーストキス奪っちゃった♡」

「え!?!サラツと!?!」

ティアマツトは浴室での出来事を聞くとサリは顔を赤くしながら上機嫌で話していた。そして小猫は虚ろな目を浮かべながら布団の上に倒れるゼノを心配していた。

「先輩……大丈夫ですか……?」

「これが大丈夫に見えるか……?」

「いえ全く」

ちなみに小猫は大好きであるゼノのファーストキスを奪われた事

で内心少しムツとしていた。

—————

翌々日

ゼノはアパートの近くにある空き地へと来ていた。ティアアマットとジャージ姿の小猫も同伴である。3人はとある人物を待っていた。すると目の前に転移門が現れ巫女服を纏った朱乃が現れた。

「よし、これで全員集まったな。俺に掴まれ」

そう言われた彼女達はゼノの肩を掴んだ。

「行くぞ」

そして4人は地球とは別の星へと移動した。

初めて来る地球とは別の星。朱乃と小猫は周りの景色を見渡していた。

「さて、始めるか」

今、冥界合宿前の強化訓練が始まろうとしていた。

## 進化する女王と戦車

修行をするため重力が高い星へと来たゼノはまず朱乃達へ慣れさせる為にまずパワー型の小猫には腕立て 魔力重視の朱乃には滝行を行なっていた。

小猫 side

「ふう……16……17……18……」

まず第一の課題としては地球で出来ることをこの星でも出来るようにする。小猫は現在 筋肉の基本となる腕立て伏せや背筋等の筋トレを行なっていた。因みに内容は腕立て↓腹筋↓背筋↓バービー↓スクワットを5セットからの1000mジョグそしてダッシュである。陸上選手のアップ方法とほぼ変わらないがこれだけでも十分力がつく。そして最後はゼノとの組手である。因みに監督はゼノであり、朱乃の方は魔力に詳しいティアマットに任せていた。

「……39……40……!」

ノルマ回数に到達すると小猫はその場で仰向けに倒れた。

「疲れました……」

「お疲れ」

5セットを終えた小猫の身体は酷くやせ細っており顔色も悪くなっていった。それを察したのかゼノは何処から汲んできたのか分からない透き通った水を頭にかけた。

「ぐぼぼぼ……びずぼぼういいです（水はもういいです）……」

すると小猫の身体から汗の放出が止まると同時に一気に疲れが吹き飛んだ。

「な……何ですかこの水……飲んだ瞬間……水の中にいる感覚に見舞われました……」

「重力が高い分 果物や水が進化してるんだよ。じゃあ次行くぞ」

そう言い回復した小猫をゼノは立たせて次のメニューへと移行した。

「じゃあ一キロジョグ始め」

そう言われた小猫は頬を叩くとその場からゆっくりと足を動かした。

た。

「ふう…ふう…ふう…」

小猫は息をするリズムを掴みながら集中した。考えることはただ一つ『走りきる』少しでも雑念が入りバランスを崩しさえすればすぐに体勢も崩れてしまうそんな状態であった。

その様子をゼノは上空から見ている。

(その調子だ。どんどん集中力を高める)

するとゼノはその場から飛び去ると滝壺の方へと向かった。

—————

—————

—————

滝壺では 現在朱乃が修行を行っていた。

行うことは魔力の長期維持 かつ 増量そして強化

その為 今は身体全身に魔力を体の奥底から出しバリアを張りながら滝行を行っていた。

因みに少しでも集中を切らすと一瞬で水底にドボンと落とされる。そうならない為朱乃は今 『魔力を出す』事だけを考えていた。

だが来て1日目の朱乃では2〜3分が限界である。

休憩のため滝から出た朱乃はティアマツトから食べ物を与えられた。

「どうだ？キツイだろう」

「はい…まるで拳に殴られているような感覚です…」

「それが普通の水と思うまでやらなければ駄目だ。そしてバリア維持も最低では10分は持たせた方がいい。レーティングゲームでも魔力の尽きは敗因の原因にもなるだろう？」

「そうですね。それに敵に見つからなかったとしても回復には時間を掛けてしまいますしその時間の内に仲間がやられてしまう可能性もあります」

「そうだ。魔力を高めたり回復速度を上げればそれを防ぐ事ができる。女王には不可欠だな」

すると

「調子はどうか？」

上空から声が聞こえ見るとゼノがこちらに向かって降りてきた。すると朱乃は今の段階を伝えた。

「成る程。まあ初心者はそんなもんだろ。取り敢えず今日の目標は5分だ。少し休んでからまた始めな」

そう言いゼノは飛び去っていった。

「そういう事だ。10分くらい休むといい」

「はい」

—————

—————

—————

「ぜえ…はあ…ぜえ…はあ…ぜえ…はあ…」

一方で小猫の方は無事に1000mを走り切っていた。

「お疲れ。どうだ？慣れてきたか？」

その問いに対し小猫は笑いながら「はい」と答えた。

「走っていくうちに重たい何かが抜け落ちるような感覚でした…！」

「それでいい。あとはダツシユ5本と俺との組手だけだ」

「はい！」

—————

朱乃の方もだんだんと進んでいた。

(集中…集中…)

朱乃は坐禅を組みながら流れ落ちる滝の流れに耐えていた。

「凄いな。あつという間に5分耐えるとは…」

ティアマツトは朱乃の成長ぶりに驚いていた。

あれから修行を再開すると朱乃は人が変わったかのように瞬時に滝行に5分耐える事ができたのだ。

—————

—————

—————

「よし小猫。全力でこい」

「はい！」



あれから小猫はダッシュを終え少しの休憩を取った。そして本日の最終メニューであるゼノとの組手が始まった。因みに朱乃も一緒である。

小猫はまず足を踏み込みゼノに向かって右ストレートを打ち込んだ。だがそれはアツサリと受け止められる。

だが、それは予測していたらしく小猫はすぐさま左手を動かしゼノの腹を狙う。するとゼノはもう片方の手で腹に迫ってくる腕を掴んだ。

結果、小猫は両腕を塞がれ、為すすべもないと思いきや、地面を一蹴りした直後にその体勢からゼノの身体へと強烈な両足蹴りを放った。

「うぐ!?!」

その蹴りは見事に腹に直撃し、ゼノの握力が弱まると小猫はすぐに手を離し回転しながら着地した。

「へえ。やるな」

ゼノは小猫の身体能力の成長に賞賛するが、小猫は答えず、すぐさま構え直した。

「いきます…!」

「うぐ」

その一言と共に小猫は駆け出しその場から跳躍すると空中で体勢を変え水平方向からの蹴りつまりボレーキックを放った。それをゼノは腕で防御すると小猫はすぐさま離れると同時にまた向かってきた。

「セイツー!」

今度はロウキックを繰り出した。だが、その蹴りは跳ぶ形で避けられる。

「とらえました」

その時 状態が浮いているゼノに対し小猫は即座にロウキックを繰り出した脚をすぐさま地面に戻すと手から青い玉を生成し、ゼノ目掛けて放った。

「お……？」

ドオンッ！

それはゼノに見事に当たり、ゼノの身体は爆風に包まれる。

「やるな。なら……っちも少しいくぞ？」

「!？」

突然 爆風が晴れ、無傷のまま現れたゼノは状態を立て直し着地すると即座に小猫の前に移動　そして額にデコピンを食らわす。

「にや!？」

「それぞれ」

ゼノは次々に小猫の右腕や左腕そして両足へとデコピンを放ち追いつめた。

「く……」

小猫は何とか後ろへ飛び体制を保つと残りの力を注ぎ回し蹴りを仕掛ける。

「ぜいやッ！」

「ん？」

その回し蹴りは見事ゼノの顔面に当たった。

「いい蹴りだ。今日はまあ……までだな」

そう言うとき小猫の脚をどかす。

「どうでしたか……？」

「重力に縛られてるのに結構動けてたな。いい調子だ」

「そうですか」

小猫はふふと笑うと戻っていき今度は朱乃が前に出た。

「ほんじゃ、次は朱乃だ」

「ハイ！」

呼ばれた朱乃は前に出るとすぐさま魔力をだす。

「行きます！雷光よ！」

すると空に魔法陣が現れ雷に墮天使特有の光が混ざり凄まじい閃光の稲妻が落ちてきた。

「よっ」

それをゼノは横にステップする形で避ける。だがそれだけでは終わらない。その稲妻は地面に落ちると同時に周りに感電した。

「おお!？」

流石に予測していなかったのかゼノは避けようとするも、範囲が広すぎた為、モロに受け感電し電気を打ち込まれた。

すると今度は足元に魔法陣が現れそこから上へ伝うように雷光が現れた。

それをゼノは痺れながらも間一髪で避ける。だがその攻撃は止まらず脚が後ずさる内に次々と現れた。

「いい成長ぶりだな。こっちもそろそろ行くぞ?」

そう言うときゼノは避けるのをやめ空へと飛び立つ。そして手を出すとき何十発もの小さな気弾を朱乃に向けて放った。

「そろそろそろそろ!」

「くー!」

朱乃は咄嗟に魔力のバリアを張り気弾を防いだ。放った気弾は次々に炸裂し土煙を巻き上げた。

しばらくして土煙が止みあたりの景色が鮮明になってくるとそこにはゼノの姿は無かった。

「ツーン!」

「ドン」

「!」

気づけば後ろに回り込まれており背中に指を突きつけられていた。

「ま…参りましたわ…」

「よし。これにて今日は終いだな」

そう言うときゼノは掴まれと言い皆と共に地球へと戻った。

「—————」

地球へと着いた瞬間 小猫と朱乃は今まで感じたことがない感覚に見舞われ小猫はピョンピョンと跳ねた。

「凄いです…風になった気分です…」

「そりゃ重力が違うからな。明日は今日よりもムズくなるからしつかり休んどけよ」

「はい」

小猫が家に戻り、自分も戻ろうとした時、朱乃がゼノを呼び止めた。

「あの……私も……ゼノ君の家に……一緒にさせたいだけませんか……？」

「は……」

いきなりの要求にゼノは戸惑いを見せながらも拒否を選択する。

「ダメにきまつて……小猫ちゃんはよくて……私はダメなのですか……？」

「う……」

「私は……ゼノ君の普段の生活も参考に強くなりたいたいと思って……」

そう言いながら朱乃はぐんぐんと顔を迫らせてくる。若干ながら涙目になっていた。

こういう手口にゼノは弱い。

「……いいよ……」

「く!!」

了承の言葉を聞いた瞬間、朱乃はパアと満面な笑みを浮かべ、鼻歌を歌いながら魔法陣で帰っていった。すると小猫が袖を引いてきた。

「どした？」

「家……大丈夫なんですか？」

「近々マイホームを建てようと思ってるから心配いらん」

「ですが……そのお金とかあるんですか？」

「軽く数十億ぐらい」

「ひよえく……」

## マイホームそして不穩の幕開け

### 2日目の朝

とある空き地の前に大量のクレーン等が集まっていた。そしてそれを見守る一つの影が。

「ぎゅつとこちら辺か」

ゼノは工事の図面を見ながら呟いていた。目には大量の隈があり徹夜していたことが分かる。

「ここでもいいですかい?」

「ああ」

話している相手は普通の大工さん…ではなく、地球よりも工業文明が発達している遠方の惑星『ダストロイ』の大手建築会社の社員である。姿は地球人とあまり変わらないがそのかわり体格がたくましく背丈は2メートルを越していた。

「悪いな。遠い星からはるばる来てもらって」

「何言ってるんですか水くさい。銀河神様のお陰で俺達は安全に生活できてるんですから安いモンですよ」

そう言い親方らしき人物は腕を組みながら言った。

「んで、外見はこれでいいんですかい?」

「こんなもんで。あまりにも派手すぎると流石に目立つから」

「分かりやした。よしやー!始めるぞー!!」

『おおおー!!!』

親方の掛け声と共に建築が始まった。

因みに建てる場所は…

「ふわあ…何かうるさいですね…つてえええ!?!」

今住んでるアパートより左程遠くない場所である。その距離わずか500m。普通の目では見えないが大きめのダンプやシヨベルカー等でその様子が確認できる。

通常よりも騒々しい工事の音で目を覚ました小猫は目を飛び出しながら驚いた。

「建てるのは聞いてましたけどいくらなんでも近すぎるでしょ…」

あれから数時間 遂に念願のマイホームが出来上がる。

「できやしたあー!!!」

「お?できたか」

「はや!」

親方の知らせに小猫は目を飛び出し驚いた。

「じゃあ早速拝見つと」

「これは見事だ…」  
「でしょ?」

目の前に建っていたのはまさしく豪邸であった。コンクリートの上に敷かれた大きな建物それはまるで一つの施設と同等かそれ以上の大きさを誇り複雑な屋根の形が特徴的であった。

「一応 結界も仕組んでおきやした。強度はだいたい一つの国滅びるくらいのエネルギー弾1発くらいですかね」

「じゃあ師匠かウイスさんが来たらソツコーぶっ壊れるな。取り敢えずいくら?」

「えつとジャスト10億です」

「ほい」

ゼノはポンと手渡しで札束を渡すと親方は唾をつけながら確認し「たしかに受け取りやしたぜ」と言い仲間と共に故郷の星へと帰っていった。

「よし、引っ越すか」

「あ……はい…」

それからゼノ達は引っ越し荷物を全て移した。そして驚いた事に隣人の『ミルタン』も引っ越したらしくその場所は何故かゼノの豪邸のお隣にあるアパートである。

――

「それぞれ。ちゃんと避けれてるか？」

引越しが済むとすぐ修行となり現在は深い森の中で鬼ごっこをしていた。ルールは簡単。上空からのエネルギー弾を避ける事を15分続ける。しかもこの森は完全なる樹海で上空からでは中の様子が確認できないほど木々が生い茂っている為、逃げる側は気配だけで避けなくてはならない。

「当たったらただじゃ済まない…全力で避けないと死んじゃう…けど成長した感知能力を試すには丁度いい…」

そう言い小猫は汗を垂らしながらも次々と降って来る気弾をかわしていた。

「(現れる直前…僅かながらに殺気が感じますわ…この感覚を掴むことが大切ですな…)」

一方で朱乃は小猫と同じ無口となりながら無駄な事は考えず神経を全て周りの背景そして感覚へと集中させてコツを掴んでいた。

「師匠！私の方だけなんか気弾の量がエゲツないですッ!!!」

そう言いながらティアマツトは朱乃達よりも多い気弾の雨の中を走っていた。

15分後

『疲れました……』

あれから3人は見事に耐え抜き今は休憩の時間となっていた。

「お疲れ様。今日はこんなもんか」

そう言い終了を知らせる。すると3人は終わったー!!という表情を浮かべ地面に手をついた。

「ここまでキツイのは初めてですわ…」

ゼノはその場に座る3人へと惑星名物である果物を差し出した。

「ほい。食べな」

『いただきますー!』

よほどお腹が空いていたのか3人はすぐさまかぶりついた。

「お…美味しいですー!」

「何か涙がでてきてしまいましたわ…」

小猫と朱乃は疲れた身体に染み渡ってくる果物の果肉や果汁の美味さに感動していた。

その時

ドンツ  
!!!!!!

『!?』

その場に巨大な何かが飛来した。その衝撃により小猫達は500メートルもの距離まで吹き飛ばされた。するとゼノは察知していたかのように目を鋭くさせるとその場を睨んだ。

「ようやく姿を現したな」

すると突然砂嵐が吹き飛ばされ、姿が露わとなる。

「ほう？随分と強い気かと思っただけの子供と女か」

そこにいたのは青いローブに身をつつみ、身体が子供、言うなればほぼゼノと同じくらい小柄な少年が立っていた。

吹き飛ばされた小猫と朱乃そしてティアマットは磨き上げられた精神そして感知能力によってこの異形の者が危険である事を読み取った。

「朱乃さん…」

「ええ分かっています…この男の子…確実にサーゼクス様達よりも強いです…」

「ああ…魔力量もしかり…二天龍を軽く超えている…」

そう言い3人は目の前にいる相手が神クラスとほぼ同等だということを知る。対するゼノも気を解放して臨戦態勢を取る。

「お前らは下がってろ。アイツはちよつとヤバい」

「…！…分かりました」

小猫がそう言うという他の2人も後ろに行き距離を取る。3人が離れた事を確認するとゼノはゆっくりとその少年へと近づく。

「ほう？俺を前にして立っていられるか。貴様…ただのガキではない



な」

「デメエもガキだろ？元暗黒魔界軍　メチカブラの側近『魔神サルサ』」

「俺の名前を知っているとは…何者だ…？」

するとゼノは相手の目の前に立ち止まると口を開いた。

「北と南の銀河担当の神　黒崎ゼノ」

「宇宙の神か。面白い…！」

その瞬間　相手の手が消えた。

「さすがは宇宙の神だ。雑魚の集まりである地球の神とは大違いだ」

「こんな攻撃ぐらい誰でも防げるんだよ」

見ると相手の消えた拳がゼノの目の前に迫っておりその拳をゼノは片手で受け止めていた。

するとサルサの目が赤く染まるとまたもや拳が消えた。

「いくぞう？」

それと同時にゼノの双方の拳も消えた。

その瞬間　空が割れた。激しい大気と大気がぶつかり合い、その場の空気だけでなく、空間を歪ませていた。

空気中に次々と拳と拳が混ざる音が響きわたりその場を揺らす。

遠方から見えていた小猫達は何が起こったのか分からなかった。

「朱乃先輩…見えますか…？」

「いえまったく…」

成長度が著しく高い朱乃でも今の戦闘を見ることが困難だった。ただこれだけは言える。あのサルサという少年は今まで闘ってきた相手よりもダントツで強いという事。

そしてそれと対峙しているゼノも普段より少し力を出している事を悟った。

その時

ドオンッ!

2人の場所が突然光つたと同時に天に向かって輝く極太い柱が現れた。

それと同時に朱乃達に強烈な風圧が向かってきた。

「……これは……!?!」

朱乃達は風圧を地面にへばりつく形で耐えていた。少し経つと風圧が止み辺りが静かになった。

「何が起こったのだ……」

「取り敢えず行ってみましょう!」

3人はすぐさまその場所へと向かっていった。

一方で謎の爆発が起きた場所では巨大なクレーターが出来上がっており、その中心ではゼノが上空に浮いているサルサを見上げていた。

「今のは危なかった。掠っただけで腕がこんな事になってしまったよ」

そう言いサルサは手を出す。見ると左腕が消失しており、切れ目から血が溢れていた。

「そんなもんお前らにとっては擦り傷みたいなものだろ? どうせ数秒後には再生……したな」

ゼノが話し終わろうとした時サルサの左腕の付け根から骨が出る。同時に筋肉が次々と掲載され元の腕へと戻った。

「さて、今日はもう撤退させてもらうよ。じゃあまた会おう銀河神。戦争の時に」

そう言うときサルサの背後に黒い穴が現れ彼はその中へと消えて行った。

「……………これで確信したな……『暗黒魔界』は復活した」

その後、走ってきた朱乃達を地球へ戻すと同時にゼノは時の巢へとすぐさま向かっていった。

## 冥界へ

時の巢へと着いたゼノはすぐさま魔神サルサが姿を現した事を伝える。時の界王神は一瞬驚くもすぐさま持ち直した。

「本格的に攻めてくるのは時間の問題ね…それに場所も特定できないし…手の打ちようがないわ…」

時の界王神は顔をしかめつらせどうするべきか考える。

「やばい時は悔しいけどヒット達を呼ぶしかないな…。まあいつか。そろそろ俺は行くよ」

「うん。気をつけてね」

ゼノは時の界王神と別れると地球へと戻っていった。因みにゼノは短期間の間に界王神の『瞬間移動』を会得したようである。地球へと戻れた。

—————

次の日の朝

「じゃあ行ってくる」

「お土産たくさん買ってきます…」

「楽しみにしていてください」

「行ってらっしゃい♪」

「行ってらっしゃいです！」

ゼノと小猫と朱乃はサリとティアマットに手を振ると家を後にし集合場所である駅へと向かっていった。

—————

そして駅に着いたゼノ達はやがてリアス達やアザゼルとも合流し全員揃ったところでリアスが懐から一枚のカードキーを取り出しエレベーターに通した。

「なんだそれ？」

「冥界行きの特急がある階へ行くためのカードよ。場所は近いのだけれどこれが無ければ普通の人は一生辿り着けないわ」

「成る程。まあ既に変な気配が漂ってたから粗方気づいてたけど…」

「ええ!？」

するとエレベーターが降下し冥界行きの特急駅へと到着した。

「さ、皆 乗って」

そして皆は冥界行き 特急へと乗った。

—————

数分後

特急は歪んだ空間の中を疾走し冥界へと向かっていった。リアスやアーシアはイツセーと共に座っておりいつも通りイツセーの取り合いをしていた。木場は木場でそのいつもの様子を見ながら笑っていた。ギヤスパーはイツセーから拝借したゲームをやっていた。また少し離れた所では朱乃と小猫が少々ウトウトと眠ろうとしているゼノの両サイドに陣取っており寄り寄っていた。

「朱乃先輩…そろそろ離れてください…」

「うふふ。嫌ですわ♪」

すると薄めになりかけていたゼノの目が突然開き立ち上がった。

「！」

「どうしました？」

「……トイレどこ？」

唐突のお手洗い宣言に朱乃は微笑みながら前の車両にある事を教えた。

「ちよつといつてくる」

そう言いゼノは前の車両へと向かっていった。

ゼノがいなくなると朱乃はいつも無表情な筈の小猫が最近 表情

豊かになっている事を不思議に思い質問した。

「小猫ちゃん。何かありましたか？」

「え？なにかって…」

「いつもと違って喜怒哀楽の表情がハッキリと現れるようになってると思います。まるで何か吹っ切れたような」

その質問に小猫は笑顔で頷いた。

「はい。先輩が導いてくれたお陰で自分を受け入れる事が出来ました。なので私は恐れず仙術を使います」

「そうですね。私も同じです。ゼノ君が母様に会わせていただいたお

陰で私も自分の墮天使の力を受け入れる事が出来ました。小猫ちゃん」

「はい?」

「私と貴方は同じ境遇の持ち主です…これからもお互いに頑張りましょう」

「はい!」

「ですが正妻の座は譲りませんわ」

「ニャ!?!」

朱乃のいやらしいウインクに小猫は腑抜けた声で驚く。

—————

「ふうスツキリした…」

トイレを済ましたゼノは入り口から出て元の席へと向かった。すると

「ぎ…銀河神さま…少しお時間いただいてもよろしいでしょうか?」

「何だ?」

皆から離れた場所で座っていたゼノヴィアが突然ゼノを呼び止めた。その顔はやや赤く染まっており何やら悩んでいるかのようだった。

「あ…あの…いえ…なんでもありません…」

「そうか」

そう言いうとゼノは席へと戻った。

ゼノが戻るとアーシアとリアスがイツセーの取り合いをしており騒がしい中に入るのは苦手なのでアザゼルの近くへと座った。

「おや? 銀河神殿。元の席に戻らなくていいのですか?」

「騒がしいからやだよ。それより、会議とか重要な場合意外ではダメ口でいいよ。師匠と違って俺はあまり崇められるのは嫌いなんだよ。それに一応俺も生徒だし」

「では遠慮なく…率直に聞きたいのだが…お前から見たらイツセー達はどれぐらい進化していると思う?」

その質問にゼノは持ってきたバッグの中から麦茶を取り出し飲み

ながら答える。

「イツセーはまずバランスなんかを使わなければあんままだな。筋肉も一般人並みといえる。その上 戦い方もシンプルすぎる。小猫の教えが身体に染み付いてないと言えるな。進んでるかいらないかと言えば進んでない」

「厳しいな…」

「他はというとりアスやアーシアは魔力が重点的。木場は結構前に手合わせして以来何もしてないから分からん。ゼノヴィアも同じくだな。なぜそんな事を聞く?」

「実は冥界に行くと同時に奴らを鍛えてやろうと思ってな。イツセーはバランスブレイカーに至らせ、リアスは統率力、アーシアは治癒魔力の効率化 などなどだ。アイツらの力はちよつと工夫を入れてやるだけでも格段と強化されるからな」

「へえ。まあ好きにやってろ。俺は俺でぶらぶらするから」

「そうか。その前に一つ聞きたいんだが……」

「なんだ?」

アザゼルはジト目で気づかれなないように朱乃と小猫を指差す。

「あの二人…魔力が爆発的に上昇してるんだが…何かあったのか?」

「簡単だよ。鍛えてやったんだ」

「やはりな」

ゼノの真顔の答えにアザゼルは納得した。ゼノからは大したことはないがアザゼルにとっては大した事であり、アザゼル目線だと朱乃から発せられる魔力量がほぼ最上級そして小猫が最上級の一步手前レベルにまで上がっているとの事だった。

「アイツらは目的意識がハッキリしてるからな。ちよびつとだけ手を貸してやった」

「ちよびつとであれか…だったらイツセーも鍛えてやった方がいいんじゃないかねえか?」

その言葉にゼノはあっさり拒否する。

「目的意識がハッキリしてない奴を強くしてどうすんだよ。それにアイツの場合 女に囲まれたいって願望だろ?そんな自己中心的な考

えを持つ奴を強くするなんて本当に嫌だ。万が一それが理由で向こうからお願ひされたら確実に殴り飛ばしてるよ」

顔の影を強くしながら理由を語るゼノにアザゼルは「恐ろしい…:」という表情を浮かべた。

「だがよ。ハーレムでもいいじゃねえか。男の夢だぜ?」

「知るか。そんなくだらない事は自分の力で叶えろの話だ」

アザゼルの言葉も一理ある。男の欲求として多くの女を側におきたいというのは夢でもあるといえる。けれどもゼノにはその欲求は通じない。

すると

「お二人とも。お話の途中で申し訳ありませんが切符を確認してもよろしいですか?」

「おっと。すまんすまん」

髭を生やしスーツを着こなした男性が現れた。彼の名前は『メイナード』といい。この冥界行き特急の車掌である。

アザゼルは懐から何かライセンスらしきものを取り出すと車掌に渡した。ゼノも事前にリアスから貰った切符を見せる。

「では失礼します。まもなく次元の狭間を突破しますので下車のご用意を」

そう言うとメイナードは前の車両へと行った。

「もうすぐグレモリー領に着くだろう。だが、俺とお前はまだ降りん。俺は墮天使領に、お前は入国審査を受けねえといけないからな」

「ツ…めんどくさいさな…受けなきゃいけないか」

その後特急は次元の狭間を通過し抜けると冥界へと辿り着き、グレモリー領へと到着した。

『お帰りなさいませ。リアスお嬢様』

降りたと同時に目の前には100人程のメイドや執事がお出迎えをしていた。

「ひ…人がいっぱいいますう?!」

あまりの大人数に人見知りかつ引きこもりのギヤスパーは直視できずに小猫の後ろに隠れた。

その後イツセー達が降りると列車は動き出しゼノと皆は別れ馬車へ乗車しリアスの屋敷を目指した。

その様子を見送る中、ゼノの頭に何かが通る。

「ん…？なんだこのデケエ気は？しかも七つもある」

列車の中、ゼノは冥界の地平線の彼方へ目を向けそこ一箇所から伝わってくる巨大な7種類の気を感じ取った。

「まあいつか」

別に気にするほどでもないと思えば袋から出したお菓子を頬張り始めた。

「……………」

皆と別れたゼノは入国審査を受けるためにアザゼルに案内されていた。

「すげえな。冥界ってこんな賑やかだったのか」

「ああ。冥界は他の神話系統の奴らが集まる場でもあるからな。結構広いぞ」

周りの景色を見渡しながら話している内に受付口に着いた。

「俺は先に出口で待ってるからな。神様専用の窓口は恐らく一番向こうにあると思うぞ」

「分かったよ」

ゼノはアザゼルと別れると言われた通りに並ぶ窓口の中、一番端にある窓口へと向かった。見てみると他の窓口よりも入り口が巨大かつ豪華な仕様となっており如何にも一味違う感じを出していた。

「すいません。受付お願いできますか？」

「はい。かしこまりました。ではこちらへ必要事項をご記入ください」

受付嬢から渡された紙に直筆で記入し終え提出した。したと同時に受付嬢の顔が凄い事になったのは分かるだろう。そしてその後、簡単な持ち物検査等で入国審査は終わった。出口を通り冥界の通りへと出てゼノはアザゼルを探した。

すると



「どうしました?」

突然声をかけられ 振り向くと銀髪の長髪でスーツを着たキャリアウーマンの様な女性が立っていた。その女性は中腰になり話しかけてきた。

「あの…さつきからキョロキョロしてますが…親御さんとはぐれてしまったのですか?」

恐らくこの女性はゼノを迷子だと思い込んでいるようだ。まあそれもそうだ。ゼノの身長は小学六年とほぼ変わらない高さなのだから。一方でゼノは首を横に振る

「迷子じゃない。ただ人を探しているだけだ」  
すると

「おい。ここにいたか。探したぞ」

振り向くと手を上げながらこちらへ向かってくるアザゼルの姿があった。

「ようやく見つけたよ…たく。じゃあ失礼」

ゼノはその女性から離れるとアザゼルの方へと歩いて行った。その瞬間に女性の顔が驚きに満ち溢れた。

「おおこんなところにいたのか。ほれ、行くぞ。ん?おぬし何かあったのか?」

一味違う衣装を纏った老人が現れその女性へと話しかける。その老人は女性の向いている方向へ目をやる。

「はは。アザゼルか。久しいの。お前は会うのは初めてか?なら驚くのも無理ないのう」

「い…いえ…総督殿の方ではなくて…隣にいる…」  
「ん?」

老人は女性が指をさしたアザゼルの隣にいるゼノへ指をさした。

「ハッハッハッ! 奴めようやく子供を作りおったか! めでたいめでたい。後で出産祝いを送らんな! ほれ、行くぞ」

老人はゼノをアザゼルの子供だと勘違いをし高笑いをすると女性の肩をたたき女性と共にこの場を去った。

—————

「んで？これからどうするんだ？」

人混みの中を歩く中ゼノは隣にいるアザゼルにこれからの予定を聞いた。初めて来た場所なら流石に自由に動くのは避けた方がいいと考えたゼノはアザゼルの予定を元に動こうと思っっているのだ。

「取り敢えず食事だ。サーゼクスが冥界でも屈指の高級店を予約してくれたそうだからな。その後 俺は墮天使領へ戻るがお前はどうか？」

「うーん：俺もホテルにするよ。神と知れてるなら、リアスの屋敷だと気を使われるからな」

ゼノや皆は事前にリアスから自分の実家で泊まるという事を聞かされていたのだが考え直してみるとゼノは神なので向こうにも迷惑が掛かると思い急遽 予定を変更した。

「まあその方がいいかもな。だったらソーナがいるシトリー系列のホテルをすすめるぞ。あそこなら恐らく大丈夫だろう」

「シトリー…って確か生徒会長の実家だっけか？」

そう言いゼノの頭の中に眼鏡をカチャつと整えるソーナの姿が浮かんだ。

「そうだな。因みに他の生徒会もそのホテルに泊まるそうだし成る程。それならいいか」

そう話していると目的地である店へと着いた。外見はやはり高級なだけあって豪華であり 明らかに予約制という感じが漂っていた。

「ここか」

「そうだ。入るぞ」

ベルの音と共に中へ入ると燕尾服を着用したオーナーらしき男性が立っていた。

「お待ちしておりました。総督殿 銀河神殿」

「サーゼクスとセラフオールは来てるか？」

「はい。展望席でお待ちです。どうぞこちらへ」

その男性は2人を展望席へと案内した。

—————

オーナーに案内された展望席は入り口から2フロア上がった場所

にある屋上にあつた。

広い場所に複数のテーブルが設置され　そこから冥界の空や街の風景を眺める事ができていた。

すると真ん中の席にサーゼクスとセラフオールが向かい合うように座っていた。

「よう。会談の時以来だな。サーゼクスとセラフオール」

「お久しぶりでございます…：銀河神殿…」

軽く会釈したゼノはサーゼクスの隣へアザゼルはセラフオールの隣へと座った。因みにテーブルが異常に大きく円形で中華風の雰囲気漂わせていた。

オーナーは頭を下げ戻っていくと展望席には4人だけとなった。

するとサーゼクスとセラフオールはゼノに対して頭を下げた。

「何故　頭を下げる？」

ゼノの疑問にサーゼクスは理由を述べた。

「前回の会談の際…：私たちの同族が貴方方　神々への無礼を働いた事に関して謝罪させていただきましたのです…」

「本当に申し訳ございませんでした…：血筋ではありませんが…：同じレヴィアタンの名を冠する私からも改めて謝罪をさせていただきます」

2人は深々と頭を下げた。それに対しゼノは頭を上げるように言う。

「それに関しては気にしてないから大丈夫だ。頭を上げろ」

「で…：ですが…」

「いいからいいから。それにこれからメシ食うのにそんな事されちゃマズくなるだろ」

ゼノの言葉にサーゼクスとセラフオールは御礼を言おうと頭を上げた。するとゼノは付け足す。

「あと、会談の時以外はタメ口でいいよ。俺は堅苦しいのが嫌いだからな。それともう一つ…：俺が神である事は公言するな。好きに観光できなくなるからな」

「そ…：そうですか…：分かりました」

2人がいつもの雰囲気へと戻るとゼノは内心ワクワクしながら質

問した。

「ところでメシはコースか？」

「うん。一応10品つく形かな。人気TOP10を下から順に出してもらうようになってるよ」

「成る程。楽しみだ」

その後

食事を終えたゼノは口元をナプキンで拭う。

「ふう…実に美味だった」

「口に合ってよかったよ。足りたかな？」

「ああ。満腹になった」

グウウウウウウウ

突然ゼノの腹部から獣の唸り声が聞こえた。

『……………』

「大丈夫だ。今のは屁だから」

（(もつとダメだろ!?)）

「んん…この後君はどうするんだい？我々は明日の若手悪魔の会合の打ち合わせをする為に一時 屋敷へ戻るが」

サーゼクスの質問にゼノはふうと息をつくと言った。

「取り敢えずホテルに泊まる。それで明日から俺も修行するよ」

『!?!』

その言葉に皆は目を丸くした。アザゼルは汗を垂らしながら質問する。

「星を破壊する程の力を持つのに修行するのか？」

その質問にゼノは目を鋭くさせて答えた。

「ああ。最近鈍ってるからな。それと…一ついいか？」

「なんだい？」

ゼノは冥界に来た時からずっと感じている巨大な気の正体を知るべく冥界に詳しいサーゼクス達に質問した。

「ここに来てから妙にデカイ気が感じ取れるんだ。しかもメチャクチャ遠くから。それに一箇所にも7種類もある」

『?』

ゼノの言葉に理解できず3人は首をかしげる。

「旧魔王の奴らか…? いや…違うな…」

「3柱神のシヴァ殿達…? いや…」

サーゼクスとアザゼルは7人でゼノがデカイと言わしめる程であるならばその力は確実に神クラス以上だと考え次々と思いつかぶ相手を連想した。だが、どれも当てはまらなかった。

「まあいいか。取り敢えず宿に行かせてもらう。お前が仕切るホテルはどこだ?」

「ええとあそこです」

ゼノは結界をパンチで壊すとその場からセラフオールの指差す高級ホテルへと飛んだ。

「サーゼクス…今度から質より量にした方がいいぞ…」

「そうだね…」

先程のゼノの腹の音に3人は確実に足りていなかったと理解した。因みにこの後 偶然ゼノが取った部屋の隣はソーナの部屋であり、それを聞いたソーナはショックのあまりぶつ倒れたそうだ。

—————

翌日

グレモリー邸の広い庭でアザゼルは皆とミーティングを行っていた。

「よし、お前ら。今日からは各個人で修行を行ってもらう。木場は確かもう相手が来てるんだっけか?」

「はい。一から鍛え直してもらおうつもりです」

「よし。次、ゼノヴィアはデュランダルを完璧に使いこなせるようにしろ。極めれば聖剣の中でもトップクラスの破壊力を持つからね」

そう言われた騎士2人はこの場を去りそれぞれの修行場所へと向かっていった。2人がいなくなるとアザゼルは小猫と朱乃へ目を向

けた。

「お前らは自分の本来の力を受け入れる事だが…見る限り心配はいらんな」

アザゼルの言葉に小猫や朱乃は自信を持つ表情で返す。

「はい。仙術については自分で修行をして向上させていきます」

「私も同じです。ですがまだ使いこなせない部分はあります」

アザゼルは小猫や朱乃の目を見て迷いが消え去った事を安心し頷いた。

「よし。なら各自で励んでくれ。朱乃は光の扱い方がまだ分からないならお前の親父を修行相手として呼ぶが…大丈夫か…?」

再びアザゼルは朱乃へと問う。朱乃は今まで父親を嫌っており墮天使の力を封印していた。アザゼルの心配に朱乃は真つ直ぐな答えを出す。

「はい。皆の力になれるなら私はどんな相手でも構いません。それに父と一度話してみたいと思っていたので」

「そうか。分かった」

朱乃の真つ直ぐな答えにアザゼルは頷いた。幼少期から付き合いなが長いリアスも朱乃が多少自分を受け入れている事を知ると涙を流した。

「さて、次はギヤスパー」

「はい」

名前を呼ばれギヤスパーはビクツと震わせながら返事をする。

「お前は人前に出れることから始める。レーティングゲームの際は多くの観客がいる中で行われる。その時に引きこもりの所為で神器が発動出来なかったらどうしようもないからな」

「は…はい…」

ダンボールから発せられる腑抜けた返事にアザゼルは大丈夫かという表情を浮かべた後にアシアへ目を向けた。

「次にアシア、お前は魔力の量が高い上に性能のいい神器を持っている。それをもっと効率よくさせろ」

「ええと…例えばどんな風に…」

「そうだな。遠距離からの回復を出来るようにすると言った方がいいな。お前は傷口に触れないと回復できないだろ？ゲームの場合それがデメリットとなる。だとしたら遠方から出来るようになってればそのデメリットは解消され勝率がグッと上がるという訳だ」

「なるほど……つまりこういう事ですか？やつ！」

「そう言いアーシアは手を前に出し投げるような姿勢を作った。

「まあそんな感じだ。次にイツセー」

「はい！」

「お前はドラゴンだから手っ取り早くドラゴンと修行してもらおう」

「へ……？」

アザゼルの言葉が終わると同時にその場を黒い影が覆った。何だろうとイツセー達は上を見上げた。そこには腰に装甲を身につけて黒い攻殻を持つ巨大なドラゴンが翼を羽ばたかせホバリングしていた。

「な……なんじやありやあああ!?!」

「魔星龍（ブレイズ・ミーティア・ドラゴン）タンニーンだ。お前の修行のために来てもらった。頼むぜタンニーン」

「フン。サーゼクス殿の頼みだからな。そこは忘れるなよ総督殿」

タンニーンは地上に着地すると籠手を見つめた。

「久しいなドライブ」

『ああ。懐かしい限りだぜタンニーン』

「知り合いかよ!?!」

まるで知り合いかのように話すドライブにイツセーは突っ込む。

「取り敢えず 死なない程度に鍛えてくれ」

「了解した」

「そう言うとタンニーンはイツセーを頭が下を向くように掴むと近くのを指差す。

「取り敢えず リアス嬢、あの山を貸してもらえるか？」

「ええ。思う存分に鍛えてちょうだい」

「うそーん!?!部長!?!助けて〜!!」

リアスの鬼が発動するとイツセーは涙を流す。

「もう」

すると、リアスはイツセーのところまで飛ぶと優しく慰めるために顔にゆつくりと手を添えようとした。

ところがどっこい。

バシンッ！

「アウチッ!?!」

リアスは顔ではなく背中をバシッと叩いた。

「しつかり頑張りなさい！私も応援してるわ！」

満面の笑みを浮かべながらリアスはイツセーから離れると地上に戻った。

「そんなく!!!嬉しいけどなんか嫌ああ!!!」

「頑張れ〜♪」

タンニーンは涙ぐむイツセーを容赦なく連れ去っていきその姿をリアスは笑顔で手を振りながら見送った。

「ちよつと待ってタンニーンさん!!この体勢だけどうかして!?頭に血が!血があああ!!!」

「ドライグよ。人間界はどうだった？」

『ああ。悪くないな』

一方でタンニーンは頭に血が上り死にそうなイツセーを放ってドライグと雑談していた。

—————

「さて、イツセーも行ったとこだし。次はリアス」

「何かしら?」

アザゼルはリアスへ一枚の紙を手渡す。

「お前は眷属を従える者として、どんな状況下でも臨機応変に対応できるようにしろ。その為にここに記してある過去のレーディングゲームの結果や状況を調べることだ」

「……………」

その紙を見た瞬間 リアスの顔がガチッと固まった。

「ん?どうした?」

「これ……………」



リアスは恐る恐る見せた。

『アザゼルちゃんへ』

いつでも待ってるわ。

また来てね♡

駒王キャバ嬢クラブ

ヨシコ　より』

「間違えたこつちだ」

アザゼルはいち早くリアスから取り上げると本物の紙を手渡す。

「じゃ、頑張れよ」

「今のなに!?!」

後ろから聞こえるリアスの声に耳を貸す事なくアザゼルは朱乃と共にこの場を去った。

## 神の修行

皆が各自で修行する中、ゼノは何もない空間でひたすらウイスと戦いを繰り返していた。

「…」

「♪」

今のゼノは普段とは違い身体中から青白い熱気を放っており、目はエメラルドのように美しく髪も炎のようにユラユラと揺れていた。

そしてゼノは皆といる時とは全く違う程の速度でウイスへ次々に拳を放っていた。対してウイスは笑顔で楽しそうにまるでダンスを踏むかのようにその拳を軽々と最小限の動きで躲していた。

「ほらほら、こっちはですよ♪」

ウイスが後方へジャンプし左右へユラユラとしながら手招きをすると分かっているかのようにゼノは空気を蹴り急接近し拳をまた次々と打ち始めた。

「なかなか、良い感じじゃないですか。ならば私も行きますよ？」

「…」

そう言うと同時にゼノの拳が杖で受け止められると今度はウイスの攻撃が始まった。

次々とトリッキーな動きで杖を突きつけてきたり、蹴りを放つなど、普段見せる事のない姿勢を見せていた。だが、それに対してゼノはその攻撃をまるで身体が勝手に避けているかのような動きで次々と躲していた。

「ほほ。やりますね。ではこれはどうでしょう？」

そう言った直後、ウイスの動きが変化した。

「!？」

先程よりも動きが桁違いに速くなり、攻撃を受け止めたかと思いきやその手に衝撃が走る。そして最終的には受け流しは愚か防衛さえもする事が出来なくなっていました。

「ふむ。ここまでですね。時間は5分ですか。まだまだですね」

そう言ったと同時にゼノは地面へと崩れ落ち身体から発せられる

気が消えた。

「ぶはあ〜！き…キツイなあ…まだ10分にはいかねえか」

「集中力が未だに足りませんね。修行が足りない証拠です」

厳しく指摘するウイスにゼノはぐったりと倒れた。

「今日はここで終わりにしましょう」

そう言いウイスが杖を叩くと歪んでいた空間が元に戻りだし、冥界の岩が多くある景色へと変わった。

「では、キチンと休んでくださいね」

「はい…」

そう言うウイスは去っていった。

「さて、しばらく休むか」

そう言うゼノはその場に寝転んだ。

—————

—————

—————

カンカン

「ん？」

突然 耳音で何かをたたく音で目を覚ました。見てみるとアザゼルが立っていた。岩を叩いて目を覚まさせたのだろう。見ると何かを手に持っていた。

「なんだ？」

「差し入れだよ。朱乃と小猫が共同して作った弁当だ」

そう言いアザゼルは起き上がるゼノにデカイバスケットを差し出した。

開けてみるとゼノの好物である肉類と白飯が入っており、食欲を誘ってきた。見ると一枚の写真が入っており、それには満面の笑みを浮かべている朱乃と全身黒焦げの筋骨隆々な男性が写っていた。

「これ誰だ？」

「ソイツが朱乃の父親『バラキエル』だ。前までは険悪な仲だったが、もうすっかりと仲直りしたらしい。朱乃は凄く感謝していたぞ」

「そうか」

写真を見る限り 修行の一環で勝負したのか、バラキエルの焦げ具合から朱乃の方が勝利していると読み取れた。

「バラキエルもお前に感謝していたな。会える機会があればすぐに会いたいとな」

「唐突すぎるだろ。取り敢えずいただきます」

そう言い開けると食べ始めた。

「そう言えば 小猫はどうしてるんだ？暴走はしてないな？」

ゼノは朱乃ともう一人 小猫の現状を聞いた。それについてアザゼルは思い出し話す。

「ああ。というか…魔力と筋力が成長しすぎてな。イツセーと同じく岩に囲まれた場所で修行してもらってる。リアスの屋敷の庭だと辺りを吹き飛ばしちまいそうだからな」

「そうか。朱乃は写真を見る限り大丈夫だな。ちよいと小猫の方を見ってくるか」

そう言うとゼノは小猫の気を探り感じ取り その場へと瞬間移動していった。

忘れていると思うが、アザゼルは未だに自分のマンションの修理費の請求書をゼノに渡せないでいた。

—————

一方で 誰もいない ゴツゴツとした岩場のど真ん中で 小猫は静かに深呼吸をした。 周りの景色と一体化するように。

「スウ……」

空気を吸い心を落ち着かせて 気を身体中に巡らせる。

そしてその集まった気を両手に集中させ 具現化させるようにイメージをする。

「やあッー」

私は具現化した鬼火のような玉を一気に巨大な岩石に投げつけた。 気の玉が岩石に当たると同時に大爆発し、一瞬でその岩石を粉々に吹き飛ばした。 先程よりも威力が上がっていた。

「はあ…はあ…」

気を使いすぎたのか 私は疲れてその場に仰向けで倒れ込んだ。疲れたけれど、凄くいい気分だ。今まで 自分が嫌って封印していた力が 私をこんな気持ちにしてくれるとは思わなかった。これに気づかせてくれた先輩には本当に感謝している。

先輩…会いたいです…

1日 だけ会えなかったというのに私は凄く心が落ち着かなかった。今の成長した自分の力を見て欲しいから。

私がそう思った時

「どうだ調子は？」

私は飛ぶように起き上がった。

—————

ゼノが現れると小猫は驚きながら立ち上がる。

「先輩！」

小猫は嬉しさのあまり立ち上がると猫のようにゼノに抱き着いた。

「お…!？」

いきなり抱き着かれた事にゼノは困惑した。それでも小猫は尚も笑顔で頬擦りをしだした。猫耳を出しているので尻尾も健在であり、その尻尾は嬉しそうにウネウネと揺れていた。

「なんだ!?完全に猫になってる…」

あまりの変化にゼノは驚きながらも小猫を引き剥がした。

「暑苦しい」

「むう…」

小猫は頬を膨らませた。それを無視してゼノは現状を聞く。

「少しずつですがコツを掴めてきてます」

満面の笑みで言うゼノは ほほうと関心する。ゼノから見たら少しだけではあるものの戦闘力が上昇していた。そこである提案を出してみる。

「だったら俺と一戦やるか？」

「え…!？」

突然の誘いに小猫は腑抜けた声を出す。それでも気を取り直しす

ぐさま「はい」と言った。

「よし。なら来い」

そう言うのとゼノは手を組みながら右脚を膝を上げるように構えた。

「……足だけでですか…？」

「ああ。飯の後の運動には丁度いい」

「むす…」

ゼノに小馬鹿にされた小猫は額に青筋を浮かべるとすぐさま拳をゼノの頬へ向かって放つ。

「えいー！」

突き出されたその拳をゼノは上半身を右に傾ける形で避けた。だが、それは予測されており、小猫はすぐさま次の拳をゼノの傾けている腹へと放つ。だげどもそれもアツサリとゼノは跳躍し一瞬だけ拳の上に着地すると軽くジャンプし後ろへと着地した。

着地するとゼノは指で誘うように挑発した。

「こいよ。猫又の力見せてみる」

「分かりました…」

すると小猫は身体中に気を宿らせ猫又本来の力である「仙術」を解放した。再び耳と尻尾が現れ戦闘力は1段階上昇しそれと同時に身体から白いオーラが湧き出し小猫の周りの小石が辺りへと四散した。

「行きます…！」

小猫は状態を低くすると短距離をスタートするような体勢となった。そして右脚に力を入れ一気に踏み出し一瞬にしてゼノの前へと移動した。

「…！」

ゼノの間合いへと入った小猫は両手を握り締めるとすぐさま強烈なラツシユを放った。

「ダダダダッ!!!」

次々に迫り来る拳と蹴りをゼノは脚で弄ぶかのように防いだ。

「ほらほらどうした？そんなんじや一発も顔に当てられないぞ？」

すると小猫のラッシュの速度が1段階上がった。そして拳のみならず蹴りも放ち始めゼノへ一泡ふかせようという気持ちが見れ始めた。

「ダダダダダ!!!」

「ほう？（確実にパワーアップしてきているな…それに気のコントロールも少してきてきている…）」

ラッシュを受け流しながら小猫の現状を読み取り感心すると受け流しを止め、指で脚をピンと小突いた。

「ニヤ?」

いきなり不意を突かれた小猫は小突かれた反動でその場でバランスを崩してしまい、力を使いすぎたのか、その場に倒れてしまった。

「いいぞ。着実に成長してきている。だが…あとは仙術だな…それをどうするかだ…」

ゼノは倒れて目を回す小猫を見ながら考える。気のコントロールや扱い方などは指導できるものの、仙術などのその種族独自の術式などは専門外である。故に仙術に関してはゼノもどうすれば良いのか分からないのだ。その種族である小猫でもある程度しか出来ない程であるので、正直、お手上げ状態だ。

「ウイスさんなら何とか出来ると思うが…小猫は流石に無理があるな」

すると目を覚ました小猫がヒョイと起き上がった。

「うーう…本当に片足だけでやられました…」

「当たり前だ。ほれ、さっさと帰るぞ」

「はあい…」

立とうとするもよろける小猫。それを見かねたゼノは溜息をつき、しようがないと言い肩に手を置くと、リアスの気を察知し、グレモリー邸へと瞬間移動した。

ヒュン

「到着」

「ぎゃん!?!」

ドサッ

瞬間移動したのはいいものの、移動先がまさかのリアスの真上だった為、突然現れた2人によってリアスはその場で下敷きにされてしまった。

「あらあら。ゼノ君」

「おお」

偶然 一緒にいた朱乃にゼノは軽く挨拶すると辺りを疲れて寝ている小猫を朱乃に渡した。

「来て早々わるいが、コイツをベッドに運んでおいてくれるか？結構負担を掛けたらしいからな」

「あらあら…。任せてください。ゼノ君はどうするんですか？」

小猫を受け取りお姫様抱っこをすると朱乃は何処かへ行こうとするゼノに質問した。

「ああ、ここにいる間は会長のホテルに泊まるよ。今更 来客が1人増えると迷惑だからな」

「そうですか…。一緒に寝れないのが残念です…」

とんでもないことを呟くが、ゼノは意に介さず、辺りをキョロキョロを見回す。

「ところでリアスはどこだ？」

ゼノは辿ってきた気の前元であるリアスが視界に映らないことに疑問に思い朱乃に聞きながら辺りを見回した。

それに対して朱乃はいつも変わらず笑いながら教えた。

「うふふ。ゼノ君の足元ですわ」

「え？」

みると自分の足元に地面に顔を埋めているリアスの姿が映った。

「何だよ。お前も修行のし過ぎか？部長なんだから自分の身体の心配りくらいちゃんとしろよ」

「誰の所為だと思ってるの!？」

ゼノがその場から退くと、リアスは身体を震わせながら起き上がった。

「それよりも聞いていたけど。遠慮しなくていいのよ？1人くらい増えてもすぐに食事やベッドも用意できるわ」



服に付いた土を払いながらリアスは言うが、ゼノは拒否した。

「いや、それでもやめておく。自分の家の中に神がいるとなると精神的に負担がかかるだろ」

「ま…まあそうね…」

その言い分にリアスは納得する。自分達は長い間 同じ空間にいるので大丈夫であるものの、初めて会う自分の両親や屋敷のメイド達にとっては、同じ空間に神がいるとなると、間違いなく混乱するだろう。

「そう言う訳だ。じゃあな」

ゼノは2人に手を振ると瞬間移動をし、この場から消えた。

すると、朱乃は溜息をついた。修行の疲れでもあるが、何か他の感情が混じっているようだった。

そうとは知らないリアスは疲れているのだろうと思い風呂へと誘った。

「今からお風呂入るけど貴方もどう？」

「いえ…修行の疲れではなく…ゼノ君と一緒に空間にいられないのが残念なの…」

それを聞いたリアスはうくと考え込むとある提案をした。

「こんなのはどうかしら？」

――

――

――

場面は変わり、ホテルへと到着したゼノはスマホをみるとアザゼルからメールが来ていたので開いた。

『明日は若手悪魔の会合がある。だからリアス達は皆 本部へと行くんだが…お前さんはどうする？』

その文面を見てゼノは考えた。自分にとって若手悪魔 に興味はない。けれども、他の魔王も見てみたいと思い、メールを返した。

『面白そうだから行かせてもらう。他の魔王も見てみたいしな』

するとすぐにメールが返ってきた。

『なら、俺からサーゼクスに伝えておく』

『了解』

ゼノは携帯を閉じると 室内にある 少し広めの洗面所へと行き、お湯を入れた。

「さて……」

お湯が溜まるまで暇だと思い、ゼノはある事を始めた。

「…」

坐禅を組み、心を落ち着かせ、今日の修行を振り返り、己の欠点を見出す。つまり、瞑想だ。

どうすれば あの動きを躲せる。

ウイスさんのあのトリツキーな動きを。

どうしたら捌ける？

今日戦ったウイスの動きを頭に思い浮かべた。

そしてその回避の仕方 捌き方などを次々に思い浮かべてそれを組み入れていった。

その時

ピー

「おっ？」

風呂の水が適度の量まで溜まったら知らせてくれるブザーが鳴り、ゼノは瞑想を中断する。

「さて、入るか」

服を脱ぎ腰にタオルを巻くと三つ編みを解いた。レバーに手をかけ 熱めの42度程のシャワーを全身に浴びせた。

そしてシャワーを止めると、椅子に座り頭にシャンプーをかけ 優しくゴシゴシと洗った。ゼノの髪は腰まであるので、洗うのには毎回一苦労しているのだ。

「めんどいな…切ろうかな？」

すると 背後の床が突然 光り始め、見ると魔法陣が映し出されていた。

「なんだ？」

誰か来るのかと思い咄嗟に警戒を取る。けれどもすぐに警戒を解

いた。その理由は 魔法陣から感じる気は馴染みのある者だったからだ。

「この気配…まさか!？」

そのまさかだ。

その魔法陣から現れたのはタオルを巻いた朱乃であった。

「朱乃!?! なな…なんでここに!?!」

「うふふ…ゼノ君と一緒に入りたいと思ひまして。お背中お流ししましょうか?」

朱乃は妖艶な笑みを浮かべながら聞いてきた。ゼノは顔を真っ赤に染め拒否した。

「いいよーは…早く帰れ!」

「そんな…」

すると、朱乃の顔から何もかもが消え去り暗い表情へと変わってしまった。

「私をここまで強くしてくれたから…少しでもお礼がしたいと思っていたのに…」

朱乃はその場に膝から崩れると目から涙を流してしまう。流れた涙は次第に多くなりその場に溜まり始めた。

「…(え…待てよ…確実に俺が泣かしてるみたいじゃねえか!?!)」

罪悪感に駆られたゼノはどうしようか考えるも案が浮かばず 降参した。

「じゃ…じゃあ背中…頼むよ…」

そう小さく言った時 朱乃の涙がすぐさま止まりパアと顔を明るくした。

朱乃はボディソープをタオルにつけるとゼノの背中へと付着させ上下に動かした。

「気持ちいいですか?」

「ああ…少しずつ眠くなってくる…」

「うふふ。…ここでは寝ないでください」

そう笑いながら背中にシャワーをかけ優しく撫でるように洗い流した。

ゼノはお返しとして朱乃の背中も洗い流してあげた。2人とも体が洗い終わると湯船へとゆっくり浸かった。広さは一般家庭にある風呂とさほど変わりはない。

入浴している場所からは外の景色を眺める事ができ、窓を開け2人は外の景色を眺めた。

「ふう…」

疲れや汗を流しているとふいに朱乃が切り出した。

「いきなりで悪いけど…明日から修行に付き合ってもらう事はできない?」

2人だけなので朱乃は普段の口調をやめタメ口で話した。朱乃は自身の力を見てほしいと思い 質問したのだ。

それに対してゼノは朱乃の積極的な要望に感心すると了承した。

「いいぞ。ただ それは会合の後でだ。一応 俺も出るからな」

そう言いゼノは風呂で背伸びをする。いい具合に汗も出てき始めた。

すると、朱乃は微笑み 後ろから手を回しゼノを自分の胸元に抱き寄せた。

「!?」

突然抱き寄せられたゼノは驚き すぐさま離れようとするが 朱乃はただ何も言葉を発さずに離さなかった。ゼノは抵抗しようとしたが、何か理由があるのか、いつもよりも手の力が弱い故に手足をバタつかせる事をやめる。

一方で朱乃はただ笑顔のままゼノを抱き締めていた。

それから数分

「……熱い……そろそろ上がる……」

「あらあら…お顔が真っ赤っかですわ。上がりましょうか」

ゼノは朱乃に抱き抱えられるようにして湯船から上がった。

風呂から出ると寝間着に着替え ゼノは朱乃にドライヤーをかけ

てもらっていた。自分よりも長い髪をいつもケアしている朱乃の技術は抜群的であり、ゼノの髪がいつもよりしなやかになった。

「うふふ。髪を解いているゼノ君の姿は新鮮ですわね」

「んん…寝る時は縛らないからな…というか…」

ゼノは未だに居る朱乃に目を向ける。

「何でまだ居るんだよ…。そろそろ戻れよ。明日 俺も忙しいんだよ…」

ゼノは眠たそうな目を向けながら朱乃に言う。すると今度はうつむかず、スンナリと受け入れてくれた。

「そうですわね。元々は一人部屋なので もう一人増えてはいけませんわね」

そう言うと朱乃は魔法陣を展開した。

「では。おやすみなさい」

「ああ」

そう言うと朱乃は魔法陣で転移していった。

「ふわあ…さて、俺も寝るか」

今にも閉じそうな目を擦りながらゼノは部屋の照明を消した。消すと窓から冥界の街の灯りが広がり神秘的な景色を表していた。

—————

冥界が夜に包まれた時

建物が密集する場所から遠く離れたと

ある暗い山岳地帯にて、一人の青年が辺りを照らす月を見上げていた。

「ふむ…冥界は穢れている場所かと思っていたが 存外 美しいものだな」

その男はまるで始めて冥界に来たかのような感想を述べた。すると、背後に魔法陣が現れ王族が着る獣の毛が施されたマントを着用した男性が姿を現した。

「遅いぞ。アスタロト」

月を見ていた青年は振り返る。アスタロトと呼ばれた男性はケラケラと笑いながら言い訳をしてきた。

「いやあ悪いね。可愛い眷属の相手をしていたらツイツイ時間が過ぎてしまった」

その男は反省の意思がないように謝罪をした。他者から見たら確実に怒るだろう。だが、青年は怒る事は無かった。青年は内ポケットをまさぐると何かを取り出した。

「貴様も力を欲していたな。ならばこれをくれてやる」

「ほう？これがシャルバの言っていたボールか？」

青年が差し出してきた玉を男は受け取ると水晶を見るかのように回しながら見た。血のように赤く光り、その中に四つのドス黒い星が輝いていた。見るからに不気味だ。

「この玉を飲み込めば貴様の力は今の魔王を軽く越えられるだろう」

「!?…この玉を取り込めば…超越者である…アジュカを超えられるのかい!？」

「そうだ。もつとも…貴様がその力に耐えられるのならばな」

青年の言葉に男は興奮し後から忠告した事は聞き入れていなかった。

男は玉を受け取ると魔法陣を展開し、この場から去っていった。男がいなくなると、青年はフツと笑った。

「やはり憎しみの強い魔王の血族は利用価値がある。利用されている事に気付かないとは…悪魔も馬鹿が多いのだな」

その男は嘲笑いながら月をしばらく見つめると姿を消した。

## 若手悪魔の会合

翌日

鳥の鳴き声と共に目を覚ましたゼノはベットから起きると服を着替えた。

普段着ている物とは違い 中国の武術家が着ている長いチャイナ服を取り出すと袖を通した。そして下にはいつものジーパンとは違い 動きやすそうなカンフーズボンを履いていた。髪をいつも通りの三つ編みにすると部屋を出て鍵をロビーに預けた。

「さてと。アザゼルの気は……見つけた」

多数の気の中からアザゼルの気を見つけるとすぐさま瞬間移動をした。

ヒュン

「のわ!?!」

突然目の前に現れたゼノにアザゼルは腰を抜かした。それを気に留めないゼノは辺りを見回した。

目の前には見覚えのある顔 サージェクスとセラフォル、そしてもう二人 見知らぬ男性が驚いていた。一人は整った顔を持ち、オールバックの青年、もう一人は全てを照らす太陽のように輝いているスキンヘッドが特徴的なゴツい顔をした男性だった。

ゼノは悟った。これがサーゼクスとセラフォルに並ぶ もう二人の魔王なのだ。

「さ……サーゼクス……この方が昨日話していた……」

「ああ……破壊神ビルス様の弟子であり、銀河を司る神……『銀河神』様だ……」

その言葉を聞いた瞬間 二人の魔王は全身という全身からベタツク程の汗を流した。そしてすぐさま跪く。

「は……初めまして……わ……私は四大魔王を務めております……『ファルビウム・アスモデウス』と申します……」

「同じく……『アジュカ・ベルゼブ』です……本日は来ていただき誠にあ

りがとうございます…」

ゼノは頭をかきながら 来たのは自分の意思だよ と言い顔を上げさせた。

「今回は面白そうだから来ただけだ。いつも通りにしてもらっていいよ」

「ありがとうございます…」

少し調子を戻したのか二人は立ち上がると頭を下げた。グレイファイア がゼノを席へと案内するとアザゼルとアジユカやフアルビウムも席へとついた。

「んで、『若手悪魔』ってのは何だ？」

全員が席に着くとゼノは今回の主旨である『若手悪魔』についてサーゼクスに聞いた。

それについてサーゼクスは公共な場 故に敬語で丁寧に説明を始めた。

『若手悪魔』というのは レーティングゲームの経験歴がまだ浅く新人な悪魔の事を指します。今回の会合はこの若手悪魔の中でも屈指の実力を持つ五人に対して執り行っていくきます」

「成る程な。で？その五人とは？」

「はい。『シークヴァイラ・アガレス』『ゼファードル・グラシヤラボラス』我が妹リアスとセラフォルの妹ソーナ君、そして若手悪魔の中でもNo.1とされる『サイラオーグ・バル』です」

五人のうち 三人は初めて耳にする名前だ。そして何より驚いたのが リアスとソーナが若手悪魔の上位にいる事だった。

「さて、そろそろ会合を始めよう」

サーゼクスは扉付近に立っているグレイファイア に手で合図をするとそれに応えたグレイファイア は頷き扉を開けた。

「失礼します」

その声と共に五人の悪魔達が入室してきた。ゼノを初めて見る三人は誰だろうと疑問に思いながらゼノを見た。対してリアスとソーナは何故かゼノがいる事に目を点にしていた。恐らくだが『なんでここに…？』と思っているだろう。



一方でゼノはリアスやソーナよりも、一番右端に立っている筋骨隆々な悪魔へ目を向けていた。

「(コイツ：魔力らしきモノが感じられねえな：体格からすると 身体能力だけで勝負してきたんだな。一度 戦ってみたいな：)」

魔力を一切感じさせない男にゼノは興味を持ちながらも会合に臨んだ。

「よく来てくれた。では、会合を始めるとしよう」

元老らしき悪魔が切り出した事で会合が開始された。

だが、内容はゼノにとっては全く縁のないものだった。冥界の未来、力、レーティングゲーム、それに関しての説明ばかりであった。

そして、話し続けて数十分が経過した頃、会合は終盤へと差し掛かった。

「では最後に、君達の今後の抱負を聞きたい。遠慮なく言ってくれたまえ」

すると、ゼノが注目していた右端の青年から先に目標を言った。

「私は魔王になる事です」

「ほう…」

青年の言葉に元老の男性は驚いた。

「大王家から魔王とは前代未聞ですな」

「私が魔王になる事に民が賛成するならそうするしかないでしょう」

なんの迷いもない発言に魔王や元老の皆は納得したように頷いた。

次は リアスだ

「私はグレモリー家次期当主として、レーティングゲームに勝ち続けていく事です」

リアスの抱負は特に気になる点はない 普通の答えだ。故に不思議とは思わず質問は出されなかった。

次は生徒会長である、ソーナだ。重度のシスコンであるセラフオルーは妹のソーナの抱負に心を震わせていた。

そんな姉の姿を見たソーナは微笑みながら胸を張って力強く言った。

「私はレーティングゲームの学校を設立することです」

その抱負に対して元老側から質問が挙がる。

「レーティングゲームの学校ならもうあるのだが？」

「それは上級悪魔や一部の特権を持った悪魔にのみしか入学を許されていません。私は下級でも転生悪魔でも入学が可能な学校を創りたいのです」

ソーナの抱負は前の二人とは違い 他人への思いやりが強いモノだった。

セラフォルは満面の笑みを浮かべながら拍手をしそうな勢いで頷いていた。サーゼクスも内心『いい抱負だ』と思い頷く。

その時だった。

『はははははははは！』

元老側から次々と笑いの声が聞こえてきた。

「これは傑作ですな！」

「ハッキリ言えば無理だ！」

次々とソーナの抱負をバカにするかのような声が挙がってくる。それに対して魔王の四人の内 サージェクス、アジュカ、ファルビウムは不服な表情を浮かべており、アザゼルもドブを見るかのような表情をしていた。何より一番 恐ろしいのはセラフォルだ。普段から常に見せている天真爛漫な表情が消え失せており、今にでも元老を殺しそうな勢いで睨んでいた。だが、そんな事をすれば大事だ。

それに彼らは魔王になって間もない故に信用性が薄いため 迂闊に反論できないのだ。

「成る程！夢見る乙女とはまさにこの事だな！」

「若いというのはいい！しかし次期当主とあろう者が…

バキッ

我慢の限界なのか、身体の中で抑えていた怒りが外へと漏れ出してしまったセラフォルはテーブルに指を立てた。

「ひでえモンだな…なあ銀河神様…ええ？」

アザゼルは隣に座っているゼノに顔を向けた時だった。そこにはゼノの姿がなかった。

「あれ？どこいった？トイレか？」

アザゼルは辺りをキョロキョロし、ゼノを探していた時、先程まで笑っていた元老からの笑い声が途絶えた。

アザゼルはすぐさまその場に顔を向けた。

なんとそこには、一人の元老の顔を目の前のテーブルで座りながら青い目で静かに見つめているゼノの姿があったのだ。

突然現れた事により、元老側は笑いを止めた。

「なんだね？」

見つめられている悪魔は動じずゼノへと問う。

### その瞬間

『…!?』

その場にとてつもない程の殺気が溢れた。

魔王四人 加えてアザゼル、そして若手悪魔達はその殺気の恐ろしさに汗を流していた。離れているのにこの威力、目の前でその殺気を放たれた元老は身体中から汗を流し、涙を流しながら命の危険を悟っていた。

そんな中、ゼノは重圧を掛けながら質問をした。

「なあ…会合って普通 静かにやる事だろ？違うか？」

「い…いえ…違わない…です…」

目の前から発せられる圧に元老は敬語で答える。

「だったらさ？静かにやれよ。それにそつちから抱負 聞いといて笑うってのはないだろ？」

「は…ハイ…」

もはや反論などできないだろう。この悪魔の脳内は既にゼノへの恐怖に侵食されているのだから。

そこでゼノはもう一つある質問をした。

「なあサーゼクス、前に言っていたな。俺がコカビエル倒した事を元老側が信用しなかった事を」

その質問に対してサーゼクスはゆっくりと頷く。するとゼノはニヤリと笑うと目の前にいる悪魔に目を向けた。

「俺はこの地球が属する銀河を収めてるからな。その星に住む者に信用されないといけない。そうだ。こういうのはいいどうだ？一回俺と戦ってみる。お前らと眷属合わせて全員だ。そうすれば信用してもらえるかもしれない。勿論 信用を得るために俺は本気でいく」

『…!!!』

『本気』という言葉に元老は涙を流しながら更に震え上がった。全員の眷属を併せ持つとしても確実に勝てないと。

それに対してサーゼクスとセラフオールは察したのか笑みを浮かべ始めた。

「成る程！それはよいお考えです！他の少数派の者達も信用させる為に悪魔領全土に放映いたしましたよう！」

「私は早速 打ち合わせしてきます！」

セラフオールは敬礼すると鼻歌をしながら会場を出ていった。

もう既に決まっているかのように話が進み、元老側はほぼ全員がやつれていた。

「じゃあ日取りは何時頃にする？」

「そうですね。10日後にしましょう！冥界で一番巨大な闘技場をご用意いたしますよ！」

「了解。いやあく楽しみだなあ？」

『…!?!』

その時 ゼノの冷酷な目が元老達へと向けられた。

「10日後…俺に勝てるといいな…?」

—————

その後、元老側が全員 気絶した事により、会合は一時中断され、その後はサーゼクス達が続けた。

そして 会合が終わると 戻ってきたセラフオールに腕を掴まれ 上下に揺らされていた。

「ありがとうゼノ君ツツ!!ソーナちゃんの為にあそこまでやってくれて!」

上下に揺らされたゼノは「別にいい」と言う。

「俺だって信用しない老害に腹が立ってたからな」

隣ではサーゼクスが演技を終えた事で笑いながら汗をかいていた。

「いやあ…しかしあそこまでするのは…私も途中から気づいたけども 少し怖かったよ」

「その割にはノリノリだったろ?」

「まあね」

『アツハツハツハツハツハツ!』

「さて、そろそろ仕事に戻ろう。10日後は本当はリアスとソーナ君のレーティングゲームの予定だからね」

そう言い10日後の予定を話した。すると、ゼノとセラフオールは疑問の声を上げた。

「え?」

「なんで?」

「いや、なんでって言われても……え……?」

サーゼクスは『まさか』と思った。そのまさかだ。ゼノとセラフオールは本気で元老側とやるつもりらしい。

「まさか…二人とも本気で元老の方々と…」

サーゼクスの質問にゼノは腕の骨を鳴らしセラフオールは手に氷の魔力を集結させた。

「流石にムカついたからガチでやる」

「それにもう打ち合わせしてきちゃったし。あと、ソーナちゃんを侮辱したから少しでも……痛い目に遭ってもらわないと気が済まない」

それぞれドスの効いた声で答えた。どうやら完全に本気らしい。

「じゃあソーナちゃんとリアスちゃんの前に試合って事でいい?」

「おう。それで頼む」

「……  
（終わった……）  
」

## 懐かしき猫

「…さて、そろそろ行くか」

「随分と楽しそうね」

暗い穴の中にて、2人の男女が話していた。1人は所々に装甲を身につけ、背中に棒を背負っている青年 『美猴』もう1人は、真つ黒な髪を持ち、虹彩が猫のように細く、着物を着崩している女性だ。

「まあな。なんてったって冥界のお偉い様方が集まるパーティーだからな」

「ふうん。私は興味ないけどね」

「お前は確か… 『妹』を見に行くんだったよな？」

「ええ。どれくらい成長しているのか楽しみね」

その女性は妖艶な笑みを浮かべると月が輝く夜空を見上げた。その表情は何か寂しさを感じさせるようだった。

「…(…ゼノ…今はどうしてるのかな…)」

—————

ゼノの仕業により、若手悪魔の会合が 何かめちやくちやに終わった。オカ研一同の皆は部屋からやつれた姿で出てきたリアスに何かあったのかを聞くとリアスは渋々話した。

事情を聞いた木場とイツセーとゼノヴィアとアーシアは啞然とし、何も言えずにいた。その中で朱乃はいつも通りニコニコ、小猫は無表情でいた。

「へえ…部長と会長の前に先輩とその方達の試合があるんですね」

「ええ。まあどうせ脅しだとは思っただけ」

リアスは先程のゼノの発言を思い浮かべた。あの時は自分も親友であるソーナの夢を馬鹿にした元老達は許せなかったのだから スカツとしたが、後から思い返してみるとヤバイと思うだろう。なにせ、足元に及ばないと分かっておきながらも対戦を持ちかけたのだから。

まあ恐らくそんな事はサーゼクスも承知しているので本当にはや

らないであろう。そう思っていた。

「ま、会合が終わった事だしそろそろ戻りましょう」

ゼノを除いたオカルト研究部の皆はその場を後にすると 屋敷へと引き返した。

その後、リアスはこの試合がガチである事をアザゼルから知らされ頭痛を起こしたという。

—————

翌日

皆はそれぞれいつも通りに修行をしていた。リアスは過去のレーディングゲームの書籍を熟読。イツセーはいつも通りタンニンと鬼ごっこ。木場はサーゼクスの騎士である師匠と修行。ゼノヴィアはデュランダルを振り回し馴染ませていた。アーシアは魔力上昇。ギヤスパーは人前へと出るというのにダンボール。

朱乃と小猫は…

「ゼイヤアアアッ!!!」

「ハアアアアアッ!!!」

「おお!？」

イツセーと同じ岩場にてゼノと対戦中である。小猫の手から放たれた鬼火のようなモノがゼノに向かって放たれた。

「えいッ!」

「よつと!」

向かってきた鬼火をゼノは脚で次々と左右に流すように蹴った。流された鬼火は後ろの巨大な岩石にあたり、大爆発を起こした。すると、足元に魔法陣が現れ朱乃の雷と本来持つ光が合わさった高密度の魔力攻撃が噴き出してきた。

「やあッ!」

「あぶな!？」

ゼノはそれをまたもや余裕な表情で後ろにステップするように避ける。すると、ステップした先から次々と魔法陣が現れ雷光が吹き出してきた。

あまりにも多いので一旦空へ飛びあがり空気を蹴るように次々と



避けた。意外としつこく出現してくるので、ゼノならまだしも、上級悪魔なら確実に防げないだろう。それ程までに進化しているという事だ。

「ほう？やるじゃねえか」

そう言うときゼノはそれをアツサリと避けた。

すると2人は攻撃をやめた。いきなりの停止にゼノは不思議に思うと聞いた。

「どうした？もう終わりか？」

その時だった。ゼノは突然 上から高密度の魔力を感じ取った。

「!?」

見上げてみるとそこには頭上をほぼ覆い尽くす程の巨大な魔法陣が浮かび上がっており、所々に電気を帯びていた。

「今です！」

小猫の合図と共に朱乃の手が上がる。

「雷光よッ！」

「ッ！」

その瞬間

魔法陣が光りだすと同時に 超高密度の雷光がゼノの頭上から振り下ろされた。

雷光はゼノを包み込むと同時に地面に激突すると大爆発を起こした。その威力は中距離程離れていた2人が吹き飛ばされ、辺りの岩場の巨大な岩石も吹き飛ばす程だった。

爆風が止み辺りに砂煙が舞うと、朱乃と小猫は膝をついた。

「はあ…はあ…はあ…」

小猫はもちろんだが、朱乃は魔力がほぼ空の状態へと陥っていた。先程の巨大な雷光に残りの魔力全てを注ぎ込んだのだ。

「先輩…大丈夫ですか？」

「はい…ですがしばらく休みたいですね…小猫ちゃんは？」

「私は大丈夫です。それよりも！当たりましたよね!？」

「ええ…何とか…」

すると、煙の中から人影が現れ、こちらに向かって歩いてきた。その人影を見ると小猫は目を細くし頬を膨らませた。

「…当たったのにまったく効いてないみたいですね…」

「少し残念です…」

「いや？結構よかったぞ」

その声と共に煙の中からゼノが賞賛しながら現れた。見ると来ている服に若干だが千切れた跡が見える。攻撃が掠ったのだろう。

「いいコンビネーションだったぞ。片方の手で魔力を放ちもう片方で残りの魔力を少しずつ溜める。両手でそれぞれ違う文字を書くようなモノだ。よくできたな」

ゼノに褒められると朱乃は瞬時に頬を赤く染めると乙女のように顔を両手で覆う。

「そんな…！私なんてまだまだですよ…！」

「…（めっちゃくちゃ喜んでる…）」

感情がまったく隠しきれない反応に小猫はボソツと心で呟いた。

一方で、ゼノは2人の魔力が底を尽きている事を確認するとポケットから麻袋を取り出した。そして中をゴソゴソと探ると一粒の緑色の豆を取り出した。

「これを食べ」

「豆…ですか？」

「そうだ。これは『仙豆』と言ってな。あの世に住む大仙人『カリン様』からいただいた神聖な豆だ」

「それほど貴重なモノを私たちに…よろしいのですか？」

「いいよ。それに仙豆はストックがたくさんあるからな。また貰えばいい」

そう言うと2人に一粒ずつ手渡した。渡された2人はヒョイと口の中へと放り込むと 噛み砕き飲み込んだ。

ゴクン

『!?!』

その瞬間 2人の魔力と体力が一気に全開した。

「凄い：一気に魔力が回復した：」

「それだけじゃないです：疲れて重かった体が：凄く軽くなりました」

2人が不思議に思う中、ゼノは腕をコキコキと鳴らした。

「さて、体力が全快したことだし、もう一戦いくか」

『え…』

その後、岩場からとてつもない程の大爆発と悲鳴が聞こえた。

—————

所変わって イッセーはというと、現在 瞬発力と体力を鍛えるため、タンニーンに火球を吐かれながら追われていた。

「ギャアアアア!!」

ドオン！ドオン！

絶叫しながら逃げるイッセーはジグザグに逃げ、元いた地点が次々と爆発を起こしていた。意外にも素早いので、タンニーンはこれに關しては称賛していた。

「ほら、逃げるのはいいからさっさと反撃してこい」

「できたらやってるよおお!!」

そう言い未だに反撃してこないイッセーにタンニーンは心底呆れてしまう。ただでさえ龍王である自分すら足元に及ばない相手もとい銀河神といつも同じ空間にいるのに 何故 ここまで怯えるのか 理解できなかつた。

『Boost!』

「よし！ようやく10回目だ！」

「ほう？10回溜まるまで逃げていたのか」

籠手から出された声に タンニーンは力を溜めるために逃げていた 事を推測した。

けれどもタンニーンは炎を吐く手を緩めない。

「デカイのいくぞ」

口に大量の炎を溜めると 球体に圧縮し、一気にイツセーに向かって解き放った。

「へ……？」

その球体は地面に当たると同時に爆散し、イツセーの体を爆風が包み込んだ。そして、煙が晴れるとその場に巨大なクレーターを作り出した。

だが、そこにはイツセーの姿は無かった。

「どうした？死んだのか？」

そう言いタンニーンは辺りを見回した。すると、背後から魔力を感じ振り返った。見るとボロボロでありながらも自分に向かって拳を突き出しているイツセーの姿があった。

「喰らえ！ 『ドラゴンショット』 ツ!!」

『Explosion ツ!』

「おお？」

イツセーの上昇した魔力と共に形成された赤い魔力弾がタンニーンに向かって放たれた。

その魔力弾はタンニーンの顔に衝突すると同時に爆発した。

「ふむ……」

けれども、まったく効いていなかった。鱗の一枚が剥がれ落ちただけである。

「成長はしているな。前よりも威力が上がっている」

「いや……まったく実感が湧かないんですけど……」

「実感が湧かなくても、俺の鱗を一枚剥がしただけで上々だ。今日はこの辺にしておこう」

そう言った時

ドオオオオオオオオオオッ!

遠くの岩場が大爆発した。

「あれ……確かあっちって……」

「ああ。リアス嬢のクイーンとルークが 修行している場所だな」

「ええ!?!どんな修行したらあんな大技だせんの!?!おっさんのよりヤベエじゃん!?!」

「そうだな。まあ俺はまだ力をセーブした程度だ。俺の本気よりはまだまだだ(とは言ったものの:悪魔でもここまでの破壊力は上級の中でも限られてくるぞ:一体どんな修行をしたというんだ:)」

タンニーンは爆発した方向を見ながら微量の汗を流した。

「まあ、取り敢えず今日はここまでだ。屋敷まで送ってやる」

「……………」

一方で、

「ふうえく……」

「目が回りますく……」

朱乃と小猫は重度の修行によって目を回していた。

「よし。今日はここまでだな」

ゼノは倒れている2人の手を掴むと瞬間移動をし、屋敷へと戻った。

「よつと」

「あら、そつちも終わったのね」

「ああ………痩せた?」

「……」

瞬間移動をした先で、その場にいたリアスに声を掛けられた。見るとやつれており、目が垂れ下がり少し隈ができていた。

「今日一日中 過去のレーティングゲームの本やビデオを見通してたの」

「確かお前は采配力も必要だったな。前のゲームのようなハマはすんなよ?…もしやったら殺すぞ? 『宇宙的に』」

「え……宇宙的ってなに……?」

虚を突かれたリアスは悔し涙を流しながらも頷いた。

「ま、今回はその成長した采配力を見せてもらう。お前が成長した2人をどこまで扱えるか」

そう言いゼノは未だに目を回し倒れている朱乃と小猫に目を向けた。するとリアスは朱乃や小猫から発せられる異常な魔力量を感じ取り汗を流した。

「凄いわね…二人の魔力量が既に私を上回ってるわ…」

リアスは元々 魔力が高い家系に生まれた故に生まれついで魔力は相当だ。そしてそれは年を重ねるごとに増加し続けていくので今のリアスの魔力量は確実に上級の中でも高い方だろう。だが、そのリアスでさえも軽く越しているとなると今の2人はそれ程までに強くなったという事だ。

「さて、俺は宿に戻る。じゃあね」

「え…ええ…。そういえば、今日の夜に顔合わせとしてのパーティがあるのだけど、貴方もどう？」

リアスの誘いにゼノは少し考えた。

「人間である俺が行っても大丈夫なのか？」

「ええ。それに、美味しい料理もたくさん出るわよ？」

「行く」

ゼノは『料理』という単語に反応しすぐさま行く気満々になる。

「じゃあまた後で」

「ええ。ってちよつとこの二人は!？」

「運んどけ」

「そんな無責任な!？」

—————

「よつと」

屋敷へと送ってもらったイツセーはタンニーンの頭から降りる。

「今夜のパーティには俺も出席する。ではな」

そう言うタンニーンは去っていった。

「よし、準備するか」

イツセーは支度をするために部屋へと戻ろうとした。すると、身体中が傷だらけの木場が姿を現した。

「やあイツセー君」

「木場じゃねえか!?!もう修行が終わったのか!?!」

「まあね。イツセー君の方もだいぶいい身体付きになってきたんじゃないかな?」

「いや…そうだけど何か気色悪い…」

木場のホモ気を混ぜた言い方にイツセーは引く。すると、今度は身体に隙間が無いくらいまで包帯を巻いた謎の人物が現れた。

「おわ!?なんだコイツ!?!」

「コイツとは失礼な。私だよ」

いきなり現れた人物は顔の部分の包帯を取った。トレードマークであるデュランダルと青い髪、ゼノヴィアだ。

「ゼノヴィア!?何があつたんだよ!?!」

「いやあ…つついっつい熱中しすぎてしまつてね。お陰で部長宅の専属の医者にぐるぐる巻きにされてしまつたんだよ」

「それでかよ…完全にミイラじやねえか」

すると、トタトタと足音が聞こえ、振り返ると懐かしい修道服を纏ったアーシアが走つてきた。

「イツセーさん!皆さん!」

「おお!久しぶりだなアーシア!やっぱ修道服が一番似合うな」

「えへへ♪」

見るとアーシアは魔力が増加していた。やはり修業した甲斐があつたのだろう。

「あれ?ギヤスパーは?」

見渡していると、入り口からいつものように女子用の制服を着たギヤスパーが走つてきた。

「皆さ〜ん!」

「ギヤスパー!?!あれ!?!ダンボールは!?!」

いつもなら必ずダンボールを持ち歩いている筈のギヤスパーの手にダンボールが無かつた。

という事は…

「はい!人前に出られるようになりました!」

「やったじゃねえか!」

「やったねギヤスパー君!」

「偉いぞギヤスパー！」

「おめでとうございますー！」

ギヤスパーの引きこもりの克服に皆は祝宴の言葉を次々と挙げた。

「さて、皆揃ったとこだし、パーティーへ向かおうか」

「え？朱乃さんと小猫ちゃんは？」

イツセーはその場にいない朱乃と小猫の事が不思議に思った。リアスは家柄の事もおり、打ち合わせだと思っていたが、後の二人はどうなのだろうか。

「なんか、二人共 凄く修行で疲れたらしいから一休みしてから行くらしいよ」

「そうか…」

イツセーは昼間見たあの光景を思い出した。

それからイツセー達は支度をするのでパーティーへと向かった。

—————

「ふう…来てみたけども…皆 結構 着替えるのに時間掛かってるなあ…て言うか俺は格好は制服だし…大丈夫か？」

皆は着替えるのに時間が掛かるようで、イツセーだけ早く来ていた。周りの悪魔達がスーツで清潔感を出している中、自分だけ夏服のままで大丈夫なのだろうかと不安になっていた。

すると、

「よう。久しぶりだな」

「先輩!？」

背後から懐かしい声が出たと思えば振り向くと、ゼノが立っていた。しかも、服装が自分と違い 辺りに合わせており、黒のスーツでキツチリと決めていた。そして髪型も三つ編みを垂らすのではなく、肩からかけるようにしていた。

「新鮮ですね。先輩のスーツ姿を見るのは」

「まあね。それより、どう？修行の進み具合は」

「ええと…まあまあですかね…?」

イツセーは頭をかきながら答える。それに対してゼノは無表情のまま「そうか」といい イツセーを下から見上げるように見る。



「まあ見る限り少しは魔力が上昇してるな」

「そ…そうですか?! いやあ! 良かったです!」

意外にも褒めてもらった事にイツセーは若干驚くも少し照れ臭くなる。一方でゼノは持っていた飲み物を一口飲むとイツセーへ鋭い視線を向けた。

「突然だけど…一つ聞くぞ?」

「はい?」

ゼノはある質問をした。

「お前はなんで強くなりたい?」

ゼノは疑問に思っていた。イツセーが一所懸命に修行をする理由を。強くなるのは彼独自の理由があるのだと思い聞いてみたのだ。

その質問にイツセーは張り切って答える。

「それは部長や皆を守る為にですよ!」

その答えにゼノは「そうか」と言い飲み物をもう一口飲む。今のイツセーの言葉は決して悪い事ではない。守る為に強くなるのは立派な理由だ。

だが、恐らくそれは今の目標だろう。ゼノは本当に強くなる為の理由を聞きたい為にもう一度質問をした。

「最終的にはどうしたいんだ?」

「そ…そりゃあ上級悪魔に昇格して女の子を眷属にしてハーレム王になるんですよ!」

「……そっか」

理由を聞いたゼノは列車内で予想した事と的中してしまい、少し呆れてしまった。

「じゃあ頑張れよ。…けど、これだけは言っておく」

そう言いゼノは去ろうとする。すると、立ち止まり、イツセーの方へ鋭い視線を向けた。

「そのふざけた目的の為に修業してると…これから来る敵には対処できないよ?」

「…!?!」

レイナーレ以来 聞いたことがなかったドスの効いた声を再び耳にしたイツセーは身体を震わせた。ゼノは言い残した後 食事が並ぶテーブルへと歩いて行った。

「…どういう事…だ…？」

イツセーはゼノの質問や忠告に理解がいかなかった。

「……………」

一方でゼノはテーブルに並べられた料理を丁寧な作法で次々と口に運んでいった。

「ふむ…うまいな…」

ナイフとフォークを綺麗に扱いながら次々と料理を口に運んでいった。ゼノの周りには皿が何枚も積み重なっており、周りの悪魔達からは不思議に思われていた。

「(誰の眷属ですかね?)」

「(いやあ分かりませんなあ…)」

「(華麗な手捌きなんだが…周りに積み上げられてる皿に目がいつてしまう…)」

ゼノの耳には普通に届いており、五月蠅いから黙らせようかと思いつつも目の前の食べ物に心を奪われているので全然気にしてはいなかった。ナイフとフォークの動きは華麗だが、積み上げられた皿がその芸を台無しにしていた。

「美味い…この肉もう一度食べたいな…」

すると

「ちよつといいか？」

「ん？なんだお前か。どうした？」

振り返るときちりちりとスーツを着たアザゼルが立っていた。

「ちよつと会って欲しい奴がいるんだが…いいか？」

「ん…まあいいけど」

ゼノはアザゼルに案内されるがまま その場を去る。

そして連れてこられた場所はなんと魔王達が集まる場所だった。サーゼクスやセラフォルーがいる中、一人見知らぬ男性と女性がい

た。男性はやや小柄で眼帯と長い髭を持っていた。一方で女性はスーツを着ており、背が高く脚が長いThe career womanと呼ぶに相応しい程 凜とした女性だった。

「ああ。銀河神様、いきなりお呼び出しして申し訳ありません」  
「別にいいよ。それよりその人誰？」

ゼノはサーゼクスにその初老の男性について聞いた。するとその男性は顔を一気に青くさせた。

「さ…サーゼクスや…まさかこの方が…」

「はい。地球を含めた北と南の銀河を治める神 『銀河神』様です」

その瞬間 初老の男性は顔面が真っ青になった。

「(ええ!?この前 駅で見かけた子供が!?や…ヤバイ…どうしょ…)」  
するとお付きのキャリアウーマンは耳打ちをした。

「取り敢えず名前を名乗りましょう。ワザワザ来ていただいたんですから…」

「そ…そうだな…」

その男性はゼノに近づくと頭を下げる。

「お初にお目見えになります。私は北歐神話『アースガルス』を統治する主神『オーデイン』と申します。そしてこちらは私護衛である戦乙女『ロスヴァイセ』です。よろしくお願いします」

オーデインと名乗った男性に釣られロスヴァイセと呼ばれたキャリアウーマンも深々と頭を下げた。

「俺は黒崎ゼノ。公共の場以外ではタメ口でいいよ。んで？用はこれだけか？なら戻らせてもらおうよ」

そう言いゼノは再び食事へと手をつける為 その場を去っていった。

ゼノが去ると同時にオーデインの額から汗が流れ出た。

「ふう…あれが銀河神様か…見た目はただの人間じゃったが…発せられる気迫か化け物じゃったのう…」

「言っておきますがオーデイン殿…くれぐれも『宇宙一の美女を紹介してくれ』などと卑猥なお願いはなされませんように。私達が住む冥界、そして天界、更に各神話系統など、あの方にとっては何の相手に

もなりません。すぐに破壊されますよ」

昔からアザゼルと同等かそれ以上のスケベであるオーディンに最新  
の注意をサーゼクスは促した。それに対してオーディンも分かっ  
ているようだ。

「そんな事ぐらい承知しておる…儂もそこまでバカではないから  
なあ」

もし万が一 馱で子供として見ていた事がゼノの耳に入ったら確  
実に一発 ぶん殴られるだろう。

—————

一方でパーティに朱乃と共に途中参加した小猫は とある森の中  
へと来ていた。その理由は 会場に突然 迷い込んできた黒猫。小  
猫はそれを見た瞬間 何かを感じ取ったようでその黒猫の後を追っ  
かけてきていたのだ。

そして、現在の場所へ着いた瞬間 その黒猫は木に登ると女性へと  
変化した。

その姿を見た瞬間 小猫はゆっくりと肩を震わせながら口を開く。

「姉様…」

目の前にいる黒い髪の女性こそ 小猫の姉である『黒歌』だった。

「わざわざ誘いに乗って来てくれるなんてお姉ちゃん感動しちゃう  
ニヤン♪」

まるでふざけているかの様な口振りで猫の様に振舞ってきた。小  
猫は過去を思い出し少し後ずさりながらも耐える。だが、いるのは黒  
歌だけではなかったのだ。

「おうおう、黒歌、コイツか？妹つてのは」

会談の時に現れた 現 闘仙勝仏 『美猴』だ。

「姉様…どうしてここに…？」

「まあ話す前に…出て来なさいよ。そこのお二人さん」

黒歌は横にしていた状態を起き上がらせると小猫の後ろの木に目  
を向ける。

「俺らのように『仙術』使ってる奴だと、気の動きで分かっちゃうのよ」

美猴の言葉に観念したのか、隠れていた者達はゆっくりと姿を現した。

「部長！イツセー先輩！」

隠れていたのはイツセーとリアスであった。二人とも 小猫の動きを見ていたようで不審に思い後をつけて来たのだ。

イツセーは美猴を睨みつけた。

「よう猿。ここにいてるって事は今からパーティを襲撃するのか？」

その問いに美猴はケラケラと笑いながら答える。

「違えよ。俺は暇だったから付き合っつてやってるんだよ。ウチの黒歌が妹を連れ出したいという用にな」

『!?』

美猴の言葉にリアスは目を鋭くさせ黒歌を睨んだ。

「黒歌…どう言う事かしら？」

リアスは若干 怒りを混じらせながら黒歌へ問う。その怒りに黒歌は臆する事なく答える。

「だから、白音をいただきにきたのよ。元々それは私のモノなんだし」「なんですって…？」

黒歌のことばにリアスは出会った当初の小猫を思い出し青筋を浮かべた。

「貴方の所為であの子がどれほどの辛い思いをしてきたか分かっているのかしら？」

「そんな事…知ったこっちゃないわ。ただ単に『邪魔』だから置いていった。それだけよ」

「ッ！」

「テメエッ！」

黒歌の想像もつかない程 の非道なる言動にリアスはもちろん イツセーも堪忍袋の尾が切れた。小猫は俯く。

「小猫ちゃんはテメエには絶対やらねえ！小猫ちゃんはウチの立派な部員なんだよッ！」

「へえ…勇ましいいわね」

黒歌は妖艶な笑みを浮かべると全身から邪気を漂わせた。

「もうめんどろうだから殺すニヤ。それからでも遅くないし」

発せられた邪気にイツセーは勿論 リアスも身体が震えた。彼女ははぐれ悪魔の中でも希少なSS級。強さは測りしれないだろう。そして、空気の色も変わった。空が灰色に染まっており、なにやら虹彩のようなツヤが見える。『結界』を張られたのだ。

「これで邪魔者は入ってこられないわね」

「という訳で、楽しませてくれよ？ 赤龍帝」

—————

一方で 結界が張られた範囲内に一体の龍が迷い込んでいた。『タニンニーン』だ。そして、額には向かい風をもものともしなずに仁王立ちをするゼノがいた。

「へえ…結構広い結界だな。これも禍の団って奴の仕業か？」

広大な森を包む結界を見ながらゼノはタニンニーンへと質問した。

「恐らくそうでしょう。人数は…手練れが二人と言ったところでしょうか」

「みたいだ」

ゼノは正面へ目を向けた。

「さて、黒歌は成長した小猫を見てどう思うかな？」

その目には焦りなど感じさせなかった。感じるのは自分の弟子がどれぐらい進化できているかのワクワク感。ただそれだけだった。

## 猫の迷いと決意

結界が張られた事により、イツセー達は逃げ場を失ってしまった。

「そんじやまあ、せいぜい楽しませてくれよ!？」

美猴は棒を振り回すとイツセー目掛けて伸ばした。

「うわあ!？」

イツセー達は横へ飛ぶように避けた。美猴は外したと思いきま同じように棒を当てようとした。その時だった。

「ほう?これはまあ面白い珍客だな」

「おっさん!？」

突然 その場を黒い影が覆った。皆は上を見上げた。見るとイツセーの修行相手であるタンニーンがその場を巨大な影で覆いながら飛んでいたのだ。

それを見た美猴はまるで子供のようにはしやぎ出した。

「おうおう!?!元龍王じゃねえか!いいかい黒歌!」

「どうぞ。二人分の首ならヴァーリも納得してくれるわ」

「俺も一緒かよ!筋斗雲!そして伸びろ如意棒!」

美猴は興奮し筋斗雲を呼び寄せると飛び乗りタンニーンへ向けて如意棒を放った。

向かってきた如意棒をタンニーンは横に回避する。

「ハッ!孫悟空め。なんとも楽しませてくれよ!」

ドオオオンツ!

タンニーンも負けじとイツセーの修行よりも倍以上の炎を吐き出した。

—————

「ふくん。孫悟空に元龍王…まあお似合いね。さて、そろそろ妹を渡してくれない?」

黒歌は小猫へ目を向けた。すると、今まで俯いていた小猫が顔を上げた。

「…へえ。随分と怖い顔するじゃない」

その顔はいつもの表情ではなかった。目は鋭く 目も猫のような瞳がより一層 鋭くなっていた。

「姉様：私は絶対にリアス部長の元は去りません。絶対にテロリストなんかにはなりません」

「：あらあ？お姉ちゃん悲しいニヤ。でも残念でした。貴方が拒否しても連れて行くニヤン。2人を殺してでも」

その言葉にイツセーとリアスは戦闘態勢を取る。だが、その脅しの言葉に小猫は慌てる事は無かった。まるで自分の信念を貫き通すかのように言い放つ。

「2人には絶対に手出しはさせません：。皆を守るために：私は強くなったのですからッ!!」

その瞬間 小猫の身体から白いオーラが溢れ出た。そしてそのオーラは強く輝き出し辺りを真昼のように照らし出した。

「ハアアアアッ!!!」

小猫の叫びに周りの木が気迫に押され揺れ始めた。

「おわ!!」

イツセーやリアスそして黒歌は目を瞑る。そして光がなくなり、皆が目を向けたそこには

「白音：まさかその姿：」

目の前には全身から白い気を発し 猫又の特性である尻尾と耳を生やし、先程とは雰囲気が全く違う小猫が立っていた。

「私は今まで：この力を嫌ってきました：暴走して自分を見失うのが怖く：恐れていた。でも、今は違う：この力の悩みや不安：そして恐怖心をあの人は全部壊してくれた！だから私はここまで強くなれた：：」

その鋭い目は黒歌を捉えると、拳を構えた。

「私は塔城 小猫！リアス・グレモリー様の戦車ッ！たとえ姉様だろうと：イツセー先輩や部長を傷つけるなら許さないッ！」

その言動と共に黒歌の撒いた毒ガスが浄化されるように晴れた。

その時だった。

「よし。その息だぞ小猫」



空中から小猫を鼓舞しながら何者かが飛来した。

ドオン！

「前までとは大違いだ。本当に成長したな。小猫」

「……その声は！」

煙が晴れ飛来した人物の姿が明らかになった時 黒歌は目を大きく開いた。

「……ゼノ……！」

そこにはスーツをたなびかせながら笑う銀河神 ゼノが立っていた。

突然のゼノの登場にリアス達は驚く。

「ゼノ!?まさか貴方も付いてきてたの!?!」

「そうだ。小猫の動きが不自然でな。ずっとタンニーンの上で観察してたよ」

そう言い上にいるタンニーンを指差す。

「にしても。SS級はぐれ悪魔か。小猫の力量を試すには丁度いいじゃねえか」

そう言いゼノは昔馴染みである黒歌を見る。彼女がぐれ悪魔になっていた事は既に風の噂で知っていた。故に小猫の対戦相手には丁度良いと思っていたのだ。

だが、それに対してリアスは反対した。

「何 バカな事言っているの!?!相手はSS級よ!小猫1人じゃ無理があるわ!」

「そうですよ!それに姉妹同士を戦わせるってどういうつもりですか!」

確かにそうだ。だが、彼女らは知らない。小猫がどれだけ成長しているのかを。魔力量という外見だけで彼らは決めつけている。だが、それはたった一部だ。小猫が成長しているのは外面だけではない。

故にゼノは言った。

「そんな心配いらねえよ。今のコイツはお前ら2人よりは確実に強いからな。それよりもイツセー」

ゼノはタンニーンから伝言を頼まれていたのだ。だが、その前に確

認する事があった。

「お前、神器が機能してないみたいだな」

「は…はい…」

見てみるとイツセーは籠手を出現させているのにも関わらず未だに倍加が出来ていなかった。

「じゃあたりだな。タンニーンからで、お前は禁手化の目の前まで来てるらしい。激的な変化が必要らしいぞ?」

その言葉にイツセーは驚く。

「ま…まじですか!?!」

「そうだ。だか…ん?」

ドオオオンツ!!!

その時だった。ゼノの右半身へ黒歌の放った魔力弾が当たった。

「いつまでも待ってると思った? 隙だらけよ」

「それはわりいな。けど防いだや

直撃したがそれくらいではゼノは倒れるどころか動かない。当たる直前の0.1秒の間に手を水平に払い魔力弾をかき消したのだ。

ゼノは小猫の肩に手を置くと囁く。

「さて、小猫。これは試練だ。今からお前の成長した力を存分にぶつけてこい。とは言ったものの姉だから戦い難いか?」

「はい…ですが…今の私の力なら…姉様の真意を聞くことができるかもしれないです…!」

「よし。なら行ってこい」

ゼノはその場から飛び上がり空中に移動した。

「あの子だけで私に勝てると思ってるのかニヤ?」

「思ってる。それにあれぐらい鍛えたからSS級ぐらい倒してもらわなきゃな」

「へえ。ならお手並み拝見と行こうかニヤ」

そう言い黒歌は小猫へ目を向ける。

対して小猫も目を向けた。そして再び拳を構える。

「勝負です。姉様ッ！」

拳を握りしめた小猫は状態を低くすると脚の筋肉を収縮させた。そして、一気に収縮した筋肉を伸ばしその場から黒歌まで飛び拳を放った。

「ヤアアッ!!」

その拳が黒歌に当たるとすつとすり抜けた。小猫は瞬時に理解する。これは『幻影』だ。だとすると本体はすぐ近くに姿をくらししている。

ならば辺りに攻撃を撒き散らしあぶり出そう。だが、それを許す程黒歌は甘くはなかった。

「残念♪ハズレにゃ」

「うぐ!?!」

何もないとところから放たれた魔力弾が小猫の背中へ放たれた。だが、小猫は耐え状態を直すと手に鬼火を生成した。

そしてそれを黒歌の魔力が感じれる場所へと投げた。

ドオオオオオオオオンッ!

地面へ着弾した鬼火はそこにある木々一帯をまるまると包み込み大爆発を起こした。

「…見つけましたッ！」

小猫は黒歌の気を察知するとすぐさま森の中へと駆け出していった。

「ちよつと小猫！」

リアスは後を追いかけようにも既に姿を消してしまったので追いかける事ができなかった。

—————

一方で上空ではゼノは黒歌と小猫の戦いを見ていた。

小猫と黒歌を戦わせたのは理由があった。

それは小猫がゼノへ弟子入りをしてきた日の夜だった。

「小猫、突然だけど…姉の事をどう思ってる？」

「…」

ゼノは小猫へ黒歌の事について聞く。それに対して小猫は俯きながら答える。

「…分からないです…」

「そうか」

するとゼノはある事を打ち明けた。

「実はさ、お前らと会った直後にお前の姉に会ったんだよ」

「へ…？」

突然の告白に小猫は目を丸くした。

「ほんと 調子のいい奴だったよ。二、三日一緒にテントで過ごしたけど、結構 面白かった。んで、その時にソイツはお前の事を話してくれたよ」

「…何て言っていましたか…？」

「薄っすらなヤツだけだけど…」

小猫は知りたかった。本当は姉は自分の事をどう思っているのかを。

そしてゼノはあの時 めちゃくちゃ聞かされた妹の自慢話を再生するかのように話した。

「…無口で可愛い。後ろからトコトコとついてくる姿がペンギンみたいで可愛い、『お姉ちゃん』って呼んでくれない、それから…」

「うう…」

ゼノから聞かされたのは殆ど 『可愛い』ばかりであり、聞いてくるとムカツとする事が大半であった。

「そして、最後にこう言っていた。掛け替えのないたった一人の大切な『妹』って」

「ッー」

小猫はとても信じる事ができなかった。あの日 力に飲まれ主人を殺し、拳句 自分を追いて去っていった姉がそんな事を思っている筈がないと。小猫は疑う。

「信じられないか？」

「…はい…」

「ならそう思ってたな。ほら、さっさと寝よ」

「そう言いゼノは布団を被る。」

「ただ、これだけは言っておく。この話は本当にあった事だ。信じるか信じないかはお前次第だよ」

「それだけ言おうと眠りにつく。」

—————

—————

—————

「…（小猫…今のお前は どう思っているんだろうな…）」

ゼノはあの日の夜 話した事を思い返ししながら小猫の姿を見守った。

—————

「それッ！」

正体を現した黒歌は再び分身をすると全員で魔力弾を小猫へと放った。

「…止まって見えます…！」

対して小猫は向かってくる魔力弾の大群を手で全て弾き落とした。

「嘘…でしょ…。白音…貴方一体どういう修行をしたの？とてもグレモリーの修行じゃ出来ないと思うけど？」

黒歌は小猫の異常な戦闘力に驚き尋ねる。それに対して小猫は首を左右に倒し骨を鳴らすと答えた。

「…この世界で一番強い…『神』様です」

「ッ！」

「では、私からも姉様に問います」

小猫はある事を黒歌へ聞いた。それは 自分を置いていったあの日の事だ。

「…姉様は本当に私の事が邪魔だったのですか？」

「はあ？何その質問。当然の事に決まってるじゃない。だからな：「では：何故あの時：私を置いていった日にあんなに辛く悲しい顔をしていたのですか？」」

小猫の質問に黒歌は突然黙り込む。それでも小猫は次々と問いたい事を言う。

「私は：姉様の言ったことがよく理解できません。それに私を連れていくなら：姉様なら催眠術や妖術で一瞬で連れて帰れる筈です。何故そうしないのですか？」

度重なる質問に対し黒歌はついに口を開いた。

「：答えて何になるの？そんな下らない質問に」

そう言い黒歌は妖術で巨大な木の根っこを地面から出現させた。

「答える気はないニヤン♪」

出現させた大樹で小猫の四肢を締め上げた。

「はい捕まえたニヤ。どう？いくら貴方でも解けないでしょ？」

大樹はとても太く小猫の身体程の幅があり、動かそうとするも、大樹はビクともしなかった。

「貴方の言う通り気絶させた方が連れて行きやすいわね。ちよつと眠ってもらうニヤン♪」

そう言い木の締め付けが強くなり、小猫の腹部や腕と足をきつく締め上げ始めた。

だが、小猫の意識は落ちる事は無かった。俯いた顔を上げるとうっすらと笑った顔を黒歌へ向けて言った。

「：姉様は嘘が下手ですね」

「!？」

小猫は先程からの黒歌の気の乱れから確信していたのだ。黒歌は小猫を「邪魔者」だとは思っていなかった事を。

「ハアッ！」

力を込めて小猫は腕を握り締めた。すると、小猫の身体から白い気が湧き上がり、先程までビクともしなかつた大樹が少しずつメキメキと音を立て始めた。

そして 小猫が腕を大きく動かすとその大樹は引き千切れ地面へと崩れた。

「なっ!?!」

拘束を解き地面へと着地した小猫は黒歌の方へ目を向けた。

「あの時…主人を殺した時、姉様は…力に飲まれた訳じゃない…私を守ろうとしてくれたんですよね」

「ッ…そ…それは…」

黒歌は初めて露骨に焦りを出した。凶星だということを小猫は感じ取ると真剣な眼差しを黒歌へ向けた。

「ですが…私は…もう昔のように姉様に守られてたばかりの白音ではありません。自分の身は自分で守れる程…強くなったのですから」

「……………」  
小猫の強い意志が込められた言葉に黒歌は溜息をつくど戦闘態勢を解いた。

「はあく。もう今回は諦めるわ」

そう言いつまらなそうな表情をしながら小猫へと背を向けた。けれど振り返った瞬間 何か安心しているようだった。

「まあ、気をつけなさいよう？その力を使い過ぎたら貴方の大好きな部長や皆が苦しみ…貴方を咎める事を」

去り際に放たれた言葉に小猫は笑顔で返す。

「心配してくれるなんて…やっぱり姉様は優しいですね」

「ッ！……くう……！」

黒歌は一瞬 驚くと 顔を拭いその場から走るように森の中へと消えていった。そして、この場から黒歌の気配が消えると上空から見ていたゼノが降りてきた。

「終わったか。どうだった？」

ゼノに問われた小猫は笑みを崩さず言った。

「先輩の言っていた通りでした…。姉様はずっと私の事を思っていてくれていました」

「なら、お前はどうしたいんだ？」

ゼノは姉の真実を知った小猫に対し意志を問う。それに対して小猫はまつすぐな答えをだした。

「もう一度…：姉様と…一緒にいたいです…」

小猫は今回の戦いで気づいたのだ。自分が嫌っていた姉は本当は誰よりも自分を大切に思っていてくれた事を。そして、小猫は目から大量の涙を流した。

「姉様…：…ううあああ…!!」

声を上げながら涙を流す小猫をゼノは優しく撫でた。

その後 黒歌が撤退した事で美猴も引き、結界は崩壊。それにより、皆が駆けつけたが既に痕跡もなく、この騒動でパーティーは中止となった。

だが、今回の騒動で小猫は姉である黒歌への信頼を取り戻しいつかまた一緒に過ごしたいという思いが現れ始めた。

—————

そして、同時刻の禍の団のアジトの誰もいない岩場にて

撤退していた黒歌は空を見ていた。あれ程 苦しい思いをさせたというのに 酷い事を言ったというのに 幸せにしてあげられなかった自分に笑顔を向けてくれた。それだけがとても嬉しかった。

「(私が…あの時 白音と一緒に連れ出せていれば…)」

黒歌は過去の自分の行いに後悔しながら涙を流し、空に浮かぶ美しい月を見上げる。



「白音…こんなバカなお姉ちゃんだけど…できたらもう一度…やり直  
したいなあ…」

離れていても姉妹の気持ちは繋がっていた。

## 試合の始まり

禍の団の襲来騒動より翌日の夜

ゼノはグレモリー邸のある一室へと来ていた。

「どうぞ」

「どうも」

グレイファイアが淹れてくれた茶をゼノはゆっくりと口に運ぶ。目の前にはスーツ姿のサーゼクスがソファアへと座っていた。何故彼らの部屋を訪れたのかというと、ある事を聞きたかったからである。

「悪いな。夜中いきなり押しかけて」

「いや。気にしなくていいよ。それよりも…話とは？」

サーゼクスに問われたゼノは真剣な眼差しを浮かべある事を聞いた。

「…一度 はぐれ悪魔になった奴のはぐれを取り消す方法はあるのか？」

「…」

その問いにサーゼクスは手を顎に当てる。

「ある。ただ、少し難しくなるね」

「教えろ」

サーゼクスは頷き話し出した。

「はぐれを取り消すには元老の方や皆と一度その者について話さねばならない。一人でも反対があれば、すぐに取り消しが無効となる」

「へえ。つまり、あの会合で騒いだ奴らを納得させなければならぬって事か」

「うん。だが、ランクが高くなると少し厳しくなるね…中でもSS級となると尚更だ。…やはり、小猫くんの事を気に掛けているのかい？」

サーゼクスは知っていた。ゼノが認定を解除させたいはぐれ悪魔が『黒歌』だという事を。

「…アイツを強くさせるためにはソイツが必要だしな」

「ふむ…」

すると、ゼノは立ち上がる。

「ま、方法が知れたらそれでいいよ。俺はこれで帰る」

そう言いゼノは瞬間移動をして、ホテルへと戻っていった。

ゼノが去った後 サージェクスは本部へと赴き はぐれのリストの中から黒歌に関する書類を取り出した。

「サーゼクス、やはり貴方も」

「ああ。実は私も前から黒歌のはぐれ認定について気になっていたんだ。はぐれとなった原因は恐らくだが、眷属として仕えていた主人が問題だと私は思っている」

「では…」

「ああ。証拠が揃い次第 議題としてあげるつもりだよ」

そう言いサーゼクスはこの日一睡もせず膨大な書類へと目を通した。

「ただ…彼女が禍の団に属しているとなると…やはり難しくなるな…」

—————

それから数日

皆は集まりミーティングを行っていた。

「ソーナとの対戦もいよいよ明日となったな。そこで、今回は対ソーナ眷属の会議を行いたいと思う。まずリアス、相手はお前達をどれくらい知っている?」

「そうね…前のレーティングゲームを見ていたからある程度は知っていると思うわ」

「なら、向こうの事をお前はどれくらい知っている?」

「ソーナと女王、そして大体の眷属ね。能力が分からない者もいるけれど」

リアスはあまり向こうの眷属と接した事がないためあまり、情報を持ち合わせていないようだ。

「レーティングゲームでは、プレイヤーに細かなタイプをつけている。まずは木場だ。お前は速さが利点だからテクニクタイプだ、そして

リアスと朱乃がウィザードタイプ、ギヤスパとアーシアがサポートタイプ、イツセーと小猫とゼノヴィアがパワータイプ。まあこんなところだ。

取り敢えず、イツセー、お前は禁手化に至ったっつろ？」

「は…はい」

実は小猫達が黒歌と戦っている時にイツセーは禁手化に至ったのだ。だが、小猫を見つけた時には既に黒歌は撤退しており、力を発揮出来なかったのだ。

「お前が特に注意するのはテクニクタイプだ」

「て…テクニクですか…？」

「そうだ。お前の場合、ゴリ押しが多いだろう。だが、そのゴリ押しを利用して別方向からの攻撃、またはカウンターを仕掛けられる奴とは最悪だろうな。リアスはそこんとも見て戦略を練るのが課題だ」

「分かったわ」

アザゼルは要注意なイツセーとカリスマ性が必要なリアスの2人へアドバイスをするのと隣にいるゼノへと目を向けた。

「ゼノ、エキシビジョンマッチだが…向こうがマジでやめてほしいと懇願してきたぞ？」

「あ？」

アザゼルの通告にゼノは欠伸をすると頭をポリポリとかくと面倒な表情をした。

「うくん…まあ、俺はもうやる気が失せたからいいけど、あのコスプレ魔王はどうなんだ？」

『コスプレ魔王』とはセラフオールの事だろう。それに対してアザゼルはやれやれとした表情を浮かべながら答える。

「…全然受け入れなかったな。万が一お前さんが出なければセラフオールが代理でやるぞ？」

「あく。ならしょうがない」

何とも酷い話にリアス達はついていけなかった。

「まあ取り敢えず、『無理』と伝えといてよ」

「はいよ」

あの陰湿な雰囲気、腹が立っていたアザゼルは何の抵抗もなく、ゼノの答えを受け取った。

「ほんじゃ、各自解散。ゲーム前日だから無理なトレーニングはやめろよ」

『ありがとうございます』

こうして、皆は前日、各自で自由に過ごす事になった。

—————

当日

会場は熱気に包まれており、皆、早く始めろと言わんばかりの雰囲気であった。

「凄いなあ…このムードの中、ステージに立つなんて緊張しちゃうよ…」

「ヒイイイ!!人がいっぱいですうううう!!」

「お前、克服したんじゃないのかよ!」

会場のあまりにも強烈なムードに修業を終えたギヤスパも段ボールに籠ってしまった。

「さて、私達の試合まで時間があるし、観客席へ向かいましょう」

そう言いリアスは皆に呼びかけ観客席へと向かった。

「うふふ。鍛えた動体視力でもゼノ君の動きは見えるのかしら?」

「わかりません…けど、多分少しだけしか見れないと思います…」

2人はコツソリと話しながら皆の後をついていった。

—————

所変わってフィールドにて

一足先に早く着いたゼノは相手を待っていた。いつものチャイナ服を身に纏っており、二、三発殴るのは確実だろう。

「にしても遅いな。いつまで待たせるんだ?」

そう言い首を捻り骨を鳴らす。その様子がモニターに映し出され観客席側へとアップされた。

だが、殆どの者はゼノの事を知らずに誰だ?という表情を浮かべて

いた。

すると、スピーカーから一瞬 ザザツという音が流れるとセラフオールの声が聞こえた。

「皆さま、これよりレーティングゲーム前のエキシビジョンマッチを始めます。今回は 他の神話系統から来た使者に年配の悪魔の方々が信頼性を持つ事ができなかったため、それを証明するためにこの前覧試合を開催しました。では、さっそく公開しよ…エキシビジョンを始めましょう！」

『…!?!』

不審な単語に皆は一斉に『ん?!』と耳を傾ける。

—————

「始めましようって言ったってなあ」

すると、目の前の地面に魔法陣が現れた。

「ようやく来たか」

ようやく対戦相手が現れ、試合が開始される事となった。

「ん？」

ゼノは突然 首を傾げる。現れたのは会合の時に見た老人ではない。会合の時に見た筋骨隆々の若手悪魔だ。

「誰だお前？あの老人供じゃねえのか？」

その青年は現れると同時に頭を下げた。

「初めまして、私はバアル家次期当主の悪魔 『サイラオーグ・バアル』と申します。この度 上層部の方から頼まれ、代わりに私がご相手する事になりました」

「…へえ」

結局 逃げた老害達にゼノは呆れてしまった。

「ツ…：偉そうにしてる奴らが本番にこれか…」

その一方で知らされていなかったのはゼノだけでなく、セラフオールの同じであり、ガラス越しからも皆が感じ取れる程 激怒していた。

「ま、アイツらが来ないならやる意味はないな」

ゼノが来たのは老害どもへの制裁。本人がいなければ意味は無い  
と思ひ会場から出て行こうとした。すると、後ろから青年悪魔サイラ  
オーグに呼び止められた。

「お待ちください」

「ん？」

サイラオーグはゼノを呼び止めた。

「勝手なお頼みで申し訳ありませんが、私からも手合わせを願えませ  
んか？」

「……」

突然の頼みにゼノは迷った。このサイラオーグという悪魔は確か  
にそこら辺にいる者よりも強い。その上 魔力を持たず、肉弾戦を用  
いると聞いていたので少し興味があつた。なので多少の暇つぶしと  
して了承した。

「いいよ。そのかわり…全力で来いよ」

「はいッ！」

—————

一方で観客席で見えていたリアス達は予想外の展開に驚いていた。

「サイラオーグ!?なんで彼が相手に!」

「うふふ。どうやら向こう側の方々は、相当 ゼノ君が怖かつたんで  
しようね。だからサイラオーグさんに頼んだんじゃないですか？」

「だからと言って流石にマズイわよ!」

いくら肉弾戦に特化しているサイラオーグとて、ゼノの強さを少し  
しか見ていないので、下手をすれば重傷では済まないと思ひ、リアス  
はすぐさま試合中止を促そうとするも、朱乃が制した。

「まあまあ、ゼノ君なら力の加減くらいできますよ」

「だどいいのだけれど…」

周りの他の貴族達はリアスの発言に首を傾げていた。

「リアス様は何をおっしゃられてるんだ？」

「サイラオーグ様ならあんかちびっ子 などすぐに倒してしまううで  
しょうに」

だが、彼らは後に目が飛び出す光景を目にする事になるのだ。

「ねえねえサーゼクスちゃん♪なんで試合直前に教えにきてくれたのかな〜?」

セラフオルーに詰め寄られながらサーゼクスは汗を流し答えた。

「い…いやあ…その通達のミスで—— ぶべえらツ!」

言い訳しようとしたサーゼクスの頬セラフオルーの見事なストレートパンチが抉り込んだ。

「本当の事を言えよ…?嘘ついた事分かってるんだけど…?」

セラフオルーの怒気に負け、サーゼクスはアツサリと自白した。試合拒否の通達を試合直前に知らせると老人達から言われたそうで、頼まれたサーゼクスは断る事が出来なかったそうなの。

訳を話すとセラフオルーはいつもの調子に戻った。

「なあんだ!サーゼクスちゃんが手を回してたんじゃないんだね!ごめんね!いきなり殴っちゃって」

「う…うん…別にいいよ」

セラフオルーの素を見たサーゼクスは恐怖のあまり震えた。

「もう〜これでサーゼクスちゃんが手を回してたら殺しちゃうところだったよ〜」

「ははは。まさか…:…え?今なんて?」

すると、合図と共に試合が開始され、サイラオーグとゼノの勝負が始まった。



## サイラオーグ V S ゼノ

試合開始の合図と思わしきチャイムが鳴った瞬間 サイラオーグの剛腕がゼノに向かって放たれた。

「ふうんッー」

その拳をゼノはアツサリと避ける。が、サイラオーグは最初から避けられる事は分かっていたようで、その体制から踏み込みもう一方の腕を放つ。

「はあッー」

二発目に放たれた拳をまたもやゼノは避けた。すると、サイラオーグは続け様に次々と自身の剛腕を放ってきた。

「ほう?」

対してゼノは右手を構えると向かってくる拳 全てを手で受け止めた。拳を掴んだ場合 すぐにサイラオーグは攻撃の手を止めるだろう。それでは面白くないと思ひゼノは受け流すだけに徹しているのだ。

一方で、サイラオーグも遊ばれている事は気付いている様子で拳の乱射を止めると後方へと飛ぶ。

「うん。いいな。今まで戦ってきた悪魔の中で一番 強い」

「褒めてくださる割には全く効いているご様子がないですね」

ゼノの賞賛にサイラオーグは当たり前のように返す。ただ、ゼノは内心 少しイラついている事があった。

「おい」

「?」

頭に筋を浮かべ、珍しく怒りの表情を見せたゼノはサイラオーグへある事を言う。

「お前、本気じゃねえだろ?」

その言葉にサイラオーグは黙る。実は今の彼の力はまだまだ序盤に過ぎないのだ。彼もまた 神器所有者である故、神器を纏ってこそ、本気と言え。だからゼノは言う。

「神器とか何か持つてるなら遠慮しないで使えよ」

その言葉にサイラオーグは頷いた。

「分かりました」

そう言うときサイラオーグは手から大きな戦斧を出した。すると、斧が輝き出し、見ると斧はフードを被った少年へと変貌していた。

「コイツは私の神器である『獅子王の戦斧』です。他の神器と違い、自立型で主を探しているところを見つけ眷属にしました」

「へえ。神器を眷属にするなんて初めて見るな」

幾多ものある神器の中でもサイラオーグの持つ神器は特に特殊であり、自信の身体を持っているのだ。

「行きます。……『我が獅子よッ！ネメアの王よッ！獅子王と呼ばれた汝よッ！我が猛りに応じて衣と化せえッ!!!』」

そう叫んだ瞬間、サイラオーグの身体から光が発せられ、辺りを眩しい黄金の光で包み込んだ。

—————

「ぐう!?ま…眩しい…何だこれ…」

「…まさか…サイラオーグ…神器を持っていたの…!?!」

閃光を物ともせずにはフィールドの中心を見つめながら驚くりアスの言葉にイツセーは反応する。

「部長も見なかったことがないんですか!?!」

「ええ…私どころか…彼以外で神器を持っていると知っている者は周りにはいなかったわ…恐らくだけど…お兄様も知らなかったと思うわ…!?!」

そう言われたイツセーは魔王でさえ見た事がない未知の禁手化のある事に驚き、フィールドへと目を向けた。

周りの皆も興奮のあまり、リアスと同じようにその場を見つめた。

「サイラオーグ様が神器を!?!」

「何という事だ…!?!」

—————

光の発光が収まると、ゼノは驚いた。感じ取れるのは魔王以外の悪魔の中でも飛び抜けた戦闘力、そして闘気。

「へえ。それがお前の神器か」

そこには黄金のライオンの鎧を身に纏い身体中から金色のオーラを発しているサイラオーグの姿があった。後頭部から後ろへと流れる長髪はライオンの鬣のようになびいており、王者のような風格を与えてきた。

「はい。これが私の禁手化『獅子王の剛皮』です。では…行きます…ツ！」

そう言うと、サイラオーグは拳を構えた。

「ぬうんツ！」

自身の神器と一体化したサイラオーグは一気にその場から踏み込むとゼノのいる場所まで飛んだ。

「はあッ!!」

雄叫びを上げながら拳を握り締めるとゼノに向かって一気に放った。

対するゼノは一瞬ながら笑みを浮かべると顔を横に逸らす形でその拳を避けた。避けた拳はゼノの横を通り過ぎると、軌道上の空気を向こう側の壁にぶつけた。その威力は特別に硬く作られているとはいえ、フィールドの壁に巨大なクレーターを作った。

今まで見てきた神器の中で一番の破壊力だ。

「へえ」

ゼノが向き直ると目の前にサイラオーグの拳がまたもや迫ってきていた。

それを避けるとサイラオーグは再び強烈な乱舞を繰り出してきた。

「うおおおおおッ!!」

雄叫びを上げながら獣のように縦横無尽に拳を繰り出すその姿はもはや野生の猛獣である。

ゼノは迫り来るサイラオーグの野生の乱撃を右手で次々と受け流していった。

すると、乱舞が突然やみ、サイラオーグの身体が横に回転した。

「ッ！」

その瞬間 ゼノは状態を下に下ろした。すると、ゼノの頭の上をサイラオーグの回し蹴りが通り過ぎていった。すると、髪が揺れる程の突風が巻き起こった。一般の悪魔ならば、避けなければ確実に首を持つていかれただろう。

だが、サイラオーグの攻撃は止まなかった。

回し蹴りを終えたサイラオーグは突然 脚を振り上げ、下に状態を比較しているゼノに向かって振り下ろしてきた。

「でやあッ!!」

だが

「な…!?!」

その攻撃の対処など、ゼノにとっては容易い事だった。振り下ろされた踵をゼノは掴むように受け止めた。そして、手を離すと一瞬ながら笑みを浮かべる。

「俺からも一発 いくよ。死ぬなよ」

「ッ!?!」

その瞬間ゼノの姿が消え、サイラオーグの目の前へと現れた。突然現れた事により、サイラオーグは驚く。そんな中、ゼノは拳を握り締めると予告通りサイラオーグの頬へと拳を放った。

「ぐう…!?!」

その拳は頬へ減り込むと同時にサイラオーグの身体を吹っ飛ばした。

ドオオオオオオオオオッ!

吹っ飛ばされたサイラオーグはそのままフィールドの壁へと激突した。

辺りには四方が見えなくなる程の砂煙が舞っていた。

ゼノは腕を軽く回すと吹っ飛ばした方向へ向け口を開いた。

「今まで戦った悪魔の中でお前は一番強かったけど、詰めが甘いところがあるな」

煙が晴れると、向こう側には、サイラオーグが、鎧が解け、身体中がボロボロで意識を失いかけた状態となっていた。本来ならば意識を失う程のダメージを与えた筈なのだが、意識をまだ保っている事にゼノは驚いていた。

「は…ははは…やはり強いですね…まったく歯が立たなかつたです…」

「へえ喋れるのか。俺の力を込めた一撃を受けて意識を保っていたらなんて、大した奴だね」

そう言いゼノは賞賛すると、サイラオーグへ近づき仙豆を手渡した。

「食え」

「豆…?」

いきなり豆を渡された事にサイラオーグは頭に?を浮かべる。

「取り敢えず食え」

そう言われたサイラオーグは豆を口に入れると飲み込んだ。すると、傷が一気に全回復し、疲れも吹っ飛んだ。

「おお!? 凄い! 身体が軽い!」

「ボロボロだところの後のお前の仕事に支障がでるだろ」

そう言いゼノはサイラオーグへ背を向けた。

「じゃあな」

「…! ありがとうございます…!」

サイラオーグは去りゆくゼノの背中へ向け、深く頭を下げた。

こうして、前覧試合は幕を閉じた。次はいよいよリアス達の番だ。成長した朱乃や小猫はどういう戦いをするのか。また、リアスはその駒をどんな方法で操るのか。

「さて、じっくり見させてもらおう」

## 破滅の予知夢

「ううう…んん…!!」

ビルスは自分の寢床で夢を見ていた。

—————

場所は空が赤く、魔界のような場所。ビルスの目の前には白髪で、血のように真っ赤に染まる目をした少年が立っていた。見るとその周りには身体がバラバラに引きちぎられていたり、頭部が潰されて脳髓が撒き散らされたりと無残な状態となった暗黒魔界の兵達がいた。

「ヴオオオオオオッ!!」

その少年は、まるで理性を失くしたかのように獣のような唸り声をあげた。すると、身体中からドス黒いオーラが湧き上がり、ビルスの身体を吹き飛ばした。

「うぐう?!何だコイツは!?!」

戦い好きなビルスでも、冷や汗を流しており、相当な危険度を感じ取らせる。すると、その少年はビルスを見ると襲いかかってきた。その速度は軽く光の速さを越えており、一瞬にしてビルスの寸前まで迫ってきた。

「ヴオオオオオオッ!」

振り下ろされた拳をビルスは受け止めた。ビルスは破壊神であり、第七宇宙で2番目に強い者だ。並大抵の者に本気を見せる事はない。だが、今回ばかりは本気を出していた。その理由は今 自分にパンチを放ってきた少年の攻撃を受け止めた際 受け止めたにも関わらず衝撃が激しく伝わってきたからだ。

「舐めるなよッ!」

ビルスは少年の受け止めた手を捻ると、蹴りあげた。だが、少年は笑いながら怯みもせずの状態を戻すと またもや拳をふりあげビルスの頬へ向かって拳を放った。

バアンツ!

「ガバア!?!」

その瞬間 ビルスの身体に巨大な衝撃が走り その地点から身が

一気に宇宙まで吹き飛ばされた。

ガアアアッ!

「ばあ……」

そして 吹き飛ばされたビルスを受け止めたのはその星から何光年も離れている星だった。叩きつけられたビルスは肺の空気と共に血を吐き出した。

だが、彼は気分がとても良かった。それは、古の時代の好敵手『孫悟空』以来 味わえなかった興奮をもう一度味わえるのだから。

「へへ……いいね君……僕も本気でいっちゃおうよッ!」

ビルスは怒りとテンションが混ざり合い自身も本気を出すと宣言すると、身体中から紫色のオーラを溢れ出しその星から一気に跳躍するとその少年の胴体へ向けて水平に蹴りを入れた。

「うおりやッ!」

「ガバア……!」

蹴りは深く抉り込み、少年の腹を歪ませ数千万キロも先へと吹き飛ばした。

「ハアアアアッ!!」

だが、手は緩めない。ビルスは両手から無数の小さな気弾を作り出すと吹き飛ばした少年へ向かって投げた。その気弾は全て少年に向かっていき、少年の身体へ次々とあたり爆発していった。

「さて。どうかな? 身体の部位一つは吹き飛んでいると思うがね」

だが、ビルスの予想は全く外れた。煙が晴れるとそこには 身体がボロボロでありながらもケラケラを不気味な笑みを浮かべている少年の姿があった。

「凄いなあ。まさかそんな傷だけで済んじゃうなんて。正直 驚いたよ」

ビルスは自分の予想を上回る少年を賞賛すると、一気に自身の気を最大限に解放した。

「こっからは僕も本気でいくよ……?」

ス：

両手を上に上げると身体中からエネルギーを集め惑星半分程はある超特大の太陽を生成した。

「ハアアアアア!!!」

そして 叫び声を上げると少年へ向け、銀河数十個をまとめて吹き飛ばす程の太陽を投げた。すると、その少年も手を大きく上に上げた。

「ヴォオオオオオツ!!」

その少年は再び雄叫びをあげるとビルスと同じ大きさの太陽を作り出した。だが、ビルスが作ったモノとは全く色が違い、太陽というより、まるでブラックホールのように全てを飲み込もうとする黒い色だった。

少年は向かってくるビルスの太陽に狙いを定めると、その太陽へ向け、自身の作り上げた黒い気弾を放った。

そして 互いの気弾がぶつかり合い、両者の激しい押し合いが始まった。

「うおおおおお!!!」

「ヴアアアアアアア!!!」

その瞬間 ぶつかり合う気弾が大爆発し、辺り一面を白く包み込んでいった。

—————

「うおおおお!!!」

「おや?」

ドンドーンツ!!

突然 叫びながらビルスはベッドから跳ね起き、その振動で辺りの目覚まし爆弾が破裂していった。

「どうしました? また変な夢でも見たんですか?」

「そうだ! そうなんだウイス!」

目覚めたビルスは目をキラキラとさせながら見た夢を語った。

「凄いぞ...! 僕に本気を出させてきた奴がもう1人 出てきたんだ!



ソイツと僕は激しい戦いをして、最後は撃ち合いで目が覚めちやったけどね！」

まるで子供のようににはしゃぐビルスにウイスは呆れた。

「はあ…。つまり『予知夢』ですか。でも…孫悟空さんの時以来も相変わらず的中率高くないじゃないですか。この前だつて宇宙でもトップのアイドル事務所のスカウトが来るって夢、当たらなかつたじゃないですか？」

「またバカにしてるな？」

「はい。まあそれよりも、戦った相手の詳細は分かりますか？一応予知夢は予知夢ですし、当たる確率も存在します。早めに動いた方がよろしいかと」

「そうだな。まず、奴は髪が長く真っ白だったな。そして目は真っ赤っかだ。んで、気はまるで悪人のように真っ黒だった」

ビルスの曖昧な説明にウイスは首を傾げた。

「随分と曖昧ですね。それで？いつ頃現れるとお思いで？」

「そうだな…場所は恐らく暗黒魔界だ。周りに奴の死体が転がってたから、ゼノが事件を解決した直後だろう」

「ほう。となると、2年以内という事になりそうですね。まああんまり期待はできませんけど」

そう思いながらも、ウイスは少し不思議に思っていたのだ。先程ビルスが話したその戦士の特徴が、どこかで見た事があると。

「まさか…いや、それはないでしょう…彼の封印は余程の事がない限り解けないはず…」

その目からは不安を感じ取れた。

—————

一方でゼノは控え室を出ると、観客席へと移動した。先程の試合で顔がバレているため、見つかると思われだろうと思いい顔に口髭とサングラスを付けていた。

見てみると次のステージの準備が進められており、次のステージはどうやらシヨツピングモールのような。

「さて、どうなるかな」

近くで買ったジュースを飲みながらゼノは試合場を見る。

「いい？相手はライザーよりも数は少ないけれど巧みに眷属を使ってくるわ。あまり前に出過ぎないように戦いましょう」

『はい。部長！』

リアスの言葉に皆は一斉に頷いた。数で攻めるライザーと違いソーナは戦略を精密に立て的確に繰り出す知的な戦い方をするだろう。そうとなると今回ばかりは少し苦戦してしまうだろう。

すると

『フィールドの用意が完了しました。選手の方々はゲートへお進みください』

放送が入る。いよいよ対決の時だ。

皆は息を飲みながらゲートをくぐった。

—————

『転送された場所が本陣となります。今回のステージは人間界のショッピングモールです。ルールにつきましては必要以上の破壊は禁止とし違反した場合は即失格となり退場となります。各チームで2人がルールを違反し、退場となった場合は、その時点でゲーム終了とし、相手の勝利となります。なお、兵士のプロモーションは本陣から約5メートル範囲に入った瞬間に可能となります』

少し特殊なルールにパワー重視のイツセーと小猫は少し苦い顔をする。イツセーはまだしも、小猫は下手をしたらフィールドもろとも吹き飛ばす可能性があるので危険だろう。

そのため 小猫は少し後衛守備、朱乃もだ。彼女達の技の威力は修行により大幅に上昇しているため 切り札としてとっておいた方が良いでしょう。

そして騎士の二人であるゼノヴィアと木場は同伴行動。ギヤスパーとアジアは本陣での待機となった。

「相手は必ず隙を突いてくるわ…。特にイツセー。禁手化をした際は注意してちょうだい？」

「はい！」

「それと、朱乃と小猫はできるだけ技の威力を抑えてちょうだい。下手をすれば失格になるかもしれないから」

リアスは念を押しながら二人に指示する。二人は頷くと、話は終わり、皆はそれぞれの持ち場へと着いた。

—————

一方で客席ではゼノはサングラスを外しながら試合の状況を見ていた。両者共に持ち場につくと、いよいよ試合開始となった。

「あまり壊さないというのがルールなら、朱乃と小猫を後衛に置くのは正解だな。もつとも…2人がそれを守るかどうかだが…」

そう思っていると隣に誰かが座る音がした。

「隣、失礼するね」

「ああ」

気さくに返事をする。すると、ゼノは「ん？」と首を傾げた。

「(この声…どこかで聞いたような…)」

そう思いながら隣に座った人物をサングラスを上げながら見てもた。

「あ、お前か」

「え？……ん!？」

そう言う相手もゼノの方へ顔を向けてきた。その人物は『イリナ』だった。

「ぎ……ぎぎぎぎぎ銀河神さ…ぐはあ…!？」

とてつもない声量でイリナが驚き、危うく自分の通り名を口に出してしまおうとしたので、ゼノな咄嗟にボディーパーを叩き込んだ。

「静かにしろ。ここでバレたら大騒ぎになるだろうが」

「うぐ……すみばせん…」

腹を抑えうずくまるイリナに容赦なく言い放つ。一方でイリナは泣きじやくり恨めしな目を向けながら謝罪した。

—————

—————

「成る程、教会に戻ってから俺が神である事を知ったのか」

「は…はい」

試合を観戦するゼノの横では土下座をするイリナの姿があった。ゼノが神であった事を知ったイリナは信仰心から、神に対して無礼を働いていたと思い返し土下座をしたのだ。

「まあ、俺が神に任命されたのは聖剣の後だからな。気にしなくていい」

その時だった。

ドオオオオオオオオンツ!!!

「え?」

「…ん?…まさか…」

突然の大爆音が鳴り響き、イリナは驚きすぐさまスクリーンへ目を向ける。一方でゼノは何か悪い予感がし、冷や汗を流した。

ゼノの悪寒は当たっていた。

『ソーナ・シトリー様の騎士、僧侶 全てリタイアです。なお、リアス・グレモリー様の戦車は会場の過剰破壊のため、失格となります』

「……………」

「……………」

さあてどうなります事やら。

—————

試合の会場では、とんでもない光景が広がっていた。

「……………」

「……………」

とても狭い通路のショッピングモールが、廃墟と化し、下と上の階層が丸見え状態となっており、上の階にいるソーナの眷属達は腰を抜かしていた。

そしてその通路のまだ新品さを残している本陣に繋がる道にて、禁手化をし 赤龍帝の鎧を纏ったイツセーと、キングであるリアスは目を点にして 啞然としていた。

その原因は…

「ふう〜…」

猫又の姿となり、身体に微量な稲妻を纏いながら一息ついている小  
猫だった。何故こうなったのかというところ…ギヤスパーとアーシア  
が敵の僧侶によってリタイアさせられたと同時に イッセーと行動  
している途中に多数の駒に見つかつた為、小猫がイッセーを逃がそう  
と殿を名乗り出て猫又の姿になつたのだ。

「さあ…早く〜…」

そう言い小猫は手に鬼火を生成する。

イッセーはすぐに戻つてくるといい、背中を預け走ろうとした。だ  
が、次の瞬間、後方が大爆発し、見れば今の現状が広がっていたの  
だ。

途中、音で駆けつけたリアスも何が何だか理解できなかつた。

「ん？」

すると、まだイッセーがいる事に気付いた小猫はすぐさま戻るよう  
に促した。

「イッセー先輩！早く本陣へ…！いつ他の相手が来るか分かりません  
！早く！」

すると

『リアス・グレモリー様の戦車、会場の過剰破壊により、失格となりま  
す』

「……………」

呆気にとられる小猫、放送が流れると共に魔法陣が現れ、小猫は真  
顔で吸い込まれていった。

小猫 退場

—————

「……………」

ゼノも頭に手を当て呆れていた。隣のイリナは何が何だか分から  
ず混乱していた。

「え…？なに!?何が起こつたの!?!」

「馬鹿がバカしでかした…」

—————

一方でリアス達は気を取り直すと 作戦を変更し、残りの皆とイツ  
セーと共にソーナと椿のいる場所へと走った。

「まさか朱乃まで同じ 事しでかしたりはしないわよね……」

「部長それフラグですよ!?!」

走りながら呟くりアスの言葉は後に……

## 暗躍する影

遠く離れた未開の土地 黒い雲が立ち込め、強風が走る 誰も知らない場所に1人の男性がマントを羽織る男性と共に姿を現した。

「ふん。随分と汚らわしい場所だな。ここに奴がいるのか？」

「はいはいはい。そうでごせえやすぜ神様♪」

マントを羽織る男性『リゼヴィム・リヴァン・ルシファー』は猛々しい声とは裏腹にまるで子供のようなニュアンスで喋っていた。

「ここは天才な我輩が見つけた だくれも知らない秘密の場所。魔王はおろか、帝釈天でさえも知らない場所でござんす♪」

リゼヴィムはクルクルと回りながらその場所の特徴を伝える。そのふざけた態度で接する中、もう一方の男性は辺りを見回す。

「だが、それらしき姿は見当たらないぞ」

「それもその筈！何せコイツはあまりにもデカいし凶暴だから何十もの封印を施されながら地中と同化して眠っているんです！」

そう言いリゼヴィムは自分達が立っている地面を指差す。男性は地面に手を当てる。そこからは、とてつもない生命の波動が感じられ、一介の者が触れればすぐにでも弾き飛ばされる程の激しい胎動だった。

「予想外だな。まさか、眠っているだけでここまで生命を感じさせる生き物がいたとは。今すぐに目覚めさせてしまうのもよからう」

「ハツハツハツ。いいのですかい？いくら貴方が偉大な神様だからといって『黙示録の皇獣』を目覚めさせてしまえば止められない上に消されてしまいますよ？」

そう言いながらリゼヴィムは高笑いをする。

だが、気さくに放ったこの言葉が男性を刺激した。

「……なんだと…？」

「!?」

その瞬間

その場の空気が一変した。先程の空気や、地中からの波動が一気に

消え去り、男の殺気だけが辺りを満たした。

男は鋭い目つきに変わりリゼヴィムを睨み出した。

「私を誰だと思っっているのだ？絶対なる神だぞ？神である私にしてみればこんな『子犬』その気になれば一瞬で消せる。今の貴様の言葉は私にとって『愚弄』に等しいぞ。以後言葉に気をつけるんだな…！」

その言葉一つ一つに巨大な重力が混ざっており、先程までの調子が無くなったりリゼヴィムはゆっくりと頷いた。

「も…申し訳…ありませんでした…」

「フン。まあ、まだ目覚めさせるには早いな。もう少し時期を待とう」  
そう言うとその男性は来た道に戻っていった。リゼヴィムは顔から冷汗を流していた。

「（おいおいマジかよ…威圧だけで皇獣をビビらせるとか…あの野郎  
どんだけ強えんだよ…）」

リゼヴィムは完全に侮っていた。自分が手を組んでいたあの男は…とてつもない危険人物だと言う事に気づいたので。

恐れながらもリゼヴィムはその男性の後を追いつ、この場を去った。  
2人がいなくなると、再び地中から眠れる皇獣の胎動が鳴り出した。

—————

—————

—————

会場ではとんでもない空気が流れていた。

それは 小猫の発した技があまりにも破格の破壊力だった為である。

結果として小猫は退場となったが、観客達は動揺していた。

「イツセー！小猫が駒を多く削った今がチャンスよ！ここから一気に  
ソーナ達と総力戦に持ち込むわ！」

すぐに調子を取り戻したリアスは呆気に取られているイツセーや、  
他の場所で戦っていた皆へ向けて呼びかけた。

その時だった。

「よう。兵藤」



「!？」

そこには同じ『兵士』である匙が立っていた。

――

――

――

「……分かりました。傷が治り次第すぐに向かいます」

地下の駐車場のエリアにて、木場はリアスからの通達を受け取っていた。

目の前には半壊したエリアが広がっており、天井からの光が差し込んでいた。

「大丈夫か？木場」

「うん。何とかね」

木場のすぐそばには木場の腕に自身の衣服をちぎり包帯を巻くゼノヴィアがいた。彼らは先程まで相手チームの女王率いる複数の駒達と戦闘を繰り広げていたが、小猫の放った魔力弾が上から降り注ぎ女王である椿を重傷へ、そして他の騎士をリタイアへと追い込んだのだ。

「木場……私は正直悔しいよ……。襲撃の時も……今も……何の役にも立たず、皆に任せつきりだ」

「うん……。僕も同じさ。いくら禁手化できたとしても皆の為にならないなら無意味だ……」

2人は今まで貯めていた不満を打ち明ける。そして、木場はある事を決意した。

「僕は決めた……。この戦いが終わった後……ゼノ先輩に修行をつけてもらう……!」

その言葉を発した木場には何の迷いもなかった。

ゼノに修行をつけてもらうことは自分をここまで強くしてくれた師匠を捨てる事になる。木場は最初は迷っていた。だが、自分の本来の目的は仲間の為、そして数少ない同部員の男友達であるイツセーやギヤスパーの為だ。その為に木場は決死の覚悟でゼノへの弟子入りを決めたのだ。

「師匠には大変申し訳ないと思っている。けど、皆の力になるには：こうするしかないんだ」

ゼノヴィアは木場の言葉に何の驚きも見せなかった。その理由は簡単だ。自分も同じ事を考えていたからだ。

「奇遇だな。私も同じだ。今の私の脳では：自分の欠点を全て見つける事ができない。せめて知恵だけでも貸していただきたいと思っ  
いてね」

そう言うときゼノヴィアは木場に肩を貸し立ち上がらせた。

「なら…このゲームが終わった後に…ダメ元でも頼んでみよう」

「そうだな…!」

二人は決意を胸にリアスの召集に応じ、敵陣本部へと向かった。

――

――

――

一方でイツセーは突然 現れた匙と対峙していた。

「小猫ちゃんに結構持つてかれたが…まだ負けた訳じゃねえ。逆転の余地はある…!!」

そう言うとき匙は手に神器を展開させた。

「兵藤！俺と勝負しろ！」

「望むところだつ!!」

匙の勝負の誘いにイツセーは神器を展開する。

「へへ…禁手化はしねえのか？」

「ああ！お前とはガチの殴り合いで勝負してえ!!」

「ハッ！後で禁手化しとけば良かったなんて弱音吐くなよツ!!」

互いにフェアを尊重し合うと、2人は睨み合う。緊迫した空気の中、最初に仕掛けたのはイツセーだった。

「いくぜえええ!!」

その掛け声と共に拳を振りかぶり匙へと振るった。

バンツ!

鈍い音と共に放たれた拳は匙の頬へ深く突き刺さった。

「!?やったか!？」

手応えを感じたイツセーは一瞬 勝ったという気持ちになる。だが、それはすぐさま無くなる。

見ると匙は身体をのけ反らせているだけであり、吹き飛ぶ程のリアクションを起こしてはいなかった。

「ヴォラア!!」

「!?」

イツセーが呆気にとられている隙をついた匙は拳を振りイツセーの顔へ拳を打ち込んだ。

バンツ!!

「ぐはあ!？」

予想だにもしていなかった拳の威力にイツセーは後ろに下がる。

「…へっ。俺だつてこの期間ずっと怠けてた訳じゃねえんだよ」

拳を放った匙は口の中に溜まった血液を吐き出した。

「ペツ…。会長の為にも…ここでやられる訳にはいかねえんだツ!!」

そう言いイツセーに向けて走り出した。

「うおらっ!!!」

「!」

イツセーも殴られているままでは無かった。向かってくる拳を避けるとすぐさま顔に向かって拳を放つ。

バンツ!!

「がばあ…!」

鈍い音と共に強く殴られた事によって、匙はよろけた瞬間に吐血する。けれども、地面に手をつける事はない。退く動きさえもない。

「何発殴られようと…俺は倒れねえぜツ…!!」

休む様子も見せない匙はすぐさま拳を構えて再び迫ってくる。

「うおおおお!!!」

「!?」

立ち向かってくるその様子にイツセーは再び拳を放つ。だが、匙はその拳を受け止めると片方の腕で顔面に拳を打ち込んだ。

「うおらっ…!!!」

「うぐ!?……」

撃ち込まれた拳は先程よりも威力が上がっていた。イツセーはさすがにその拳を受け止めると頭突きを喰らわす。

互いの額がぶつかり、両者ともダメージを負うも距離を置いた。

「はあ……はあ……はあ……」

先に疲れを見せてきたのは匙だった。現在の實力差ではイツセーの方が上。数々の強敵との連戦でイツセーの身体能力と魔力が強化されていたのだ。故にこの一騎討ちは間違いなくイツセーが優勢だろう。

だが、

「何度……だって……やってやるよ……!!お前がリタイアするまでなあ!!」

「匙……お前……!」

匙は必死にイツセーへと食らいつく。それに対してもイツセーは応戦する。

「ヴアアアアアツ……!!」

龍のように低い唸り声を上げながら匙はイツセーと距離を詰める。そして、両手を握りしめるとその双拳をイツセーに向かって連続に叩き込んだ。

「うぐ……!? (匙の奴……まだこんな馬鹿力が……!?)」

体力と共に威力は落ちているものの、その威力はとても疲れている者とは思えない程であった。彼の信念は凄まじい。けれども、イツセーも同じ信念を掲げている。

「ぐうう!?匙……俺もお前と同じなんだ!!」

イツセーは目を開き、自身の意思をフルに覚醒させると、匙の片方の腕を掴んだ。

「お前が会長を勝たせたいと思ってるんだったら俺も同じだッ……!!部長を勝たせてえんだ!!」

「ぐうう!?」

握り締められた握力に匙は苦痛の声を出す。

イツセーは己の信念を語るともう片方の拳を握り締める。

「今回の勝負……俺の勝ちだあああああ!!!」  
放たれたその拳は匙の頬へ深く突き刺さった。

「ガハアツ……!!」  
匙はその拳によって、身体を大きく吹き飛ばされ、地面へと仰向けに倒れた。

「は……はは……つええな……」

目の前で拳を放つイツセーの姿を見ると匙は自身の敗北を認め、笑みを零しながら意識を完全に手放した。

「はあ……はあ……はあ……」

『ソーナ・シトリー様の兵士1名リタイアです』  
その放送と共に匙の身体は展開された魔法陣へと消えていった。

「ツ……お前もな……匙……」

イツセーは匙との激闘で負った打撲を耐えながらもリアスの場所へと走っていった。

ゲームはいよいよ最終局面へと向かっていった。

## 朱乃 V S 椿

匙がリタイアした知らせを耳にしたソーナは齒を噛み締める。

「匙…よくやってくれました…」

ソーナは今いる自身の駒を見る。女王である椿をはじめ、匙を除いた残りの兵士1名、戦車2名、絶望的な状況だった。相手であるリアスの残りの駒は、兵士1人、騎士2人、王と女王が1人、だが、そのうち騎士1人は瀕死に近い状態である事を椿から聞く。けれども、やはり自身の駒よりも圧倒的に多い。

「やはり…小猫さんのあの一撃が大きかったですね。リアス達が来るまでに打開策を取らねば…。（後は下にいる分身の時間稼ぎを頼るしかないでしょう…）」

故にソーナは頭を振り絞り冷静に打開策を考える。

「椿、しばらくの間、時間稼ぎをお願いしますか？」

「はい…」

—————

イツセーはリアスや、木場達と合流を果たすとソーナがいる二階へと向かっていた。

「いよいよソーナと直接対決よ。駒はこちらの方が多。けど、気を緩めないで」

『はい…』

リアスの呼び掛けに皆は頷く。

相手は確実に自分よりも知略に長けている為、どんな どんでん返しがくるか分からない。その為にリアスは皆に細心の注意を払わせる。

そして、階段を登り詰めると、数人の人影が見えた。

「待っていましたよ。皆さん」

待ち構えていたのは王であるソーナ、そして女王である椿であった。

「（相手は2人だけ…。ここで生徒会長を倒せば…俺たちの勝ちだ

…」

イツセーは心の中で勝利を予想する。だが、一つだけ、違和感があつた。

「はあ…はあ…はあ…（何だ…？身体がダリい…）」

先程から自身の身体が何故かダルいのだ。まるで何日も食べ物を食べていないような。その状態はもう限界に近かつた。

ドサツ

「イツセー!？」

身体が何故か倒れてしまった。何の前触れもなく。匙との戦闘での傷ではない。

「ツ…これは…!？」

近くにいた朱乃は、イツセーの腕に繋がれている謎のチューブを発見する。その管は赤く染まっており、まるで血が流れているようだった。

「兵藤君の血液を採取させていただきました」

『ツ!!』

その言葉と共にソーナの後ろに待機していた椿が、懐から病院で扱われている血液の袋を取り出した。そこには、大量の血液が溜め込まれていた。

「匙に君と戦う際にこれを付着させるように頼んでおいたのです。戦闘終了からここに来るまで、相当の量の血液が失われていると思います」

すぐさま木場は持っていた聖魔剣でそのチューブを断ち切る。だが、もう遅かつた。

「ぐうう…力が…でねえ…」

立ち上がるようと試みるも、血が不足している為に、立ち上がる事ができなかつた。

「兵藤君。確かに貴方は強い。けれど、匙も負けてはいません。この一週間、少しでも貴方に追い付くために必死に修行をしたのです」

ソーナの言葉にイツセーは歯を噛みしめる。

「裕斗…イツセーをお願い…」

「分かりました」

リアスは木場にイツセーの介抱を頼むと、1人前へと進む。

その時

「うふふ。王が出るにはまだ早いですわ」

すると、リアスの前に何者かが横入りし、リアスの前進を静止させた。

「朱乃!？」

リアスを静止させたのは朱乃だった。

「うふふ。修行の成果を見せるいい機会ですわ」

「……頼むわ。」

小猫のようにならないで」

「はい♪」

一応 警告する。朱乃も例外ではないのだから。

「会長。ここはお任せを」

「任せましたよ」

相手も同じく女王である椿が名乗りをあげる。

「あらあら。貴方と闘うのは久しぶりですわね」

「ええ。前よりも随分と……いや、見間違える程まで成長されましたね」

「うふふ。お互い様ですわ」

互いに一定の距離まで近づくと、椿は薙刀を構える。

ツ!!

その時、巨大な魔力が辺りを覆う。

「この魔力の量は……!」

リアスとソーナは冷や汗を流す。一瞬にして溢れ出した巨大な魔力。その量はもはや最上級の中でも上位の部類に入るものだった。上級悪魔である2人を震えさせる程の魔力を放出した者は目の前にいた。

「朱乃…貴方一体…どんな修行をしたというの…!？」



その巨大な魔力の持ち主は朱乃だった。その体の周りには蒼い稲妻がほとぼしり、魔力を次々と上昇させていった。

「何の変哲もないただの……神様の修行ですわ」

うつすらと笑みを浮かべた瞬間、朱乃の身体を走る稲妻が輝き出した。

「うふふ。ゼノ君、見ていてくださいね……?」

誰にも聞こえないようにそう囁くと朱乃の魔力の嵐が右手に集まる。

「さあ……行きますよ?」

「……………」

「はあ……」

「負けちゃいました……」

一方で観客席では、ギヤスパーと小猫が観客席でうなだれていた。あまり見せ場が無かった事もある。

が、小猫にはもう一つ理由があった。

「つたく。ギヤスパーはともかく、お前は何やってんだ」

「うう……」

ゼノに指摘をされて小猫はうなだれる。あそこであんな攻撃をしては流石に失格になるだろう。

「今回は明らかにお前のミスだ。気を付けろ」

「はい……」

「……さて、朱乃はどうなるか……」

「……………」

朱乃の手に集まった魔力は激しく渦巻いており、手には稲妻が迸っていた。

「では……いきますッ!ハアツ!!!」

「!?!」

その瞬間、朱乃の手が強い光を放ち辺りを照らす。それと同時に

高密度の雷光が椿へと放たれた。

「くッ！」

すぐさま椿は横へ逸れる形で避ける。だが、成長した朱乃の雷光は簡単には椿を逃がさない。

朱乃は手を横に動かす。

「ヤアッ!!」

その雷光は朱乃の手に呼応するかのよう軌道我突然変え、避けた椿に向かってきた。

「ッ!?!」

予想外の事態に椿は困惑する。だが、すぐさま身体に命令を出し、紙一重で向かってくる雷撃を何とか横に避ける形で凌いだ。

「あらあら。初見で避けられてしまいましたわ」

その雷は地面に追突する寸前に軌道を変えると朱乃の手に戻っていった。

「うふふ」

朱乃は手を振るい骨を鳴らす。隙を見た椿が薙刀を振り回しながら駆けてきた。

「ハアッ!!」

大きく振りかぶられ、遠心力を得た薙刀は水平に振られ 朱乃の身体へと放たれた。

「…!」

その瞬間 朱乃の身体が雷と化し、その場から消えた。

「!?どこに!?!」

「後ろですわ」

「!」

瞬時に後ろから声が聞こえた。椿は振り返る。

そこには妖艶な笑みを見せる朱乃の姿があった。すぐに椿は後ろへと下がる。

「い…今のは…」

「うふふ。私の身体に雷を纏わせたのですわ。悪魔本来の身体能力と女王の特性…そして雷の瞬間速度を合わせる事で高速移動を可能にさせるのですよ。雑なネーミングですが…『飛雷身(ひらいしん)』とでも名付けましょうか」

「く…!」

—————

一方で観戦していた皆は朱乃の圧倒的な成長に言葉も出なかった。中でも朱乃の強さを一番知っているリアスは口をガツと開けていた。

「あ…朱乃…どれだけ強くなったのよ…!?!」

全くの別物だ。技も今まで上から落とす事や直接あびせる戦法しかなかったのに、今ではそれを応用。あろうことか自身に纏わせるという考えもしなかった事を成し遂げていたのだ。

技はもちろん。魔力量もしかり。朱乃の身体からは自身よりも濃い魔力が滲み出ており、見立てれば軽く上級悪魔レベルだ。

ゼノから聞かされてはいたものの、ここまでとは思いもしなかった。

「小猫もそうだけど…朱乃もとんでもないわね…」

—————

両者共に睨み合う。すると、今度は椿が仕掛ける。

「はあ!」

持っている薙刀の突き。朱乃は身体をすぐさま逸らし躲す。だが、その位置からすぐさまもう一突き。

だが、朱乃はそれを読むかのようにヒラリとかわした。

続け様に椿は高速の突きを繰り返す。けれども、朱乃は全てを避けた。

「うふふ。遅く見えますわ」

ゼノの気弾を避ける修行に比べれば、椿の突きは彼女からすれば全てがスローに見えるだろう。

—————

『朱乃、お前の弱点は近距離戦闘だ。魔力攻撃で遠距離からの攻撃は

得意なもの、近距離に持ち越されたら成す術がないだろ』

「はい…。」

『俺が戦ってきた奴らは近距離も遠距離も自在な奴ばかりだ。どちらか一方に偏っている弱点は致命的だ。だから今から俺が遠距離から気弾を打ってやるから全部避ける。少しずつ距離を減らしていくからな』

近距離戦闘ができなくても…避ければ大分戦況が変わる。

—————

「ゼノ君、貴方には感謝しきれません。以前の私ならこの攻撃に圧倒されていた。でも…貴方のお陰で解決できましたわ…。」

自身を指摘してくれたゼノに感謝をしながら朱乃は椿の突きをまた避ける。

椿もこれは予想外だと感じていた。連続突きを止めるとすぐさま後ろに後退する。

「では…そろそろ決めさせていただきます…！」

「…この魔力の量は…！」

朱乃は自身に魔力を纏わせる。最後の一撃を放つつもりだろう。すると、魔力が渦を描きながら朱乃の右手に集まる。充分に集まると、その手は金色に輝き出した。

「いきます…!!」

朱乃の手から稲妻が現れる。そして、手を目の前にいる椿へ向けた。

高密度に凝縮された雷が一気に放たれた。

「ヤアあああッ!!」

ドンッ!

極太の雷撃が椿に向かう。

最高の一押。イツセーやリアスが完全に朱乃の勝利だと予測する。

だが、次の瞬間 椿が叫んだ。

『追憶の鏡』ツ!!!」

そう叫んだ直後に椿の目の前に巨大な鏡が現れ、雷が当たると砕け散った。

鏡の破片は空中に舞うと白いエネルギー体となる。

そのエネルギー体は一気に朱乃に向かってきた。

「!朱乃!!!」

後ろからリアスは朱乃に向かって叫ぶ。が、遅かった。

朱乃の全身が雷に包まれた。自身の魔力を練った攻撃を反射されてしまったのだ。

「最後の最後で…油断してしまいましたわ……」

全身に傷をおった朱乃の身体がゆっくりと前に傾いた。薄れゆく景色の中 朱乃は倒れながらも細々とした声で言った。

「リアス……皆さん……ごめんなさい……」

そう言葉を残した朱乃は力尽きた。

「朱乃……」

一方で、椿も全身に傷を覆っていた。

「くっ…!?!」

「椿!」

ソーナが駆け寄る。見る限り完全に体力が底をついていた。朱乃の魔力を完全に防ぐことは出来なかったようだ。朱乃に返したのは全体の80%程。だが、残りの20%をモロに身体に受けてしまったのだ。あの威力の20%ともなれば、大ダメージは確実だろう。

「防ぎ…きけませんでした…申し訳ありません…会長…」

「…いえ、よくやってくれました。椿」

相手の女王も力尽きる。

両者の女王はリタイアとなった。

## 終幕そして人間界へ帰還

レーティングゲームでリタイヤした者が治療される医務室で朱乃はベッドに座りながら俯いていた。

所々に包帯が巻かれていた。

彼女は落ち込んでいた。今回のゲームで撃破したのは女王1人のみ、何も戦力になれなかった。

すると、医務室の扉が開き、ゼノが入ってきた。

「よう」

「…ゼノ君…」

朱乃は驚く。一方で何事でもないかのようにゼノは扉の前で朱乃に手をヒョイとあげる。

「申し訳ありません…。油断してしまいました…」

朱乃は自身を過信しすぎていた故に警戒を怠った事を詫びる。それに対してゼノは数分間何も言わずに考え込むと、背を向ける。

「落ち込む暇があったら直せばいいだろ。ほら、さっさと帰るぞ」

「…はい！」

その言葉に朱乃は笑みを浮かべた。

その後、ゼノは朱乃が医師から診断を受け終わるまで待ち、無事に診断を終えて異常無しとなると、朱乃と共に皆の元へと向かった。

歩く中、ゼノは朱乃がリタイヤした後の事を話す。

朱乃と椿が両方リタイヤした後、あの場所にいたソーナが実はただの分身であることが発覚したのだ。

残りの僧侶をリタイヤさせ、最上階で王と王の直接対決の末、見事に勝利を収めたのだ。

朱乃が相手の駒を減らした事が勝利への大きな一歩だったとリアスが言っていたらしい。

別にゲームだからいいけど、本当の闘いなら死んでたかもしれないから次から気をつけるよ」

「相変わらず手厳しいですわね」

「神だから」

それから皆はレーティングゲームを終えると、リアスと眷属の皆は合宿中にお世話になったグレモリー家の従者や家族に別れの挨拶をしていた。

そんな中、目の前の駅に止まっている特急に、先に乗っていたゼノは“ある事”を考えていた。

それは冥界に来た時に感じた“7つの気”その気は来た時に感じられていたが、今ではまるで無くなったかのように気配が感じられなかったのだ。

「…（おかしいな。気配が完全に消えてる…。まるで根こそぎ持ったかされたかのような…）」

その気自体には興味はない。だが、一瞬でこの気を消し去った正体が、ゼノにとって“問題”であるからだ。

「丁度よかった」

偶然と列車に乗車してきたアザゼルはゼノを見つける。

「何だ？」

「お前さんが食事時に気になっていた生物の正体が分かったぜ」

それはゼノがアザゼルやサーゼクス達と会食をしていた時だった。

ゼノの口から出された『一箇所から感じ取れた7つの気』についてアザゼルは独自に調べていたのだ。

「一箇所から七つの気つつう事は要するに体内に7つの意識があるという事だろ？それを調べたらとんでもねえ奴に当てはまった」

「ソイツはだれだ？」

アザゼルは誰もいない事を確認すると、長年の研究でようやく極一部であるが、掴んだその生物の貴重な情報を口にした。

### トライヘキサ

グレート・レッドやオーフィスと並びに聖書に記された生物。曰く：『黙示録の皇獣』とよばれていた。古の時代に聖書の神によって幾

千もの封印を施されて封印されたらしい。

「判明してるのは姿形がバカデケエ上に七つの首を持っている事だけだ。恐らくお前が感じたのはソイツだろう」

「……」

その瞬間 ゼノは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる。気が消失したとなるならば、その獣を誰かが何処かへ転送させた。しかし、地球や冥界圏内ならば、集中すれば気配は辿れるはずだ。だが、先程からそれが全く感じ取れなくなっている。そうなると冥界とは別世界へと転送した可能性がある。それができるのは『瞬間移動』が扱える界王神だけだ。

即ち

暗黒ドラゴンボールやZソードを盗んだ犯人が関係している。

そして、もう一つゼノの頭に最悪の考えが生まれた。ただでさえも時空を歪ませる程の超常的な力を持つ皇獣にゼノにとって羽虫に等しいカテレアが少し自身にパワーを出させる程の力を与える暗黒ドラゴンボールが埋め込まれてしまったらどうなるか。

「…下手すれば冥界どころか地球が終わる」

「おいおい…いきなりどうしたんだよ?」

アザゼルはゼノの物騒な言葉に身を震わせながらも問う。対してゼノはアザゼルの口の硬さと墮天使達を纏める統率力を信頼しているのか、自身の考えを話す。

「……ソイツはヤベエな」

アザゼルはゼノの表情から冗談ではない事を理解すると同時に予想していたスケールが予想していたモノより、大きくなっている事に冷や汗を流す。

「おいアザゼル。これは内密にしとけよ」

「分かってるよ。実際、コイツの存在自体がトップシークレットだからな。お前さんでもトライヘキサは倒せねえのか?」

アザゼルは一応ゼノに対してトライヘキサを倒す事が可能か聞く。



だが、ゼノはそれを否定する。

「バカにするな。師匠に比べればアイツなんて蠅だよ。破壊する必要もねえ」

「(コイツもコイツでヤベエな……)」

超常的な力を持つトライヘキサさえも軽く『蠅』と罵るゼノにアザゼルは引いてしまう。

「けど、問題はそこじゃねえ」

「そう言いゼノは話す。」

「普通に時空を歪ませる力を持つ奴に暗黒ドラゴンボールを埋め込んだら星一つなんて軽く壊せる力を手に入れられる。そんな力を気配が感じ取れねえ場所で解放されたら流石の俺も何もできない」

「なるほどな。確かにそうだ。なら、ソイツをすぐに見つけださねえとな」

アザゼルはトライヘキサの追跡を3大勢力共通の優先事項として当たる事を提案する。

「けど、見つけても絶対に手を出すな。俺に教えろ」

「了解だ」

そう言うのアザゼルは本部へと一時的に戻るために列車を降りた。

「あら？アザゼルと何を話していたの？」

「別に。ただ冥界の飯が美味かった話をしただけだよ」

「？」

後から乗ってきたリアスに事情を聞かれるも、ゼノは受け流す。

ちなみに帰りはずっと朱乃の膝の上に乗せられていたらしい。

—————

グレモリー領から遙か数千キロ離れた暗い洞窟の中にある実験室。

「ハッハッハッ……こりゃあ驚いたな……まさかガチで本体もろとも眠ってる状態で連れてくるとは……」

薄暗く、とてつもなく広い洞窟の中でリゼヴィムは目の前に眠る巨大を見ながら啞然としていた。

何度も寝息を立てながら眠るその生物は、体高だけでも数キロはある巨体。そして、それを支える四肢の内、前足らしき腕はまるで巨大な木の様に極太い。そして、それを支える後ろ足2本は前足以上に太く、筋肉も発達していた。

「ふむ。やはり幾千もの術が施されているな…。ま、私に掛かれれば3日もあれば全て解ける。それに、ここならばあの場所よりも見つかる心配は無さそうだ」

リゼヴィムの横には緑色の肌をした男性がおり、同じく眠る巨体を見ていた。

「いやいや…あの場所でも十分安全でしたぜ!? ワシだけしか知らな…ヒイ!」

リゼヴィムが異議を唱えようとした瞬間、男性から鋭い視線が向けられた。向けられただけでリゼヴィムは恐怖のあまり、震え、尻餅をついた。

「貴様だけしか知らないだと? ぶざけているのか? あの日、何者かが我らのいる場所を感知したのだぞ?」

「はあ!」

リゼヴィムは驚愕の表情を浮かべる。あの場所は冥界から遙か彼方の位置にある。故にインド神話の三柱神やギリシヤ神話のゼウスさえも未だにその居場所を知らない。見つけられたとなると、見つけた人物はその神以上の人物となる。

「もう貴様の言葉もあまり信用できんな。さっさと持ち場に戻れ」

「へ…へい…」

リゼヴィムはおぼつかない足取りでその場を去る。

「さあ…『トライヘキサ』とやらよ…貴様には新たなる力を授けてやろう…!!」

## 体育館裏のホーリー 現る アスタロト家の者

無事に冥界から帰還したゼノ達。高校は私立かつ自学自習を掲げていた為を受験を控えている高校3年生には宿題というものは存在しなかった為に残りの夏休みをゼノはサリ達と共に有意義？に過ごした。

それから日が経ち二学期となった。

「ふわあ…」

「寝不足ですか？」

「いや…別に。あの吸血鬼について考えていた」

いつものように両隣に朱乃と小猫を控え、辺りの妬まれる視線をくぐり抜けながら登校していた。寝不足なのはある事を考えていたからだ。それはアーシアとは別の僧侶『ギヤスパ』の事だ。

「ギャー君のこと？」

「ああ。実はアイツの神器には問題があつてな」

歩きながらゼノは2人に説明した。ギヤスパの時間を止めるというのは神々の間では重罪となっているのだ。幸いにも現在は過去、未来を改変するには至っていないように問題視はされていないが、もしも過去、未来にいけるような能力に発達または再び周りに影響を与える程まで暴走してしまったらゼノは彼を殺さなければならぬ。

故にゼノは考えていたのだ。

「そうだったのですね。うん…」

それを聞いた朱乃は考え込むと一つの方法を提案する。

「少々手荒となりますが…私達と同じく修行を課してみてはいかががでしょうか？」

「と言っても俺は神器には知識はねえからどうする事もできねえ」

「いえいえ。普通に神器ではなく身体を。時に神器は身体を鍛え上げ、それに見合う力をつければ暴走する事が少なくなるかと」

「成る程…確かにそれもあつたな」

朱乃の提案にゼノは納得する。

その後、小猫と別れ、朱乃とも教室で別れると、今日一日が始まった。そして授業がアツサリと終わると、コーヒーまたはお菓子を漁るべくオカルト研究室へと向かう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ガチャ

扉を開けるとそこには既に自身以外の皆が集まっていた。既にリアスは勿論のこと、皆もいつものようにソファ―に座りお茶を楽しんでいた。アザゼルもだ。

「コーヒーと菓子よこせ」

「入ってきて早々!？」

入室して挨拶もせずすぐ菓子を要求された事にリアスはツツコミながらもコーヒーを淹れる。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ズズズ…で？何の話をしてたんだ？反省会か？」

「そうね。それと…朱乃と小猫についても」

リアスは前のレーティングゲームにて極限なまでに強化された朱乃と小猫を間近で見て、不審に思いゼノに尋ねようと思っていたのだ。

「貴方、朱乃と小猫にどんな修行をさせたの？」

それについてゼノは紅茶を啜りながらジロリと目を向けると答えた。

「ここよりも重力の高い星に行つていつものやつてる修行をしてもらった。地球とは違う環境下で一日過ごすだけでも変わるからな」

「そうなのね…」

星を移動する。それについてはもう皆はそれだけの力はあると信じていた為に驚かなかつた。そんな中、ゼノは独自の読心術でリアスの心を読むと門前払いする。

「修行したいのか？けど嫌だな。お前らはともかく目的がくだらねえ奴を鍛えてもしょうがねえ」

「ギク!？」

そう言いゼノはイツセーへと目を向ける。イツセー自身も自身の夢については何かと如何わしい自覚があるのか肩を震わせた。

「まあ、ギヤスパーは強制的に強くさせるけどな」

「ふえ!？」

その際にゼノは鋭い目をギヤスパーに向ける。するとそれに対してギヤスパーは恐るように震え始めた。

「どういう事かしら?」

「一応話しておく」

ゼノは朱乃達へと話した同じ内容をリアス達オカルト研究部の皆へと話す。ギヤスパーの神器が下手をすれば宇宙の法にあたる事を。それをゼノは事前に防がなければならぬ。

だが、リアスは大切な仲間を無理やり修行させる事に対して少しながらも怒りを出す。

「だからギヤスパーを……本人が嫌がってもさせるつもりなのかしら?」

「そうだ。お前らがいくら言っても止めないぞ。今朝から悩んでたけど、決めた。おい、神器を抜く研究は進んでるのか?」

ゼノは近くにいるアザゼルへと目を向ける。それに対してアザゼルは現段階の状況を洗いざらい話した。

「そうだな。今のところ、人工神器を身体に入れて取り出す実験を行なっているが、必ず副作用が出ちまう。人工神器でこれなら、生まれた当初から体内に宿る神器の場合はまず死んじまうだろう」

「なら、朱乃達と同じ修行をさせるしかねえな」

アザゼルの報告を聞いたゼノは決定する。

ゼノには宇宙のバランスを保つという役目がある。その為ならば感情など一切捨てる。感情に左右されては仕事にはならない。ギヤスパーが危険因子になり得る可能性があるならば、それを徹底的に排除する。

「…勝手に……!」

リアスは部員を危険に晒す様な真似に黙っていなかった。だが、途中から即座に冷静になり、ゼノの立場を考える。

「……分かったわ」

「部長?」

「いいのよ。ギヤスパーの力が制御されるなら。それに今回のレーディングゲームでも自身の力不足が十分に実感できたわ……」

リアスの決断に仲間思いであるイツセーは即座に反論の声をあげるが、リアスはそれを制し自身にも責任はあると答えた。

「ただし、絶対に傷付けるような真似はさせないで頂戴」

「当然だ。神器持ちとは言っても1人の罪もない地球の部族だ。アツサリとは殺さない。それとだ……ん?」

それに対してゼノが領き、次の話へと移ろうとした時だった。

「……何か来るな」

ゼノは何かを感じ取り、部室の中央へと目を向けた。それに釣られる様に皆も中央へと目を向けた。見るとそこには一つの紫色の紋章が浮かび上がっていた。

「この紋章は……アスタロト家の?」

リアスは紋章を見た途端に驚く。すると、紋章の中から1人のローブを纏った糸目の青年が現れた。転移を使ったとなると、まず悪魔だと言ってもいい。

その青年は部室に現れると優雅に胸に手を当てながら皆へ目を向ける。

「やありアス・グレモリー。そしてその眷属の皆さん」

「貴方は……『ディオドラ・アスタロト』……!」

リアスが名を口にした瞬間 イツセーは驚く。アスタロト家とは、現魔王『アジュカ』を輩出した名家だ。グレモリー家と同じ72柱の中の一つでもある。

現れたディオドラはイツセーの隣に立つアジアへと目を向けるとゆつくりと近づいた。

すると両手でアジアの右手を掬い上げると両手で包み込む。

「迎えにきたよ。アジア・アルジェント」

## 抱く不信感

「迎えに来たよ。アーシア・アルジェント」

現れた若手悪魔『デイオドラ・アスタロト』は部室に現れるや否や突然とアーシアの手を握る。

その時だ。

「おい」

「はい？」

話をする中で突然と割り込んできたデイオドラに対してゼノは座りながら瞳だけを動かして睨みつける。

「今、話してる最中だ。後にしろ。それにお前は誰だ？」

その時、デイオドラはようやくゼノの存在に気づき胸に手を当てながら頭を下げる。

「これはこれは。銀河を束ねる神『黒崎ゼノ』様。自己紹介と挨拶が遅れてしまい申し訳ない。僕はデイオドラ・アスタロトといいます。話の途中なのでしたら申し訳ないのですが…僕の話はすぐに終わりますので先をお譲りしていただけませんかな…？」

「……まあいいか。うん」

ゼノは頷くと、話を中断し、デイオドラに譲る。

◇◇◇◇◇

それからゼノは席を立つとデイオドラへと譲る。

現在はゼノが座っていたソファアにデイオドラが座りそれに向かい合うように目の前のソファアに部長であるリアスが瞳を鋭くさせながら座っていた。そしてそれに続くかのようにリアスのソファアの周りには朱乃達が集まっていた。

席を譲ったゼノはリアスの机の上に足を組みながら座りその様子を見つめていた。

「アスタロト…ってなんだっけ」

「分かりやすく言えば現魔王アジュカの実家だ。まあアンタの目線から言えば市長みてえなもんだ」

「成る程な」

ゼノはそのままディオドラへと目を向ける。

「にしても、よくもまあ場を譲ったなく。お前さんなら自分の話を優先すると思っただが」

「いつでも言える事だから譲ってやったんだよ」

そんな中、ゼノは目を鋭くさせるとリアス達と話すディオドラへと目を向ける。ゼノの目には彼の身体から若干ながら悪魔とは別の形のオーラが滲み出ているのが写っているのだ。

「……………」

ゼノは誰にも気付かれないような声量でアザゼルに向けて伝える。

「アイツが帰ったら少し話したいことがある」

「…おう」

その時だ。

「触れないでくれるかな？女体にしか興味のない汚らわしい君に触れられると僕まで汚れてしまう」

「んだとお!？」

アーシアに強引に迫ったことに対して怒ったイツセーがディオドラに対して怒りを表した。それに対してディオドラは肩に触れられたことに対して冷徹な眼差しを向ける。

その一触即発な雰囲気には溜息をついたゼノは椅子から飛び降り二人に向かう。

「おい。喧嘩する暇あるならサツサと帰れ。すぐに終わるんじゃないのかよ?」

「おっと。これは申し訳ない」

ゼノが来たことに流石のディオドラもすぐさま弱気になると引き下がる。

「それでは失礼します…。また会おうアーシア」

ディオドラは魔法陣を展開させるとアーシアへと目を向けながら消えていった。

「ようやく邪魔な奴が帰ったな」



デイオドラが帰った事を確認したゼノはアザゼルに目を向ける。すると、アザゼルはドアに親指を向けてジェスチャーを送った。

◇◇◇◇◇◇◇◇

その後、アザゼルとゼノは一時的に部室を出て、晴れ渡る空の下である旧校舎の入り口の扉に背中を預けながら先程のデイオドラから滲み出ていたオーラについて話し出した。

「アイツ、何か持ってやがったな」

「ソイツは俺も感じたトコだ。カテレアの時と同じ妙な魔力を一瞬感じた」

それはアザゼルにも感じ取れていた。だが、ゼノよりもそれは鮮明ではなく、霞程度であった。だが、ゼノが感じ取れているならばそれは確かだろう。

「そうなる今回、アイツも禍ノ団とかいうイタい集団と関係があるのかもな」

「ああ。その可能性は高い。あとイタっていうのはやめろ。間違っていないけどよ」

ゼノは先程の感じた魔力がカテレアと同じ質であった為に、彼も彼女と同じく禍ノ団の一員または関係者である事を読み取る。それについてアザゼルも納得した。

「どうする？冥界に報告して捕縛させるか？」

「…いや…。少し泳がせる」

ゼノの意外な判断にアザゼルは驚く。

「意外だな。俺はてつきりすぐに縛り上げると予想してたんだかな」  
「確信がつかない状態でぶちのめしてもつまらねえ。ボロが出たところを一気に叩き潰した方がいいだろ」

「まあそうだな。近々…奴とのレーティングゲームが予定されてるからチャンスはそこだろう。うん。サーゼクスには俺から話しておく」  
「分かった」

それからゼノは部室には戻らず、即座に帰路へと着いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「はあ…」

ゼノは頭を悩ませていた。どうすれば禍ノ団を襲撃する口実ができるのか。その気になれば英雄派、旧魔王派、そしてボスであるオーフィスなど、一網打尽にして破壊できる。だが、テロリストといえども情報と証拠がなければ潰し様がない。悪魔側に損害は出ているものの、自身には出していないのだ。いや、人間に既に手を出している時点で損害は出ているだろう。

けれども、それを行った決定的証拠が見当たらない。

「とりあえず情報が欲しいな…」

一時は禍ノ団に潜入し内部崩壊を考えていたが、自身では気を隠せていてもすぐに気づかれてしまう。情報が欲しいものの、サーゼクスと連絡手段がない上に、あったとしても深層部分の情報は掴めない。

どうしようかと悩むゼノはそのまま最近 寄る様になったラーメン屋へと向かい、扉を開けた。

ガラガラガラガラ

「へいらっしやいッ!!」

猛々しい大将の挨拶を聞き流しながらゼノは製品を作る景色が広がるカウンター席へと座った。

「大将…大盛りチャーシュー麺1つ。味噌で」

「はいよー」

ラーメンを注文し、出されたお冷を口に流しながらゼノは考える。アザゼルに再び問い合わせしてみるか、それとも直接乗り込むか。

「どうするか…」

「ほほう。神でも悩む時はあるんだな」

ふとこぼした自身の言葉に誰かが反応して返してくる。その声は横から聞こえてきた。

「そりやな…。どうすれば合法的に迷惑集団潰せるか考えてたんだけど…いい案が思い浮かばないんだ…。ん？」

それに対してゼノはアツサリと答えた。だがその直後、ゼノは思考を停止させ、ゆっくりと横に目を向ける。感じ取れた魔力に聞こえたその声に聞き覚えがあったからだ。

「やあ銀河神。久しぶりだな」  
そこにいたのは何と二天龍の一角である現白龍皇『ヴァーリ・ルシ  
ファー』だった。

何してんの？この人達

ラーメン屋に入店したゼノを迎えたのは何と禍の団の一員であり  
イツセーの赤龍帝と対の存在である白龍皇を宿すヴァーリであった。  
「やあ銀河神殿。久しぶりだな」

「俺っちもいるぜ〜♪」

ヴァーリの隣の席から今度は頭に金具をつけた青年も現れる。そ  
れは何と孫悟空の子孫である『美猴』であった。

「何だお前らか」

まさかの潰す方法を考えていた組織のチームと出会った事にゼノ  
は驚く。

◇◇◇◇◇

「へいチャーシュー麺大盛りね」

「いただきます」

大将から出された大盛りのラーメンに向けてゼノは手を合わせる  
と割り箸を割りその巨大なチャーシューを麺と共に貪り食う。

そんな中、ゼノは再びヴァーリ達へと目を向ける。

「…何でお前らがここにいる？」

「見れば分かるだろ？腹が減ったからここに来ているのさ。人間の食  
べ物は実に美味だからな。見たまえ。この濃厚なスープが絡んだ麺。  
そしてそれを彩るチャーシューに煮卵。最高じゃないか」

そう言いヴァーリはまるで評価するかの様に麺を箸で掬い上げる。

「はいはい。…というか、まるであの会談の後も来てるような口振り  
じゃねえか」

「ああ。案外警備も薄いからな」

「あの無能赤髪女が…」

ヴァーリの答えにゼノはリアスの変わらない無能ぶりに額に青筋  
を浮かべる。まあリアスとヴァーリでは力量に天地の差があるため  
に仕方がない事だろう。

「そういえば先ほど 銀河神殿は何やら悩んでいた様だな」

「あ？まあ話してもいいか。お前らなんていつでも消せるし」

ゼノはラーメンを啜ると悩みの種を話す。

「簡単に言えばお前らを合法的に潰せる方法だよ。本当に騒ぎは起こすし事件は起こす。人間社会にも影響だそうとしてるしそろそろ鬱陶しくなってきたから本格的に潰そうかと考えてたんだよ」

「成る程。まあ事的首謀者は俺以外の旧魔王派または英雄派だろう。俺たちは別に人間界になんの干渉もしていない」

「確かに。人間に対しての被害の中でお前らの名前は出てなかったな」

「そもそも何の神器も持たない人間には興味がないからな」

そう言いヴァーリはラーメンとチャーシューを同時に口の中に運ぶ。その一方でゼノはヴァーリが人間界に被害を及ぼしていない事を知ると落胆するかの様にラーメンを啜り始めた。

「ん〜。やはり人間界のラーメンは最高だ。美猴。隣町にも美味しい店があるんだ。行こうじゃないか」

「はあ!? 勘弁しろや! 今日でもう7日目だぞ!? もう俺の胃袋が持たねえよ!」

横から聞こえる二人の会話を他所にゼノはラーメンを啜りながら今後の事について考えていた。

「(今のところ暗黒魔界の連中も目立った動きがねえ…。それにあのディオドラとか言う奴：魔力とは違う何かを持っていたな：どうするか：)」

暗黒魔界軍の事は勿論だが、もう一つは部室に現れたディオドラという悪魔である。彼自体の戦闘力を見る限り大した事はないのだが、彼からは魔力以外の別の「何か」を感じたのだ。

それが気になって仕方がなかったのだ。

◆◆◆◆◆

それからゼノはラーメンを食べ終え会計を済ませるべく席を立つとした。

その時だ。

「これはちよつとした情報だが、ディオドラが変なボールを持ちながら妙な行動をとっていたぞ」

隣からヴァーリの声が聞こえた。更にその話の内容が自身の気になつている事と重なつてゐる為にすぐさまゼノはヴァーリの座る場所へと目を向ける。

「その話…本当か？」

「ああ。妙なボールはカテレアが持っていた物と同じ。それを持ちながら『レーティングゲームで』とか何か言っていたな。まあそれ以外の事は知らんが」

ゼノはヴァーリの鼓動と心拍数から溢した情報に嘘と偽りが何一つない事を読み取つた。それは大変貴重な情報であつた。

「いいのか？同じ組織の仲間の情報を喋つて」

「別にいいさ。それに神様に借りを作るのも面白いと思つてね。ではまた」

そう言いヴァーリと美猴は席を立つていった。だが、タダで返す程ゼノは腐つてゐない。

「待て」

ヴァーリと美猴を呼び止めるとゼノは人差し指を突き出し笑みを浮かべる。

「ラーメン10杯の奢りでどうだ？餃子と炒飯と麵大盛り付きで」

「流石だな」

それに対してヴァーリもうつつすらと笑みを浮かべた。この日、初めて悪魔が宇宙の神との取引を成功させたのだった。

◆◆◆◆◆

それからヴァーリと別れたゼノは暗くなつた道を通ると家に到着した。

ガチャ

「ただいま」

「「お帰りなさい」」

「…ん？」

自身を出迎えたその声が聞こえた瞬間ゼノは違和感を抱いた。普段家にいるのはサリ、ティアマット、小猫の3人に加えて自身の4人。

一人多い。しかも家に入った途端にとてつもなく強い気を感じた。入るまでまったく気付くことができなかつたのだ。

いるのは明らかに人でもないし悪魔でもない。

咄嗟にゼノは部屋の扉を乱暴に開ける。

「誰だッ!!」

「あら。相変わらず私の魔術には引つ掛かるんですね」

そこには黒いスーツに黒のスカート、黒のストッキングといった黒を基調とした服を着こなしている長身の女性がサリの隣に座っていた。

「随分と遅いお帰りですね。子供は門限が18:00と決まっていますでしょう」

「お…お前は…」

その女性を見たゼノは驚くと共に額に青筋を浮かべた。その一方で女性はゼノを見ると鼻で笑う。

「何しにきやがったロベル…!!」

「久しぶりですね。銀河神様（笑）」

## 華麗なる秘書

あれから一悶着があった後。途中で帰宅してきた朱乃を加えて全員は現在テーブルを境にロベルに向かい合っていた。

「初めまして。私、ドミグラ様の秘書を務めさせて頂いております『ロベル』と申します。以後お見知り置きを」

そう言いロベルは胸に手を当てながら紳士的な素振りでも頭を下げてくる。それと共に名刺も。

その名刺には『時空調査委員 委員長補佐』と書かれていた。

「本当に秘書なんですね…」

「秘書もどきだ。人様の家に勝手に魔術しかける失礼な奴が秘書な訳ねえ」

「あら。〴〵もどき〴〵とは失礼な。れっきとした秘書ですよ」

ゼノの小猫に対する説明にロベルは不服の声を上げるがゼノはそれを無視して話を続ける。

「確か100年くらい前にタイムパトロール隊と一緒に暗黒帝国軍を壊滅させたんだよね？」

「ええ。メチカブラは当時の私達の野望の邪魔でしかありませんでしたからね」

そう言いロベルは出されたお茶を優雅に啜る。

その姿を見つめていた小猫は冷や汗を流していた。

「…(この人…強い…)」

彼女は女性ではあるが、強さでいえばこの場にいる中でゼノを除いて最も強い。小猫自身はロベルから巨大な気を感じ取っていた。それはお盆を持ちながら立っている朱乃も同じであった。

その一方で、ゼノはロベルに向けて鋭い瞳を向けた。

「で？要件はなんだ？」

「簡単に言えば――」



暇潰しです」

「帰れ」

「冗談です」

ロベルは揶揄う様にクスクスと笑うと手に持っている杖の様なもの掲げた。

すると目の前の空間がまるでデジタル空間の様に歪み出すと赤い髪を七三分けにした男性が映し出された。

「なんだお前か。『ドミグラ』」

「久し振りだな黒崎ゼノ…」

その男を見た瞬間 小猫と朱乃とティアマツトは全身を震え上がらせた。モニター越しからでも分かる威圧感と気。もしも実物を見てしまった時はどうなってしまうのだろうか。

それを想像すると更に震えてくる。

その一方でドミグラと呼ばれた男性を見たゼノはその髪型を見てほくそ笑んでいた。

「相変わらずの髪型だな」

「貴様の所為だろうがあ!!!」

（(なにが!?)）

何やら揉めている様であった。その様子を座っていた小猫、朱乃、ティアマツトが疑問に思っているとそれを読み取ったロベルが説明した。

「ゼノさんが私達と2回目に出会った際にドミグラ様の髪型が変だと言

いビルス様と共謀してドミグラ様の髪に大量のワックスを。その結果あの様な髪型に。それ以来髪が元に戻らないのです」

「は……はあ……」

その一方でドミグラの怒鳴り声を笑いながら聞いていたゼノは目の色を変えた。

「で？要件はなんだ？まさか暗黒魔界の事か？」

「くぅ……察しがいいな。その通りだ」

「そうか。4人とも部屋から出る」

ゼノはジェスチャーを加えた指示で自身以外の4人を今いる部屋から追い出した。その理由は簡単だ。姉であるサリや弟子である3人を巻き込むのが癪な為である。

「メチカブラの姿は確認されていない。だが、それ以外のトワやミラ、そしてその他の魔神の姿が地球で確認されている」

「ああ。前に俺もサルサと会った。だが、妙だった。アイツからは魔神特有の気は感じなかったぞ」

「その点についてはまだ私の部下が調査中だ。また報告する」

そう言いうとドミグラの顔が映し出されたモニターが消滅する。ゼノに従っている様な彼だが、それでも大昔に歴史の支配を企んでいた大悪党であり何度も当時のタイムパトロール隊と衝突していたらしい。

歴史の支配自体が全宇宙共通で大罪であるために破壊神どころか遂には全王にでさえも目を向けられ、現在はその野望を諦め暗黒魔界や時空の歪みにおける調査を行なっている様だ。

元々の性格があつてなのか、仕事に対しては本当に真面目でありその点についてはビルスは高く評価しているらしい。

ドミグラとの通信を終えると腰を下ろしていたロベルは立ち上がった。

「では私はこれにて。またお邪魔しますよ」

「もう来るな!! (怒)」

怒るゼノに向けてロベルは笑いながらウインクをするとその場から消えた。

ロベルが消え、一人となったゼノはドミグラからの情報と、ヴァーリの情報を頭の中で整理する。

変なボールとは恐らく『暗黒ドラゴンボール』だろう。そしてそれを持っていたディオドラという男は情報通りならば数日後のレーティングゲームで動き出す。

そうなるかと暗黒魔界軍は必ず彼を狙うだろう。

「(これを機に奴らを一網打尽にしてやる…ッ!)」

暗黒ドラゴンボールに加えて暗黒魔界軍。一網打尽にするべくゼノは決意を固めるかの様に瞳を火の様に燃やすのであった。

## 遂に来るレーティングゲームそして奇襲

ロベルが去ってから数日。デイオドラが遂に動き出す日であるレーティングゲームの前日の夜。ゼノは数ある部屋の中で何百倍もの重力がある部屋の中で数時間のトレーニングをしていた。

「…!!」

生半可な者が入ればたちまち押し潰される過酷な環境。その部屋はゼノ以外誰も入る事ができない。たとえ修行で最上級悪魔の力を得た朱乃や小猫でもだ。

「ふう…」

そんな中、重力が襲い掛かる白い部屋の中で汗を流しながら拳や脚を振り回しながらトレーニングを行っていたゼノはひと段落を付け、重力の作動スイッチをOFFにするとタオルを手に取った。

身体から滲み出た汗をタオルで拭き取っていく。

そんな時だった。

「ねえゼノ」

後ろの扉が開き寝巻き姿のサリが顔をヒョコツと出しながら覗いてきた。

「ん？」

「そろそろ寝なさいよ。最近 夜更かししてばかりじゃない」  
「…」

確かにそうだ。ここ最近、寝付く時間は必ず深夜であり、酷い時には一睡もしない日があった。

その理由は簡単だ。暗黒魔界軍の到来による危機感である。いつ襲ってきてもおかしくない。今この瞬間でもだ。そう思うと全く眠れないのだ。

「神様のお仕事も忙しいのは知ってる。けど、休まない」と

そう言いサリは部屋の中に入ると立ちすくむゼノの肩に手を置いた。すると今まで感じる事のなかった疲れがドツと押し寄せるかのように全身に巡った。

「…分かった」

それからゼノは重力室を出るとサリと共にリビングに向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

向かう中、ゼノは隣を歩くサリに向けてあることを尋ねた。

「なあ姉貴。俺が怖くないのか？」

「え？」

地球へと戻り人と触れ合う生活の中でゼノはビルス城では得なかつた感情を持った。

それは『恐怖』

自身は仕事とはいえ多くの生物の命を奪ってきた。それは人間である神父や人外の悪魔も例外ではない。

命の奪い合いとは乏しい環境下で育ち道徳を身につけているサリにとって自身はどう思われているのか。それが気になっていたのだ。

「俺は…今まで何度も命を奪ってきた。姉貴はそんな俺が怖くないのか？」

それに対してサリは立ち止まるとしやがみ込みながら頭を撫でてきた。

「全然怖くないよ。確かにお仕事とはいえゼノはたくさん命を奪ってきてる。けど、それは仕事上仕方ない事だったんでしょ？ゼノはこれまで目的もないのに誰かを殺したことはあるの？」

「……いや」

尋ねられたゼノは首を横に振った。今まで自身が殺してきたのは全て世界の害になり得る者ばかりであった。無目的で殺した相手などはいない。

すると頭を撫でるサリの手が頭から離れると身体に巻き付き抱き締められた。

「そういう事だよ。だから私は怖くない。たとえそれで恨まれようとも…私はずっと貴方の味方だから」

「姉貴…」

その言葉を聞いた瞬間、ゼノはなんだか胸が軽くなったかの様な感覚に見舞われた。

それと同時に一つの思いが頭の中を過った。

『死ぬまで彼女を守り抜きたい』…と。

それは彼女に対する好意なのか保護欲なのか、はたまた家族の情なのかは分からない。ただ、彼女の言葉に救われた様な気がした。

「その…今夜は…一緒に寝ないか？」

「いいよ♪」

それからゼノは久しぶりにサリと同じベッドで寝た。

—————

—————

—————

それから一夜明け、遂にレーティングゲーム当日となった。

部室内にてリアスと共に皆が決意を固めている中、ゼノは後ろからアザゼルと共にその様子を見つめていた。

すると

「ゼノ君」

「先輩…」

朱乃と小猫が手を握り締めてきた。

「今回は…思い切り暴れてこようかと思えます…」

「私も前の様な失敗は致しません」

真剣な眼差しを向けてくるその瞳に対してゼノは一人の教える者として手を握り返し声援を送った。

「頑張れよ」

その声援は二人の緊張を完全に消し去り勇気と自信に満ち溢れさせる。

「はい!!」

それからリアス達は魔法陣によってゲーム会場へと転送されていった。その様子を見送ったゼノは後ろに立っているアザゼルに目を向けた。

すると、アザゼルは魔法陣を展開する。

「ほんじゃまあ、俺達も行くか」

「ああ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

レーディング会場へと転移したりアス達。そのフィールドは殺伐とした風景であった。辺りには岩場が広がっており空中に浮かぶ岩や遺跡のような建物があった。

「…あれ…？・ディオドラは…？」

その風景を疑問に思ったイツセーや皆は辺りを見回した。どこを見ても対戦相手となるディオドラは見当たらない。彼の眷属一人もだ。

その時だった。

「！！！！」

空に無数の魔法陣が展開しその中からローブを纏った数千もの魔法使いや悪魔達が姿を現した。

「……これは一体！？」

突然現れた大人数の兵にリアス達一行は驚きのあまり硬直する。

その時だった。

「ぎゃあ！！」

「！！！！」

背後からアーシアの悲鳴が響く。それを耳にした皆は咄嗟にその叫び声が聞こえた場所へと振り向いた。

そこには多くの兵士達を背景にアーシアの身体を逆さ吊りにし右脚を持ちながら笑みを浮かべているディオドラの姿があった。

「な……！・テメエ！！」

「ディオドラ！」

「やあ。リアス・グレモリーに眷属の諸君」

イツセーとリアスの怒りの声を嘲笑うかの様にディオドラは閉じていた目を開け黄色の目を向ける。

アーシアをぞんざいに扱うその仕草にリアスは怒りを表し魔力を纏いながらディオドラを睨んだ。

「これはどう言う事!?それにアーシアを…!今すぐ返しなさい!」

「丁重にお断りする。アーシア・アルジェントは頂いていくよ。そして君達はここで禍の団に殺されるんだ!」

「な…!?まさか禍の団と繋がりが!?」

「その通りさ。彼らと手を組んで正解だったよ!お陰で『面白い女』に加えてこんな力まで手に入れてしまったのだからね!」

朱乃の推測に頷きながらディオドラは手に魔力を出現させると遙か遠方に聳える全長数百メートルもある岩石へ向けて放った。

### その瞬間

凄まじい爆発音が鳴り響きその超巨大な岩石は塵も残らず消し飛んだ。

それを見た一同は冷や汗を流し始めた。

「なんて力…まさかオーフィスの魔力を!」

「それだけじゃないよ!」

リアスの言葉に答えながらディオドラは上半身に纏う洋服を捲り上げ腹部を見せる。

そこには血のように赤く中心に黒い五つの星が描かれたボールが埋め込まれていた。その球は埋め込まれた場所を中心にまるで根のようなものを張り巡らせていた。

「それはカテレアの時の…!」

「そうさ!今の僕の力は魔王級…いや、それ以上だろうねえ!そしてこの球のお陰で『不老不死』の能力も得たんだ!この力で僕は新たな魔王としてこの世に君臨するッ!!」

そしてディオドラは指を鳴らす。すると、それを合図に背後にいた無数の兵士達がリアス達に向けて魔力弾を放った。

「もしもこの数の中を生き残れたら闘ってあげよう。せいぜい足掻いておくれ。それまで僕はアーシア『達』と楽しませてもらうよ。赤



龍帝♪」

「…!!」

その醜悪に満ちた瞳をイツセーに向けた直後にディオドラは背後に魔法陣を展開するとアーシアと共に転移していった。

「アーシアああ!!」

「落ち着くんだイツセー君！まずはこの戦況をどうにかしないと!!」

アーシアを拐われた事により冷静さを失ったイツセーを木場は何とか落ち着かせる。

その一方で放たれた魔力弾が雨となりその場に降り注ごうとしていた。

「皆…！何としてもこの状況を切り抜けてアーシアを助けるわよ！」

「…はい!!」

リアスは放たれようとした攻撃から全員を護るべく滅びの魔力を応用しバリアのような球体で全員を包み込もうとした。

その時だった。

ドオオオオオオオオオン…ッ!!!

空から何かが飛来し地面に激突した。辺りには凄まじい暴風と砂埃そして衝撃波が発生し、リアス達に向かってきていた魔力弾をその衝撃によって消しとばした。

「な…なんだあ!?!」

「分かりません…けど…空から何か降ってきました…！」

リアスの魔力によるバリアで何とか生き残っていた皆はその風圧に耐えながらも自身と禍の団の間に飛来したその物体の正体を確かめるべくその場を見つめていた。

次第に晴れていく黒い砂煙。それによつて飛来した正体が顕と  
なっていく。

「ゼノ…くん…？」

その正体を誰よりも早く察知した朱乃の声に皆は驚き再び見えてくる影を見つめた。

すると煙が晴れ、飛来した人物の正体が顕となった。

そこに立っていたのは戦闘服であるチャイナ服を纏うゼノであつた。

「先ば——!？」

その時だった。名前を口に出そうとした小猫が言葉を詰まらせると共に全身を震わせた。それは小猫以外の皆も同じであった。突如として現れたゼノの姿を見た途端、一同は背筋が凍りつき動けなくなつてしまった。

「せ…先…輩…？」

小猫の瞳に映るゼノの顔は

激しい怒りに満ちていた。

## 怒りの神

それは リアス達が転移する直前の事であった。

ゼノは部室に行く直前にアザゼルからディオドラが今まで不正を行なってきた事を知らされた。また、それにより背景には禍の団と関与している事も浮き上がり、完全に彼が黒である事が証明された。

それに対してゼノは街で偶然にも遭遇したヴァーリ達から得た情報も話した。

「ちよ…早く言ってくれよ!？」

「別にいいだろ」

「そんな適当な!？」

それから悪魔側の情報によると、対戦相手であるリアス達には敢えて伝えず彼女達を利用し迎撃作戦を行うらしい。

前回のカテレアの件を思い出したアザゼルはそれについて考える  
と悩む様に唸る。

「球を持っているとなると、間違いなくイツらじゃ不利だろうな…」

「ああ。だから俺が相手をする。お前は言い訳考えとけよ」

「それは勿論だ…。はあ…リアスがブチギレるのは確定だろうな…」

それから部室へと移動し皆が転移していった後、アザゼルはゼノと共に迎撃場所へと向かうべく魔法陣を展開した。

その時だった。

「!？」

ゼノは目を大きく開き身体を硬直させてしまう。

「お…おい。どうしたんだ…!？」

その様子を心配したのか、アザゼルは恐る恐る声を掛ける。だが、ゼノはその声に耳を傾けることなく瞳を震わせていた。

「おい…どういいう…事…だよ…」

その理由は――

――先程までこの街で感じていたサリの気が突然消えてなくなってしまうからだ。

そしてその直前に微かに感じたのは「ディオドラの魔力」

「…!!!」

その直後 ゼノは即座に気の感知範囲を地球全体に巡らせるとりアス達の魔力を探る。

「お…おい…どうし――」

アザゼルの声を無視したままゼノはリアス達の気を感じるとその場に向けて瞬間移動した。

――

そして今に至る。

全身から怒りのオーラを放ちながら佇むゼノに皆は硬直してしま

う。

そんな時だった。

「お…おい…あれって銀河神だよな…!?!」

「あ…ああ！確かディオドラ様の捕まえた女の弟だとか…!」

辺りから次々と兵士達の動揺する声が聞こえてくる。それによって先程までリアス達を襲おうとしていた魔力弾の嵐が止んだ。

そんな中 ゼノはゆっくりと手をあげると視界を覆い尽くす程まで蔓延る禍の団の兵士達に向けた。

「破壊」

「「「「!?」」」」」

その一言と共にゼノやリアス達を取り囲んでいた禍の団の兵士達が紫色の粒子と化し、空気に溶ける様にして消え始めた。

「う…!?うわああ!?なんだよこれ!」

「身体が!?身体がああ!!!ディオドラ様ああ!!!」

辺りから次々と兵士達の苦しむ声が聞こえてくる。その中には突然の現象に戸惑う者や命を懇願する者。そして意味のない謝罪をする者がいた。

だが、その声もやがて聞こえなくなってくる。

「……………これが全てを無に帰す…【破壊】の力…!」

苦しみながら消えていくその惨劇を見ていたゼノヴィアは初めて見るゼノの神としての力に驚きを隠さず冷や汗を流していた。

それよりも皆が驚いているのはそれだけではない。いつもよりも雰囲気は全く違うのだ。

「ぶ…部長……なんで先輩…あんなに怒っているんでしょう…?」

「分からないわ…。ただ、ディオドラが彼に何か仕掛けたのは間違いないと思うけど…」

リアス達はゼノの発せられる殺気を恐れながらも彼を見つめていた。

その時だった。ゼノの姿が一瞬だけ消えると二人の女性を肩や腕に抱えながら再び現れた。

その抱き抱えられている二人の女性のうち、一人を見た瞬間皆は驚きの声を上げた。

ゼノが抱き抱えていたのは先程、ディオドラに連れ去られたアーシアだったのだ。

「アーシアあ!!」

その姿を見た途端 誰よりも早くイツセーが名前を叫びながら駆け寄った。

イツセーはゼノからアーシアを受け取ると即座に彼女を抱き抱え  
身体を揺すつた。

「アーシア！おい！大丈夫か!？」

「い…イツセー…さん…」

イツセーがアーシアを介抱するその一方で 朱乃と小猫はゼノが  
抱えていたもう一人の人物を見て更に驚いた。

「ゼノくん…まさかその人は…!？」

「サリさん…!？」

ゼノが担いでいたもう一人の女性はなんとゼノの姉であり朱乃や  
小猫達を暖かく迎え入れてくれていたサリであった。着用している  
スーツが所々ボロボロになっており、肌や下着が露出していた。

「…」

ゼノからサリを渡された朱乃と小猫はアーシアと同じく介抱し、何  
度も心臓マッサージをした。

「別に命に別状はねえ。気を失ってるだけだ」

「良かった…ですが…なぜサリさんが…」

その時だった。

「ちよつとさあ…何してくれてるんだい…?」

「[[[[[?]]]]」

その場に低く恨みの込められた不気味な声が響いた。

全員は声が聞こえた方向へと目を向ける。そこには先程とは全く  
異なり眉間に皺を寄せながら恨みたらしく目を向けるディアドラ  
の姿があった。

「て…テメエ…ツ!!」

「折角真実を聞いて絶望したアーシアの表情を眺めようと思ったら突  
然と奪って行っちゃって…僕のお楽しみがオジャンじゃないかあ!？」  
「そう言いディオドラは先程アーシアを掴んだ手を再び伸ばしてき  
た。」

「さあ…アーシアを返してもらおうかッ!!」

「誰が渡すか!」

「よくも私の可愛い下僕を弄んでくれたわね…ッ!!万死に値するわ!」

「私の友達を傷つけた罪…デュランダルで微塵切りする程度では済まされないぞ…ッ!!」

伸びてくる手に対してイツセー、リアス、ゼノヴィアは怒りの目を向けながら武器や魔力を展開しアーシアを守るかの様に出た。

「あはははは!!僕と戦うのかい?いいよ!掛かってきなよ!」

フルパワーの僕を倒せるならね…!!」

その瞬間 デイオドラの腹部が発光すると共に身体からドス黒い血の色の様な魔力が溢れ出した。その魔力の量は凄まじく触れた岩石や瓦礫を次々と吹き飛ばし、巨大な遺物は粉々に破壊されていた。地形を変形させる程の魔力の質は既に最上級悪魔…いや、魔王すらも凌駕していた。

「さあ!誰から死にたいかなあ!」

「その前に一つ聞かせろ」

「……ん?」

そんな時だった。ゼノの一言によってデイオドラの溢れ出る魔力の嵐が断ち切られた。

「なんで…姉貴を攫った?」

「あゝ。確か君のお姉さんだったよね。何故狙ったかって?前々から君の事がウザったらしくて嫌いだったんだよ。人間の分際で神の資格を得た上に僕に対して偉そうに。それで君のお姉さんを攫って心身共に支配してしてやろうと思ったのさ!」

「それでサリさんを…ッ!!」

「ゲスを通り越して…もう外道ね」

デイオドラの私利私欲にまみれた理由を聞いた朱乃は齒を噛み締

めながら怒りの声を上げリアスは遂に彼を外道と言い捨てた。

「何とでも言うがいいさー！さて君達を殺してアーシアとソイツを取り返そうかー！」

「ふざけんなあッ!!!」

ディオドラが迫り来ようとした時 イッセーは全身からオーラを放ちながら赤い龍の鎧を纏い『禁手化』を発動させると片手に魔力を纏いディオドラに向けて放つように殴りつけた。

『ドラゴンショット』ッ!!!

殴りつけられた魔力は一筋の赤い光線となりディオドラの身体に当たると爆発した。

だが

「な…!!」

煙が晴れディオドラの姿が露わになった途端 イッセーは驚愕する。

「ん〜。マッサージかな〜？」

そこには無傷のまま何食わぬ顔をしているディオドラの姿があった。

「む…無傷だと!?!」

「いや、無傷ではないさ。今の君の攻撃で僕は左腕を失った。けど僕は【不老不死】こんな怪我なんて数秒もあれば完治してしまうんだよ！それに、あの御方”のお陰で僕は破壊のオーラに対する耐性もできていくんだ！」

その言葉と共にディオドラは全身から溢れ出る大量の魔力を片手に集中させた。

「いくら宇宙の神だろうと破壊できない上に不老不死の僕には勝てないだろう？このままコイツら共々君を殺して新しく神に成り代わるって言うのもいいかもねえッ!!!あははは!!!」

遂にその顔はうちに秘められた狡猾な性格に見合った程まで醜く歪んでいた。空から聞こえる不気味と共に不快感を与える声に地上にいるアーシアは震え皆は怒りのあまり歯を軋ませた。



だが、ディオドラはとんでもない事をしでかしてしまった。

「グベラア——!?!」

突然 ディオドラの全身に無数の凹みができる。それは全て拳の跡であった。粘土の様に全身が歪み骨までもが粉々にされたディオドラの身体は即座に再生され元に戻る。

だが、その顔からは先程の余裕な表情が消えていた。

「はあ…はあ…はあ…何だ今の痛みは…!?!」

「おい」

「!!」

その時だった。先程まで地面にいたゼノがディオドラとほぼ同じ高さまで浮いていた。

その顔は先程よりも激しい怒りに包まれていた。

その瞬間

「いい加減にしろ。この——」

クズ野郎があああああああッ!!!」

その場いや、冥界全土を揺るがせるほどの巨大な怒声が響き渡った。地面が大きく揺れ、天からは無数の雷が轟音を鳴り響かせながら辺りへと降り注いでいく。

そして全身からはディオドラの魔力さえも覆い尽くす程の超巨大な気がまるで爆発する様に溢れ出ていた。

その大音量の声と気を超至近距離で感じていたディオドラの顔からは先程の余裕が完全に消え去り、冷や汗が流れていた。

そして 響き渡る声が止まった時。全身から先程よりも濃い紫色のオーラを纏いながら髪の色を変色させたゼノがディオドラに向けて人差し指を向けた。

「お前には地獄を見せてやる…ッ!!」

ディオドラは誰も触れたことの無いゼノの“逆鱗”にふれてしまったのだ。

## 神の刑罰

ディオドラの目の前で浮遊するゼノはいつもとは雰囲気違っていた。朱色だった髪は赤く染め上がり内部からは赤いラインの走る紫色のオーラを放ち辺りの空気を揺らしていった。

「お前…簡単に死ぬると思うなよ…?」

「は…ははーたかが髪の色が変わったくらいでいい気になるなよ！それに僕が死ぬ…?ふ…ふははは…！不死身の僕に何を言っているんだい!？」

ディオドラは理解に苦しむかの様に自身を睨みつけてくるゼノを嘲笑う。自身は不死身だから無敵。その安心感が彼の自信を掻き立てているのだろう。

その一方で怒りのオーラと共に冥界を揺るがせたゼノは先程、禍の団の兵士達と同じように手をディオドラへと向けると巨大な気弾を生成した。

「そんなもので僕を殺そうというのかい!?!無駄だよ！そんな攻げ――」

ディオドラが最後まで言い終える前にその気弾は放たれた。

ディオドラの背後に聳える階段や神殿の様な跡地へと。

「!？」

ディオドラが振り向いたと同時にゼノの放った気弾は神殿の様な場所へ直撃すると大爆発を起こし、神殿そのものを爆炎の中へと飲み込んだ。その神殿の跡地は木っ端微塵となり、瓦礫は煙を纏いながら辺りへと散っていく。

その様子を佇みながら見つめていたディオドラは眉間に皺を寄せながらゆつくりとゼノに振り向いた。

「ちよつと…何してくれてるのさ君い…!!!」

その言葉とともに額に青筋を浮かべたディオドラは再び全身から黒い魔力を放出し身に纏うとゼノへ向かっていく。

「…遅え…」

その瞬間 デイオドラの向かってくる拳がゼノの振り上げられた脚によって軌道を晒された。

「くう…!!クソがあああ!!」

防がれたディオドラは更に眉間に皺を寄せると貴族としての気品の欠片を投げ捨て、獣のように叫ぶと次々と拳を突き出していった。

「ひいいやああああああ!!!!」

「…」

黒色に輝くオーラを纏ったディオドラから次々と放たれてくる拳と蹴りの乱撃。辺りに響く重い打撃音からその速度とパワーは既に最上級悪魔を上回っていた。リアス達から見れば残像が見える程の速さであろう。

だが、その拳の乱撃をゼノは全て、いや、その先の軌道さえも見切っているかのように次々と右脚だけで捌いていった。

「あそこにはリアス達の為に用意した僕の下僕達がいたんだけどなあああ!!」

その一言と共にディオドラは最後の一押しとばかりの拳の一撃をゼノに向けて放つ。

「遅いんだよノロマ」

その一撃さえもゼノは吐き捨てながら躲し、ディオドラの頭に向けて踵を振り下ろした。

「ガハア…!」

ゼノの踵はそのままディオドラの脳天に向けて振り下ろされ、彼の頭を歪ませるほどまで食い込むと、そのまま彼の身体を地面へ向けて吹き飛ばした。

「グボアエ…」

巨大な地響きを鳴り響かせながら地面へと叩きつけられた事により彼を中心に半径十数メートルもあるクレーターが形成された。

その中心で倒れながらも頭を再生しているディオドラのすぐ側に着地したゼノは再生した彼の頭を踏みつけ、地面へと再び叩きつける。

「お前の眷属なんて知るかよ。どうせあの手この手で落としてきた奴らなんだろう？ だったら殺して転生させた方がいいじゃねえか」

「な……！ 何でそれを!？」

「全部お見通しなんだよ。アイツの事もな」

ゼノは後ろでリアス達に介抱されているアシアへと目を向けた。

「お前は一度、アイツに興味を持ったけど悪魔と教会の立場からそれは無理だった。なら、ソイツが教会から追放される様に仕向ければいい。そう考えたお前は傷を作り、関係者に見られる時間を見極めてアイツに治療させた」

ゼノの説明を聞いたディオドラは驚きのあまり硬直。そしてゼノの説明を聞いていたりアスや眷族の皆は怒りを露わにしていた。中でもアシアの慈悲深い心を理解していたイツセーは激昂寸前であつた。

その一方で、ディオドラの眷属全員を葬ったゼノは向けていた手を下ろした。

「大体はこんな感じだろ。お前の眷属でもお前の所為で人生を狂わされたから情状酌量の余地がある。数時間後には転生するだろ。まあ一匹、転生できねえ奴もいたけどな」

「……ッ!!」

全てを見通され眷属さえも殺され孤独となったディオドラはバツが悪そうな表情を浮かべながら両腕を握り締めていた。

「この……チビがあ……!!」

「口の利き方に気をつける……ッ!!!」

その瞬間、ディオドラの頭を踏みつけるゼノの脚が一瞬離れるとディオドラの身体を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされたディオドラは地面を抉りながら遠くの岩場まで吹き飛ばすと一つの巨大な岩石へと身体が叩き付けられた。

「ぐう……!？」

所々にできた傷が煙を上げながら再生する中、ディオドラはゆっくりと立ち上がる。だが、その立ち上がる動作へと掛かっていた時間自体がゼノの接近を許してしまった。

「…!!」

「があ…!?」

初速から音速を超える速さで駆け出し一瞬で迫ってきたゼノの拳がディオドラの腹へと深く抉り込み、その巨大な岩石へと更に叩きつけた。それによってディオドラの身体は更に沈み込み岩石に巨大なクレーターを形成させる。

それだけでは終わらない。

「ヴウオオオオオアアアアア!!!」

雄叫びを上げながらディオドラの顔を掴み指を食い込ませたゼノは岩盤へと更に叩きつけ引きずり始めた。

「ぎやああああ!!!」

次々とディオドラの顔面の皮が剥がれ肉が擦り落ち、目が抉り取られていく。次々と襲いかかる痛みによりディオドラは絶叫の声を上げていった。

そして 岩盤の端へと到達するとゼノは駆け出しながらディオドラの頭を振りかぶり空中へと投げ上げ、オーラを纏い光に近い速度で上昇すると一瞬でディオドラへと追いつきその身体に向けて踵を振り下ろした。

「げふう…!?!」

振り下ろされた踵は見事にディオドラの脳天へとクリーンヒットし、頭蓋骨を粉々に粉碎すると共にその頭を空気の抜けたメデイシンボールの如く凹ませながらディオドラの身体を地面へと叩き落とした。

ディオドラが地面へと叩きつけられた事によって辺りには巨大な衝撃音と共に砕けた地盤が飛び散り巨大な砂嵐が吹き荒れた。



「アーシア！おい！しっかりしろ！アーシア！」

一方でゼノから真実を聞かされたイツセーは涙を流すアーシアを必死に介抱していた。

そしてその傍らでは朱乃と小猫が素早い手つきでサリの応急措置を行っていた。

「朱乃、小猫。彼女は大丈夫？」

「呼吸や鼓動に關しても問題ありません。ただ…ディオドラに何かをされていたとなると…起きた後の精神ケアが必要かと…」

サリを介抱していた朱乃と小猫は彼女を巻き込んでしまった事に對して何も出来なかつた自身に腹を立てる様に齒を食いしばっていた。

すると

遙か遠くから巨大な爆発音と共に突風が吹き荒れた。その風に皆は態勢を低くし吹き飛ばされない様にその場にうづくまる。

「くう…！何て力だよ…！いつもの先輩じゃねえぞ…！」

「ここにいたら危ないわね…。急いで離れるわよ」

遙か遠くから押し寄せるゼノの力の余波にリアスは危険信号を發し、皆へと撤退の指示を出す。

その時だった。

「逃がさんぞ。偽りの魔王の妹よ」

「「「…!?」」」

◆◆◆◆◆

その一方で 地面へと叩きつけられたディオドラはその際に出上がった半径数百メートルものクレーターの中心で再び身体を再生させていた。だが、その顔からは勝利への自信が完全に消え去っていた。

「く…くう…！嘘だ…！オーフィスの蛇を得た上に不死身の力を手に

入れた僕が…!!」

「お前に一つ教えてやる」

「…!?!」

突然と頭上から聞こえた声。振り返るとそこにはまるで『ゴミ』を見るかの様な目で見下ろすゼノの姿があつた。

「不死身には一つだけ利点がある。それは文字通り不死身だ。何度も何度も攻撃しても死なないのは俺でも厄介だ。けど、それは相手が自分と同じかそれより下の場合だけ真価を発揮する。相手が格上ならお前はただの殴り甲斐のある――」

――『サンドバツク』だ』

「サンド…バツクだと…!?!」

「不死身の自分より強い奴に会った時点でお前は負けてるんだよ」

「う…嘘だ…!!」

「本当だよ。自分でも薄々気付いてるだろ?」

「違う! 僕は無敵だ! 最強なんだ!! お前の様なガキに! 不死身の僕が負ける筈な――がはあ!?!」

最後まで言い終える前に頬に蹴りを入れられ、その場から吹き飛んだ。

「プライドの高さもここまで来ると呆れるな。俺に一撃も与えられてねえくせに」

ディオドラを蹴り飛ばしたゼノはディオドラの身体が地面へと着く前にその地点へと先回りし、吹き飛んできたディオドラの顔面を掴むと地面へと叩きつける。

「ガハア!?!」

脆い音と共に地面へと叩きつけられたディオドラは血反吐を吐き出す。

「オーフィスとか言う奴の力も俺より全然弱いつて事だけだ。いい加



滅理解しろよ」

そう言い捨てたゼノは地面へと叩きつけたディオドラの頭を掴むと更に地面へと叩きつける。

「があ……い……いた……ぐぼお……!?!」

「あと不死身の肉体でも痛覚がある。死なないとしても痛みは襲ってくる。たとえ即死する程のダメージでもな。それに俺の気でその傷の再生を止めれば更に長くその痛みが伝わる。さて」

ゼノは叩きつける手を止めるとディオドラの髪を掴み無理やり自身と同じ目線になるまで持ち上げ、血走った目を向けながら、ある事を尋ねた。

「脳が壊れた時の痛みってどんなモンだと思う?」

「…は?」

その言葉と共にゼノの両手がディオドラの頭を頭部と顎を挟み込む様にして掴む。

「な…何の話だ…!?!」

「簡単だよ。人間や悪魔も脳を破壊されれば死ぬ。けど、死ぬ時の感覚は一瞬。だから脳が破壊されてもその痛覚は感じない。だけど今のお前は不死身。脳はもちろん再生されるけど――」

――俺の気で再生を妨害したらどうなると思う…?」

「!!!」

その一言にディオドラの全身の毛が逆立ち顔から完全に余裕が消え去ると共に恐怖に染まった。

「なあ。どうなると思う?知りたいだろ?」

「あ…や…やめてくれ…!?!」

ゼノの手がゆっくりと動き出す。対抗しようにもディオドラは恐

怖のあまり立つことも抵抗する事も出来なかった。

「俺の手の振動は1秒で約1万回。お前の脳をミキサーに掛ける様に『グチャグチャ』にできる。そしてグチャグチャになった脳みそが再生するのを止めたら…どうなると思う？」

「……まー待てー！」

その言葉を聞いたディオドラは後の展開を完全に理解したのか、涙を流し始めた。

「嫌だ…いやめて！やめてくれ頼む！そ…そうだ！君を禍の団の幹部にしてあげよう！現魔王の血族である僕なら顔が効く!!それとも金と女か!?望む金も女も用意しよう！」

「古くさい血にこだわってる奴らからしたらお前の顔なんてドブ以下だし、金も困ってないし女にも興味ないし俺は神だから幹部なんて意味ねえ。命欲しさにもう知識も低下してるな」

ぐしゃぐしゃになる程まで涙で歪んだ顔に加えて生にすぎる必死さ。そしてプライドをへし折られた事による喪失感と誰も助けにこない絶望感。

そのありとあらゆる感情に押し殺されたディオドラの顔はその感情と同じように先程よりも更に激しく醜く『歪んで』いった。

「頼む…いや…お願いします…!!やめて…!!」

醜く歪んでいく顔を見ているゼノは――

「あはっ!!」

――笑っていた。心の底から。

「アハハハハ!!いいぞその表情！その顔を見たかったんだよ！不安と絶望に落とされたその表情…最高だ…!!」

その気持ちの悪い喜びの声と共にディオドラの頭を掴んだ両手が

震え出す。

「いや……待って！頼むお願いだ！お願いします！謝るから許して！許してください!!」

ディオドラが助けを懇願すると共に謝罪をしていく度にそれを見つめるゼノの表情は輝いていく。

「断る」

もう手遅れだった。

ディオドラの頭部を掴んだ両手が超音速で震え出す。

「ヘッドシエイカー」…ツ!!!

「あゝあああああああああああああ!!!」

ディオドラの頭が超高速で振われた事によって凄まじい振幅の振動が脳内へと伝わり、それによって形成されていた脳みそや骨格が組織から粉々に崩壊し遂には溶けていくと共に脳髓が泡を立て始めた。

高い振幅と共に生物では反応できない微笑時間の間に超高速で振われた事により頭部の内部組織は1秒も経たない内にメレンゲ状に泡立たられてしまった。

「!!!」

その1秒が経った頃にはディオドラはもう声が出せなかった。感じたこともない痛みと恐怖感に全身を支配された事により声を発する事さえも出来なくなってしまうのだ。

そしてその振動が終わると残像によって見えなくなっていたディオドラの頭部が頭となった。

「いい顔になったじゃねえか」

目と口からは血の混じった謎の液体がメレンゲ状になり大量の空



「い…嫌だああああああああああ!!!」

◇

その後 デイオドラの脳内はゼノによって何度も何度もかき混ぜられていった。脳が溶けていくという超常的な感覚を骨の髄まで染み込ませる程まで味わった事によりデイオドラの精神はその痛みに耐えきる事ができず遂に肉体ではなく精神が先に死んでしまった。

「……」

それによってデイオドラの目からは光が消え去り物事を考える事さえも不可能となり生きながらも思考が停止した “植物人間” へと成り果ててしまった。

「あく、スツキリした」

デイオドラの頭から手を離れたゼノは植物人間と化したデイオドラの身体を蹴り飛ばし、仰向けとなって倒れた際に頭となった腹部に根を張るドラゴンボールへと手を伸ばすとデイオドラの身体から引き抜いた。

「お前は俺を怒らせた。罪状はそれで十分だ」

そしてドラゴンボールを手にしたゼノは表情を戻すと再び “ゴミを見る様な目” でデイオドラを見下ろしながら手をかざした。

「じゃあな、地獄で永遠に苦しんでろ」

その言葉と共にデイオドラの身体は一瞬だけ発光すると木っ端微塵に砕け散った。

デイオドラを葬ったゼノは残る一つの気を感じ取る。その顔からはもう今までの優しい笑みや感情が消え失せていた。

「コイツを殺して禍の団への宣戦布告といこうか」

## 崩れる旧魔王派

「お初にお目にかかる。私は前魔王の血を引く者『シャルバ・ベルゼブ』だ」

リアス達の目の前に現れた男は先程のディオドラよりも一層濃密な魔力を全身から放っていた。

その時だった。

ドガアアアンツ!!!

「!!?!」

遙か後方から巨大な爆発音と共に赤い爆炎が舞った。その爆音に驚いたリアス達が目を向ける中、同じくその方向へと目を向けていたシャルバは眉を顰めながら髪を掻き上げる。

「あの愚か者め…せっかく手に入れた力を使いこなせぬとは」

「…!!」

その瞬間 皆は戦慄する。ディオドラを嘲笑いながら髪を掻き上げた時に見えた額にはなんとディオドラと同じボールが埋め込まれていたのだ。

「まさか…貴方までその球を…!」

「そうだ。それに加えてオーフィスの蛇もあるのでな。今の私は帝釈天はおろか…シヴァすらも軽く超えているだろう。どれ、試してみるか」

そう言いシャルバは腕を掲げた。その掲げた先にいたのはアーシアだった。

その瞬間

アーシアは光に消えた。

「…え…う…」

彼女を解放していたイツセーは突然と腕の中から温もりが消えた事で呆気にとられてしまう。

「何を……したの…?」

「次元の狭間に送ったのだ。数分も経てば消失するだろ。普通は魔力が大量に消費されるのだが、全く減っていないな」

「…!!」

その言葉を聞いた瞬間、ゼノヴィアの眉間に皺が寄せられ、怒りに満ちた。

「おのれええええ!!!」

直前にイツセーから受け取ったアスカロンとデュランダルを掴みながら空中に浮かぶシャルバへ向けて駆け出すと、跳躍し振り回した。

「私の友人を返せええええええ!!!」

「知った事か」

その一振りをシャルバは人差し指一本で受け止めると身体を回転させ回し蹴りを放った。

「がはあ…い…」

その回し蹴りはゼノヴィアの腹へと直撃すると、彼女に胃液を吐かせその場から突き落とした。

「く…くそ…!!」

「ゼノヴィアちゃん!」

地面へと叩き落とされたゼノヴィアを朱乃は介抱する。

「…え…!? 魔力が!」

触った瞬間、朱乃は驚愕する。なんと、先程まであったゼノヴィアの魔力がほぼ全て失われていたのだ。

「ふん。我が力の餌食となったか」

「どういうこと!」

「アスタロトのガキは『不老不死』であったが、私が授かりし力は『暴食』触れた者の魔力は全て私の糧として吸収されるのだ。その女の魔力は私に喰われたという事だな」

シャルバの馬鹿げた能力にリアス達は目を震わせる。簡単に言うなれば彼の身体に少しでも触れれば瞬時に魔力を吸い取られてしまうのだ。

「さて、魔王の妹である貴様とその眷属を消し冥界への宣戦布告といこう」

「現魔王に直接勝負を仕掛けずに部外者から手を出すなんて：外道ね」

「何とでも言うがいいさ。奴らに絶望と恐怖を与えられなければ意味がないのでな」

そんな時だった。

『リアス・グレモリー、死にたくなければ今すぐこの場から離れろ』

「赤龍帝!？」

後ろからイツセーの神器である赤龍帝ドライグの声が聞こえてきた。見れば神器である籠手の宝玉部分がいつもよりも怪しく輝いていた。

神器が宿る左腕を握り締めながらイツセーはゆっくりと近づいていく。

『シャルバと言ったか。お前は力を得て浮かれているようだが：選択を：間違えた様だな』

「なんだと?」

その一言と共にイツセーの全身が禁手化と同じ赤い龍を模した鎧に包まれ、それと共に全身から無数の光る球が出現した。

その球からは次々と今の現状を憐れむかの様な声が聞こえてくる。

—— 始まった。 —— 始まったね。

我、目覚めるは ——

覇の理を神より奪いし二天龍なり ——。

無限を喰い、夢幻を憂う





「…!!」

砂嵐が吹き荒れる中、現れた物体を見たのか、シャルバの額からは冷や汗が流れ始めていた。

「ふん。次から次へと面倒な事ばかり起こしやがって。まあ一気に3つも回収できるから都合だな」

そこには地面に叩きつけられ仰向けに倒れているイツセーの姿と全身から真紅のオーラを放ちながら見下ろすゼノの姿があった。

「き…貴様は…!?!」

「黙れ」

その一言と共にゼノの手に赤い気が集中し巨大な気弾を作り出す。その気弾をゼノはシャルバへ向けて放った。

「は…」

それに対してシャルバは不敵な笑みを浮かべると両手を突き出し向かってきた巨大な気弾を両手で受け止めた。

「魔力攻撃か!?そんなもの今の私には通用し——なに!?!」

だが、それは一瞬にして消え去った。シャルバは理解していなかった。ゼノの放った気弾自体には自身の容量を軽く凌駕する程のエネルギーが込められていることを。

「な…なんだこれは?!吸収しきれ…うわああああ!!!」

シャルバの身体はゼノの気弾を吸収しきれず、気弾を受け止めたままその場から上空へと吹き飛ばされていった。

そして、その吹き飛ばされていく姿をゼノは見つめながらゆっくり翳していた手をゆっくりと握り締めた。

その瞬間

シャルバを吹き飛ばしていた気弾がゼノの手に呼応するかのよう  
に巨大化し、冥界の空を照らす程まで輝くと大爆発した。

「「「「…!」」」」」

背後で見えていたりアス達は、その光景をただ見ていることしかできず、何も口に出す事ができなかった。

すると、巻き上がる爆炎の中からシャルバが煙を纏いながらゆっくりと落下していった。

「生きてたか」

吹き飛ぶシャルバに向けてゼノは目を向けると、ゆっくりと脚を曲げる。

「けど、逃がさん」

その一言と共にその場から飛び上がり吹き飛ぶシャルバへ向けて飛び立った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

リアス達から遙か遠方に離れた地点。辺りでは悪魔と墮天使と天使の連合軍と禍ノ団の魔法使い達が交戦していた。

混沌とする戦場の中、その中心部では3人の人影があった。

「はあ…はあ…コイツはヤベエなサーゼクス…」

「ああ…。まさかあの球を埋め込んだだけでこれ程までの力を得るとは…」

一つは服が所々破れ、傷も見える程までボロボロとなっているアザゼル。もう一つはアザゼルと同じく傷だらけとなったサーゼクスであった。

「我が授かりし力の前に屈したか。その姿、見えて愉快だ」

そして目の前には黒いマントを纏いながら両手に雷と炎を迸らせる男『クルゼレイ・アスモデウス』がいた。

彼の周りには一直線上に雷や炎がまるで鎖のように張り巡らされており、今もなお、雷は稲妻を。炎は熱気を帯びていた。

「テメエ…：…一体どんな力を獲やがった…!?! オーフイスでもこんな事できねえぞ…!」

「しかも魔力が減少している様子もない…：これ程の魔力の嵐…：流石に

魔王の血族といえども長くは持たない筈だ……！」

傷を押さえながらも少しでも攻略法を見つけられるべく、二人はクルゼレイへ疑問をぶつける。それに対してクルゼレイはボロボロな姿を嘲笑いながら答えた。

「教えてやろう。俺が得た力はオーフィスと同じく『無限』俺が放った魔力攻撃は俺の意思で解除されない限り決して途切れる事なく発動され続けるのだ」

「な……!!」

「おいおい……いくら何でも反則すぎんだろ……!!しかもこんな馬鹿げた能力を持つてる奴がまだ5人もいるってことだよな……!!」

それはもはや神滅具さえも凌駕する程の能力であった。常軌を逸した能力にサーゼクスとアザゼルは冷や汗を流し始める。

完全に絶対絶命。

その時だった。

空から何かが飛来してきた。

「!?!?!」

突然と地面に激突しながら飛来してきた物体にサーゼクスとアザゼルは勿論、クルゼレイも驚きのあまりその場へと目を向けた。

「なっ……!!」

岩場へと叩きつけられた物体の正体が露わとなった時、クルゼレイは思わず驚きの声を上げてしまった。

そこにいたのは全身に傷を覆い、左頭部が焼け焦げた男。自身と同じ旧魔王派であるシャルバ・ベルゼブブであった。

「シャルバー！」

思わず声を上げるクルゼレイ。すると、その声が届いたのか、倒れ伏していたシャルバはゆっくりと目を開けた。

「クルゼレイか…今すぐ逃げろ!!」

「は…?何を言っているんだ…?」

「早く逃げろ!!!奴が…奴が来るぞ…!!」

「やつ?」

その様子を見たクルゼレイは不思議に思ってしまう。明らかに冥界を襲撃する前の彼と雰囲気違っていた。いつもは冷静沈着かつ魔力の流れもスムーズであった彼が、今ではそれが正反対の状態となっていた。顔を引き攣らせながら必死に伝えるその様子に、本当に彼なのか疑ってしまう程であった。

その時だった。

「…!!」

その場を巨大な殺気と恐怖感が覆った。当たりで交戦していた魔法使いも連合軍もその動きを止めて、全員がある1箇所を見つめていた。

「あ…あああ!!!」

シャルバの恐れ慄く声と共にクルゼレイがゆっくりと振り向く。

「き…貴様は…!!」

「…」

そこにいたのは全身から深紅と蒼炎のオーラを纏うゼノだった。その姿を見た瞬間、クルゼレイの目が変わる。

「ようやく会えたな…我が同胞であるカテレアの仇…今ここでとらせてもら」

その瞬間、クルゼレイの身体が光に飲み込まれて消えた。

肉片も残らず。

そして、クルゼレイを葬り去った犯人であるゼノの鋭い目が地面で

倒れ臥すシャルバへと向けられた。

「あああああ!!!」

自身の瞳を覗き込むかのように見つめてくるその姿にシャルバは恐怖と絶望に支配されると共に正気を失ったかのように頭を抱えながら叫び出す。

そして、その叫び声を聞いたゼノはゆっくりとシャルバへ迫っていった。

「くるな…来るなああ!!!」

ゆっくりと自身に迫るその小さくも巨大な影にシャルバはもう魔王としてのプライドさえも捨て、1秒でも長く生き長らえる為に何度も魔力弾を放っていった。

だが、身体に当たってもゼノには傷一つつかない。それどころか、感じる気が次々と増大していった。気を感じる度にシャルバの全身という全身から鳥肌と冷や汗が流れ、鼓動も激しさを増していく。

その一方で シャルバへと向かっていくゼノは立ち止まると、手を翳した。

「終わりだ」

その一言と共にシャルバの身体はゼノの放った高密度のエネルギーの波動に飲み込まれた。

## 崩れる関係

ゼノの力によって、禍根である旧魔王派の2人が死んだ。一瞬にして――。

「…」  
旧魔王の血族である2人を瞬殺したゼノは自身を落ち着かせるかの様にゆつくりと息を吐く。すると、ゼノの全身を包んでいたオーラが身を潜めるかのように体内へと吸収されていった。

「…」  
その表情からは何も感じられ無い。あるのは自身の姉へ手を出した悪魔とそれに与する禍ノ団に対する憎悪。そして力を持つていながらも守ることができなかつた自身への怒り。

そんな時だった。

「ようやく 出会えた。黒崎 ゼノ」

「…あ?」

背後から怒り狂う彼の名を呼ぶ影が現れる。ゼノが振り向くとそこには宙に浮きながら自身を見つめる幼い少女がいた。ゴスロリのような服を纏いながらも上半身の前側がはだけ、胸元をテープの様なモノで覆うという異質な風貌ながらも、ゼノは気に留めず、目を向けた。

「誰だお前」

「我、オーフィス」

「オーフィス?」

自身をオーフィスと名乗った少女にゼノは身体を向ける。一方で彼女はコクリと頷くと、彼と同じ視線まで地面に降りてくる。自身とほぼ同じ背丈である彼女から感じられる気は他の龍よりも全く異質。まるでこの世の理から外れている様であった。

すると

「禍ノ団の首領…てとこだ」

「へえ」

サーゼクスと共に降りてきたアザゼルの補足を耳にすると、ゼノは全身から再びオーラを纏いオフィスへと向けて強大な殺気を放った。

「じゃあお前を殺せば傍迷惑なゴミ共は片付くって事か…!?」

「…!?!」

ゼノの強大なオーラは再び冥界全土を覆い尽くし至近距離にいたアザゼルやサーゼクス達どころかオフィスでさえも威圧する。その威圧感は一程の比ではなく、周囲一体を激しく揺らしていった。

「お前に聞く。答えなかったら殺す。なんで禍ノ団とかいう集団を作った?」

ゼノの気の圧力に流石のオフィス自身も恐れているのか、頬から冷や汗を流しながらも焦る事もせず静かに答えた。

「静寂…」

「静寂?」

「…我…次元の狭間にいる…グレート・レッドを倒して…静寂を得た…それだけ。そしたら集まってきた」

「グレート・レッド?なんだそれ」

そのグレート・レッドという単語について問うようにアザゼルへと目を向けると彼は答えた。

「『真なる赤龍真帝』イツセーに宿ってる奴の上位互換だ。要約すると、アイツから奪われた住処を取り戻す為…と言ったところだな」

「…そうか」

アザゼルからの説明を理解したゼノは改めてオフィスを見つめると、全身を駆け巡る気の流れを読み取る。

「…」

答え初めから終わりまでの気の乱れは一才感じられない。つまり彼女は一切の嘘をついていないという事だ。それを感じ取ったゼノは殺気を解くとオフィスへと目を向けながら尋ねた。

「ソイツを消せばお前は次元の狭間に帰り、禍ノ団も消えるのか?」

「…」



それに対してオーフィスは首を縦に振った。

「それが目的。ただ、集まった者はわからない…」

「…そうか」

オーフィスの言葉を理解したゼノはオーフィスを横切ると、空へと飛び立つ。

「オーフィスってやつ。後で俺の気配を辿って来い。話ぐらいいは聞いてやる」

「…分かった」

「それと、サーゼクスとアザゼル」

オーフィスと話を終えたゼノは今度はサーゼクスとアザゼルへと目を向けた。

「今回の件で分かったよ。」

——もうお前らは信用しない」

「な…!？」

その言葉に二人は驚く。サーゼクスとアザゼルを見つめるその瞳は激しい怒りに満ちていた。それは悪魔や堕天使そして天使といった3大勢力全般へと向けているかの様に。

「いや、元から信用してない…って言うべきか？これから全部、俺一人でやる。今後俺のやる事に口出ししたら容赦なく殺すからな」

「…!!」

その言葉を耳にするとようやくサーゼクスとアザゼルは正気に戻ったのか、あまりの衝撃のあまり目を震わせた。

だが、彼らの言葉を待つ事なくゼノはその場からオーラを纏い飛び

去っていった。

その場に取り残されたサーゼクスとアザゼルは何も言い返せず、ただ去っていく姿を見つめる事しかできなかった。

「おい…サーゼクス…」

「ああ分かってている…。だが…これは当然ともいえる…：本来統率すべきだった悪魔一人の行動さえも予測できず…彼の家族を危険に晒してしまったのだから…」

「俺達を殺さなかつたって事は…僅かな慈悲を残してくださいってたつてことか…」

サーゼクスは此度のディオドラの件に対して自身の統率能力と一般市民を巻き込んだ自身の不甲斐なさを憎んだのだった。

そして気づいた時には既にオーフィスの姿も消えていた。

その後 サリを介抱していたリアス達の元へと戻るとゼノは礼だけを口にし、それ以降は何も喋らず、瞬間移動によって冥界を後にした。

後にサーゼクスから話を聞かされたリアス達は今回の事件の根幹であるディオドラの同族である悪魔として彼へ謝罪すべく向かうものの、既に彼は家どころか駒王町から姿を消しており、彼らを出迎えたティアマツトの手には退部届が託されていたという。



冥界から遥か遠く。数千キロも離れた暗い暗い空間の中。

「がはあ…」

一人の男が胸を押さええながら胃液を吐き出しており、その傍らではその男を嘲笑うかの様に見下ろす一つの影があった。

「なんだその様は。銀河神相手にかすり傷さえも与えられなかったのか？」

その男は逆立つ髪を揺らしながら両耳に付けられたピアスの音を鳴らす。

それに対して荒い息を吐く男シャルバは合わせる顔がないのか、その顔を見上げる事はなかった。

「…そうだーだから殺せ！サツサと私を殺せ！」

「いや、貴様はまだ殺さん」

シャルバは自身を殺す事を求めるが、男はアツサリとその要求を拒否し背中を向けた。

「貴様にはまだ役に立つてもらわなければな。今回は私が助けてやったのだ。次の計画ではどんな役目であろうと受けてもらうぞ？」

「ぐう…!!!」

男の言葉にシャルバは死ねないのか、あるいはプライドがズタズタなのか地面を殴り付けながら歯を食い縛った。

その一方で 男はその場にあるモニターにてとある映像を目にしていた。

「それにしても聞いた当初は私も驚いたぞ。まさか…この『小僧』がメチカブラの依代だったとはな…」

## 崩れゆく関係

現世へと帰還したゼノはサリを休ませるためにベッドへと運ぶ。その際に出迎えたティアマットは慌てていたが、すぐに彼女を落ち着かせ食事を頼むとベッドへと寝かせた。

「サリ……」

目の前で横たわるのは全身がボロボロに傷つけられたたった一人の姉。それを見ているだけで腑が煮え繰り返りそうな感覚に陥っていった。

「…」

何とか冷静を保ちながらゼノは彼女の額に手を当て、全身という全身からデアドラに関する指紋や髪などといった彼のDNAが残った情報を感じすると、それらを全て跡形もなく破壊した。

そして、それが終わると惑星ピタルにて扱っていた治療薬を傷へと塗りつけ包帯を巻き、自身の気を少し分ける。

すると

「……ん？あれ……ここは……」

目がゆつくりと開き、眠気のある声と共にサリが目覚めました。

「ベッド……？何でここに……あれ？ゼノ………え？」

それを見た時には既にゼノの身体は反射的に彼女の首に手を回し抱きついていた。

「どうしたの……？ゼノから抱きついてくるなんて……まさか！いよいよお姉ちゃんもセツ……あれ？」

抱きつかれたサリは顔を真っ赤にさせながら驚くと共に期待するが、ゼノの抱き締める力から疑問に思い首を傾げた。

「何かあったの？」

「…」

彼女を抱きしめていたゼノは彼女がデアドラに拘束されていた時を思い出す。それを思い返させないために首を横に振る。

「何も無い……ただ、しばらくはこうさせてほしい」

「そっか。うん！たくさん甘えて！」

ゼノの言葉にサリは笑みを浮かべるとゼノを力強く抱き締めベッドに倒れこんだ。

「えへへ〜ゼノ〜♪」

彼女の胸元に抱き締められる中、ゼノはただ虚空に向けて感情の籠っていない虚な瞳を向けていた。

湧き上がるのは純粹なる”怒り”

それと共にたった一人の家族に手を出した悪魔やそれを守れなかった己に対して憎しみの念が浮かび上がっていく。

――家族に手を出す者は全てこの手で殺す――。

それからサリが寝付くとゼノはその手を振り解き、寝室を後にした。

そして後日、ゼノは冥界や天界に乗り込み四大魔王やアザゼル、ミカエルといった勢力のトップを強制的に召集し、今後、自身が独自に活動する事に加えて邪魔をすれば誰であろうと容赦なく破壊する事を忠告した。

――

――

――

――

夏休みが終わりを迎えようとしていた夏の日。

駒王学園のゼノが去ったオカルト研究部の部室では仕事がなく、部室の清掃しかやる事がないリアスは机の上で読書をしていた。

すると

「部長……お茶を淹れましたわ」

いつもの様に紅茶が注がれたカップをお盆に乗せた朱乃が現れ、彼女の前に置いた。

「朱乃…随分と痩せたんじゃない？」

「そうでしょうか…？」

リアスの目の前に立っていた朱乃は帰還した時よりも少し痩せ細っており、目元には隈も出来上がっていた。それは彼女だけではない。朱乃と共にゼノの家に居候している小猫も同じであり、彼の話を聞いた途端に目から涙を流していた。

「あれから…彼は帰ってきていないの？」

「はい…」

彼女達によるとあの日以来ゼノが家に帰ってくる事は無く、代わりに退部届が置かれていたという。

それが相当なショックであったのか朱乃や小猫はその日から一睡もできなかったようだ。

「先輩…俺達に何も言わずに出て行っちゃまうなんて…」

「仕方ないわよイッサー…私達『悪魔』が彼のお姉さんを汚したんだから…。それに…私だって本来は殺されてもおかしくないのよ。街の管理を任されている身でありながら…こんな大失態を犯したんだから…」

そう言いリアスは再び街への侵入を許してしまった自身の不甲斐なさを恨むかのように唇を噛み締めるのだった。

その時であった。

ガチャ

何者かが扉を開ける音が聞こえ、一同はそこへ目を向けた。入部希望者か、はたまた顧問であるアザゼルか、皆の視線がドアの方向へと集中する。

だが、入ってきたのはどちらでもない。

「……!!」

ドア付近に立っていた訪問者の姿を見た瞬間 全員は目を震わせながら驚いた。

「ゼノ……くん……」

「先輩……」

扉を開けた人物。それはなんと自身らの前から姿を消したゼノであったのだ。更に今の彼はいつものような制服ではなく戦闘用であるチャイナ服を身に纏い雰囲気が一変していた。

朱乃と小猫は数日ぶりに見るその姿に震えた声で彼の名前を口にすることも部室へと入ってきたのはゼノはその声に何の反応も示さないまま机に座るリアスの元へと向かう。

「アザゼルはどこだ?」

「え……昼食のために出て行ったわ……」

「そうか」

リアスが答えるとゼノはそのまま振り返り、部室から出て行こうとする。

すると、それをソファアに座っていたイツセーが止めた。

「ち……ちよつと待ってくださいよ先輩!!」

朱乃や小猫、そして木場が出るよりも早く彼の肩を掴む形で止めたイツセーはゼノへ向けて叫ぶ。

「なんで一人で行こうとするんすか!?!少しは頼ってくれたっではないですか!!」

「待ちなさいイツセー!」

その訴えは怒りのみが混じっているものであった。それを察知したリアスはすぐさま立ち上がりイツセーを冷静になるよう伝えるも、彼は止まらなかった。

「俺たち冥界であんなに修行したんですよ!!これじゃまるで俺達の修行が無駄なみたいじゃないですか!!」

リアスの制止に従うことなくイツセーは己の抱く不満をゼノへとぶつける。禍ノ団などの危険因子との決戦に向けて修行してきたのは皆共通であり、中でもイツセーは正義感が強かったために努力を惜

しかなかった。

だが、

「は？」

それを耳にしたゼノは今まで聞いたこともない様な低い声を漏らしながら目を細めた。

「頼る？お前らを？笑わせんなよ」

「え……？」

その言葉はイツセーだけでなく、その場にいた全員を凍て付かせた。対してゼノは鋭い目を向けながら淡々と言い放つ。

「強くなったって言っても、ただ貰ったおもちゃを使いこなせる程度になっただけだろうが。お前のその神器は10秒ごとに力を倍にするだろ？確かに「お前ら側」から見たら厄介だけど「俺達」にとつてそんなモン殺してくださいって言ってるのと同じなんだよ。福引の景品当てたくらいで強くなった気になってんじゃねえ」

「な……なんだと……!?!」

度重なるゼノの口から吐き出された侮辱とも取れる言葉にイツセーは怒りを露わにし、ゼノへと向かおうとするが、それをリアスが止める。

「落ち着きなさいイツセー!」

「ですが部長!!納得できませんよ!!俺達は……冥界の為に……この時の為に修行してきたんですよ!!」

「……」

イツセーの言葉にリアス自身も今回の責任について苦悩しながらも己の修行の日々を思い出しゼノへと目を向ける。

「どうすれば、私達が貴方の補助として介入できるのかしら？禍ノ団は私達側から出た危険因子……それを外部である貴方一人に任せるのは此方としては酷く忍びないわ……」

そう言いリアスはゼノへと尋ねた。

だが、返ってきた言葉はとてつもなく悲惨なものであった。



「黙れ無能が」

「…!!!」

彼の口からリアスに向けて発せられた言葉を耳にした全員は瞳を大きく震わせた。

「そもそもテメエの管理不足も原因だろうが。いまさら責任？ふざけんのも大概にしろ」

「…返す言葉もないわ」

ゼノの辛辣な言葉が次々とリアスへと突き刺さっていく中、彼女自身はその言葉を深く受け止めていたのか何も言い返す事も弁明する事もなかった。

だが、その言葉を耳にしたイツセーは額から青筋を湧き上がらせゼノに対して怒りを露わにした。

「先輩!!いくらなんでも言い過ぎじゃないですか!?!」

「あ?」

「部長だって頑張ってるんですよ!!この街を管理したり上級悪魔の仕事だったり!!」

「じゃあ聞くけど今回お前の親が襲われてたらどうなった?同じ言葉吐けんのかよ?」

「そ…それは…」

ゼノの言葉にイツセーは返す言葉を失ってしまったのか、何も言えなくなってしまうた。それに伴うかのように周囲に立っていた朱乃や小猫そして木場やゼノヴィア達も俯いた。

そんな中であつた。

「でも、そこまで言うなら証明してみろよ」

「…え?」

突如としてゼノから発せられた言葉に皆は顔をあげ、リアスは理解ができず意味を聞く。

「どう言う事…?」

「そのまんまだよ。俺の補助になるほどの力があるかどうか。全員グ라운드に出ろ」

## 力の証明 前編

それからオカルト研究部一同に加えて、生徒会も校庭へと集められた。今はまだ夏休みなために幸いにも彼らや生徒会の悪魔関係者しかいない。

「何をするのでしょうか…?」

ソーナは自身らを集めた理由をゼノへと尋ねると、ゼノは詳細を説明した。

「簡単だ。今から俺と鬼ごっこをする」

「鬼ごっこ…?」

「ああ。参加者はお前ら全員だ。一人でも俺から『2分』逃げきれたら考えを改めてやるよ。それか俺に一発でも攻撃を当てても良しとする」

「…に…2分!？」

ゼノが指定した制限時間があまりにも非現実的な数字である事に、一部を除き皆が驚く中、匙は不満を口にする。

「待ってください!!いくらなんでも短すぎますよ!!」

「匙の言う通りですよ!!2分なんてすぐじゃないですか!!バカにしてるんですか!？」

「バカにしてるだ?これでも相当厳しい条件にしたつもりなんだけども。これをバカにしてるって受け取るなら自信があるみたいだな」

「え…?」

ゼノから放たれた予想外の言葉に匙やイツセーは受け入れられないのか言葉を詰まらせる。

そんな中、後ろでゼノの言葉を分析していたソーナは軽く要約する。

「成る程…つまりその2分間の私達の行動が貴方にとって、私達の実力が取るに足りるかどうかを分ける境目…というわけですね」

「ああ。タッチする代わりにこのペンでマークを書いて、それが捕まえた証拠だ。特に兵藤、お前が一番苛立ってんなら、強いってことを

証明して見せろ」

「…わ…分かりました…」

――――

――――

――

その後、各々が準備位置へと向かっていく。

皆が次々と持ち場へとついていく中、ゼノの横を通り過ぎていった朱乃や小猫はただ悲しい目を向けていたがゼノはその目を見ても何も言う事はなかった。

それから数分後。いよいよ勝負が始まる。

「タイムを」

「おう」

ゼノの指示と共にアザゼルの手を持つ2分のタイマーが開始された。それはゆつくりと、0.01秒ずつカウントダウンしていき、0へと向かっていく。

そして、ゼノは動き出すのだった。

――――

――――

――

――

時間経過 10秒。

散らばった全員のうち、ゼノの前に立つ二人の姿があった。

「逃げないのか」

その姿を見たゼノは予想していたかのような表情を浮かべると、ポケットから手を取り出す。

「言っとくけど加減はしねえぞ」

「ええ。勿論ですわ」

「そうでなければ…意味がありません」

対して朱乃は手から雷の魔力を迸らせ、小猫も魔力と気を練り上げ猫又モードとなる。

### その瞬間

「雷光よ!!」

「:!!」

朱乃が手を掲げると空に巨大な魔法陣が現れ、それと共に猫又モードとなった小猫が駆け出しゼノに向けて気を纏わせた拳を振るっていく。

「やあッ!!」

轟音と共に呼び出された雷光は焼きつくさんと迫ってくるがゼノは次々と避けていく。そんな中、小猫からも突き出されてくる連打も次々と受け流していった。

「(避けるのは想定内:なら、ありつたけを打ち込んで:大きな隙を狙うだけ:!!)」

振るわれた拳が避けられようとも小猫は連打を止めない。

更に朱乃自身も自身の魔力を魔法陣と併用させ、ゼノの周囲に展開し、そこから放つていく事で追い詰めていった。

「俺がいない間に修行してたみたいだな」

「ええ:リアスや皆さんのため:そして貴方についていくために:私達は己の血に向き合い修行を重ねました」

「先輩に:いなくなつて欲しくありません」

迫り来る雷撃や小猫の拳をゼノは一息吐きながらもかわしていく。

「朱乃は魔力の量と質:雷の出る速度と量が増えて、小猫は仙術と、あとはそれを併用した格闘術か」

自身をすり抜けていく攻撃から感じる魔力や気から彼女らの成長した能力を分析していく。見る限り自身がない間も修行をしていた事が事実であると分かる。

育てた弟子の成長。それはゼノにとっても喜ばしい事であった。

「フフ…」

「…!!」

攻撃を続けていた朱乃と小猫は驚いた。見ると攻撃を避けるゼノは以前からよく見せていた優しい笑みを浮かべていたのだ。

「確かに…お前から成長したな…クソ鳥の前とは全然違う…俺についていく自信がつくのも分かる…」

するとゼノはその場で立ち止まり顔を俯かせる。

ゼノが立ち止まった今がチャンスだと、朱乃と小猫は互いに目で感じ合うと同時に攻撃を放つ。

「だけど」

その瞬間

「死なせたくないってことを分かって欲しかった」

「…!!」

静かに放たれた言葉と共に二人は一瞬ながらも動揺すると共に二人の間をゼノの身体がすり抜けていった。見ると二人の額には×が書かれていた。

「ゼノ君…貴方…」

朱乃が振り向くとゼノはただ無表情のまま立ち尽くしていた。そして、先ほど笑みを見せた面影が全くない無表情なまま歩いていったのだった。

「お前から失格だ。アザゼルのところに戻れ」

40秒経過 朱乃、小猫 失格。

—————

試合開始から45秒。

ゼノヴィアと木場とギヤスパーは中庭にて生徒会である真羅椿姫らと他数名のメンバーと待機していた。

「朱乃さんと小猫ちゃんがやられてしまったか…」

「流石は銀河神様…：当たり前だが、一筋縄ではいかないか…」

そんな時であった。

「木場きゅ…：君。ゼノヴィアさん…：ギヤスパー君…：そして他の皆さんも、少しお耳を…。時間の関係上、早口でお伝えいたします…!!!」

椿姫は何か作戦を思いついたのか、皆を集める。

—————

60秒経過。

ゼノは既に全員の位置を把握しており、数人の生徒会メンバーを捕まえていた。

「お前らも失格だ。戻れ」

全員が戻っていく中、ゼノは把握していた気配のうち、数人の気配が近づいてきている事に気づくと振り向いた。

すると

「うおおおお!!!」

影に覆われると共に空から雄叫びを上げながらゼノヴィアがデュランダルを振り下ろしてきた。

それを見たゼノは軽く身体を横にそらす形で避ける。

「…へえ。お前も速さが上がってるな」

横スレスレをデュランダルの刃が通り抜けていく中、ゼノは向上したゼノヴィアの身体能力を分析すると、背後から既に迫り来る木場の気配を読み取り、そこから上空へと跳躍する。

「く…!!!」

その直後、案の定、背後から木場の禁手化によって生み出された魔聖剣が突き出されるも、それは虚空を貫きゼノに当たる事はなかった。

「殺気がダダ漏れだ。乱暴に振りかざすくらいなら素人にだってでき

る」

「ご指導痛み入ります…ふん…!!」

更に二人は次々と剣を振り回してくる。それと共に他の生徒会メンバーも現れ、援護するかのように魔力弾を放ってきた。

「僕は…貴方に感謝しています…コカビエルとの闘いの時…貴方から貰った力で皆の仇が打てた事がどれほど嬉しかったか…!!」

「だからなんだよ?」

「僕は先輩にまだ何も返せていない!!」

「私もだ!!銀河神殿…貴殿から貰った力で私自身もどれほど救われたか…いつか恩に報いるべく貴方の事を考えていたが、いつしか胸の辺りが熱くなってしまう!!だからここで告白するぞ!!私は貴殿が好きだ!!!」

木場とゼノヴィアが胸の内を明かしながら剣を振るうと、それをゼノは避け、地面へと着地する。

「ハアツ!!」

「お前もいたのか眼鏡2号」

「新羅椿姫です」

更に横から別の刃が迫り、それを紙一重で避けたゼノは目を向けると、そこには長刀を突き刺す生徒会副会長である『新羅椿姫』の姿があった。

「私もお相手いたします」

「お前と戦うのは初めてだな。まあいいか。とり…:…ん?」

その時であった。

ゼノの動かそうとした腕の動きが止まる。見れば離れた援護射撃を打っていた生徒会メンバーの場所にはギヤスパアの姿があり、此方に向けて目を向けていた。

ギヤスパアの神器がゼノの動きを止めていたのだ。

「今だー!」

その瞬間 木場が叫ぶと共にゼノを3方向から囲んでいたゼノヴィアと椿姫が中心に立つゼノへと向けて刃を振り翳していった。

「「はああああッ!!!」」

「へえ。ギヤスパアの神器か…でも」

3方向から刃が迫り来る中、ゼノはギヤスパアへ向けて鋭い目と共に殺気を放った。

——見るなッ!!!

「ヒイ!？」

その瞬間 ギヤスパアはその殺気と視線に耐えきれず目を閉じてしまおうと共に魔力を引き下からせてしまった。

それによつてゼノを止めていた神器の力は一瞬にして失われ、ゼノは自由を取り戻した。

「確かに…中途半端なところで時間を止められれば、誰だって慌てる…よく考えてたけど————甘いな」

その瞬間

「があ…!？」

「ぐう…!!」

「かつ…!!」

木場とゼノヴィアと椿姫の刃が届く寸前にゼノの姿が消えると3人の背後へと現れると次々と手刀で大地に叩き落とし、その3人に加えて残りの動揺していた生徒会メンバーやギヤスパアの顔に×を書いた。

「それを克服してるから神やってるんだよ。お前らも失格だ」

「な…!!待ってくれ銀河神ど…」

「くつちやべってる暇はねえ」

ゼノヴィアの呼び止める声に耳を貸すこともなくゼノはそのまま残りを捕まえに向かったのだった。

80秒経過。残り時間40秒。 リアス、ソーナ、匙、イツセー、





## 力の証明 後編

アザゼルの元へと戻った朱乃はただ俯きながら先程の言葉を思い浮かべていた。

「小猫ちゃん…先程のゼノ君の言葉…どう思われますか…？」

「分かりません…ただ、そう言った時の先輩の気が凄く小さくなって…凄く悲しんでいるようにも…見えました」

小猫の言葉に朱乃自身は己の力不足と共に一向に彼の後についていく事ができない自身の弱さを憂いた。

「それに…」

「え？」

「何だか…先輩の中に…先輩とは違った『何か』がいたような感じがありました」

――――

――――

――――

――

80秒経過。

「どうやら残りは私とアジアとイツセー…貴方と匙君だけになったようね」

「ええ…残り時間はおよそ75秒…相手がゼノ君である以上…1秒どころか0.001秒の油断も許されません」

ゼノと木場達が戦いを繰り広げていた校舎の裏側では分断して逃げていたリアスとソーナが互いに作戦を考案していた。

――――

90秒経過。残り30秒

「…ん？」

校庭を歩いていたゼノは背後から感じる魔力に目を向けると、そこには今まで潜伏していたリアス、ソーナ、アジアの姿があった。

「へえ？出てきたか。逃げてればいいのにな。リアスとアーシアと眼鏡1号」

「め…めがね1号…!?」

「どのみち貴方にスピードでは勝てないわ。だからここで少しでも力をぶつけておきたいの」

「ハッ。良い心意気だな。ならキツチリ楽しませろよ」

すると、リアスは滅びの魔力を、ソーナは水の魔力を生成させる。

「それか。そんなの…ん？」

それを再び跳躍する形で避けようとした時であった。

自身が立っていた場所が巨大な水の檻に隔てられる。ソーナが魔力の応用によって生み出したのだろう。

それと共にソーナは更に水の魔力を放出させると龍の形へと変形させる。

「リアスだけではありません。我々も勿論修行していました。レーティングゲームだけでなく…これから当たる壁を打ち破るために…」  
「行くわよソーナッ!!!」

そして リアスと共に声を合わせながらソーナはその手をゼノへ向けて振り下ろした。

「ハアッ!!!」

黒く赤い禍々しい滅びの魔力と唸り声を上げた透明な水の竜は互いに混ざり合うかのように螺旋状の軌跡を残しながらゼノへ向けて迫っていった。

二人の本来持つスペックと修行によって高められた魔力が練り合わせられた事によってその攻撃は下手をすれば最上級悪魔へもダメージを与える事が可能となるだろう。

だが、

「…成る程」

対するゼノは迫り来る滅びの魔力と牙を剥き噛み付いてくる水の

竜を、手を横で振り払う形で掻き消し、即座に三人の元へと現れる。「ソイツの力で魔力を回復しながら牢を作って逃げ場無くすのは良いけど、強度がイマイチだった」

「…!!!」

「まあ、けど背後に回られても戦いを続けようとする度胸は流石だな」  
驚くソーナやリアスに対して評価しつつもゼノは手を止めない。その言葉が二人に向けられた直後にリアス、ソーナ、アーシアの頬に×印が書かれた。

3人が失格となり、残りはイツセーと匙。そして残り時間は10秒を切っていた。

「そろそろ終わり…残り10秒つてところか」

3人が戻っていく中、ゼノは校舎から発せられる魔力より、残りの二人の居場所を探る。

その時であった。

「ヴオオオオオオオオオ!!!」

猛々しい雄叫びと共に上空から赤い龍の鎧を身に纏ったイツセーが飛来する。

「へえ。リアスと眼鏡の魔力に隠れて近づいてきやがったか。馬鹿正直に叫び声あげたから全部丸見えだよ」

そう言いゼノはその場から後退する形で避ける。

「伸びろライン!!」

「ふん」

更に後方から匙の神器の能力によって現れた黒いラインが伸びてくるが、それすらもゼノは手を振り払い風圧を発生させる形で掻き消す。

そしてすぐさまその場から一瞬で匙へと接近すると彼が気づかないまま、彼の頬へと×印を書いた。

「匙……って言ったっけ。威力高めるあまり魔力ダダ漏れだろ」

「やっぱり気づかれたか……だけど、よそみしてて良いんすか？」

「別に。気づいてるよそれぐらい」

そう言いゼノは匙の方向を向いたまま、横から迫ってくるイツセーの拳を避ける。

「残るはお前一人だな兵藤」

「分かってますよそんならイツ!!!」

イツセーはそのまま力をフルに解放してゼノへ向けて拳を放っていく。その拳を放つ速度と威力は次々と増加していき、しまいにはゼノを大きく大勢を変化させる所まで追い詰めていた。

「成る程。やっぱり力を溜めてたか。意外と速いな」

「先輩！確かに俺達は先輩に比べたら足手纏いかもしれない！ライザーの時だって助けてもらいました!!だけどこれからこの先も先輩に頼らず修行してどんどん強くなります!!冥界や皆を守るために!!」

その言葉と共にイツセーの神器が光を発しながら輝く。

boost boost boost boost boost  
boost boost boost boost boost  
boost boost boost boost boost  
boost boost boost boost boost  
boost boost boost boost boost  
boost boost boost boost boost  
boost boost boost boost boost

イツセーの己の心意気を叫ぶと共にそれに呼応するかのよう絶え間なく聞こえてくる増加の合図が更に続く。

それと共にイツセーの力は次々と倍になっていき、その魔力量はついに上級悪魔であるリアスを超えて最上級悪魔へと到達したのであった。

だが、それだけでは終わらない。

「ヴオオオオオオオオオ!!!」

イツセーは休む事なく次々と拳を突き出していった。己の全てを出し切るかのように。

そして 遂に約束の刻が迫ってくる。

5

「うおおおおお!!!」

イツセーの拳を放つ速度が更に加速する。

4

イツセーの拳が次々と的確にゼノを捉えていく。

3

イツセーの拳がゼノの顔を正確に捉える。

2

イツセーの拳が握り締められる。

1

そして イツセーの全魔力が集中した拳がゼノへ向けて放たれた。

——— これで終わりだ…!!!

この時 イツセーは自身らに対するゼノのイメージを覆す事ができるといふ高揚感に包まれていた。

自身はここまで強くなった。ゼノが無視できなくなる程まで。

そしてそれがあと1秒という限りなく短い時間で証明ができる喜びさえも感じていたのだ。これで自身らは彼と今までのように共に戦える頼もしい仲間としていられる。

だが

それによってゼノへと放つ最後の拳へとムラが生じ、今までよりも威力が上がったものの、スピードが格段に下がってしまい、それは今まで避けていたゼノを激昂させてしまう事となった。

「安心してんじやねえぞおおおおお!!」

「!?」

その瞬間　ゼノの巨大な怒声と共にイツセーの頬に×が書かれ、ゼノへと届こうとしたイツセーの拳が跳ね返され強烈な痛みが襲った。

「ぐああああっ!!」

その直後。

ピーピーピー

アザゼルの手を持つタイマーがアラームを発し、制限時間終了の合図を送った。

ーーーーー

時間の終了。それによって皆は結末を確かめるべくゼノとイツセーへと目を向けていた。

見れば煙が晴れた場所では地面にイツセーが倒れており、それをゼノが見下ろしていた。

「ど…どうなったんだ…!」

「…」

ゼノヴィアが煙の中を見つめながら尋ねる中、アザゼルは額に手を当てる。

「ヤベエなこりや…俺たちは完全に舐めてた……」

その顔は冷や汗が流れており、目の前の状況を決して良くない結果として捉えていた。

そんな彼の言葉に驚いた皆はすぐさま煙が晴れていくその場へと目を向けた。

「…!!」

その光景を目にした一同は驚きの目を向けた。

煙が晴れ、そこから見えてきたのは鎧が砕けた生身のイツセーを掴み上げているゼノの姿であった。

「イツセー!!」

「ゼノ君!!何をやっているのですか!!」

「黙ってる」

その光景を見たりアスとソーナはすぐさま駆け寄ろうとすると、ゼノが一声掛けた途端に二人の身体は氷のように固まった。

そんな二人に目を向ける事なくゼノは掴み上げているイツセーへと、鋭い視線を向けた。

「お前…ふざけてるのか?」

「ぐあ…!?せ…せんぱ…何を…!?!」

「あのままお前が続けてたら、俺はお前らを改めていた。だけど、お前の行動からその気が失せた。なんで分かるか?お前、残り1秒のところで拳のスピード落としただろ?」

「…!!」

その言葉にイツセー自身は思い当たる事があるのか、先程のゼノへと拳を放った時を思い返した。

「慢心してたな。『あと1秒』、『ゴイツを撃てば終わる』。全部丸わかりなんだよ。今回はゲームだけど、本番がそれだけで終わるわけねえだろ」

「ま…待ってくだ…がはあ?!」

イツセーが弁明を口にしようとした矢先にゼノはイツセーを地面に放り捨てた。

「勝負に負けた上に最後の1撃に力を集中しすぎて魔力は底につこうとしてるし、それ自体を補う容量も足りない。そしてそれを抑えられないコントロール不足。俺が戦う相手に限らず結局、次のブースト来るまで魔力が尽きたら元も子もねえだろ」

「な……」



ゼノの言葉にイツセーはもう何も言い返す言葉が出なかった。

「さて、もう終わりだ」

そして　ゼノは終了を宣言すると共にアザゼルや失格となり待機していた皆の方へと顔を向けた。

「結果はお前らの負けだ。約束通り俺の戦いには関わるな。勝手に関わってきたら、問答無用で殺すからな」

それだけ言い残すとゼノは振り返る事なくその場を後にするのだった。彼が去っていく姿を一同はただ見ている事しかできなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その夜。

駒王町のとある路地にて。

「今日は女子のケツが拝めず散々だったぜ：帰って今日分の復習してミツチリビデオで解消だ!!」

夜の住宅街を一人の眼鏡を掛けた男子高校生が卑猥な心意気を掲げながら歩いていた。

そんな中であつた。

ガシヤ

「…ん？」

何やら聞き慣れない金属音が聞こえてきた。その音を耳にした男子生徒は思わず気になり振り返ると――

――そこには全身が銀で覆われた謎の生物が立っていた。

「なんだこれ…おもちゃか？」

男子生徒は興味を示しながらゆつくりと、現れた物へと近づいていく。

### その瞬間

その物はいきなり流体金属のように形を変形させると風呂敷の様に彼に向かって覆い被さってきた。

「ええ…うわああああ!!!」

—————

—————

—————

—————

—————

数分後。

頭を抱えながら倒れ込んでいた男子生徒はその動きを止めるとゆつくりと立ち上がり、額に掛けていた眼鏡を取り外すと握り潰した。

「……」

手の中から眼鏡の破片が溢れ落ちる中、その眼鏡の奥から現れた鋭い眼光が空へと向けられる。

「フフフフ…さて、始めようか…全人類ツフル人化計画を…ツ!!」

## 交換留学のヴィランズ 紛れ込む禍

ゼノとの勝負は奇しくも敗北に終わってしまい、それによって各々が自身の無力感に苦しみながらその日を過ごす事となってしまった。中でも朱乃と小猫のショックは大きく、あの日を境にたとえ家のようにと学校に向かおうとも決してゼノと会う事はなくなってしまうのだ。

「……」

目を覚ますと、目の前に広がるのはやや広い寝室。横では同じ時刻に目を覚ました小猫がいたが、その目元は少しばかり黒く染まり弛んでいた。

「小猫ちゃん…眠れませんでしたの?」

「朱乃さんこそ…」

「…まあ、そうですね」

二人は布団から起き上がると寝室を後にし食事の支度をするべくリビングへと向かう。

するとそこにはエプロンを着用しながら食事の用意をするティアマットの姿があった。

「姫島朱乃と塔城小猫か。相変わらず早いな……師匠の事か?」

「…」

ティアマットの言葉に二人はコクリと頷いた。それに対してティアマットも表情を曇らせる。

「まあ、君らにとっては酷だろう…私も少しばかり距離を置かれている」

「彼は…いつ帰ってくるのでしょうか…?」

彼女の話を聞いてくる度に、彼に会いたいと思うようになり、朱乃はついゼノがいつ戻るのか口を溢す。

それについてティアマットは首を傾げ不思議そうに思いながら答

えた。

「師匠なら昨日の深夜に帰ってきていたぞ」

「え!？」

その言葉に朱乃と小猫は驚き、食事の手を止めるとティアマットへと目を向けた。

「まあ君達が起きる前に出ていったがな。見かけてもあまり関わるな…だそうだ」

「そうですか…」

彼からの伝言を耳にすると、自身らが完全なる足手纏いである事を再び自覚させられる。

そんな中であった。小猫はずっと疑問に思っていた事を、自身らよりも長く同居しているティアマットへと尋ねた。

「あの…ティアマットさんに一つ聞きたいんですが」

「ん?」

「仙術を習得してから気がついたんですけど、ゼノさんの中に変なものを感じて…何か知りませんか?」

「変な物?」

「はい。それも…何だかとても黒い物で…」

その後、小猫から事情を聞いたティアマットは即座にサリに頼みウイスへと連絡するのであった。

—————

—————

—————

場所が変わり、駒王学園にて。ゼノに敵わず返り討ちにされ、淡々と弱点を言い渡されたイツセーは溜息をつきながら登校していた。

——— 弱い。コントロールがなってない。遊びじゃない。

先日、ゼノから告げられた言葉は今もなお、イツセーの頭の中に残っていた。

「シャキツとなさいイツセー。今の私たちは目の前の目標に向けて努

力するしかないわ」

「そうっすね…」

共に投稿していたリアスから励まされたイツセーは調子を改めて、彼女と別れると自身のクラスへと向かっていく。

—————

魔界とは全く違う人間界の学校の風景。久々に見るその光景にイツセーは懐かしみながら教室へと向かっていた。

すると

ドドドドドドドドドド

「おおおいイツセーえええ!!!」

教室からクラスメイトである松田が駆け寄ってきた。

「うお!? どうした松田!」

「どうしたもこうしたもねえよ! 元浜が変なんだ!!!」

「元浜が!」

「そうなんだよ!! いつものお通しのエロトークしたら反応するどころか見向きもしねえんだよ!!」

「な…なんだって!? それは重症だ…!」

松田の話を耳にしたイツセーはすぐさま元浜の元へと向かった。

「松田あ!!」

教室の入り口を潜り抜け、いつも彼が座っている席へと目を向けると、そこには机に頬杖をつきながら座り、窓の外を眺めている元浜の姿があった。

だが、その姿はいつもとは全く違っていた。

「…」

トレードマークであるメガネを外し、髪も猛々しく逆立つようにして後ろに流しオールバックにしており、まるで不良の様な雰囲気を見せていた。そんな彼は性格までも変わったかのように頬杖をつき

ながら右手で端末を操作していた。

だが、問題なのは見た目ではない。真相を確かめるべく、イツセーは松田と共にすぐさま彼へと駆け寄る。

「どうしたいきなりそんなイメチェンして!? もしや…夏休みの間にエッチをして俺たちに申し訳ないと思いい心を閉ざしてしまったのかあ!？」

「安心しろ元浜あ! たとえどんな事であろうと俺達はお前を決して見捨てはしない! よし今夜はお前の童貞卒業を祝って祝杯をあげようじゃないかツ!!」

すると 画面を操作していた指の動きが止まると、元浜はゆっくりと立ち上がり、自身や松田へと目を向ける事なくゆっくりと席を立ち上がると廊下の方へと向かっていく。

「お…おい待て元浜!! なぜ俺を無視す——ゴハア!？」  
「邪魔だ」

「な…!!」

その瞬間 肩を掴んだ松田の身体が壁へと叩きつけられた。元浜はそれにも目を向ける事なく教室を出ていった。

「お…おい松田! 大丈夫か!？」

それを見たイツセーは即座に松田を介抱するも、当たりどころが悪かったのか、鼻から血を流していた。

「うう…アイツまじでどうしちゃったんだよお…!!」

「…」

松田が痛みのあまり涙を流す一方で、イツセーは無言で出ていく元浜の後ろ姿を見つめていた。

それからしばらくして、彼は戻ってくるものの、相変わらず自身らには目を向ける事はなく、そのまま放課後となった。



帰りのホームルームが終わると、イツセーは同じクラスのアーシアと共に部活へ行く準備を進めていた。元浜の変わりようがあまりにもシヨックだったのか、松田の姿はすでになかった。

「元浜さん…何かおかしいですよね…」

「ああ。アイツ本当に何があったんだ…？」

元浜の異常な様子を見て、イツセーは何か悪魔などに関する者の仕業ではないかと考え、リアスへと相談するべく荷物をまとめて席を立った。

その時であった。

「きゃああああー!!」

廊下から女子生徒の悲鳴が聞こえた。

「!?!」

その声を耳にしたイツセーとアーシアはすぐさま廊下へと飛び出した。

「な…!!」

その光景を目にしたイツセーは固まってしまった。

見ればそこには一人の女子生徒の首を掴みながら締め上げている元浜の姿があったのだ。

「おい女。俺にぶつかってくるとはいい度胸だなあ」

「が…ああ…!!く…くるし…い…」

男子でも小柄な部類に入る元浜の細い腕が、彼よりもやや身長が高い女子生徒を易々と持ち上げており、その首を握る手は今にも女子生徒を絞め殺してしまいそうであった。

「やめろ!!」

それを見たイツセーは即座に間に入ると、女子生徒の首を掴んで腕を掴み、彼女から離れた。

「おい何やってんだよ元浜!!下手すれば死ぬところだったんだぞ!?!」

イツセーが強く言い放つ中、腕を掴まれた元浜がゆっくりと口を開

く。

「黙れ」

「…!!!」

その声を耳にした瞬間 全身から鳥肌が立つ。声を聞いただけであると言うのに、修行を行い禁手化しタンニーンの攻撃からも逃げ、ライバルであるヴァーリとも対峙し、どんな相手だろうと構わず立ち向かっていくほどの胆力を持つイツセーの闘争心が一瞬にして消え去ったのだ。

それに置き換わるように、全身が凍りつく程の寒気と恐怖に襲われた。

「(な…なんだこれ…声を聞いただけなのに…寒気が止まらねえ…)」

目の前にいるのは元浜でもない。否

———この世のものではない。———

「誰だ…テメエ…」

「ほう？人間にしては勘がいいな」

その時であった。

「はいはい。廊下で喧嘩すんなお前ら」

廊下が集まった生徒たちの間を掻き分けながらアザゼルが現れた。そこから現れたアザゼルは元浜によって首を掴まれた女子生徒を代わりの生徒達に保健室に送らせると、周囲の皆に伝えた。

「ほら、お前らも今日は早く閉まる日だからさっさと帰りな。思春期真っ盛りなこの二人は俺がミッチリ言っておくからよ」

その言葉に周囲の生徒達は頷き、次々と去っていった。それによつ



てその場から人の足音が少しずつ少なくなっていく、皆は帰路についていく。

そして、その場から生徒の気配が消えた瞬間

アザゼルは額から大量の冷や汗を流しながら咄嗟に光の矢を元浜の首筋に突きつけた。

「アザゼル先生!?!」

「お前ら!!下手に動くな!!コイツはガチでヤベエぞ!!」

アザゼルのその表情に駆けつけたリアス達は完全なる非常事態であることを認識し、それぞれ戦闘態勢を取った。

その一方で、元浜はリアスやアザゼル達へと目を向けると笑みを浮かべる。

「ほう?・貴様らが悪魔と墮天使…とやらか」

「テメエ…何者だ…!?!」

アザゼルが冷や汗を流しながら尋ねると、今度は元浜はアザゼルへと目を向ける。

「この光…なるほど。貴様が墮天使総督か…」

「何者だつて聞いているだろう…!?!見るからに魔力らしき物も感じられねえ。テメエまさか…禍ノ団か何かか…?」

背後を取り、首筋に光の矢を向けるアザゼルは元浜の中にいる男に對して再び問いかける。

この状況下で仕掛けてくる勢力は禍ノ団しか当てはまらないだろう。だとすれば、この男は自身らにとって排除対象となる。

すると

「禍ノ団?・フハハハハ!」

元浜：否、男は初めてアザゼルの問い掛けに答えるかの様に高笑いする。その笑い声はもはや元浜の限界はなく、地球人や悪魔には見られない全くの別の生命体の笑い声であった。

その後

「…」

「「「「「!?」」」」」」

突然と笑い声が消えたと同時に男の顔からは一切の笑みが消えると同時に怒りに満ち、その表情を見たりアス達は全身を硬直させた。

そして、男は不愉快を表すかのような怒りの表情を浮かべながらアザゼル達へと言い放つ。

「俺をあんなカス共と一緒にしてくれるなよ…!!!」

その後男はアザゼル達に目掛けて手をかざす。

「俺に名などない、だが、俺を復活させるために作ったメインプログラムはこう呼んでいた。」

「ベビー」と

その後、男の腕が輝きだすと同時にその場が爆炎に包まれた。